松山市文化財調査報告書 77

大 渕 遺 跡

—1・2次調査—

2 0 0 0

松 山 市 教 育 委 員 会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

大　渕　遺　跡

—1・2次調査—

2　0　0　0

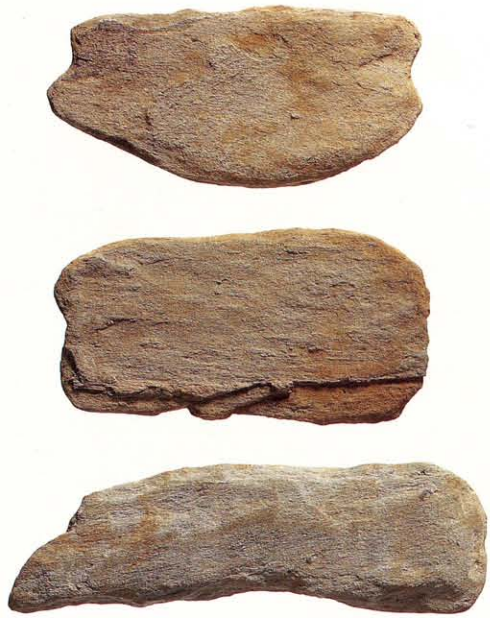
松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版１　大渕遺跡南上空より斎灘を望む

巻頭図版２　大渕遺跡Ａ区湿地内第５層出土の土器
（展示用に想定復元したもの）



巻頭図版 3　大渕遺跡出土彩文壺・土偶・収穫具
（壺口頸部は想定復元）

巻頭図版４　大渕遺跡Ａ区湿地内第７層出土朱漆塗り結歯式竪櫛

序

大渕遺跡の位置する道後平野北部は、現在も田園風景がよく残る水田地帯です。この地域で昭和62年、松山市立北中学校の開校に先立って発掘調査が実施されました。その結果、縄文時代の終わり頃、私たちの祖先は、この遺跡の周辺でこの平野初めての米づくりを開始したことが明らかになり、大きな話題となりました。

以来、大渕遺跡の数々の出土品は、開館10周年を迎えた「松山市考古館」の常設展の柱のひとつとして、松山市民のみならず各地から訪れる観覧者の方々に親しまれ、今日に至っています。このたび、待ち望まれていたこの遺跡の調査成果を、報告書というかたちで広く公開できますことは、埋蔵文化財の保護、継承に日々携わる者のひとりとして大きな喜びであります。

本書が、文化財保護、今後の調査研究の一助にご利用いただければ幸いに存じます。

平成12年３月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団

理事長　中　村　時　広

例　　言

1．本報告書は、松山市太山寺町の２地点において松山市教育委員会が実施した、大渕遺跡および大渕遺跡２次調査の発掘調査報告書である。

2．大渕遺跡の調査は、松山市立北中学校の建設にともなって1987（昭和62）年に行われ、２次調査は個人住宅建設にともなう調査として1989（平成元）年に実施された。

3．遺物の実測・製図、遺構図の製図等は、加島なおみを中心に丹生谷道代、横田知子、矢野久子、多知川富美子、村上真由美、木下奈緒美、渡部寿美子が行った。

4．遺構の撮影は、各調査担当者が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。

5．遺物の縮尺は、土器・土製品を1/3にすることを原則とし、石器・石製品では遺物の大きさに応じて2/3、1/2、1/3、1/4を使い分けている。また、漆製品は1/2、玉類は1/1で掲載した。

6．使用した方位は磁北である。

7．自然科学分析は、下記の方々、機関に依頼し、いくつかの分析結果については報文をいただいた。厚くお礼申し上げるとともに、報文のほとんどを調査終了直後に既に頂戴していたにもかかわらず、本報告の刊行の遅れにより、今日までに至ってしまったことを深謝いたします。

花粉分析	中村　純（高知大学名誉教授）
籾痕土器	近藤日出男（元 土佐高等学校）
プラント・オパール分析	古環境研究所
赤色顔料分析	本田　光子・志賀　智史（別府大学）
	岡田　文夫（京都造形芸術大学）
	成瀬　正和（宮内庁正倉院事務所）
C^{14}年代測定	社団法人 日本アイソトープ協会
朱漆塗り竪櫛保存処理・X線撮影	奈良国立文化財研究所

8．調査および本報告書の作成に至るまでの過程で、多くの方々にご指導・ご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

梅木謙一、梅崎恵司、岡田敏彦、工楽善通、高妻洋成、肥塚隆保、坂口隆、沢田正昭、柴田昌児、下條信行、田﨑博之、高橋徹、多田仁、谷若倫郎、平井泰男、平井勝、平井幸弘、藤尾慎一郎、家根祥多、前田義人、南博士、宮崎哲治、宮地聡一郎、宮本一夫、森下英治、山本三郎、吉田宏

9．本報告書の執筆は、第１・２章を栗田茂敏が、第３章を武正良浩が担当し、編集は栗田が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
１．大渕遺跡をめぐる環境 …… 1
（１）地理的環境 …… 1
（２）歴史的環境 …… 1
２．組　織 …… 3
第２章　大渕遺跡 …… 9
１．調査に至る経緯 …… 9
２．調査の概要 …… 9
（１）調査区と層位 …… 9
（２）Ａ区の調査 …… 13
（３）Ｂ区の調査 …… 139
３．自然科学分析 …… 162
（１）花粉化石による大渕遺跡の古環境復元 …… 162
（２）大渕遺跡出土籾圧痕について …… 181
（３）大渕遺跡のプラント・オパール分析 …… 187
（４）大渕遺跡出土遺物の赤色顔料と漆塗り竪櫛の塗装構造について …… 192
４．まとめ …… 198
（１）大渕遺跡Ａ区湿地第６・５層の縄文晩期土器について …… 198
（２）船ケ谷遺跡出土の縄文晩期土器 …… 199
（３）久米高畑遺跡36次調査出土の縄文晩期土器 …… 213
（４）大渕遺跡Ａ区湿地内第５層出土土器の編年的位置 …… 214
（５）大渕遺跡における稲作の受容について …… 218
第３章　大渕遺跡２次調査 …… 225
１．調査に至る経緯 …… 225
２．調査の概要 …… 226
（１）層　位 …… 226
（２）遺　構 …… 238
（３）出土遺物 …… 238
３．まとめ …… 235

挿　図　目　次

はじめに
図１　調査地と周辺の主要遺跡 …… 2
図２　調査地位置図 …… 3

大渕遺跡

図３　Ａ区Ａ～Ａ′ライン土層図 …… 10
図４　トレンチの配置と調査区 …… 11
図５　Ａ区全測図 …… 13
図６　Ａ区北半土坑・柱穴群 …… 14
図７　土坑ＳＫ－１ …… 15
図８　Ａ区ＳＫ－１出土遺物実測図 (1) …… 16
図９　Ａ区ＳＫ－１出土遺物実測図 (2) …… 17
図10　Ａ区ＳＫ－１出土遺物実測図 (3) …… 18
図11　土坑ＳＫ－２ …… 18
図12　Ａ区ＳＫ－２出土遺物実測図 (1) …… 18
図13　Ａ区ＳＫ－２出土遺物実測図 (2) …… 19
図14　土坑ＳＫ－３ …… 19
図15　土坑ＳＫ－４ …… 19
図16　Ａ区ＳＫ－４出土遺物実測図 …… 20
図17　土坑ＳＫ－５ …… 20
図18　Ａ区ＳＫ－５出土遺物実測図 (1) …… 21
図19　Ａ区ＳＫ－５出土遺物実測図 (2) …… 21
図20　土坑ＳＫ－６ …… 22
図21　Ａ区ＳＫ－６出土遺物実測図 (1) …… 23
図22　Ａ区ＳＫ－６出土遺物実測図 (2) …… 24
図23　土坑ＳＫ－７ …… 25
図24　土坑ＳＫ－８ …… 25
図25　土坑ＳＫ－９ …… 25
図26　Ａ区ＳＫ－８出土遺物実測図 (1) …… 26
図27　Ａ区ＳＫ－８出土遺物実測図 (2) …… 26
図28　Ａ区ＳＫ－９出土遺物実測図 (1) …… 27
図29　Ａ区ＳＫ－９出土遺物実測図 (2) …… 27
図30　不明遺構ＳＸ－１ …… 28
図31　Ａ区ＳＸ－１出土遺物実測図 …… 28
図32　溝状遺構ＳＤ－１ …… 29
図33　Ａ区第９Ｃ層出土遺物実測図 (1) …… 31
図34　Ａ区第９Ｃ層出土遺物実測図 (2) …… 32
図35　Ａ区第９Ｃ層出土遺物実測図 (3) …… 33
図36　Ａ区第９Ｃ層出土遺物実測図 (4) …… 34
図37　Ａ区第９Ｃ層出土遺物実測図 (5) …… 35
図38　Ａ区第９Ｃ層出土遺物実測図 (6) …… 36
図39　Ａ区第９Ｃ層出土遺物実測図 (7) …… 37

図40　A区第9C層出土遺物実測図(8) …… 38
図41　A区第9C層出土遺物実測図(9) …… 39
図42　A区第9C層出土遺物実測図(10) …… 40
図43　A区第9C層出土遺物実測図(11) …… 41
図44　A区第9C層出土遺物実測図(12) …… 42
図45　A区第9C層出土遺物実測図(13) …… 43
図46　A区第9C層出土遺物実測図(14) …… 44
図47　A区第9A層出土遺物実測図(1) …… 45
図48　A区第9A層出土遺物実測図(2) …… 46
図49　A区第9A層出土遺物実測図(3) …… 47
図50　A区第9A層出土遺物実測図(4) …… 48
図51　A区第9A層出土遺物実測図(5) …… 49
図52　A区第9A層出土遺物実測図(6) …… 50
図53　A区第9層出土遺物実測図(1) …… 50
図54　A区第9層出土遺物実測図(2) …… 51
図55　A区第9層出土遺物実測図(3) …… 52
図56　A区第8～9層出土遺物実測図 …… 54
図57　A区第8層出土遺物実測図(1) …… 55
図58　A区第8層出土遺物実測図(2) …… 56
図59　A区第8層出土遺物実測図(3) …… 57
図60　A区第8層出土遺物実測図(4) …… 58
図61　A区第8層出土遺物実測図(5) …… 59
図62　A区第8層出土遺物実測図(6) …… 60
図63　A区第8層出土遺物実測図(7) …… 61
図64　A区第8層出土遺物実測図(8) …… 61
図65　A区第8層出土遺物実測図(9) …… 62
図66　A区第8層出土遺物実測図(10) …… 63
図67　A区第7層出土遺物実測図(1) …… 64
図68　A区第7層出土遺物実測図(2) …… 65
図69　A区第7層出土遺物実測図(3) …… 65
図70　A区第7層出土遺物実測図(4) …… 66
図71　A区第7層出土遺物実測図(5) …… 67
図72　A区第6層出土遺物実測図(1) …… 68
図73　A区第6層出土遺物実測図(2) …… 69
図74　A区第6層出土遺物実測図(3) …… 70
図75　A区第6層出土遺物実測図(4) …… 71
図76　A区第6層出土遺物実測図(5) …… 72
図77　A区第6層出土遺物実測図(6) …… 73

図78　A区第6層出土遺物実測図（7）…… 74
図79　A区第6層出土遺物実測図（8）…… 75
図80　A区第6層出土遺物実測図（9）…… 76
図81　A区第6層出土遺物実測図（10）…… 77
図82　A区第6層出土遺物実測図（11）…… 78
図83　A区第6層出土遺物実測図（12）…… 79
図84　A区第6層出土遺物実測図（13）…… 79
図85　A区第6層出土遺物実測図（14）…… 80
図86　A区第6層出土遺物実測図（15）…… 81
図87　A区第6層出土遺物実測図（16）…… 82
図88　A区第6層出土遺物実測図（17）…… 83
図89　A区第6層出土遺物実測図（18）…… 84
図90　A区第6層出土遺物実測図（19）…… 85
図91　A区第6層出土遺物実測図（20）…… 86
図92　A区第6層出土遺物実測図（21）…… 87
図93　A区第6層出土遺物実測図（22）…… 88
図94　A区第5層出土遺物実測図（1）…… 89
図95　A区第5層出土遺物実測図（2）…… 90
図96　A区第5層出土遺物実測図（3）…… 91
図97　A区第5層出土遺物実測図（4）…… 92
図98　A区第5層出土遺物実測図（5）…… 93
図99　A区第5層出土遺物実測図（6）…… 94
図100　A区第5層出土遺物実測図（7）…… 95
図101　A区第5層出土遺物実測図（8）…… 96
図102　A区第5層出土遺物実測図（9）…… 97
図103　A区第5層出土遺物実測図（10）…… 98
図104　A区第5層出土遺物実測図（11）…… 99
図105　A区第5層出土遺物実測図（12）…… 100
図106　A区第5層出土遺物実測図（13）…… 101
図107　A区第5層出土遺物実測図（14）…… 102
図108　A区第5層出土遺物実測図（15）…… 103
図109　A区第5層出土遺物実測図（16）…… 104
図110　A区第5層出土遺物実測図（17）…… 105
図111　A区第5層出土遺物実測図（18）…… 106
図112　A区第5層出土遺物実測図（19）…… 107
図113　A区第5層出土遺物実測図（20）…… 108
図114　A区第5層出土遺物実測図（21）…… 109
図115　A区第5層出土遺物実測図（22）…… 110

図116　A区第5層出土遺物実測図 ㉓…… 111
図117　A区第5層出土遺物実測図 ㉔…… 112
図118　A区第5層出土遺物実測図 ㉕…… 113
図119　A区第5層出土遺物実測図 ㉖…… 114
図120　A区第5層出土遺物実測図 ㉗…… 115
図121　A区第5層出土遺物実測図 ㉘…… 116
図122　A区第5層出土遺物実測図 ㉙…… 117
図123　A区第5層出土遺物実測図 ㉚…… 118
図124　A区第5層出土遺物実測図 ㉛…… 119
図125　A区第5層出土遺物実測図 ㉜…… 120
図126　A区第5層出土遺物実測図 ㉝…… 121
図127　A区第5層出土遺物実測図 ㉞…… 122
図128　A区第5層出土遺物実測図 ㉟…… 123
図129　A区第5層出土遺物実測図 ㊱…… 124
図130　A区第5層出土遺物実測図 ㊲…… 125
図131　A区第5層出土遺物実測図 ㊳…… 126
図132　A区第5層出土遺物実測図 ㊴…… 127
図133　A区第5層出土遺物実測図 ㊵…… 128
図134　A区第5層出土遺物実測図 ㊶…… 129
図135　A区第5層出土遺物実測図 ㊷…… 130
図136　A区第5層出土遺物実測図 ㊸…… 131
図137　A区第5層出土遺物実測図 ㊹…… 132
図138　A区第5～7層出土遺物実測図 (1)…… 132
図139　A区第5～7層出土遺物実測図 (2)…… 133
図140　A区第5～7層出土遺物実測図 (3)…… 134
図141　A区第5～7層出土遺物実測図 (4)…… 135
図142　A区第5～7層出土遺物実測図 (5)…… 136
図143　A区第5～7層出土遺物実測図 (6)…… 136
図144　A区表採遺物実測図 (1)…… 137
図145　A区表採遺物実測図 (2)…… 137
図146　A区表採遺物実測図 (3)…… 138
図147　B区全測図 …… 139
図148　B区SX－1出土遺物実測図 (1)…… 141
図149　B区SX－1出土遺物実測図 (2)…… 142
図150　B区SX－1出土遺物実測図 (3)…… 143
図151　B区SX－1出土遺物実測図 (4)…… 144
図152　B区SX－1出土遺物実測図 (5)…… 145
図153　B区SX－1出土遺物実測図 (6)…… 146

図154　Ｂ区ＳＸ－１出土遺物実測図 (7)…… 147
図155　Ｂ区ＳＸ－１出土遺物実測図 (8)…… 148
図156　Ｂ区ＳＸ－１出土遺物実測図 (9)…… 149
図157　Ｂ区ＳＸ－１出土遺物実測図 (10)…… 150
図158　Ｂ区ＳＸ－１出土遺物実測図 (11)…… 151
図159　Ｂ区ＳＸ－１出土遺物実測図 (12)…… 152
図160　Ｂ区ＳＸ－１出土遺物実測図 (13)…… 153
図161　Ｂ区湿地出土遺物実測図 (1)…… 154
図162　Ｂ区湿地出土遺物実測図 (2)…… 155
図163　Ｂ区湿地出土遺物実測図 (3)…… 156
図164　Ｂ区湿地出土遺物実測図 (4)…… 157
図165　Ｂ区湿地出土遺物実測図 (5)…… 158
図166　Ｂ区湿地出土遺物実測図 (6)…… 159
図167　Ｂ区湿地出土遺物実測図 (7)…… 160
図168　Ｂ区表採遺物実測図 …… 161
図169　試料採取地点図 …… 162
図170　花粉の消長 (1)…… 172
図171　花粉の消長 (2)…… 173
図172…… 174・175
図173…… 176・177
図174…… 178・179
図175…… 182・183
図176…… 184・185
図177　試料採取地点図 …… 187
図178　イネのプラント・オパール密度 …… 190
図179　おもな植物の推定生産量 …… 191
図180　赤色塗彩土器の塗装構造顕微鏡写真 …… 196
図181　漆塗り竪櫛の塗装構造顕微鏡写真 …… 197
図182　船ケ谷遺跡出土遺物 (1)…… 201
図183　船ケ谷遺跡出土遺物 (2)…… 202
図184　船ケ谷遺跡出土遺物 (3)…… 203
図185　船ケ谷遺跡出土遺物 (4)…… 204
図186　船ケ谷遺跡出土遺物 (5)…… 205
図187　船ケ谷遺跡出土遺物 (6)…… 206
図188　船ケ谷遺跡出土遺物 (7)…… 208
図189　船ケ谷遺跡出土遺物 (8)…… 209
図190　船ケ谷遺跡出土遺物 (9)…… 210
図191　船ケ谷遺跡出土遺物 (10)…… 211

図192　船ケ谷遺跡出土遺物(11) …… 212
図193　久米高畑遺跡36次調査地ＳＢ004出土遺物…… 214
図194　道後今市遺跡10次調査11号土坑出土遺物 …… 216
図195　南久米片廻り遺跡２次調査Ｄ３区出土遺物 …… 216
図196　南海放送遺跡包含層出土遺物 …… 217
図197　朝美澤遺跡・文京遺跡４次調査ＳＢ－１出土遺物 …… 217
大渕遺跡２次調査
図198　調査地位置図 …… 225
図199　調査地区割り図 …… 226
図200　調査区北壁土層図 …… 227
図201　ＳＫ－１測量図 …… 238
図202　10～８層出土遺物実測図 …… 229
図203　７層出土遺物実測図 (1)…… 230
図204　７層出土遺物実測図 (2)…… 231
図205　７層出土遺物実測図 (3)…… 232
図206　６～４層出土遺物実測図 …… 233
図207　層位不明・表採遺物実測図 …… 234
図208　石器実測図 …… 234

表　目　次

表１　層位と試料番号…… 163
表２　大渕遺跡Ａ区出土花粉化石一覧 (1) …… 167
表３　大渕遺跡Ａ区出土花粉化石一覧 (2) …… 169
表４　試料１ｇあたりのプラント・オパール個数…… 189
表５　イネの生産量の推定…… 190

図　版　目　次

巻頭図版１　大渕遺跡南上空より斎灘を望む
巻頭図版２　大渕遺跡Ａ区湿地内第５層出土の土器
巻頭図版３　大渕遺跡出土彩文壺・土偶・収穫具
巻頭図版４　大渕遺跡Ａ区湿地内第７層出土朱漆塗り結歯式竪櫛

大渕遺跡
図版１　調査前全景（西より）　調査前近景（南東より）
図版２　Ａ区土坑・柱穴群（南東より）　Ａ区土坑群（南より）
図版３　Ａ区土坑ＳＫ－１遺物出土状況（北より）　Ａ区土坑ＳＫ－６遺物出土状況（北東より）

図版４　Ａ区湿地の掘削状況（南東より）
図版５　Ａ区湿地内第５層深鉢出土状況
図版６　Ａ区湿地内第５層彩文壺出土状況
　　Ａ区湿地内第５層石庖丁出土状況
図版７　Ａ区湿地内土層堆積状況（南より）
図版８　Ａ区ＳＫ－１出土遺物
図版９　Ａ区ＳＫ－５・６・８出土遺物
図版10　Ａ区湿地内第９Ｃ層出土遺物（1）
図版11　Ａ区湿地内第９Ｃ層出土遺物（2）
図版12　Ａ区湿地内第９Ｃ層出土遺物（3）
図版13　Ａ区湿地内第９Ｃ層出土遺物（4）
図版14　Ａ区湿地内第９Ｃ層出土遺物（5）
図版15　Ａ区湿地内第９Ｃ層出土遺物（6）
図版16　Ａ区湿地内第９Ｃ層出土遺物（7）
図版17　Ａ区湿地内第９Ａ層出土遺物（1）
図版18　Ａ区湿地内第９Ａ層出土遺物（2）
図版19　Ａ区湿地内第９Ａ層出土遺物（3）
図版20　Ａ区湿地内第９Ａ・９層出土遺物
図版21　Ａ区湿地内第９・８～９層出土遺物
図版22　Ａ区湿地内第８層出土遺物（1）
図版23　Ａ区湿地内第８層出土遺物（2）
図版24　Ａ区湿地内第８層出土遺物（3）
図版25　Ａ区湿地内第８層出土遺物（4）
図版26　Ａ区湿地内第８層出土遺物（5）
図版27　Ａ区湿地内第７層出土遺物（1）
図版28　Ａ区湿地内第７層出土遺物（2）
図版29　Ａ区湿地内第７層出土遺物（3）
図版30　Ａ区湿地内第６層出土遺物（1）
図版31　Ａ区湿地内第６層出土遺物（2）
図版32　Ａ区湿地内第６層出土遺物（3）
図版33　Ａ区湿地内第６層出土遺物（4）
図版34　Ａ区湿地内第６層出土遺物（5）
図版35　Ａ区湿地内第６層出土遺物（6）
図版36　Ａ区湿地内第６層出土遺物（7）
図版37　Ａ区湿地内第６層出土遺物（8）
図版38　Ａ区湿地内第６層出土遺物（9）
図版39　Ａ区湿地内第６層出土遺物（10）
図版40　Ａ区湿地内第５層出土遺物（1）
　　Ａ区湿地内第５層遺物出土状況（北西より）
　　Ａ区湿地内第５層浅鉢出土状況

　　Ａ区湿地内第７層朱漆塗り結歯式竪櫛出土状況
　　Ｂ区土器溜まりＳＸ－１全景（北西より）

図版41　Ａ区湿地内第５層出土遺物（2）
図版42　Ａ区湿地内第５層出土遺物（3）
図版43　Ａ区湿地内第５層出土遺物（4）
図版44　Ａ区湿地内第５層出土遺物（5）
図版45　Ａ区湿地内第５層出土遺物（6）
図版46　Ａ区湿地内第５層出土遺物（7）
図版47　Ａ区湿地内第５層出土遺物（8）
図版48　Ａ区湿地内第５層出土遺物（9）
図版49　Ａ区湿地内第５層出土遺物（10）
図版50　Ａ区湿地内第５層出土遺物（11）
図版51　Ａ区湿地内第５層出土遺物（12）
図版52　Ａ区湿地内第５層出土遺物（13）
図版53　Ａ区湿地内第５層出土遺物（14）
図版54　Ａ区湿地内第５層出土遺物（15）
図版55　Ａ区湿地内第５層出土遺物（16）
図版56　Ａ区湿地内第５層出土遺物（17）
図版57　Ａ区湿地内第５層出土遺物(18)
図版58　Ａ区湿地内第５層出土遺物(19)
図版59　Ａ区湿地内第５～７層出土遺物・表採遺物
図版60　Ｂ区ＳＸ－１出土遺物（1）
図版61　Ｂ区ＳＸ－１出土遺物（2）
図版62　Ｂ区ＳＸ－１出土遺物（3）
図版63　Ｂ区ＳＸ－１出土遺物（4）
図版64　Ｂ区ＳＸ－１出土遺物（5）
図版65　Ｂ区湿地出土遺物（1）
図版66　Ｂ区湿地出土遺物（2）
図版67　Ｂ区湿地出土遺物（3）

大渕遺跡２次調査

図版68　掘削状況（西より）　遺物出土状況（西より）　調査区北壁土層（南東より）
図版69　包含層出土遺物（1）
図版70　包含層出土遺物（2）

船ケ谷遺跡

図版71　船ケ谷遺跡出土突帯文深鉢（1）
図版72　船ケ谷遺跡出土突帯文深鉢（2）
図版73　船ケ谷遺跡出土突帯文深鉢（3）

第1章　はじめに

1．大渕遺跡をめぐる環境

（1）地理的環境

道後平野は、その北東部を高縄半島の大部分を占める高縄山系の南西面に、また、東から南東部を四国山脈北東麓に限られ、西方の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。平野には、高縄山系に源を発し、北東から南西方向に流れる石手川と、四国山脈東三方が森に水源を持ち、西流する重信川の２大河川がある。この２河川は、それぞれいくつかの支流を集めながら西流し、西方の海岸線から約４㎞の通称「出合」で合流し、伊予灘に注いでいる。平野は、これらの河川の沖積作用によって形成されている。その構成を大雑把にみてみると、平野北方の石手川扇状地、およびその西方にひろがる氾濫原、扇状地の北に延びる沖積低地、平野南方の重信川扇状地、およびその中流域以西にひろがる大規模な氾濫原に加えて、両河川の中間にあって、石手川の支流である小野川により形成された比較的小規模な扇状地などが主なものである。調査地はこの平野の北西部、松山市太山寺町に所在する水田地で、先述の石手川扇状地北方の沖積低地上に位置している。この低地は東西幅約２～４㎞、南北長約７㎞にわたってひろがる地溝性の低地で、遺跡はこの低地の北端付近、斎灘に面する現海岸線まで約２㎞の位置、標高3.5ｍに立地している。また、東方約２㎞には高縄山系の南西面を望み、西方100ｍには太山寺山塊の東面が迫るという立地で、遺跡は地溝性低地の最も幅狭な部分の西端に位置していることになる。

（2）歴史的環境

大渕遺跡周辺の道後平野北西部域における遺物・遺構の確認例のうちで最も遡るものは縄文時代後期の土器片で、馬木町所在の蓬莱寺遺跡において六軒家Ⅰ式とされる擦消縄文系の土器の出土[①]が伝えられているが、遺構として人間の生活の痕跡が確実に確認できるのは縄文時代後期中葉以降のことである。調査地の南１㎞の船ケ谷遺跡では晩期突帯文を遡る時期の河川、杭列、住居址が多量の土器、石製品、木製品とともに検出されている[②]。これらの遺跡は先述の沖積低地に立地する遺跡であるが、この低地上での発掘調査例が少ないこともあって、これ以降弥生時代を通じて顕著な集落の確認例がない。ただ、単発的な遺物の出土例はいくつかあって、調査地南0.5㎞の市営三光団地内において近年行われた大渕遺跡３次調査で中～後期の土器が流路内から出土している[③]ほか、堀江遺跡では前期前葉の重弧文小壺が出土している[④]。この低地周辺で弥生時代の遺構・遺物が多く確認されているのは低地を臨む周辺の丘陵麓、あるいは麓から低地にいたる緩斜面上である。主な遺跡を挙げておくと、溝から前期中葉の土器とともに板鍬、柳葉形磨製石鏃などを出土した山越遺跡２次調査地[⑤]、前期中～後葉の貯蔵穴・土坑などとともに炭化米、リョクトウなどの炭化種子が検出された石風呂町鶴が峠遺跡[⑥]、弥生時代各期の遺物の出土のうち、前期突帯文系甕の出土が特徴的な谷町座拝坂（ざわいざ

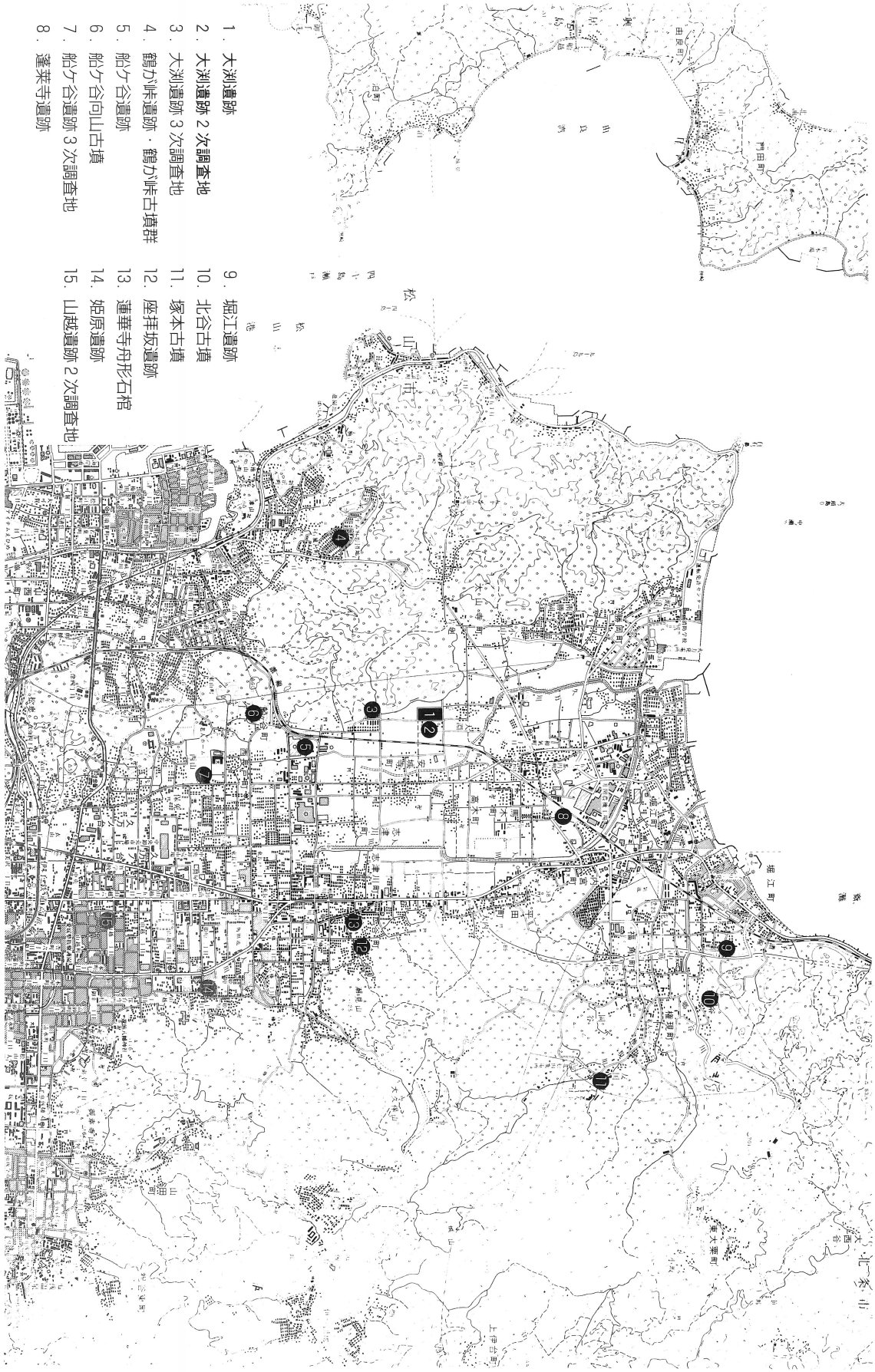


図 1　調査地と周辺の主要遺跡（S＝1：50,000）

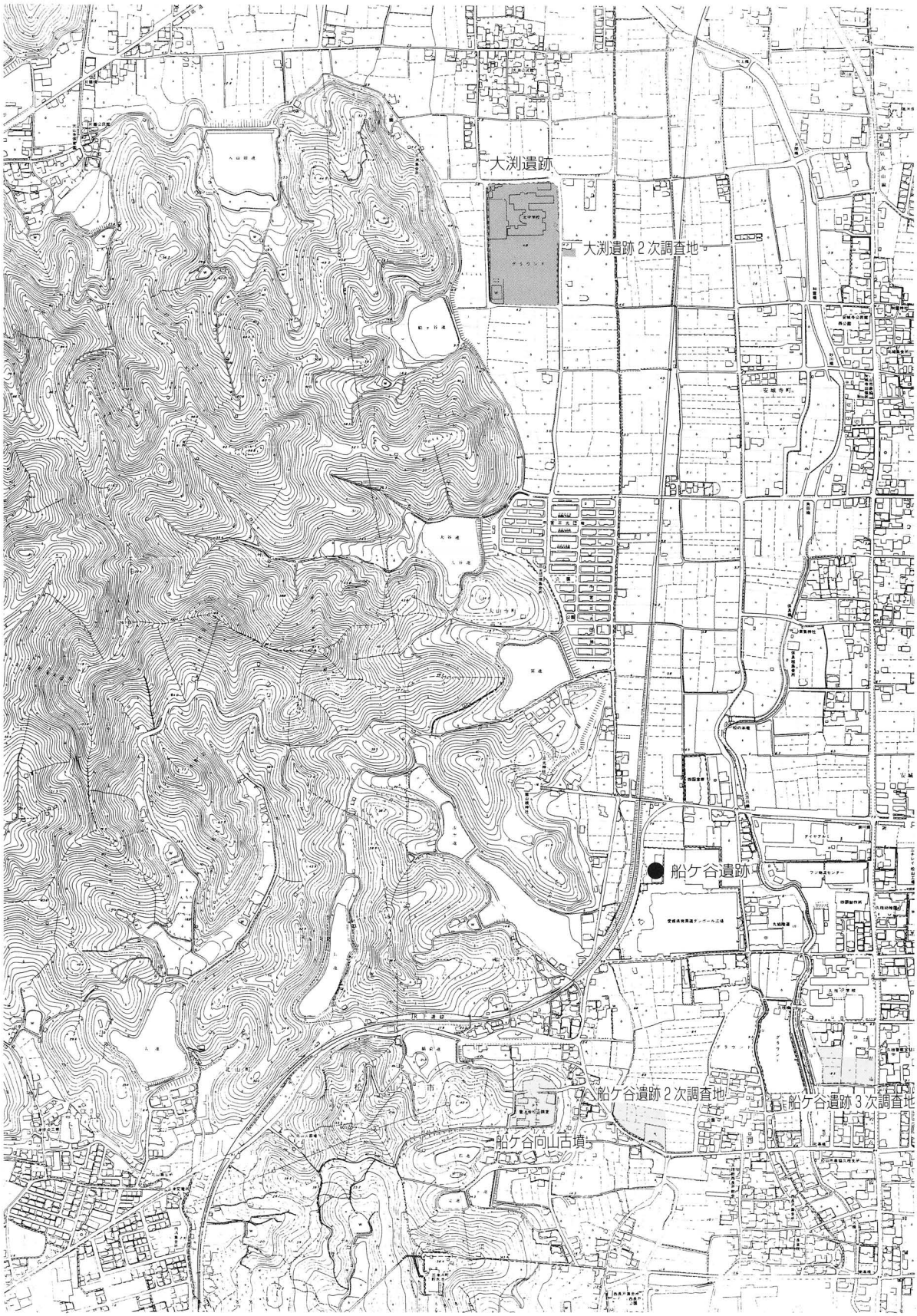


図２　調査地と周辺の主要遺跡（Ｓ＝1：50,000）

か）遺跡[7]、中～後期の溝を多く検出し、なかでも後期の円形周溝状遺構の検出で注目される姫原遺跡[8]などがある。

弥生時代に続いて、古墳時代の集落そのものの確認例も多いものではなく、先述の大渕遺跡３次調査で前期の竪穴式住居数棟と古式土師器を多量に出土する流路や後期の掘立柱建物数棟が検出されている程度である。これに対して古墳そのものは周辺の丘陵上に数多く分布している。太山寺山塊北面の勝岡町高月山古墳群の７基の古墳のうち２号墳は、箱式石棺を主体部とする小長方墳で、周溝内より布留Ⅰ式期併行の土師器壺や銅鏃を出土しており、この地域のみならず平野内でも最も古い段階の古墳のひとつである[9]。この古墳群の周辺には同様に箱式石棺を主体部とする古墳群、赤子谷古墳群、坂浪古墳群などが分布しており、この坂浪古墳群中の塔ノ口山古墳では長宜子孫銘内行花文鏡、画像鏡の２面の鏡片が出土し、古い段階の首長墳ともいわれているが、須恵器や人物埴輪等の出土も伝えられており、墳形・主体部とともにその実態については不明な部分が多い[10]。同じく太山寺山塊に属する古墳群で発掘調査が行われたもののなかには石風呂町所在の鶴が峠古墳群がある。この古墳群では宅地造成に伴って５世紀末から７世紀前半までの各期の古墳20数基が調査されたが、これらのうちでも形象埴輪を伴う５世紀末の円墳群が注目を集めている[11]。その他、調査地南1.5㎞の低丘陵上にかつて存在した小規模な前方後円墳船ケ谷向山古墳では、くびれ部円筒埴輪樹立列とともに馬、鶏、蓋などの形象埴輪が出土しており、やはり５世紀末頃の年代を与えられている[12]。

沖積低地東方の高縄山系南西麓にも多くの古墳群が分布しているが、そのなかでも福角町所在の市指定文化財北谷古墳[13]や権現町所在の塚本１号墳[14]など、大型石材を用いた横穴式石室を主体部とする６世紀末から７世紀前半代の円墳・方墳というこのエリアでの首長系譜に連なる古墳がよく知られている。また、潮見古墳群内に属する谷町室岡山蓮華寺境内には、阿蘇溶結凝灰岩を刳りぬいた舟形石棺の身部がある[15]。出土地、出土状況等の詳細は不明だが、県内唯一の刳りぬき式石棺の例であり、瀬戸内海上交通ルートの要衝の一角を道後平野北部が担っていたことがしのばれる。

古代以降のこの地域についても不明な部分が多く、座拝坂遺跡の奈良～平安時代の２棟の掘立柱建物、あるいは姫原遺跡の溝、また、船ケ谷遺跡３次調査の掘立柱建物、柵列、井戸等で構成された中世村落遺構[16]などが知られている主なものである。

以上、簡単に道後平野北西部の遺跡について概観してきたが、古墳時代の阿蘇溶結凝灰岩舟形石棺の存在からしのばれる海上交通ルートの一点、また斎灘に面し中世河野氏の重要な港湾であった和気・堀江湾の現在に至るまでの港湾としての重要性を考えるとき、その萌芽は本書で述べられるように、遡って縄文晩期には既に確認できるのである。

註

①『松山市史料集 第２巻 考古編Ⅱ』　松山市教育委員会　1987

②阪本安光『松山市・船ケ谷遺跡』愛媛県教育委員会　1984

③吉岡和哉「大渕遺跡３次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　11』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　1999

④長井数秋「農耕文化の形成と発展」『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』愛媛県教育委員会　1982

⑤梅木謙一・武正良浩「山越遺跡－２次調査－」『山越・久万ノ台の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　1993

⑥西尾幸則「鶴が峠遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県教育委員会　1986
⑦松村　淳 ほか「座拝坂遺跡」『和気・堀江の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　1993
⑧相原浩二「姫原遺跡」『和気・堀江の遺跡 Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　1993
⑨宮崎泰好『高月山古墳群調査報告書』松山市教育委員会　1988
⑩　　前掲註①文献
⑪西尾幸則「鶴が峠古墳群」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県教育委員会　1986
⑫池田学・宮崎泰好「船ケ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報 Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　1989
⑬岡野　保『北谷古墳（墳丘・石室実測調査報告書）』松山商科大学史跡研究会　1980
⑭栗田茂敏『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　1991
⑮藤田憲司「讃岐の石棺」『倉敷考古館研究集報 第12号』倉敷考古館　1976
⑯加島次郎『船ケ谷遺跡－３次調査地－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　1999

２．組　織

大渕遺跡調査組織

松山市教育委員会	教　育　長	西原多喜男
文化教育課	課　　長	伊賀　俊輔
	課長補佐	大野　衛治
	第二係長	戸田　　浩
	〃　主任	西尾　幸則
	〃　主事	重松　佳久
	〃　調査員	栗田　茂敏（Ａ区担当）
		宮崎　泰好（Ｂ区担当：平成３年退職）

調 査 地　愛媛県松山市太山寺町甲496～498外
調査期間　1987（昭和62）年７月４日～11月２日
調査面積　4,500㎡

大渕遺跡2次調査組織

松山市教育委員会	教育長	平井　亀雄
文化教育課	課長	渡部　忠平
	課長補佐	大野　衛治
	第二係長	西　伸二
	〃 主任	西尾　幸則
	〃 主事	重松　佳久
	〃 主事	栗田　正芳
	〃 調査員	宮崎　泰好（平成3年退職）
		武正　良浩

調査地　愛媛県松山市太山寺町甲474－3
調査期間　1989（平成元）年6月7日～7月3日
調査面積　251㎡

刊行組織

松山市教育委員会	教育長	池田　尚郷
事務局	局長	團上　和敬
	次長	森脇　將
	〃	赤星　忠男
文化教育課	課長	松平　泰定

㈶松山市生涯学習振興財団

理事長	中村　時広
事務局長	二宮　正昌
〃 次長	河口　雄三

埋蔵文化財センター

所長	河口　雄三
次長	田所　延行
調査係長	田城　武志
主任	栗田　正芳（文化教育課職員）
担当	栗田　茂敏

第２章

大　渕　遺　跡

第2章　大　渕　遺　跡

1．調査に至る経緯

1989（平成元）年４月、松山市北西部の太山寺町に松山市立鴨川・内宮中学分離新設校として「松山市立北中学校」が開校した。当時、建設予定地は松山市の指定する包蔵地には含まれてはいなかったが、周辺地域で点的にみられる遺物の採集例や、教育施設建設に伴う大規模開発ということも鑑みて、建設着手に先立つ1987（昭和62）年７月、松山市教育委員会（以下、市教委）は建設予定地内において試掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。この結果、南北160m、東西100mの合計16,000m²におよぶ用地のうちの２箇所において、縄文時代を主とした遺物を包含する土層が検出された。このため、市教委はこの２地点について発掘調査を実施することとし、北方の約1,000m²の地点をＡ区、南方の約600m²をＢ区としてそれぞれに担当者を置いて７月４日より２ヶ月の予定で発掘調査を開始した。しかし、予想を上回る遺物の出土や多量の湧水による調査行程の遅れから、結果として、一定程度の成果を上げ調査を終了できたのは、４ヶ月後の11月２日のことであった。

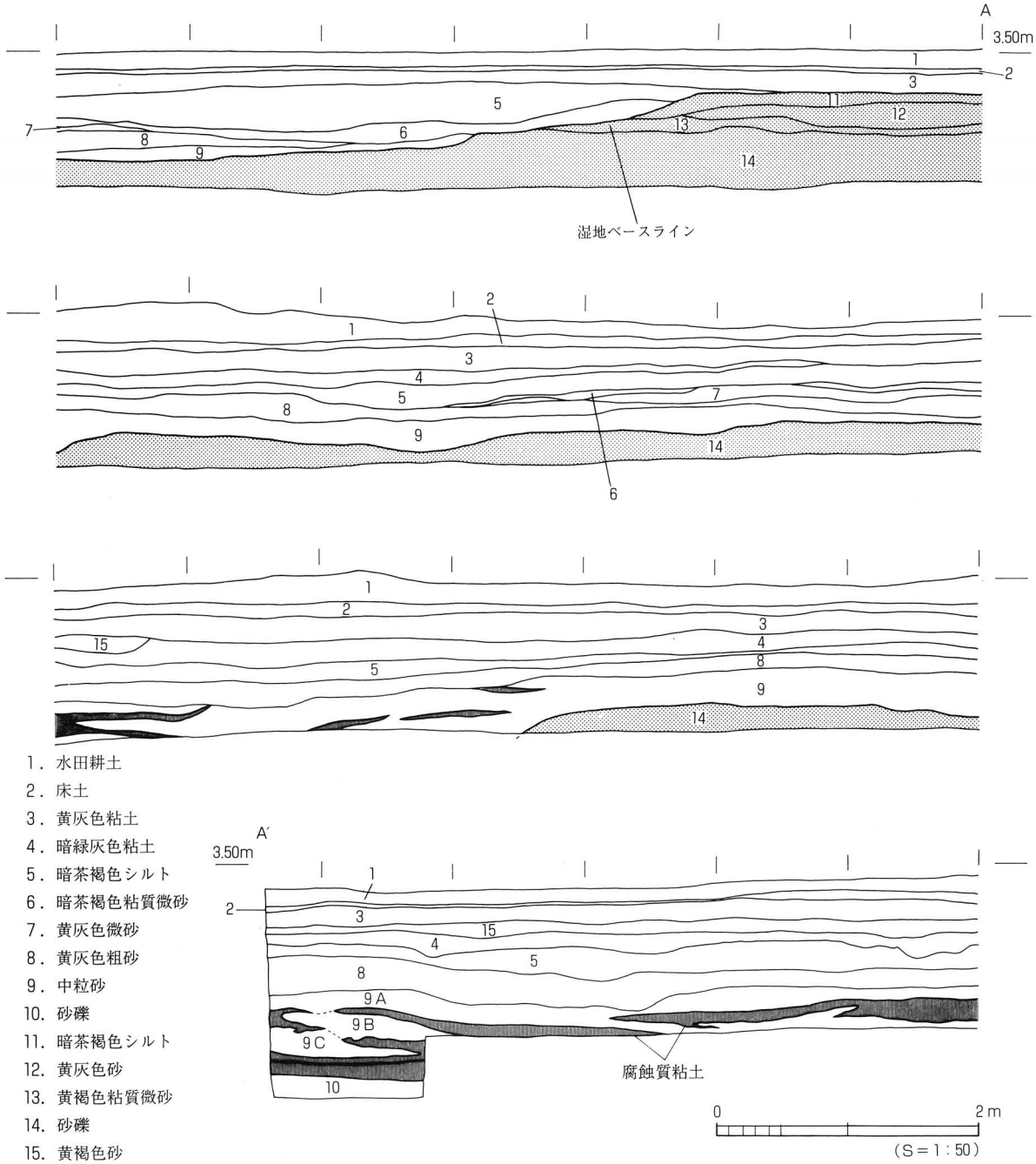
2．調査の概要

（1）調査区と層位

試掘調査では、図４のような配置で用地にトレンチを配置した。トレンチは北からＴ１、Ｔ２‥‥Ｔ９となっている。この結果、Ｔ２、Ｔ３、Ｔ７において遺物を包含する土層が確認された。このため、Ｔ２、Ｔ３周辺を拡張して掘り下げ、この約1,000m²の調査区をＡ区とし、またＴ７周辺の拡張区約600m²をＢ区として調査を行った。

調査地の層位をＡ区の湿地状地形を例に述べておくと、水田である調査地の現耕作土（第１・２層）下層には、第３層黄灰色粘土層が10～15cm堆積しており、この層に古墳時代から中世に至る遺物が少量含まれている。この第３層の直下には黄色シルトの無遺物層があり、この黄色シルトを切り込んだ古墳～中世の遺構の存在が予想されたが、該期の遺構は全く検出されなかった。この黄色シルトは用地全体にひろがっており、後述する縄文時代晩期の各遺構はこの黄色シルトをベースとして検出されている。先にも述べたように第３層の直下で黄色シルトが検出される場合が多いが、ところによってはその間に第５層暗茶褐色シルトが介在する部分もある。第４層暗緑褐色粘質土は、部分的に第５層の上位で検出される基本的には無遺物の層で、第３層との間には黄色の粗砂が間層として挟まっている。このような層のあり方から下位の第５層に含まれる縄文晩期の遺物が４層に僅かに混入する場合もある。第５層以下の土層は、黄色シルトをベースとして落ち込む湿地状地形の中に堆積している層で、第５層から９層までの間に縄文時代の遺物が含まれている。第５層は多いところでは40cm程度の厚さで堆積しており、下位に向かって漸移的に微砂質となるがラインがひけるような分層はできない。第６層は第５層が漸移的に砂質を帯びてきたものが明確に微砂と認識できる層で、色調は第５層と変

わらない。この第５・６層に縄文晩期後半の遺物が含まれる。第７層は第６層と色調を異にして黄灰色を呈するが、粒度は第６層と同様の微砂である。第８層は黄灰色粗砂、第９層は中粒砂層と腐蝕質の粘土層が互層のような状態で堆積しており、この腐蝕質粘土帯を目安に上から９Ａ、９Ｂ、９Ｃ層としている。第７層から第９層までの間には縄文後期中葉から晩期後半までの遺物が混淆状態で含まれている。第９Ｃ層の下位には腐蝕質粘土が一面に堆積し、その下層に第10層がある。この層は径0.2～１㎝大の亜角礫を含む青灰色砂礫層で遺物は含まれていない。この第10層までで、地表面からの深さは1.5m、湧水のため掘削はこれまでが限界であった。なお、この第10層までの掘削も調査区全域で行われたわけではなく、Ａ区内の２×４ｍ程度の範囲で、調査最終段階に行われたものである。



1．水田耕土
2．床土
3．黄灰色粘土
4．暗緑灰色粘土
5．暗茶褐色シルト
6．暗茶褐色粘質微砂
7．黄灰色微砂
8．黄灰色粗砂
9．中粒砂
10．砂礫
11．暗茶褐色シルト
12．黄灰色砂
13．黄褐色粘質微砂
14．砂礫
15．黄褐色砂

図３　Ａ区Ａ～Ａ′ライン土層図

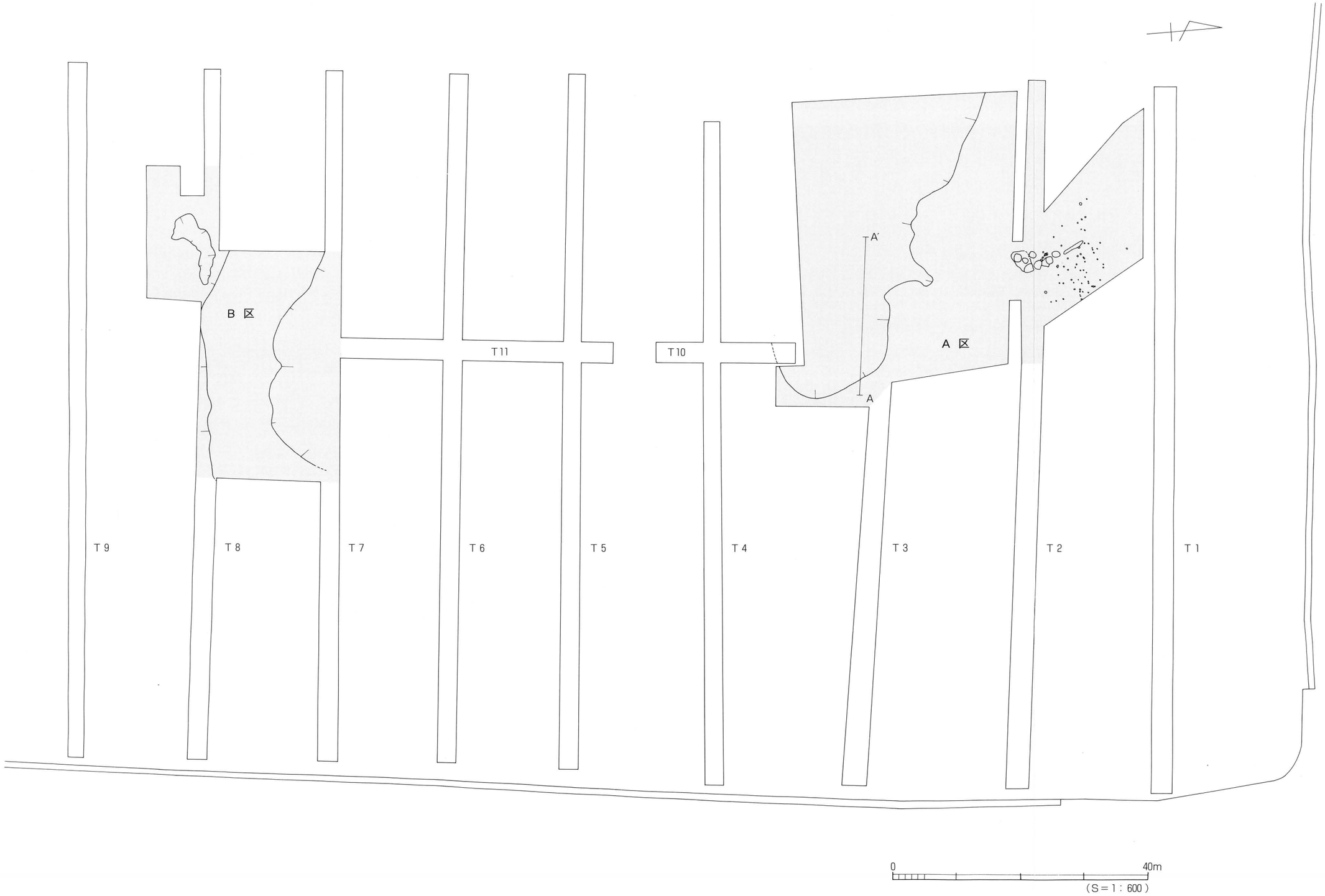


図4　トレンチの配置と調査区

（2） A区の調査

1）遺構の調査

A区としているのは用地北西部の約1,000㎡の調査区で、試掘トレンチＴ２、Ｔ３を拡張して設定された調査区である。この調査区では、北東から南西に落ち込む湿地状地形の汀が総長60mにわたって検出された。また、この汀から北へ20～30mの地点で９基の土坑や柱穴群が検出されている。切りあいによる前後関係はあるにしても、大きくは層位的に土坑と柱穴は同じ時期のもので、柱穴は60基あまり検出されたが建物を復元できるような配置での検出はなかった。そのほか溝状を呈する遺構や不整形の窪みなどが数基検出された。

図５　A区全測図

①土　坑

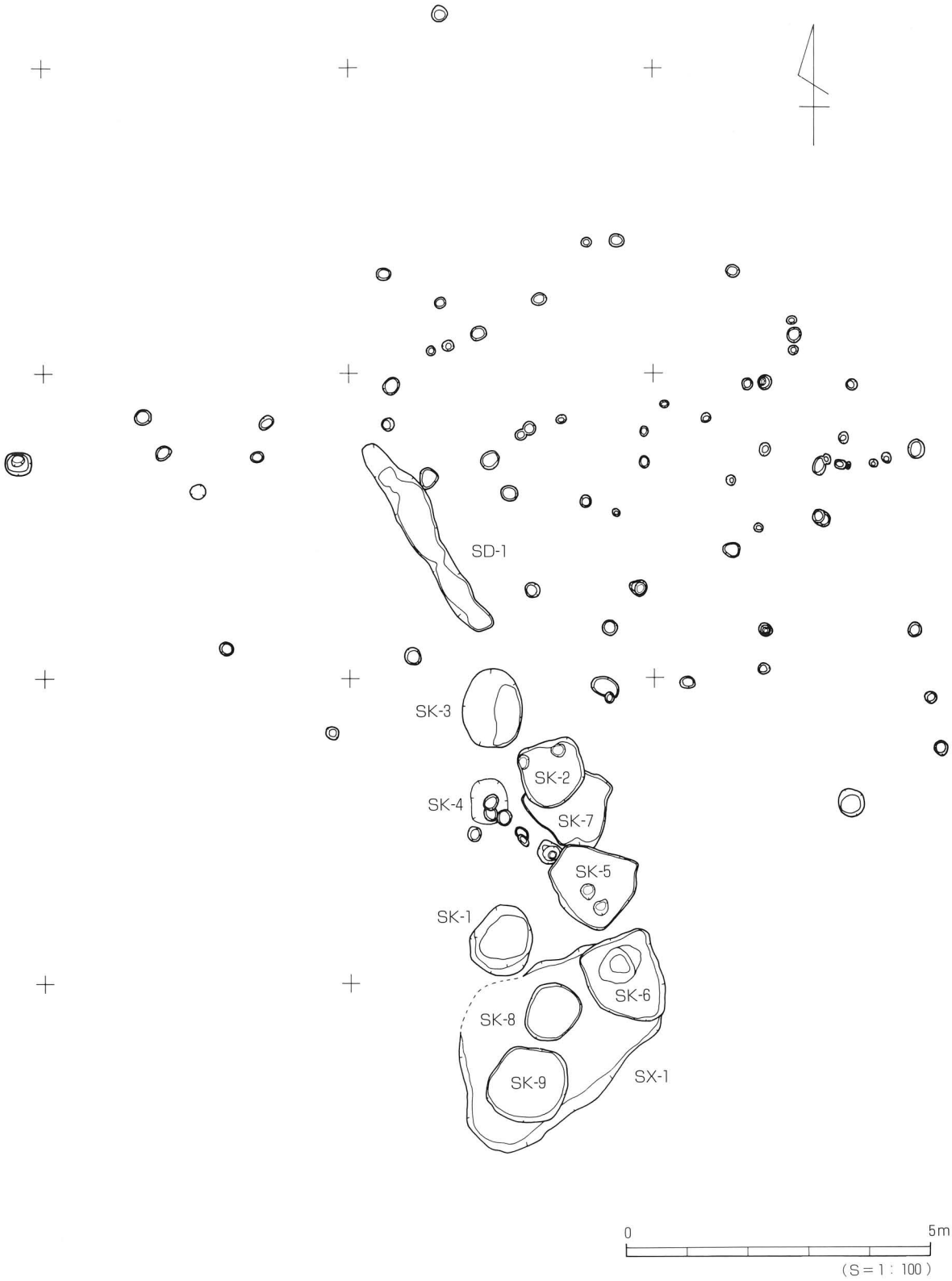


図6　A区北半土坑・柱穴群

ＳＫ－１（図７～10）

長径120cm、短径100cmの楕円形に近い平面プランで、深さ35cmを測る。埋土は大きく上下２層に分けられ、そのうちの上層に遺物が、下層の砂質土に木炭や焼土のブロックが混じっている。

９点出土している深鉢のうち、口縁部がさほど外反せず、砲弾形に近い形態の２は、口端部にリボン状の突起と、刻み目を持ち、また、胴部上位にはＤ字形の浅い刺突列点文を施される。胎土に大きめの長石粒を含むため、外面の削りは荒々しくみえる。３は頸部から口縁部が外反するものであるが、口端面を刻まれるのみでなく、口縁部内面や頸胴界に刺突を施されている。その他、頸部に２条以上の単位の沈線で山形文を施されるものや頸胴界に半裁竹管文を持つものがある。これらの深鉢に混じって口縁部をやや下がった部位に刻み目突帯が確認できる小破片５が１点ある。浅鉢のうち口縁部が二段に屈曲し、端部を玉縁状に肥厚するものには、12のように頸部で一旦外反し、形態的にも頸胴界が明確などちらかといえば深鉢に近い形態のものと、13のような単純な形態のものがある。13には鰭状突起が伴う。これらの浅鉢に混じって逆「く」の字形に屈曲する口縁部小破片がある。14はサヌカイトの素材剥片である。

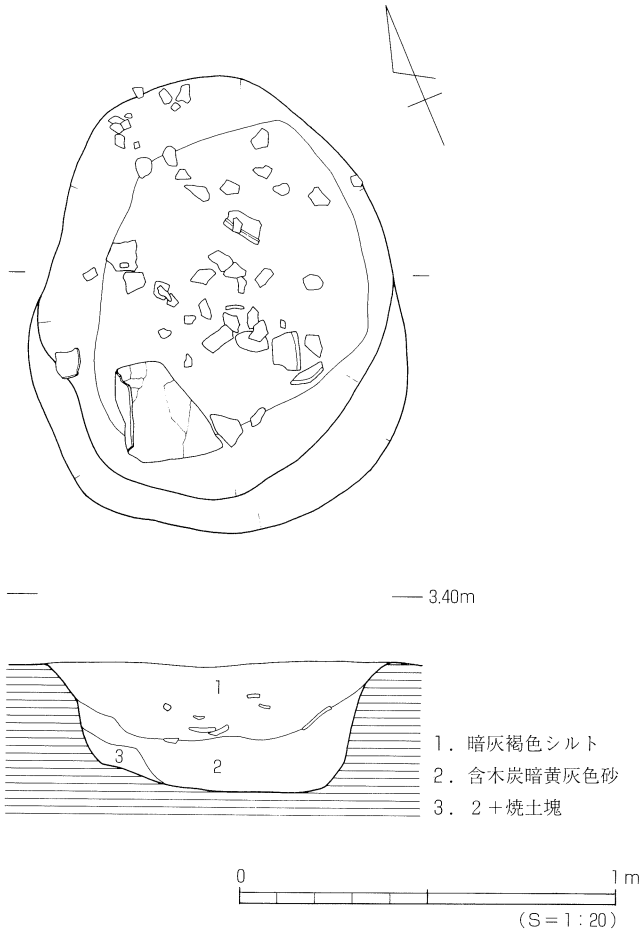
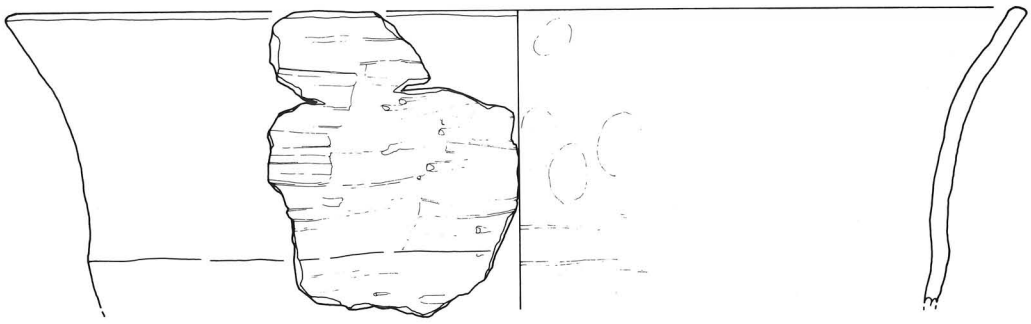
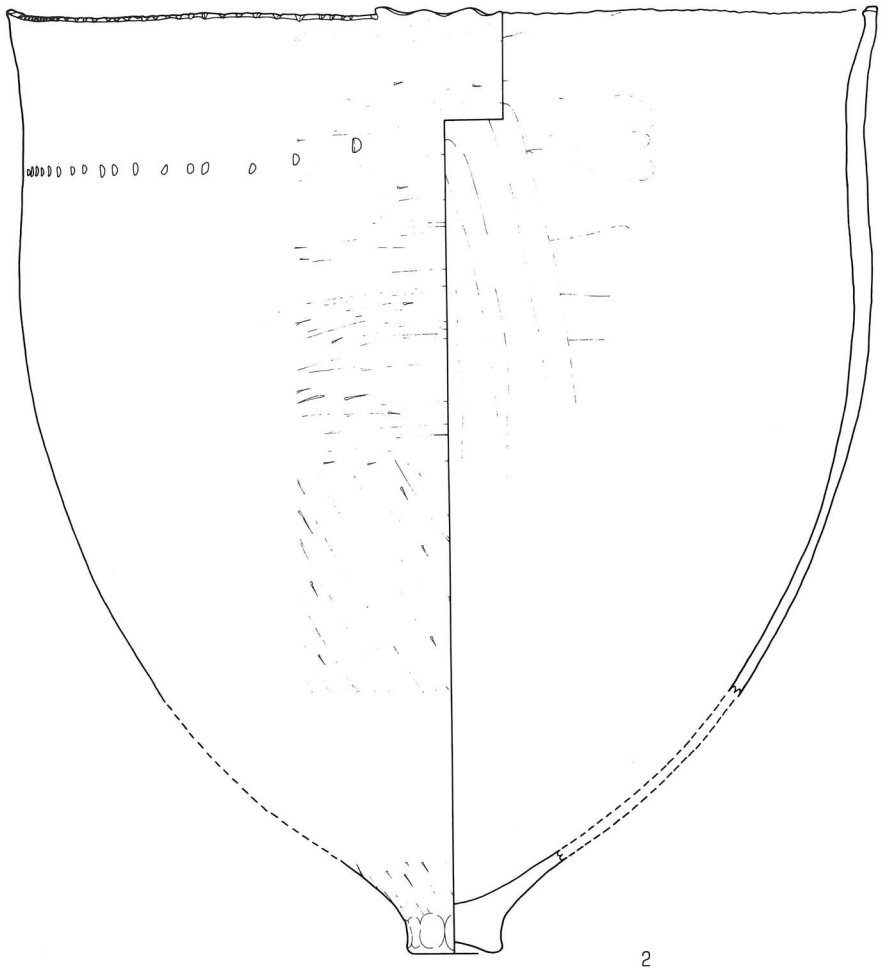


図７　土坑ＳＫ－１



1

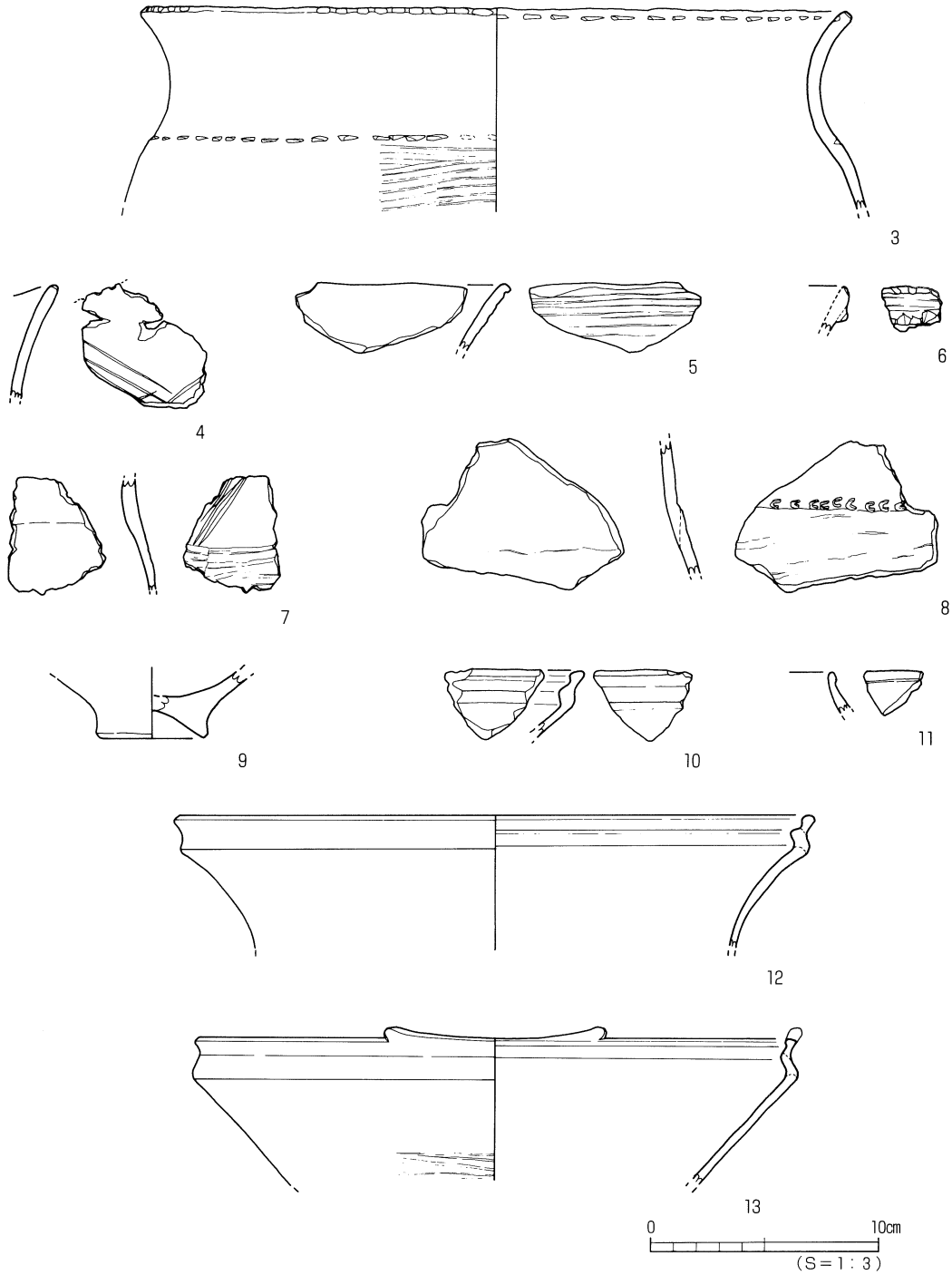


2

0　10cm
（S＝1：3）

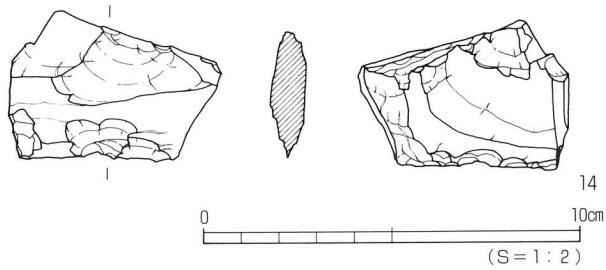
挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
1	深鉢	二枚貝条痕。	二枚貝条痕→ナデ。	面	無			灰褐色	橙褐色	雲母・砂粒多含。
2	深鉢	二枚貝条痕。	ヨコ方向ナデ→タテ方向ナデ。	面	D字形			灰褐色	灰褐色	胴外：刺突。

図8　A区ＳＫ－１出土遺物実測図(1)



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
3	深鉢	口～頸：ミガキ。胴：ケズリ。	ミガキ？	面	丸形			黒褐色	淡黄褐色	口縁内部、頸胴界刺突。
4	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形			黒褐色	黒褐色	頸部施文。
5	深鉢	二枚貝条痕。	ナデ。	面				黒褐色	黒褐色	
6	深鉢	ナデ。	不明。	面	丸形	台形	D字形	橙褐色	橙褐色	
7	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。					淡褐色	淡褐色	頸部施文。
8	深鉢	頸：ナデ。胴：条痕。	ナデ。					褐色	淡褐色	
9	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡橙褐色	淡橙黄色	
10	浅鉢	ミガキ？	ミガキ。	鍵形				明灰褐色	明灰褐色	
11	浅鉢	ミガキ？	ミガキ。	丸				暗褐色	暗褐色	
12	浅鉢	ミガキ？	ミガキ。	鍵形				黒褐色	黒褐色	
13	浅鉢	口：ミガキ。底：二枚貝条痕。	ミガキ。	鍵形				灰褐色	灰褐色	ヒレ状突起。

図9　A区SK－1出土遺物実測図(2)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
14	素材剥片	サヌカイト		3.9	5.5	0.9	25.5	

図10　A区ＳＫ－１出土遺物実測図(3)

ＳＫ－２（図11～13）

一辺100cm前後の隅丸方形に近い平面形を呈し、最も深い部分で10cm程度しか遺存していない。遺物は浮いた状態での出土で、実際この遺構に伴うものか包含層の遺物であるのか微妙ではある。図化可能な土器は突帯文深鉢の口縁部小片２点、両者ともに摩滅や欠損のため口端部刻み目の有無は不明である。16では突帯そのものも剥離してしまっている。斜格子状の沈線による頸部施文が施されている。

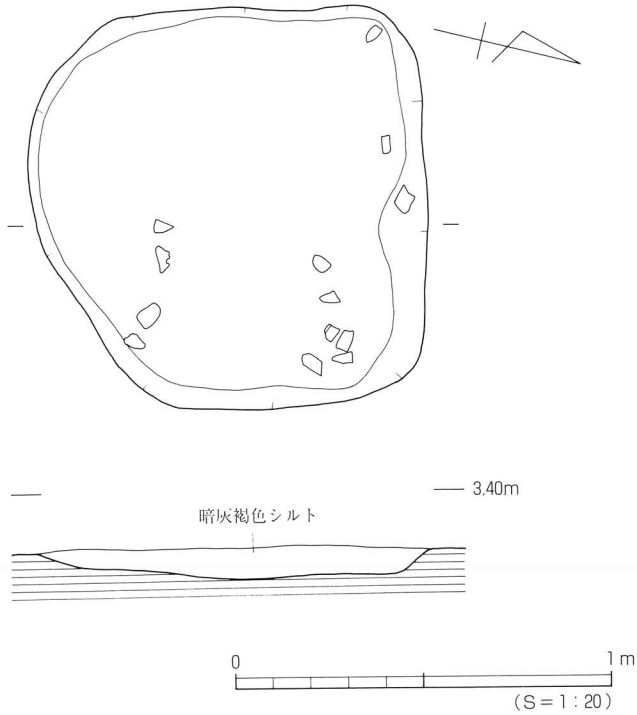
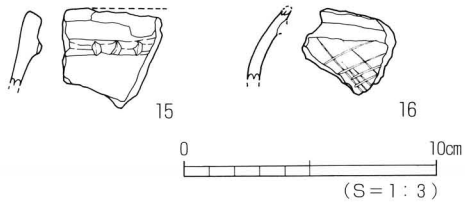
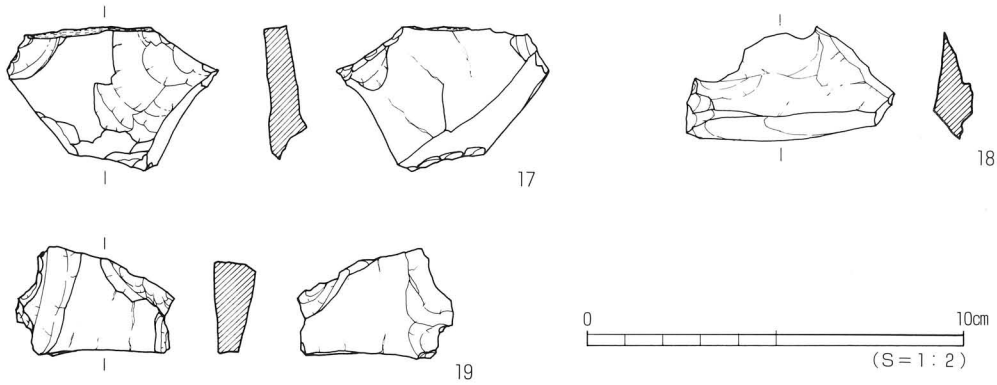


図11　土坑ＳＫ－２



挿図番号	器　種	調整		口　縁		突　帯		色　調		そ の 他
		外　面	内　面	端部形	刻　み	断面形	刻　み	内　面	外　面	
15	深鉢	マメツ。	ミガキ。	面	マメツ	台形	D字形	黒褐色	淡褐色	
16	深鉢	ナデ。	ナデ。					褐色	淡褐色	頸部施文。

図12　A区ＳＫ－２出土遺物実測図(1)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
17	素材剥片	サヌカイト		3.8	5.5	1.0	22.1	
18	素材剥片	サヌカイト		5.0	3.1	1.0	13.0	
19	素材剥片	サヌカイト		2.8	4.3	1.2	15.0	

図13　A区ＳＫ－２出土遺物実測図(2)

ＳＫ－３（図14）

長径130cm、短径100cmの楕円形、深さ５cm程度の遺存で、ほとんど窪みのような遺構である。遺物の出土はない。

ＳＫ－４（図15・16）

80×60cm程度の隅丸長方形に近い平面形で、浅い深皿状の断面形を呈する。これも窪みのよ

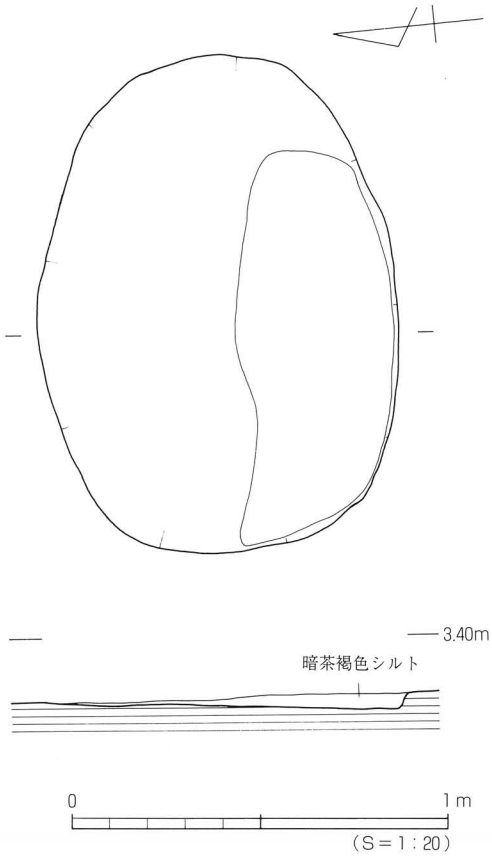


図14　土坑ＳＫ－３

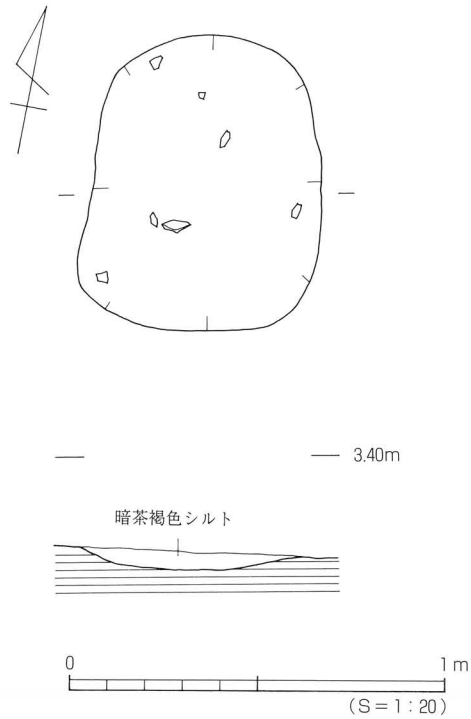
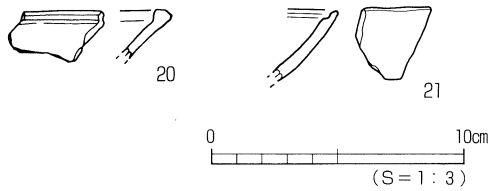


図15　土坑ＳＫ－４

うな遺構で、図化可能な土器は浅鉢口縁部小片２点である。20は口端部を内面に玉縁状に肥厚させるもので、外反する頸部と強く張る胴部を持つ個体と思われる。21は椀状の鉢、口縁部内面に沈線１条が巡る。



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
20	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸				淡灰色	淡灰色	
21	浅鉢	ミガキ。	マメツ。	尖				灰白色	灰白色	

図16　Ａ区ＳＫ－４出土遺物実測図

ＳＫ－５（図17～19）

不整形、どちらかといえば台形に近い平面プランで、深さ10cmの遺存である。埋土に灰状土や焼土塊が含まれている。有文深鉢の頸部片２点と突帯文深鉢の口縁部１点が出土している。浅鉢には皿状のものと、二段に屈曲し鰭状突起を持つ口縁部とがある。その他、サヌカイトのスクレイパー１点と剥片３点の出土があるが、剥片30には使用痕が観察できる。

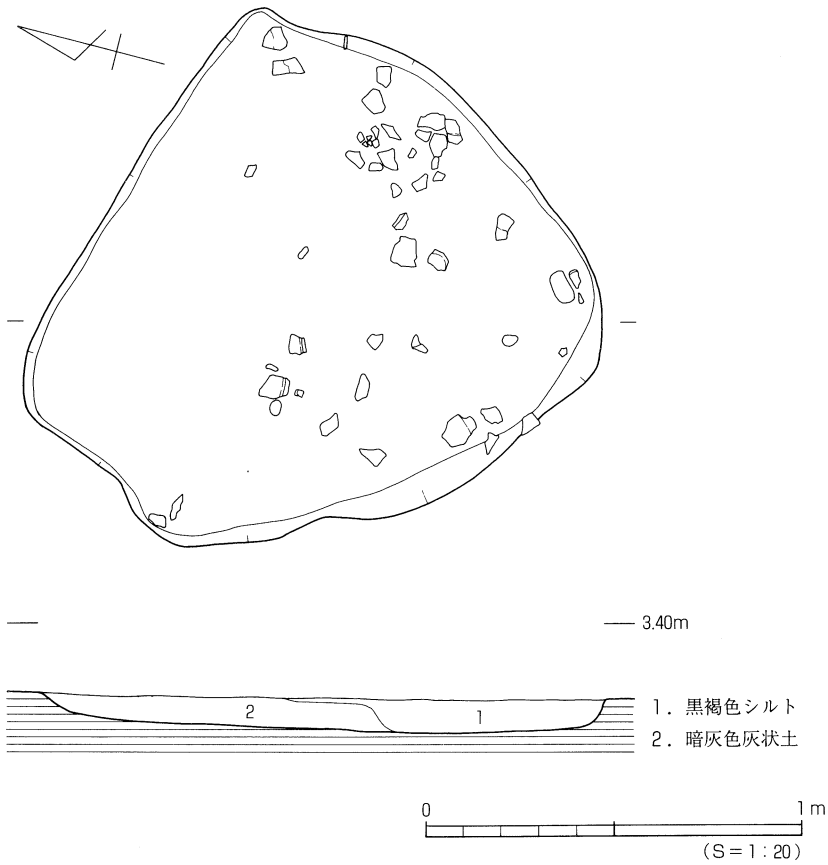
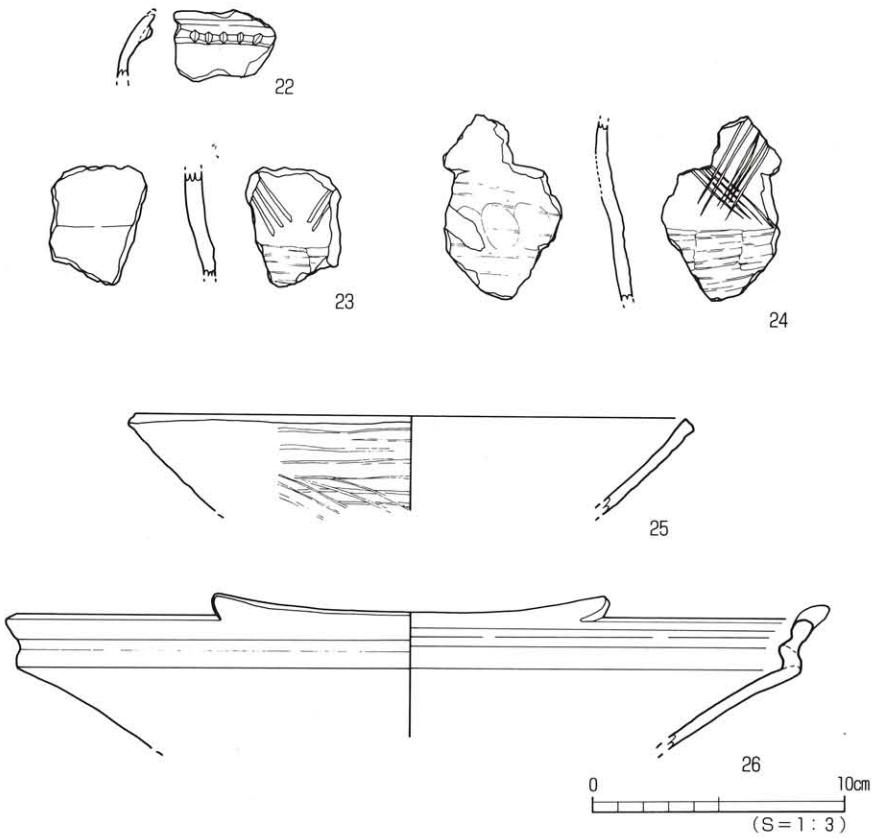
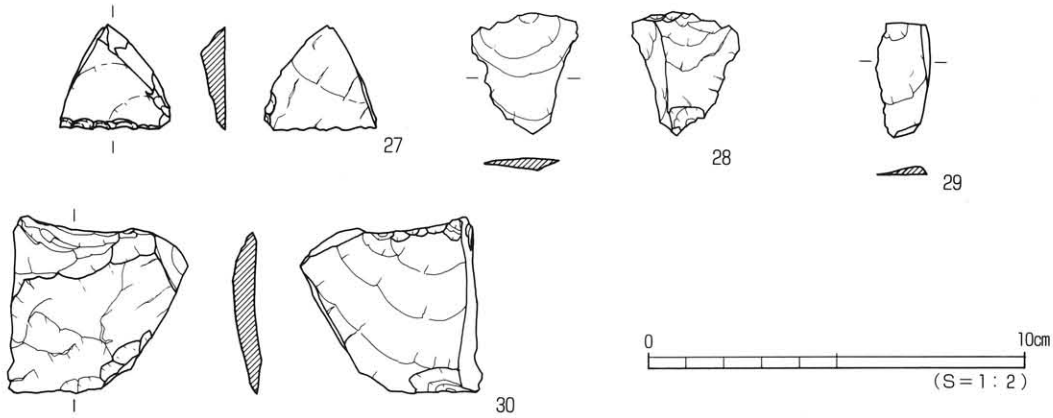


図17　土坑ＳＫ－５



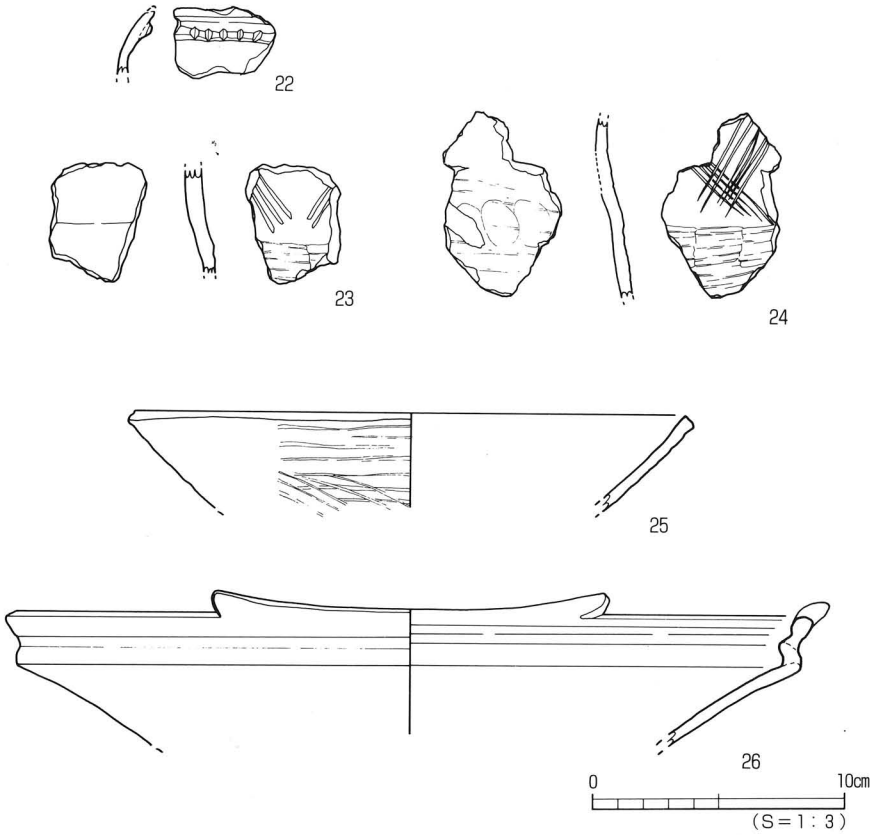
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
22	深鉢	マメツ。	ミガキ？			台形	D字形	黒褐色	淡黄褐色	
23	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。					淡褐色	淡褐色	頸部施文。
24	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。					淡橙褐色	淡橙褐色	頸部施文。
25	浅鉢	二枚貝条痕。	ミガキ。	面				淡黄灰色	淡黄灰色	
26	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	鍵形				明灰褐色	明灰褐色	ヒレ状突起。

図18　A区ＳＫ－５出土遺物実測図(1)



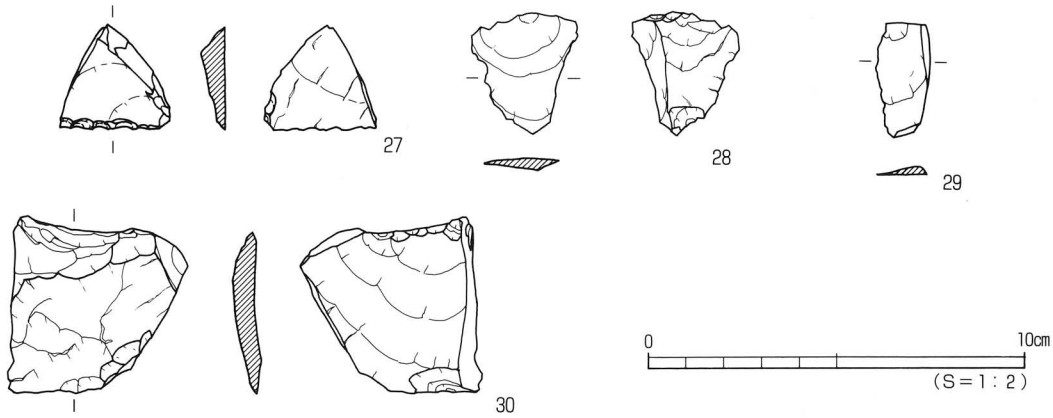
挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
27	スクレイパー	サヌカイト		2.8	3.0	0.6	4.4	
28	素材剥片	サヌカイト		3.25	2.8	0.3	0.4	
29	素材剥片	サヌカイト		3.0	1.45	0.2	0.2	
30	素材剥片	サヌカイト		4.6	4.8	0.8	21.6	

図19　A区ＳＫ－５出土遺物実測図(2)



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
22	深鉢	マメツ。	ミガキ？			台形	D字形	黒褐色	淡黄褐色	
23	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。					淡褐色	淡褐色	頸部施文。
24	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。					淡橙褐色	淡橙褐色	頸部施文。
25	浅鉢	二枚貝条痕。	ミガキ。	面				淡黄灰色	淡黄灰色	
26	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	鍵形				明灰褐色	明灰褐色	ヒレ状突起。

図18　A区ＳＫ－５出土遺物実測図(1)



挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
27	スクレイパー	サヌカイト		2.8	3.0	0.6	4.4	
28	素材剥片	サヌカイト		3.25	2.8	0.3	0.4	
29	素材剥片	サヌカイト		3.0	1.45	0.2	0.2	
30	素材剥片	サヌカイト		4.6	4.8	0.8	21.6	

図19　A区ＳＫ－５出土遺物実測図(2)

ＳＫ－６（図20～22）

ＳＫ－５の南に隣接して検出された土坑で、ＳＫ－８・９とともに不整形の竪穴ＳＸ－１を切る。平面形態、規模ともにＳＫ－５に類似するが、二段堀りに深くなる部分がある。この部分の底近くには木炭層が検出された。深鉢口頸部31はこの深くなった部分の木炭層上面からの出土で、木炭層以下での遺物の出土はない。31は胴が張り、頸部ですぼまって口縁部が若干外反する形態で、口端部は外斜め下方に傾いた面をなし、この面の上端・下端ともに横丸形に軽く押圧された刻みを持っている。頸胴界にみられる小さな段は、これより上位の条痕、以下の条痕の後のナデといった調整の違いによって生じたものである。また、条痕調整の頸部には沈線による斜格子文を持つ。浅鉢口縁部小片35は、口端部に粘土帯を貼り付け、玉縁状に内面に肥厚させている。

ＳＫ－７（図23）

ＳＫ－２とＳＫ－５に切られた不整形の窪みのような遺構である。遺物の出土はない。

ＳＫ－８（図24・26・27）

長径100cm、短径80cmの楕円形に近い平面形の土坑で、ＳＸ－１を切る。頸胴界に刺突列点文を持つ深鉢や波状口縁浅鉢を出土している。この浅鉢の口端部にはＤ字形の刻みが施されているが、この刻みは波頂部近辺にのみ施されるものである。

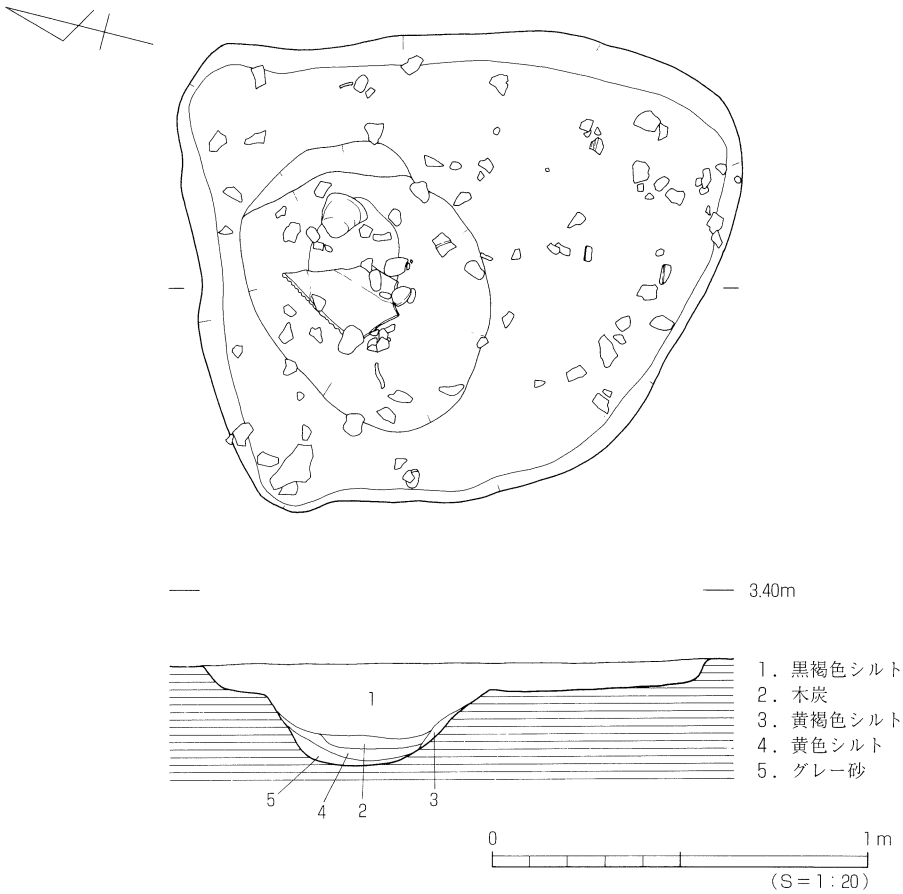
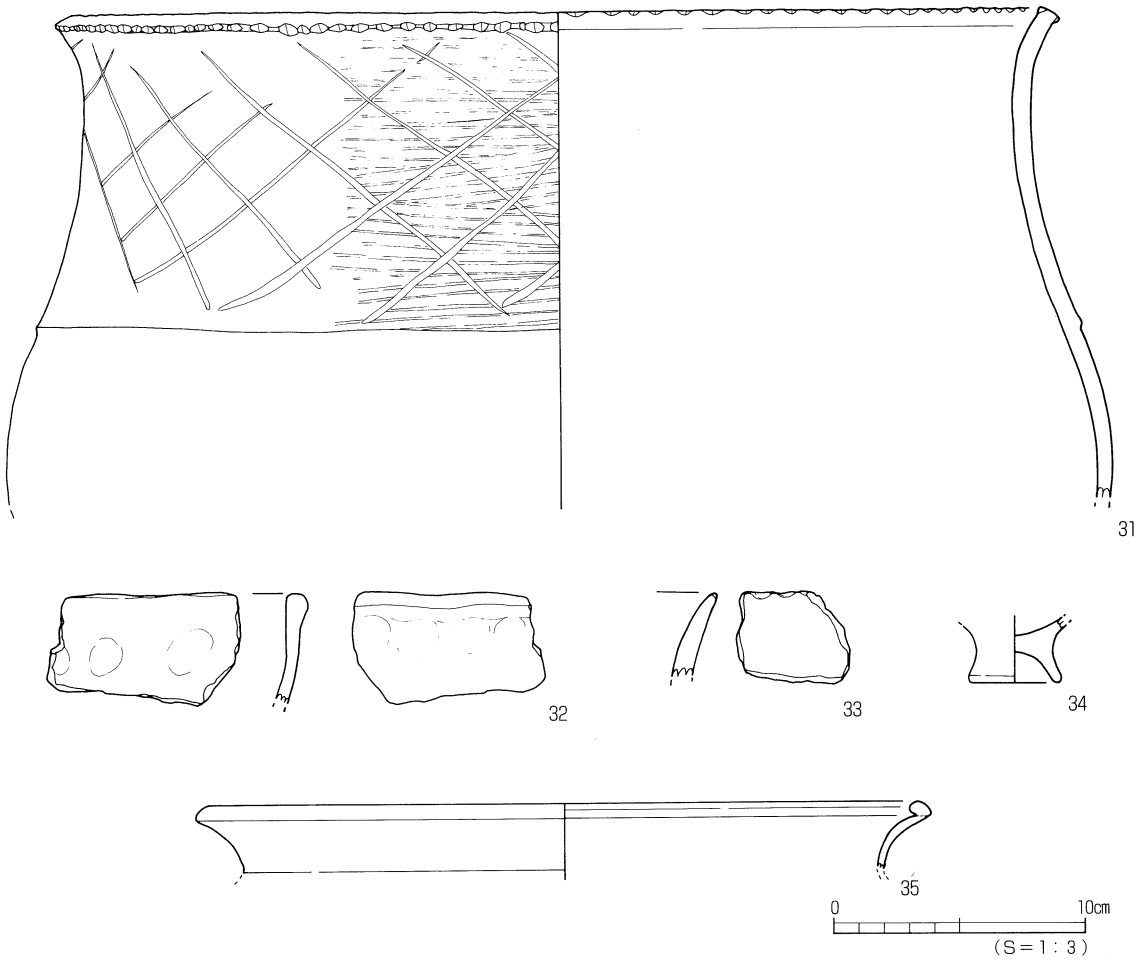


図20　土坑ＳＫ－６

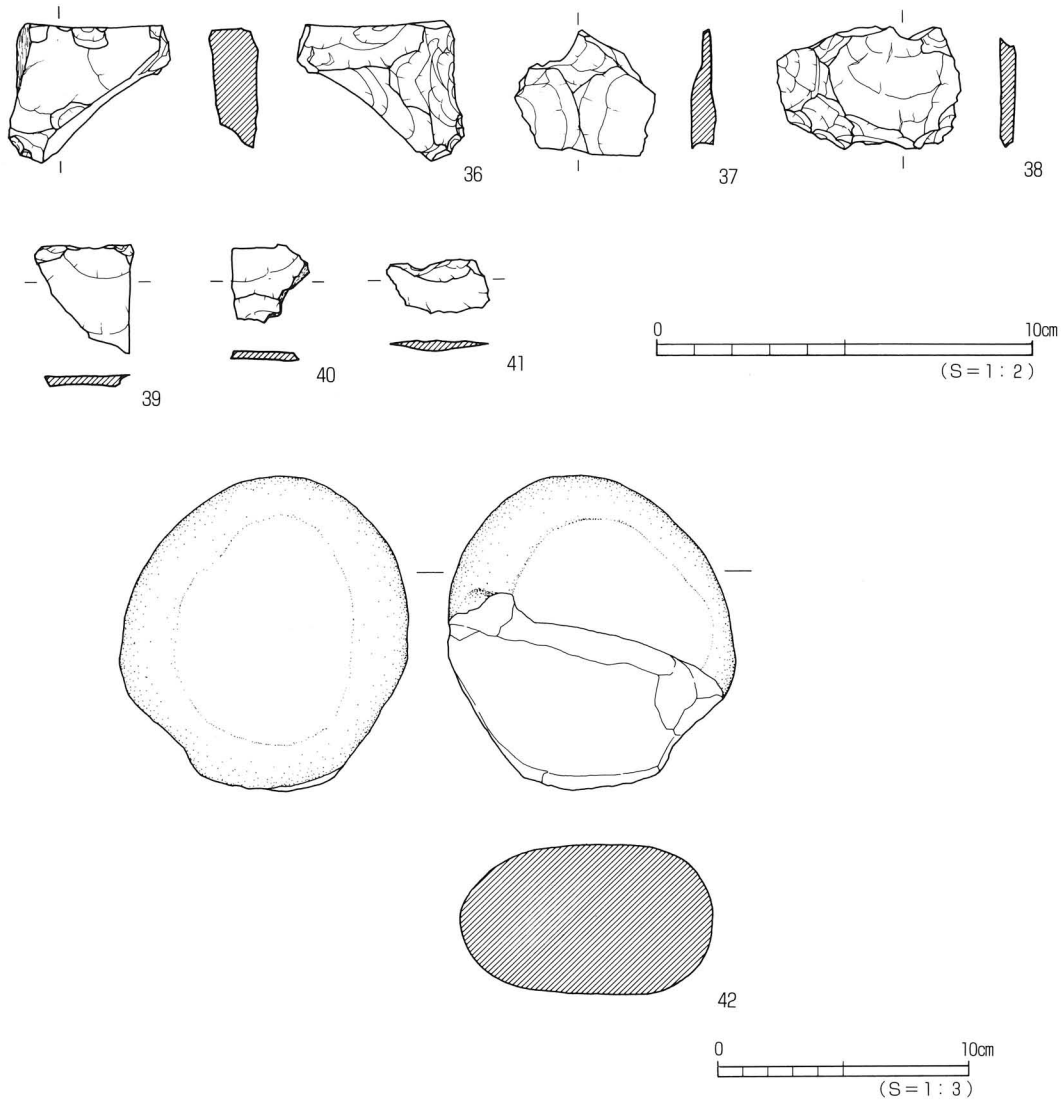
ＳＫ－９（図25・28・29）

直径140㎝前後の不整円形、ＳＫ－６・８とともにＳＸ－１を切るが、遺物にはＳＸ－１と混じってしまっているような印象を受ける。遺物はすべて小片で突帯文深鉢や、逆「く」の字口縁の浅鉢、あるいは浅鉢の鰭状突起などがある。逆「く」の字口縁には、53のように極端に短いものや54のように長いものがある。



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
31	深鉢	頸：条痕。胴：条痕→ナデ。	ケズリ→ナデ。	面	菱形			黒色	淡褐色	口唇外端刻み。
32	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸				淡褐色	灰褐色	
33	深鉢	ナデ。	ナデ。	尖	丸形			黒褐色	淡褐色	
34	深鉢	ナデ。	ナデ。					灰褐色	灰褐色	
35	浅鉢	ミガキ。	マメツ。	丸				灰白色	灰白色	口縁王縁状内面肥厚。

図21　Ａ区ＳＫ－６出土遺物実測図(1)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
36	素材剥片	サヌカイト		3.7	4.4	1.3	20.6	
37	素材剥片	サヌカイト		3.3	3.7	0.7	10.0	
38	素材剥片	サヌカイト		3.2	4.9	0.4	0.9	
39	素材剥片	サヌカイト		2.9	2.6	0.3	0.4	
40	素材剥片	サヌカイト		2.1	2.1	0.3	0.2	
41	素材剥片	サヌカイト		1.5	2.8	0.3	0.2	
42	擦り石	安山岩	欠損	12.4	11.4	6.2	1,050.0	

図22　A区ＳＫ－６出土遺物実測図(2)

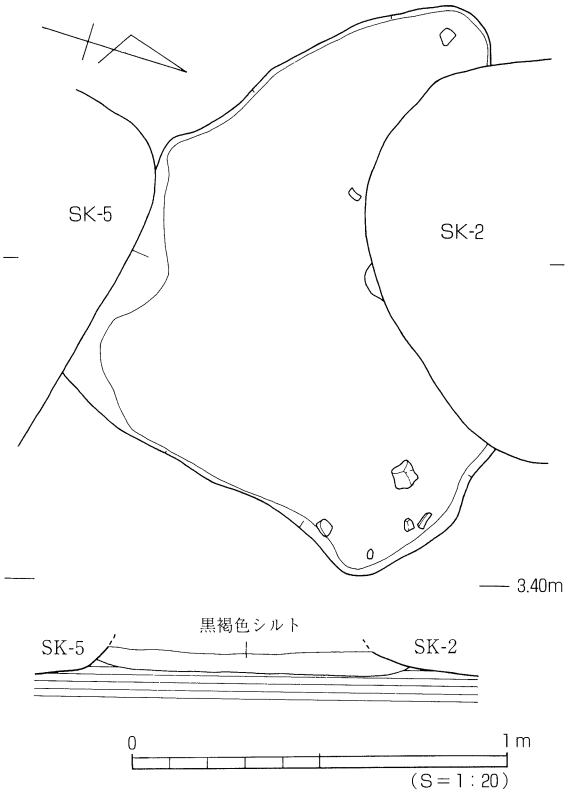


図23　土坑ＳＫ－７

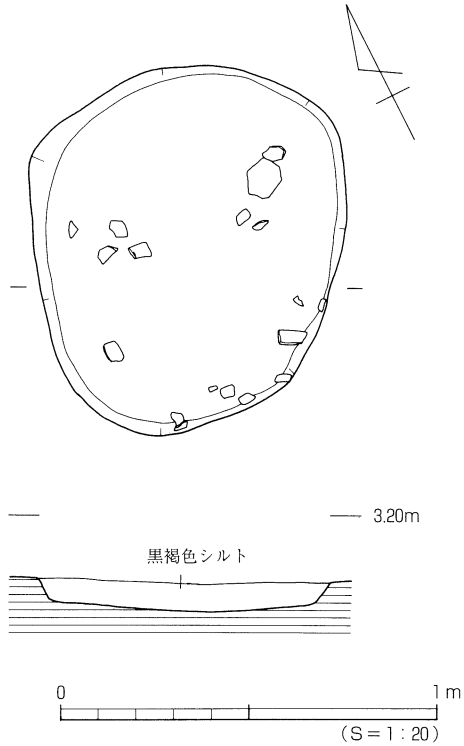


図24　土坑ＳＫ－８

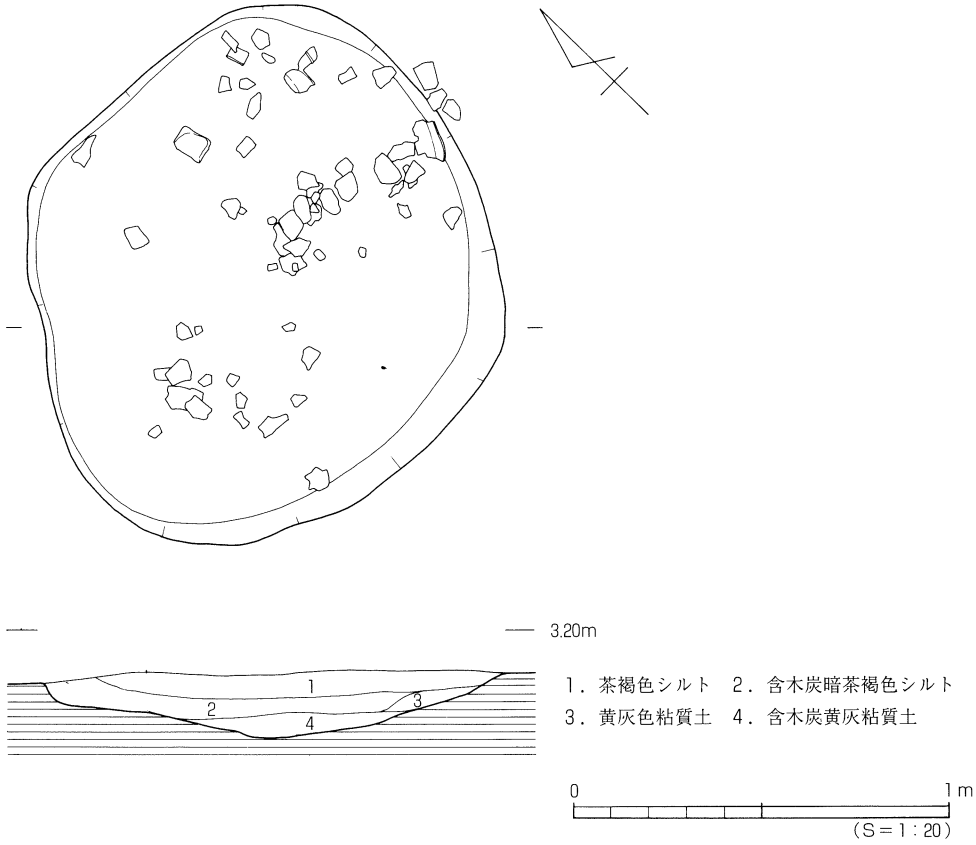
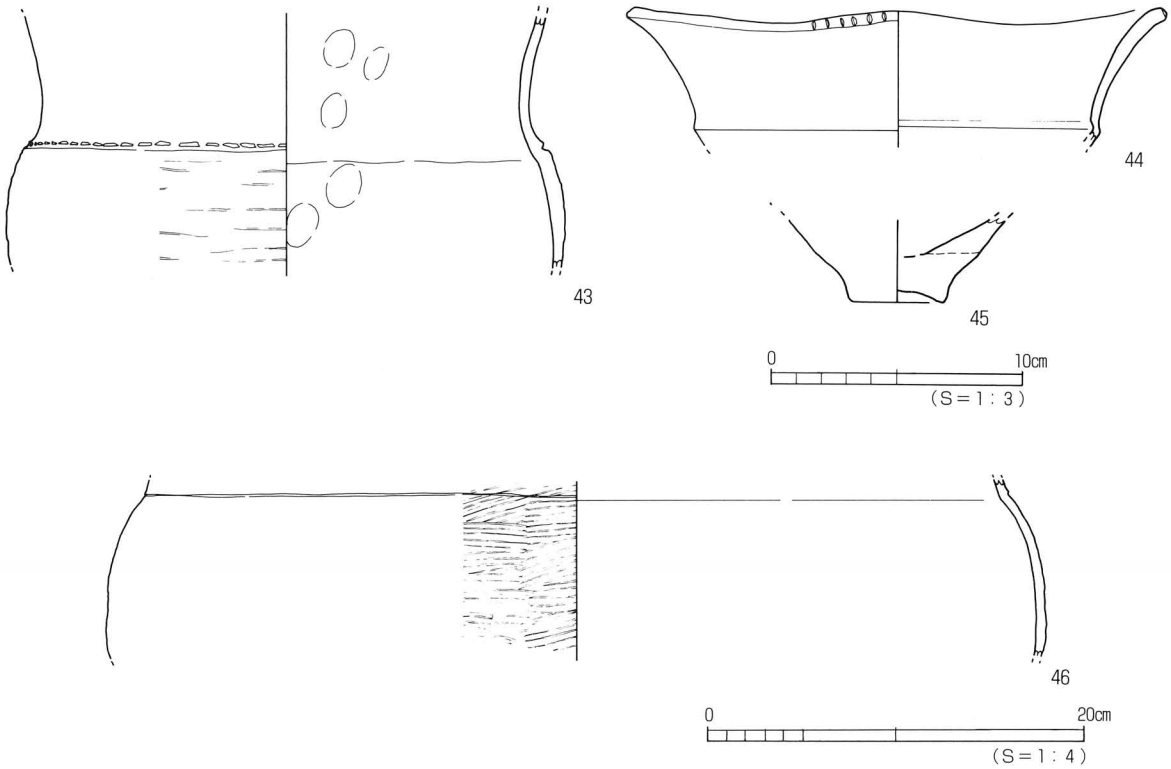
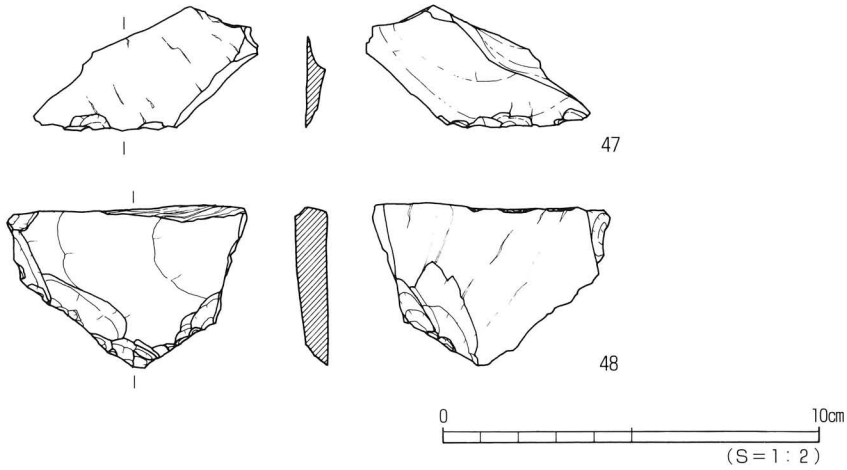


図25　土坑ＳＫ－９



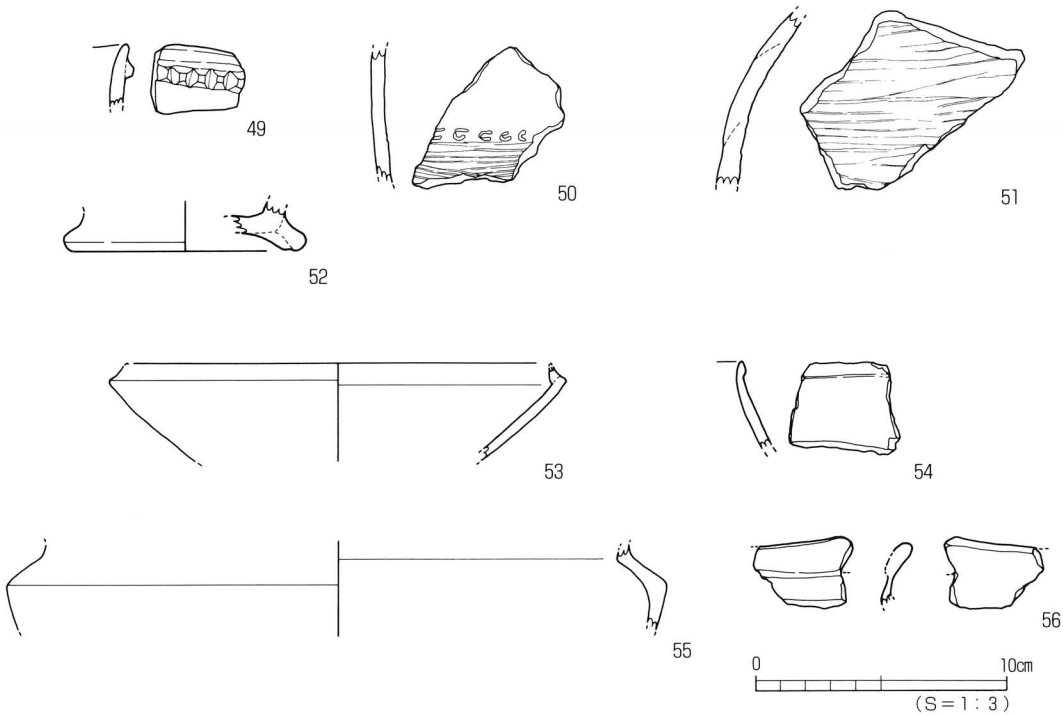
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
43	深鉢	頸：ナデ。胴：条痕。	ナデ。					黒褐色	淡褐色	頸胴界刺突。
44	深鉢	マメツ。	ミガキ。	面	D字形			黒褐色	橙褐色	
45	浅鉢	マメツ。	マメツ。					灰褐色	橙　色	
46	浅鉢	二枚貝条痕。	ナデ。					黒褐色	橙褐色	

図26　A区ＳＫ－８出土遺物実測図(1)



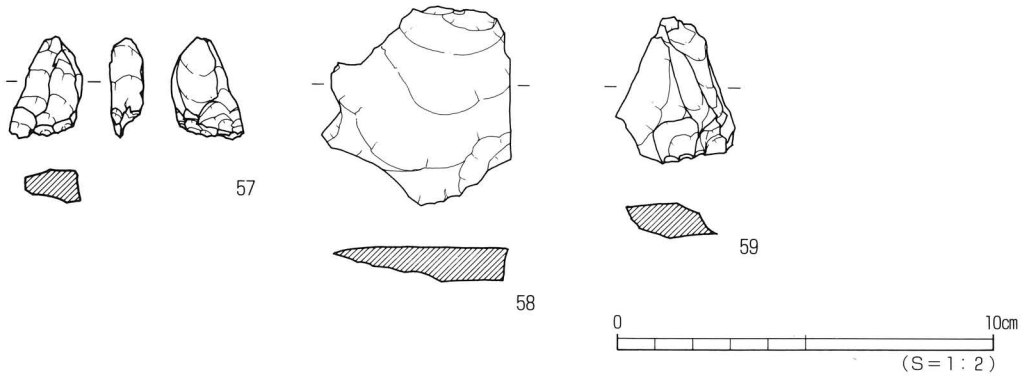
挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
47	スクレイパー	サヌカイト		3.3	5.9	0.5	0.8	
48	素材剥片	サヌカイト		4.1	6.3	0.8	31.0	

図27　A区ＳＫ－８出土遺物実測図(2)



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
49	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸		台形	D字形	橙褐色	橙褐色	
50	深鉢	頸：ナデ。胴：二枚貝条痕。	マメツ。					淡褐色	橙　色	頸胴界刺突。
51	深鉢	頸：巻き貝条痕。	ナデ。					黒褐色	淡褐色	
52	深鉢	マメツ。	マメツ。					灰褐色	灰褐色	
53	浅鉢	マメツ。	不明。					褐色	淡褐色	
54	浅鉢	マメツ。	ミガキ？	尖				褐色	暗褐色	
55	浅鉢	マメツ。	ナデ。					灰褐色	褐色	
56	浅鉢	マメツ。	マメツ。	丸				淡灰褐色	淡褐色	ヒレ状突起。

図28　A区ＳＫ－９出土遺物実測図(1)



挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
57	素材剥片	サヌカイト		2.7	2.0	0.8	4.4	
58	素材剥片	サヌカイト		5.2	5.0	0.9	20.8	
59	素材剥片	サヌカイト		3.9	3.2	1.1	10.5	

図29　A区ＳＫ－９出土遺物実測図(2)

② 不明遺構

ＳＸ－１（図30・31）

４×2.5ｍ程度の不整形の窪みで、ＳＫ－６・８・９に切られている。土器細片を僅かとサヌカイト剥片の出土があった。

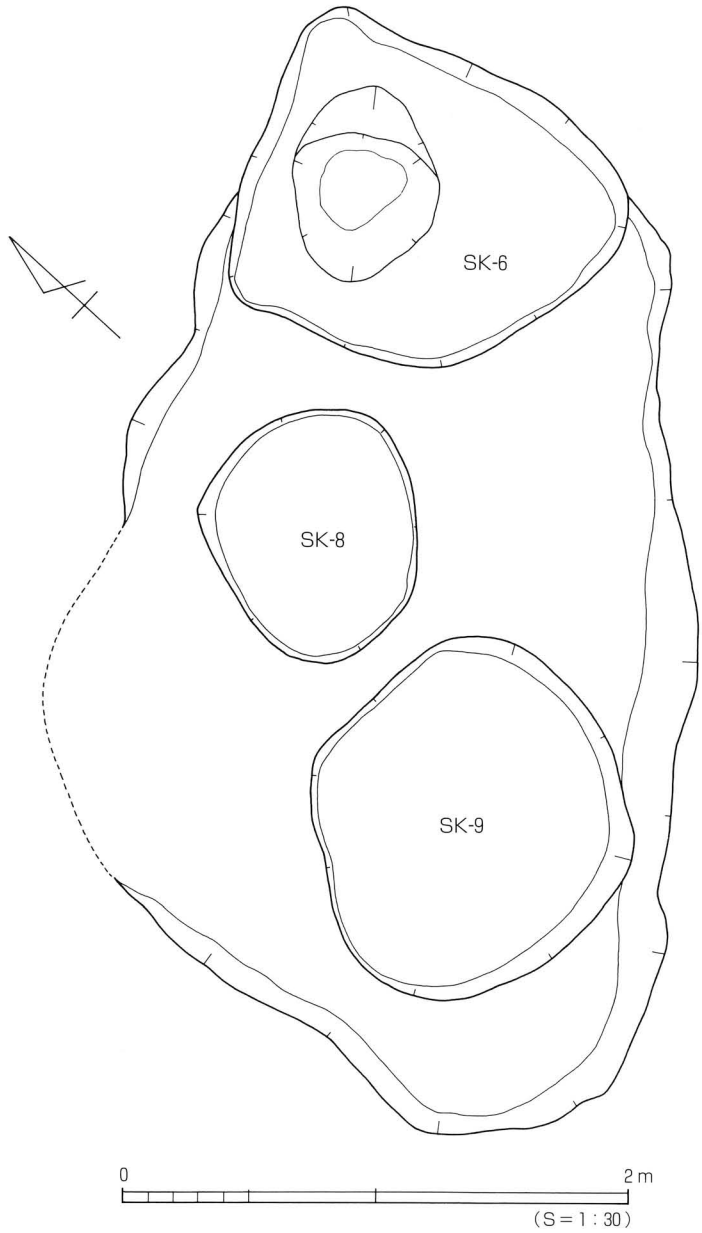
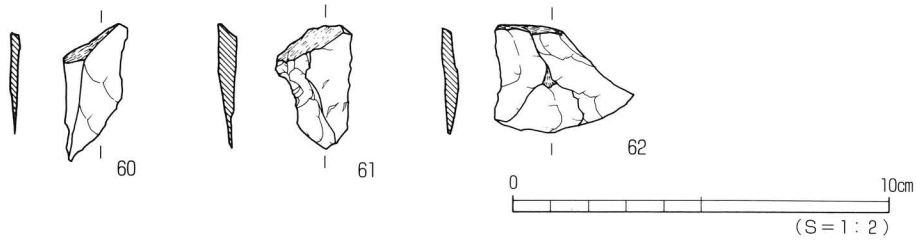


図30　不明遺構ＳＸ－１



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
60	素材剥片	サヌカイト		3.6	1.7	0.2	0.1	
61	素材剥片	サヌカイト		3.3	2.0	0.5	0.2	
62	素材剥片	サヌカイト		2.9	3.7	0.4	0.2	

図31　Ａ区ＳＸ－１出土遺物実測図

③ 溝状遺構

ＳＤ－１（図32）

幅40～60㎝、深さ５㎝程度の窪みが南北方向に長さ3.7ｍにわたって検出されているので、一応溝状遺構として扱った。縄文土器片を僅かに出土しているが、図化可能なものはない。周辺の土坑群と同時期のものである。

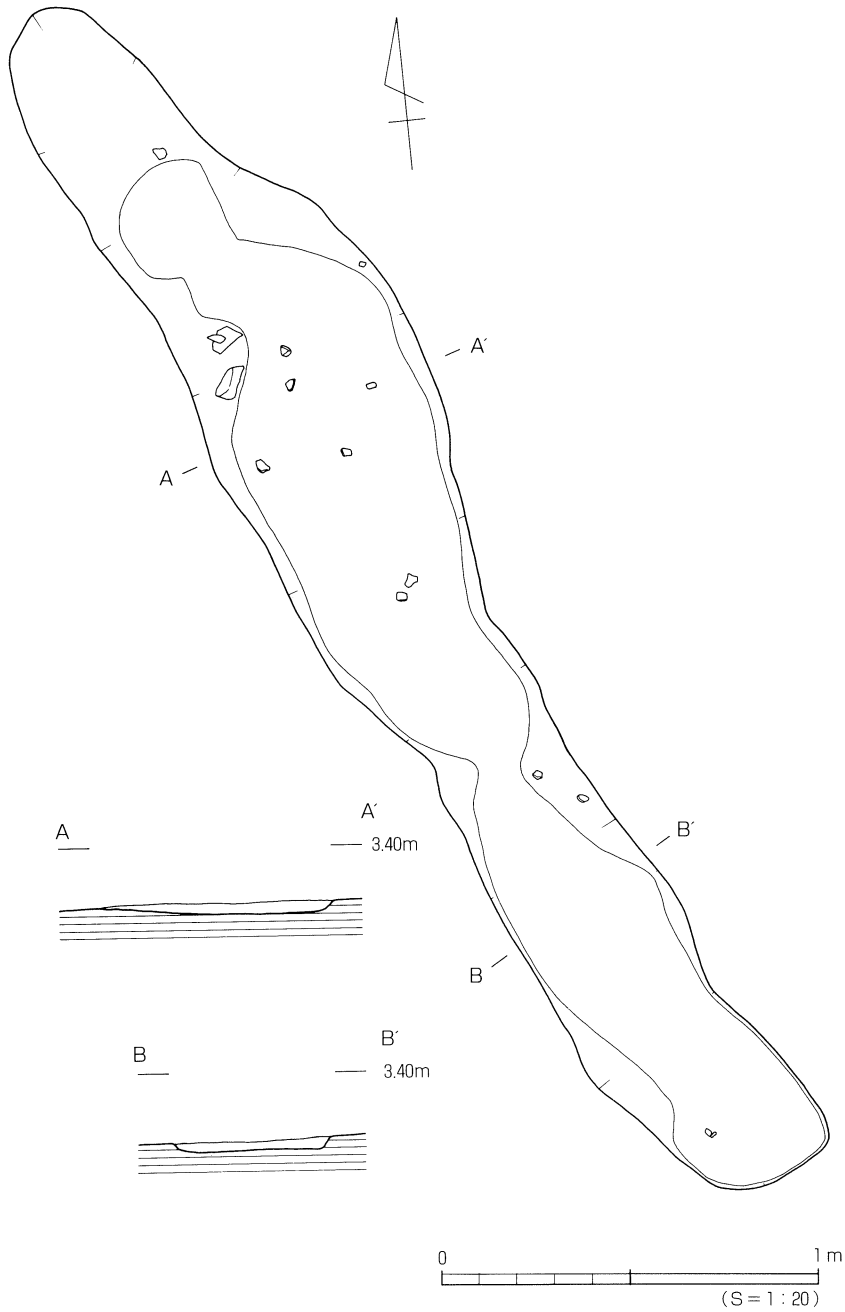


図32　溝状遺構ＳＤ－１

2）湿地の調査

先述のように湿地内には第５層以下、掘削して確認できた範囲では第10層に至るまでの土層が堆積しており、そのうち第10層を除く各層に遺物が包含されている。しかしながら湿地内は湧水が激しく、実際に調査が可能であったのは、湿地東半部分のしかも汀から４～５ｍの範囲の７層までの調査が限界であった。したがって、８層以下の遺物は調査最終段階で、図５に示された部分を堀り抜いて採集されたものである。以下では下位の層から順を追って出土遺物について記述してゆく。

①第９Ｃ層出土遺物（図33～46）

９Ｃ層では縄文後期を主とした遺物が出土している。多数の条痕文粗製深鉢とともに図33に示したような有文土器がある。沈線に縄文あるいは擬縄文を組み合わせたものや、沈線のみ、または沈線と刺突を組み合わせたものなどがある。その多くが深鉢になるものと思われるが、68は注口土器であるかもしれない。瀬戸内津雲上層式併行の遺物群と判断でき、後期中葉に属するものである。

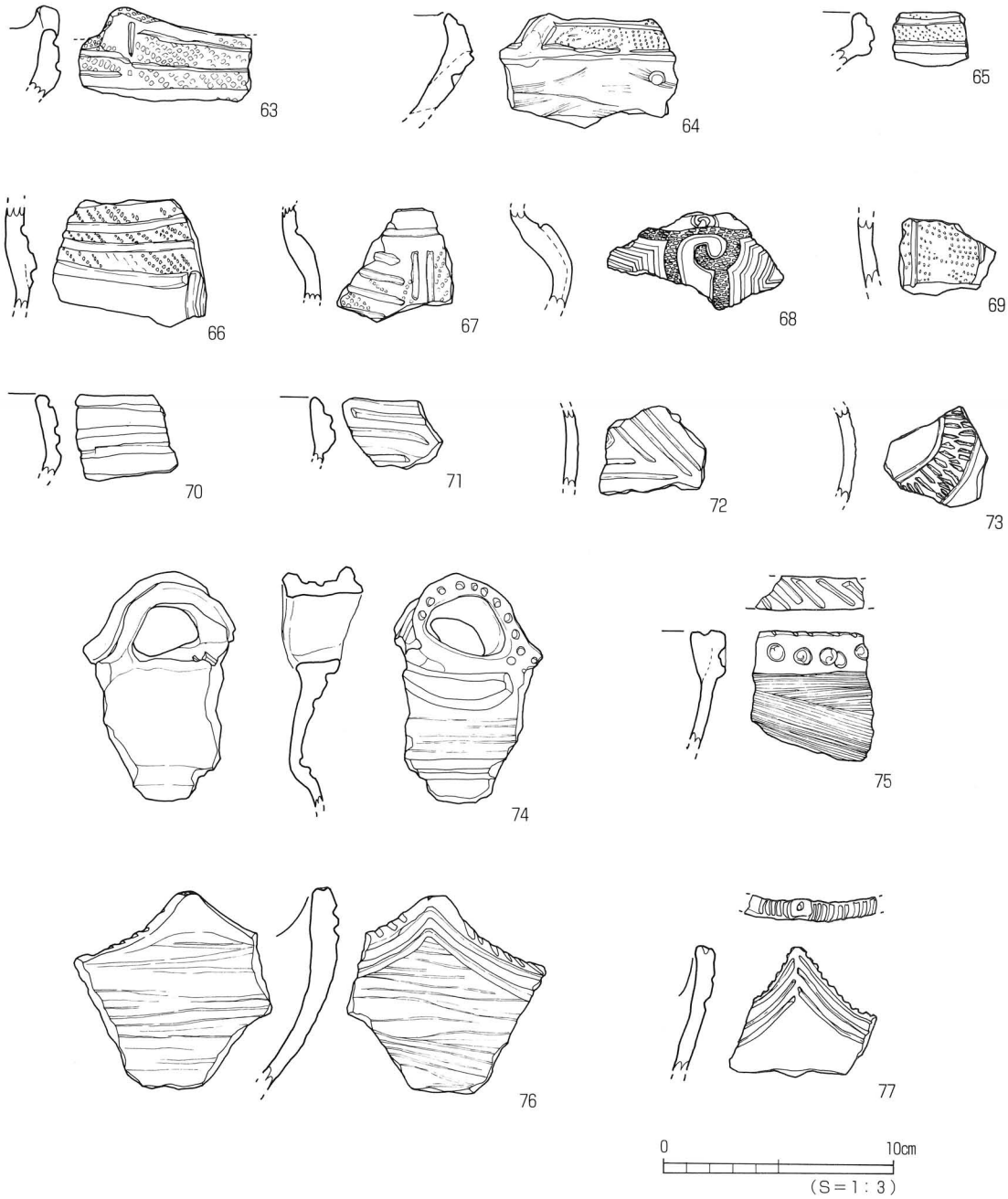
後期後葉から末の特徴的な深鉢には図40の一群がある。近畿でいう宮滝式に特徴的な、巻き貝による凹線と扇状圧痕を持つもので、瀬戸内福田ＫⅢ式併行の土器群である。

これら精製、あるいは有文深鉢とともに出土している粗製深鉢には頸部から口縁部にかけて外反しながらすぼまるもの、外反して開くもの、内湾するものなどがある。口縁部は平縁になるものが多いが、波状を呈するものや瘤状の突起を持つものなどもあり、これらの口端部は肥厚され、端面に刻み目を施されることが多い。後述するように、この層からは晩期の土器も少量出土しており、これら粗製深鉢の類うち、特に口端部が肥厚して刻み目を施されたり、突起を有したりするもの以外の全くの無文で単純な器型のものに関する個々の所属時期については厳密には判断しづらいが、後期に属するものが多いと考えている。

浅鉢で後期段階のものと判断したものは、図42に示してある。概ね浅い皿状の器型で口縁部を内面に肥厚したり、外反させたりするものが多い。口縁部を外反させるものの中には141のように口縁下に刻み目突帯を貼り付けるものがある。外面は条痕調整の後磨いたり、撫でたり調整はまちまちであるが、大抵の場合内面は磨かれたり撫で調整で入念に仕上げられている。そういった意味では内面に条痕の残る150は、口端部の刻み目とともに異例であって、深鉢口縁部の歪んだ破片である可能性がある。

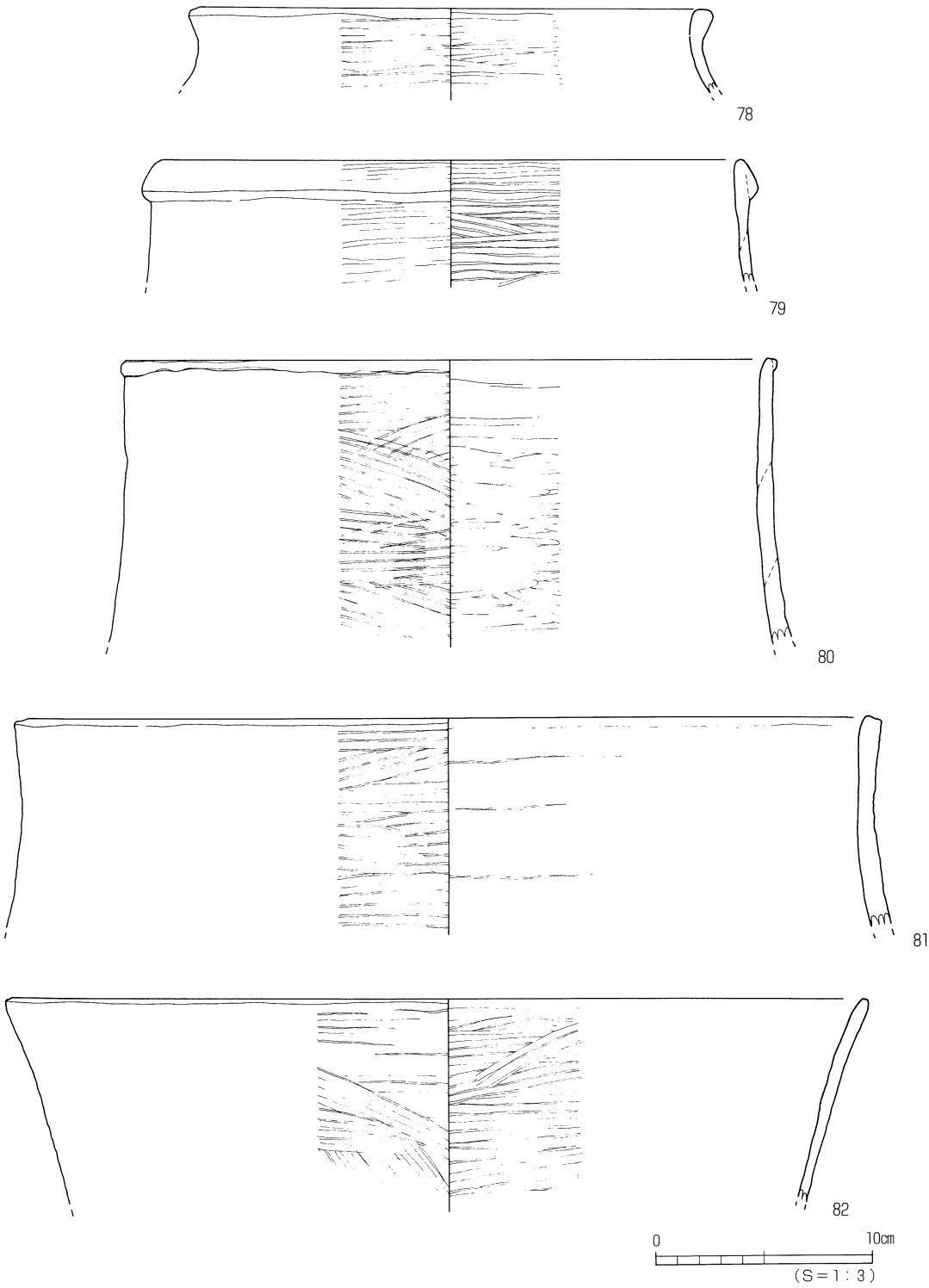
晩期の土器については、深鉢を図41に、浅鉢を図43に図示した。深鉢138は、砲弾形の器型で比較的薄手のつくり、口縁部・胴部の外面にそれぞれ２本ずつの平行沈線を施されている。近畿滋賀里Ⅰ式併行、晩期前半の土器。139は近畿滋賀里Ⅲｂ式の範疇におさまる深鉢で、近年提唱されている篠原式にあてはめると古・中段階に併行する資料、瀬戸内舟津原式段階のものであろう。浅鉢も同様に晩期前半から中頃までにおさまると考えられる資料があり、特に橿原式文様を持つ椀型の152は愛媛県内でも類例に乏しく、注目される資料である。上浮穴郡久万町笛ヶ滝遺跡に一例だけ採集例がみられる。

石製品には緑色片岩や砂岩製の礫石錘や打製土掘り具、石皿、敲石、サヌカイトのスクレイパーなどがある。



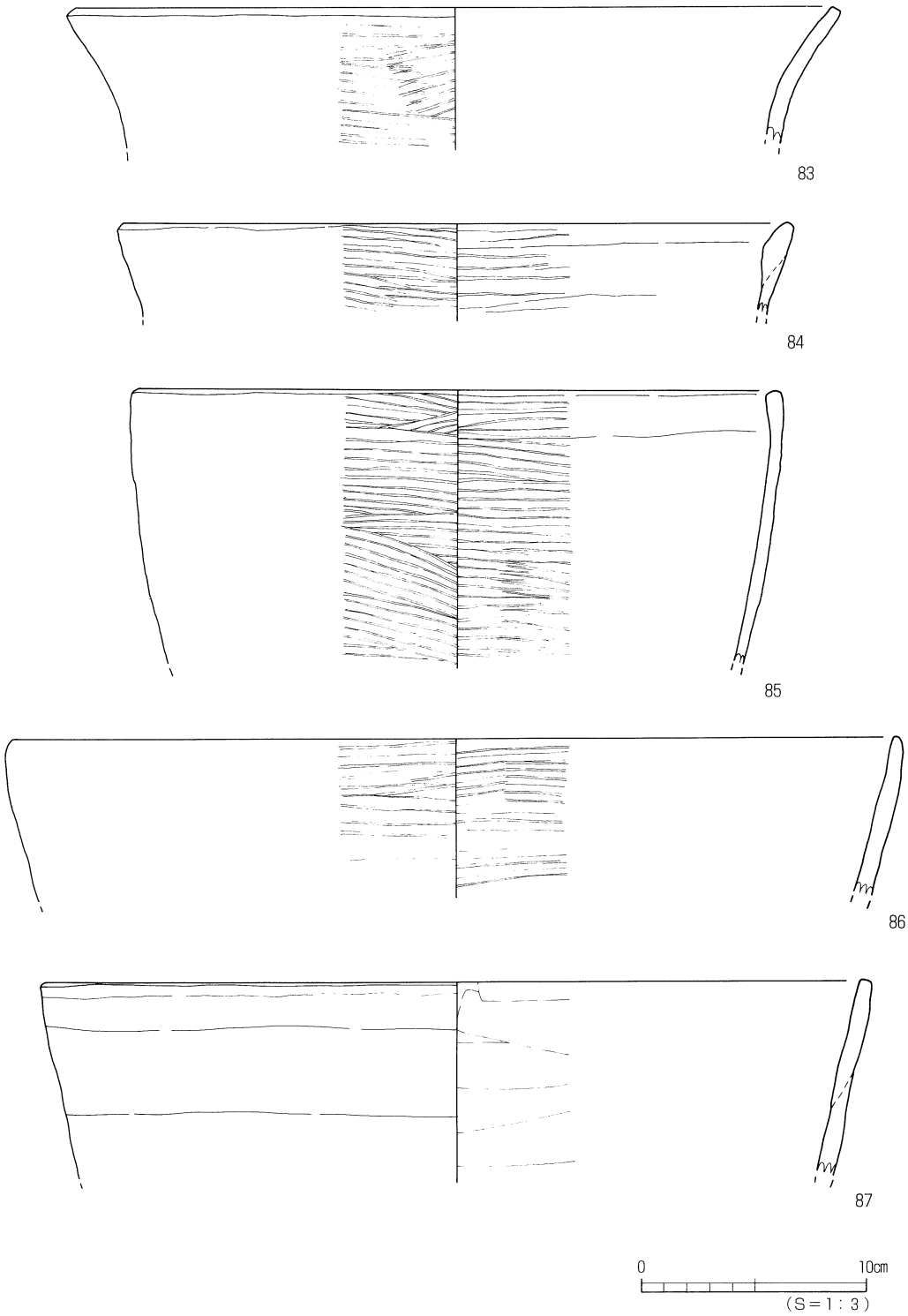
挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
63	深鉢	ナデ。	条痕→ナデ。					灰褐色	淡灰褐色	RL。
64	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					灰褐色	淡褐色	擬縄文。
65	深鉢	ナデ。	条痕→ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	RL。
66	深鉢	条痕→ナデ。	巻き貝条痕→ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	RL。
67	深鉢	ナデ。	ケズリ。					淡茶褐色	淡茶褐色	LR。注口土器？
68	深鉢	ナデ。	ナデ。					灰褐色	灰褐色	LR。
69	深鉢	ナデ。	ナデ。					灰褐色	灰褐色	LR。
70	深鉢	ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
71	深鉢	ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
72	深鉢	マメツ。	ミガキ。					淡灰褐色	茶褐色	
73	深鉢	ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
74	深鉢	条痕→ナデ。	条痕→ナデ。					灰色	淡橙褐色	把手。
75	深鉢	胴：巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					橙褐色	淡灰褐色	貝による押圧文。
76	深鉢	条痕→ナデ。	巻き貝条痕→ナデ。					淡灰褐色	灰色	
77	深鉢	ナデ。	ナデ。					淡桃色	淡褐色	

図33　A区第9C層出土遺物実測図(1)



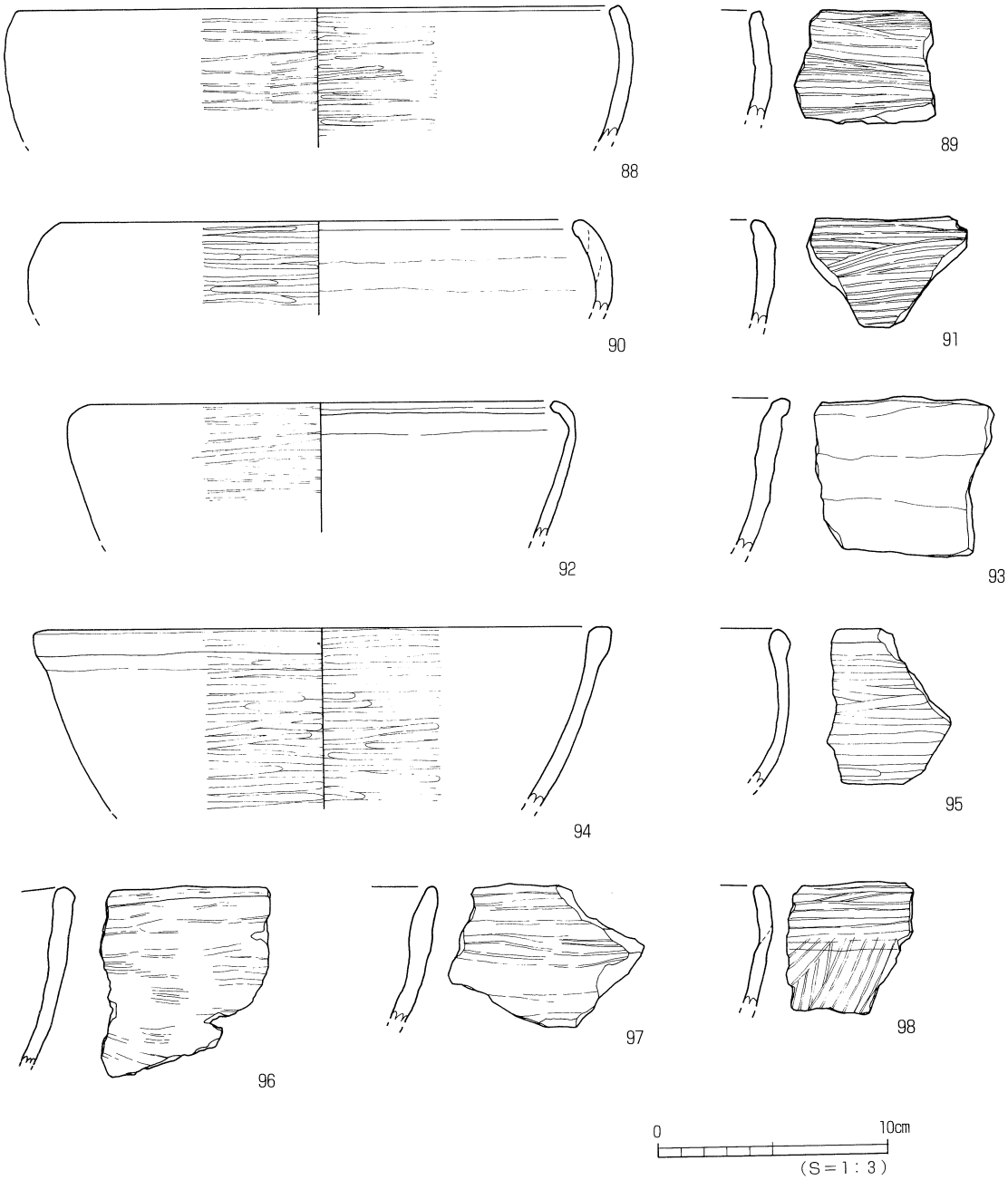
挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
78	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					淡黄褐色	淡灰褐色	
79	深鉢	条痕→ミガキ。	条痕→ミガキ。					淡黄褐色	灰褐色	
80	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					淡褐色	黒褐色	
81	深鉢	巻き貝条痕。	条痕→ナデ。					淡黄褐色	淡黄褐色	
82	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					淡灰褐色	淡灰褐色	

図34　A区第9C層出土遺物実測図(2)



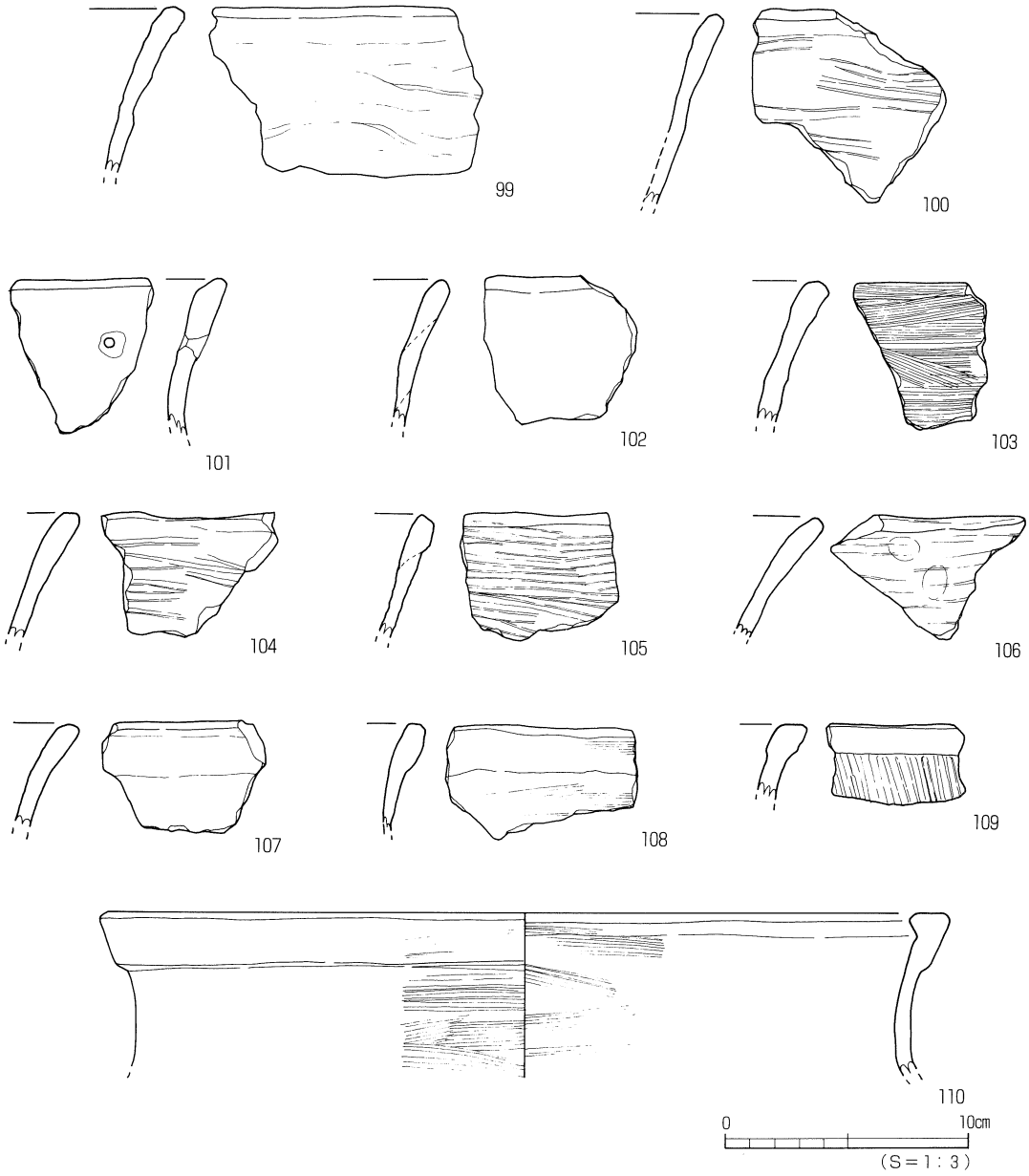
挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
83	深鉢	巻き貝条痕。	ナデ。					橙褐色	橙褐色	
84	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					灰褐色	灰褐色	
85	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					灰褐色	灰褐色	
86	深鉢	条痕→ナデ。	条痕→ナデ。					橙褐色	黒褐色	口縁外面煤付着。
87	深鉢	条痕→ナデ。	条痕→ナデ。					黒色	黒褐色	外面煤付着。

図35　A区第９C層出土遺物実測図(3)



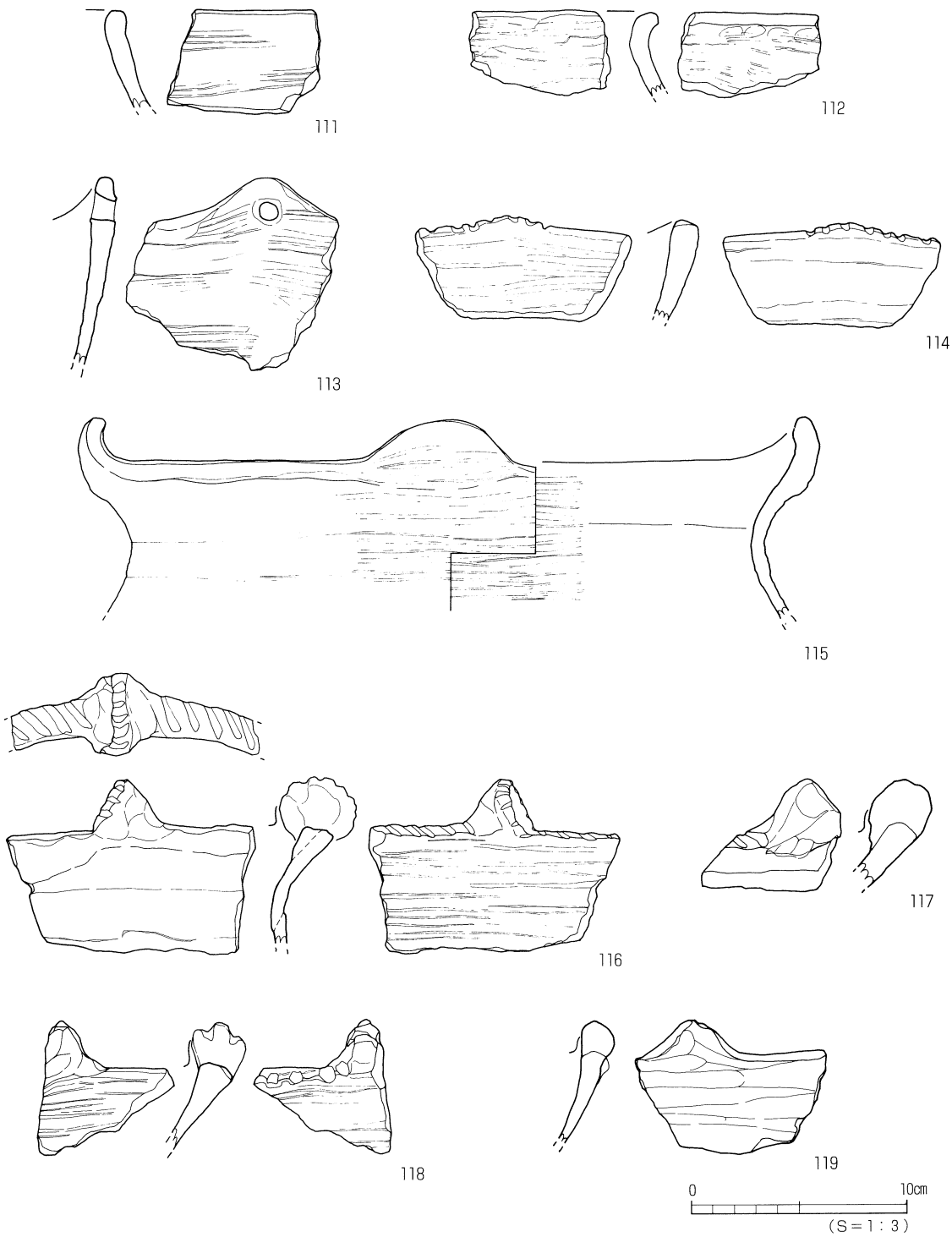
挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
88	深鉢	条痕→ナデ。	ミガキ。					淡黄褐色	淡黄褐色	
89	深鉢	ケズリ。	ケズリ。					灰褐色	淡灰褐色	
90	深鉢	ナデ。	ナデ。					灰白色	灰白色	
91	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					灰白色	灰黄白色	
92	深鉢	巻き貝条痕→ナデ。	ナデ。					灰白色	灰白色	
93	深鉢	ナデ。	巻き貝条痕。					灰褐色	灰褐色	
94	深鉢	ミガキ。	ミガキ。					灰褐色	灰褐色	
95	深鉢	ミガキ。	ミガキ。					灰褐色	灰褐色	
96	深鉢	巻き貝条痕→ナデ。	巻き貝条痕。					褐色	褐色	
97	深鉢	条痕→ナデ。	巻き貝条痕。					灰褐色	灰褐色	
98	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					黒褐色	灰褐色	

図36　A区第９C層出土遺物実測図(4)



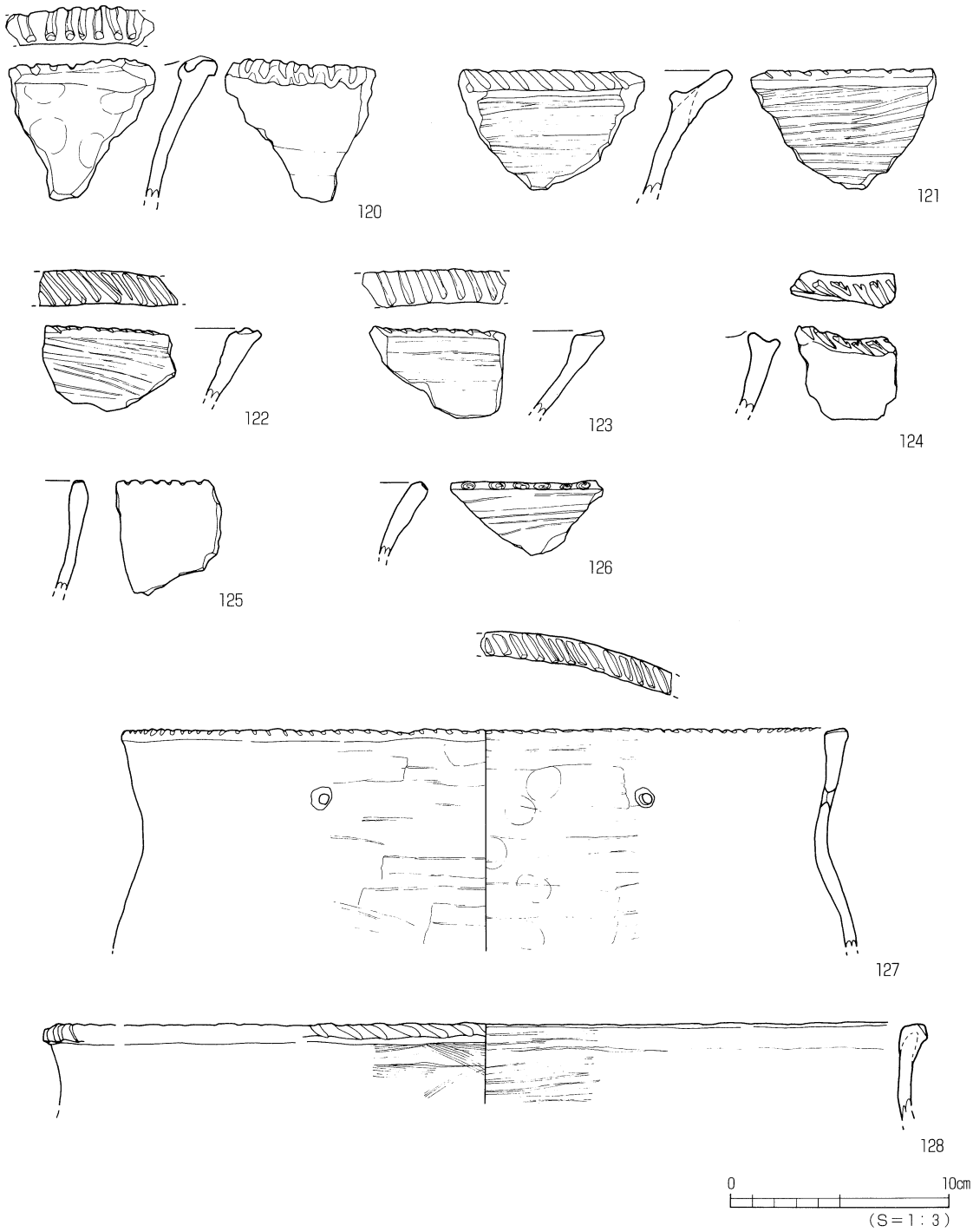
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
99	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					灰褐色	淡灰褐色	
100	深鉢	条痕→ナデ。	巻き貝条痕。					淡灰褐色	淡灰褐色	
101	深鉢	不明。	条痕。					黄褐色	黄褐色	頸部穿孔。
102	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					黒褐色	淡灰褐色	
103	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					黒褐色	淡灰褐色	
104	深鉢	巻き貝条痕。	条痕→ナデ。					灰白色	灰白色	
105	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					灰褐色	淡灰褐色	
106	深鉢	条痕→ナデ。	巻き貝条痕。					灰褐色	灰褐色	
107	深鉢	マメツ。	巻き貝条痕。					淡橙色	淡橙色	
108	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					黒色	黒灰色	
109	深鉢	口：ケズリ。頸：条痕。	ナデ。					黒褐色	黒褐色	
110	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					灰褐色	灰褐色	雲母混入。

図37　A区第９C層出土遺物実測図(5)



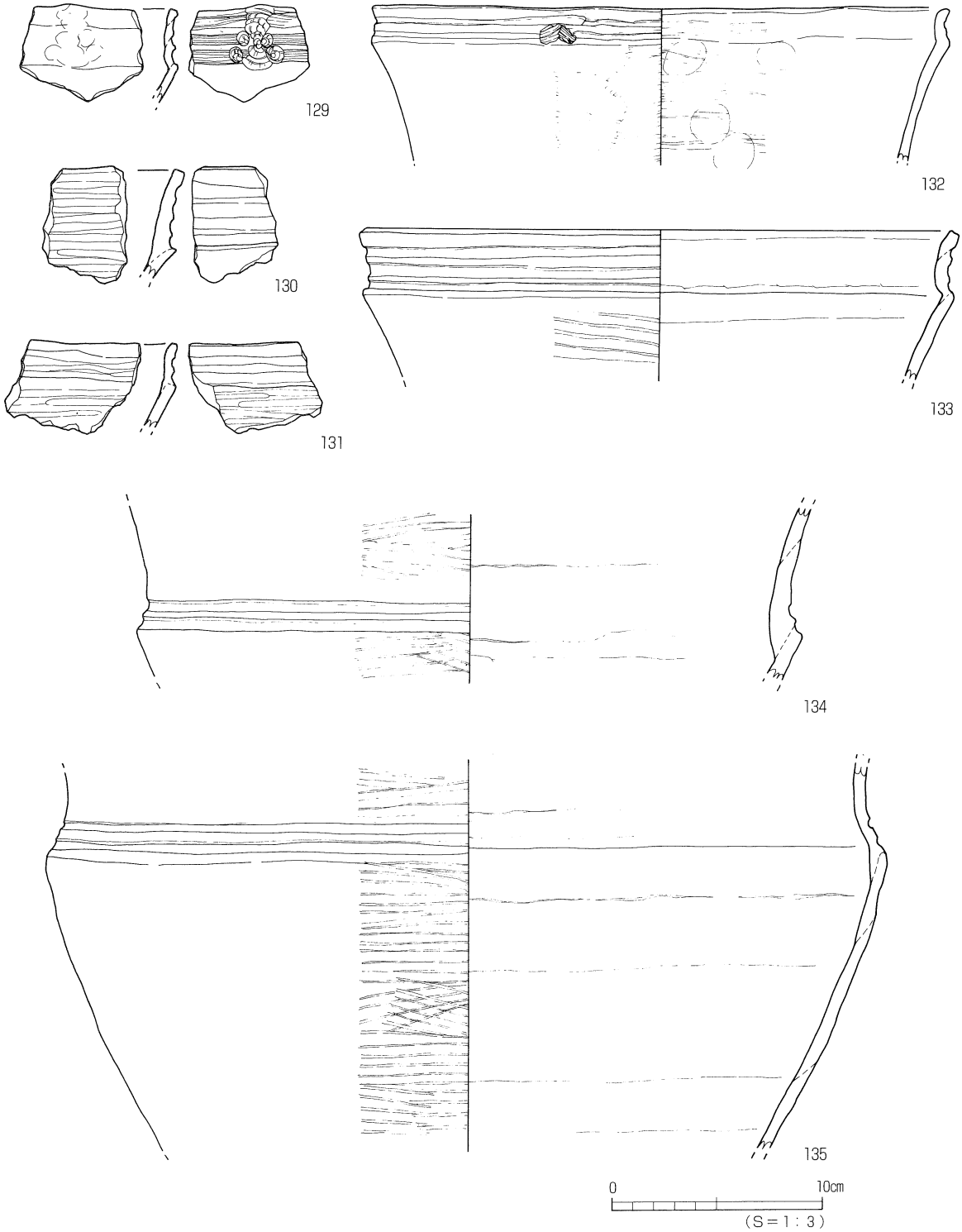
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
111	深鉢	巻き貝条痕→ナデ。	巻き貝条痕→ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
112	深鉢	巻き貝条痕→ナデ。	巻き貝条痕。					淡灰褐色	淡灰褐色	
113	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					淡灰褐色	淡灰褐色	口縁穿孔。
114	深鉢	条痕マメツ。	巻き貝条痕。					淡橙褐色	淡橙褐色	
115	深鉢	条痕。	条痕。					淡灰褐色	淡黄褐色	
116	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕→ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
117	深鉢	巻き貝条痕。	ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
118	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					灰白色	灰白色	
119	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					淡灰褐色	淡灰褐色	

図38　A区第９C層出土遺物実測図(6)



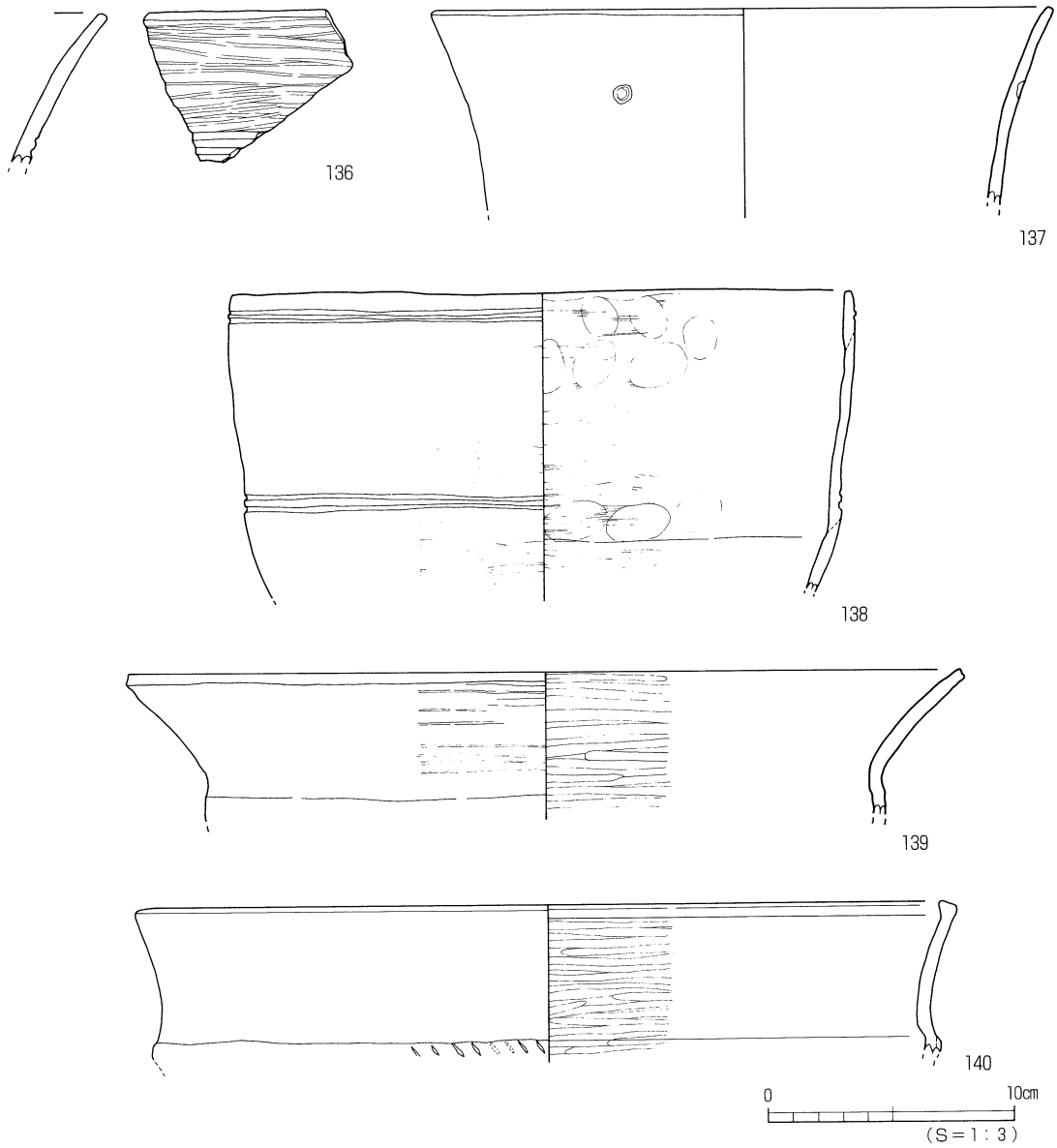
挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
120	深鉢	マメツ。	ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
121	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕→ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
122	深鉢	条痕。	条痕。					淡灰褐色	淡灰褐色	
123	深鉢	条痕。	条痕。					淡黄色	淡黄色	
124	深鉢	条痕→ナデ。	ナデ。					淡褐色	淡褐色	口端面貝押文。
125	深鉢	マメツ。	巻き貝条痕→ナデ。					淡褐色	淡橙色	
126	深鉢	巻き貝条痕。	マメツ。					黄灰色	黄灰色	口端面貝押文。
127	深鉢	ケズリ→ナデ。	ケズリ→ナデ。					淡黄灰色	淡黄色	頸部穿孔。
128	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					淡灰褐色	淡灰褐色	

図39　A区第９C層出土遺物実測図(7)



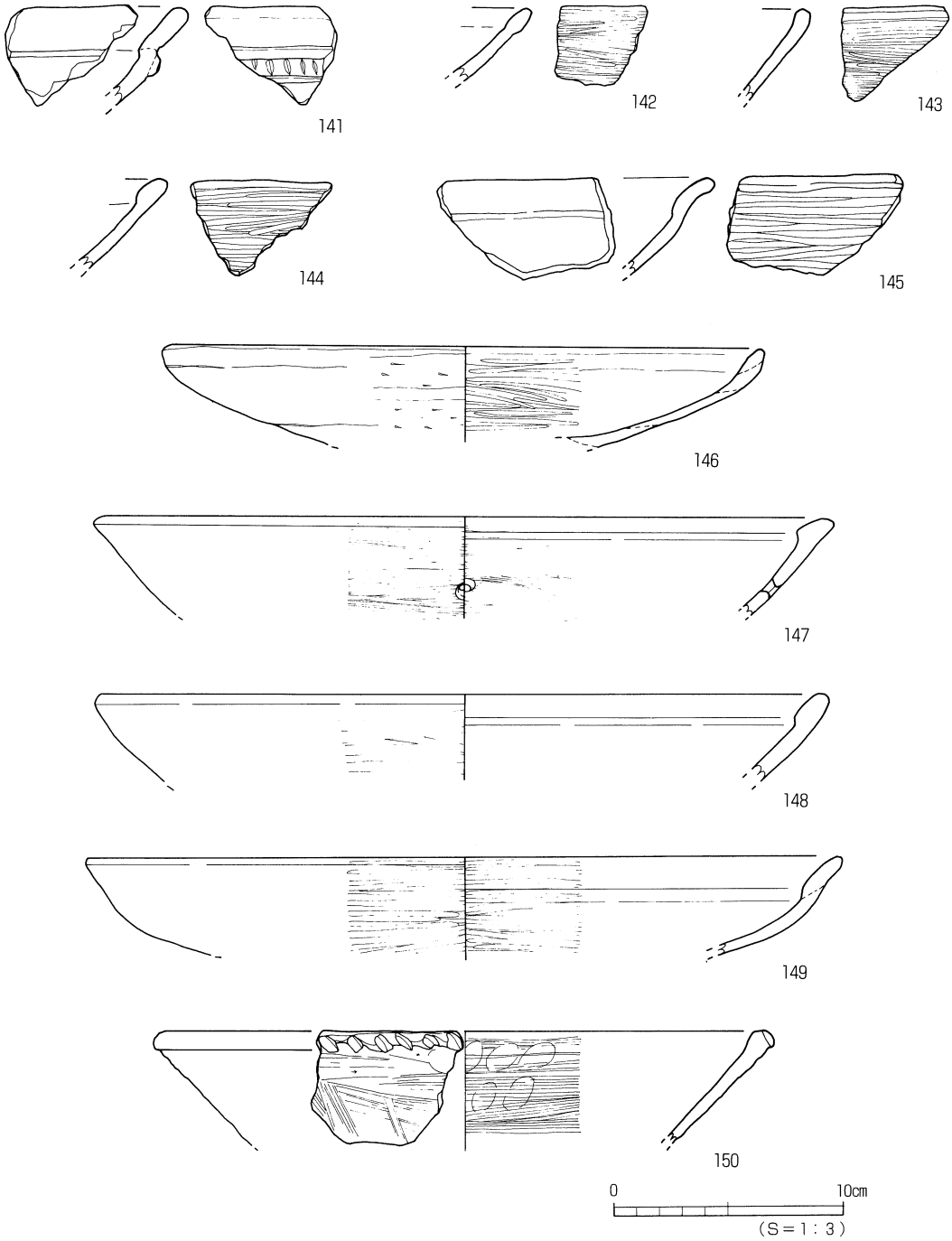
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
129	深鉢	ナデ。巻き貝凹線押圧文。	巻き貝条痕。					暗褐色	黒褐色	口縁外面煤付着。
130	深鉢	巻き貝条痕。	ナデ。					黒色	黒色	
131	深鉢	条痕→ナデ。	巻き貝条痕→ナデ。					黒色	灰褐色	
132	深鉢	ナデ。巻き貝凹線押圧文。	ナデ。					黒褐色	黒褐色	口縁淡灰褐色。
133	深鉢	ミガキ。	ミガキ。					黒色	黒色	
134	深鉢	不明。	巻き貝条痕→ナデ。					褐色	黒色	胴 外面煤付着。
135	深鉢	条痕→ナデ。	ナデ。					黒色	黒褐色	

図40　A区第９C層出土遺物実測図(8)



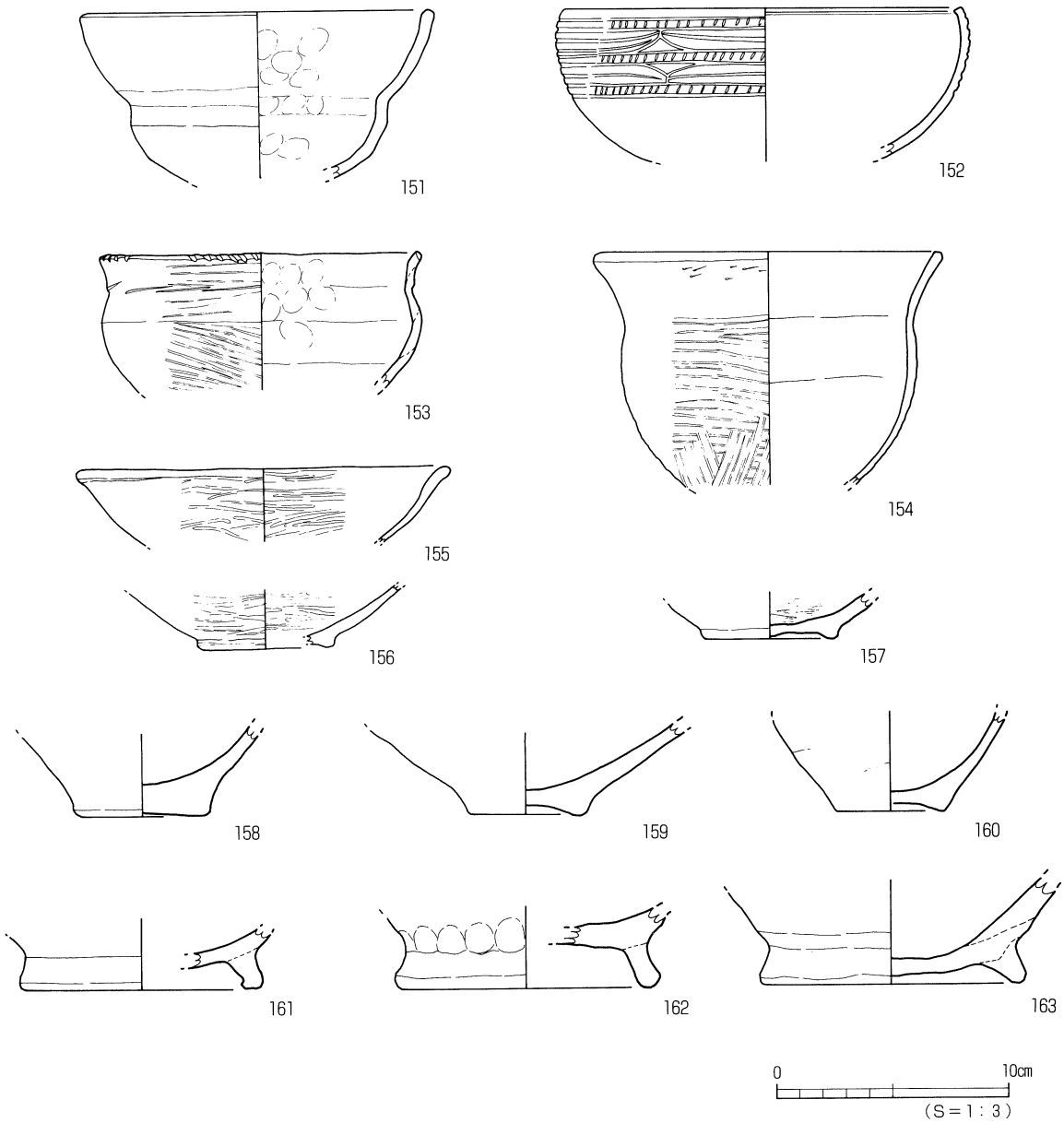
挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
136	深鉢	条痕→ミガキ。頸：沈線。	ミガキ。	面				褐色	褐色	
137	深鉢	条痕？	条痕。	面				黒褐色	黒褐色	頸部穿孔（未完通）。
138	深鉢	ケズリ→ナデ。口・胴：2本沈線。	ケズリ→ナデ。	面				黒褐色	暗茶褐色	口縁外面煤付着。
139	深鉢	条痕→ナデ。	条痕→ナデ。	面				淡褐色	褐色	口縁外面煤付着。
140	深鉢	条痕→ミガキ。	条痕→ミガキ。	面				褐色	橙褐色	

図41　A区第9C層出土遺物実測図(9)



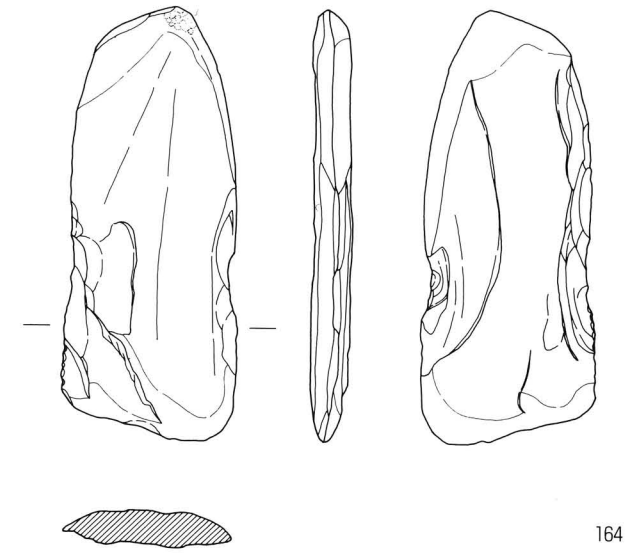
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
141	浅鉢	条痕→ナデ。	ナデ。					橙褐色	橙褐色	
142	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。					黒色	黒色	
143	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。					灰色	黒色	
144	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
145	浅鉢	条痕→ナデ。	条痕→ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
146	浅鉢	巻き貝条痕→ナデ。	巻き貝条痕→ナデ。					黒褐色	暗灰褐色	口縁外面朱付着。
147	浅鉢	巻き貝条痕→ナデ。	ミガキ。					黒褐色	黒褐色	胴部穿孔。
148	浅鉢	ミガキ。	ナデ。					淡褐色	淡灰褐色	
149	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。					淡灰褐色	淡黄褐色	
150	浅鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕→ナデ。		楕円			灰色	灰色	

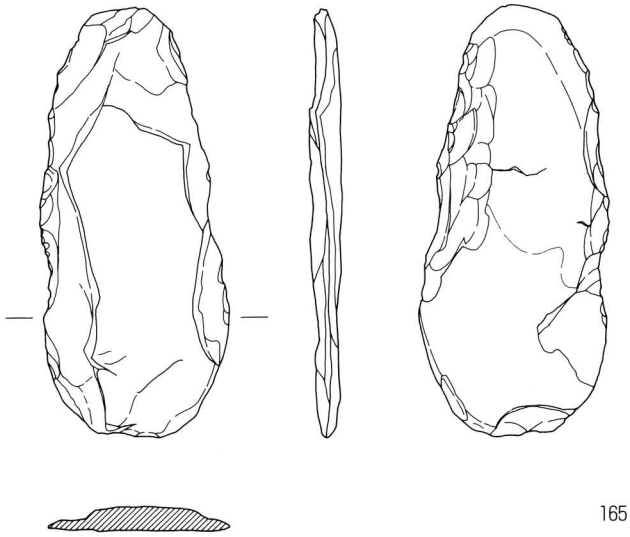
図42　A区第９C層出土遺物実測図(10)

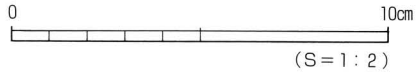


挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
151	浅鉢	ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	雲母混入。
152	浅鉢	ミガキ。櫂原式文様。	ミガキ。					黒色	黒色	雲母混入。
153	浅鉢	条痕。	巻き貝条痕。					淡灰褐色	淡灰褐色	雲母混入。
154	浅鉢	口：ナデ。胴：二枚貝条痕。	ナデ。					灰褐色	褐色	
155	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。					灰褐色	灰褐色	
156	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。					灰褐色	灰褐色	
157	浅鉢	ナデ。	巻き貝条痕。					淡灰褐色	淡灰褐色	
158	深鉢	ナデ。	巻き貝条痕。					黒色	黄褐色	
159	深鉢	ナデ。(ミガキ？)	ナデ。					橙褐色	橙色	
160	深鉢	ナデ。	ナデ。					褐色	黒褐色	
161	深鉢	ナデ。	巻き貝条痕。					黒褐色	淡灰褐色	
162	深鉢	ナデ。	ナデ。					黄灰色	黄灰色	
163	深鉢	胴：マメツ。底：ナデ。	ナデ。					灰白色	灰白色	

図43　A区第９C層出土遺物実測図(11)

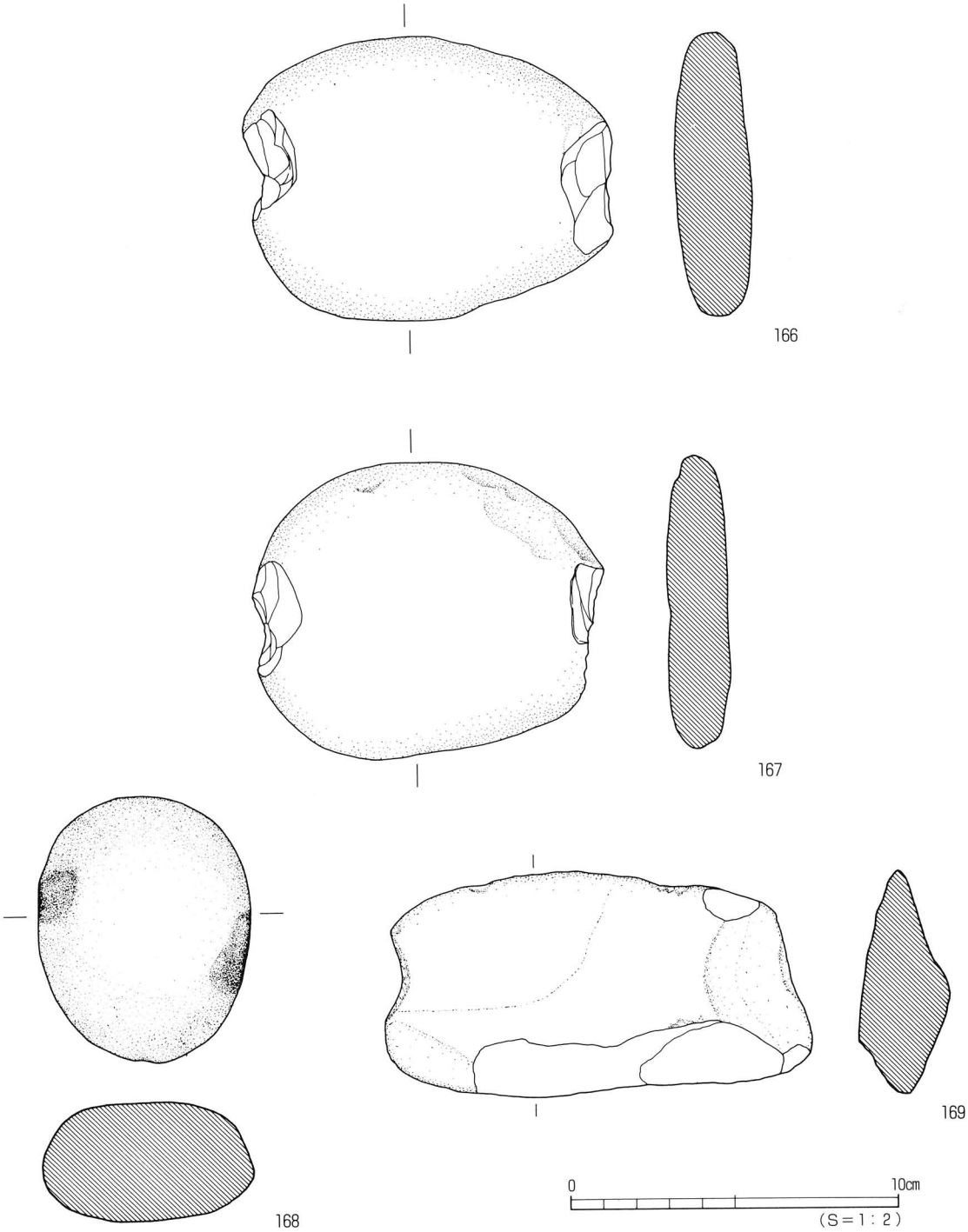






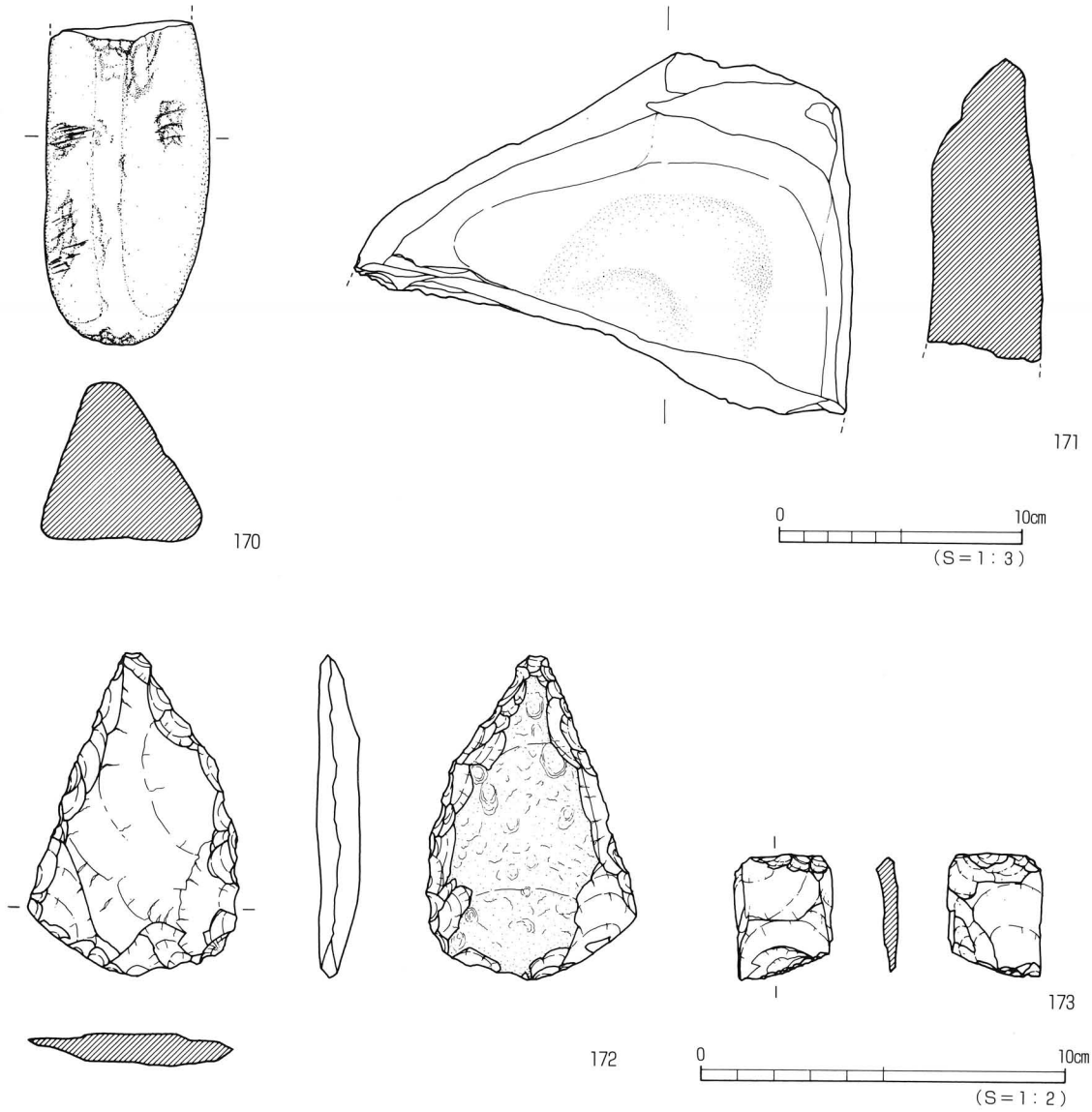
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
164	打製石斧	緑色片岩	完形	11.5	4.6	1.0	90.0	
165	打製石斧	緑色片岩	完形	11.2	5.0	0.8	76.0	

図44　A区第９C層出土遺物実測図(12)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
166	石錘	緑泥片岩	完形	11.3	8.7	2.3	394.0	
167	石錘	緑泥片岩	完形	10.7	8.9	1.8	339.0	
168	石錘	砂岩	完形	8.0	6.3	3.6	274.0	
169	石錘	砂岩	完形	13.1	6.9	2.9	310.0	

図45　A区第９C層出土遺物実測図(13)



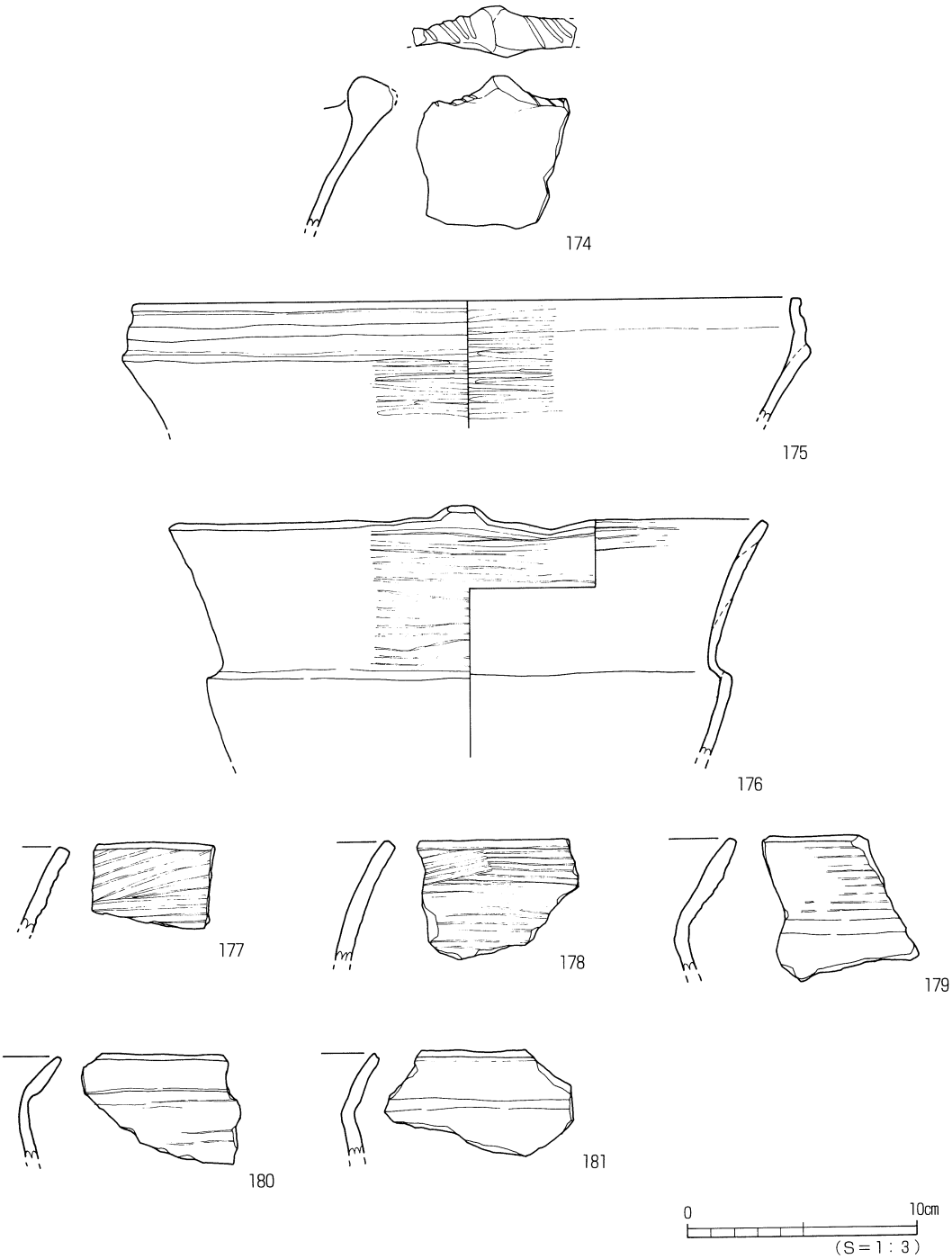
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
170	敲石	砂岩	欠損	(13.0)	7.0	(6.3)	764.0	
171	台石	緑泥片岩	欠損	(14.0)	(20.4)	(4.8)	2020.0	
172	スクレイパー	サヌカイト	完形	8.8	5.6	0.8	54.3	
173	スクレイパー	サヌカイト	完形	3.4	2.6	0.4	7.1	

図46　A区第９C層出土遺物実測図(14)

② 第９A層出土遺物（図47～52）

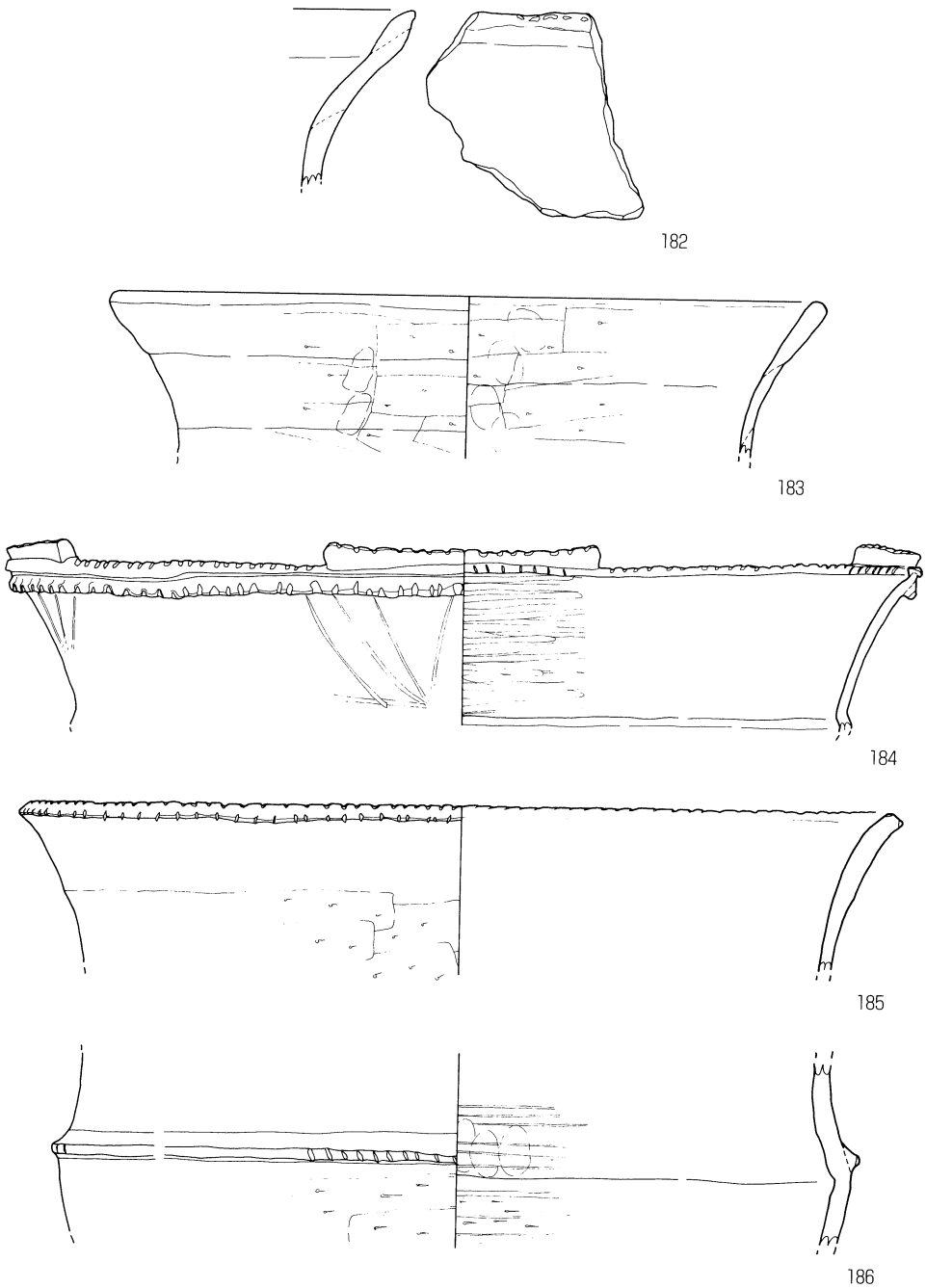
腐蝕質の粘土および無遺物の砂層９B層を介して９C層の上位に存在する砂層で、９C層と同様縄文時代後期から晩期の遺物を包含しているが、後期の遺物が少ない点、晩期後半突帯文を含む点で９C層とは異なっている。後期の土器としては、174・175の深鉢２点がある。175は９C層で一定量出土し、図40にまとめられた一群と同様、口縁部外面に巻き貝凹線文を施される後期後葉から末の深鉢である。また、小片であるため確定的ではないが、193も後期の粗製浅鉢と思われる。

晩期の深鉢では、中葉から後葉の突帯文に至るまでの資料がある。184は口縁部に鰭状突起と刻み目突帯を併せ持つもので、内面に肥厚した口端部端面や突起の上端面も突帯と同様の工具で刻まれて



挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
174	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	V字形			淡灰褐色	淡灰褐色	
175	深鉢	ミガキ。	ミガキ。	面				黒褐色	黒褐色	巻き貝による凹線。
176	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕→ナデ。	面				黒褐色	黒褐色	方形突起。
177	深鉢	二枚貝条痕。	ナデ。	面				淡灰褐色	淡灰褐色	
178	深鉢	巻き貝条痕。	ナデ。	面				黒褐色	淡灰褐色	
179	深鉢	巻き貝条痕。	ミガキ。	面				黒褐色	淡黄褐色	口縁外面煤付着。
180	深鉢	巻き貝条痕。	ナデ。	面				灰褐色	黒褐色	口縁外面煤付着。
181	深鉢	巻き貝条痕。	ナデ。	面				灰褐色	黒褐色	口縁外面煤付着。

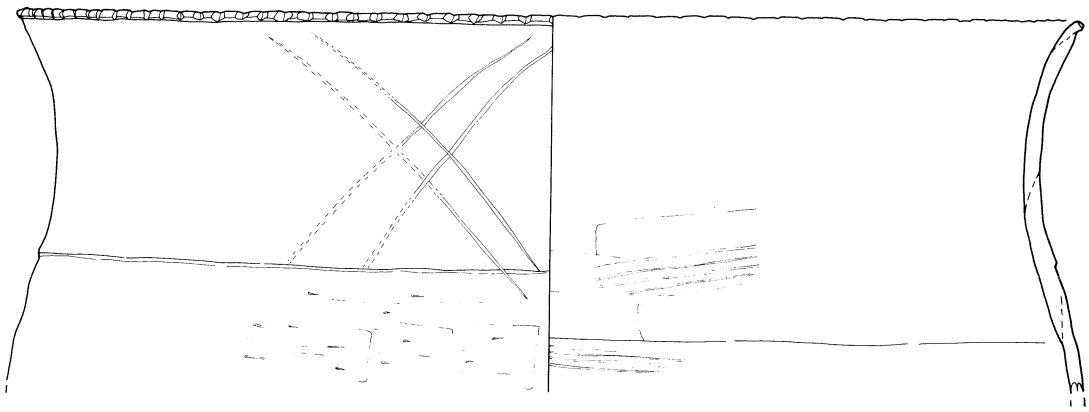
図47　A区第9A層出土遺物実測図(1)



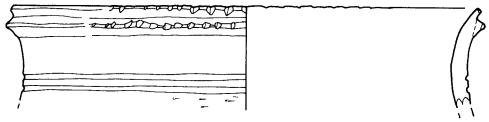
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
182	深鉢	ナデ。	ナデ。	尖	刺突			淡褐色	淡褐色	
183	深鉢	条痕→ナデ。	条痕→ナデ。	丸				淡褐色	淡褐色	
184	深鉢	ケズリ→ナデ。	ミガキ。	丸	細長形	台形	細長形	黒褐色	黒色	ヒレ条突起。頸部施文。
185	深鉢	ケズリ→ナデ。	ナデ。	面	D字形			黒色	淡黄褐色	
186	深鉢	頸：条痕→ナデ。胴：ケズリ。	巻き貝条痕→ナデ。			台形	小D字形	黒色	淡黄褐色	

図48　A区第9A層出土遺物実測図(2)

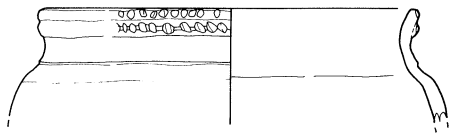
いる。また、頸部下位には横方向の沈線、この沈線と突帯間に3本単位の沈線による施文が行われている。内外面ともに磨かれており、浅鉢になる可能性もある。185の粗製深鉢の口端部内外面には刻み目が施されている。186は頸胴部の境に幅広の突帯を持ち、この突帯を刻まれているが、所謂二条突帯深鉢ではなく、瀬戸内谷尻式併行、当地では船ケ谷遺跡で多くみられる深鉢と考えられる。187は頸部のX字状文と口端部刻み目を持つもので、外面撫での頸部と削りの胴部との境に段がある。突帯を持つものには188～192がある。いずれも突帯、口端部ともに刻み目を持つもので、口端部全面というよりも口端部の外面を刻まれるものが多く、また188～190のような頸部が短い器型のものがある。188の頸部の横方向2本沈線は異例といえる。



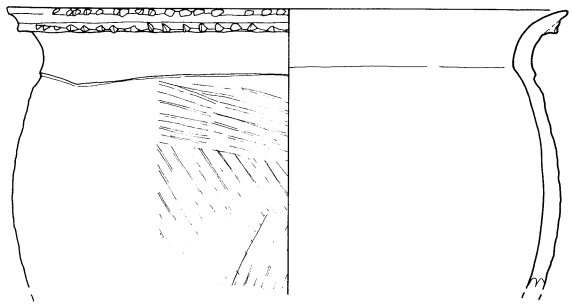
187



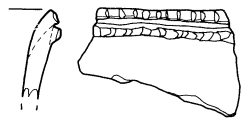
188



189



190



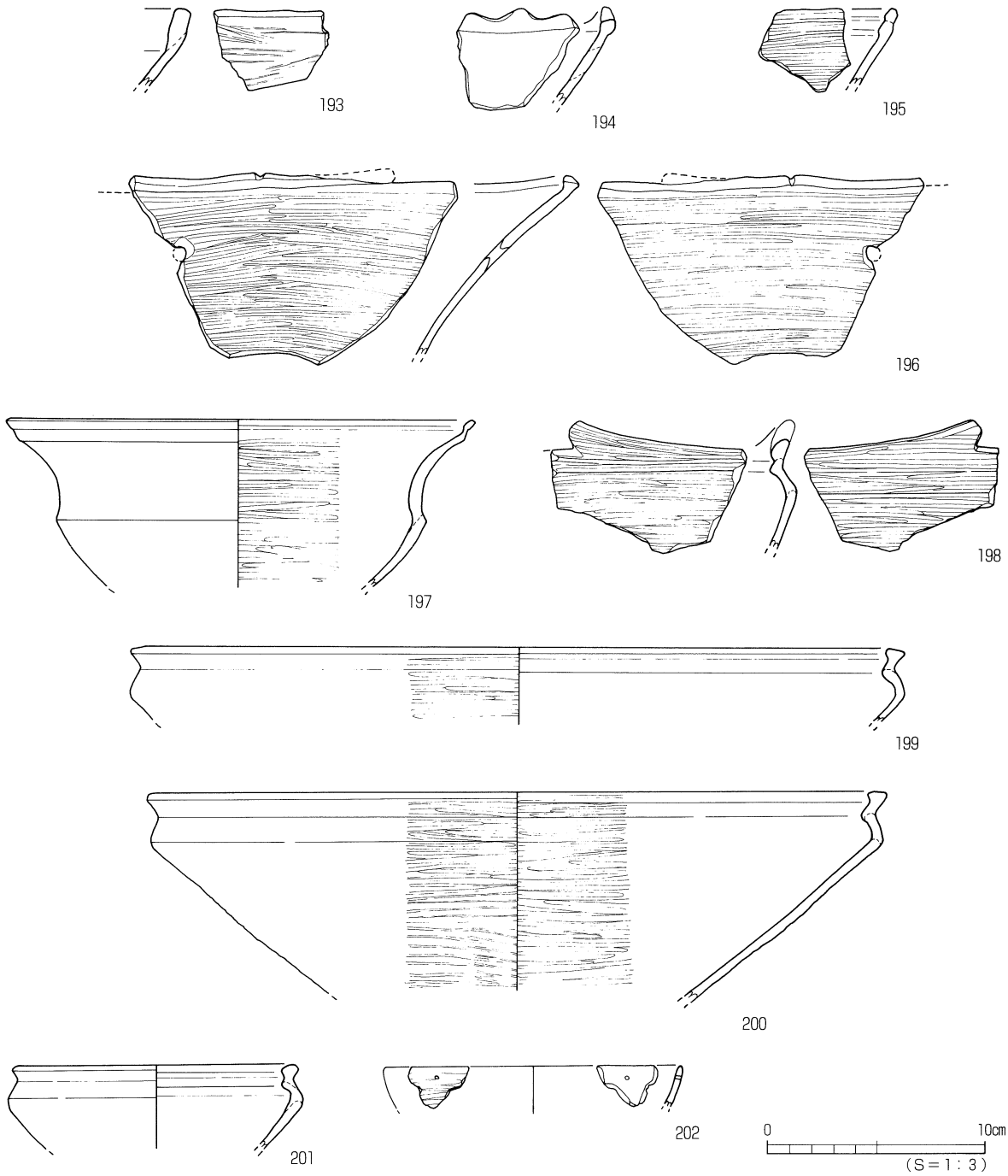
191

192

0　10cm
(S＝1：3)

挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
187	深鉢	頸：ケズリ→ナデ。胴：ケズリ。	巻き貝条痕→ナデ。	面	D字形			黒褐色	灰褐色	頸部施文外面煤付着。
188	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	丸	D字形	三角形	D字形	黒褐色	黒褐色	頸胴界沈線2条。
189	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	D字形	半円形	D字形	黒褐色	黒褐色	胴外面煤付着。
190	深鉢	口～頸：ナデ。胴：条痕。	ナデ。	やや尖	D字形	三角形	D字形	黒褐色	黒褐色	口～胴外面煤付着。
191	深鉢	巻き貝条痕→ナデ。	ナデ。	丸	D字形	台形	D字形	黒褐色	淡褐色	口縁胴外面煤付着。
192	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形	三角形	D字形	淡灰褐色	灰褐色	頸部施文。

図49　A区第9A層出土遺物実測図(3)

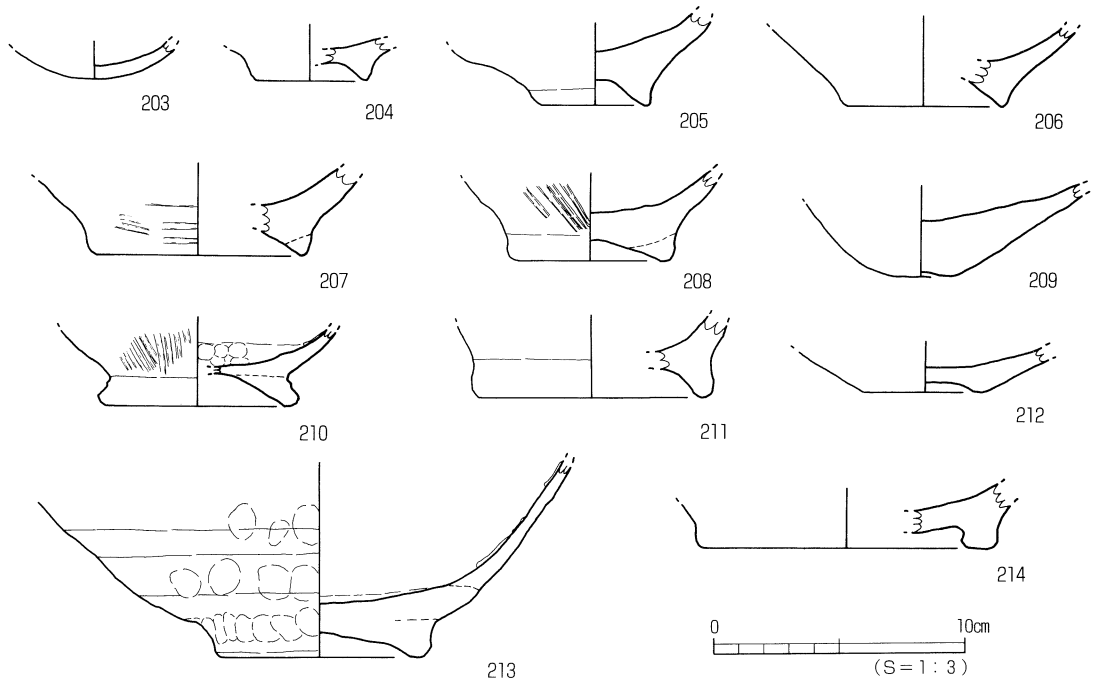


挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
193	浅鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。	面				淡黄褐色	淡黄褐色	
194	浅鉢	ケズリ→ナデ。	ミガキ。	面				淡灰褐色	淡褐色	
195	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸				淡灰褐色	淡灰褐色	
196	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	面				黒褐色	黒褐色	ヒレ状突起。口縁穿孔。
197	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	面				黒色	黒褐色	口縁内外面抉り。
198	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	鍵形				黒褐色	黒褐色	ヒレ状突起。
199	浅鉢	ミガキ。	マメツ。	鍵形				褐色	黒褐色	
200	浅鉢	口：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	ミガキ。	鍵形				褐色	黒褐色	
201	浅鉢	マメツ。	マメツ。	鍵形				灰白色	灰白色	
202	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸				黒色	黒色	朱付着。口縁穿孔。

図50　A区第9A層出土遺物実測図(4)

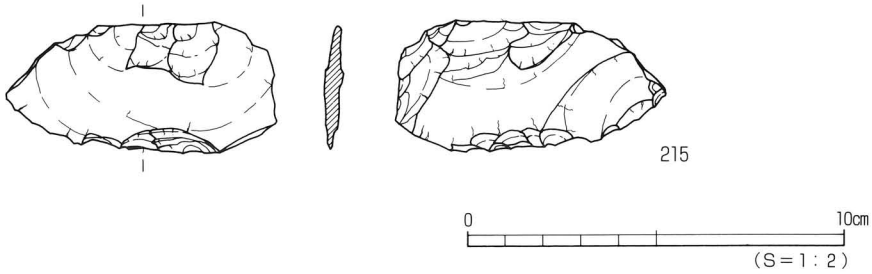
晩期の浅鉢にも前半から中葉のものがある。197は胴部から稜を介して頸部が大きく外反するもので、外上方に立ち上がった口縁部は内外に肥厚される。九州古閑式、近畿滋賀里Ⅲａ式に併行するものである。196は長い頸部が外反気味に外上方に開くもので、口端部には内面に肥厚した低いリボン状の突起が付されるものである。突起以外の部分の端部は生きていないので定かではないが、内面肥厚するのは突起部分のみのようである。九州黒川式、瀬戸内谷尻式併行のものか。その他、口縁部で二段に屈曲して口端部を内面に玉縁状に肥厚する195や198～201があり、198のように鰭状突起を持つものもある。形態的には２とおりあって、200のように底部付近まで単純にすぼまるもの、この層では確認できないが、二段屈曲部以下が頸部として一旦外反して胴部が張った後、底部まですぼまるものとがある。いずれの場合も口縁部あるいは口頸部の外面が磨かれ、胴部以下に条痕調整が施される。したがって、199のような口縁部のみの破片では器型の判断がつかないことが多い。これらも大きな意味で黒川式、谷尻式の範疇に入り、当地方では船ケ谷式として理解されている浅鉢の一群である。なお、202のような椀形態のものの出土もある。

底部は図51に示した。203は晩期椀形態の浅鉢底部。その他は深鉢と考えられるが、後晩期の区別ができない。その他サヌカイトのスクレイパーの出土がある。



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
203	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
204	深鉢	ナデ。	マメツ。					黒褐色	黒色	外底炭化物付着。
205	深鉢	ナデ。	工具によるナデ。					黒灰色	黒灰色	胎土粗い。
206	深鉢	ナデ。	ナデ。					灰褐色	橙色	
207	深鉢	条痕？→ナデ。	ナデ。					褐色	淡橙褐色	内底炭化物付着。
208	深鉢	胴：ケズリ。底：ナデ。	ナデ。					淡黄褐色	淡黄褐色	
209	深鉢	ケズリ。	ナデ。					灰褐色	橙褐色	
210	深鉢	胴：二枚貝条痕。底：ナデ。	不明。					黒色	橙褐色	内底炭化物付着。
211	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰褐色	橙色	
212	深鉢	ミガキ。	ナデ。					淡褐色	褐色	
213	深鉢	ナデ。	ミガキ？					褐色	橙灰色	
214	深鉢	ナデ。	ナデ。					褐色	淡褐色	

図51　Ａ区第９Ａ層出土遺物実測図(5)



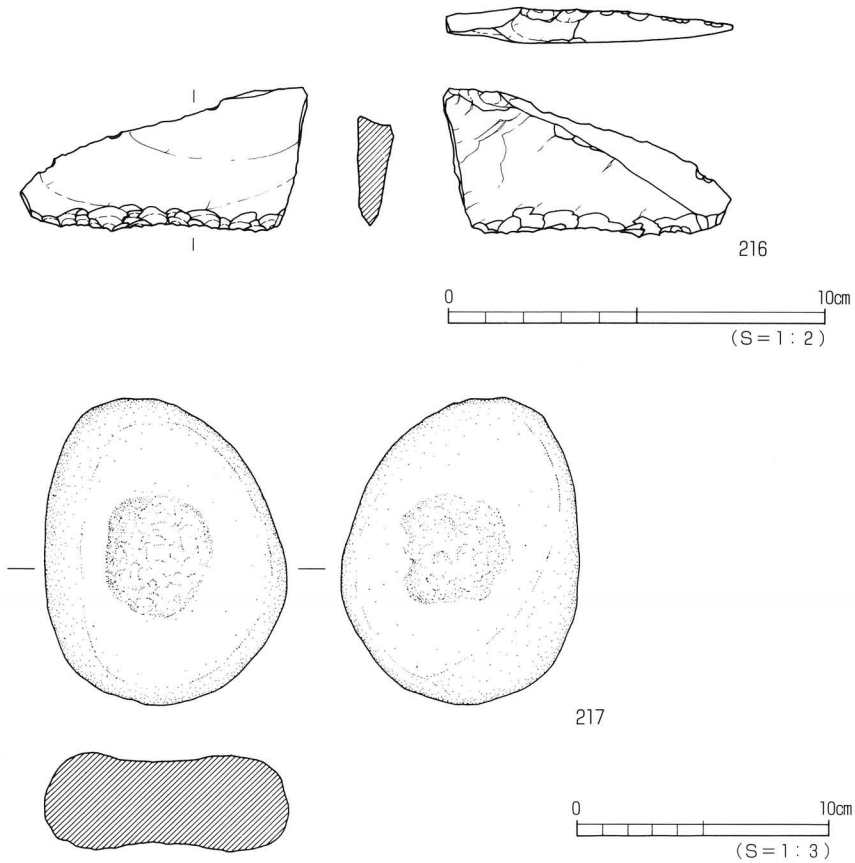
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
215	スクレイパー	サヌカイト		3.3	7.0	0.5	18.4	

図52　A区第9A層出土遺物実測図(6)

③ 第9層出土遺物（図53～55）

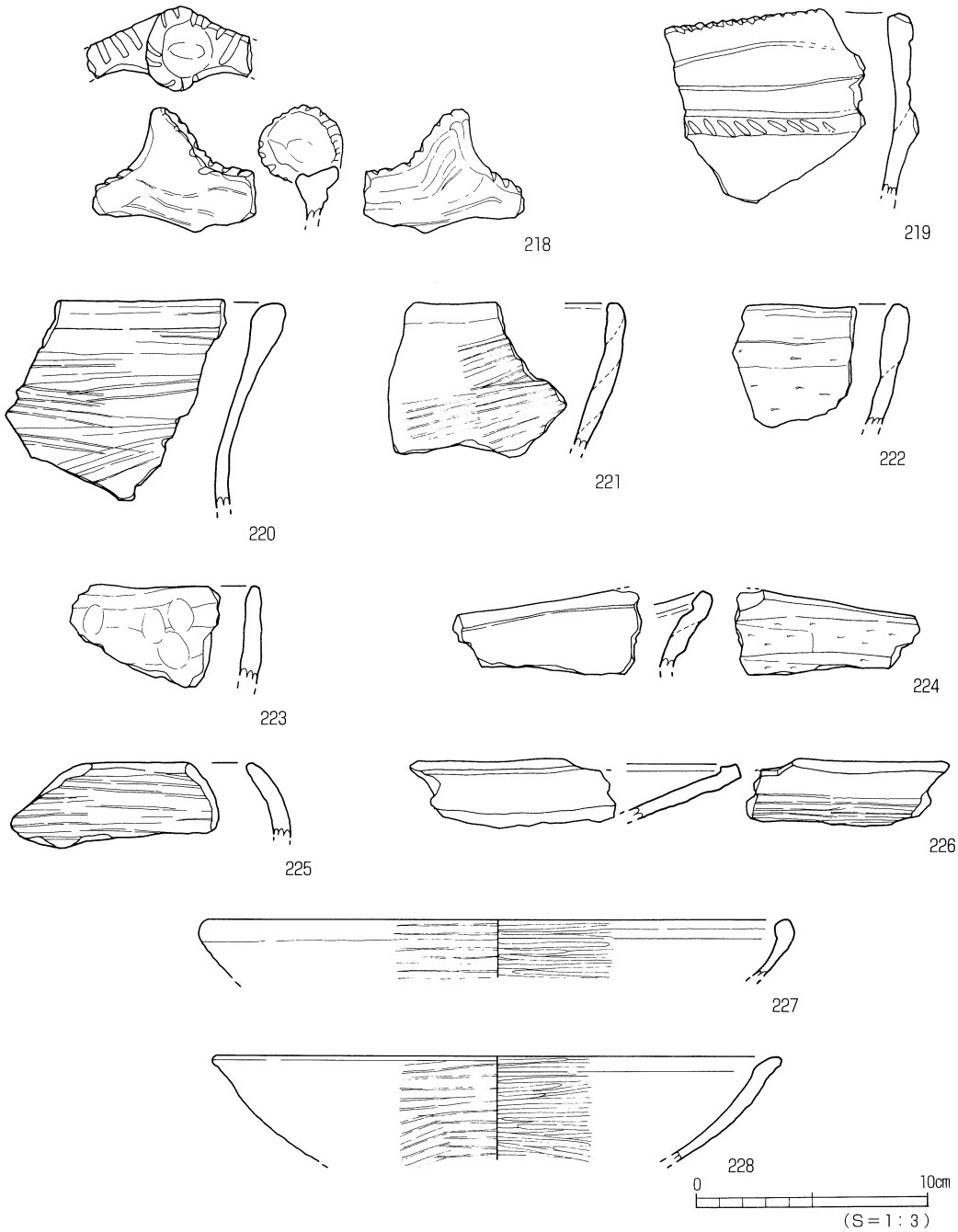
第9層出土ではあるが、採り上げ時の湧水などのために詳細な所属層位が不明になった遺物がある。これらを第9層出土遺物として一括して取り扱う。

図54には後期と考えられるものを示した。218～225の深鉢のうち、218は瘤状突起と口端部刻み目を持つ粗製のもの、その他も無文粗製のものが多いが、219は波状口縁で、口端面や口縁をやや下が



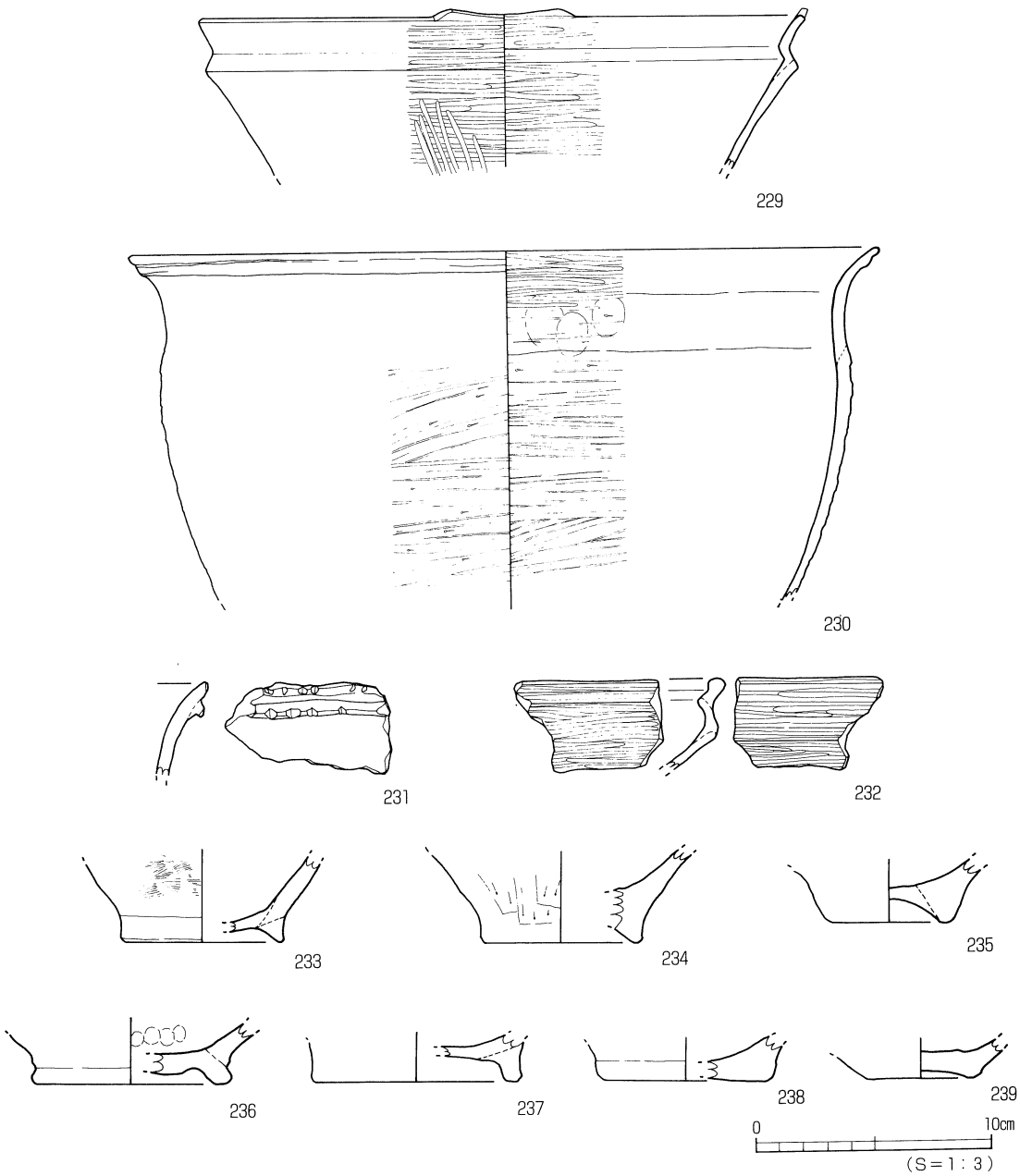
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
216	スクレイパー	サヌカイト		3.7	7.5	0.9	25.2	
217	窪み石	砂岩	完形	12.1	9.6	3.8	785.0	

図53　A区第9層出土遺物実測図(1)



挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
218	深鉢	条痕。	ナデ。					橙褐色	橙褐色	
219	深鉢	マメツ。	マメツ。					灰白色	桃灰色	
220	深鉢	条痕。	条痕。					灰褐色	灰褐色	
221	深鉢	条痕。	条痕。					黒褐色	灰褐色	
222	深鉢	ケズリ。	ケズリ→ナデ。					灰褐色	灰褐色	
223	深鉢	巻き貝条痕→ナデ。	ナデ。					灰色	灰橙色	
224	深鉢	ケズリ。	ナデ。					灰褐色	黒褐色	雲母多含。
225	深鉢	条痕→ナデ。	条痕。					黒褐色	暗褐色	
226	浅鉢	二枚貝条痕。	ナデ。					黒色	黒褐色	
227	浅鉢	条痕→ナデ。	巻き貝条痕→ナデ。					灰褐色	灰色	口縁炭化物付着。
228	浅鉢	条痕。	ミガキ。					淡黄色	淡黄色	

図54　A区第9層出土遺物実測図(2)



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
229	深鉢	ミガキ。	ミガキ。	面				黒色	橙褐色	ヒレ状突起。
230	深鉢	口：ナデ。胴：巻き貝条痕。	口：ミガキ。胴：条痕→ナデ。	面				黒褐色	黒褐色	外口～胴 炭化物付着。
231	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形	台形	D字形	黒褐色	橙褐色	
232	深鉢	ミガキ。	ミガキ。	鍵形				黒褐色	黒褐色	
233	浅鉢	外：ハケ。底：ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
234	深鉢	ケズリ。	ナデ。					黄褐色	灰褐色	
235	深鉢	外：ケズリ。底：ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
236	深鉢	ナデ。	ナデ。					灰褐色	灰褐色	
237	深鉢	ナデ。	ナデ。					褐色	橙色	
238	深鉢	ナデ。	マメツ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
239	深鉢	ナデ。	工具によるナデ。					黒褐色	橙褐色	内底 炭化物付着。

図55　A区第9層出土遺物実測図(3)

った位置の薄い隆帯上を刻まれる。また、この隆帯と口端部との間に３本の横位の沈線を施されている。摩滅のため定かでないが、沈線間に縄文は施されていないようである。後期中頃のものか。浅鉢と考えたものは226～228の、いずれも外面に条痕を残すものの、内面を磨きあるいは入念に撫でられているものである。

晩期の遺物は図55に示されている。229は浅鉢、内外面ともに磨かれ、口端部には鰭状の突起を持つ。晩期中葉の浅鉢である。230も晩期中葉の深鉢、短く外反する口頸部は入念に撫でられ、頸部の強い撫でにより、口縁部外面には稜を持った薄い膨らみがある。この口頸部や内面の入念な撫でに対して、胴部外面は横方向の条痕をそのまま残している。その他、突帯文深鉢片231や所謂船ケ谷式の浅鉢片232の出土がある。

石製品にはサヌカイト製のスクレイパーや砂岩の窪み石がある。

④ 第８～９層出土遺物（図56）

基本的に第８層も９層も砂であるので、出土遺物のなかには８・９層の区別ができなかったものがあるのでここで扱う。240～247が後期と考えられるもの、240は縁帯文波状口縁深鉢の片で、幅広の沈線による区画文や波頂部から蛇行状に垂下する巻き貝殻頂による刺突文を施されている。241は内外方に拡張した口縁端面に棒状工具による１条の沈線と刻み目を組み合わせた施文を施されている。その他粗製のもののうち、242には貫通した補修孔のほか穿孔途中で放棄された窪みがある。皿状の浅鉢245・246はいずれも口縁内面に粘土帯を貼り付け、外面は条痕を残すが内面は磨きで仕上げられている。247は頸部の屈曲部に巻き貝殻頂の押し引きによる刻み目を施されている。

晩期の遺物は249・250の２点、いずれも小片である。249は壺の胴張り部と考えられる破片で、外面には朱彩が施されている。250は深鉢口縁部の破片で、面取りした口端部に刻み目、頸部沈線施文を持つものである。

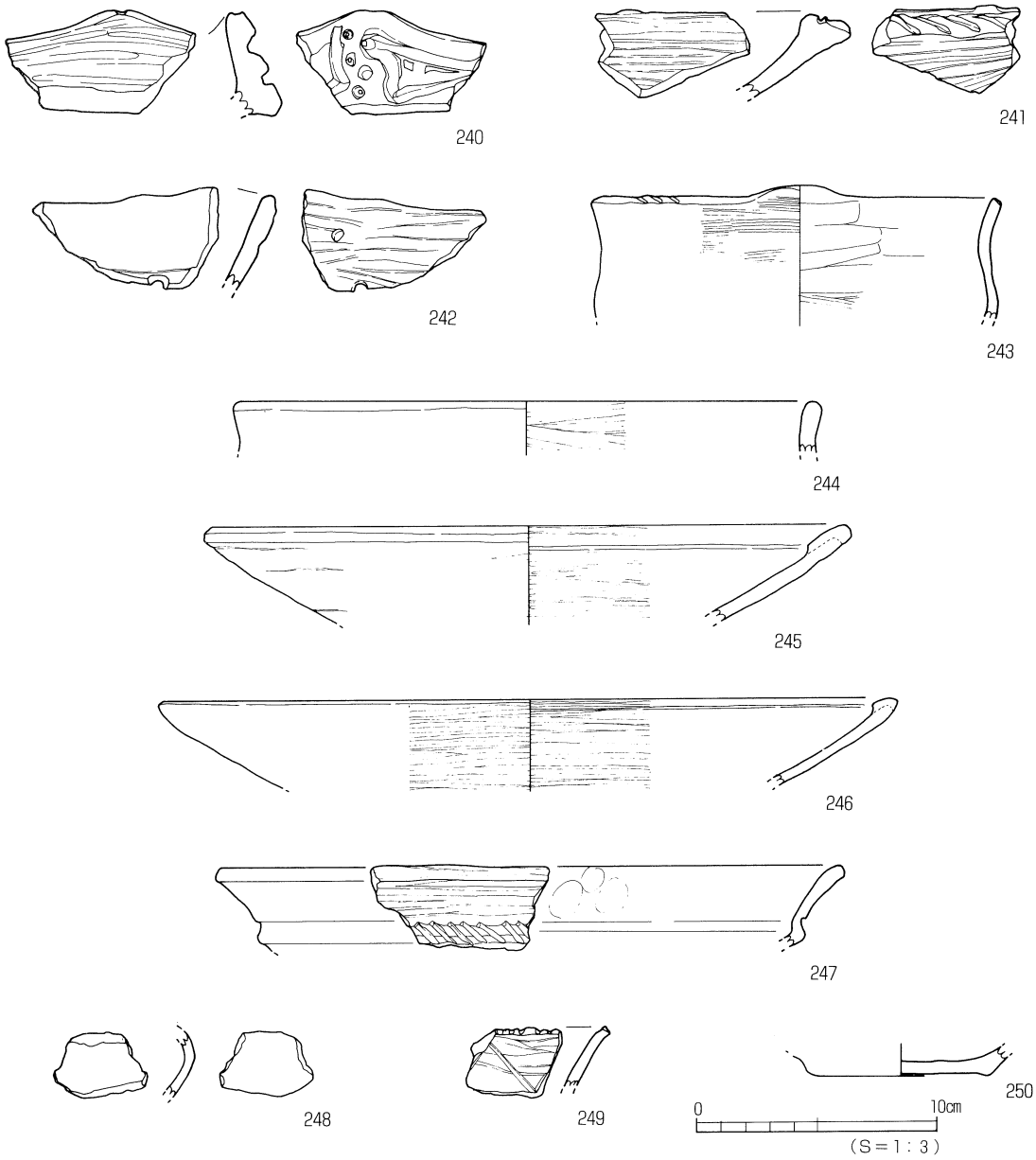
⑤ 第８層出土遺物（図57～66）

この層でも下層と同様に縄文後期中葉から晩期の遺物が混在しているが、晩期後半突帯文深鉢の比率が高くなったり、逆「く」の字口縁の浅鉢が出土するところが９層と異なる点である。

後期の深鉢には粗製のものが多く、251のように瘤状突起を持っていたり、258のような波状口縁のものなどもあるが、大抵の場合口端面に刻み目を施されている。また、254・260の口縁直下に施された刺突列点文は巻き貝殻頂を用いたものである。有文のものには縁帯文系の259や、直口縁の261などがあるが、どちらも沈線による施文のみで縄文は施されない。

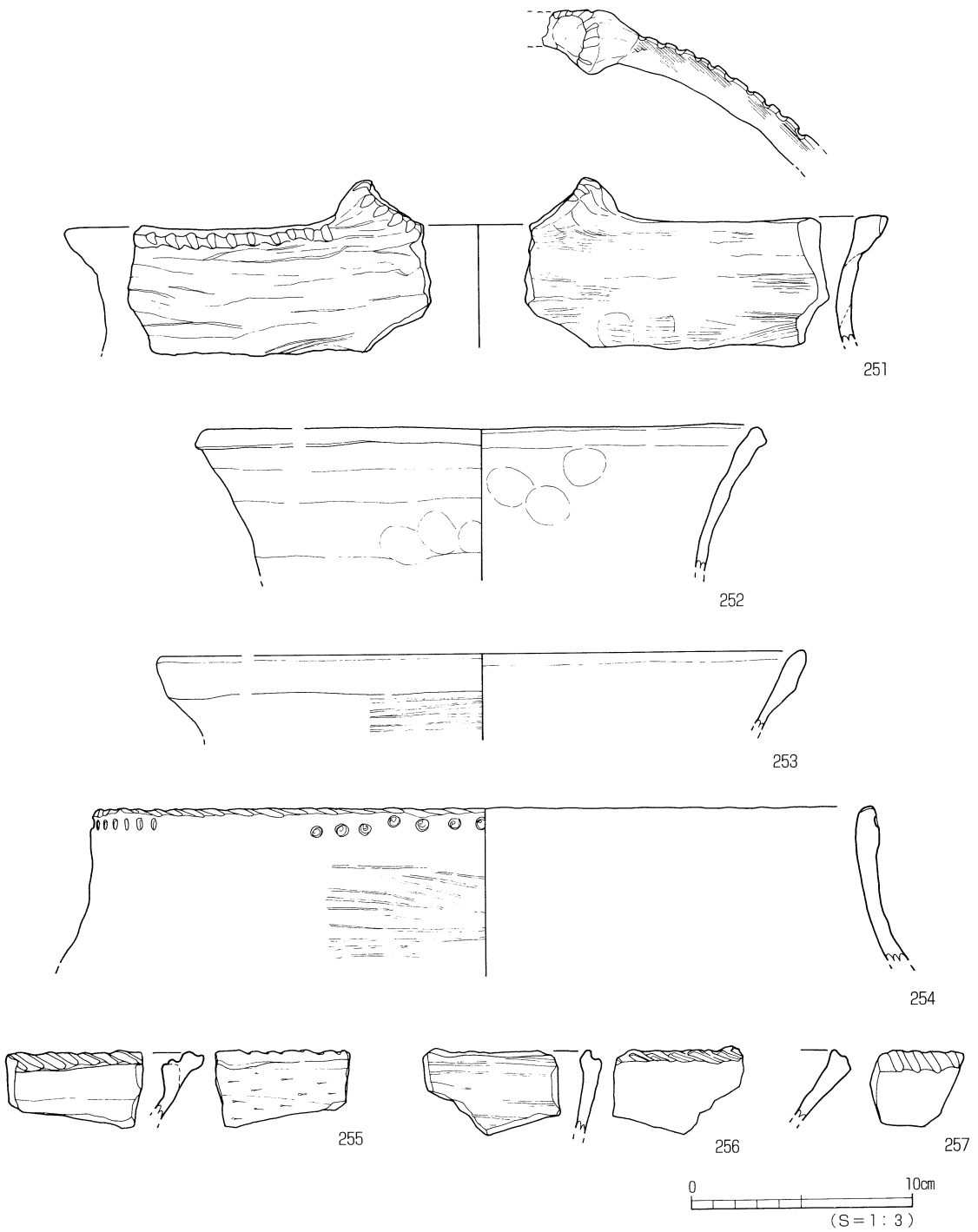
266・267の胴部片２点は晩期前半と考えられるもので、胴部で稜あるいは段を持って屈曲し長い頸部が上方あるいは外上方に立ち上がる形態である。266では頸部に縦方向の細沈線による施文が確認できる。

図59には主に晩期後半、突帯文深鉢の一群を載せている。形態的には外反して開く口縁部をやや下がった位置に突帯が貼り付けられ、突帯と口端部に刻み目を施すものがほとんどであるが、稀に275のように口端部・突帯ともに刻まれないものがある。口縁部形状は水平のものと波状を呈するものとがあり、波状口縁の277では口縁部内面に沈線が巡っている。また、この277や270では頸部に沈線による施文が行われている。口端部は程度の大小はあれ面を持っており、端面を刻まれる場合が多いが、



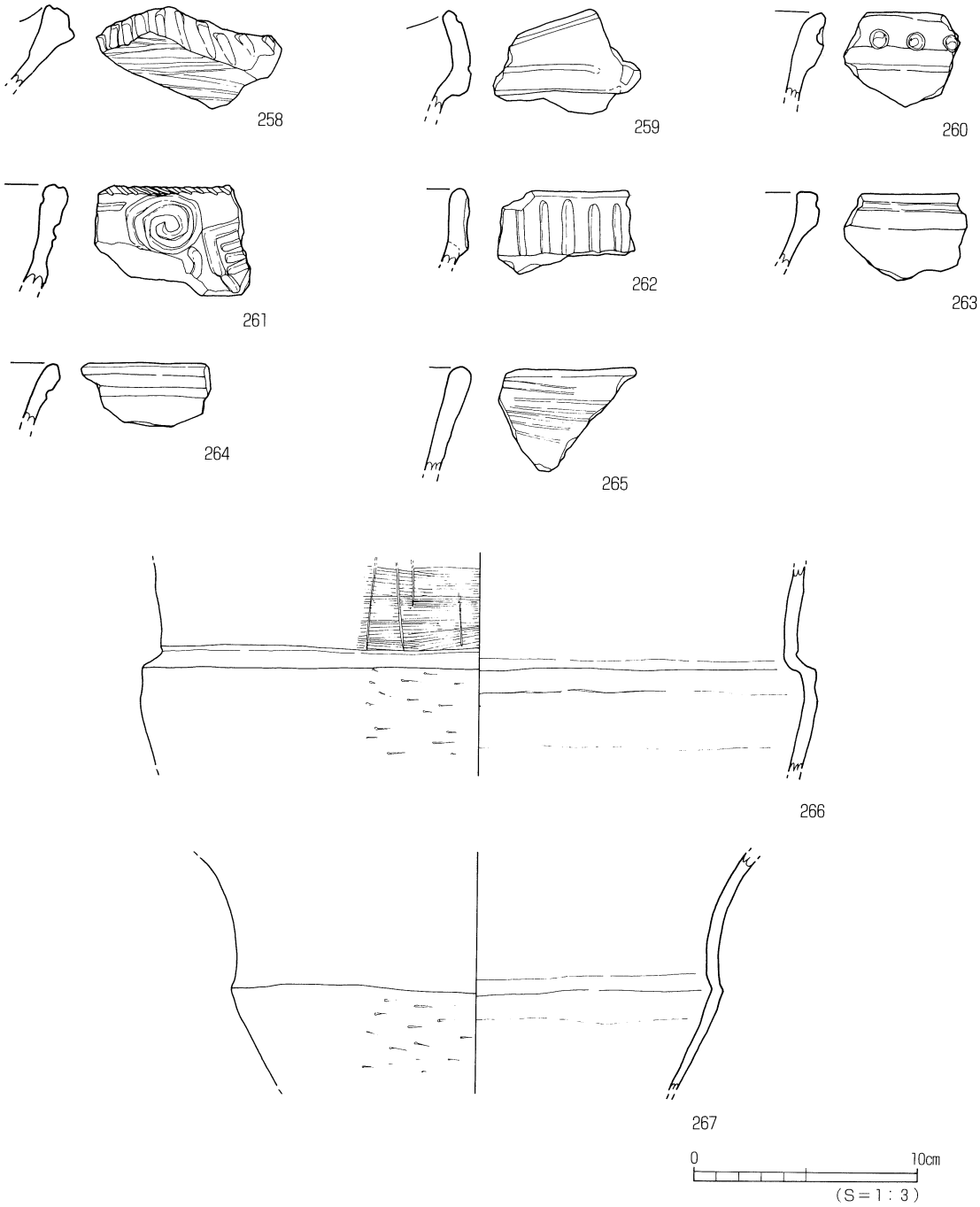
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
240	深鉢	条痕→ナデ。	ミガキ。					灰褐色	灰褐色	
241	深鉢	巻き貝条痕。	条痕→ナデ。					灰褐色	灰褐色	
242	深鉢	巻き貝条痕。	ナデ。					灰褐色	灰褐色	
243	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。					淡黄色	淡黄色	
244	深鉢	口：縄痕。	巻き貝条痕→ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
245	浅鉢	ケズリ→ナデ。	ミガキ。					黒褐色	黒褐色	
246	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。					淡橙色	灰白色	
247	浅鉢•	条痕→ナデ。	ナデ。					黒褐色	黒褐色	
248	壺	マメツ。	マメツ。					淡褐色	赤褐色	外 丹塗り。
249	深鉢	条痕→ナデ。	ナデ。	面	米粒形			黒褐色	橙灰色	頸部施文。
250	浅鉢	ナデ。	ミガキ。					黒褐色	淡橙色	

図56　A区第8～9層出土遺物実測図



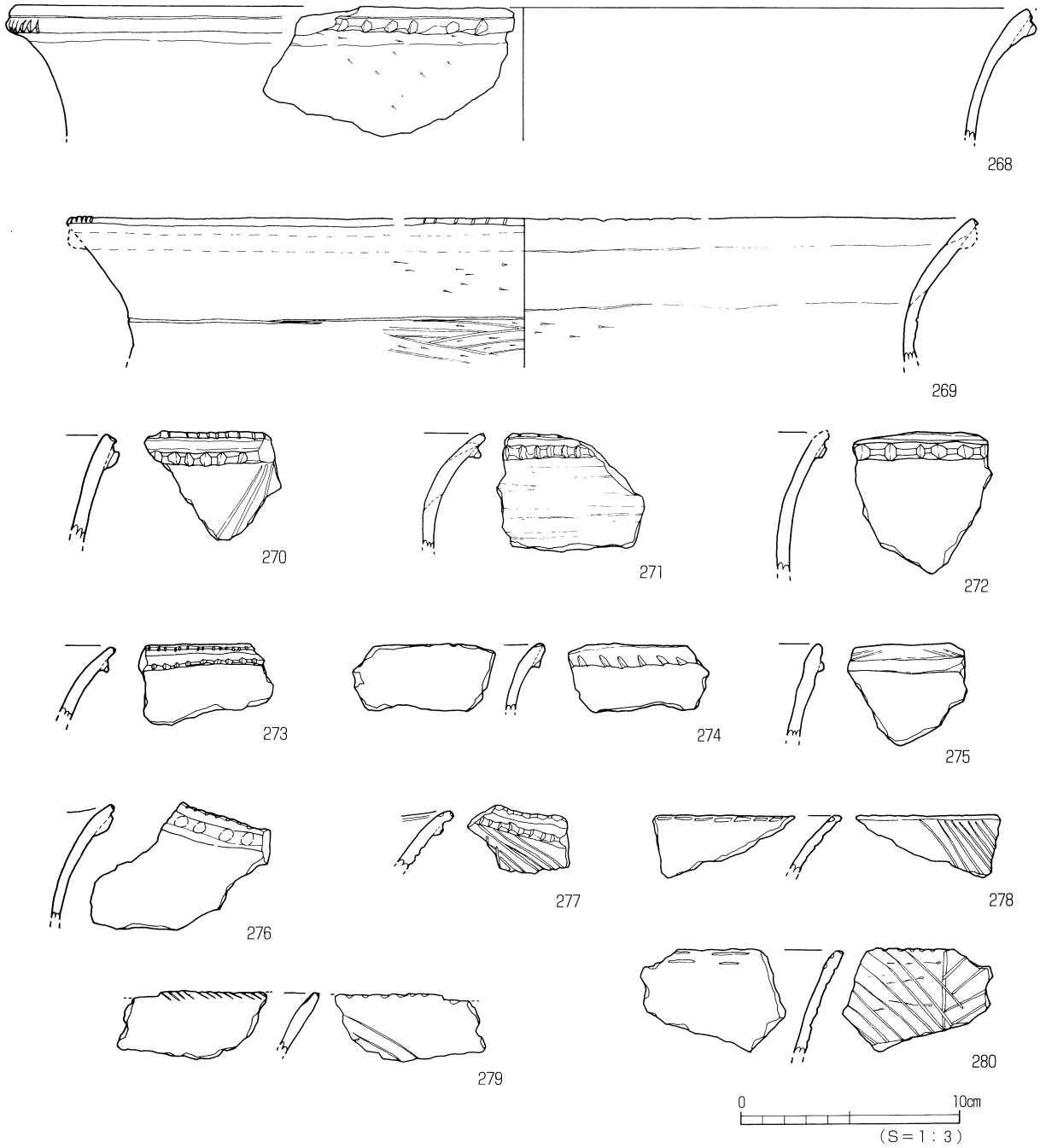
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
251	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕→ナデ。					灰褐色	灰褐色	
252	深鉢	ナデ。	ナデ。					橙褐色	灰褐色	
253	深鉢	条痕。	マメツ。					淡灰色	淡灰色	
254	深鉢	条痕→ナデ。	ナデ。					黒色	淡橙褐色	口縁外面巻き貝刺突。
255	深鉢	巻き貝条痕。	ナデ。					黒色	黒灰色	
256	深鉢	条痕→ナデ。	条痕。					黒色	黒灰色	
257	深鉢	マメツ。	条痕。					灰褐色	灰褐色	

図57　A区第8層出土遺物実測図(1)



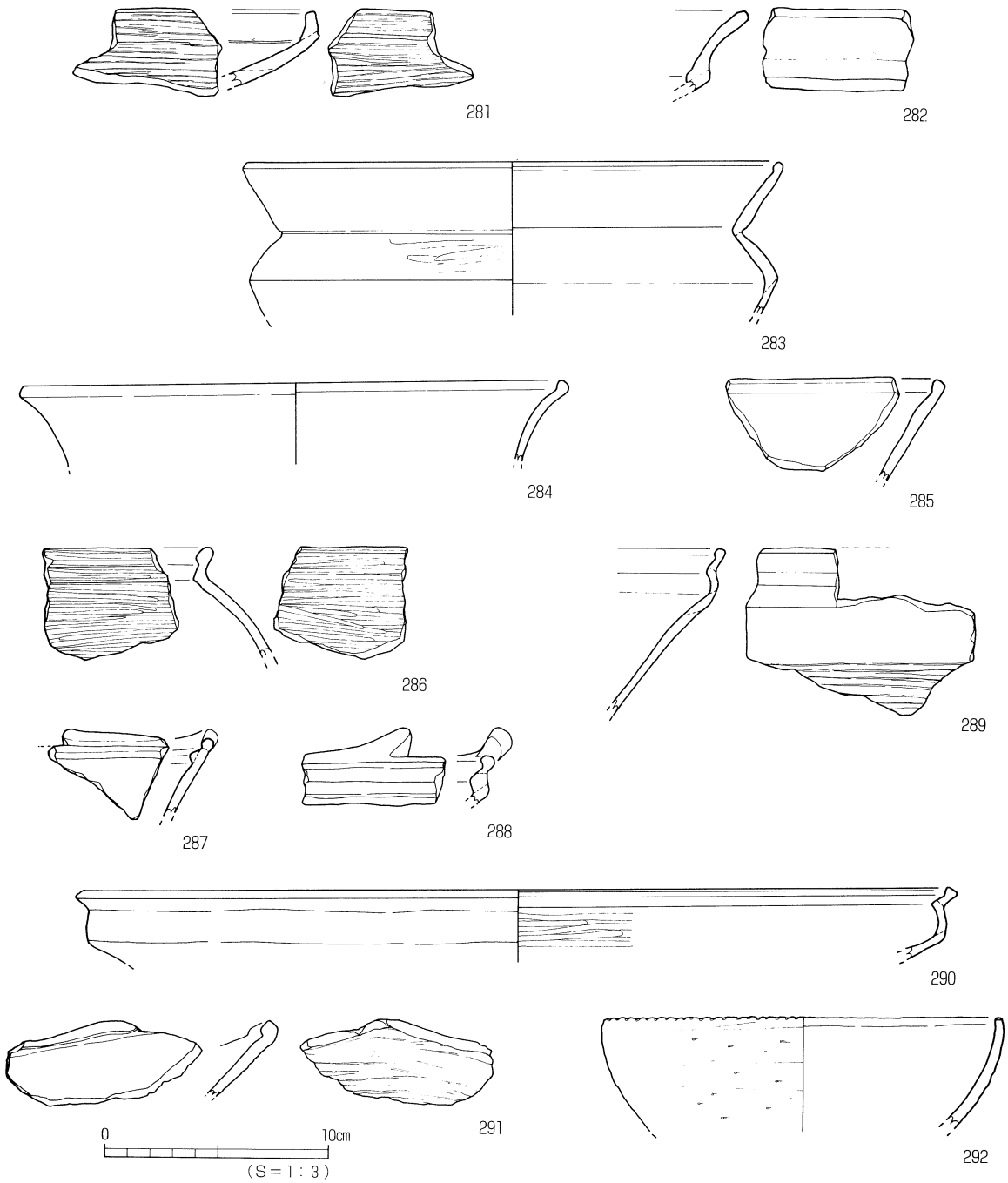
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
258	深鉢	条痕。	条痕。					淡黄褐色	淡黄褐色	
259	深鉢	マメツ。	条痕→ナデ。					淡黄褐色	灰色	
260	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰褐色	淡黄褐色	巻き貝による押圧痕。
261	深鉢	マメツ。	条痕→ナデ。					淡桃褐色	淡黄褐色	
262	深鉢	ナデ。	条痕→ナデ。					淡灰褐色	灰褐色	
263	深鉢	マメツ。	ナデ。					淡黄褐色	淡黄褐色	
264	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰色	淡灰色	
265	深鉢	条痕→ナデ。	条痕→ナデ。					淡黄褐色	淡黄褐色	
266	深鉢	巻き貝条痕。	ナデ。					黒褐色	黒褐色	胎土雲母多し。
267	深鉢	頸：ナデ。胴：巻き貝条痕。	条痕→ナデ。					黒褐色	黒褐色	内外煤付着。

図58　A区第8層出土遺物実測図(2)



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
268	深鉢	ケズリ→ナデ。	ナデ。	面	マメツ	台形	D字形	黒色	黒色	
269	深鉢	頸：ケズリ→ナデ。胴：ケズリ。	ケズリ→ナデ。	面	D字形	欠損		黒褐色	暗褐色	
270	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	小D字形	台形	D字形	黒色	淡褐色	頸部施文。
271	深鉢	条痕→ナデ。	ナデ。	面	小D字形	三角形	D字形	黒色	淡灰褐色	
272	深鉢	マメツ。	マメツ。	マメツ	マメツ	台形	D字形	黒色	淡灰褐色	
273	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	小D字形	三角形	D字形	黒色	暗灰褐色	
274	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	D字形	三角形	D字形	黒色	暗褐色	
275	深鉢	条痕→ナデ。	ケズリ→ナデ。	尖		三角形		淡黄褐色	暗褐色	胴外面煤付着。
276	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	D字形	マメツ	マメツ	黒色	橙褐色	
277	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	D字形	台形	D字形	灰褐色	淡褐色	頸部施文。
278	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸				黒色	淡褐色	頸部施文。口縁内面刺突。
279	深鉢	ケズリ→ナデ。	ナデ。	丸	D字形			褐色	褐色	頸部施文。口縁内面刺突。
280	深鉢	ケズリ。	ナデ。	面	D字形			黒褐色	褐色	頸部施文。口縁内面刺突。

図59　A区第8層出土遺物実測図(3)



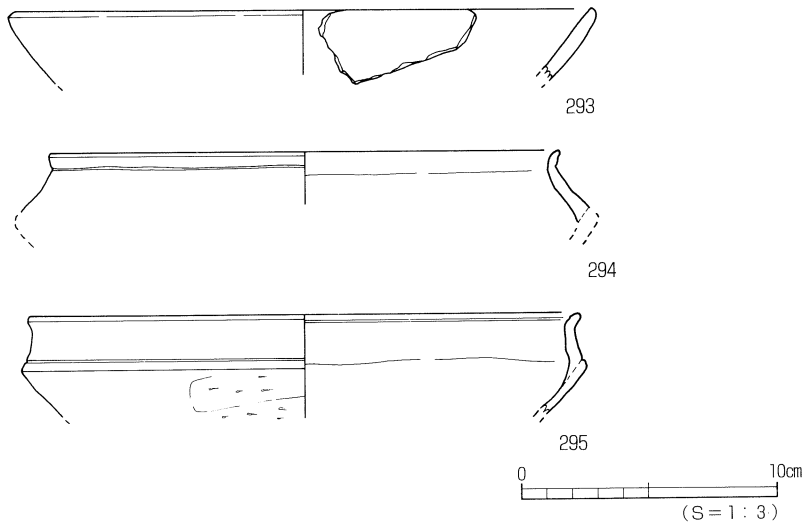
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
281	浅鉢	条痕→ナデ。	巻き貝条痕。	面				黒褐色	黒褐色	
282	浅鉢	ケズリ→ナデ。	ナデ。	面				淡黄褐色	褐色	
283	浅鉢	ミガキ。	マメツ。	丸				暗褐色	暗褐色	
284	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸				黒褐色	褐色	
285	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸				褐色	暗褐色	
286	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸				黒褐色	黒褐色	
287	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸				暗褐色	暗褐色	ヒレ状突起。
288	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	鍵形				暗褐色	暗褐色	ヒレ状突起。
289	浅鉢	上位：ミガキ。下位：条痕。	ミガキ。	鍵形				黒褐色	黒褐色	
290	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	鍵形				暗褐色	暗褐色	
291	浅鉢	二枚貝条痕。	ナデ。	面				灰褐色	橙灰褐色	
292	浅鉢	ケズリ。	ナデ。	面	D字形			褐色	褐色	

図60　A区第8層出土遺物実測図(4)

273のように端面というよりは口端外面を刻まれているといったほうがよいものがある。また、頸部外面は削り、あるいは条痕調整の後撫でられる場合が多い。以上の突帯文深鉢のほか、突帯を持たない有文深鉢がある。いずれも口縁部から頸部に沈線施文をもつもので、ある程度文様構成がわかる280は羽状文のような施文になっている。これらの深鉢口縁内面には刺突などの施文がある。278の内面口端部直下はヘラ状工具による横長の連続刺突文で、端面に刻みはない。他の2点には内面のみならず端面にも刻みを持つ。279の内面は刻みや刺突というよりは斜線文といったほうがよいような施文である。

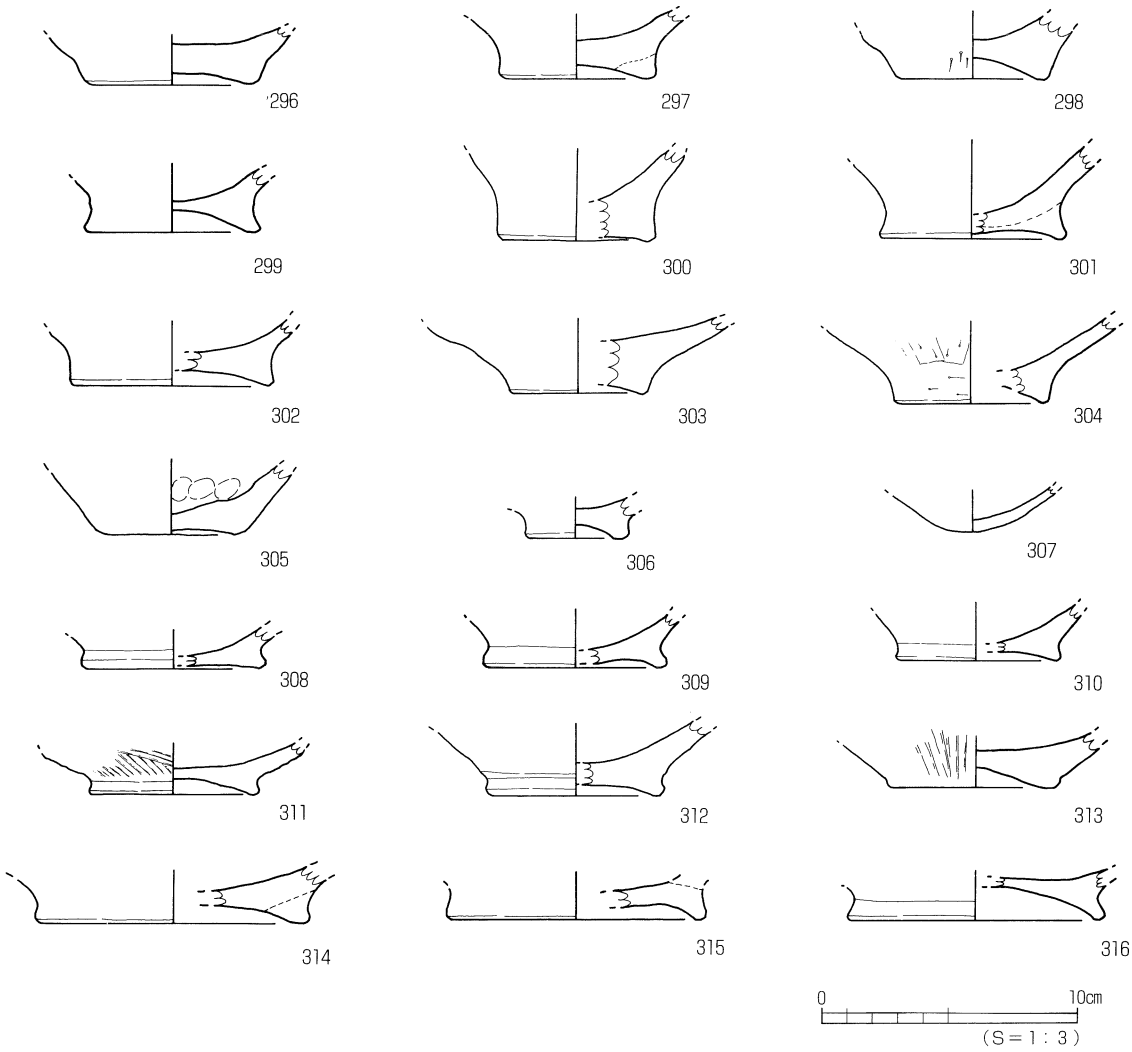
図60・61に示した浅鉢のうち281は後期に属すると考えられるもの、282は晩期前半、その他は晩期中～後半のものである。283～285は張った胴部からやや長いめの頸部が「く」の字状に屈曲して外上方に開き、口端部を内面に丸く肥厚させるもの、286は丸く内面に肥厚した端部を持つ短い口縁部から屈曲して胴部が大きく張るものである。288～290は口縁部が2段に屈曲して、口端部を内面に丸く肥厚する所謂鍵形口縁のもの、289では胴部の条痕が確認できるので、底部に向かって単純にすぼまる器型であることがわかる。290はその屈曲の度合いから、一旦頸部を形成する器型になるものと考えられる。288は鰭状突起を持つ。287も鰭状の突起を持つが、口縁部は屈曲せず、内面に突帯のような肥厚帯を持つのみである。291は波状口縁で、方形になると考えられるもの、椀状のもの292・293は両者ともに外面は削りのままであるが、内面は入念な撫でを施されたりしている。292は口端面に浅い刻み目を持ち、また293の内面には赤色顔料の付着がみられる。294・295は逆「く」の字口縁の浅鉢で、294では胴部と口縁部の境や口端部直下の内面にそれぞれ1条の沈線が巡る。295では口端部を強く外方に折り曲げている。

深鉢底部には296～305の多くにみられるような分厚い窪み底や、318～320のような丈の高い高台状のものがあり、浅鉢は薄い窪み底で外方にふんばるような形態のものが多い。



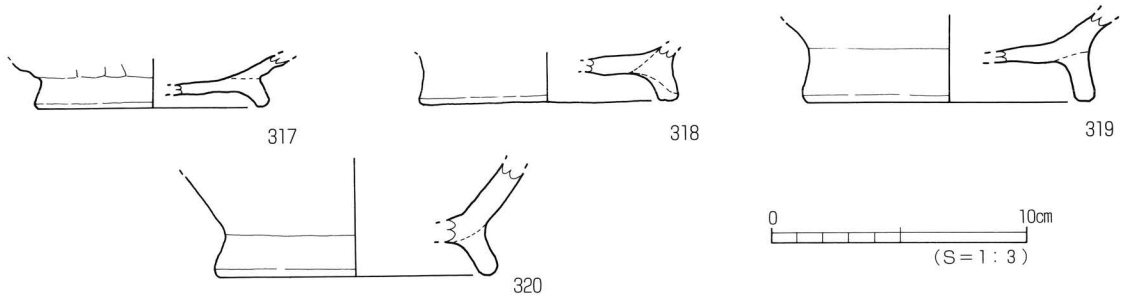
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
293	浅鉢	ケズリ→ナデ。	ナデ。	丸				赤褐色	淡灰褐色	丹塗り。
294	浅鉢	ナデ。	ケズリ→ナデ。	丸				暗褐色	黒褐色	
295	浅鉢	口：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	丸				褐色	褐色	口縁内外面煤付着。

図61　A区第8層出土遺物実測図(5)



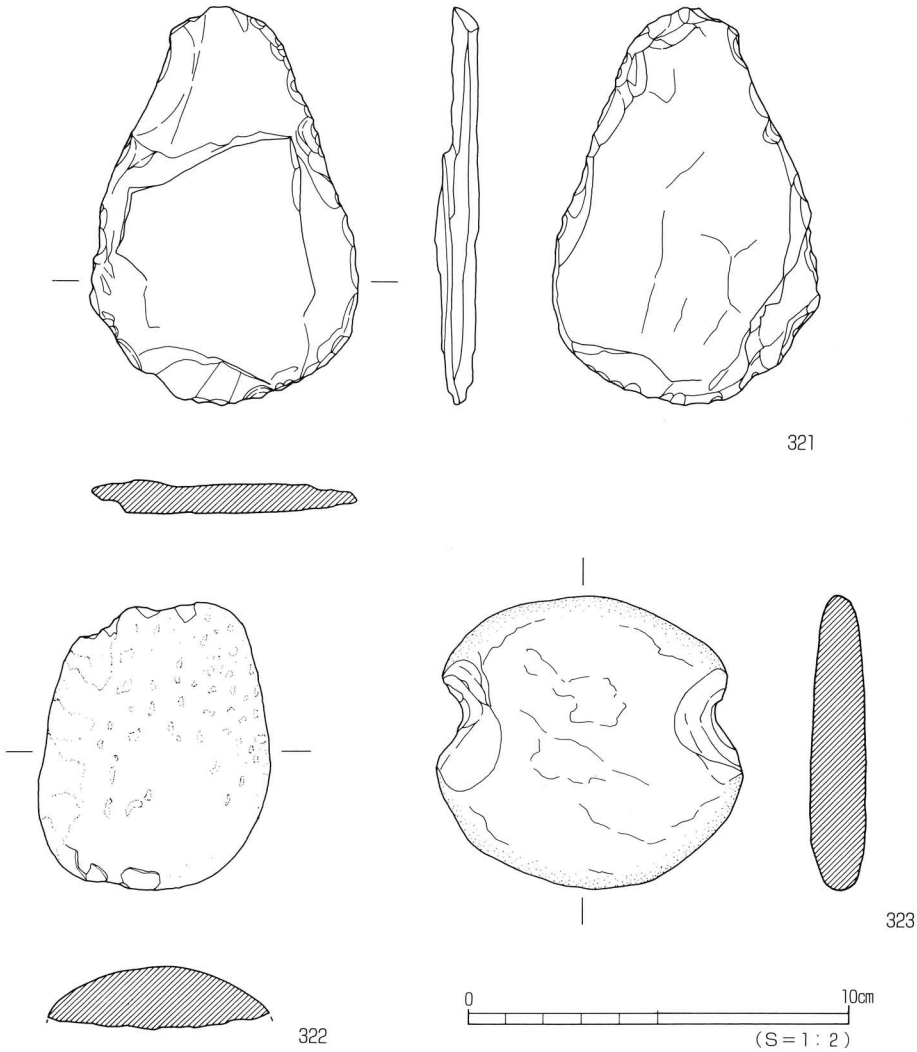
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
296	深鉢	ナデ。	マメツ。					淡灰褐色	淡橙色	
297	深鉢	底：ナデ。	工具によるナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
298	深鉢	胴：ケズリ。底：ナデ。	ナデ。					灰褐色	淡灰褐色	
299	深鉢	胴：ケズリ。底：ナデ。	工具によるナデ。					灰褐色	淡褐色	
300	深鉢	ナデ。	マメツ。					灰褐色	淡灰褐色	
301	深鉢	ナデ。	ナデ。					橙色	橙灰色	
302	深鉢	ナデ。	ナデ。					黒色	淡灰褐色	
303	深鉢	工具によるナデ。	ナデ。					黒褐色	茶褐色	
304	深鉢	胴：ケズリ。底：ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	灰黄色	
305	深鉢	ナデ。	ナデ。					黒褐色	淡灰褐色	
306	浅鉢	マメツ。	ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
307	浅鉢	ナデ。	ナデ。					黒褐色	黒褐色	
308	浅鉢	マメツ。	マメツ。					灰褐色	橙色	
309	浅鉢	ナデ。	ナデ。					灰褐色	褐色	
310	浅鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰色	淡黄褐色	
311	浅鉢	胴：二枚貝条痕。底：ナデ。	ナデ。					褐色	淡黄褐色	
312	浅鉢	ナデ。	ナデ。					黒褐色	淡橙褐色	
313	浅鉢	胴：条痕→ナデ。	工具によるナデ。					黒色	橙色	
314	浅鉢	ナデ。	ナデ。					淡褐色	灰褐色	
315	浅鉢	ナデ。	ナデ。					淡黄褐色	淡黄褐色	
316	浅鉢	ナデ。	ミガキ。					褐色	淡灰褐色	

図62　A区第8層出土遺物実測図(6)



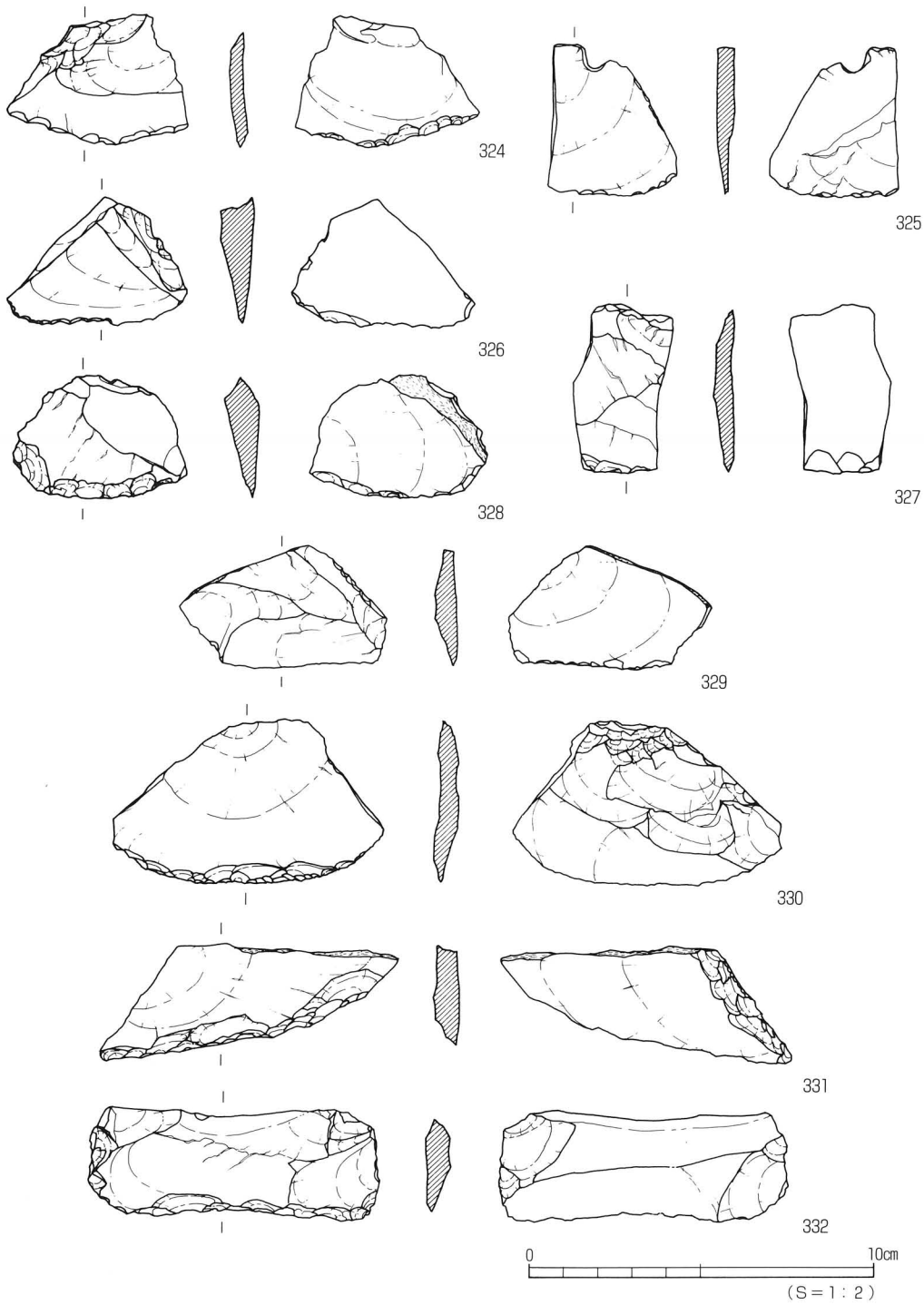
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
317	浅鉢	胴：ケズリ。底：ナデ。	ナデ。					黒色	淡灰褐色	
318	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
319	深鉢	ナデ。	ナデ。					淡黄褐色	淡黄褐色	
320	深鉢	ナデ。	ナデ。					淡灰色	淡灰色	

図63　A区第8層出土遺物実測図(7)



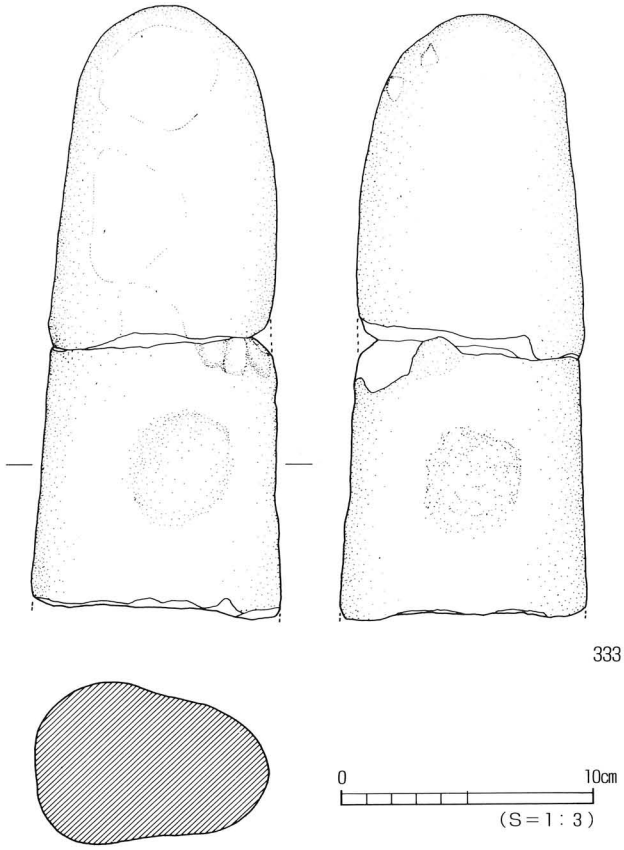
挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
321	打製石斧	緑色片岩	完形	10.5	6.9	1.1	102.0	
322	磨製石斧	緑色片岩	欠損	7.4	5.8	(1.6)	103.0	
323	石錘	緑色片岩	完形	8.0	7.8	1.5	154.0	

図64　A区第8層出土遺物実測図(8)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
324	スクレイパー	サヌカイト		3.8	5.2	0.4	10.9	
325	スクレイパー	サヌカイト		4.3	3.7	0.5	8.8	
326	スクレイパー	サヌカイト		3.7	5.2	0.9	14.7	
327	スクレイパー	サヌカイト		4.9	2.5	0.6	10.9	
328	スクレイパー	サヌカイト		3.6	5.0	0.9	13.7	
329	スクレイパー	サヌカイト		3.5	5.9	0.6	13.6	
330	スクレイパー	サヌカイト		4.7	7.8	0.5	25.1	
331	スクレイパー	サヌカイト		3.3	8.5	0.7	23.1	
332	スクレイパー	サヌカイト		3.2	8.4	0.7	29.7	

図65　A区第8層出土遺物実測図(9)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
333	敲石	安山岩	欠損	(24.0)	(10.0)	(6.4)	1065.0	

図66　A区第8層出土遺物実測図(10)

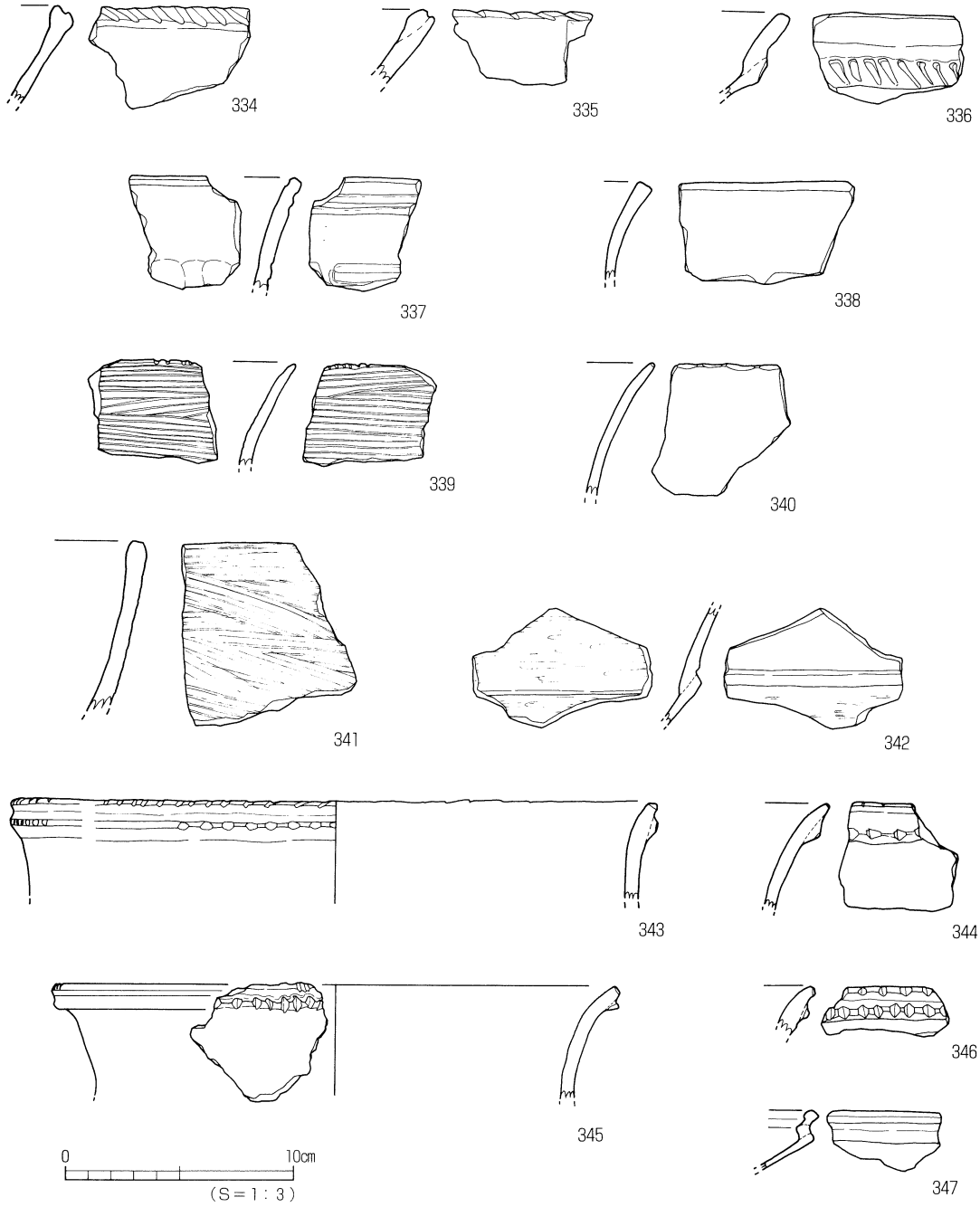
石製品には緑色片岩を素材とした打製土掘り具、磨製石斧、魚網錘のほか敲石や擦り石として利用したと考えられる324やサヌカイトの剥片を利用したスクレイパーがある。

⑥ 第7層出土遺物（図67～71）

第7層からも量的にはさほど多くはないが、若干の遺物が出土している。334～337が後期と考えられる土器で、これらのうち337の内外面に施された凹線は巻き貝によるもので、後期末頃のものと考えられる。粗製の341も後期のものか。338～340、342は晩期前半から中葉のものであろう。深鉢340の口端部刻みは指おさえによる浅い窪みである。

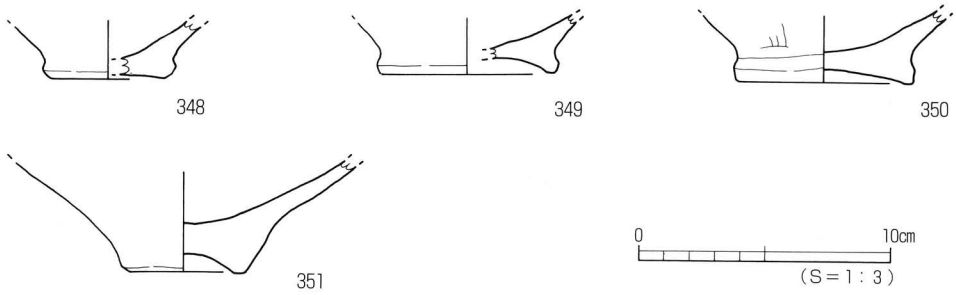
343～347は晩期後半突帯文深鉢、344は幅広の薄い突帯を持ち、口端部も突帯上も軽く刻まれる。これとは対照的に345では、突帯を下方から強く撫で上げ、深い刻み目を施している。346の突帯は低く薄いが刻みそのものはしっかりしている。また、口端部の刻みも深くしっかり施されるが、端面全体を刻まれるのではなく外面を意識した刻みとなっている。底部はいずれも深鉢のもので、窪み底になるが、外方にふんばった安定感のあるものと、351のようにすぼまった安定感のないものとがある。

石製品のうち折損した磨製石斧352は、その基部寄りの破片に刃部を形成するような打ち欠きを施



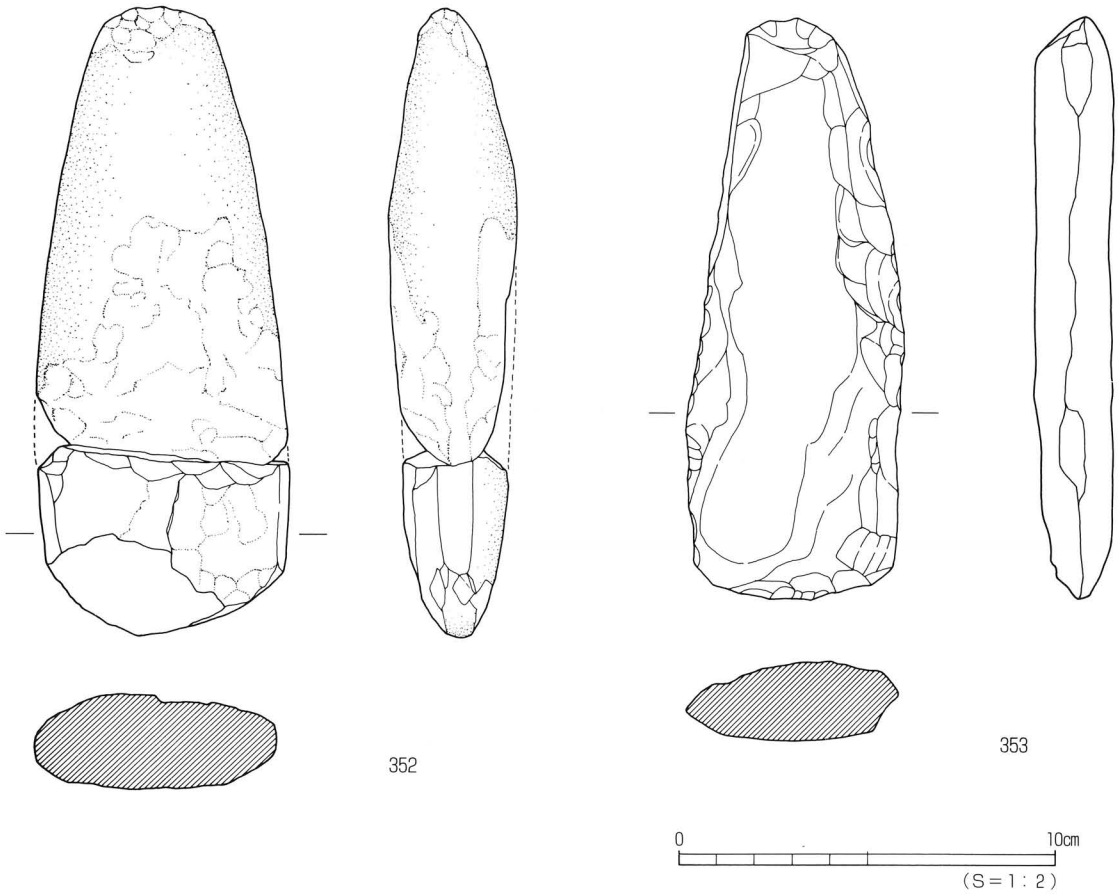
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
334	深鉢	マメツ。	ナデ。	面	長丸形			灰褐色	黒色	
335	深鉢	マメツ。	ナデ。	面	長丸形			灰白色	灰白色	
336	深鉢	ケズリ→ナデ。	ケズリ→ナデ。	丸				黒色	黒褐色	
337	深鉢	ナデ。	ナデ。	面				褐色	黒褐色	
338	深鉢	ナデ。	ナデ。	面				黒褐色	灰褐色	
339	深鉢	二枚貝条痕→ナデ。	二枚貝条痕。	丸	貝殻？			黒色	褐色	口縁刻みは部分的。
340	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	指押え			黒色	橙褐色	
341	深鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。	丸				灰色	灰色	
342	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ミガキ。					暗褐色	灰褐色	
343	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	V字形	台形	マメツ	褐色	黒褐色	
344	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	D字形	三角形	D字形	黒色	淡褐色	
345	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	長丸形	三角形	D字形	黒色	暗褐色	外面に炭化物付着。
346	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	D字形	三角形	D字形	黒色	褐色	
347	浅鉢	ナデ。	ナデ。	丸				淡灰褐	淡灰褐	

図67　A区第7層出土遺物実測図(1)



挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
348	深鉢	胴：ケズリ。底：ナデ。	ナデ。					黒色	橙褐色	
349	深鉢	ナデ。	ナデ。					黒褐色	灰褐色	内底炭化物付着。
350	深鉢	胴：ケズリ。底：ナデ。	ナデ。					茶褐色	茶褐色	
351	深鉢	工具によるナデ。	マメツ。					灰褐色	灰褐色	

図68　A区第7層出土遺物実測図(2)

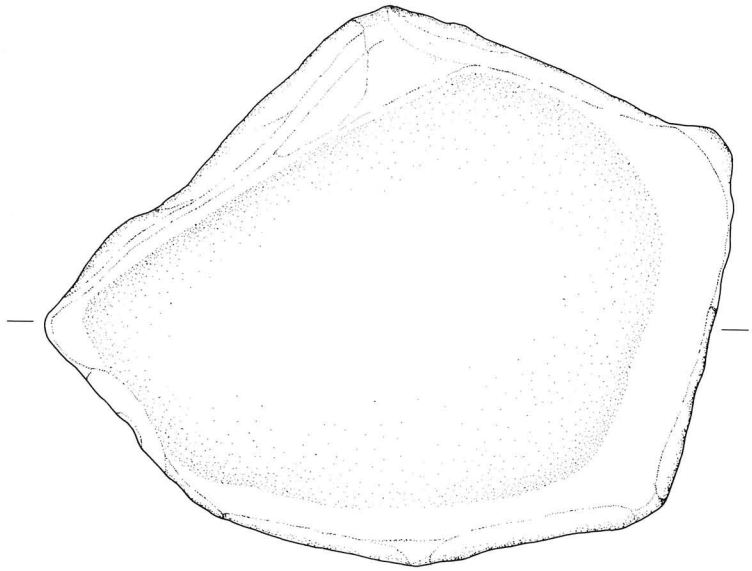


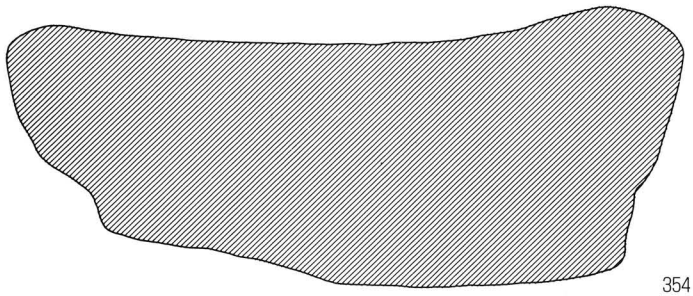
挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
352	磨製石斧	安山岩	一部欠損	16.6	6.4	(3.5)	464.0	
353	打製石斧	安山岩	完形	15.4	5.6	2.0	281.0	

図69　A区第7層出土遺物実測図(3)

し再加工している。このほか打製石斧、砂岩製の石皿、サヌカイトのスクレイパー１点の出土がある。

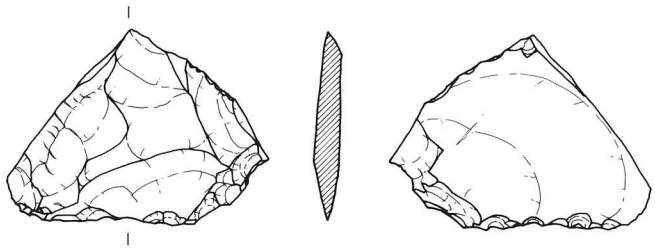
さらにこの層では２点の朱漆塗り結歯式竪櫛の出土をみている（図71）。357でその構造をみてみると、現況で長さが９㎝、最大幅1.6㎝、厚さ1.3㎝、この櫛には歯が残ってはいないが、抜け落ちた痕が穴となって10個所確認できる。穴と穴を縫うようにクロスした紐状の構造材が観察でき、歯を結わ





354

0　20cm
（S＝1：4）



355

0　10cm
（S＝1：2）

挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
354	石皿	砂岩	完形	26.6	22.2	14.1	7,800.0	
355	スクレイパー	サヌカイト		5.0	6.8	0.7	25.5	

図70　A区第７層出土遺物実測図(4)

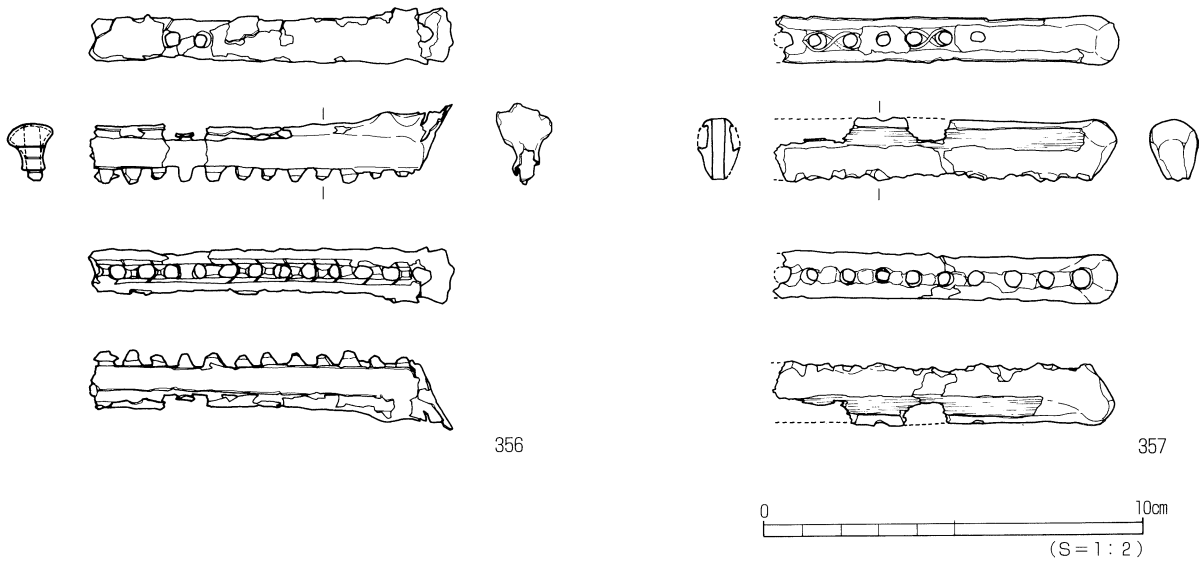


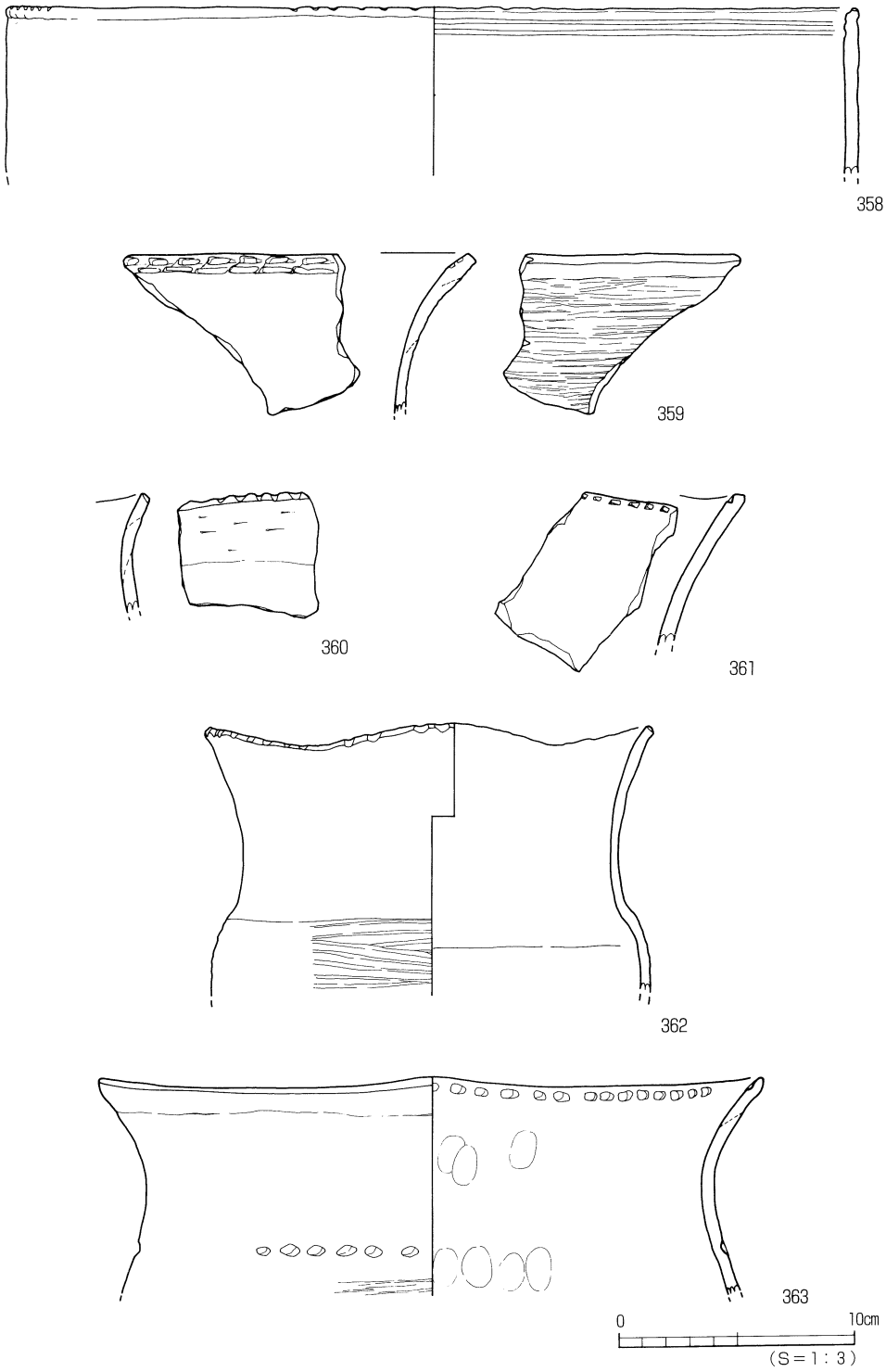
図71　A区第7層出土遺物実測図(5)

えていた部材の一部であることがわかる。また、両側面の漆欠落部分から観察すると長軸方向に竹と思われる材が通っており、これらの部材で歯を挟んで固定し、漆を塗り重ねて成形したものであろう。この櫛は片方の端部が生きており、この端部から数えて4番目と7番目の穴が背部にまで貫通している。おそらく、歯を背部まで貫通させ装飾あるいは把手のようなものを加えていたものと考えられる。したがって、5番目、6番目の穴の中間で折り返せば全形を復元できることになり、そうすると全長10cm弱、歯の総数は10本ということになる。なお、この櫛に使われた赤漆の顔料は水銀朱である。356も同様の構造であると考えられるが、この櫛には現況で12本の歯の基部が遺存している。

⑦ **第6層出土遺物**（図72～93）

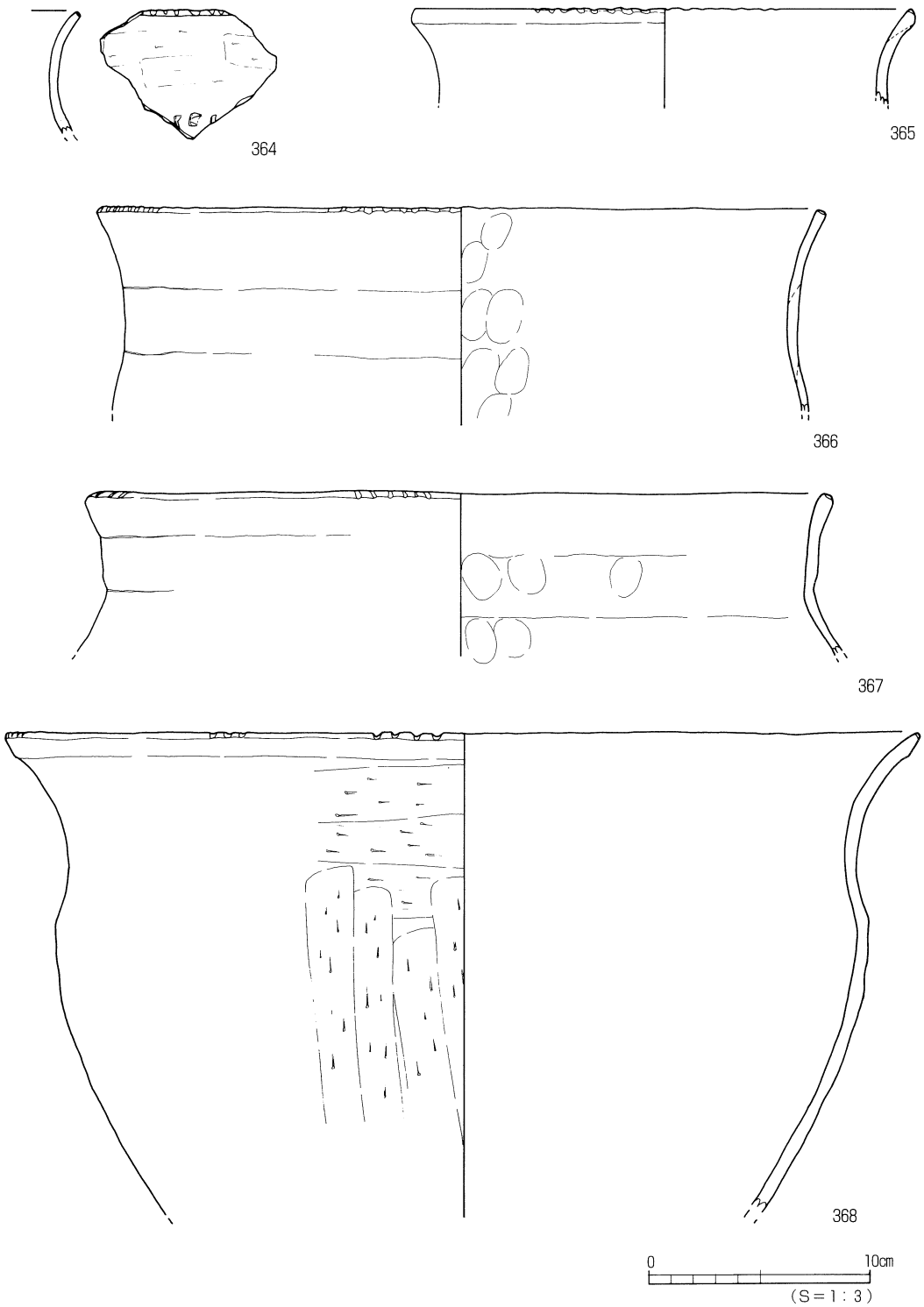
この層で出土するものは晩期中～後半のものである。器種は深鉢、浅鉢であり、壺、高坏の出土はない。深鉢には、口縁部突帯を持つものと持たないものがある。突帯を持たないもののうち354・355・361・363のように口縁部内面になんらかの施文を施されるものがある。358は直口縁の単純な器型で、外面が削りっぱなしの粗製土器であるが、口端面を軽く刻まれるとともに、口端部直下の内面に浅い凹線を2条施されている。その他のものは端部に刻み目を持たず内面に刺突を施されるもの、359の2列平行の刺突は巻き貝のいぼ状突起を利用した押し引きによるものと考えられる。波状口縁の361・363のうち363は頸部と胴部の境にも口縁内面と同様の巻き貝殻頂を用いたと思われる刺突がある。その他の突帯を持たないものには一様に口端部に刻み目が施されている。波状口縁の362の刻み目は波頂部付近を大きめ、その他を小さめと部位によって刻み目を使いわけているようである。364は端部刻み目とともに頸部下位に半截竹管状工具による刺突を施されている。366・367は2～2.5cm幅の粘土輪積みの単位が明確にわかる程度の粗製土器である。368は復元口径38cm、他の個体とは異なり口径が胴部径を大きく凌ぐ形態をなしている。これらの突帯を持たない土器のうち、口縁部内面施文といった特徴は突帯文期を遡る要素である。

突帯文深鉢には水平口縁と波状口縁があり、頸部がくびれる器型のもののみである。多くが口端部



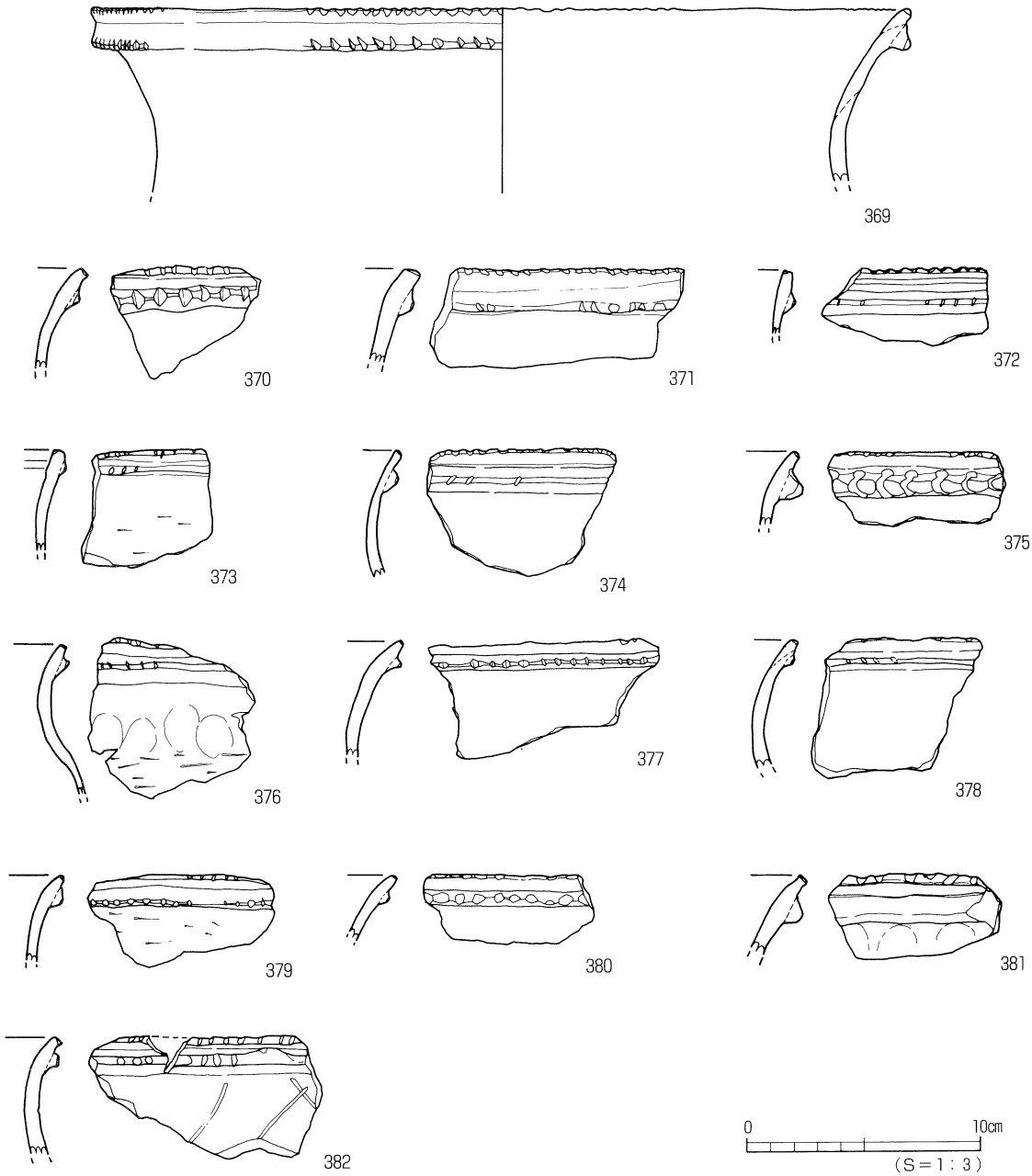
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
358	深鉢	ケズリ。	ケズリ→ナデ。	面	D字形			淡茶褐色	淡茶褐色	
339	深鉢	ナデ。	二枚貝条痕。	面				淡橙褐色	淡橙褐色	口縁内面刺突。
360	深鉢	マメツ。	ケズリ。	面	O字形			橙色	茶褐色	
361	深鉢	ケズリ→ナデ。	ナデ。	尖				淡橙褐色	茶褐色	口縁内面刺突。
362	深鉢	口：ナデ。頸：二枚貝条痕。	ナデ。	面	O字形			淡黄褐色	茶褐色	
363	深鉢	口：ナデ。頸：二枚貝条痕。	ナデ。	面				灰褐色	淡黄褐色	口縁内面・頸部外面刺突。

図72　A区第6層出土遺物実測図(1)



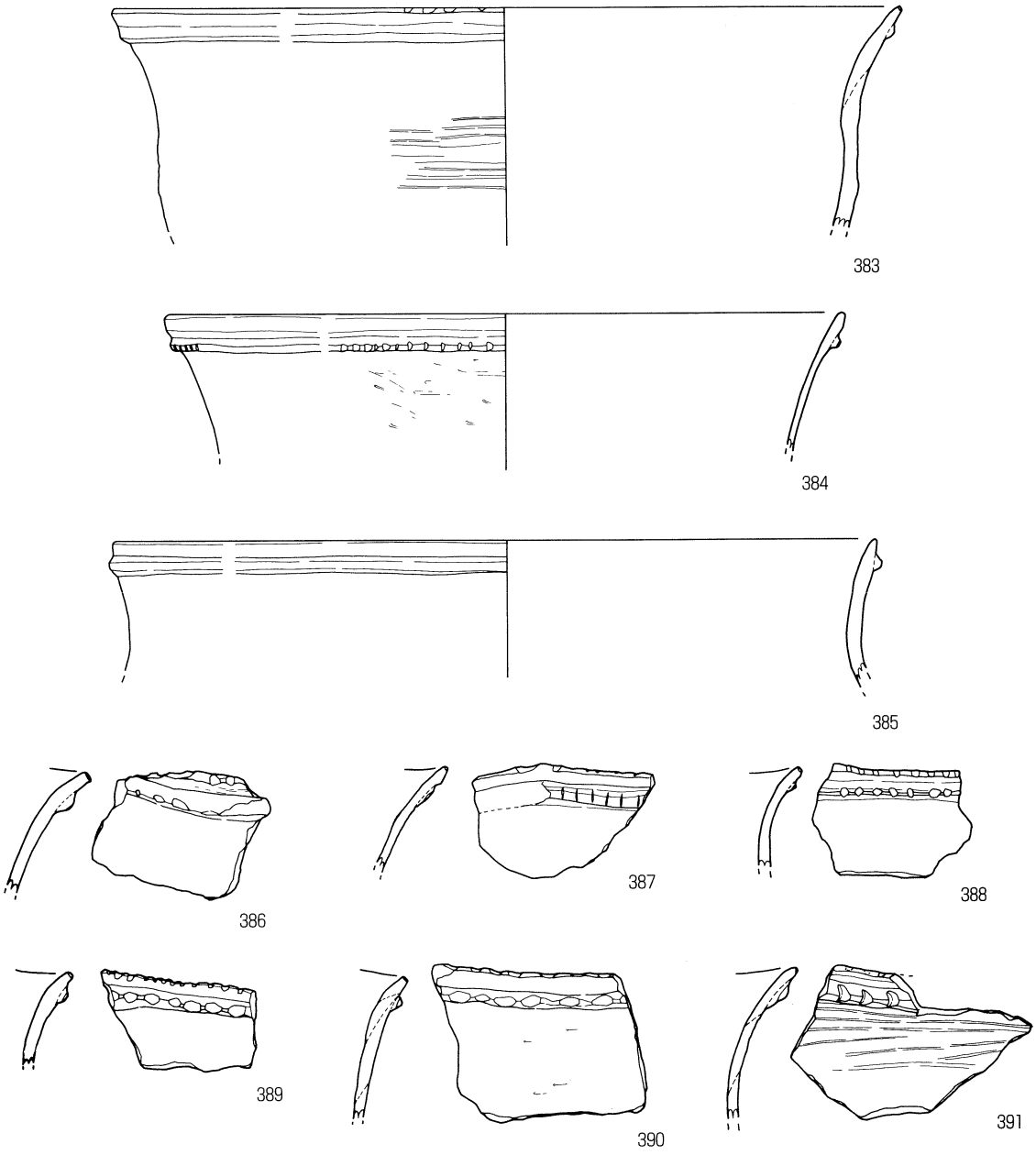
挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
364	深鉢	ケズリ。	ナデ。	面	D字形			黒褐色	茶褐色	頸胴界刺突。
365	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	D字形			灰黄色	淡黄褐色	頸部煤付着。
366	深鉢	ケズリ。	ケズリ→ナデ。	面	O字形			黒色	明灰褐色	刻み指か貝。
367	深鉢	ケズリ→ナデ。	ケズリ→ナデ。	面	D字形			黒色	灰褐色	
368	深鉢	ナデ。	ケズリ。	丸	U字形			黒褐色	淡黄褐色	

図73　A区第6層出土遺物実測図(2)



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
369	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	O字形	三角形	D字形	黒褐色	黒褐色	
370	深鉢	二枚貝条痕。	ナデ。	面	O字形	三角形	D字形	黒褐色	黒褐色	
371	深鉢	マメツ。	ナデ。	面	O字形	台形	マメツ	黒褐色	黒褐色	
372	深鉢	頸：ケズリ→ナデ。	ナデ。	面	D字形	三角形	D字形	茶褐色	茶褐色	
373	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	D字形	三角形	マメツ	黒褐色	黒褐色	
374	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	D字形	三角形	マメツ	橙褐色	橙褐色	
375	深鉢	マメツ。	ナデ。	面	O字形	三角形	C字形	黒褐色	黒褐色	
376	深鉢	口：ナデ。頸：ケズリ。	ナデ。	面	D字形	三角形	小D字形	黒褐色	黒褐色	
377	深鉢	マメツ。	マメツ。	マメツ	D字形	台形	D字形	灰褐色	灰褐色	口縁端大半欠損。
378	深鉢	マメツ。	ナデ。	面	O字形	マメツ	マメツ	黒色	黒色	
379	深鉢	頸：ケズリ。	ナデ。	丸	D字形	台形	D字形	灰褐色	灰褐色	
380	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	O字形	台形	O字形	黒褐色	黒褐色	
381	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	指押し	台形		灰黒褐色	灰黒褐色	
382	深鉢	ケズリ→ナデ。	ナデ。	面	小D字形	台形	小D字形	黒褐色	黒褐色	頸部施文。

図74　A区第6層出土遺物実測図(3)



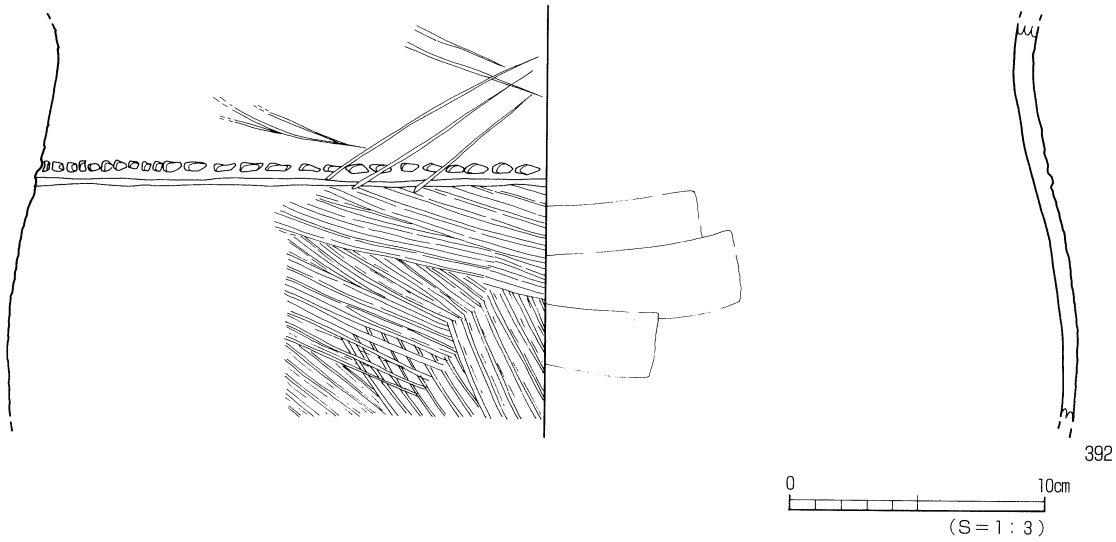
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
383	深鉢	ミガキ。	口～頸：マメツ。胴：条痕。	面	不詳	三角形		茶褐色	橙褐色	
384	深鉢	ケズリ→ナデ。	ナデ。	面		台形	D字形	淡灰褐色	淡灰褐色	
385	深鉢	ナデ。	ナデ。	面		台形		黒褐色	橙褐色	
386	深鉢	ナデ。	マメツ。	面	D字形	台形	マメツ	黒褐色	淡黄褐色	
387	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	D字形	扁平	小D字形	褐色	褐色	
388	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	D字形	三角形	D字形	灰褐色	黒褐色	
389	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	V字形	マメツ	マメツ	黒褐色	黒褐色	
390	深鉢	ケズリ→ナデ。	ナデ。	面	爪形	三角形	爪形	黒褐色	橙褐色	
391	深鉢	頸：二枚貝条痕。	ナデ。	丸	マメツ	三角形	D字形	黒褐色	灰褐色	

図75　A区第6層出土遺物実測図(4)

と突帯に刻み目を持っているが、稀にどちらかの刻み目を欠く場合がある。381・383は突帯、384は口端部また385では両部位ともに刻み目を欠いている。口端部に刻み目を持つものは端部が面をなしているものが多く、大抵の場端面全体を刻まれるが、372・373では内端を刻まれている。なお、373の口縁部内面には浅い凹線が１条巡っている。外面調整は376・383・392にみられるように、胴部に削りあるいは条痕を残し、頸部を撫でるといった具合に調整を使いわけている。頸部施文を持つものには382・392がある。392では頸部と胴部を沈線と刺突を組み合わせた横位の施文で区画し、頸部に３本単位の沈線でX字状の文様を施している。

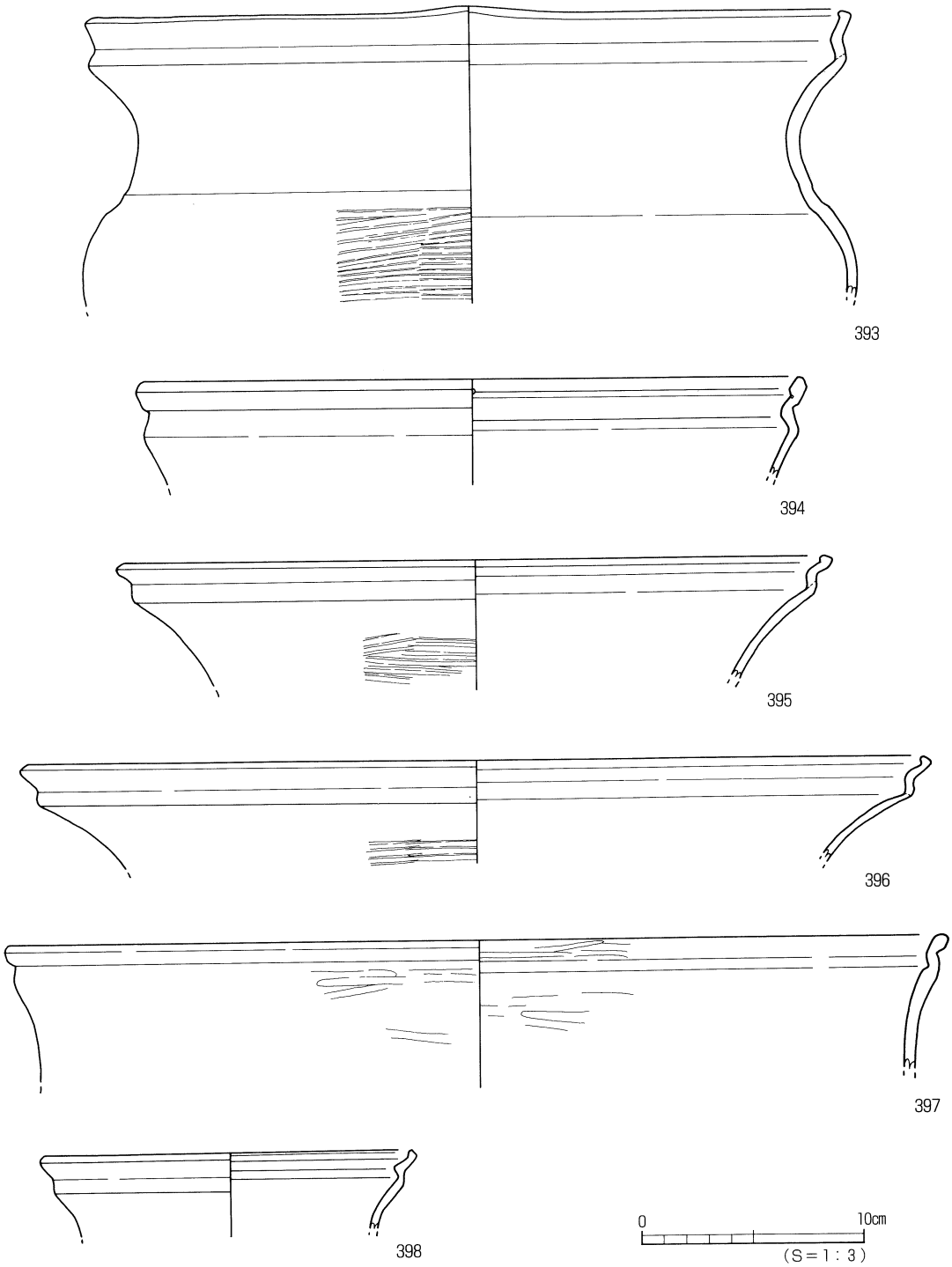
浅鉢には鍵形口縁のものと、口縁部が逆「く」の字状に外上方に開き波状を呈するものが多い。前者には第８層の項でも述べたが、395・396・404のように口縁部から底部にかけて単純にすぼまる形態のものと403が典型であるが、くびれた頸部を持ち胴が張るものとがあり、さらにこの層では405のようなボウル状の器型をなすものも確認できる。これらの浅鉢は口縁が軽い波状を呈していたり、鰭状あるいはリボン状突起をもつことが多いと考えられる。さらに、波頂部や突起の中央部に焼成前の小孔を持つものもある。外面調整は口頸部あるいは口縁部から胴部上半にかけてを磨きや入念な撫でで平滑に仕上げるのに対して、胴部あるいは胴部下半には条痕をそのまま残すのが特徴である。後者も外面調整には同様の特徴を持っている。これらの浅鉢は口縁部を刻まれることが多いが、刻みが口縁を全周することは少なく、波頂部周辺のみに施されることが多い。なお、この口縁形態のものの中には419～422のように俯瞰形が隅丸方形になる方形浅鉢がある。その他口縁部に無刻み目突帯を施される424やボウル状の器型の425なども、口頸部、胴部の調整法に関しては以上のものと共通している。また、椀状になるものの中には428・429のようなきわめて小型のものがある。

底部には窪み底、上げ底、丸底のものがあり、器種の別は必ずしも明確ではないが、概ね華奢なつくりで胎土の比較的精良なものを浅鉢として扱っている。丸底の442は壺になるかもしれないが、この層で確実に壺と判断できるものの出土をみていないので、一応浅鉢としておくのが適当であろう。



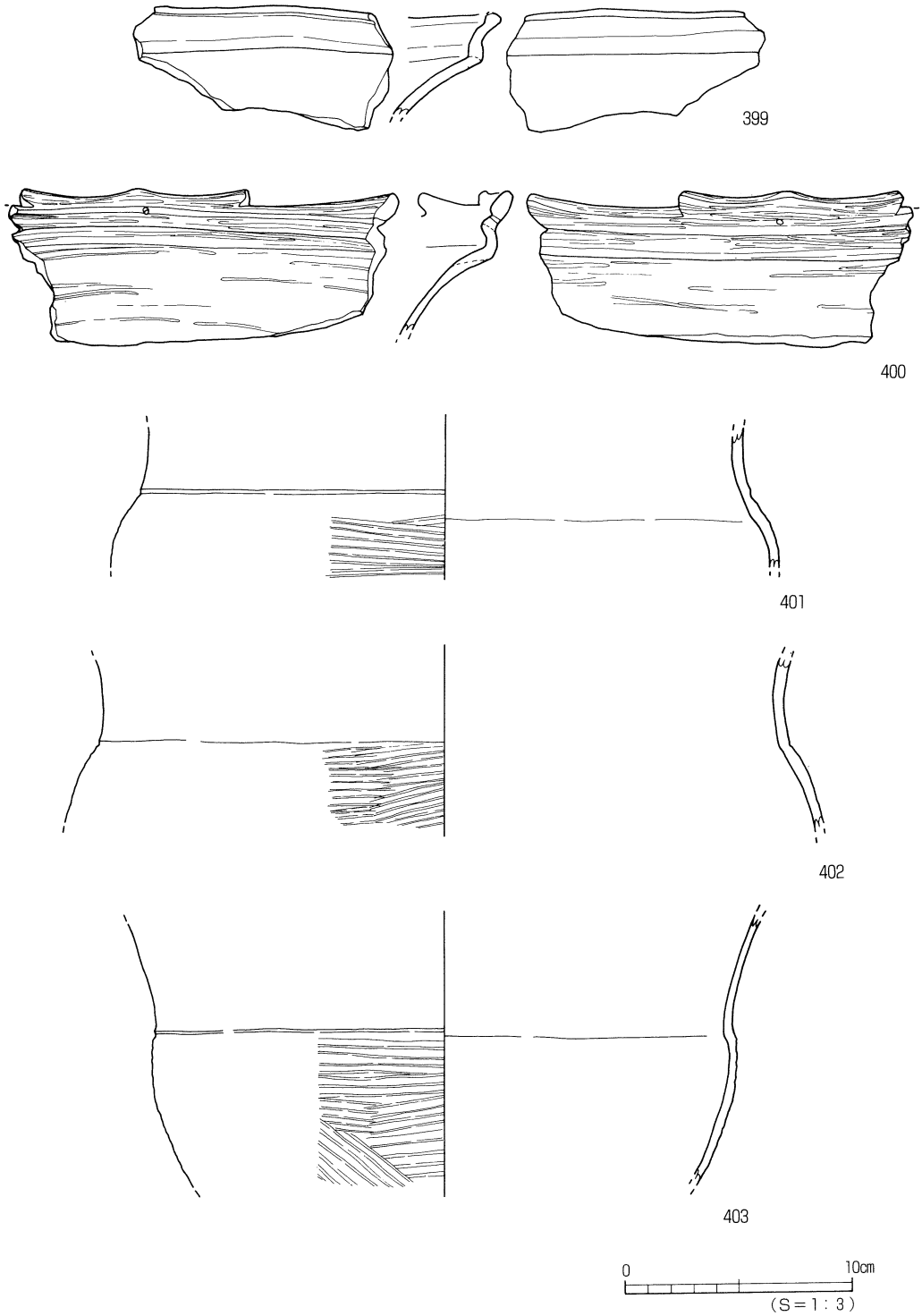
挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
392	深鉢	頸：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	二枚貝条痕→ナデ。					淡灰褐色	橙褐色	頸部施文。

図76　A区第６層出土遺物実測図(5)



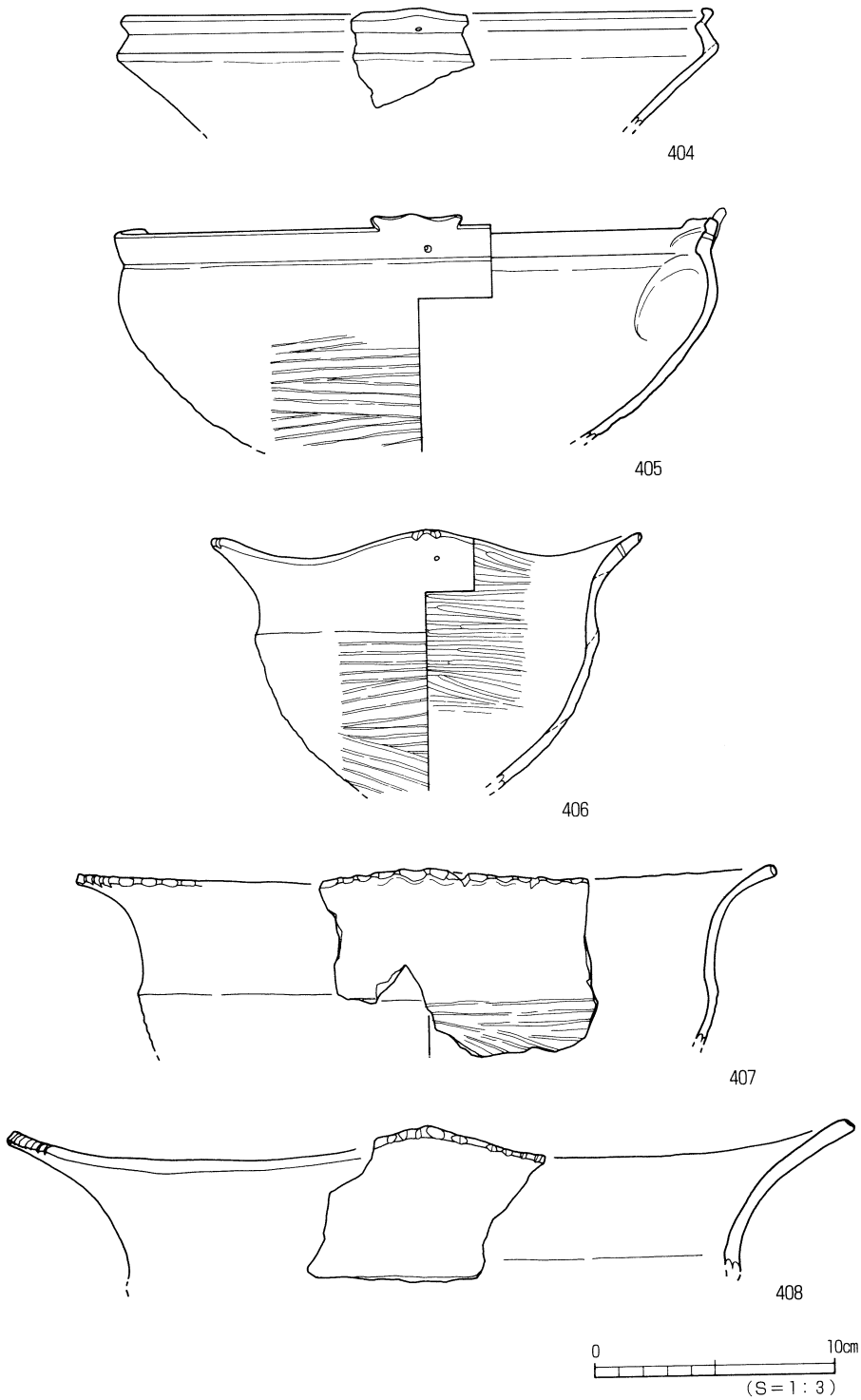
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
393	浅鉢	口～頸：ミガキ。胴：条痕。	ミガキ。	鍵形				暗褐色	暗褐色	口：隅丸方形。
394	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	鍵形				暗茶褐色	暗茶褐色	口縁穿孔（未完通）。
395	浅鉢	口：マメツ。頸：二枚貝条痕。	ミガキ？	鍵形				橙褐色	橙褐色	
396	浅鉢	口：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	ミガキ。	鍵形				灰褐色	褐色	
397	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	鍵形				黒褐色	灰褐色	
398	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	鍵形				黒褐色	茶褐色	

図77　A区第6層出土遺物実測図(6)



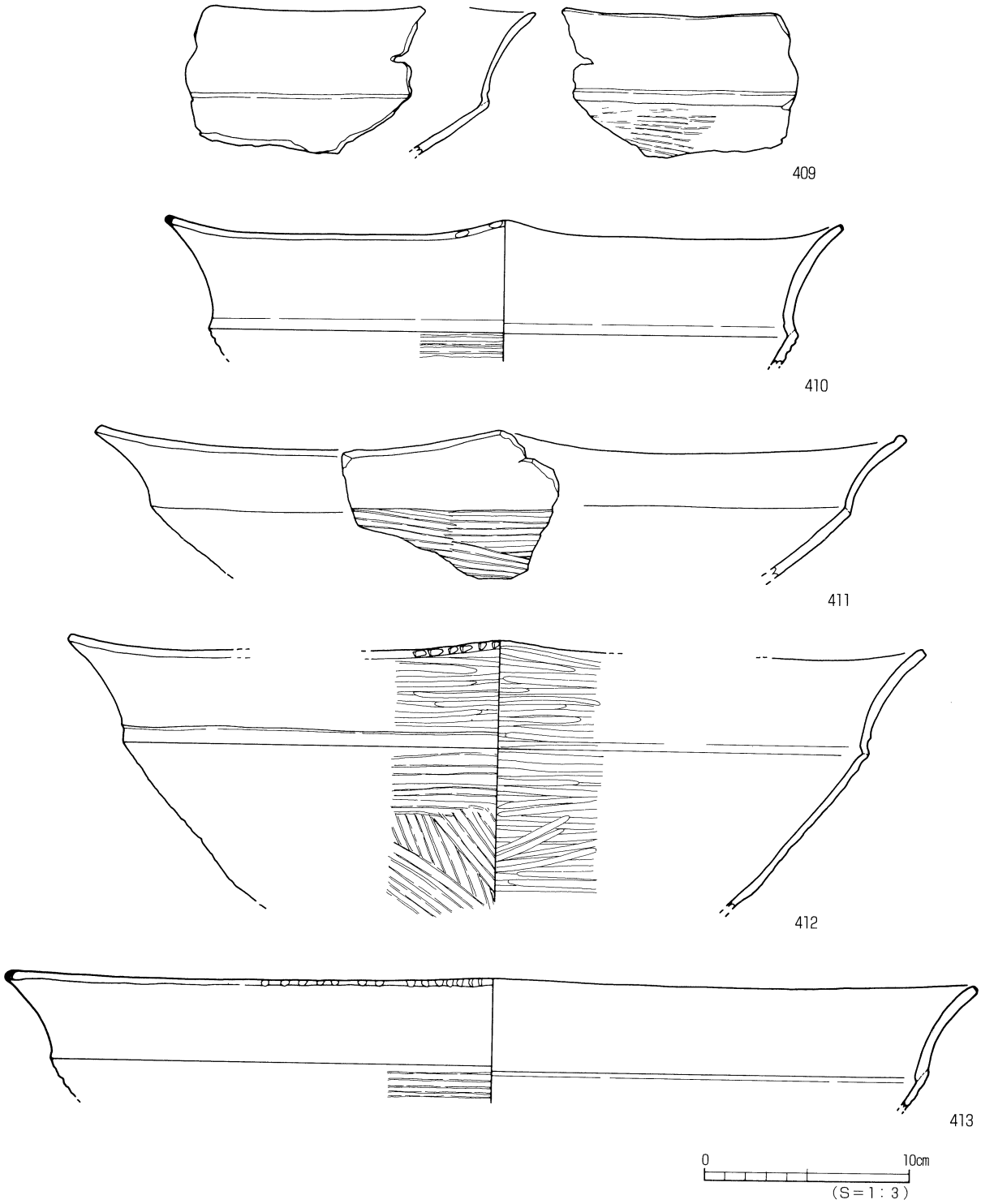
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
399	浅鉢	ミガキ。	ナデ？	鍵形				淡橙褐色	茶褐色	
400	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	鍵形				淡黄褐色	淡黄褐色	リボン状突起。口縁穿孔。
401	浅鉢	頸：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	ケズリ？					橙褐色	橙褐色	
402	浅鉢	頸：ナデ。胴：二枚貝条痕。	ナデ。					灰褐色	橙褐色	
403	浅鉢	頸：ナデ。胴：二枚貝条痕。	マメツ。					橙褐色	橙褐色	

図78　A区第6層出土遺物実測図(7)



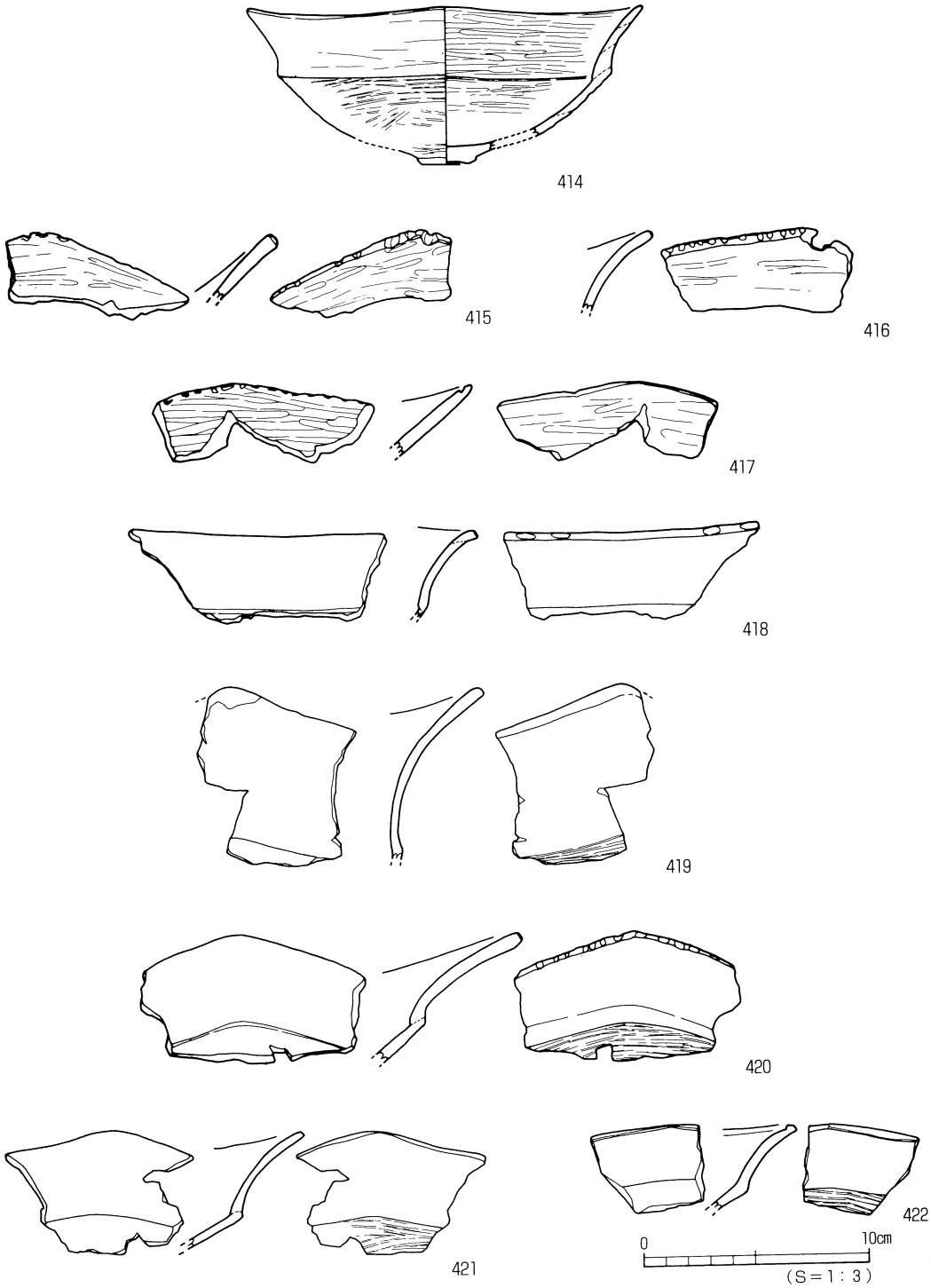
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
404	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	鍵形				淡黄褐色	茶褐色	口縁穿孔。
405	浅鉢	口：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	ミガキ。	丸				暗灰褐色	灰橙褐色	リボン状突起。口縁穿孔。
406	浅鉢	口：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	ミガキ。	面	O字形			淡橙褐色	橙褐色	口縁穿孔。
407	浅鉢	口：ナデ。胴：二枚貝条痕。	マメツ。	面	O字形			茶褐色	淡橙褐色	
408	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	面	D字形			黒褐色	黒褐色	

図79　A区第6層出土遺物実測図(8)



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
409	浅鉢	口：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	ミガキ。	面				灰褐色	灰褐色	
410	浅鉢	口：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	ナデ？	面	O字形			灰褐色	灰褐色	
411	浅鉢	口：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	ミガキ。	面				暗茶褐色	明茶褐色	
412	浅鉢	口：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	ミガキ。	面	押引き圧痕			淡茶褐色	淡灰褐色	
413	浅鉢	口：ナデ。胴：二枚貝条痕。	ミガキ。	面	D字形			黒褐色	淡茶褐色	

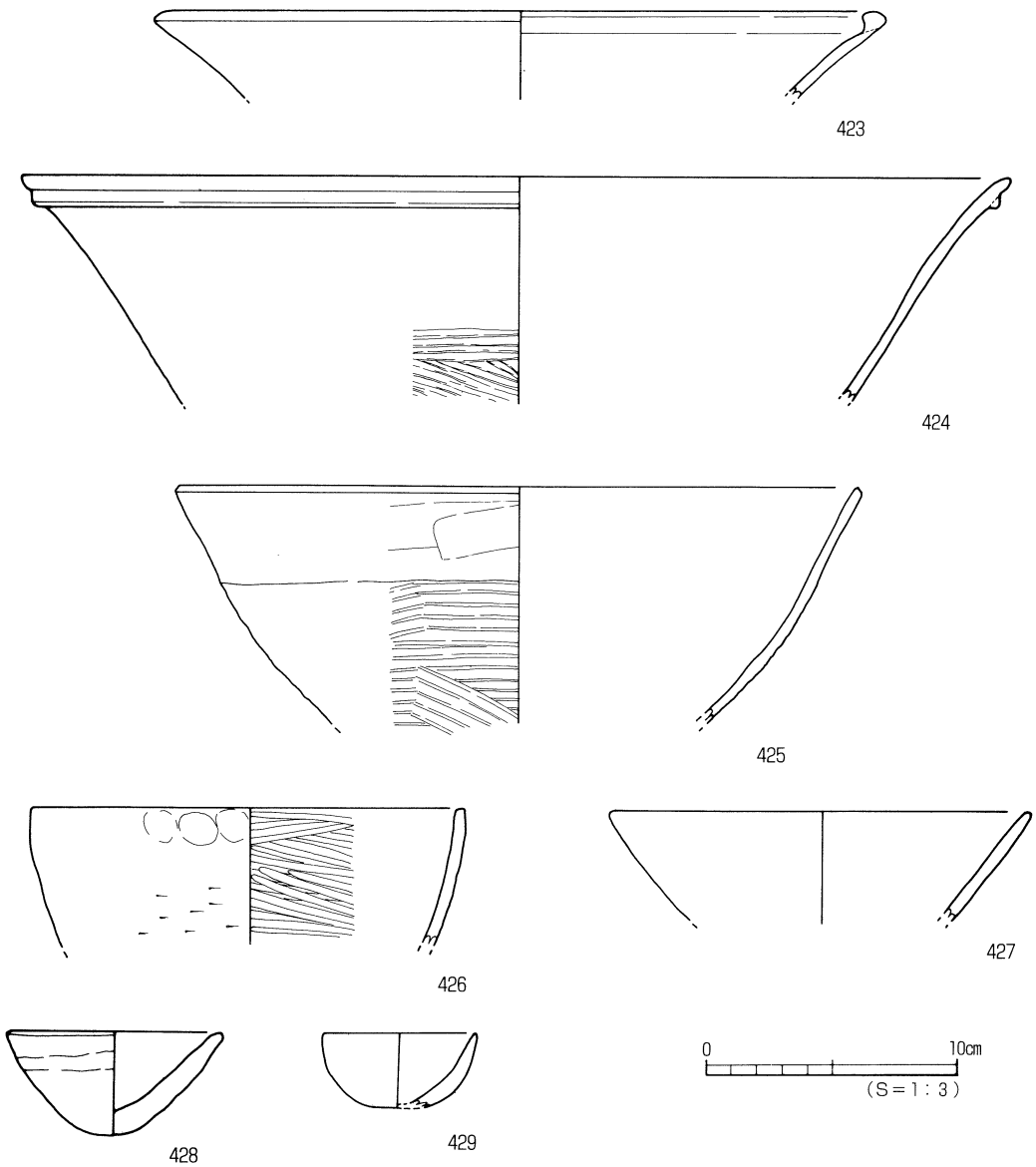
図80　A区第6層出土遺物実測図(9)



挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
414	浅鉢	口：ケズリ→ナデ。頸：ケズリ。	ミガキ。	面				黒褐色	黒褐色	
415	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	面	O字形			橙色	橙色	
416	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	面	O字形			淡灰褐色	淡灰褐色	
417	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	尖				黒褐色	黒褐色	口縁内面刺突。
418	浅鉢	マメツ。	マメツ。	面	指押え			淡黄灰色	赤橙色	
419	浅鉢	口：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	ミガキ。	面	D字形			黒褐色	淡灰褐色	
420	浅鉢	口：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	ミガキ。	面	O字形			暗茶褐色	灰褐色	
421	浅鉢	口：マメツ。胴：二枚貝条痕。	マメツ。	マメツ				淡灰褐色	淡灰褐色	
422	浅鉢	口：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	ミガキ。	面				黒灰色	灰白色	

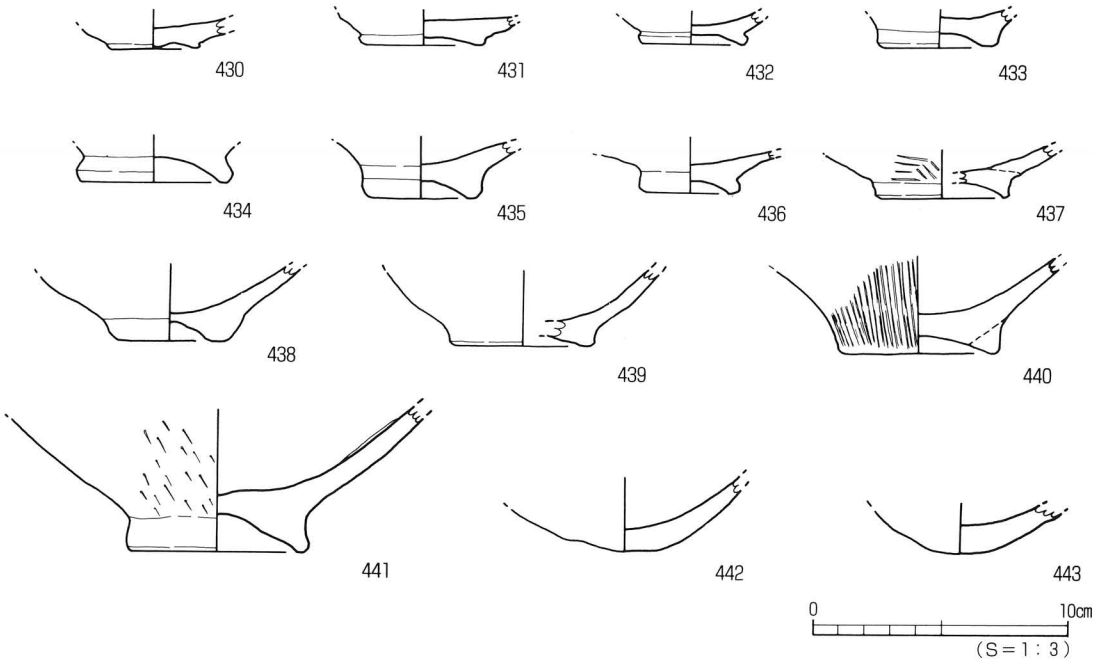
図81　A区第6層出土遺物実測図(10)

これらの土器のほか、この層では図84のような土偶が出土している。444はヘルメットのような形状のパーツと平面形がおむすび形の土板のようなものとで構成されている。上部のパーツの下縁は1条の沈線を巡らせた突帯状に縁どられ、これに直交して同様の意匠がパーツの中軸ラインを縦断するように施されている。下部の土板状の部分は外縁を1条の沈線で縁どり、貫通する小孔を横位に3個配置している。この土偶が何を表現したものかは不詳であるが、上部のパーツに酷似した木製品が船ケ谷遺跡の出土品中にみられる。445は、人面表現と思われる土偶で、平面が不整円形、断面がおお



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
423	浅鉢	マメツ。	ミガキ。	面				暗褐色	灰褐色	口縁内面肥厚。
424	浅鉢	口：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	ミガキ。	丸		台形		褐色	褐色	
425	浅鉢	口：ナデ。胴：二枚貝条痕。	ナデ。	面				黒褐色	茶褐色	
426	浅鉢	ケズリ。	ミガキ。	面				褐色	褐色	
427	浅鉢	ナデ。	ナデ。	丸				淡灰褐色	橙色	
428	浅鉢	ナデ。	ナデ。	丸				橙褐色	淡橙灰色	
429	浅鉢	ナデ。	マメツ。	丸				灰茶褐色	淡黄白色	

図82　A区第6層出土遺物実測図(11)



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
430	浅鉢	ナデ。	ナデ。					褐色	茶褐色	
431	浅鉢	底：ケズリ。	ナデ。					褐色	淡橙色	
432	浅鉢	マメツ。	ナデ。					淡褐色	褐色	
433	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡褐色	橙色	
434	浅鉢	ナデ。	欠損。					淡褐色	橙色	
435	深鉢	ケズリ。	ナデ。					灰褐色	淡灰橙色	
436	浅鉢	マメツ。	ナデ？					茶褐色	橙褐色	
437	浅鉢	ナデ。	ケズリ。					茶褐色	淡灰褐色	
438	深鉢	ナデ。	ナデ。					褐色	橙褐色	
439	深鉢	ナデ。	マメツ。					灰褐色	茶褐色	
440	深鉢	胴：二枚貝条痕。底：ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	淡灰黄色	
441	深鉢	胴：ケズリ。底：ナデ。	工具によるナデ。					淡褐色	淡橙褐色	内底 炭化物付着。
442	浅鉢？	ケズリ？	ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
443	深鉢？	ケズリ？	ナデ。					淡灰褐色	淡灰橙色	

図83　A区第6層出土遺物実測図(12)

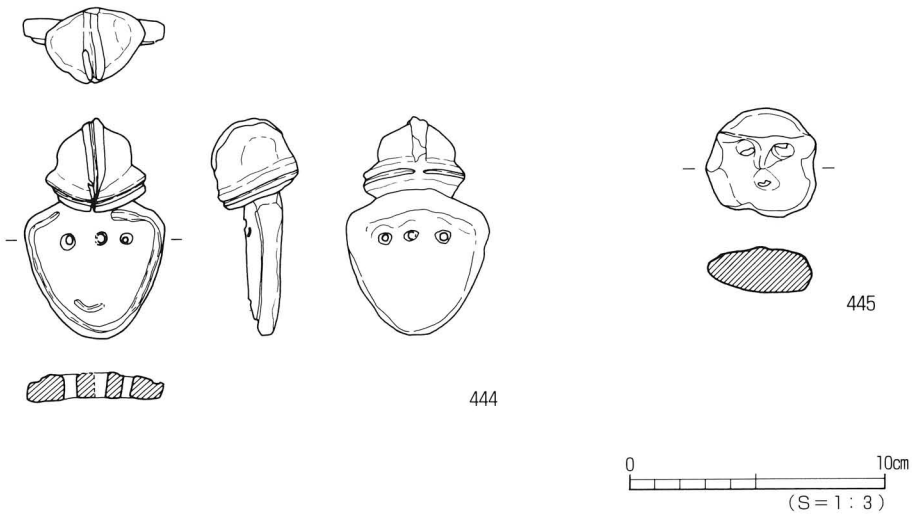
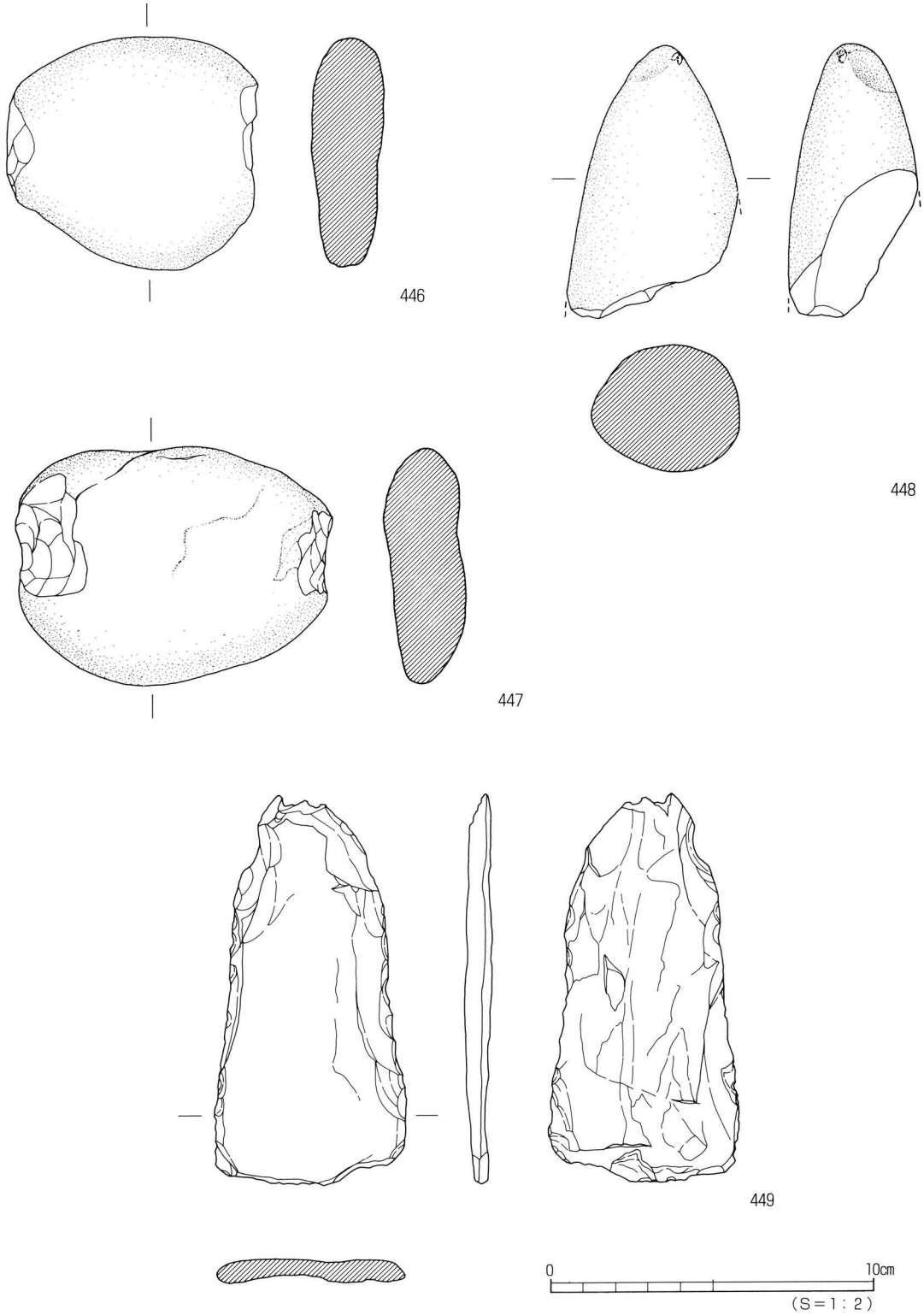
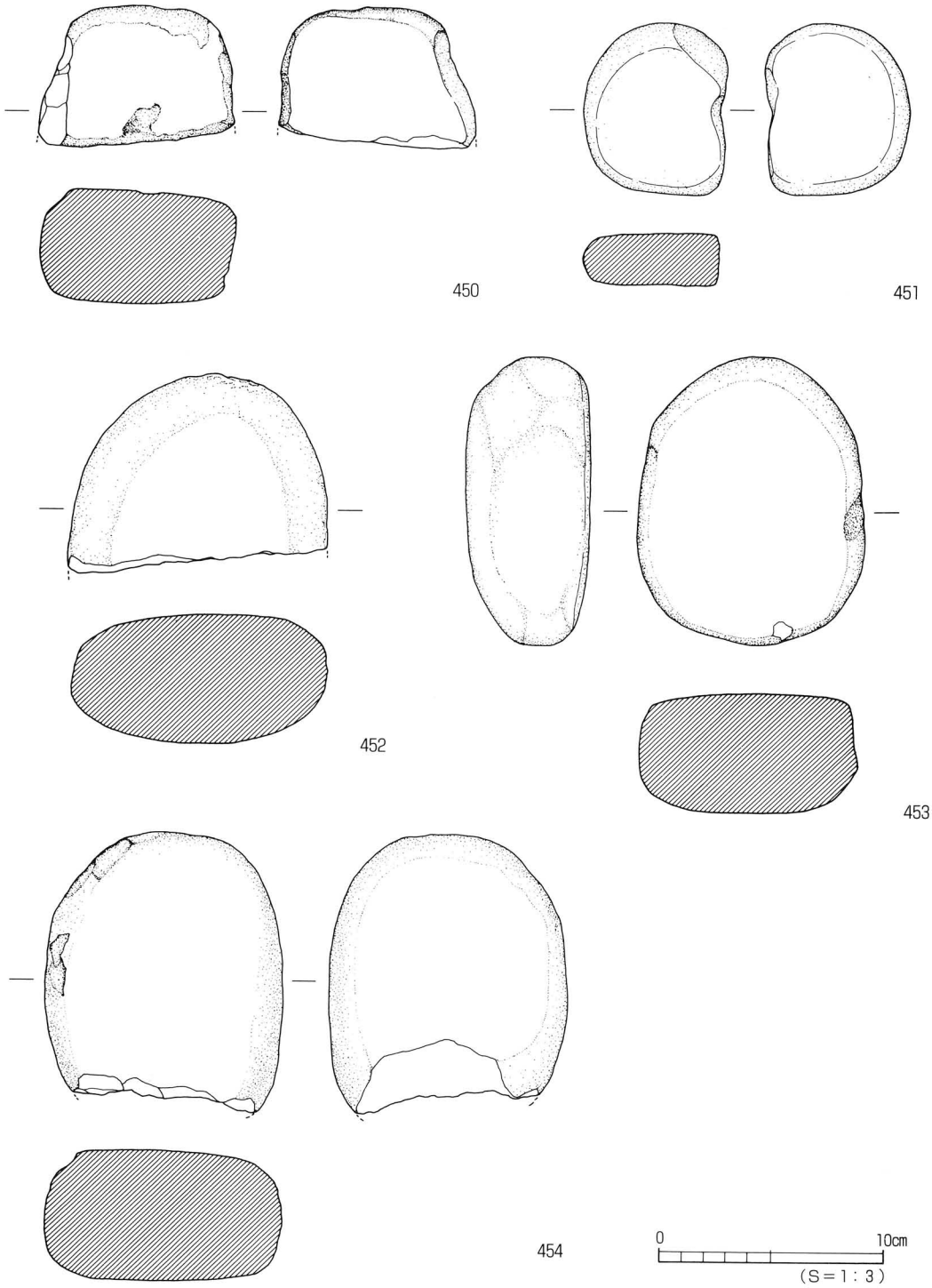


図84　A区第6層出土遺物実測図(13)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
446	石錘	流紋岩	完形	7.5	7.1	2.2	186.7	
447	石錘	流紋岩	完形	9.6	7.3	2.3	337.0	
448	磨製石斧	安山岩	欠損	(8.5)	(5.3)	(3.9)	170.0	
449	扁平打製石斧	緑色片岩	完形	12.0	5.8	0.7	87.0	

図85　A区第6層出土遺物実測図(14)

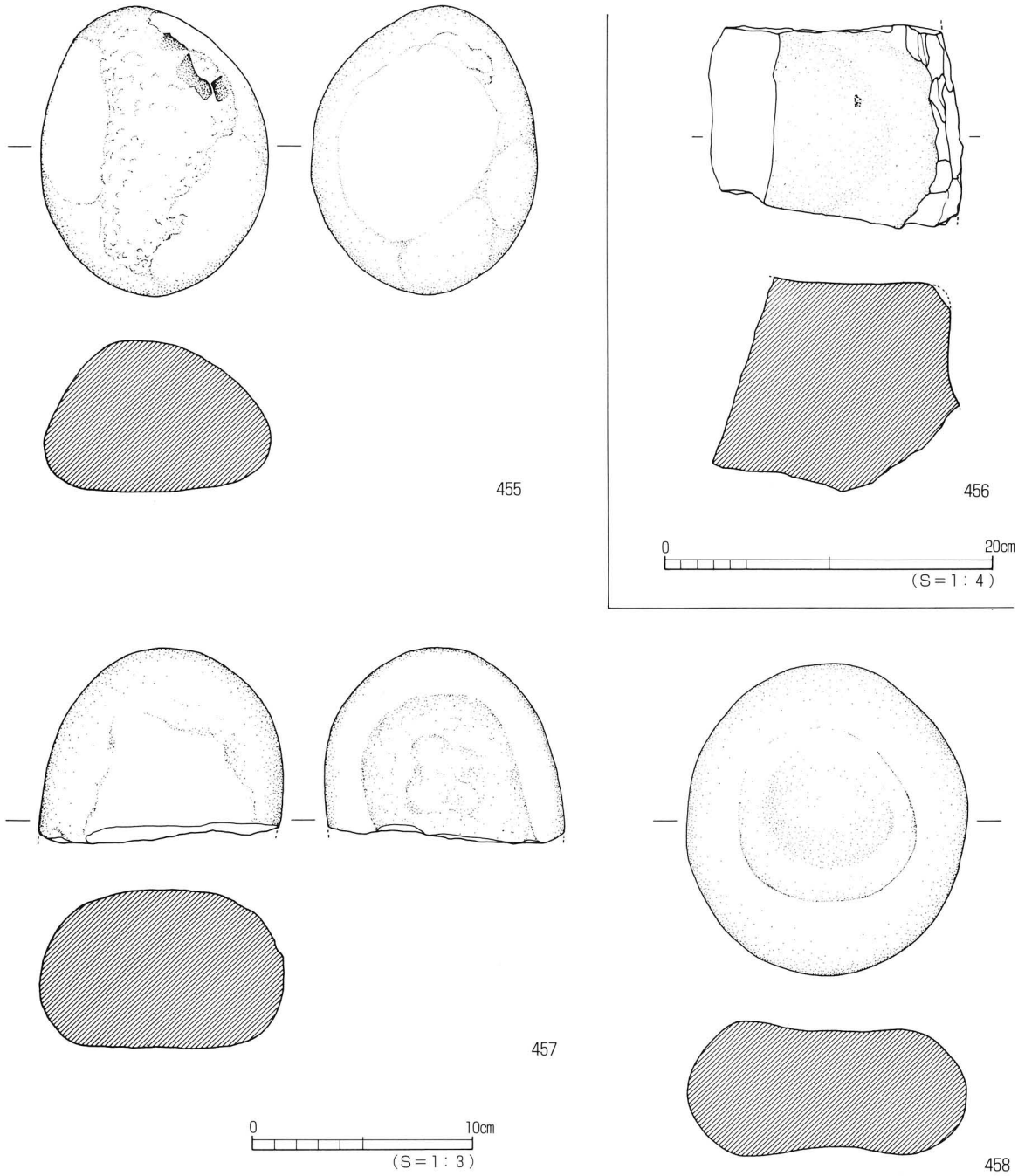


挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
450	磨石	安山岩	欠損	(6.2)	(8.6)	(5.0)	455.0	
451	用途不明品	砂岩	完形	7.6	6.3	2.3	205.0	
452	磨石	流紋岩	欠損	(7.9)	(11.5)	(5.7)	879.0	
453	磨石	安山岩	完形	12.8	10.1	5.5	1300.0	
454	磨石		欠損	(11.6)	10.5	5.8	1229.0	

図86　A区第6層出土遺物実測図(15)

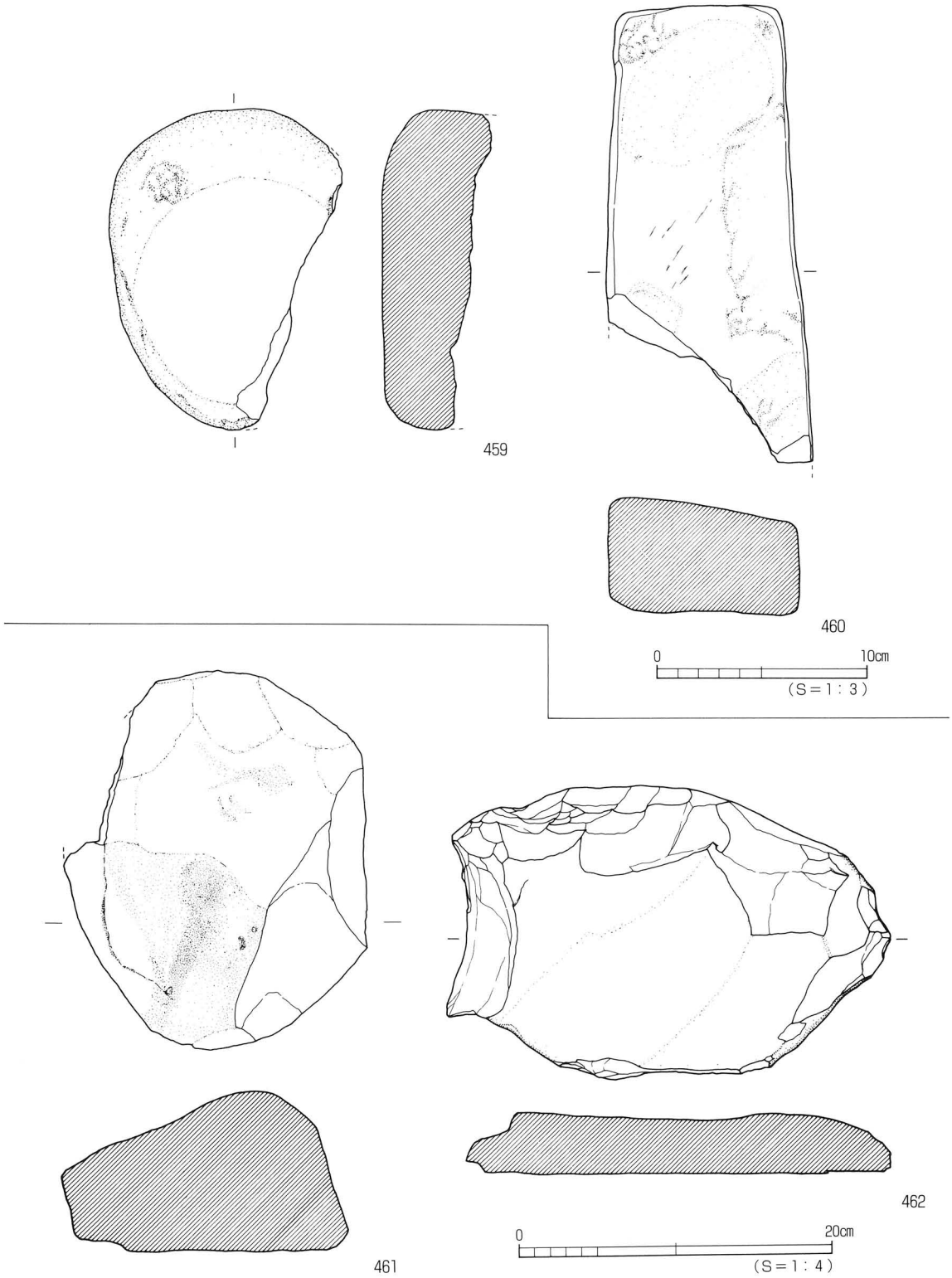
よそ紡錘形に近い土板状のものに巻き貝を利用したと思われる刺突による窪みがある。おそらく、両眼と口を表現したものであろう。

石製品には、安山岩、流紋岩、あるいは砂岩などの転石を利用した打ち欠き魚網錘、磨石、窪み石、台石などがあり、その他伐採斧の破損品や、土掘り具がある。449は緑色片岩を打ち欠いて製作された土掘り具と考えているが、使用痕のようなものが認められないので、剥片もしくは未製品であるか



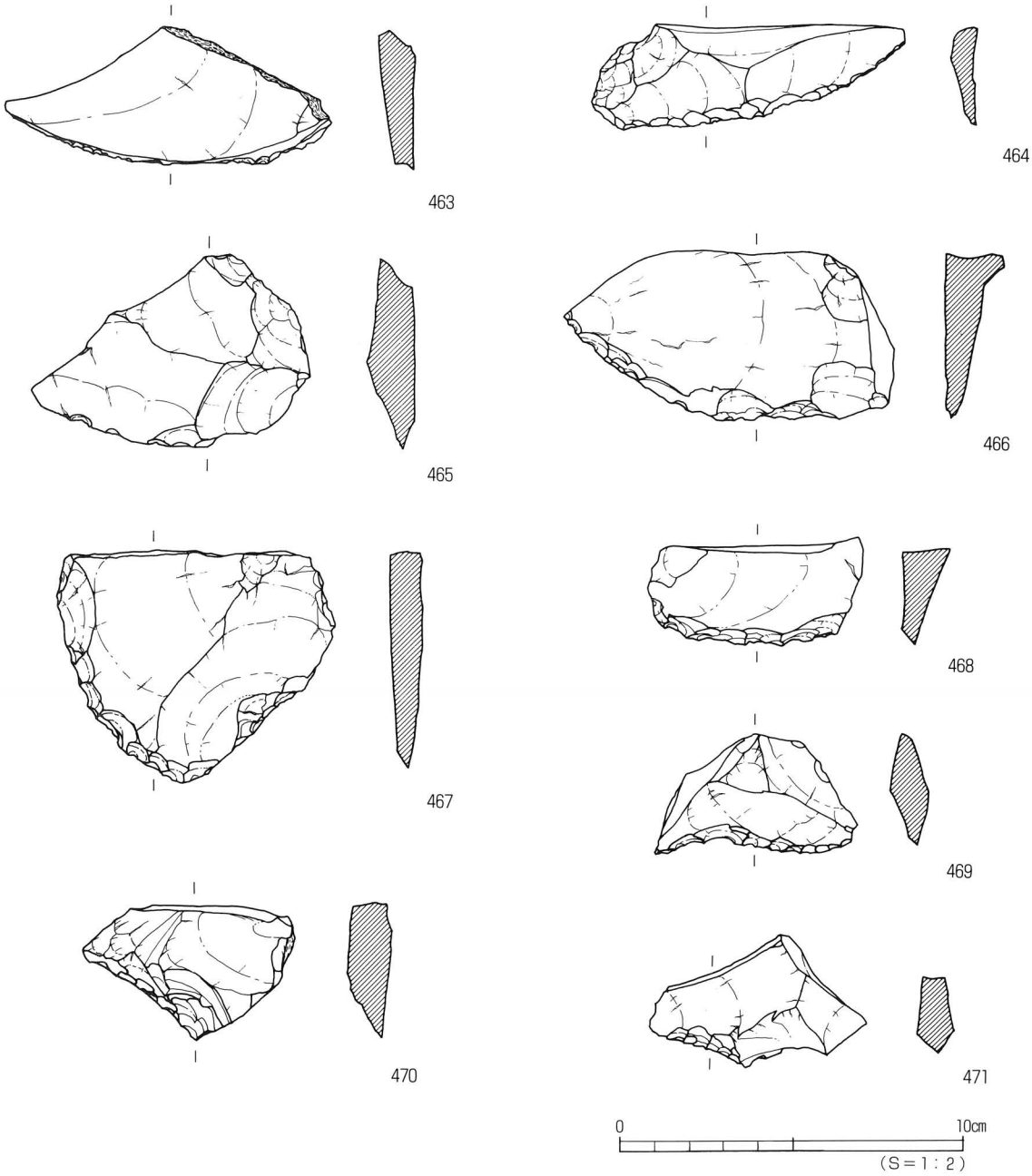
挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
455	磨石	砂岩	完形	13.1	10.2	6.9	1324.0	
456	石皿	安山岩	欠損	(15.3)	(12.5)	(13.3)	3800.0	
457	窪む石	花崗岩	欠損	(8.7)	(10.7)	(7.1)	1033.0	
458	窪む石	安山岩	完形	14.1	12.6	6.0	1628.0	

図87　A区第6層出土遺物実測図(16)



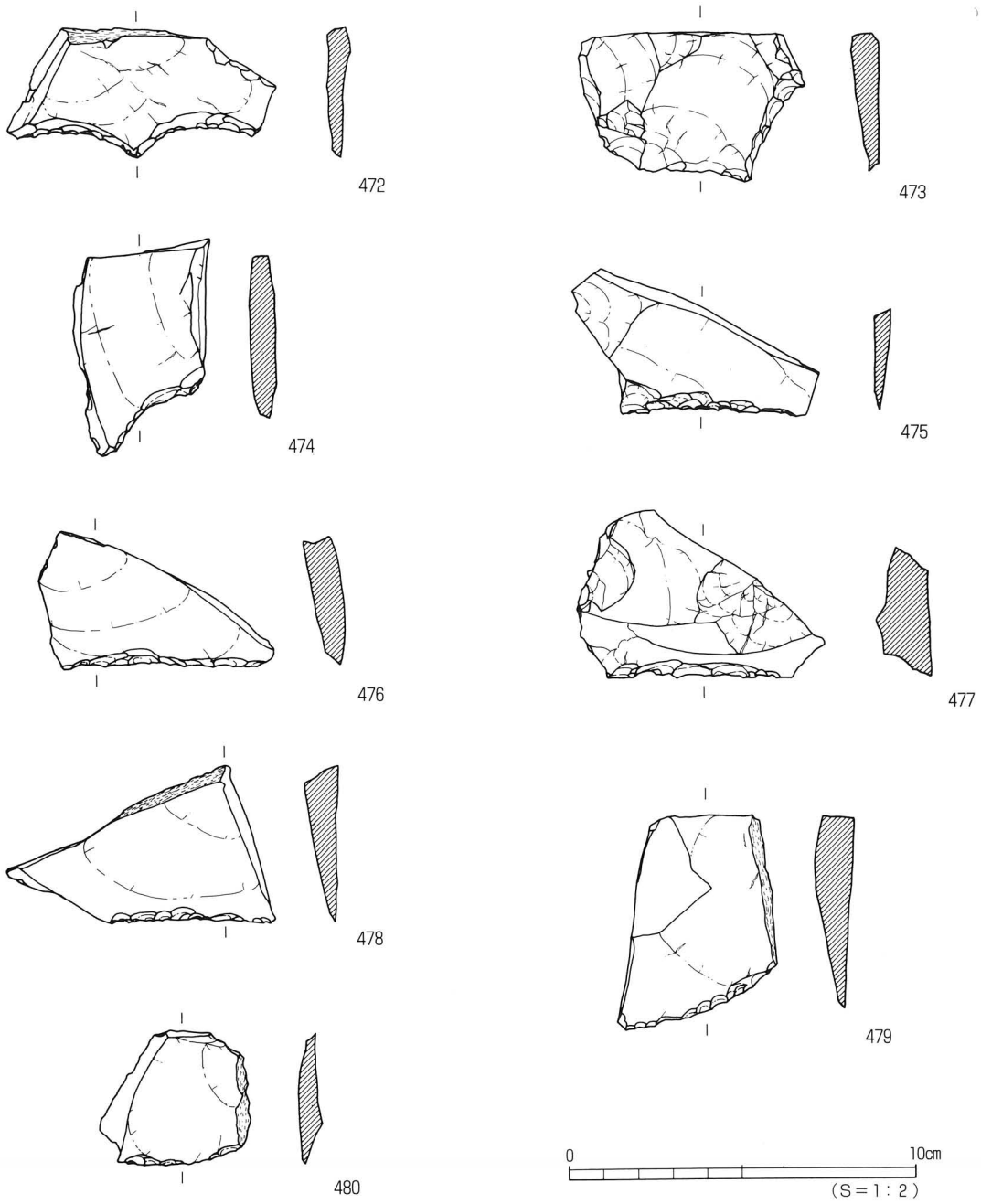
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
459	台石	砂岩	欠損	15.3	(11.1)	(5.7)	1065.0	
460	台石	砂岩	欠損	(22.2)	(9.2)	(5.3)	1795.0	被熱。
461	台石	安山岩	欠損	(24.3)	(19.1)	(10.3)	6850.0	
462	台石	安山岩	完形	17.8	28.1	4.0	3150.0	

図88　A区第6層出土遺物実測図(17)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
463	スクレイパー	サヌカイト		4.0	9.3	1.0	34.1	
464	スクレイパー	サヌカイト		3.1	9.1	0.7	18.2	
465	スクレイパー	サヌカイト		5.6	7.9	1.4	51.9	
466	スクレイパー	サヌカイト		4.9	9.5	1.6	62.9	
467	スクレイパー	サヌカイト		6.7	8.0	0.9	65.9	
468	スクレイパー	サヌカイト		3.0	6.2	1.4	25.4	
469	スクレイパー	サヌカイト		3.5	5.8	1.0	17.1	
470	スクレイパー	サヌカイト		3.9	6.1	1.2	32.1	
471	スクレイパー	サヌカイト		3.8	4.3	1.0	24.6	

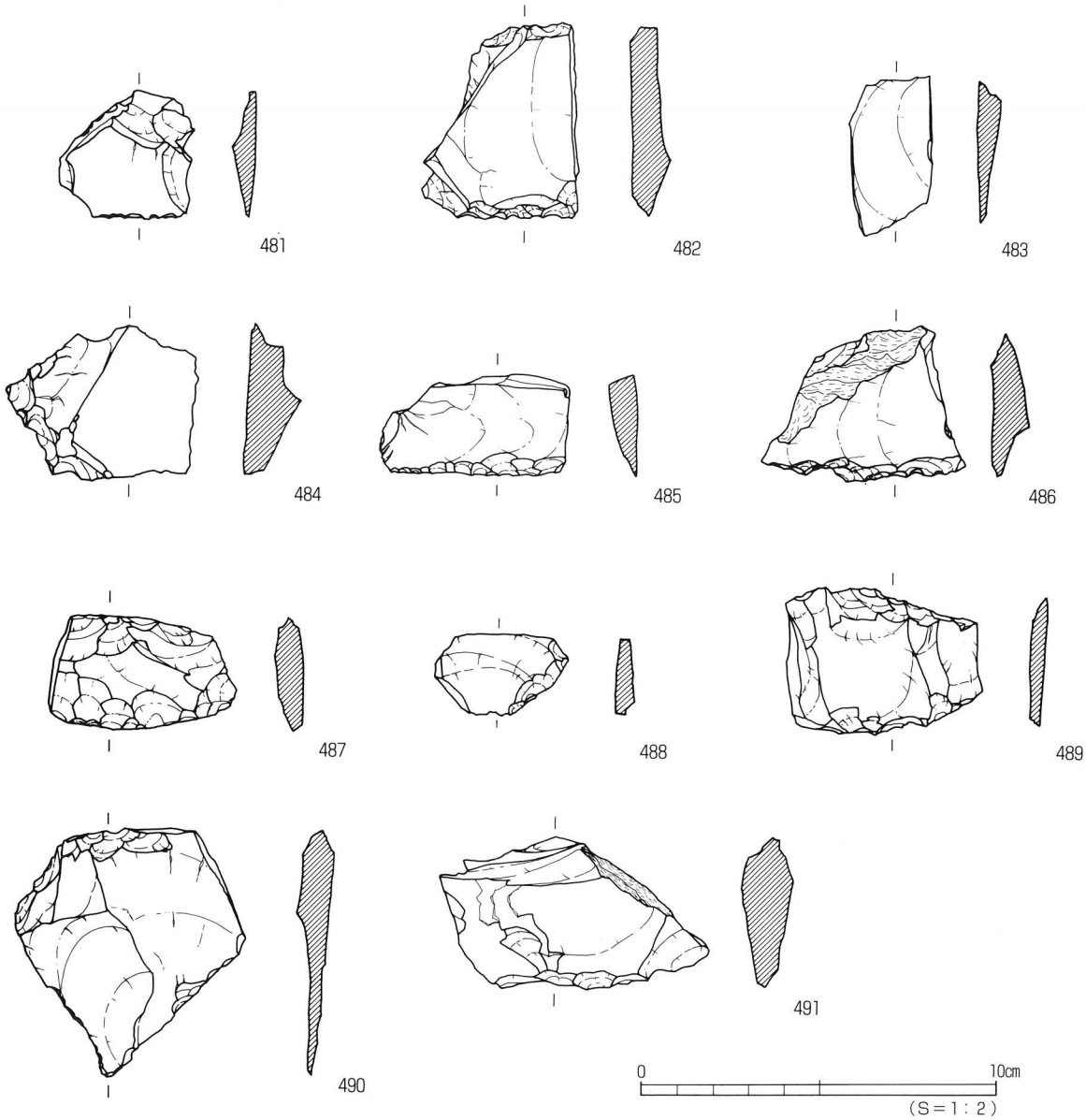
図89　A区第6層出土遺物実測図(18)



挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
472	スクレイパー	サヌカイト		3.8	7.6	0.6	18.9	
473	スクレイパー	サヌカイト		4.3	6.4	0.8	29.6	
474	スクレイパー	サヌカイト		6.3	3.7	0.7	22.7	
475	スクレイパー	サヌカイト		4.1	7.1	0.5	13.6	
476	スクレイパー	サヌカイト		4.0	6.6	1.0	23.9	
477	スクレイパー	サヌカイト		4.8	7.0	1.5	45.3	
478	スクレイパー	サヌカイト		4.5	7.7	1.0	30.2	
479	スクレイパー	サヌカイト		6.1	4.6	1.0	33.6	
480	スクレイパー	サヌカイト		3.8	4.3	0.6	12.1	

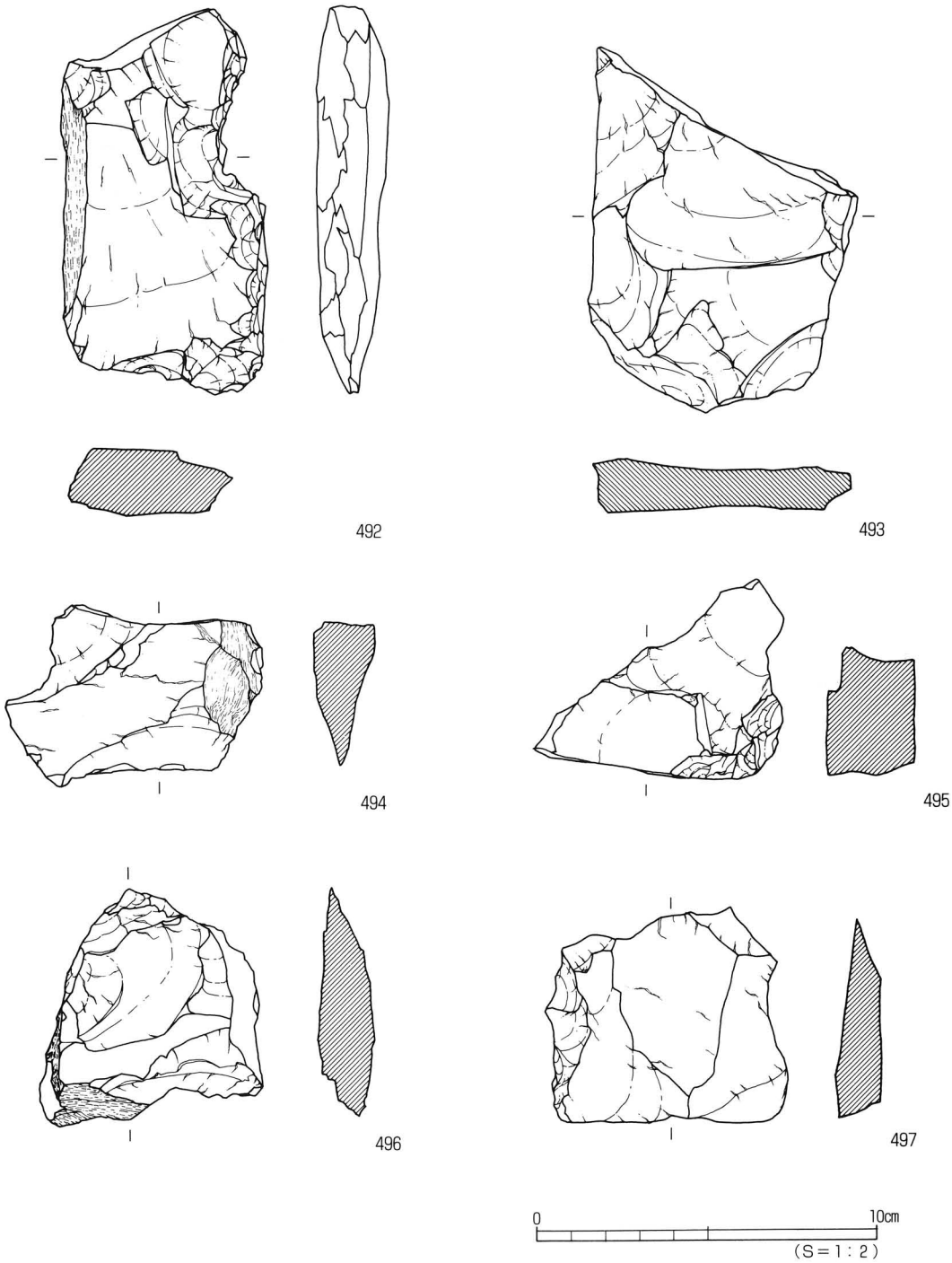
図90　A区第6層出土遺物実測図(19)

もしれない。また、台石のなかには460のように被熱して破損しているものもある。剥片利用の石製品にはサヌカイトのスクレイパー多数と石鏃１点があり、製品ではないが数点の黒曜石の剥片や石核の出土もある。



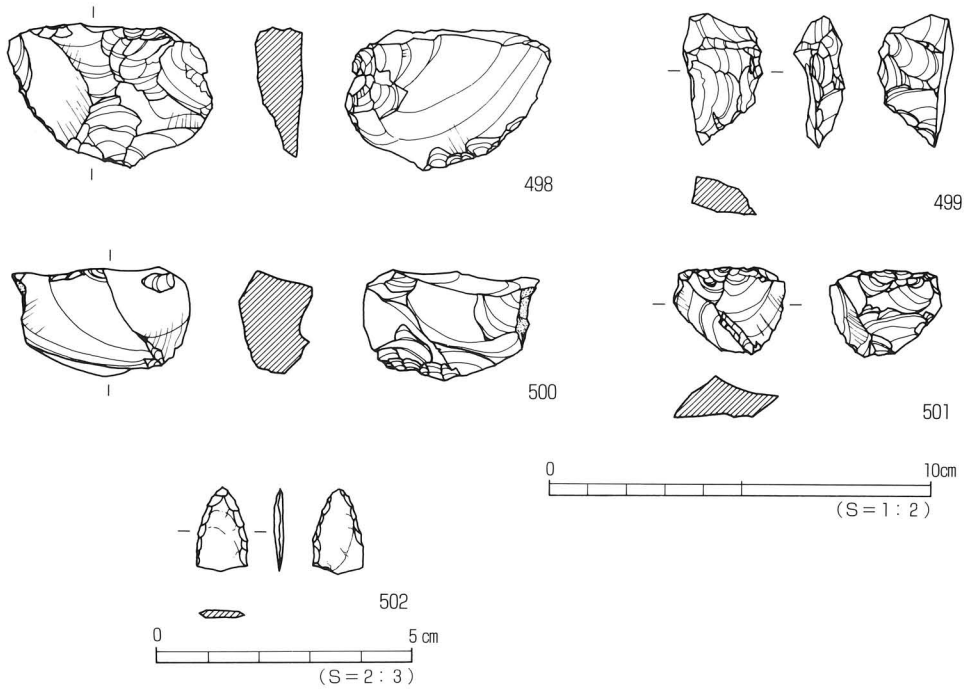
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
481	スクレイパー	サヌカイト		3.6	3.7	0.6	7.7	
482	スクレイパー	サヌカイト		5.5	4.3	1.0	31.8	
483	スクレイパー	サヌカイト		4.5	2.3	0.7	8.6	
484	スクレイパー	サヌカイト		4.4	5.2	1.5	29.9	
485	スクレイパー	サヌカイト		2.7	5.3	0.8	15.9	
486	スクレイパー	サヌカイト		4.7	5.7	1.0	26.8	
487	素材剥片	サヌカイト		3.2	4.9	0.7	19.8	
488	素材剥片	サヌカイト		2.3	3.7	0.5	6.5	
489	素材剥片	サヌカイト		4.1	5.4	0.4	17.3	
490	素材剥片	サヌカイト		6.9	6.4	0.9	32.2	
491	素材剥片	サヌカイト		4.1	7.4	1.4	41.4	

図91　A区第６層出土遺物実測図(20)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
492	石核	サヌカイト		11.5	5.8	2.2	157.3	
493	石核	サヌカイト		7.7	10.8	1.6	168.5	
494	石核	サヌカイト		5.3	7.4	1.8	52.0	
495	石核	サヌカイト		6.9	7.2	2.5	98.7	
496	石核	サヌカイト		7.9	6.5	1.7	96.4	
497	石核	サヌカイト		6.4	7.0	1.3	74.1	

図92　A区第6層出土遺物実測図(21)



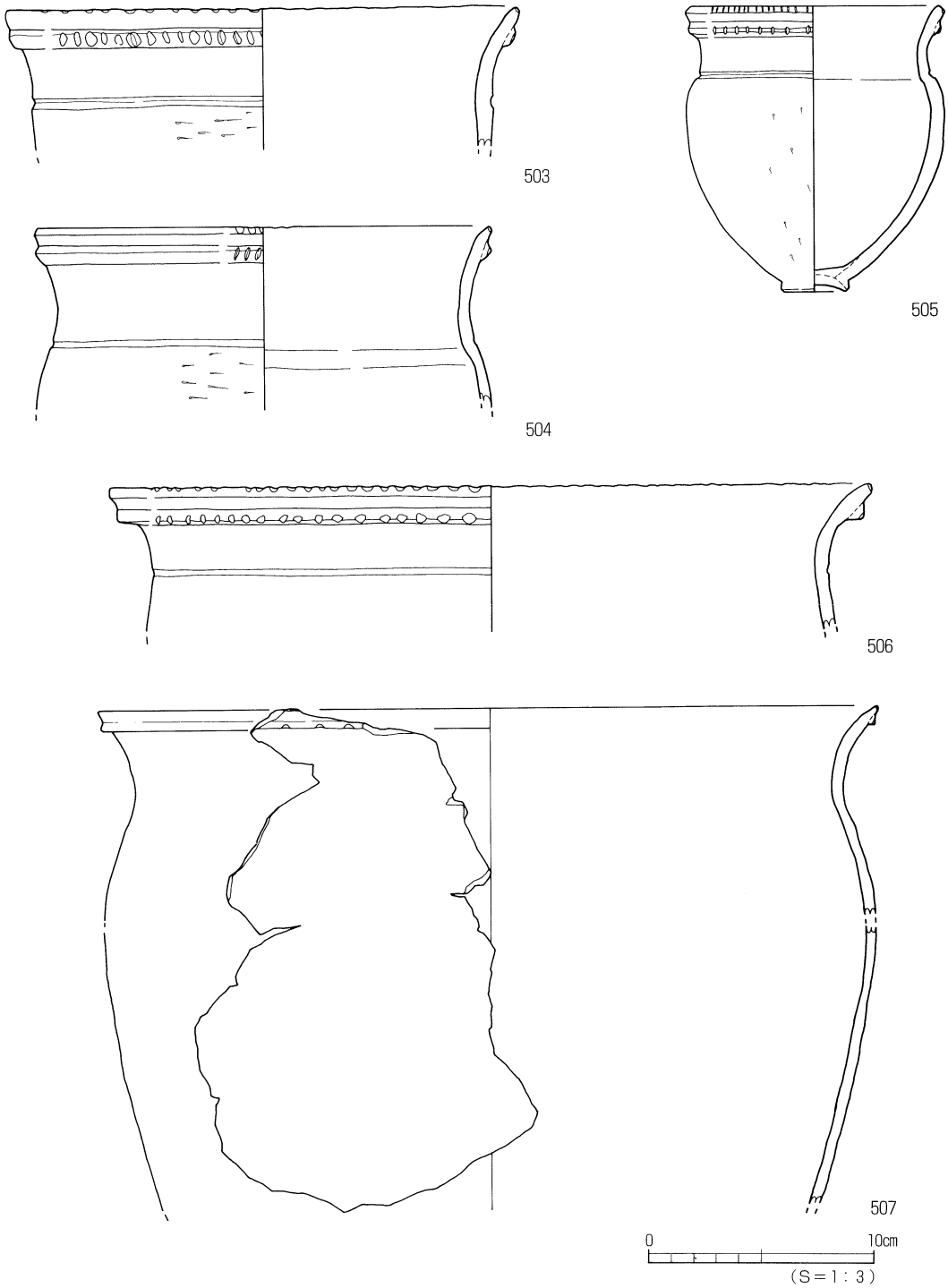
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
498	スクレイパー	黒曜石		5.3	3.7	1.2	24.5	
499	素材剥片	黒曜石		3.5	2.0	1.2	6.7	
500	石核	黒曜石		4.6	3.9	1.9	20.3	
501	石核	黒曜石		2.3	2.9	1.1	6.1	
502	石鏃	サヌカイト	完形	1.7	1.0	0.2	0.3	

図93　A区第6層出土遺物実測図(22)

⑧ 第5層出土遺物（図94～137）

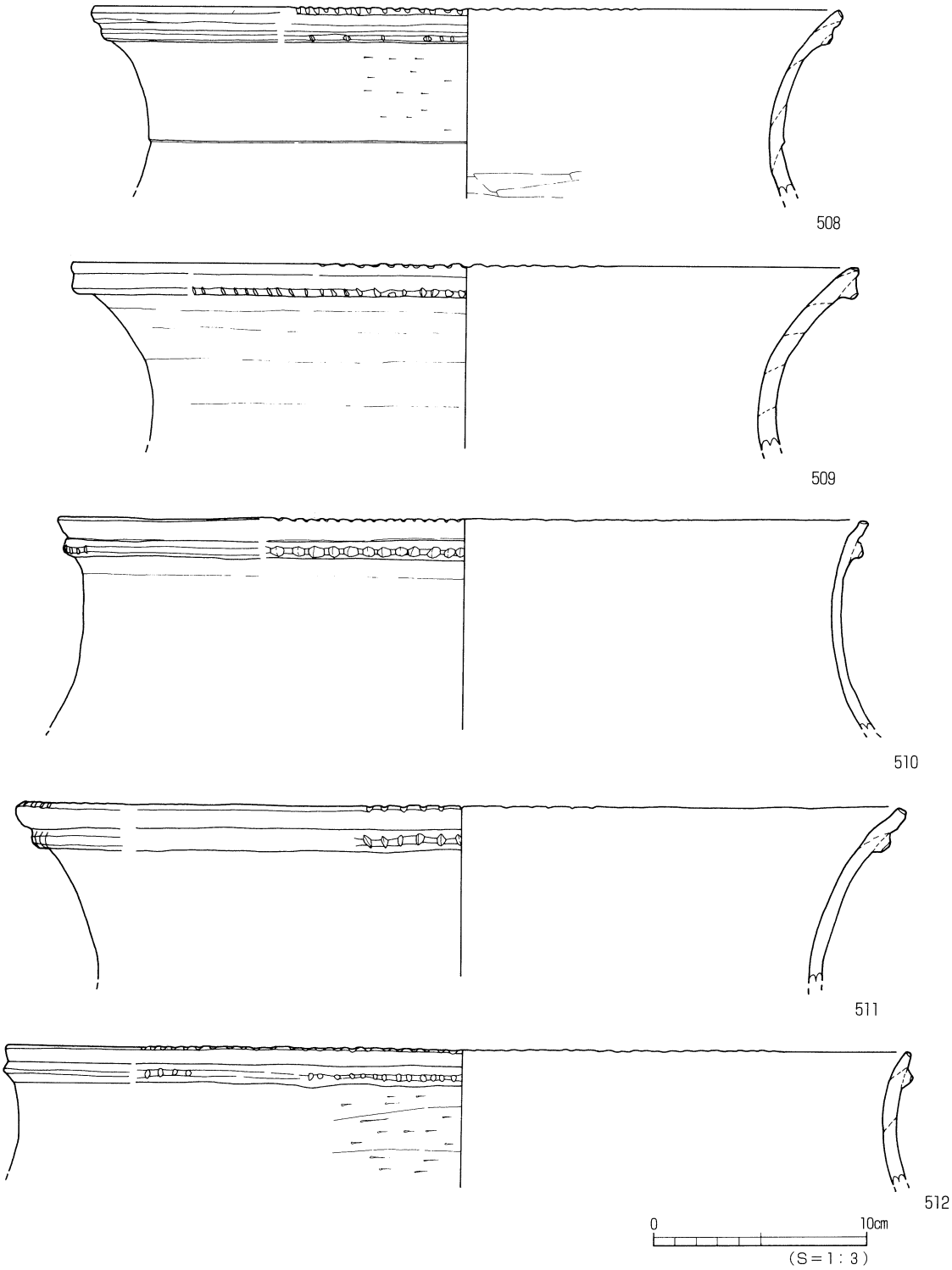
第5層は、湿地の最上位に位置する層であり、かつ北東部で検出された土坑群を覆う包含層で、晩期後半の遺物が含まれている。

深鉢の多くが突帯文深鉢で、わずかに無文粗製のもの、あるいは有文無突帯のものが存在する。突帯文深鉢のうち器型として最も多いのは、図94～102に示されたような頸部で緩やかにくびれて口縁部が外反するものである。ただし、これらの器型のものにもいくつか種類があって、典型例でいうと、453のように胴部があまり張らずに口縁部が外反するもの、508や509のように頸部で強くくびれて外上方に口縁部が大きく外反するもの、さらに510・513のように胴部から内傾気味に頸部がすぼまり口縁部が直立よりもやや外方に外反するものがある。また、これらの器型のそれぞれに頸部の長短がある。そして、ほとんどすべてのものが突帯および口端部の双方に刻み目を施される。したがって、569のような無刻み目のものは例外である。口縁部から底部に至るまでの全容を知ることのできる個体は、小型の505しかないが、第6層の突帯文深鉢でもみたように胴部に削りや条痕の痕跡を残し、頸部より上を撫でたり場合によっては磨きを施したり、調整を使いわけている。さらに503～506にみられるように頸部と胴部の境に凹線や沈線を施したり、509のように境の部分の胴部側を強く削って段を形成して、明確に頸部と胴部を区画する場合がある。図100・101はこの区画された頸部に施文が行われる有文のもので、基本的には550のような2本以上の沈線を用いた連続X字状文を施される場合が多く、551のような縦と斜めの沈線とを組み合わせるような例は稀である。口端部は面を持って



挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
503	深鉢	口～頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	丸	丸形	台形	D字形	黒色	暗黄褐色	
504	深鉢	口～頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	面	丸形	三角形	小D字形	黒褐色	暗褐色	
505	深鉢	口～頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	面	細米粒形	台形	小米粒形	暗茶褐色	暗茶褐色	
506	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	丸形	三角形	D字形	暗灰色	暗黄褐色	砂粒を多く含む。
507	深鉢	マメツ。	マメツ。	マメツ	マメツ	三角形	D字形	灰褐色	灰褐色	

図94　A区第5層出土遺物実測図(1)

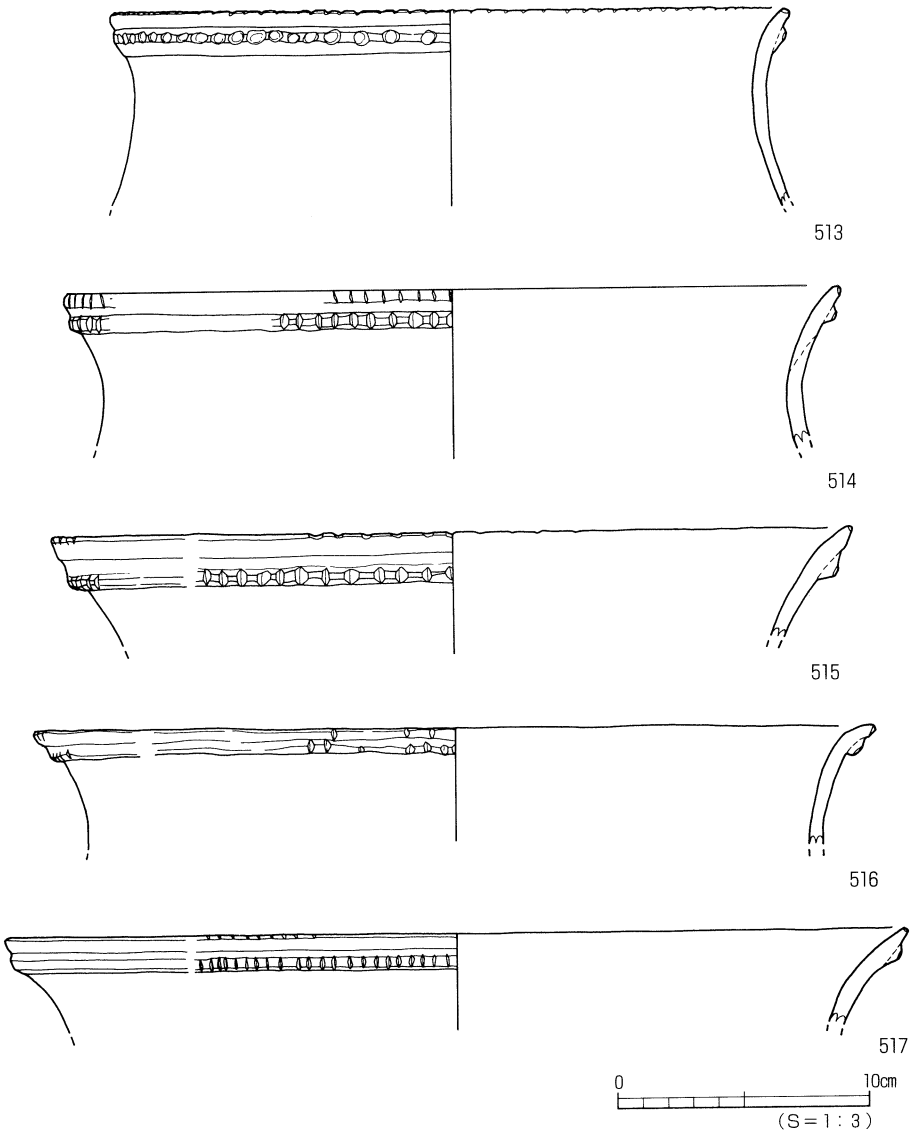


挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
508	深鉢	ナデ。	ケズリ→ナデ。	面	長丸形	台形	小D字形？	黒色	淡黄褐色	
509	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形	台形	小D字形	黒灰色	淡黄褐色	
510	深鉢	ナデ？	ナデ。	面	丸形	台形	D字形	黒色	茶褐色	
511	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	D字形	台形	D字形	黒褐色	淡黄褐色	
512	深鉢	口：ナデ。頸：ケズリ。	ナデ。	面	D字形	三角形	小丸形	黒色	乳白色	

図95　A区第5層出土遺物実測図(2)

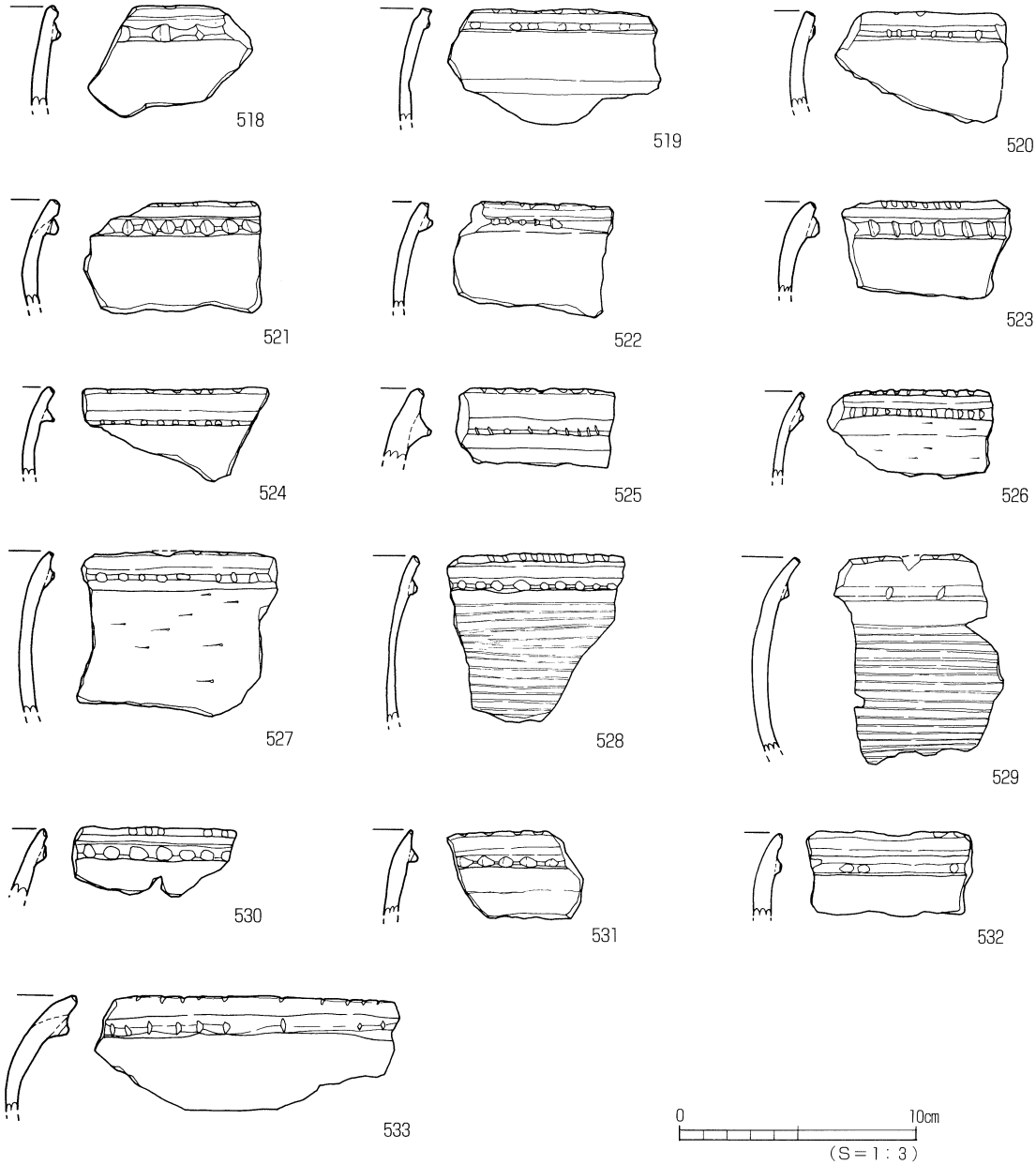
いたり、丸みを帯びていたり、尖り気味に仕上げられたり様々で端部全面を刻まれることが多いが、558や560のように端部の外側を刻まれるものもある。560では断面三角形の突帯の頂部を刻むのではなく、三角形の上辺と口縁部の外面とを同時に刻む特異な例である。なお、粘土帯の接合が確認できるものはすべて内傾接合である。

波状口縁のものも基本的には水平口縁のものと同様の特徴を持っている。突帯の貼り方には2種類あって、ひとつには571のような突帯の正面観が口縁と同様のうねりをみせるものと、570のように口縁のみ波状で突帯の正面観が水平になるものとがある。これらの中にも577のような無刻み目のもの



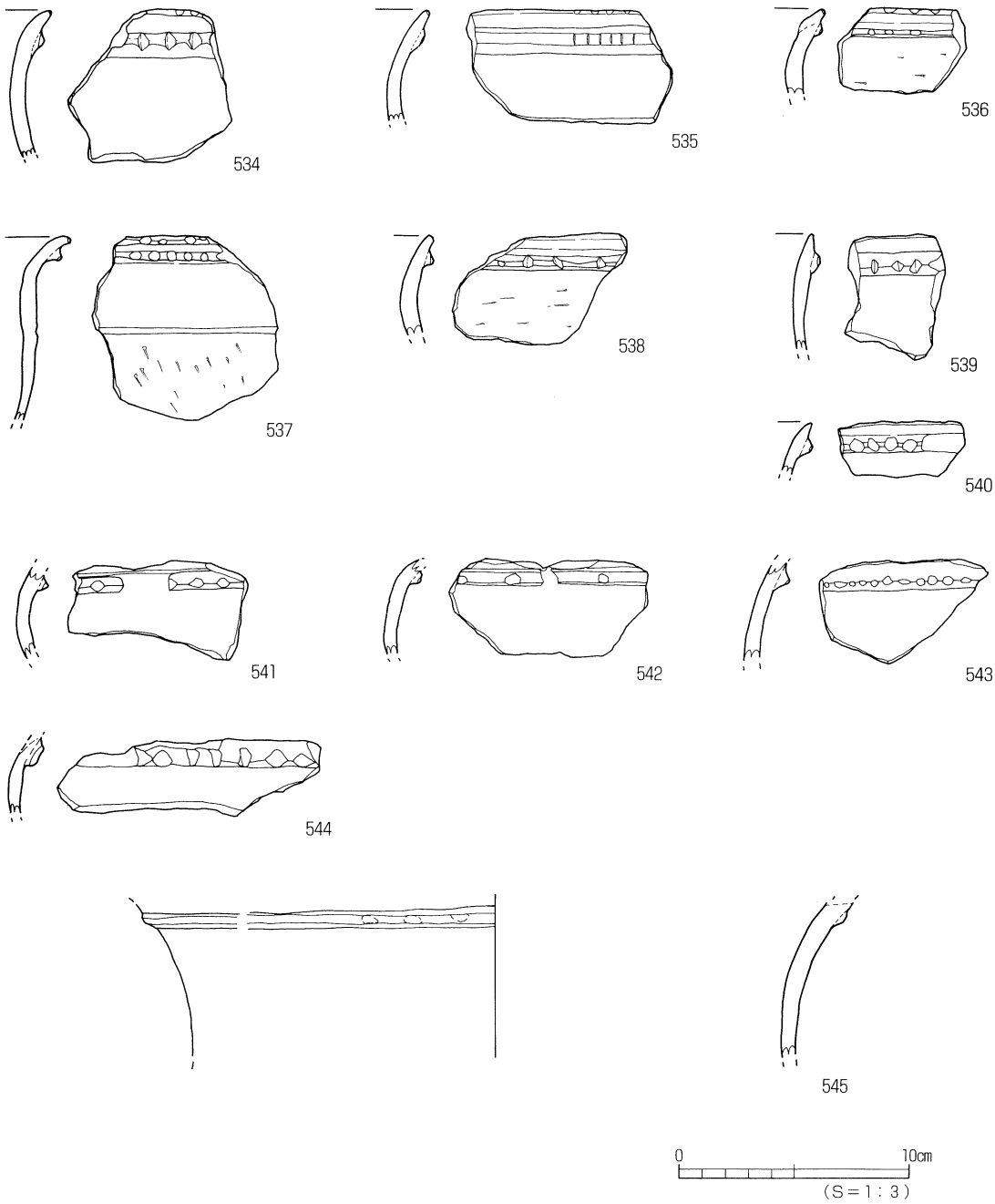
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
513	深鉢	口：ナデ。頸：ケズリ。	マメツ。	面	小D字形	三角形	丸形	黒色	暗黄褐色	
514	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	小D字形	台形	D字形	黒褐色	茶褐色	
515	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	D字形	三角形	D字形	黒褐色	茶褐色	
516	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形	半円形	D字形	黒褐色	灰褐色	
517	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	D字形	三角形	マメツ	黒灰色	橙褐色	

図96　A区第5層出土遺物実測図(3)



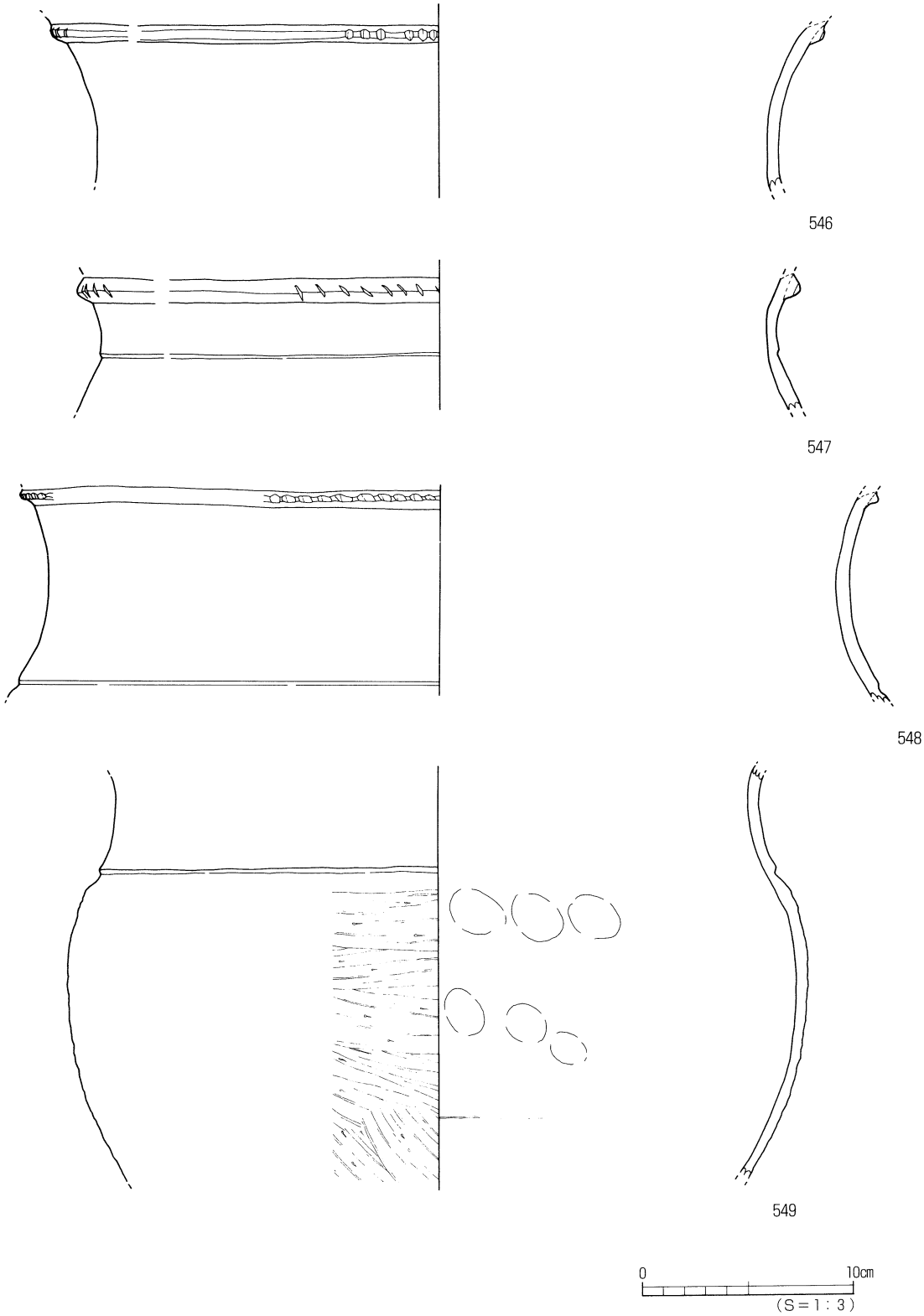
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
518	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形	台形	D字形	黒色	黒褐色	
519	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	小D字形	台形	マメツ	黒色	黒褐色	
520	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	丸形	三角形	米粒形	黒色	淡黄白色	
521	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	小D字形	台形	D字形	黒褐色	黄褐色	
522	深鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸	D字形	三角形	小D字形	黒褐色	黒色	口縁内外面煤付着。
523	深鉢	マメツ。	ナデ。	丸	小D字形	台形	D字形	黒褐色	黒灰色	
524	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	D字形	三角形	D字形	黄褐色	黄褐色	
525	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	D字形	三角形	小D字形	茶褐色	黄褐色	
526	深鉢	頸：ケズリ→ナデ。	ナデ。	面	小D字形	台形	D字形	黄褐色	灰褐色	
527	深鉢	頸：ケズリ。	マメツ。	丸	マメツ	台形	D字形	黄褐色	茶褐色	
528	深鉢	頸：二枚貝条痕。	ケズリ→ナデ。	面	丸形	台形	D字形	黒褐色	淡黄褐色	
529	深鉢	頸：二枚貝条痕。	不明。	面	長方形	三角形	米粒形	黒褐色	灰褐色	
530	深鉢	マメツ。	ナデ。	丸	D字形	三角形	マメツ	黒色	黄褐色	
531	深鉢	ナデ。	ナデ。	尖	D字形	三角形	D字形	黒色	淡黄色	
532	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	マメツ	台形	マメツ	黄橙色	橙色	
533	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	小D字形	台形	D字形	黒褐色	淡灰色	

図97　A区第5層出土遺物実測図(4)



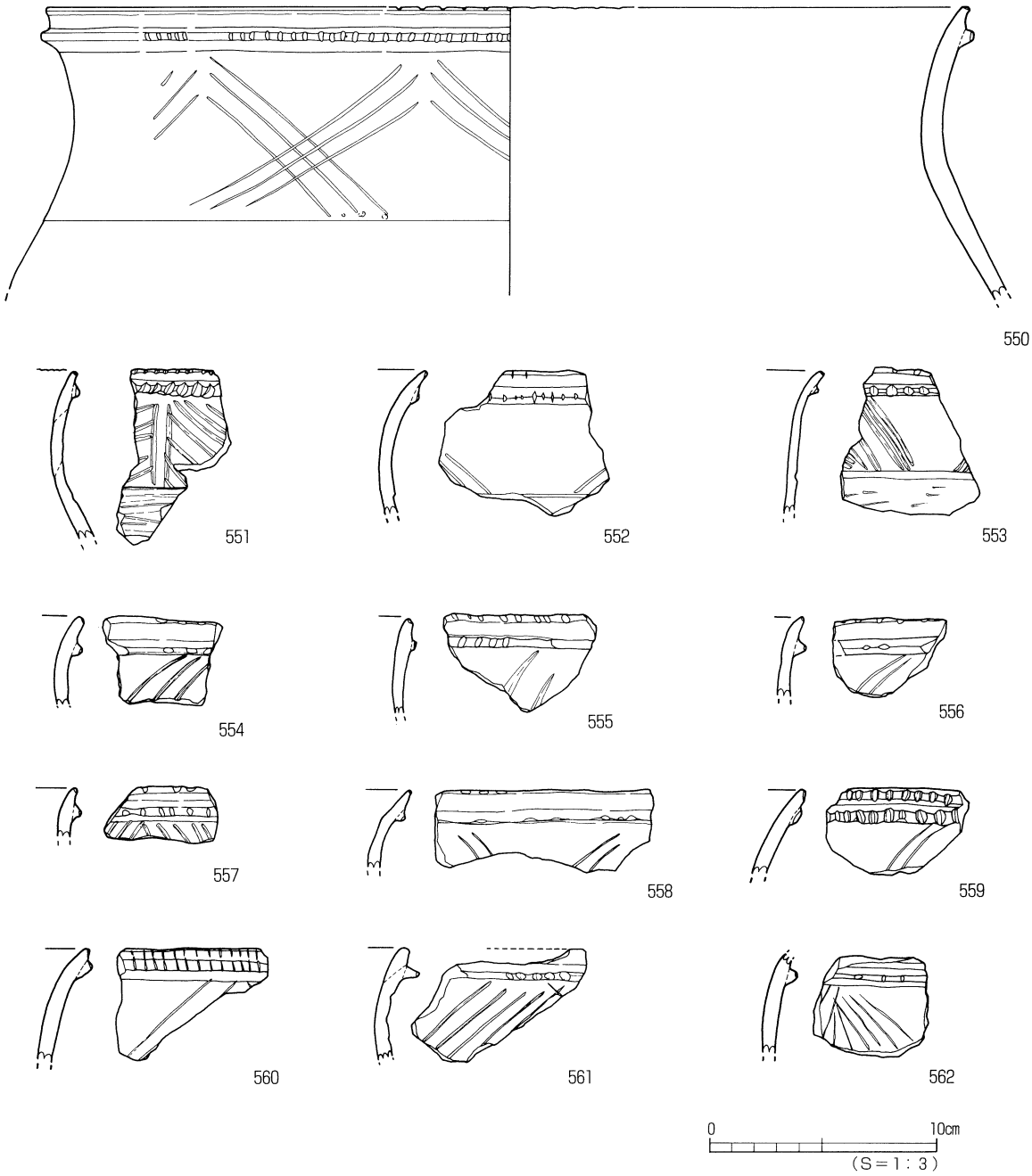
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
534	深鉢	頸：ケズリ。	ナデ。	面	D字形	三角形	D字形	黒褐色	淡黄褐色	
535	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	マメツ	マメツ	マメツ	黒褐色	赤褐色	
536	深鉢	ケズリ？	ミガキ。	丸	丸形	台形	丸形	黒色	淡黄灰色	
537	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	丸	O字形	台形	丸形	茶褐色	黒褐色	
538	深鉢	頸：ケズリ。	ナデ。	面	D字形	三角形	D字形	灰褐色	黄褐色	
539	深鉢	マメツ。	マメツ。	尖	マメツ	台形	小D字形	赤橙褐色	黄褐色	
540	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	マメツ	台形	D字形	黒褐色	灰黄褐色	
541	深鉢	頸：二枚貝条痕。	ナデ。			三角形	D字形	黒褐色	黄褐色	
542	深鉢	不明。	不明。			台形	マメツ	黒色	灰黒色	
543	深鉢	ミガキ。	マメツ。			三角形	D字形	黄褐色	黒褐色	
544	深鉢	ナデ。	マメツ。			台形	D字形	黒褐色	黄褐色	
545	深鉢	マメツ。	マメツ。			台形	マメツ	茶褐色	淡黄褐色	

図98　A区第5層出土遺物実測図(5)



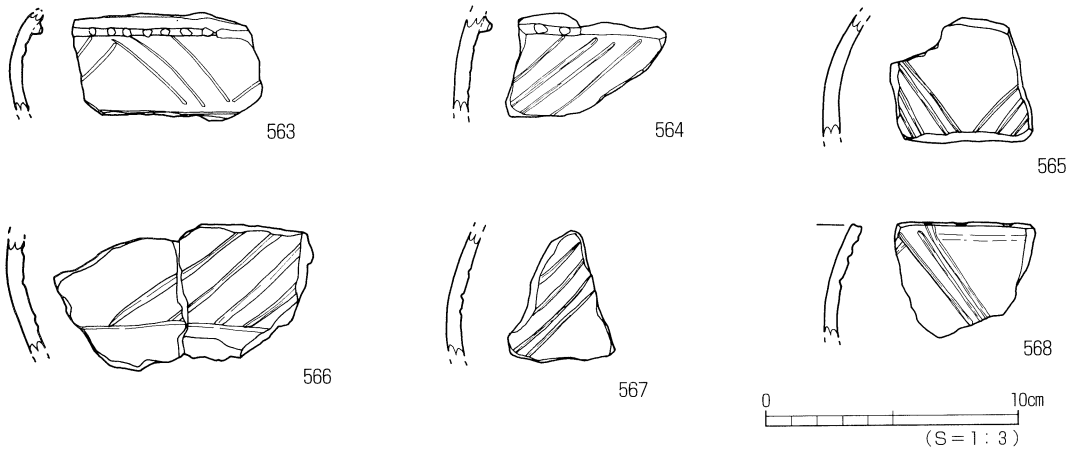
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
546	深鉢	ナデ。	ナデ。			台形	マメツ	黒褐色	茶褐色	
547	深鉢	マメツ。	マメツ。			三角形	小D字形	灰褐色	茶褐色	
548	深鉢	ナデ。	マメツ。			三角形	D字形	黒色	茶褐色	
549	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。					淡灰黄色	灰黄褐色	

図99　A区第5層出土遺物実測図(6)



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
550	深鉢	口～頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	丸	小V字形	台形	長丸形	黒色	黄灰色	頸部施文。
551	深鉢	口～頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	面	小D字形	台形	D字形	灰褐色	黒褐色	頸部施文。
552	深鉢	口～頸：ナデ。	マメツ。	尖	マメツ	三角形	細菱形	褐色	橙褐色	頸部施文。
553	深鉢	口～頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	面	小D字形	台形	D字形	黒色	黒茶褐色	頸部施文。
554	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	小D字形	台形	丸形	茶褐色	黄褐色	頸部施文。
555	深鉢	マメツ。	ミガキ。	丸	マメツ	台形	丸形	灰褐色	褐色	頸部施文。
556	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	マメツ	台形	マメツ	淡橙色	黄褐色	頸部施文。
557	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	小D字形	台形	D字形	灰色	淡黄橙色	頸部施文。
558	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	マメツ	三角形	マメツ	茶褐色	黄灰褐色	頸部施文。
559	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形	半円形	D字形	黒褐色	淡褐色	頸部施文。
560	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	細長形	三角形	細長形	黒色	淡黄灰色	頸部施文。
561	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸		台形	O字形	茶褐色	黒色	頸部施文。
562	深鉢	頸：ケズリ。	ナデ。			三角形	マメツ	淡灰色	淡橙黄色	頸部施文。

図100　A区第5層出土遺物実測図(7)



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
563	深鉢	ナデ。	ナデ。			台形	小D字形	黒色	淡黄灰色	頸部施文。
564	深鉢	マメツ。	マメツ。			台形	小D形	黒褐色	黄灰色	頸部施文。
565	深鉢	ナデ。	ナデ。					黒褐色	淡黄褐色	頸部施文。
566	深鉢	ナデ。	ナデ。					黒褐色	淡黄褐色	頸部施文。
567	深鉢	ナデ。	ナデ。					黒褐色	淡黄褐色	頸部施文。
568	深鉢	ナデ。	ナデ。	面				黒色	茶褐色	頸部施文。

図101　A区第5層出土遺物実測図(8)

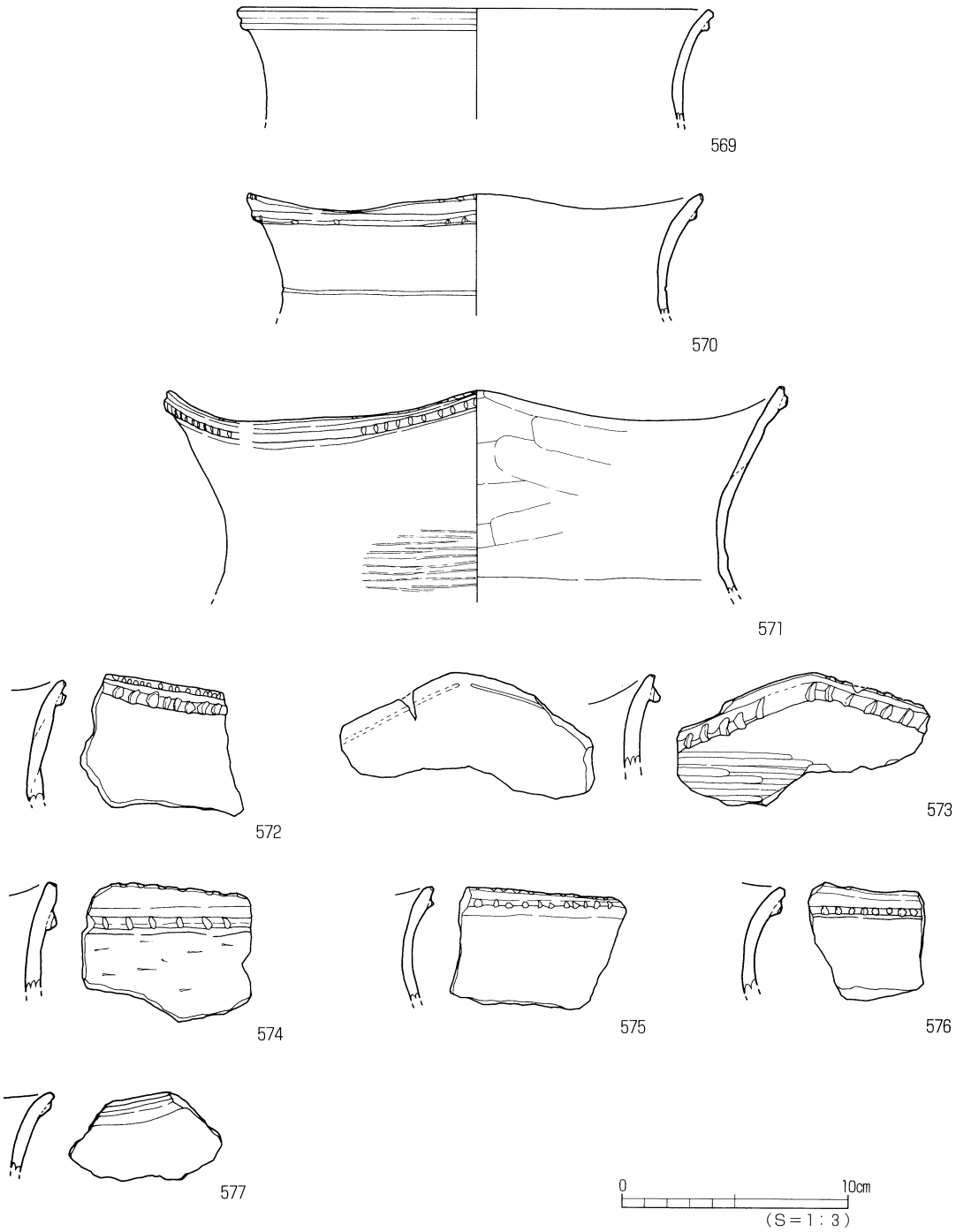
が一例だけ特異な例としてみられる。

図103には単純なバケツ形の器型のものを示してある。これらの中にも上述の一群と同様に胴部と口頸部との調整を使いわける582のようなものもみられるが、多くは撫でで仕上げる突帯直下まで削りや条痕を残している。578以外のものは口端部、突帯の両部位を刻まれる。578の口端部無刻み目とともにボテッとした突帯に大きな刻み目と、搬入品を思わせる異質な土器である。583では口端直下の内面に凹線が1条巡っている。異質という意味では、図104の584の逆「く」の字に屈曲する胴部も同様で、東北部九州の影響を受けたものであろう。

同じく図104に胴部突帯を持つものを示しておいた。585は二条突帯深鉢で、実際に口縁部と胴部の双方に突帯が確認できるものはこの1点のみである。当地では突帯文を遡る瀬戸内谷尻式併行期に、口縁部に突帯を持たず、胴部に突帯を有する有文深鉢が存在するので、これらの胴部片のすべてを二条突帯深鉢と断定することはできない。

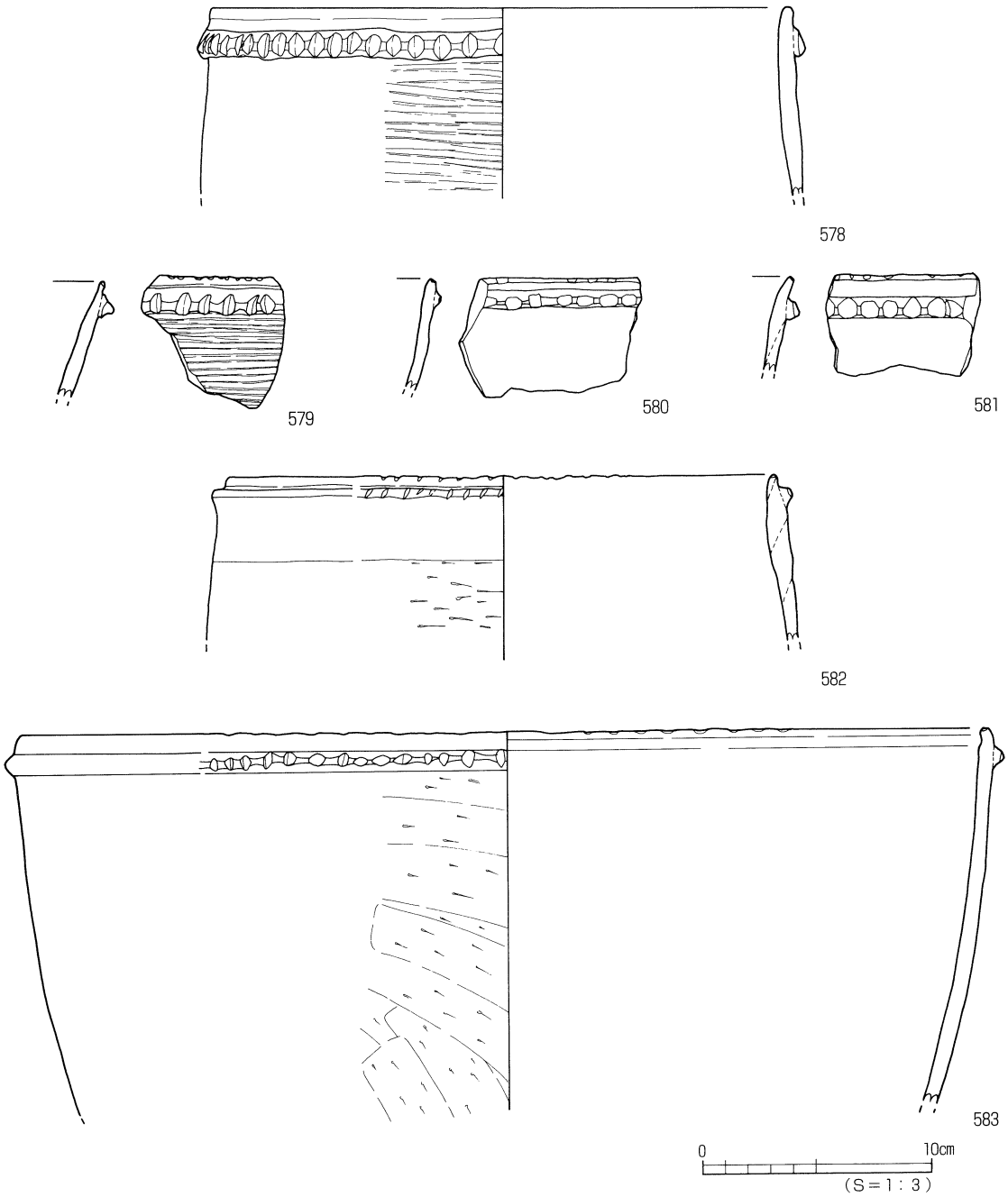
浅鉢のうち図106に示したのは、口端部が内面に丸く肥厚したり、鍵形をなすもので、594は胴部で稜を持って屈曲し、口頸部が直線的に外上方に開くもの。口端部は内面に丸く肥厚し、鰭状突起を伴う。この層の浅鉢のうち最も遡るもので混入の可能性がある。鍵形口縁のものは頸部で一旦くびれて胴が張るものと、592や593のような単純な器型のものとがある。図107の頸～胴部はこれら鍵形口縁のうち前者に伴うものである。図108・109は波状口縁のもの、このうちには605～608、611のような小型の方形浅鉢がある。また、603も口縁部、胴部ともに俯瞰形が隅丸方形となっている。602は刻み目突帯と口端部刻み目を持つもので、深鉢としたほうがよいかもしれないが、若干浅く、内面を磨いたり手法が浅鉢的なのでここに含めている。

図110～113は逆「く」の字口縁、あるいはその系列？に含まれるものであるが、口縁部の形態で数種に分類することができる。図110は口縁部の立ち上がりが極端に短いもので、極端な場合、断面三



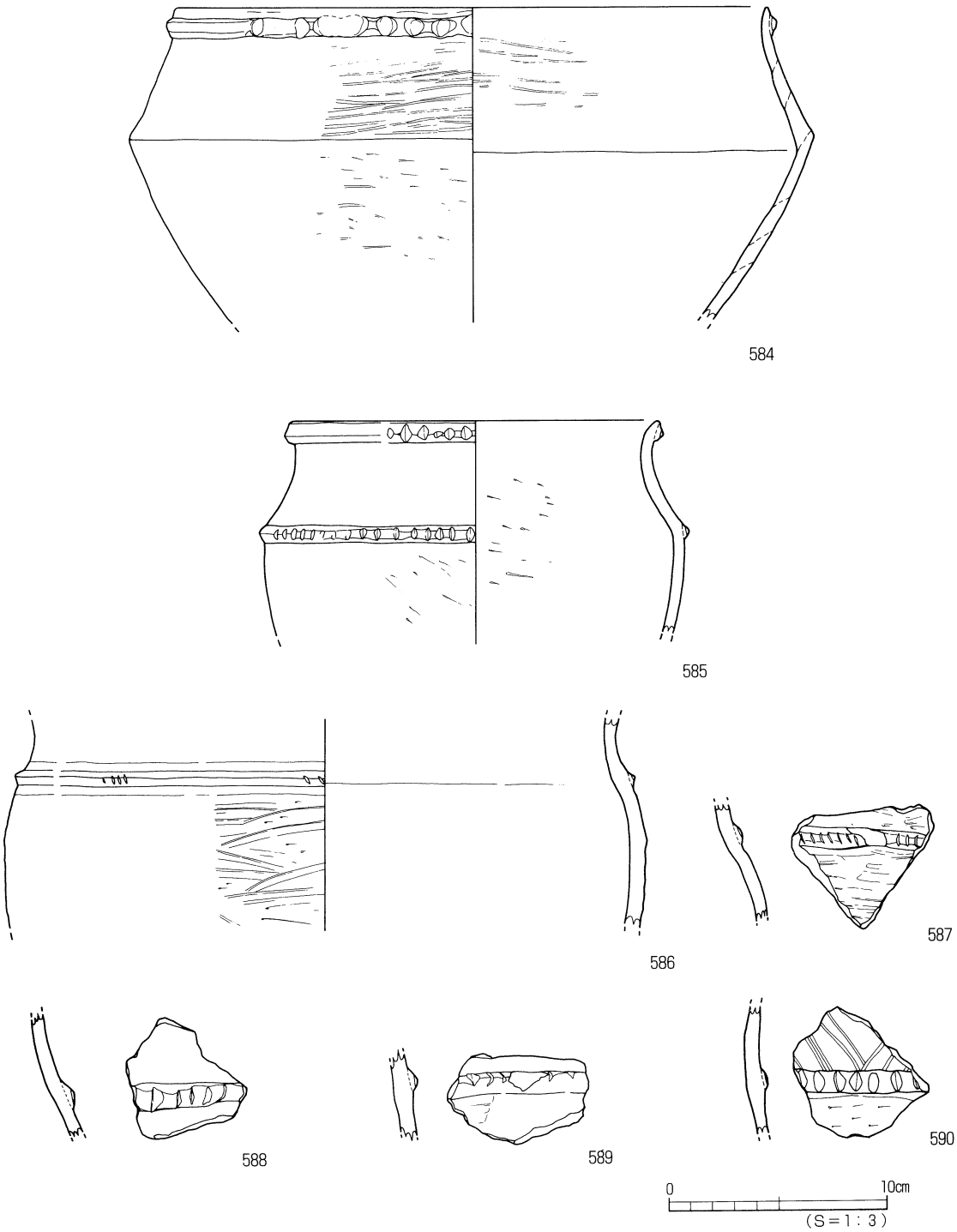
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
569	深鉢	ナデ。	ナデ。	面		台形		黒褐色	灰褐色	
570	深鉢	不明。	不明。	丸	マメツ	三角形	マメツ	茶褐色	橙色	石英（大）多含。
571	深鉢	口：器面荒れ胴：二枚貝条痕。	口：ケズリ→ナデ？ 胴：ケズリ。	丸	丸形	台形	D字形	淡橙褐色	淡橙褐色	
572	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	D字形	台形	C字形	黒褐色	黒褐色	
573	深鉢	頸：二枚貝条痕→ナデ。	ナデ。	面	D字形	台形	D字形	茶褐色	黒褐色	口縁内面沈線。
574	深鉢	口：ナデ。頸：ケズリ。	ナデ。	面	D字形	半円形	D字形	黒褐色	黒灰色	
575	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	マメツ	三角形	マメツ	茶褐色	黒褐色	
576	深鉢	マメツ。	ナデ。	面	マメツ	台形	D字形	灰褐色	灰黄色	
577	深鉢	ナデ？	マメツ。	面		三角形		灰褐色	灰褐色	

図102　A区第5層出土遺物実測図(9)



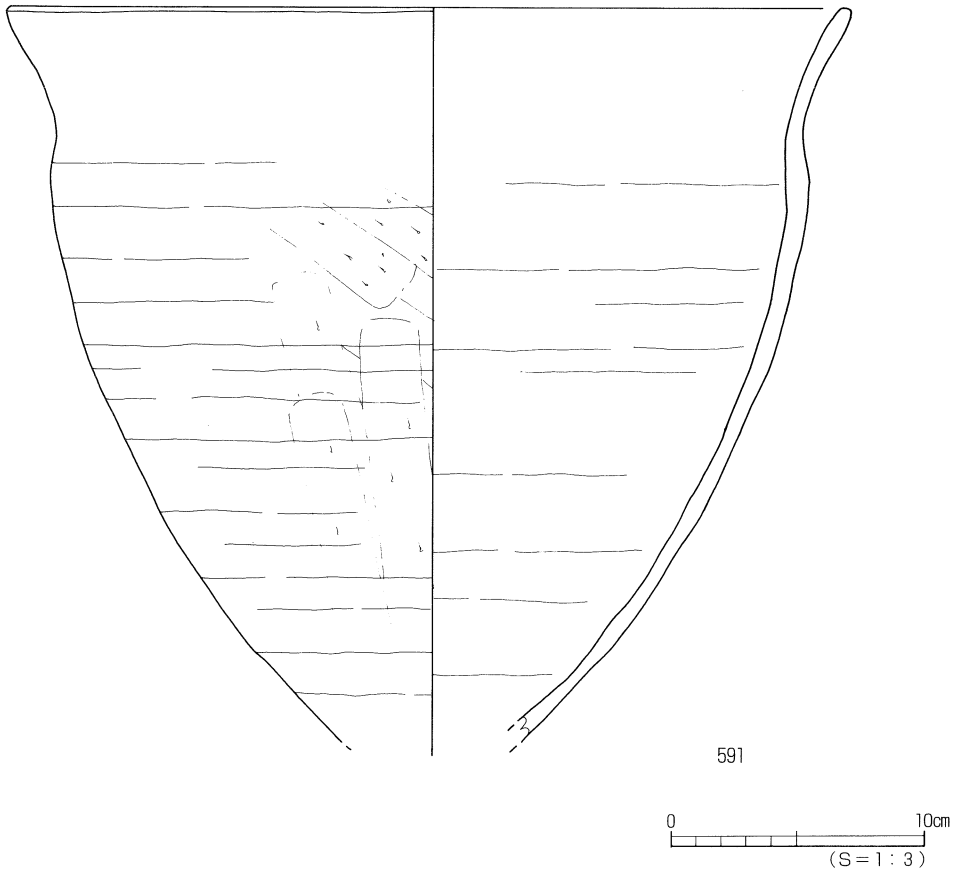
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
578	深鉢	口：ナデ。胴：二枚貝条痕。	ナデ。	丸		半円形	D字形	黒褐色	黄茶褐色	
579	深鉢	口：ナデ。胴：二枚貝条痕。	ナデ。	尖	マメツ	三角形	小D字形	黒褐色	黄褐色	
580	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	マメツ	台形	D字形	黄褐色	黄褐色	
581	深鉢	頸：ケズリ→ナデ。	ナデ。	面	丸形	半円形	D字形	茶褐色	黒褐色	
582	深鉢	口：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	丸	小D字形	台形	小D字形	暗褐色	暗褐色	
583	深鉢	口：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	面	丸形	三角形	丸形	暗褐色	淡褐色	

図103　A区第5層出土遺物実測図(10)



挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
584	深鉢	二枚貝条痕。	頸：二枚貝条痕。胴：ナデ。	尖		台形	D形	暗褐色	暗茶褐色	
585	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ケズリ→ナデ。	尖		三角形	菱形	淡褐色	暗褐色	
586	深鉢	胴：二枚貝条痕。	ケズリ。			三角形	小D字形	黒灰色	暗橙褐色	
587	深鉢	胴：二枚貝条痕。	不明。			台形	小D字形	黒褐色	淡褐色	
588	深鉢	頸：ナデ。	マメツ。			三角形	D字形	灰褐色	淡橙色	
589	深鉢	胴：ケズリ。	マメツ。			三角形	マメツ	黒褐色	橙褐色	石英多含。
590	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。			半円形	D字形	黒色	淡黄褐色	

図104　A区第5層出土遺物実測図(11)



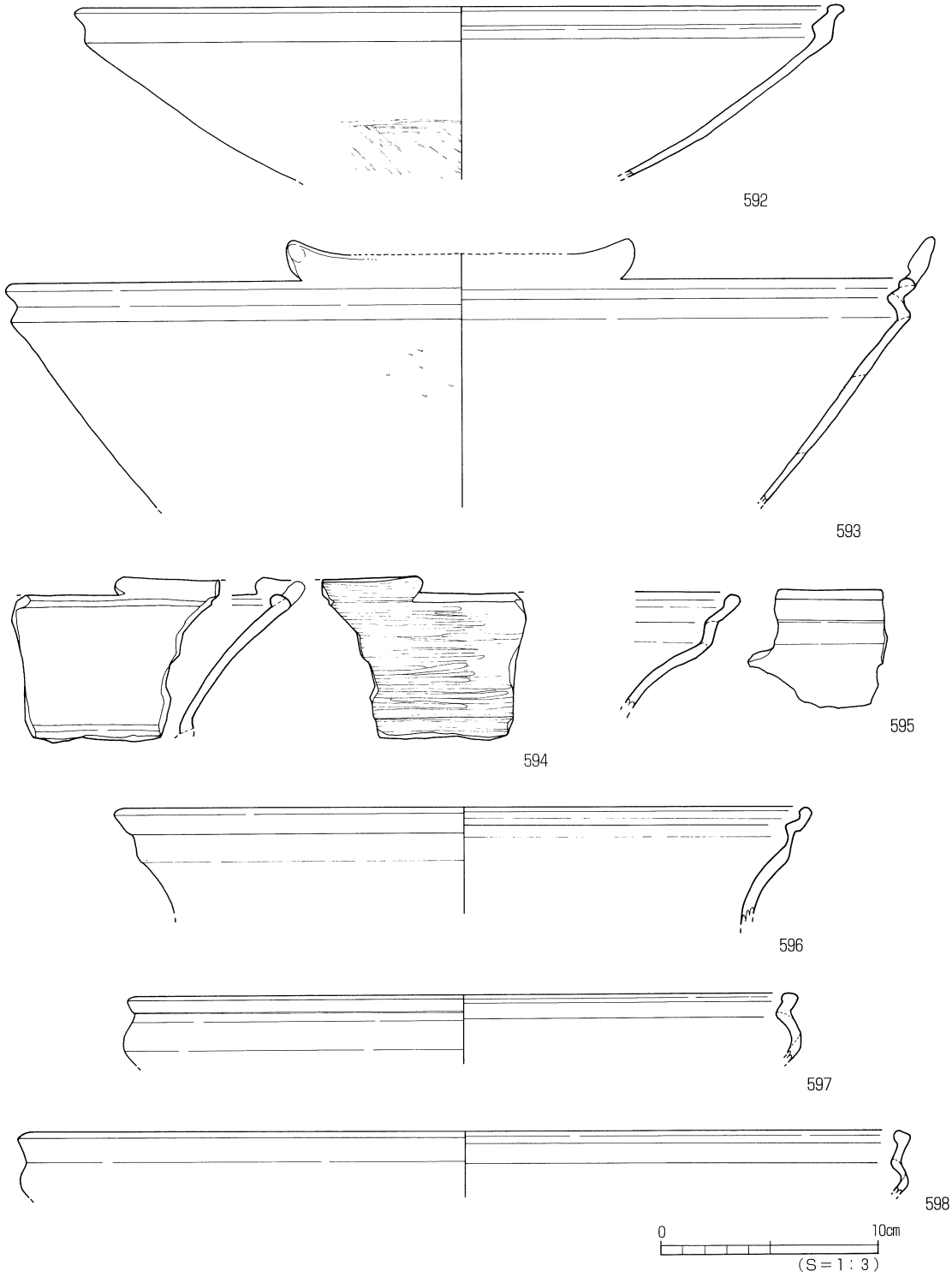
挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
591	深鉢	口～頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	丸	不明			暗褐色	暗茶褐色	

図105　A区第5層出土遺物実測図(12)

角形の粘土帯を突帯状に載せただけといったものもある。図111は立ち上がりが若干長く、内傾気味のもの、図112は長めの口頸部が直立気味に立ち上がるもので、立ち上がりの部分に沈線を伴う。このような形態のもののなかには、図113の635・636のように口端部の折り曲げが極端に強いものがある。637～639は口縁部の内傾度が非常に強く、若干器型が深めになるものである。その他、内湾しながら内傾する口縁部の破片が2点ある。外面の口端部をやや下がった位置に削り出したような段があり、また胴部との境と考えられる位置に1条の沈線が巡る。逆「く」の字口縁浅鉢の一種になるのか、砲弾形のような器型になるのか判然としない。

図114は椀形のもの、これらの中にも内外面ともに磨きないし撫でで調整するものと、内面のみを入念に仕上げて外面には条痕を残すものとがある。内外面とも入念に仕上げられたものには644のように丹塗りが施されるもの、646のような朱塗りがされるもの、さらに650のように朱漆が塗られるものなどがある。

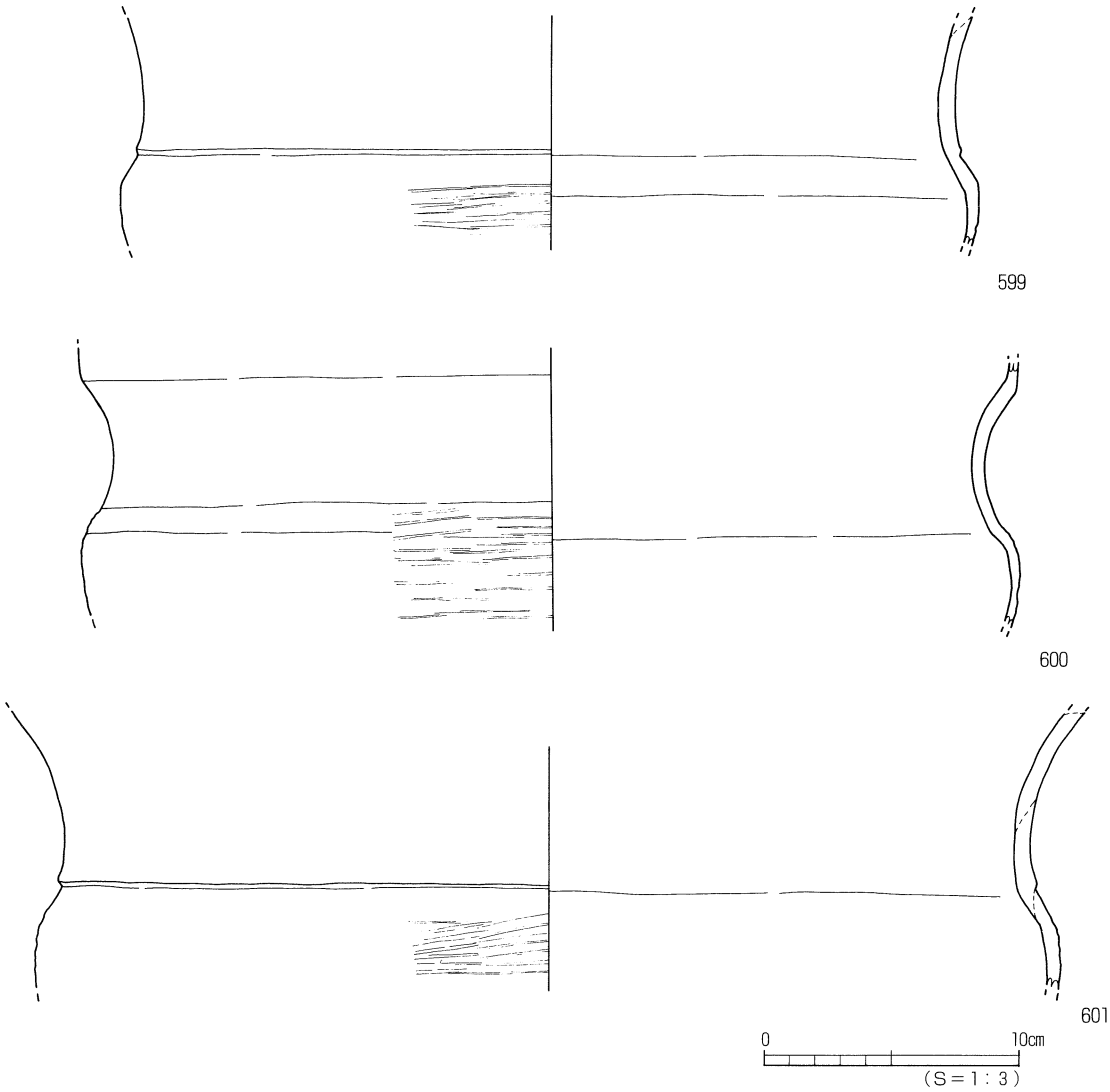
この層では壺が何個体か出土しており、口頸部の形態で大きく2つのタイプに分けることができる。ひとつは、653・654のような直立気味の筒状の頸部で口端部を少し外反させるもの、いまひとつは655～657のように内傾する頸部から口端部が外反するもので、656や657をみていると頸部の長短、内傾の度合い、さらに口端部の折り返しの強弱などのバリエーションがあるようである。658や660では



挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
592	浅鉢	口：ミガキ。胴下半：条痕。	ミガキ。	鍵形				暗茶褐色	黒灰褐色	ヒレ状突起。
593	浅鉢	口：マメツ。胴：ケズリ。	マメツ。	面				暗灰褐色	暗黄褐色	ヒレ状突起。
594	浅鉢	口～頸：ミガキ。	マメツ。	面				灰褐色	灰褐色	
595	浅鉢	ナデ。	口：ナデ。頸：ミガキ。	鍵形				暗茶褐色	暗茶褐色	
596	浅鉢	口：ミガキ。頸：マメツ。	口：ミガキ。頸：マメツ。	鍵形				灰茶褐色	灰茶褐色	
597	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	鍵形				乳白色	乳白色	
598	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	鍵形				暗茶褐色	褐色	

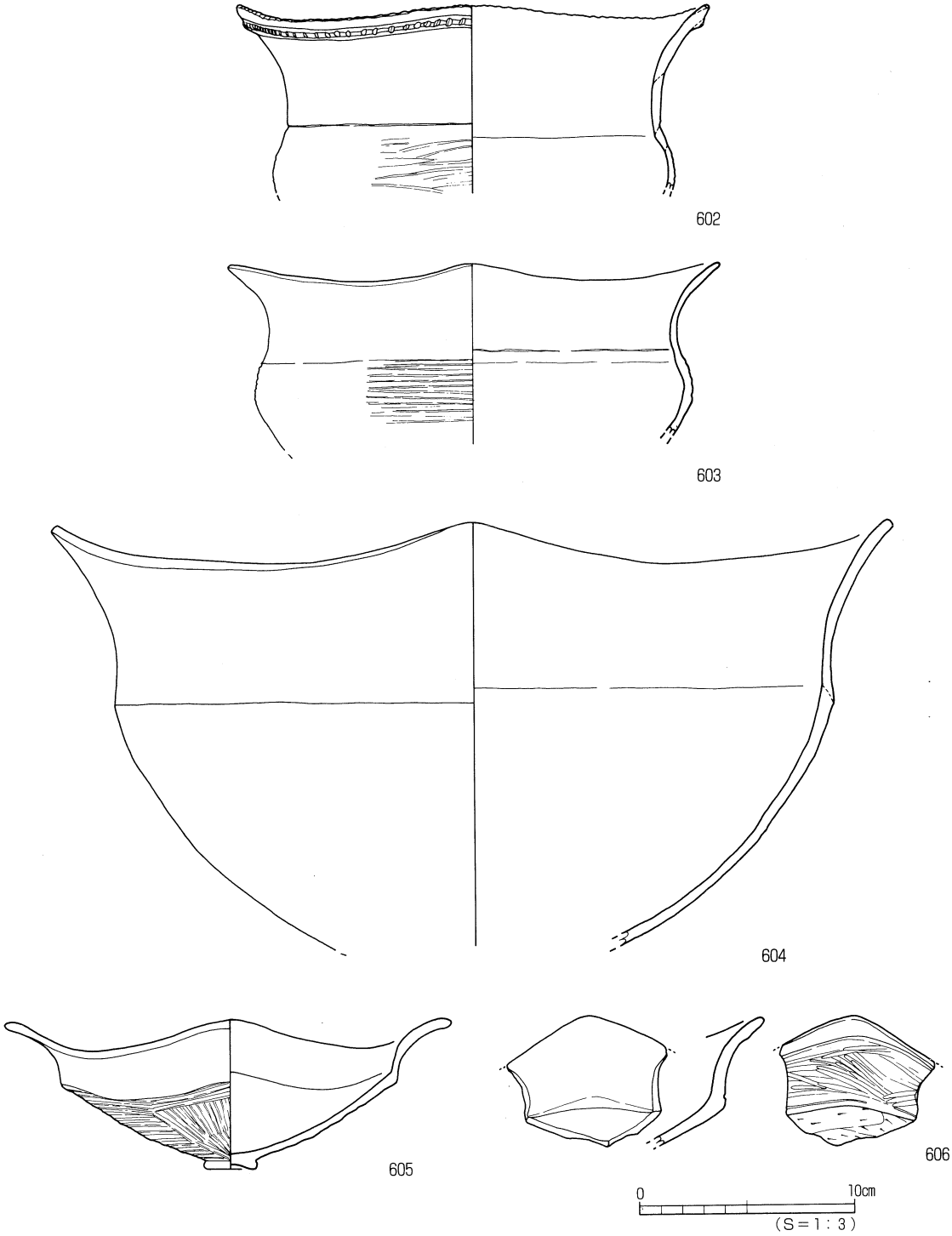
図106　A区第5層出土遺物実測図(13)

頸部と肩部の境に若干の段を持ち、特に660では凹線風の段となっている。658では肩が少し張るが極端な張りを持つものはない。また、662のように段も肩部の張りも持たないものもある。これらの壺のうち、658・659・663には丹塗りが施されており、胴部の形態がほとんど球体に近い659の肩部には黒色の「八つ手の葉」状の施文が施されている。この施文は顔料を用いたものではなく、黒斑のように炭素を吸着させて施されたもので、器表面の研磨の方向が観察できる部位はあまりないが、観察できる範囲では縦から斜めでる。658における器表面の摩滅、あるいは663の残存部位がやや肩部より下がった部位であることから確定的なことは言えないが、これらの壺も同様の施文を持っていた可能性がある。658は赤色塗彩部分そのものがほとんど剥落しているが、肩部にやはり似通った黒斑が看取



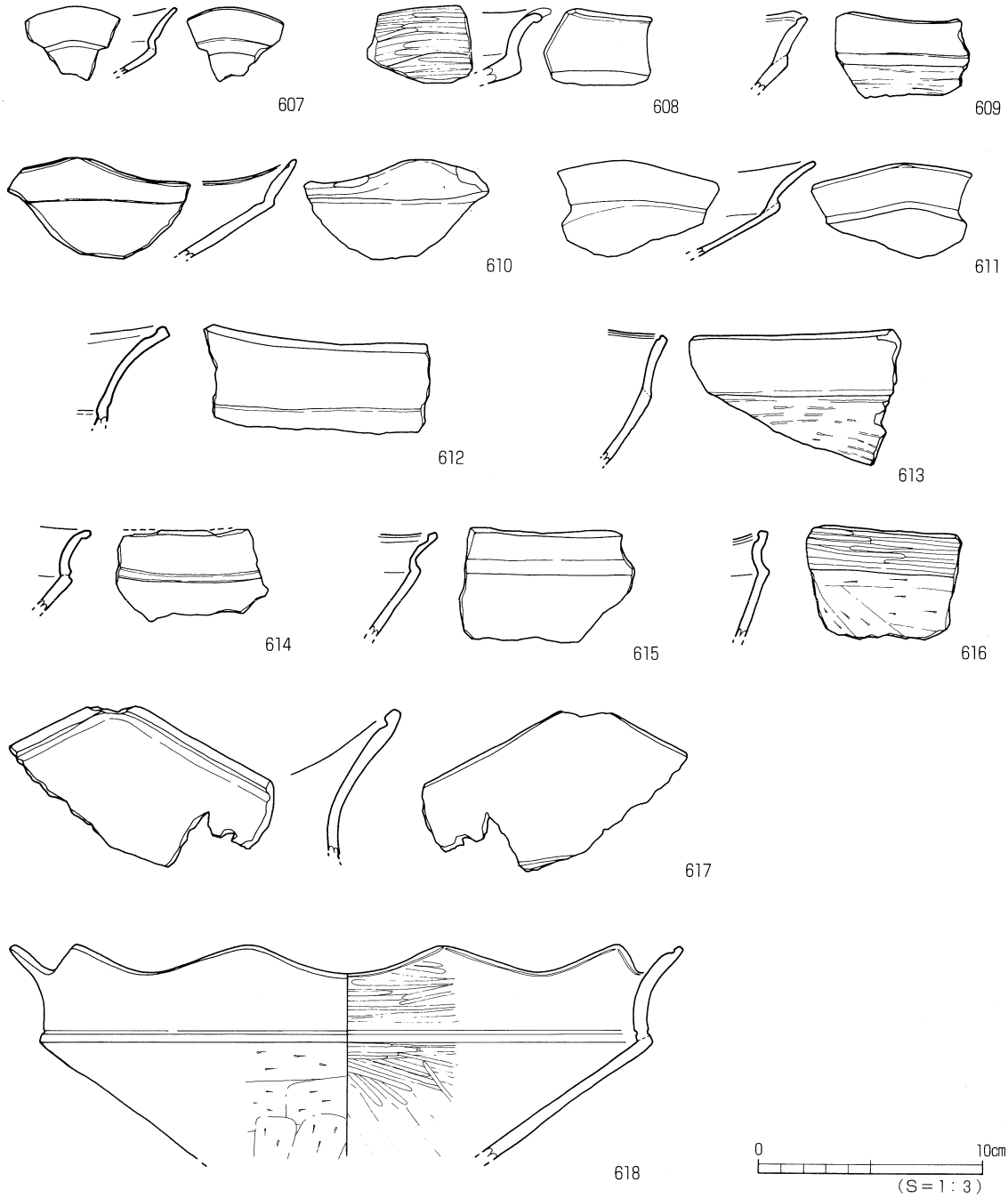
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
599	浅鉢	頸：マメツ。胴：二枚貝条痕。	ナデ？					灰褐色	橙色	金雲母混入。
600	浅鉢	頸：不明。胴：二枚貝条痕。	ナデ？					暗褐色	茶褐色	
601	浅鉢	頸：ナデ？　胴：二枚貝条痕。	ナデ。					黒色	茶褐色	

図107　A区第5層出土遺物実測図(14)



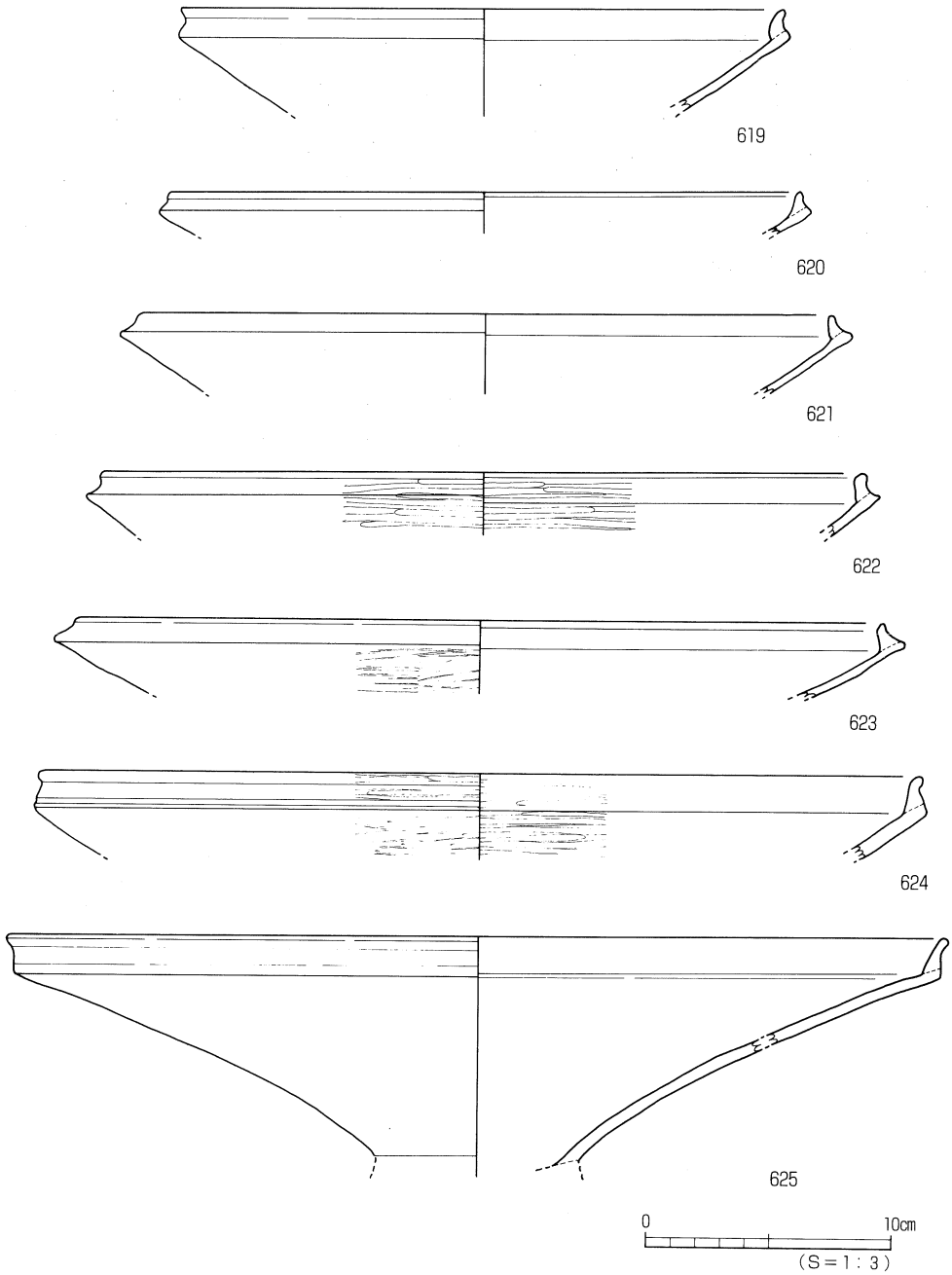
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
602	浅鉢	口～頸：ナデ。胴：二枚貝条痕。	ナデ。	丸	O字形	半円形	D字形	黒色	暗褐色	
603	浅鉢	口～頸：ナデ。胴：二枚貝条痕。	ミガキ？	面				灰黄色	橙褐色	方形浅鉢。
604	浅鉢	口～頸：ミガキ。胴：マメツ。	口～頸：ミガキ。胴：マメツ。	面				灰褐色	橙褐色	
605	浅鉢	口～頸：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	マメツ。	丸				橙褐色	褐色	方形浅鉢。
606	浅鉢	口～頸：ミガキ。胴：ケズリ。	ミガキ。	面				褐色	褐色	方形浅鉢。

図108　A区第5層出土遺物実測図(15)



挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
607	浅鉢	口：ナデ？　胴：ケズリ。	ミガキ。					灰褐色	褐色	方形浅鉢。
608	浅鉢	口：ミガキ？　胴：ケズリ。	ミガキ。	丸				暗灰色	褐色	方形浅鉢。
609	浅鉢	口：ミガキ。胴：ケズリ。	マメツ。	丸				淡褐色	暗褐色	
610	浅鉢	マメツ。	ミガキ？	丸				褐色	灰褐色	
611	浅鉢	口：ミガキ？　胴：マメツ。	マメツ。	面				灰褐色	灰褐色	方形浅鉢。
612	浅鉢	ケズリ→ナデ。	ミガキ？	面				灰褐色	茶褐色	
613	浅鉢	口：マメツ。胴：ケズリ。	マメツ。	面				灰色	灰白色	
614	浅鉢	口：マメツ。胴：ケズリ。	ミガキ。	丸				灰色	灰褐色	
615	浅鉢	マメツ。	ミガキ。	面				灰褐色	灰色	
616	浅鉢	口：ミガキ。胴：ケズリ。	ミガキ？	面				灰褐色	灰褐色	
617	浅鉢	不明。	ナデ。	面				褐色	灰褐色	
618	浅鉢	口：ミガキ。胴：ケズリ。	ミガキ。	面				灰色	灰色	

図109　A区第5層出土遺物実測図(16)



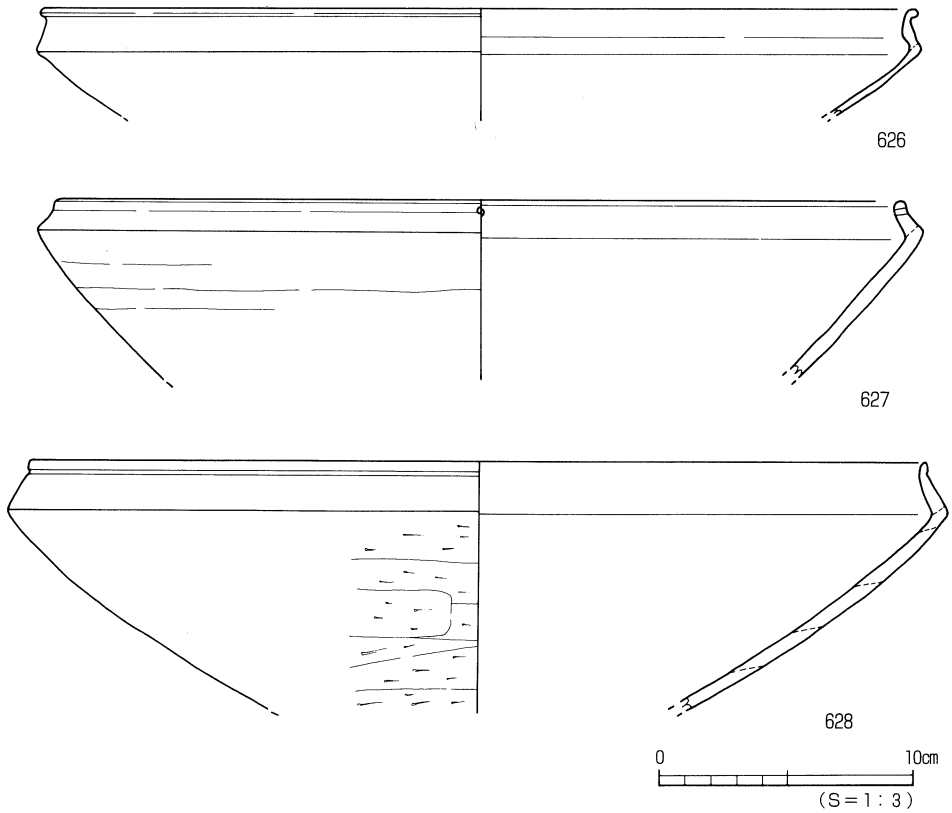
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
619	浅鉢	口：ナデ。胴：ケズリ？	マメツ。	尖				暗灰褐色	暗灰褐色	
620	浅鉢	ナデ。	ナデ。	尖				淡黄色	褐色	
621	浅鉢	口：ミガキ。胴：ケズリ？	不明。	尖				黒褐色	黒褐色	
622	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸				黒褐色	黒褐色	
623	浅鉢	口：マメツ。胴：ケズリ→ナデ。	マメツ。	尖				灰褐色	黒色	
624	浅鉢	口：ミガキ。胴：ケズリ。	ミガキ。	丸				黒褐色	黒褐色	
625	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸				黒褐色	黒褐色	

図110　A区第5層出土遺物実測図(17)

される。663では最も上位に近い部分の4個所にやはり黒斑がある。なお、この個体の黒斑の付き方から、丹塗りは焼成前であることがわかる。

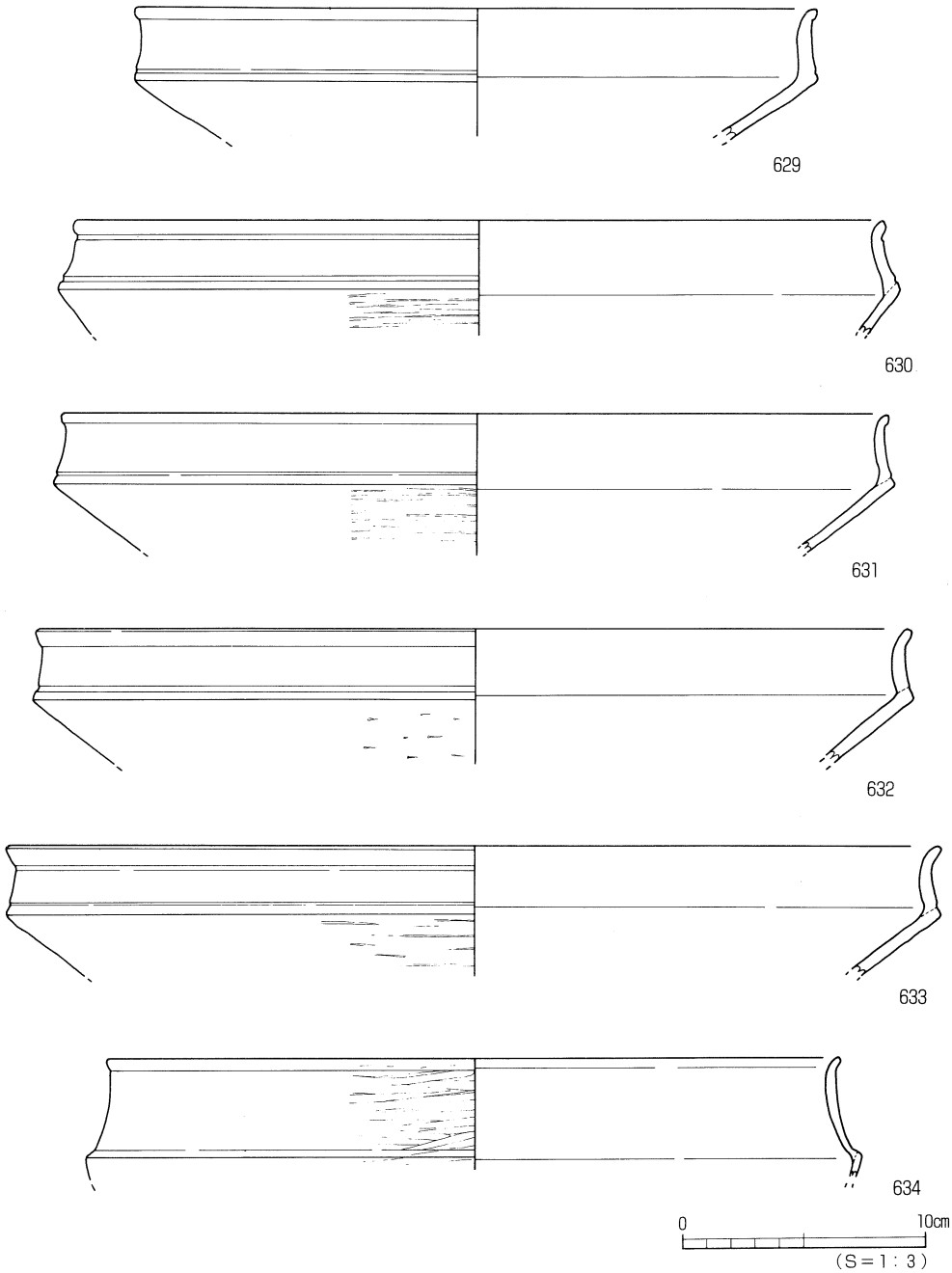
底部は図118～121に掲載してある。深鉢は分厚い窪み底のものが多いが、686・688のように輪高台状になるものや平底のものも若干あるほか、丸底になる694が1点だけある。浅鉢または壺と考えられるものを図120・121に示している。浅鉢は胎土が比較的精良で、入念な調整が施された薄手のつくりのもので、輪高台状になるものが多いが、実際には浅鉢と壺の区別は底部だけでは判断し難いので、一応ほとんどのものを浅鉢として扱っている。これらのうち、713は外底面まで磨かれていたりするので、壺の可能性が高いと考えている。732は小型の壺か？また、図121のうち、特に大型のものは壺でよいのかもしれない。

転石利用の石製品には伐採斧・加工斧などの工具、敲石・磨石・窪み石・石皿などの調理具、漁労具として打ち欠き漁網錘がある。伐採斧739・740ともに刃部付近の破片であるが、比較的厚みのない斧である。加工斧741は幅狭で扁平な小型斧で、刃部の研ぎは偏ってはいるが片刃というほどのものではない。これらのほか収穫具として石庖丁742が1点出土している。かなり風化しているが緑色片岩を素材とする外湾刃半月形のもので、両側縁に打ち欠きによる抉りを持つ。長さ12.2cm、幅3.5cm、厚さ1.6cmと比較的小型のものである。各部の研ぎについては風化によって明確ではない。祭祀具に



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
626	浅鉢	ミガキ。	ミガキ？	丸				黒褐色	黒褐色	
627	浅鉢	口：マメツ。胴：ケズリ。	口：ナデ。胴：マメツ。	丸				灰褐色	暗茶褐色	口縁穿孔。
628	浅鉢	口～頸：不明。胴：ケズリ。	ミガキ。	尖				暗褐色	暗褐色	

図111　A区第5層出土遺物実測図(18)

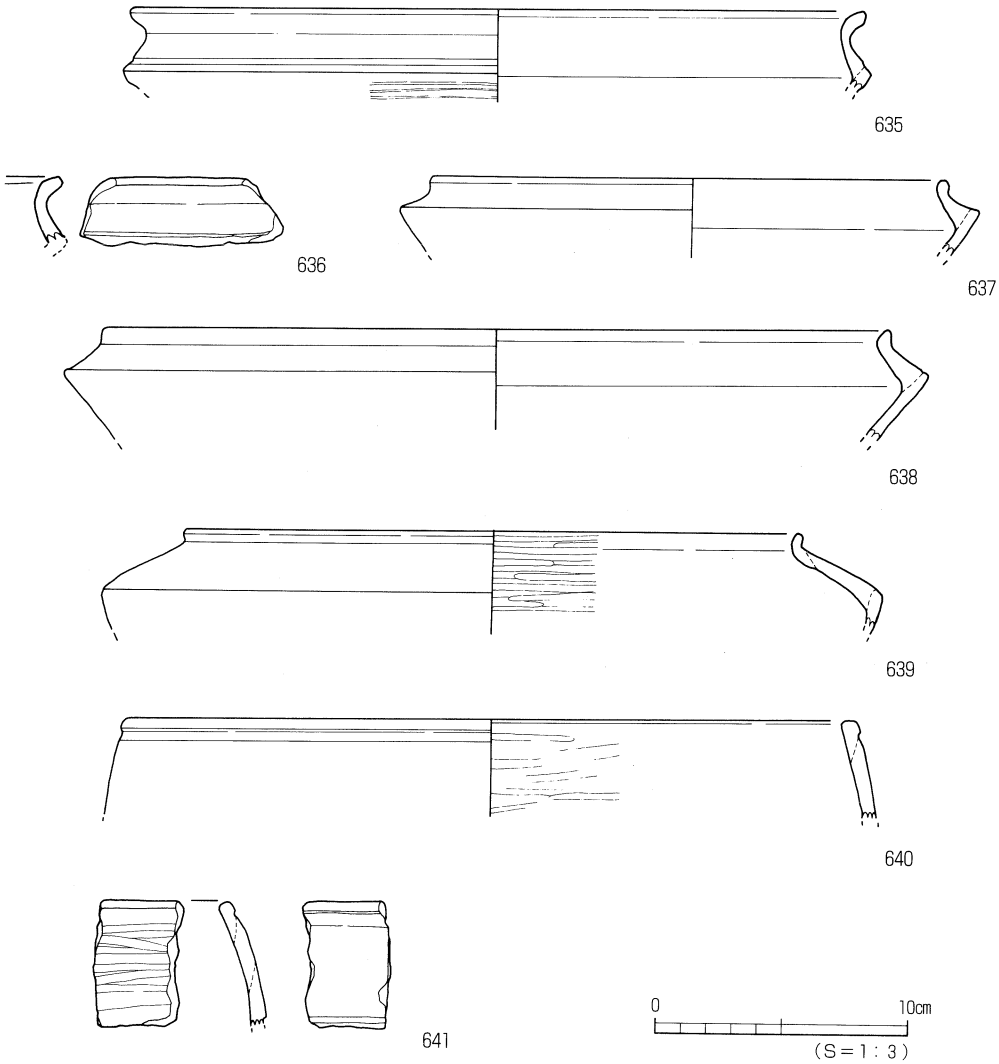


挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
629	浅鉢	マメツ。	マメツ。	丸				黒褐色	淡褐色	
630	浅鉢	口～頸：ミガキ。胴：ケズリ。	口：ミガキ。胴：マメツ。	丸				灰褐色	茶褐色	
631	浅鉢	口～頸：ミガキ。胴：ケズリ。	マメツ。	丸				灰褐色	褐色	
632	浅鉢	頸：ミガキ？ 胴：ケズリ。	口～頸：ナデ。胴：ミガキ。	面				暗褐色	暗褐色	
633	浅鉢	口～頸：ミガキ。胴：ケズリ。	口～頸：マメツ。胴：ナデ？	丸				灰茶褐色	茶褐色	
634	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸				黒褐色	黒褐色	

図112　A区第5層出土遺物実測図(19)

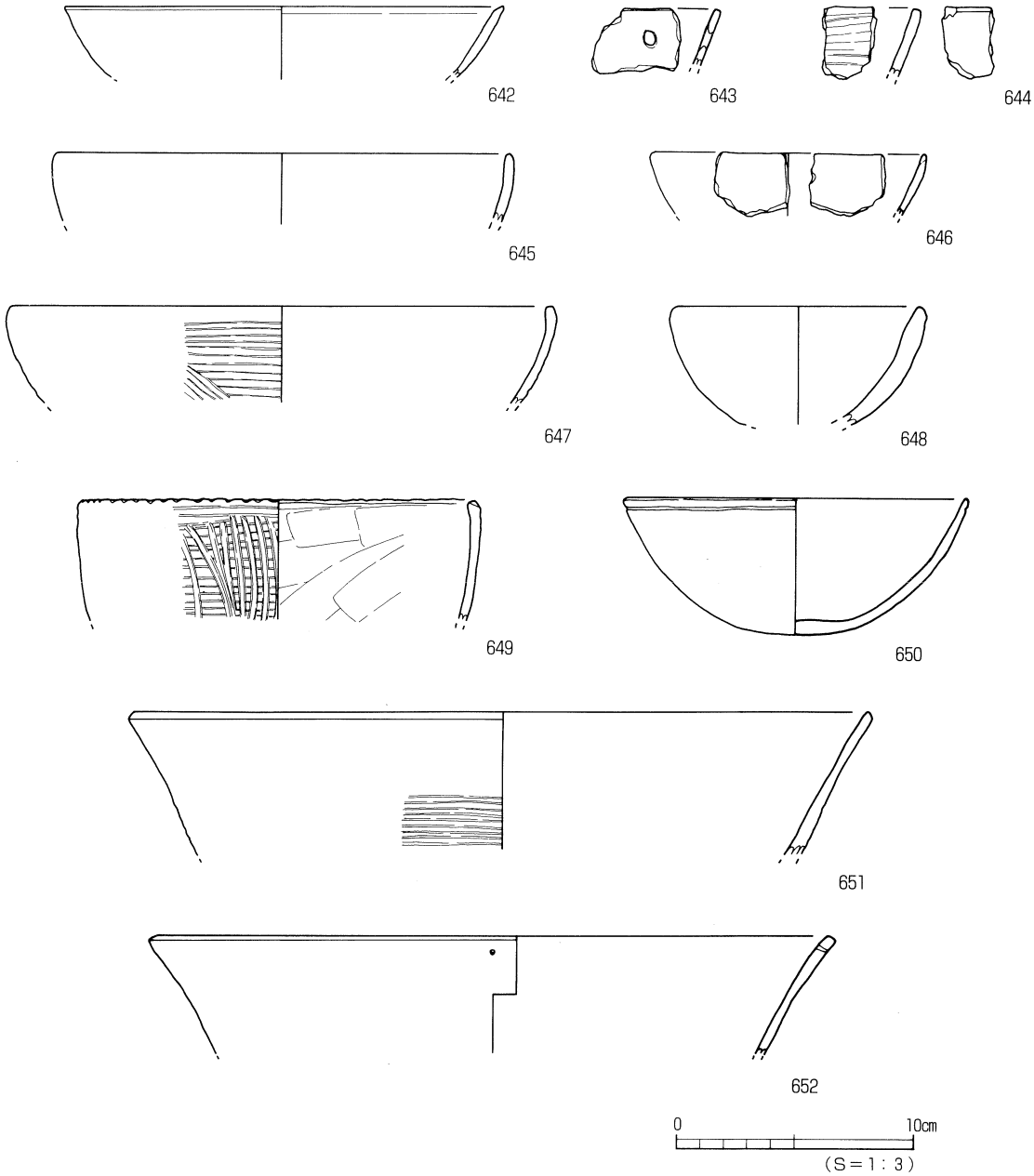
は数点の石棒と、有柄式磨製石剣の未製品かとも思えるもの745が１点ある。折損し、片面が剥離しているが、これも緑色片岩を素材としており、把部を作り出そうとしたものか、両側縁に敲打による緩やかなカーブを描く抉りがある。

剥片利用の製品としては石鏃、石錐、スクレイパーなどがある。図127の石鏃のうち姫島産黒曜石を素材とした787以外はすべてサヌカイトを素材としている。すべて無茎式で凹基鏃と平基鏃がある。形態的には二等辺三角形に近い形態のものが多いが、なかには767のような変形の五角形のものや787のように正三角形に近い形態のものもある。重量は767の0.5ｇから777の2.8ｇまでで、1.3ｇをやや超えたあたりに平均値がある。未製品には製作途中に破損したもの788・790や完成寸前で製作を放棄さ



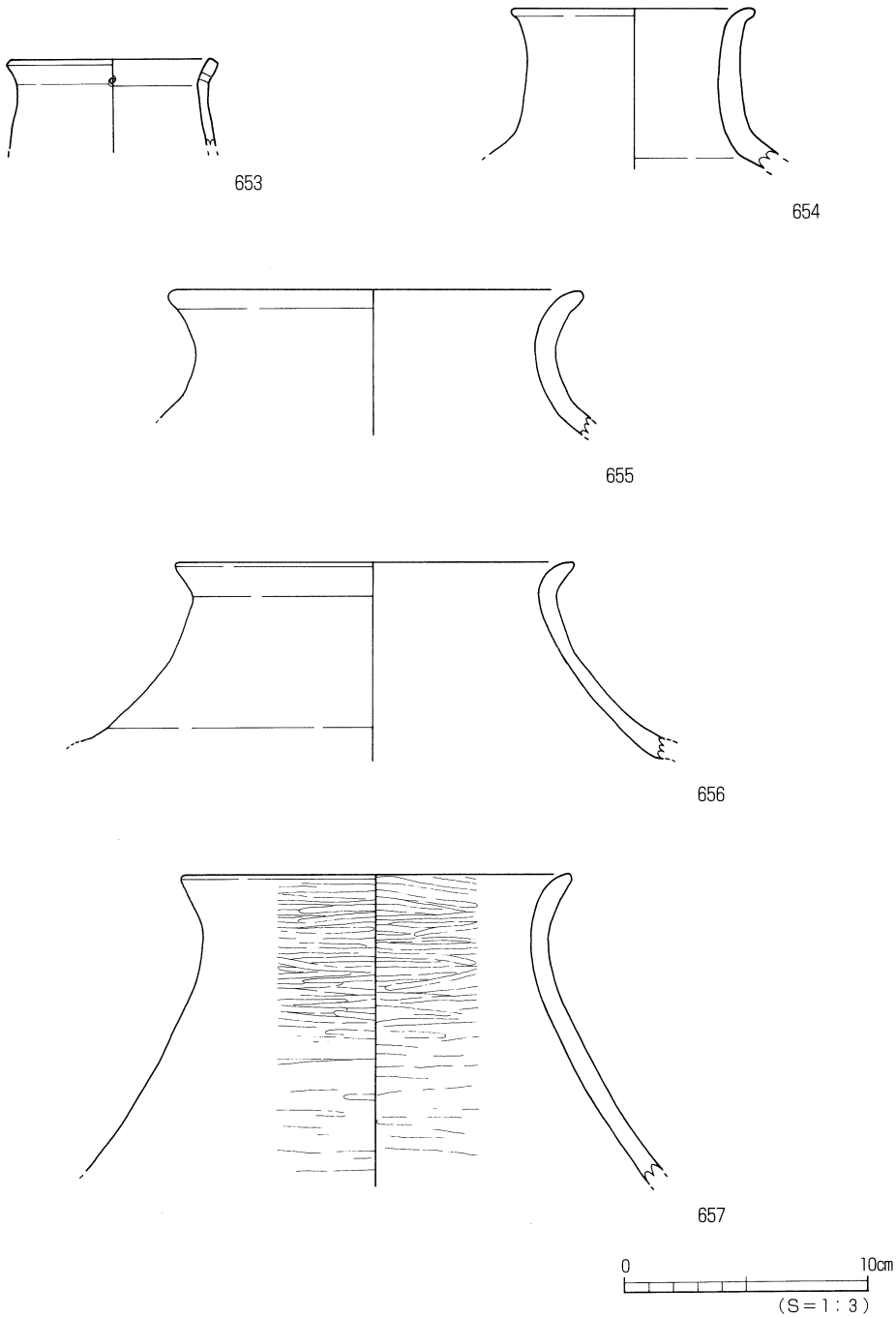
挿図番号	器種	調 外面	調 内面	整 口縁 端部形	整 口縁 刻み	整 突帯 断面形	整 突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
635	浅鉢	口：ナデ。胴：二枚貝条痕。	マメツ。	丸				灰褐色	灰白色	
636	浅鉢	ナデ。	ミガキ。	丸				褐色	淡灰黄色	
637	浅鉢	ナデ。	ナデ。	丸				黒褐色	黒褐色	
638	浅鉢	ナデ。	ナデ。	丸				茶褐色	暗灰色	
639	浅鉢	ナデ。	ミガキ。	丸				黒褐色	黒褐色	
640	浅鉢	ナデ？	ミガキ。	面				黒褐色	黒褐色	
641	浅鉢	ミガキ。	ミガキ？	面				黒褐色	黒褐色	

図113　Ａ区第５層出土遺物実測図(20)



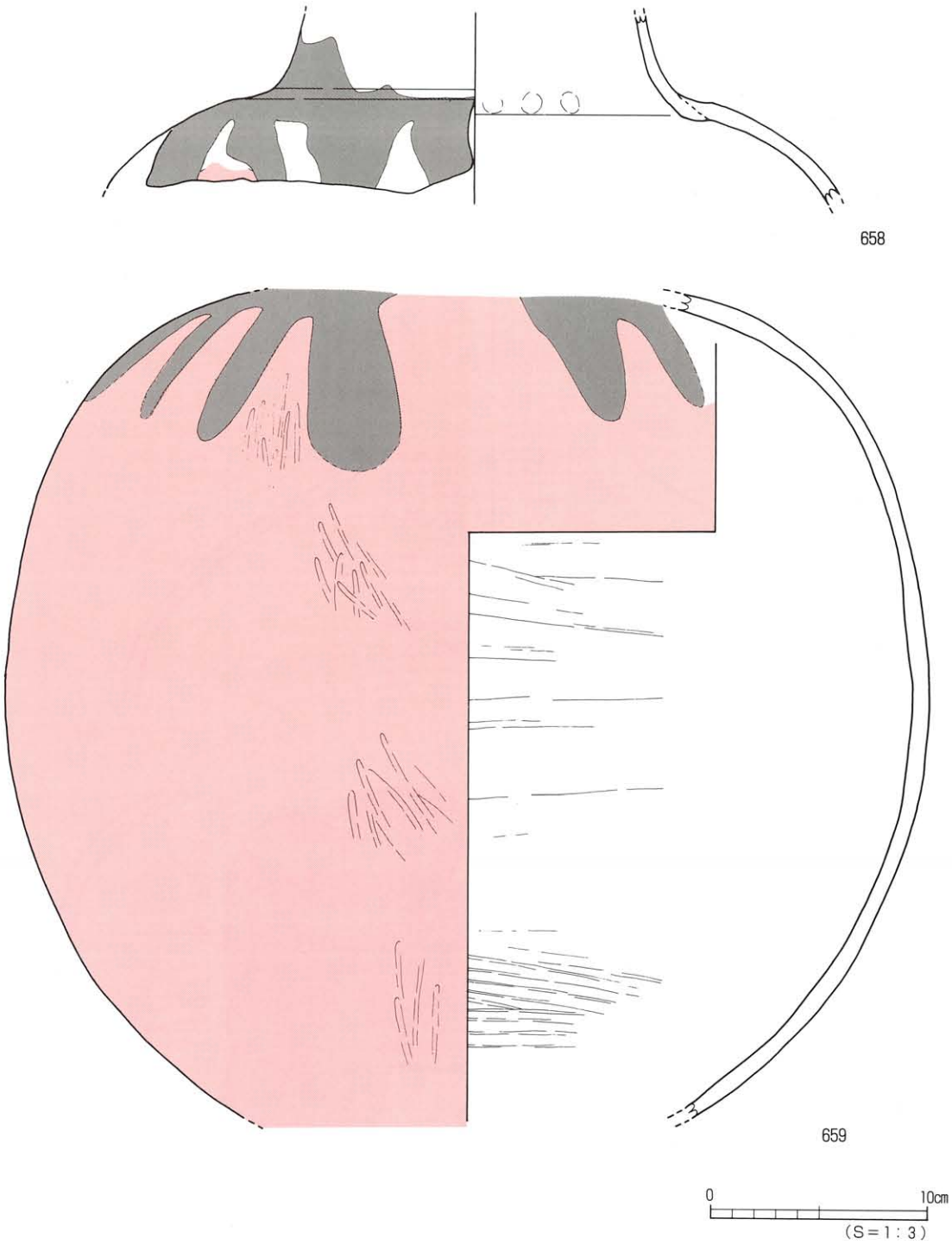
挿図番号	器種	調	整	口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
642	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	尖				淡灰白色	淡白色	
643	浅鉢	マメツ。	マメツ。	面				灰白色	灰白色	口縁穿孔。
644	浅鉢	条痕？	二枚貝条痕。	面				灰白色	淡褐色	丹塗り。
645	浅鉢	マメツ。	ナデ。	丸				灰茶褐色	灰白色	
646	浅鉢	ナデ。	ナデ？	丸				淡灰褐色	淡灰褐色	朱付着。
647	浅鉢	二枚貝条痕。	ナデ？	丸				橙褐色	灰褐色	
648	浅鉢	不明。	ミガキ。	丸				茶褐色	淡黄灰色	
649	浅鉢	二枚貝条痕（ヨコ→タテ）。	ケズリ→ナデ？	面				淡黄色	黒褐色	
650	浅鉢	ミガキ。	ミガキ？	丸				橙色	暗褐色	朱漆。
651	浅鉢	口：ミガキ。胴：二枚貝条痕。	不明。	面				黒褐色	灰白色	
652	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	面				黒褐色	黒褐色	口縁穿孔。

図114　A区第5層出土遺物実測図(21)



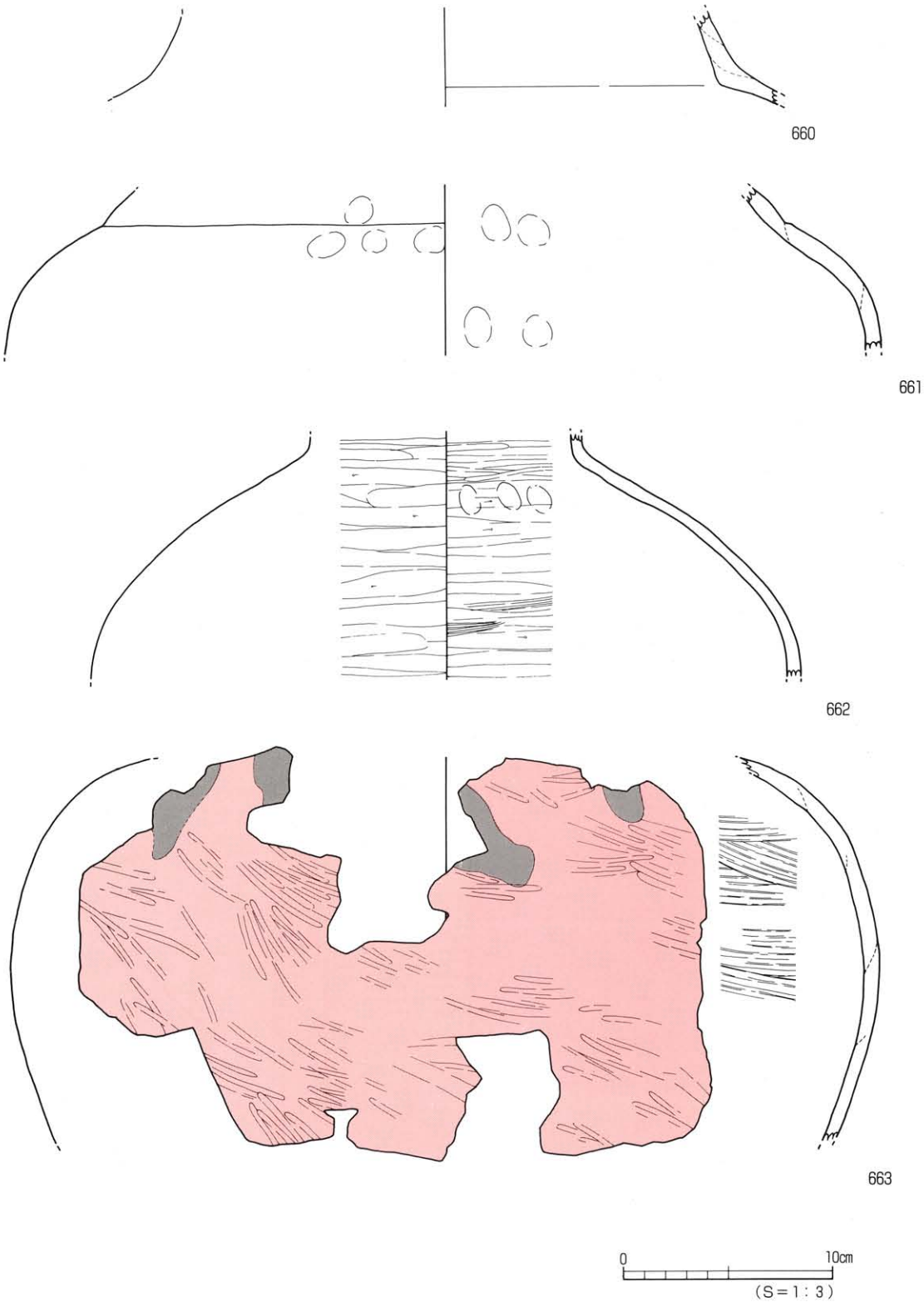
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
653	壺	ミガキ？	ナデ。	面				黄灰色	暗橙褐色	口縁穿孔。
654	壺	ミガキ。	ナデ。	丸				黒灰色	暗茶褐色	
655	壺	不明。	不明。	丸				暗茶褐色	灰白色	
656	壺	マメツ。	マメツ。	やや尖				橙褐色	橙褐色	
657	壺	ミガキ。	ミガキ。	丸				暗褐色	暗乳白色	

図115　A区第5層出土遺物実測図(22)



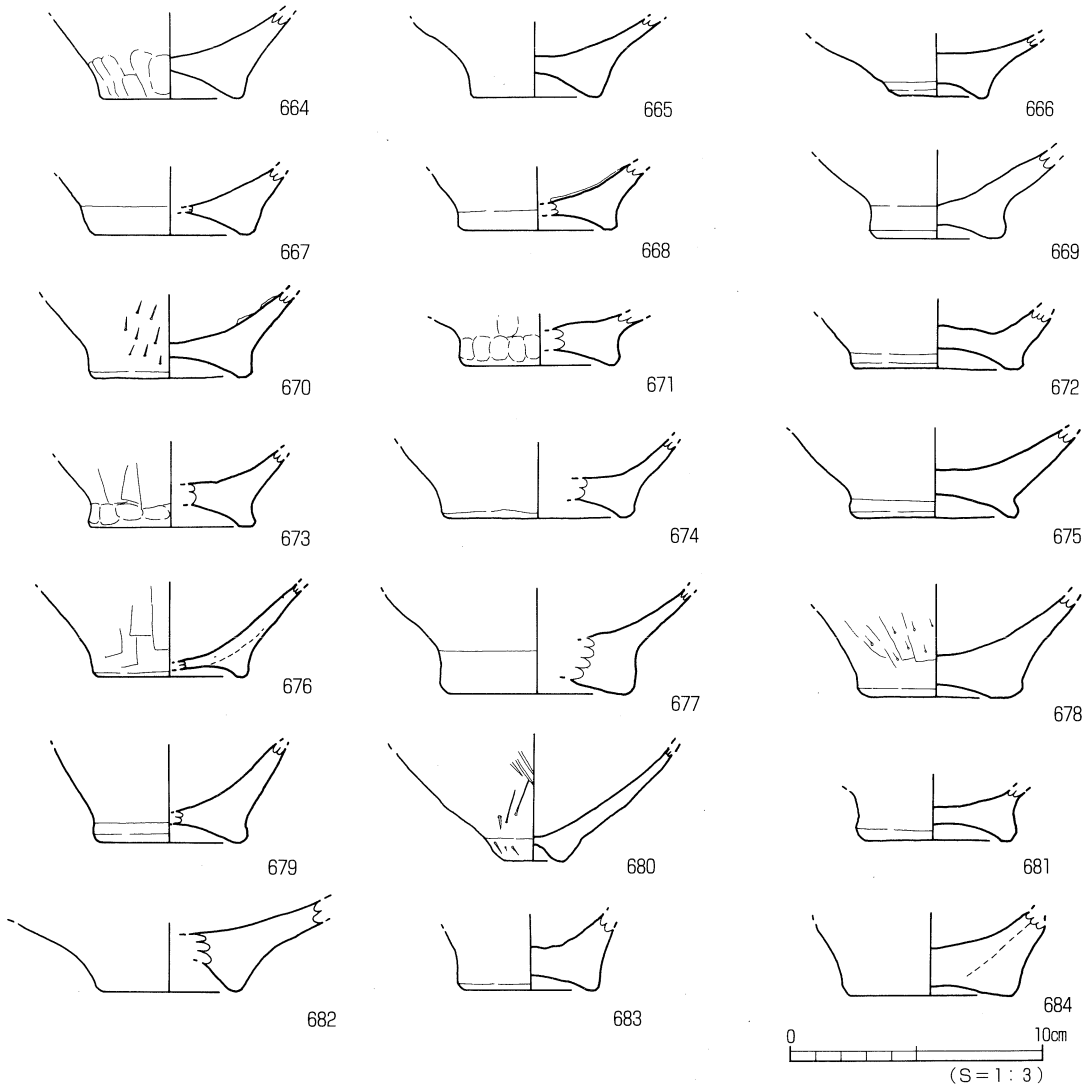
挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
658	壺	頸：ナデ。	頸：ミガキ。胴：条痕→ナデ。					暗乳灰色	淡灰色	丹塗り。カジ文？
659	壺	胴：ミガキ。	ナデ。					灰褐色	赤褐色	丹塗り。カジ文。

図116　A区第5層出土遺物実測図(23)



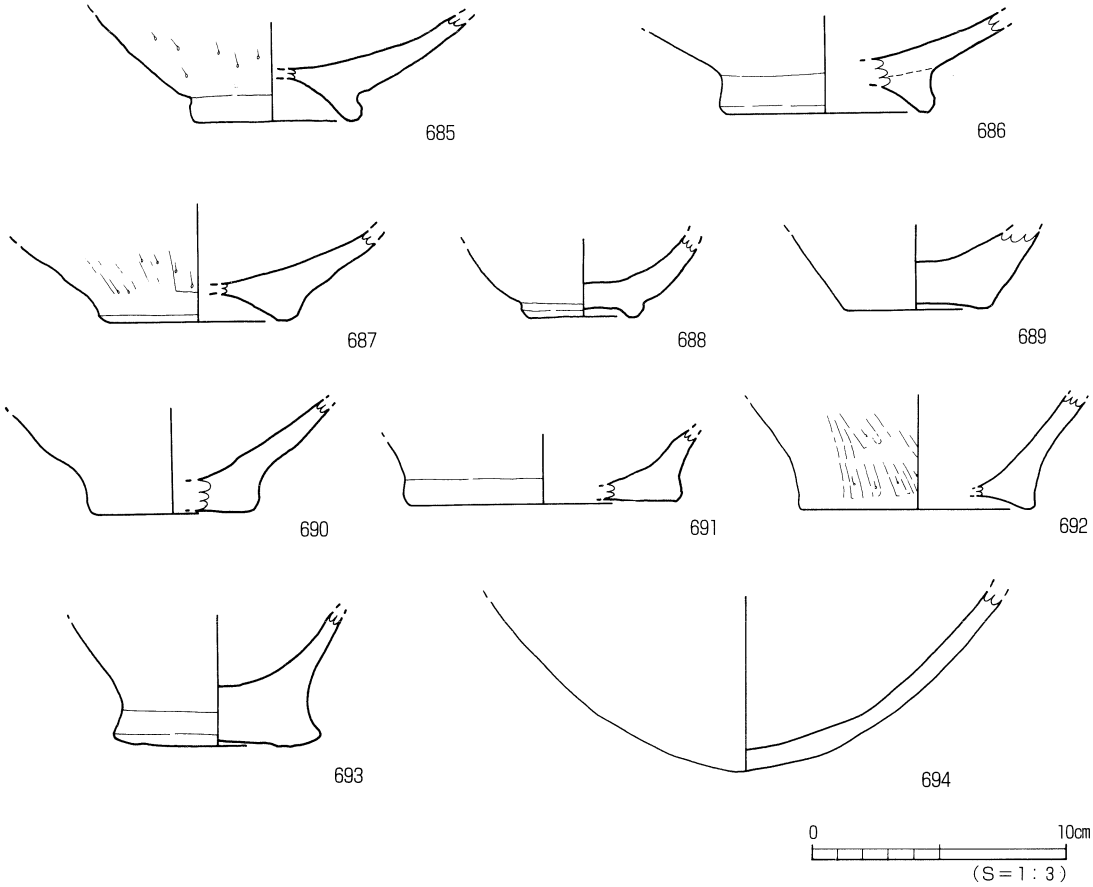
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
660	壺	マメツ。	不明。					橙褐色	淡黄褐色	
661	壺	不明。	不明。					茶褐色	橙褐色	
662	壺	ミガキ。	頸：ミガキ。胴：巻き貝条痕。					褐色	淡灰褐色	
663	壺	ミガキ。	二枚貝条痕→ナデ。					淡灰褐色	赤色	丹塗り。カジ文？

図117　A区第5層出土遺物実測図(24)



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
664	深鉢	ナデ。	マメツ。					灰黄色	淡灰橙色	
665	深鉢	マメツ。	ナデ。					灰褐色	橙色	
666	深鉢	ナデ。	ナデ。					黒褐色	淡橙色	
667	深鉢	マメツ。	マメツ。					灰茶褐色	灰褐色	
668	深鉢	マメツ。	ケズリ。					黒色	淡橙色	内底、炭化物付着。
669	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰褐色	淡灰橙色	
670	深鉢	マメツ。	マメツ。					黒色	淡橙色	内底、炭化物付着。
671	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
672	深鉢	マメツ。	マメツ。					灰褐色	淡橙色	
673	深鉢	ケズリ→ナデ。	ナデ。					黒色	淡黄褐色	
674	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰褐色	橙色	
675	深鉢	マメツ。	マメツ。					灰褐色	灰褐色	
676	深鉢	ケズリ。	ナデ。					灰褐色	灰茶褐色	
677	深鉢	マメツ。	マメツ。					灰褐色	橙色	
678	深鉢	ケズリ。	マメツ。					淡灰橙色	淡橙色	
679	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰褐色	淡灰橙色	
680	深鉢	ケズリ。	ナデ。					黒色	橙褐色	
681	深鉢	マメツ。	マメツ。					黒灰色	橙色	
682	深鉢	マメツ。	マメツ。					橙褐色	灰橙褐色	
683	深鉢	マメツ。	マメツ。					褐色	橙褐色	
684	深鉢	マメツ。	ナデ。					褐色	橙灰色	

図118　A区第5層出土遺物実測図(25)

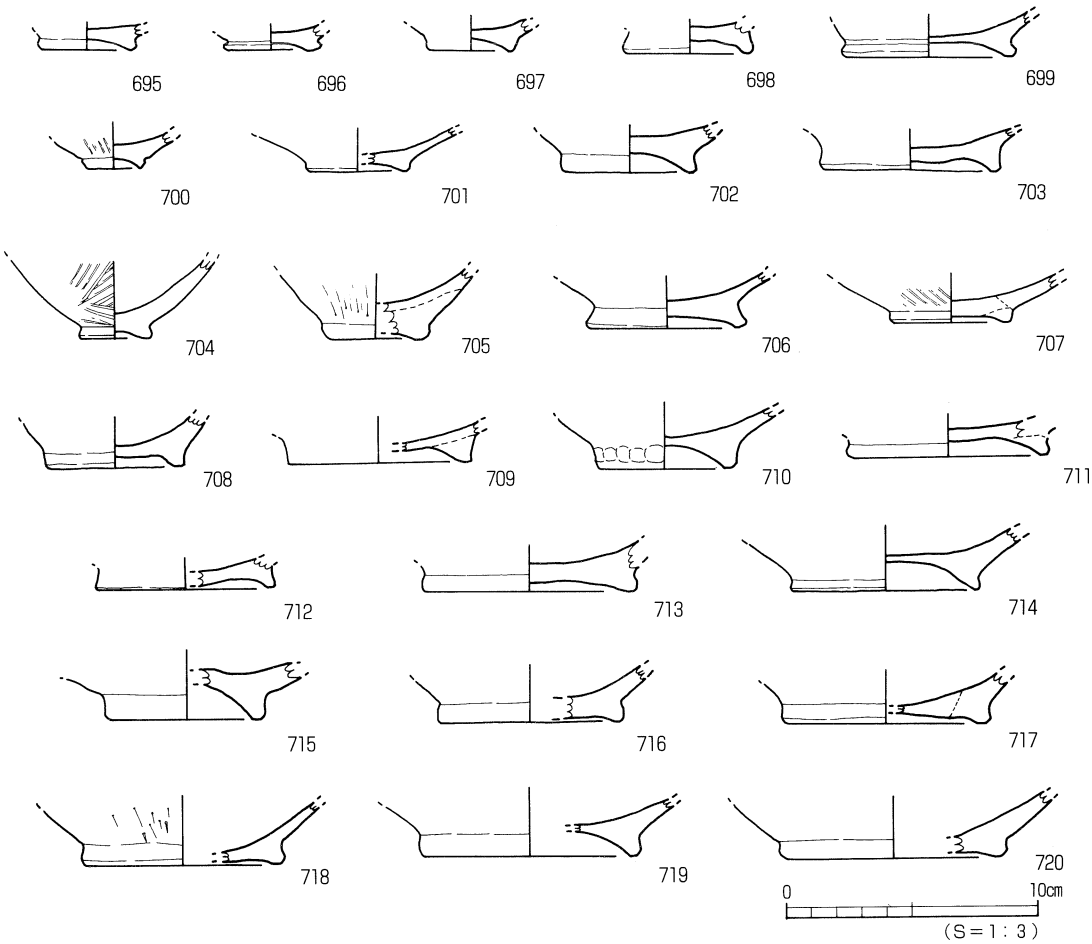


挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
685	深鉢	胴：ケズリ。底：ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	橙色	
686	深鉢	胴：ケズリ？→マメツ。	ナデ。					褐色	淡橙褐色	
687	深鉢	胴：ケズリ。底：ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
688	深鉢	ナデ。	ナデ。					褐色	橙褐色	
689	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡黄色	淡橙色	
690	深鉢	マメツ。	ナデ。					橙黄色	橙色	
691	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡黄褐色	淡橙灰色	
692	深鉢	ケズリ。	ナデ。					灰褐色	淡灰橙色	
693	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡褐色	橙色	
694	深鉢	ズリ→ナデ。	マメツ。					淡灰褐色	淡橙褐色	

図119　A区第5層出土遺物実測図(26)

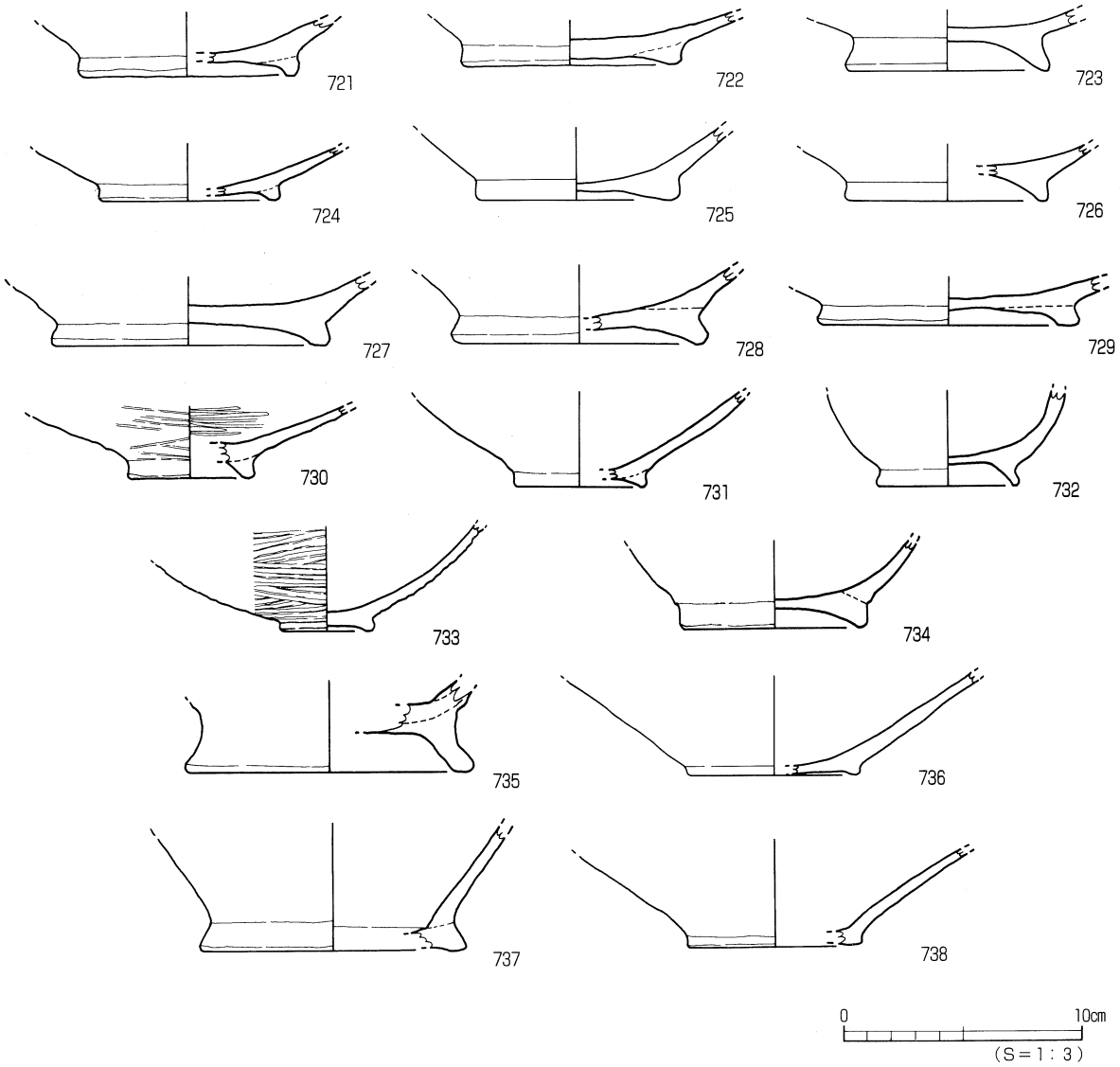
れた789がある。794はナイフ形石器と呼んでいいのかどうかわからないが、ナイフ様の石器、795の石錐は不定形の剥片の先端部にだけ簡単な調整を行っている。その他サヌカイト製のスクレイパーや素材剥片、石核、図化はしなかったが多量のフレークがある。なお、これらサヌカイトに混って黒曜石のスクレイパー、石核やフレークが少量出土している。

これら、土器、石器のほかに土製品として土錘が1点、石製品として玉1点の出土がある。土錘894は長さ3.4cm、幅1.3cm、厚さ1.8cmの隅丸の直方体に近い粘土塊に十字の紐かけ用の溝を施したもので、重量13.8gを量る小型品である。玉895は硬玉製、太めの工具を用いて片面から穿孔されているため、断面形がドーム状を呈している。



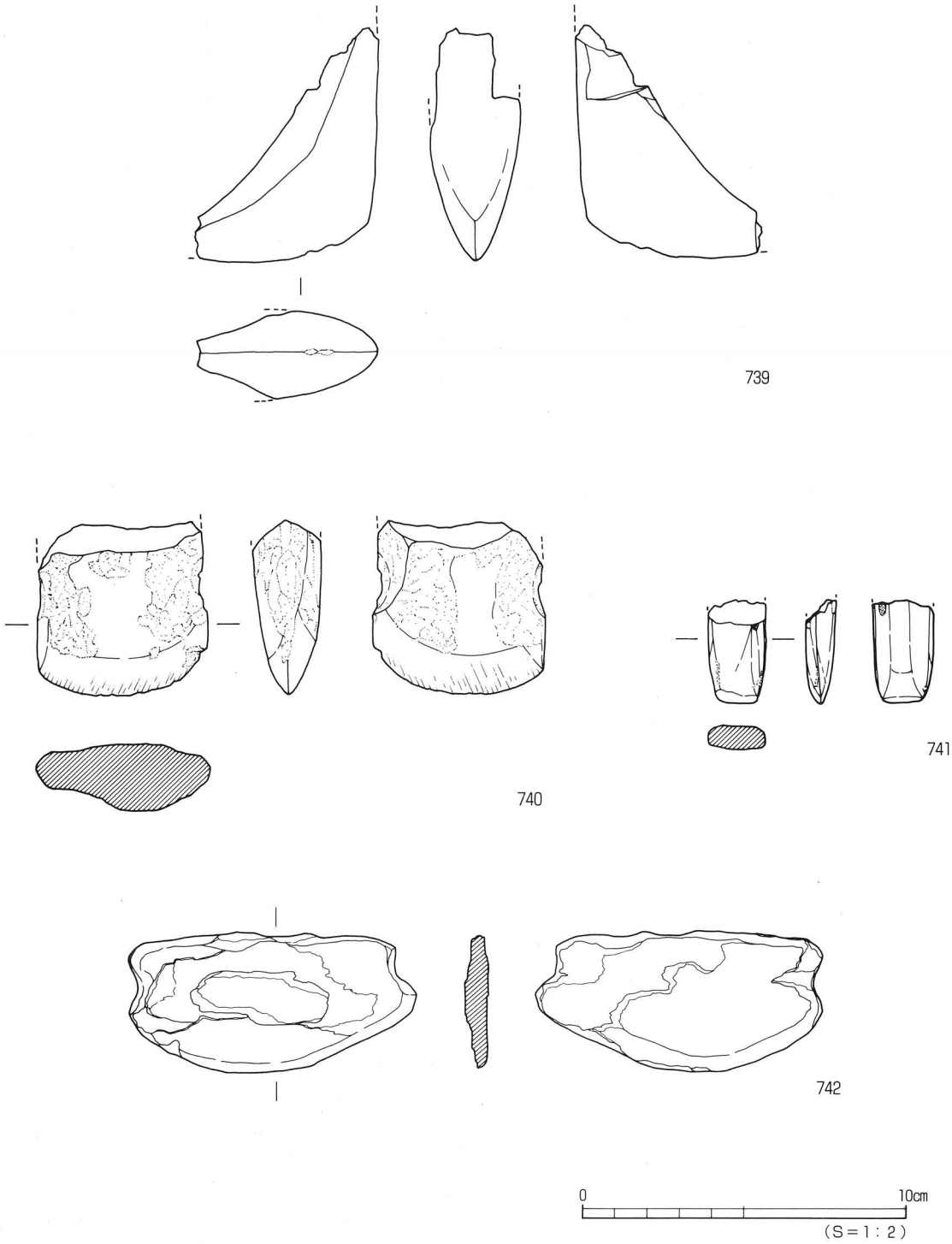
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
695	浅鉢	ケズリ。	ミガキ。					黒褐色	橙褐色	
696	浅鉢	マメツ。	ナデ。					黒褐色	黒褐色	
697	浅鉢	ナデ。	ナデ。					黄灰褐色	黄灰褐色	
698	浅鉢	ナデ。	マメツ。					灰橙色	橙色	
699	浅鉢	マメツ。	不明。					褐色	灰褐色	
700	浅鉢	胴：二枚貝条痕。底：ナデ。	ナデ。					褐色	橙褐色	
701	浅鉢	マメツ。	ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
702	浅鉢	マメツ。	マメツ。					褐色	橙色	
703	浅鉢	マメツ。	ナデ。					黒褐色	淡灰褐色	
704	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。					黒色	黒色	
705	深鉢	ケズリ。	マメツ。					橙色	橙色	
706	浅鉢	マメツ。	マメツ。					灰褐色	淡橙色	
707	浅鉢	胴：二枚貝条痕。底：ナデ。	ミガキ。					灰褐色	橙褐色	
708	深鉢？	マメツ。	マメツ。					淡灰褐色	橙色	
709	浅鉢	マメツ。	ナデ。					淡褐色	淡橙色	
710	深鉢？	マメツ。	マメツ。					黒灰色	橙褐色	
711	浅鉢	ナデ。	マメツ。					褐色	茶褐色	
712	浅鉢	ナデ。	マメツ。					灰褐色	灰褐色	
713	壺？	ナデ。	ナデ。					黒色	淡灰褐色	
714	浅鉢	マメツ。	マメツ。					褐色	橙色	
715	深鉢	マメツ。	マメツ。					黒色	橙色	
716	浅鉢	マメツ。	ナデ。					褐色	橙色	
717	浅鉢	ナデ。	ナデ。					黒褐色	淡灰橙色	
718	浅鉢	ケズリ。	マメツ。					黒灰色	黒褐色	
719	浅鉢	マメツ。	マメツ。					黒灰色	黒褐色	
720	浅鉢	マメツ。	マメツ。					茶褐色	淡橙色	

図120　A区第5層出土遺物実測図(27)



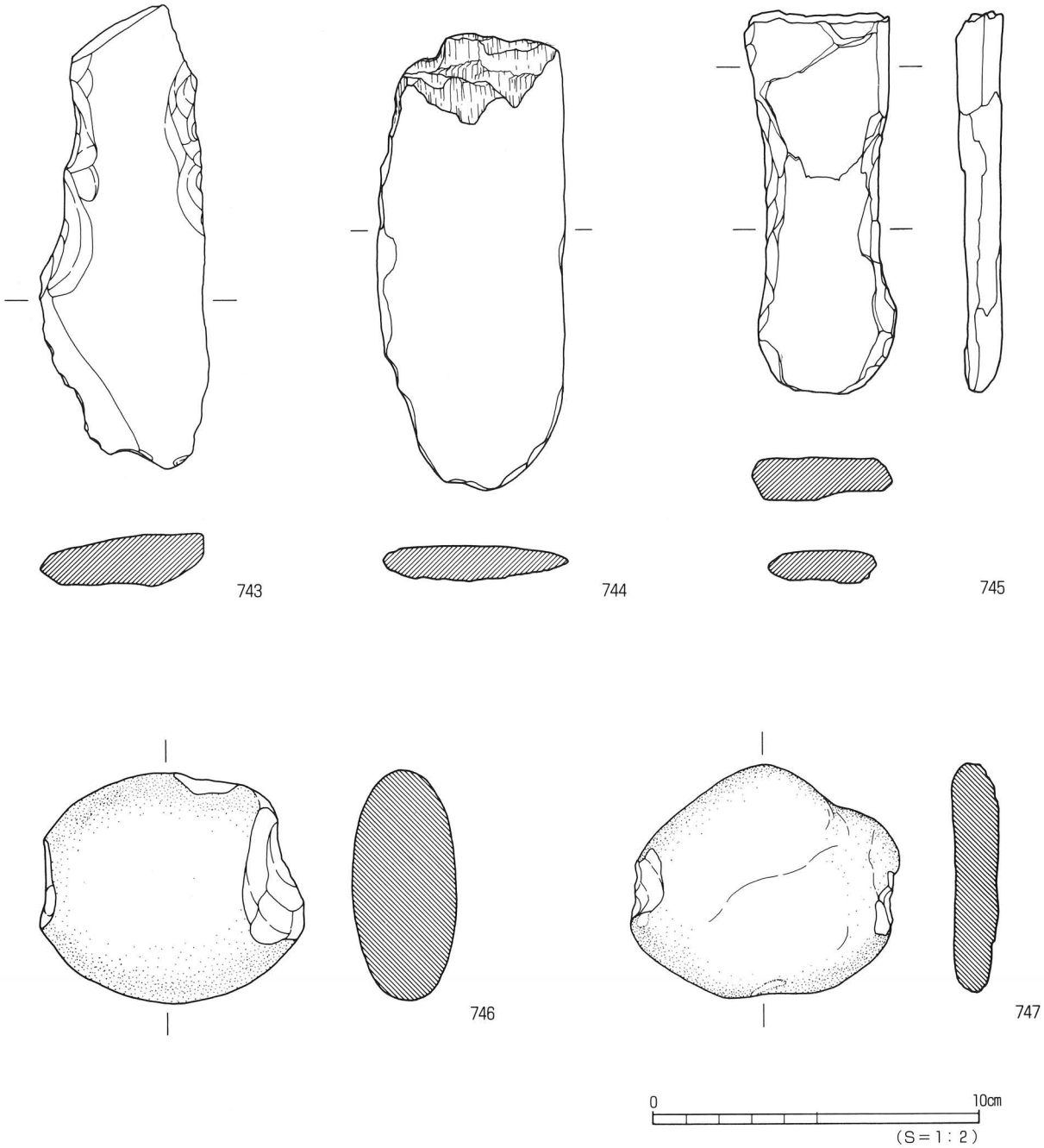
挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
721	浅鉢	マメツ。	マメツ。					灰褐色	褐色	
722	浅鉢	マメツ。	ミガキ。					褐色	橙色	
723	浅鉢	マメツ。	ナデ。					褐色	灰褐色	
724	浅鉢	マメツ。	ナデ。					灰褐色	橙灰色	
725	浅鉢	マメツ。	マメツ。					褐色	橙色	
726	浅鉢	ナデ。	ナデ。					黒灰色	黒灰色	
727	浅鉢	ナデ。	ナデ。					黒色	灰褐色	
728	浅鉢	マメツ。	ミガキ。					褐色	橙灰色	
729	浅鉢	ナデ。	ミガキ。					黒色	灰褐色	
730	浅鉢	ミガキ？	ミガキ。					褐色	黒褐色	
731	浅鉢	マメツ。	マメツ。					褐色	灰褐色	
732	壺？	ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
733	浅鉢	二枚貝条痕。	ミガキ。					淡灰褐色	茶褐色	
734	浅鉢	マメツ。	マメツ。					褐色	灰橙褐色	
735	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰色	淡橙色	
736	深鉢	ケズリ→ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	灰橙褐色	
737	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰褐色	灰橙褐色	
738	浅鉢	マメツ。	ナデ。					褐色	橙色	

図121　A区第5層出土遺物実測図(28)



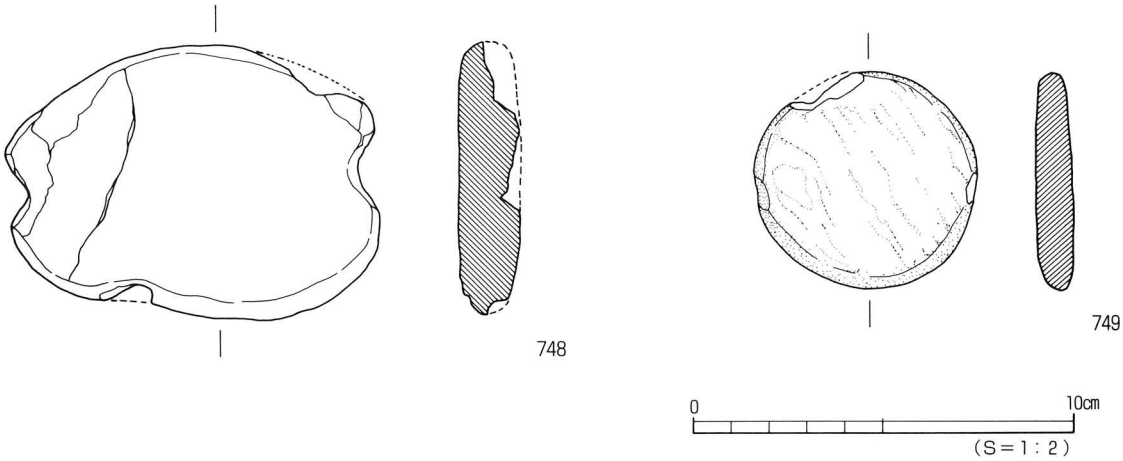
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
739	磨製石斧	安山岩	欠損	(7.3)	(5.6)	(2.6)	77.0	
740	磨製石斧	黒色片岩	欠損	(5.2)	(5.3)	(2.1)	91.0	
741	磨製石斧	黒色片岩	欠損	(3.2)	(18.0)	(0.8)	8.5	
742	石庖丁	緑色片岩	完形	12.2	3.9	0.7	11.2	

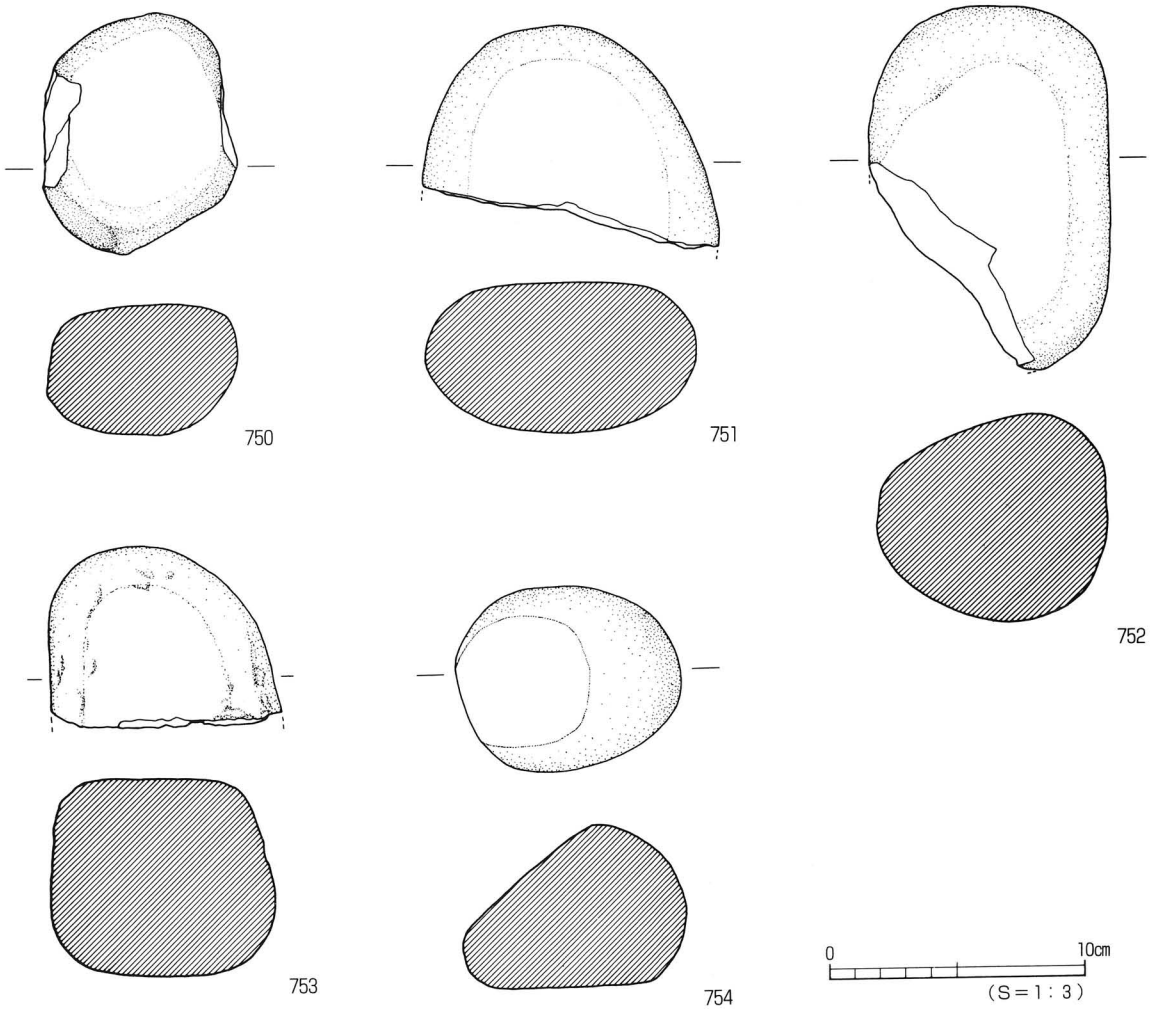
図122　A区第5層出土遺物実測図(29)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
743	扁平打製石斧未製品	砂岩		14.2	4.9	1.5	133.0	
744	扁平打製石斧	緑色片岩	欠損	(14.1)	(5.6)	(1.1)	160.0	
745	磨製石剣未製品？	緑色片岩		11.6	4.2	1.3	112.8	
746	石錘	砂岩	一部欠損	8.0	7.0	3.1	222.0	
747	石錘	安山岩	完形	8.0	7.1	1.3	120.8	

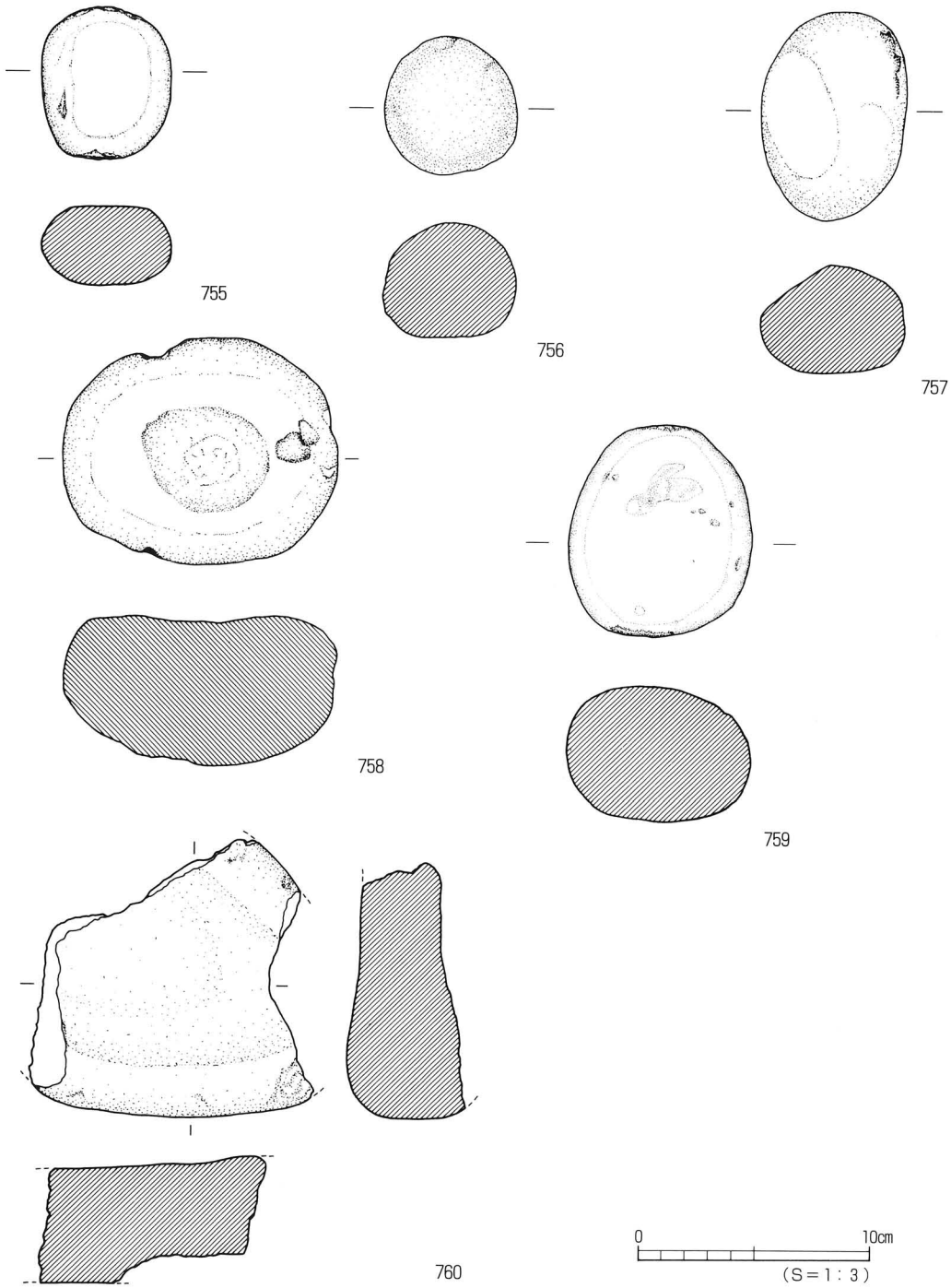
図123　A区第5層出土遺物実測図(30)





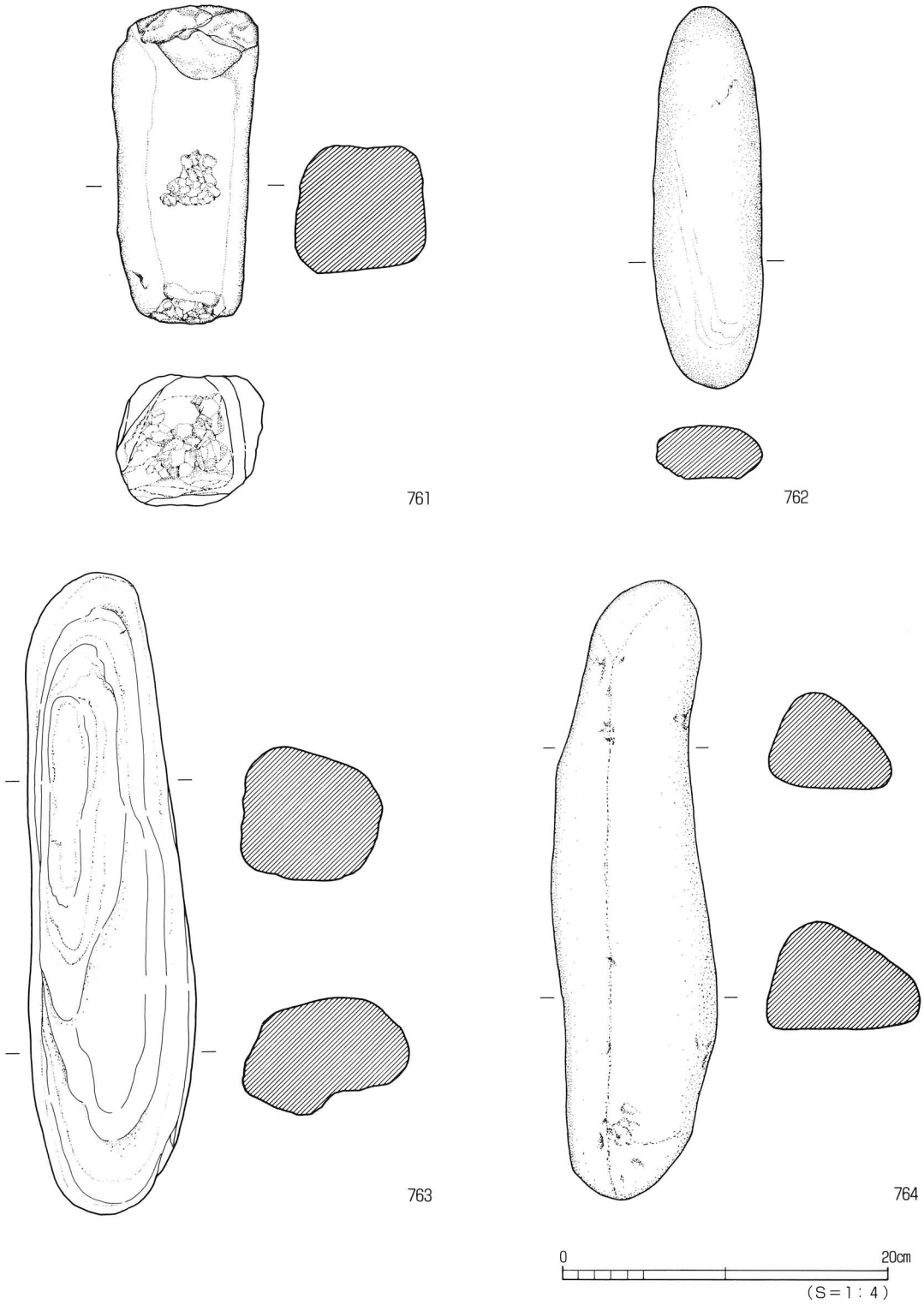
挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
748	石錘	緑泥片岩	一部欠損	9.6	7.3	1.6	169.0	
749	石錘	石英片岩	一部欠損	5.8	5.7	0.8	57.3	
750	磨石	砂岩	一部欠損	9.5	7.1	5.1	522.0	
751	磨石	安山岩	欠損	(8.8)	(11.5)	(5.6)	755.0	
752	磨石	安山岩	一部欠損	(14.4)	(9.3)	(8.0)	1600.0	
753	磨石	砂岩	欠損	(7.0)	(9.1)	(7.8)	820.5	
754	磨石	砂岩	完形	8.7	7.5	6.3	570.0	

図124　A区第5層出土遺物実測図(31)



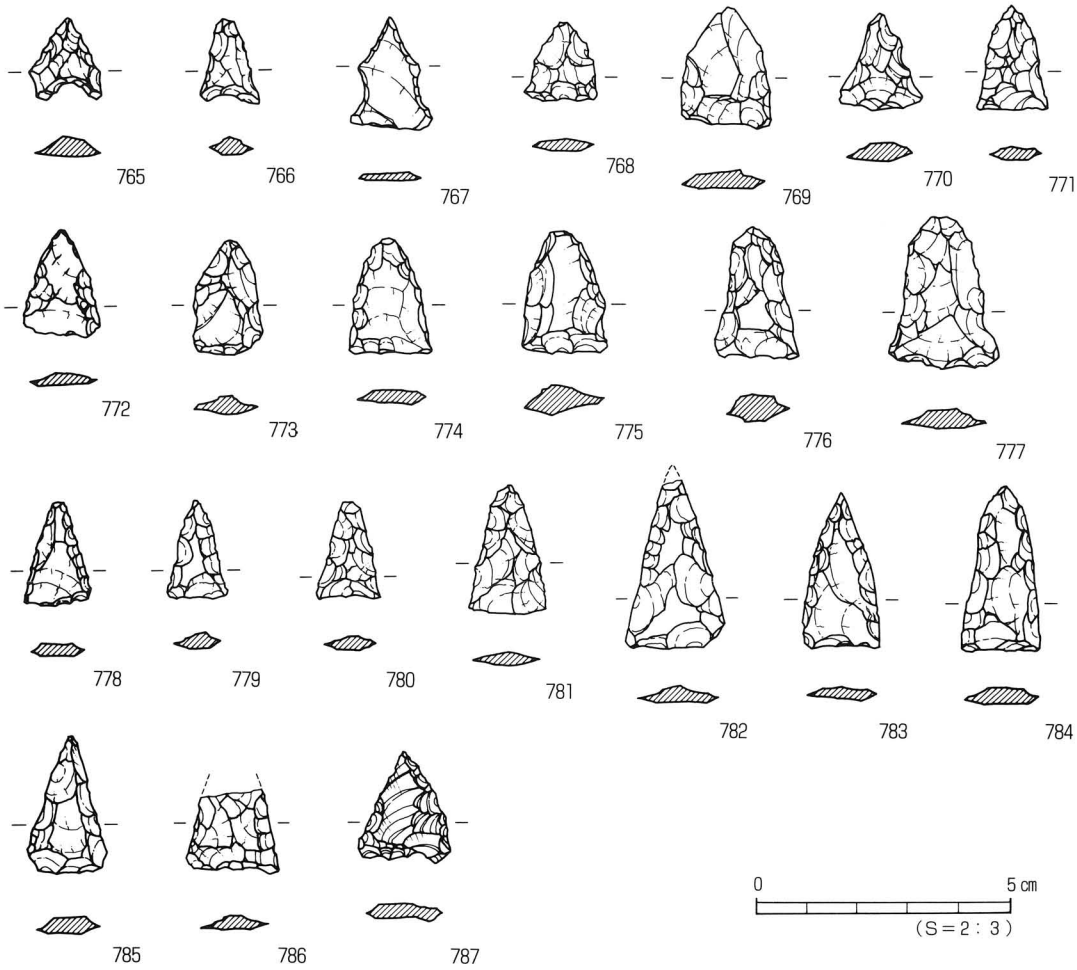
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
755	擦り石	砂岩	完形	6.5	5.4	3.4	170.8	
756	敲石	安山岩	完形	5.9	5.6	4.9	241.0	
757	磨石	安山岩	完形	9.0	6.1	4.7	370.0	
758	窪み石	砂岩	完形	11.6	9.7	6.6	1090.0	
759	敲石	砂岩	完形	9.2	7.9	5.8	645.0	
760	石皿	砂岩	欠損	(16.1)	(11.5)	(6.5)	2150.0	

図125　A区第5層出土遺物実測図(32)



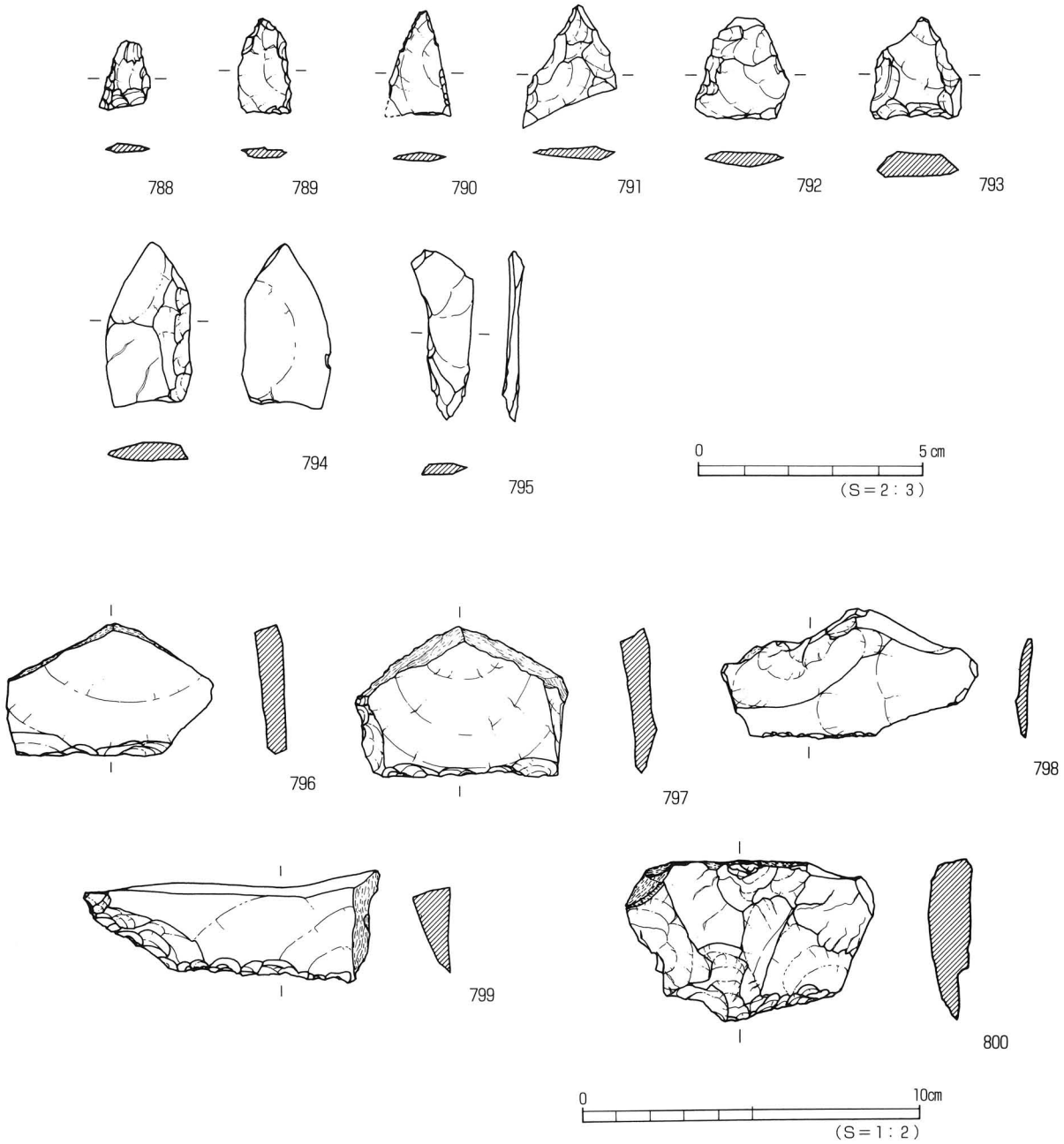
挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
761	敲石	砂岩	完形	19.9	9.0	8.2	2400.0	
762	石棒	緑色片岩	完形	23.4	6.6	3.3	825.0	
763	石棒	緑色片岩	完形	40.0	10.2	8.5	5450.0	
764	石棒	砂岩	完形	38.4	10.1	6.7	3150.0	

図126　A区第5層出土遺物実測図(33)



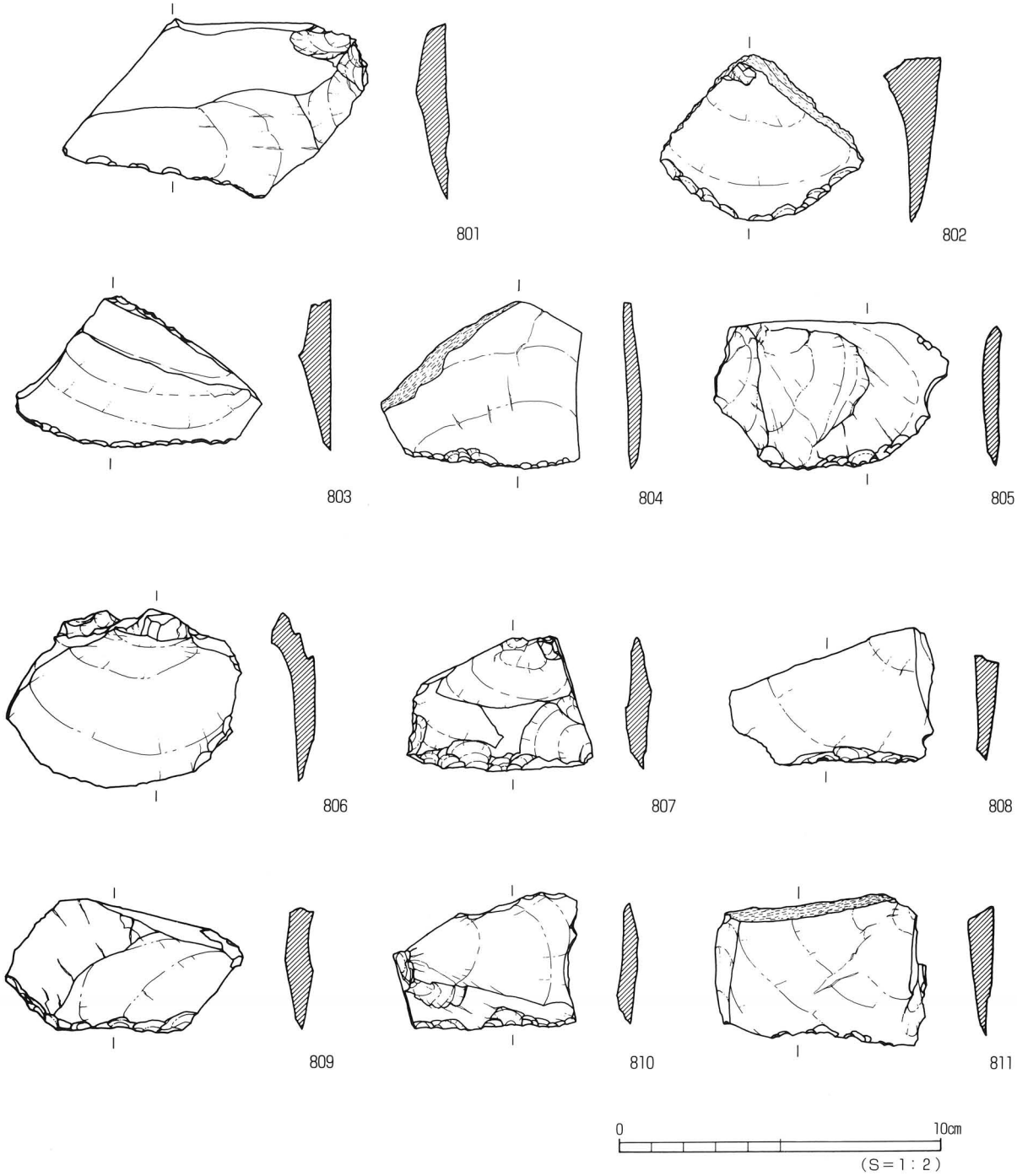
挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
765	打製石鏃	サヌカイト	完形	1.7	1.37	0.4	0.6	
766	打製石鏃	サヌカイト	完形	1.8	1.15	0.4	0.6	
767	打製石鏃	サヌカイト	完形	1.7	1.6	0.2	1.0	
768	打製石鏃	サヌカイト	完形	1.6	1.45	0.25	0.7	
769	打製石鏃	サヌカイト	完形	2.4	1.8	0.4	1.8	
770	打製石鏃	サヌカイト	完形	1.94	1.7	0.4	1.1	
771	打製石鏃	サヌカイト	完形	2.1	1.9	0.3	0.9	
772	打製石鏃	サヌカイト	完形	2.1	1.5	0.25	0.8	
773	打製石鏃	サヌカイト	完形	2.4	1.4	0.4	1.4	
774	打製石鏃	サヌカイト	完形	2.3	1.68	0.3	1.4	
775	打製石鏃	サヌカイト	完形	2.4	1.7	0.7	2.3	
776	打製石鏃	サヌカイト	完形	2.6	1.7	0.6	2.0	
777	打製石鏃	サヌカイト	完形	3.1	2.15	0.4	2.7	
778	打製石鏃	サヌカイト	完形	2.1	2.4	0.3	0.7	
779	打製石鏃	サヌカイト	完形	2.0	1.28	0.35	0.7	
780	打製石鏃	サヌカイト	完形	1.95	1.3	0.3	0.7	
781	打製石鏃	サヌカイト	完形	2.63	1.5	0.25	1.0	
782	打製石鏃	サヌカイト	一部欠損	(3.7)	2.0	0.32	2.5	
783	打製石鏃	サヌカイト	完形	3.15	1.55	0.3	1.5	
784	打製石鏃	サヌカイト	完形	3.3	1.5	0.32	2.2	
785	打製石鏃	サヌカイト	完形	1.75	1.6	0.4	1.7	
786	打製石鏃	サヌカイト	欠損	(1.5)	1.8	0.3	1.4	
787	打製石鏃	黒曜石（姫島産）	完形	2.1	1.8	0.3	1.5	

図127　A区第5層出土遺物実測図(34)



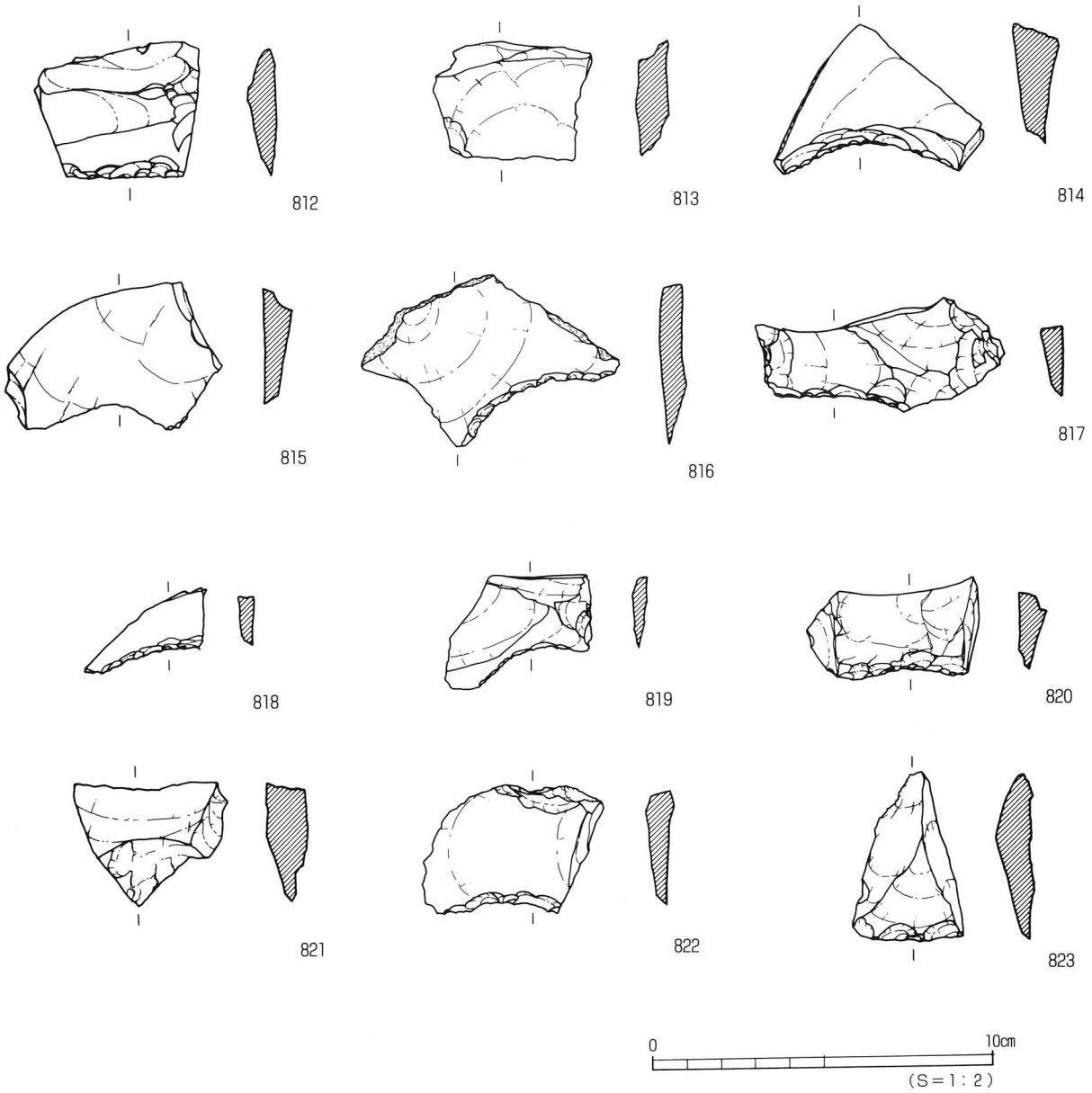
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
788	石鏃未製品	サヌカイト		1.6	1.2	0.2	0.4	
789	石鏃未製品	サヌカイト		2.2	1.2	0.23	1.0	
790	石鏃未製品	サヌカイト		2.38	1.5	0.2	0.8	
791	石鏃未製品	サヌカイト		2.8	2.1	0.3	1.3	
792	石鏃未製品	サヌカイト		2.3	2.1	0.35	1.8	
793	石鏃未製品	サヌカイト		2.3	2.1	0.6	3.2	
794	ナイフ？	サヌカイト	完形	3.8	2.0	0.45	4.4	
795	石錐	サヌカイト	完形	3.9	1.4	0.25	2.0	
796	スクレイパー	サヌカイト		3.6	6.0	0.7	21.3	
797	スクレイパー	サヌカイト		6.3	4.5	0.8	31.0	
798	スクレイパー	サヌカイト		3.8	7.6	0.4	17.3	
799	スクレイパー	サヌカイト		8.7	3.4	1.1	33.8	
800	スクレイパー	サヌカイト		4.8	7.3	1.3	52.6	

図128　A区第5層出土遺物実測図(35)



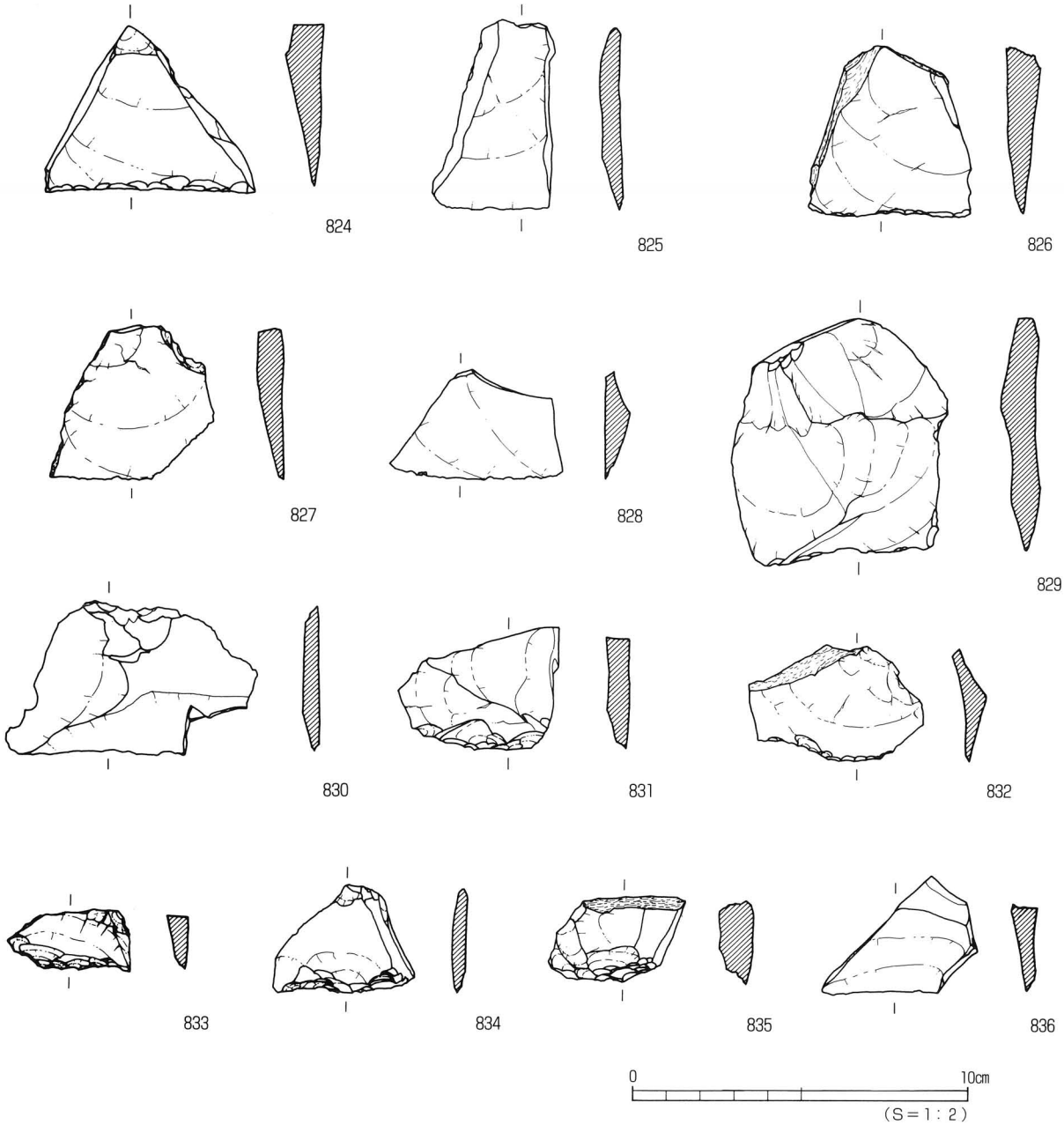
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
801	スクレイパー	サヌカイト		5.4	9.5	1.0	49.6	
802	スクレイパー	サヌカイト		5.2	6.2	1.8	34.4	
803	スクレイパー	サヌカイト		4.7	7.7	0.9	29.5	
804	スクレイパー	サヌカイト		5.3	6.1	0.4	18.4	
805	スクレイパー	サヌカイト		4.7	7.2	0.5	26.6	
806	スクレイパー	サヌカイト		5.5	7.7	0.7	34.2	
807	スクレイパー	サヌカイト		4.2	5.8	0.8	21.4	
808	スクレイパー	サヌカイト		4.3	6.3	0.7	23.5	
809	スクレイパー	サヌカイト		7.5	4.1	0.8	29.2	
810	スクレイパー	サヌカイト		4.2	5.7	0.5	19.3	
811	スクレイパー	サヌカイト		4.7	6.6	0.8	31.1	

図129　A区第5層出土遺物実測図(36)



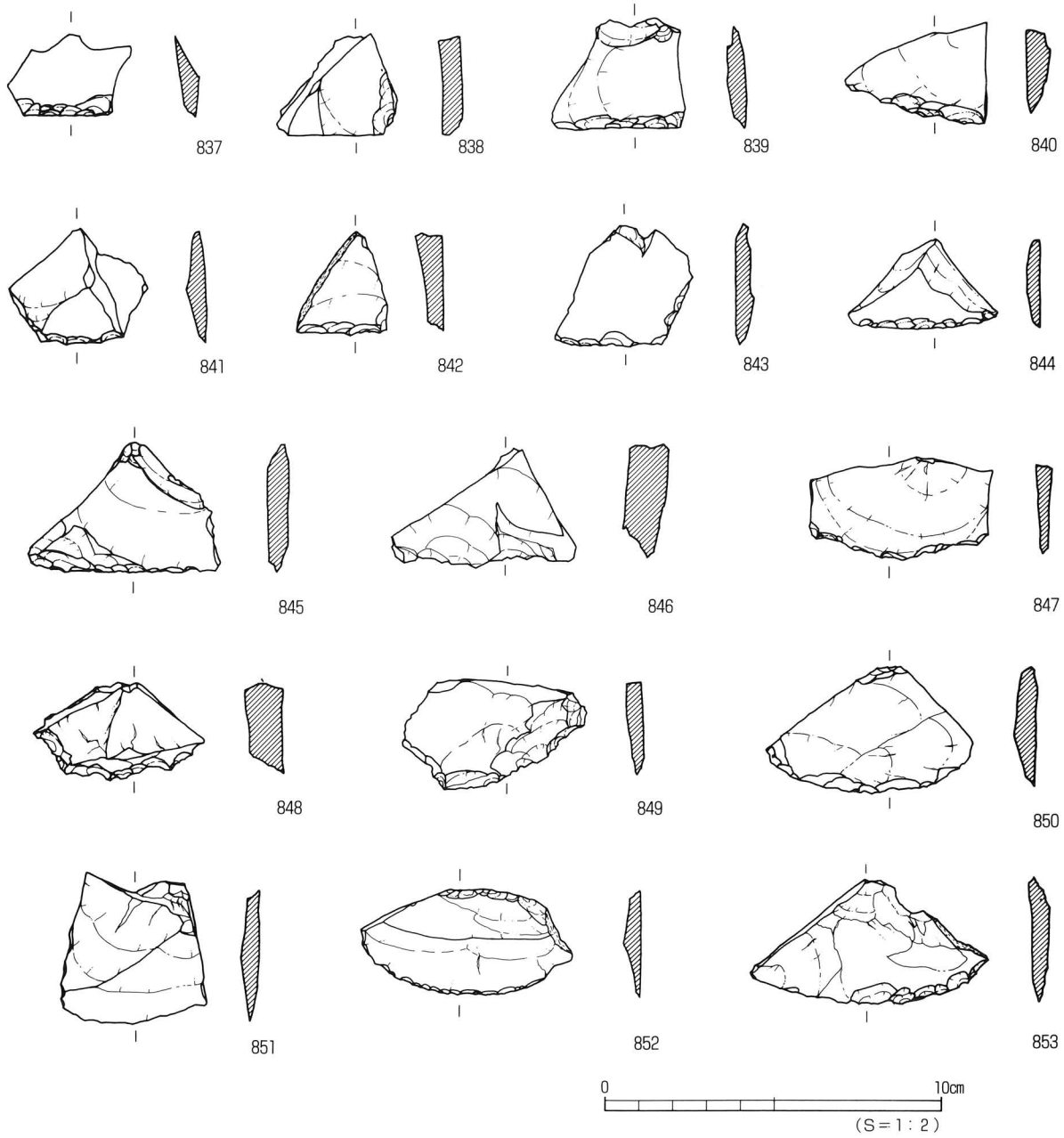
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
812	スクレイパー	サヌカイト		3.9	4.7	0.8	22.1	
813	スクレイパー	サヌカイト		3.6	4.7	0.9	22.2	
814	スクレイパー	サヌカイト		4.4	6.1	1.2	22.3	
815	スクレイパー	サヌカイト		4.3	6.1	0.8	19.3	
816	スクレイパー	サヌカイト		5.0	7.5	0.65	21.8	
817	スクレイパー	サヌカイト		3.3	7.3	0.6	14.0	
818	スクレイパー	サヌカイト		1.7	3.4	0.4	3.1	
819	スクレイパー	サヌカイト		3.4	4.2	0.4	18.6	
820	スクレイパー	サヌカイト		3.0	5.1	0.8	13.0	
821	スクレイパー	サヌカイト		3.5	4.5	1.2	13.0	
822	スクレイパー	サヌカイト		3.7	5.2	0.7	16.0	
823	スクレイパー	サヌカイト		5.0	3.3	1.0	13.5	

図130　A区第5層出土遺物実測図(37)



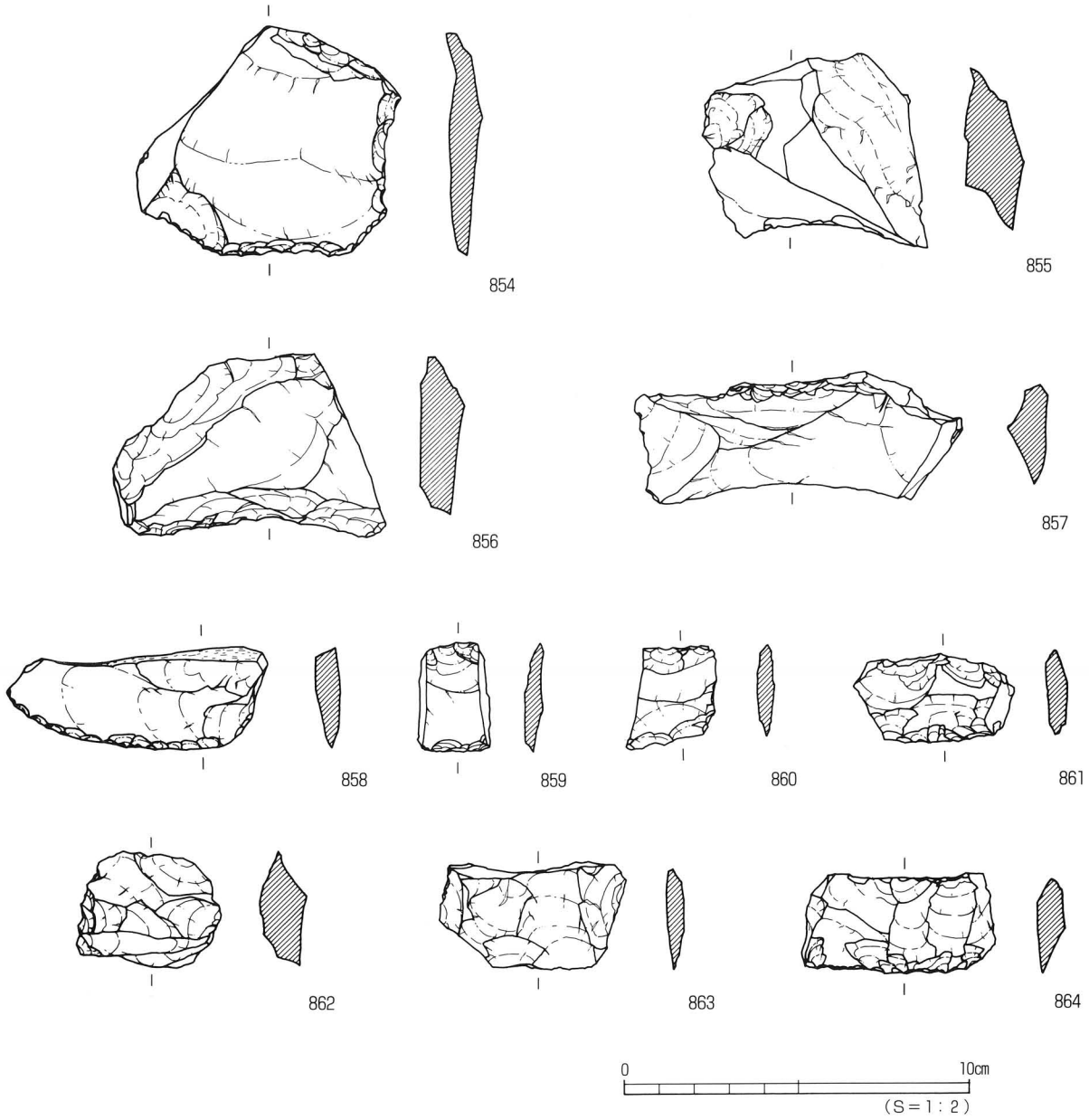
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
824	スクレイパー	サヌカイト		4.9	6.2	1.0	23.9	
825	スクレイパー	サヌカイト		5.7	3.5	0.6	15.8	
826	スクレイパー	サヌカイト		5.0	4.9	1.0	27.7	
827	スクレイパー	サヌカイト		4.7	4.9	0.8	18.4	
828	スクレイパー	サヌカイト		3.3	5.1	0.7	69.6	
829	スクレイパー	サヌカイト		7.5	6.3	1.0	53.1	
830	スクレイパー	サヌカイト		4.5	7.4	0.5	16.8	
831	スクレイパー	サヌカイト		3.6	4.8	0.6	16.8	
832	スクレイパー	サヌカイト		3.5	5.2	0.7	13.5	
833	スクレイパー	サヌカイト		1.8	3.7	0.6	5.1	
834	スクレイパー	サヌカイト		3.2	4.2	0.4	9.1	
835	スクレイパー	サヌカイト		2.6	4.0	1.0	11.7	
836	スクレイパー	サヌカイト		3.5	4.7	0.8	10.9	

図131　A区第5層出土遺物実測図(38)



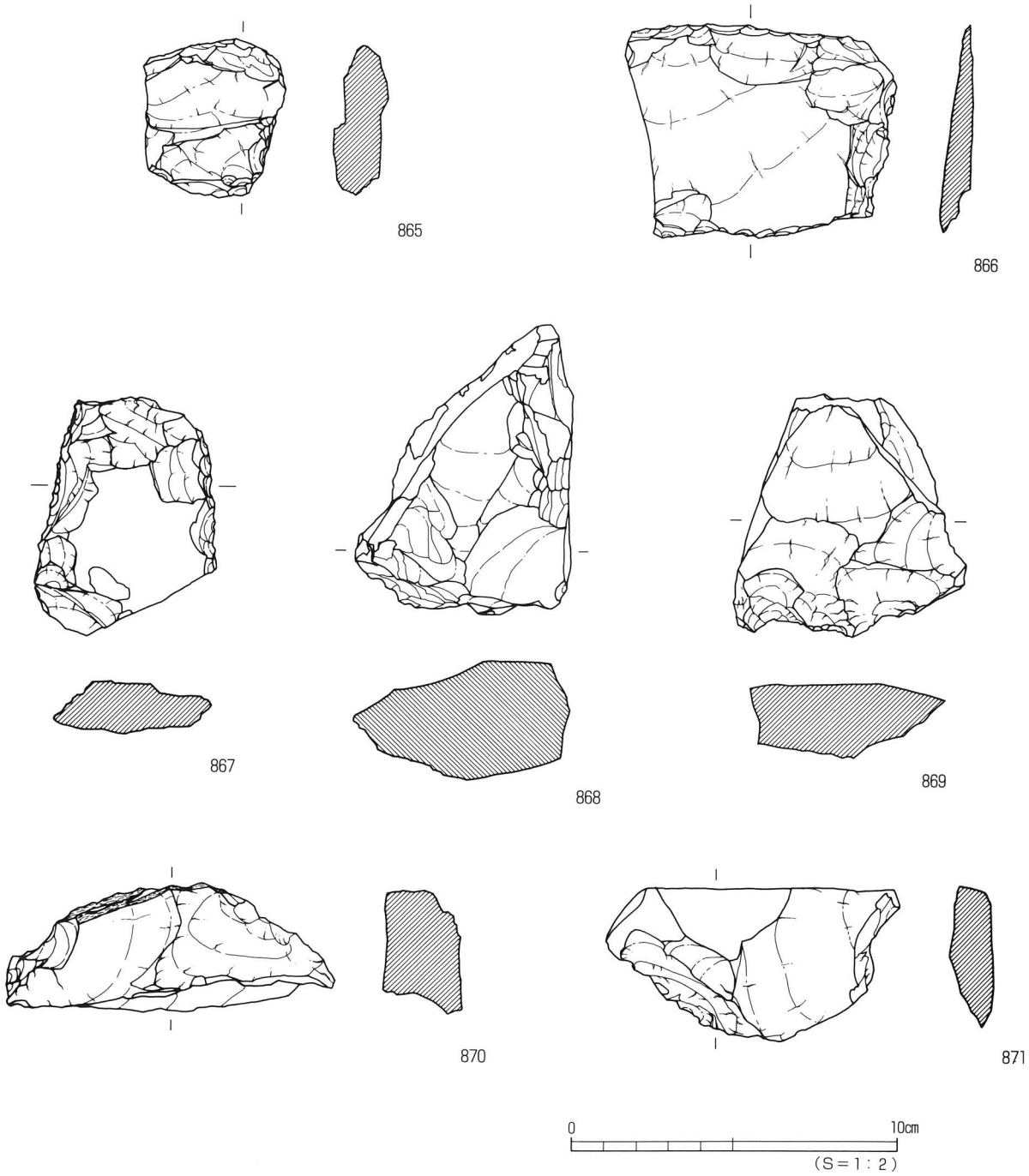
挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
837	スクレイパー	サヌカイト		2.4	3.5	0.5	5.4	
838	スクレイパー	サヌカイト		3.0	3.5	0.6	8.1	
839	スクレイパー	サヌカイト		3.2	3.9	0.5	10.0	
840	スクレイパー	サヌカイト		3.0	4.1	0.7	9.8	
841	スクレイパー	サヌカイト		3.4	4.0	0.6	6.5	
842	スクレイパー	サヌカイト		3.1	2.6	0.8	5.7	
843	スクレイパー	サヌカイト		3.6	3.9	0.5	8.0	
844	スクレイパー	サヌカイト		2.6	4.4	0.4	4.1	
845	スクレイパー	サヌカイト		3.8	5.5	0.6	14.7	
846	スクレイパー	サヌカイト		3.4	5.3	1.1	18.4	
847	スクレイパー	サヌカイト		3.0	5.4	0.5	9.9	
848	スクレイパー	サヌカイト		2.8	2.2	1.1	14.4	
849	スクレイパー	サヌカイト		3.2	5.3	0.4	10.3	
850	スクレイパー	サヌカイト		3.7	6.1	0.6	15.0	
851	スクレイパー	サヌカイト		4.4	4.2	0.5	12.2	
852	スクレイパー	サヌカイト		3.2	6.2	0.5	12.4	
853	スクレイパー	サヌカイト		3.7	6.9	0.5	14.0	

図132　A区第5層出土遺物実測図(39)



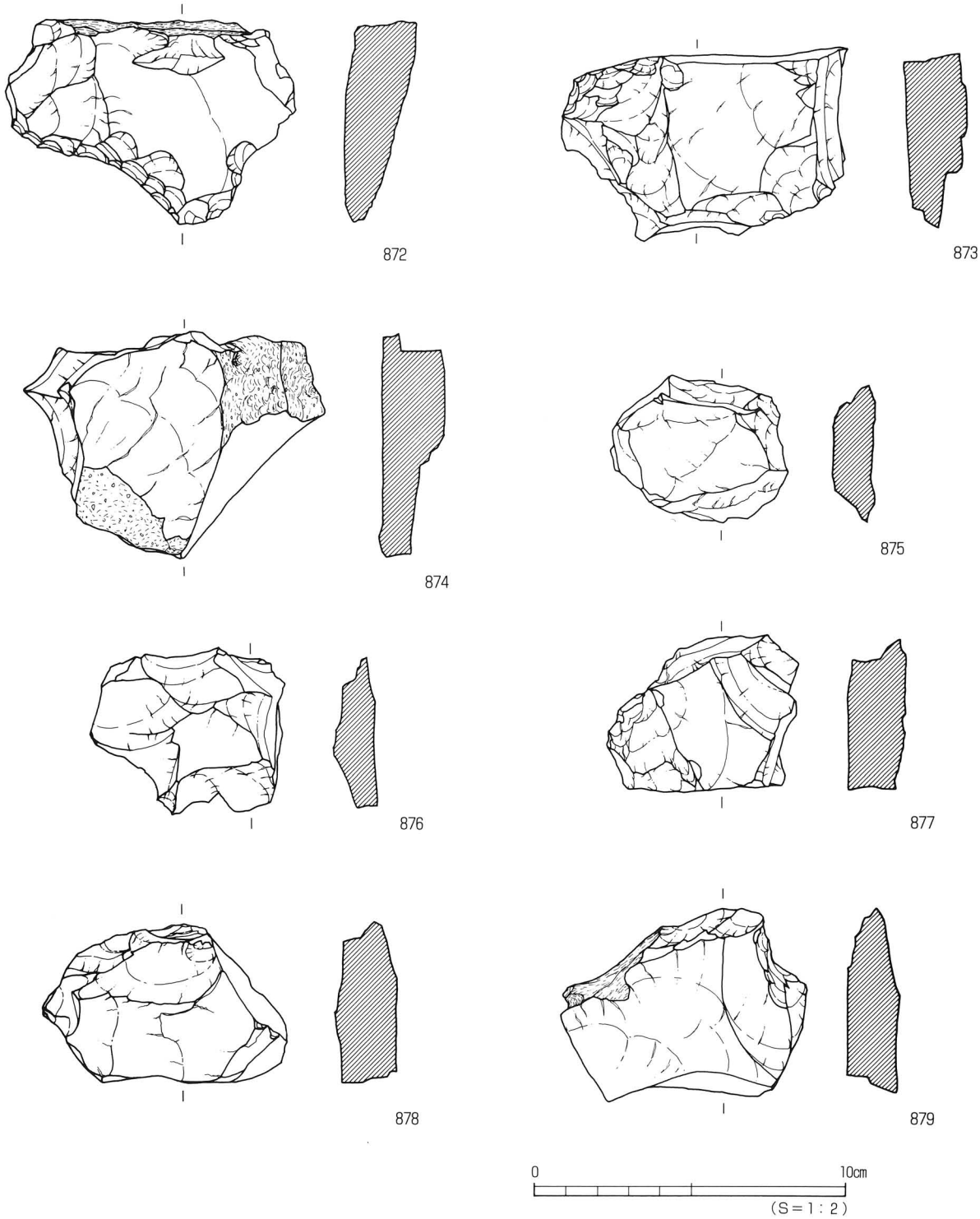
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
854	スクレイパー	サヌカイト		6.7	7.4	1.0	59.6	
855	スクレイパー	サヌカイト		5.6	6.4	1.7	56.9	
856	スクレイパー	サヌカイト		5.3	7.8	1.2	58.9	
857	スクレイパー	サヌカイト		3.8	9.5	1.1	38.7	
858	スクレイパー	サヌカイト		2.9	7.4	0.7	20.8	
859	素材剥片	サヌカイト		3.2	2.0	0.5	5.4	
860	素材剥片	サヌカイト		2.9	2.6	0.5	5.3	
861	素材剥片	サヌカイト		2.5	4.6	0.6	11.7	
862	素材剥片	サヌカイト		3.3	4.2	1.3	20.0	
863	素材剥片	サヌカイト		3.1	5.4	0.5	15.9	
864	素材剥片	サヌカイト		2.8	5.6	0.8	14.8	

図133　A区第5層出土遺物実測図(40)



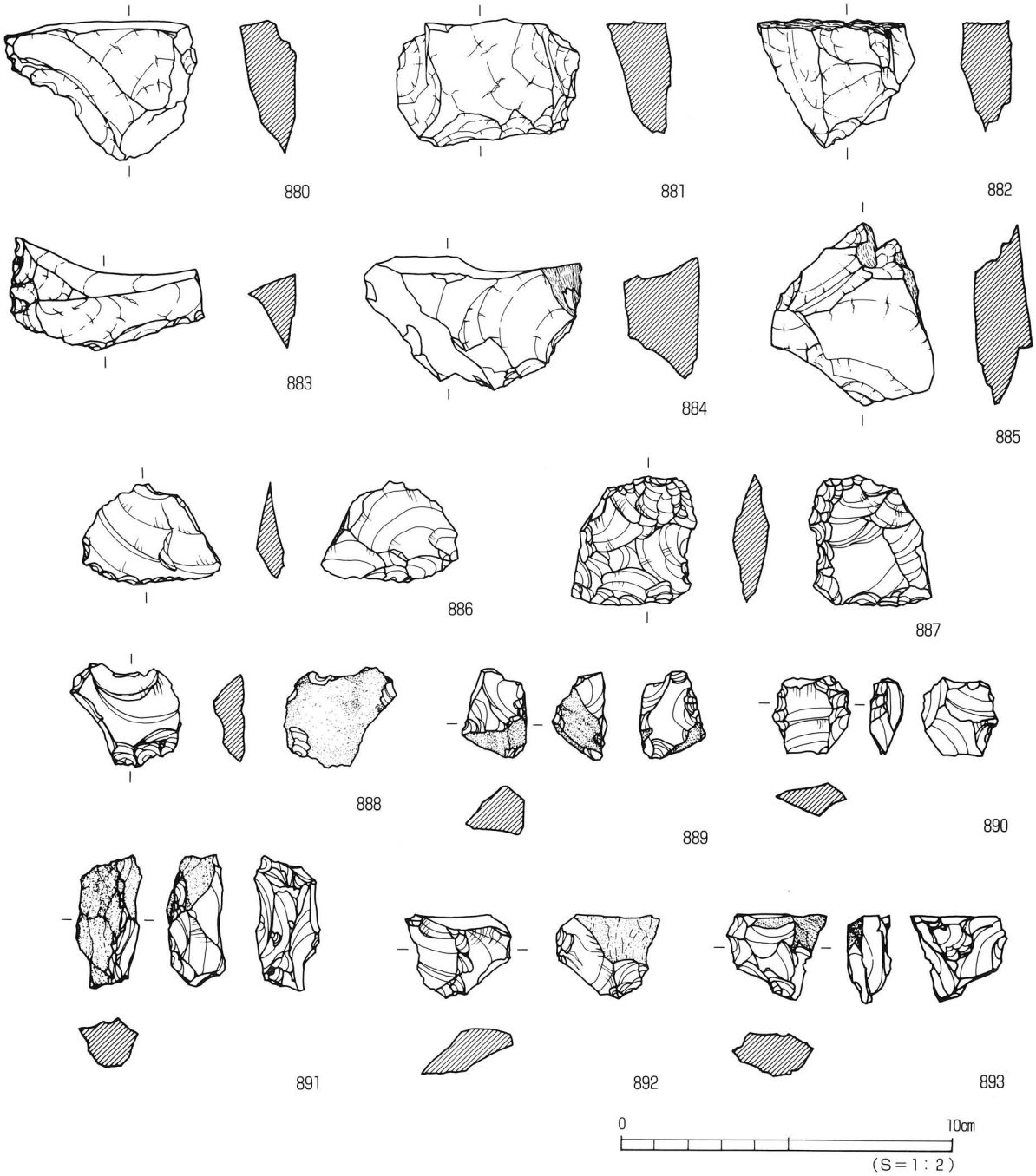
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
865	素材剥片	サヌカイト		4.8	4.4	1.4	44.6	
866	素材剥片	サヌカイト		8.2	6.5	0.8	71.0	
867	素材剥片	サヌカイト		7.3	5.5	1.6	71.0	
868	石核	サヌカイト		6.5	9.0	3.7	255.5	
869	石核	サヌカイト		7.2	7.1	2.6	127.1	
870	石核	サヌカイト		3.9	9.9	2.2	95.0	
871	石核	サヌカイト		4.7	8.9	1.3	67.3	

図134　A区第5層出土遺物実測図(41)



挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
872	石核	サヌカイト		6.6	9.1	2.0	142.9	
873	石核	サヌカイト		6.1	9.2	1.9	160.2	
874	石核	サヌカイト		7.2	9.5	1.9	127.5	
875	石核	サヌカイト		4.7	5.8	1.3	46.1	
876	石核	サヌカイト		5.2	6.0	1.3	44.9	
877	石核	サヌカイト		4.8	7.0	1.9	70.3	
878	石核	サヌカイト		5.1	7.7	2.0	99.2	
879	石核	サヌカイト		6.2	7.8	1.6	111.3	

図135　A区第5層出土遺物実測図(42)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
880	石核	サヌカイト		4.2	5.7	1.5	39.2	
881	石核	サヌカイト		3.8	5.5	1.7	38.2	
882	石核	サヌカイト		3.9	4.7	1.5	28.6	
883	石核	サヌカイト		3.5	5.7	1.3	19.4	
884	石核	サヌカイト		4.1	6.5	2.2	50.3	
885	石核	サヌカイト		5.5	5.0	1.8	45.3	
886	スクレイパー	黒曜石（姫島産）		3.1	4.2	0.8	7.4	
887	スクレイパー	黒曜石（姫島産）		4.1	3.6	1.0	16.5	
888	スクレイパー	黒曜石		3.2	3.3	0.8	8.4	
889	石核	黒曜石		2.7	1.9	1.3	6.9	
890	石核	黒曜石		2.3	2.4	1.0	5.0	
891	石核	黒曜石		4.1	2.0	1.5	11.9	
892	石核	黒曜石（姫島産）		2.5	3.1	1.4	9.2	
893	石核	黒曜石（姫島産）		2.6	3.0	1.3	8.9	

図136　A区第5層出土遺物実測図(43)

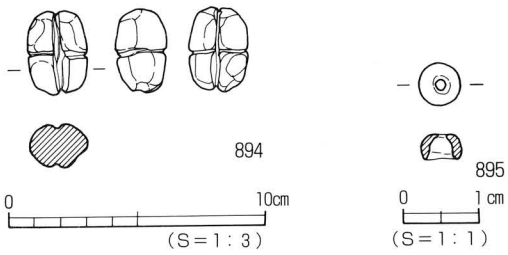
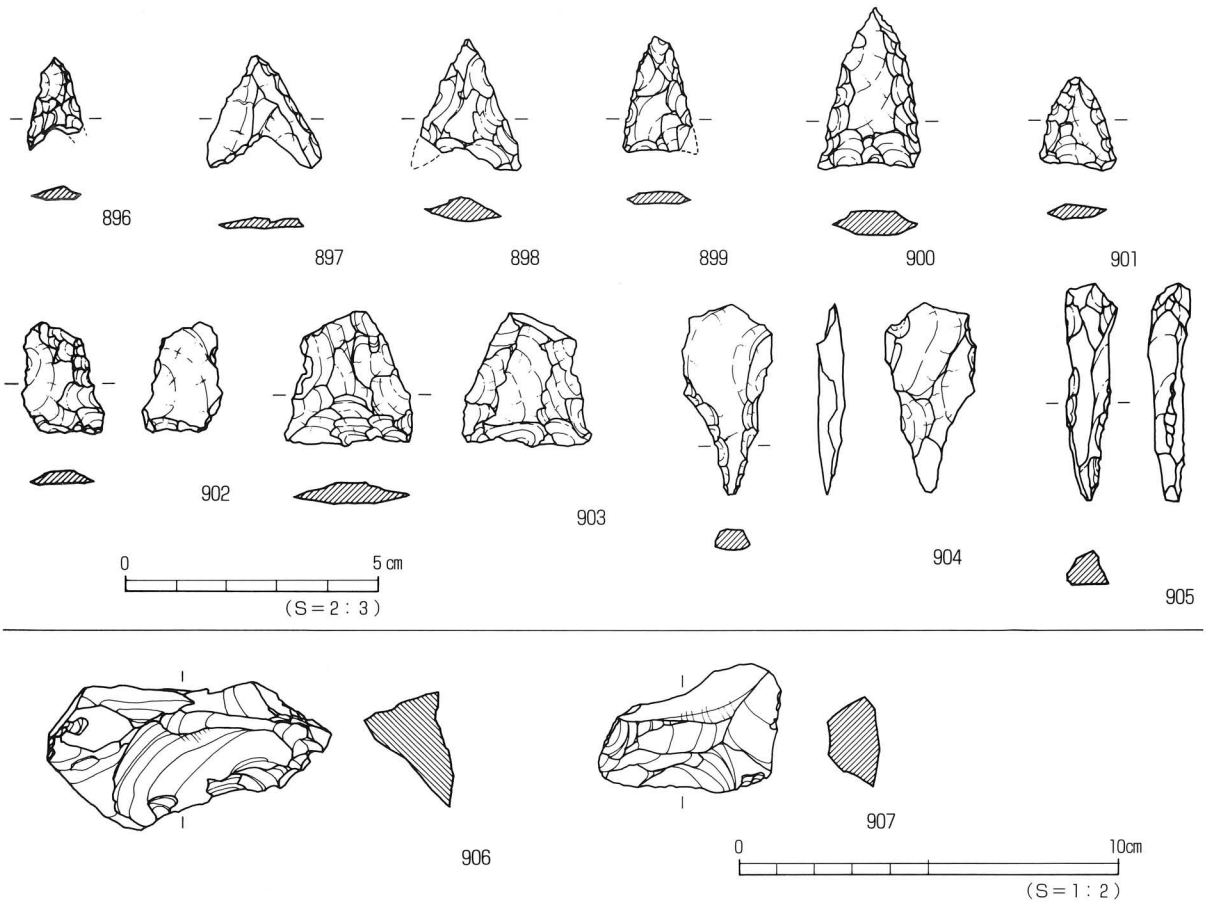


図137　A区第5層出土遺物実測図(44)

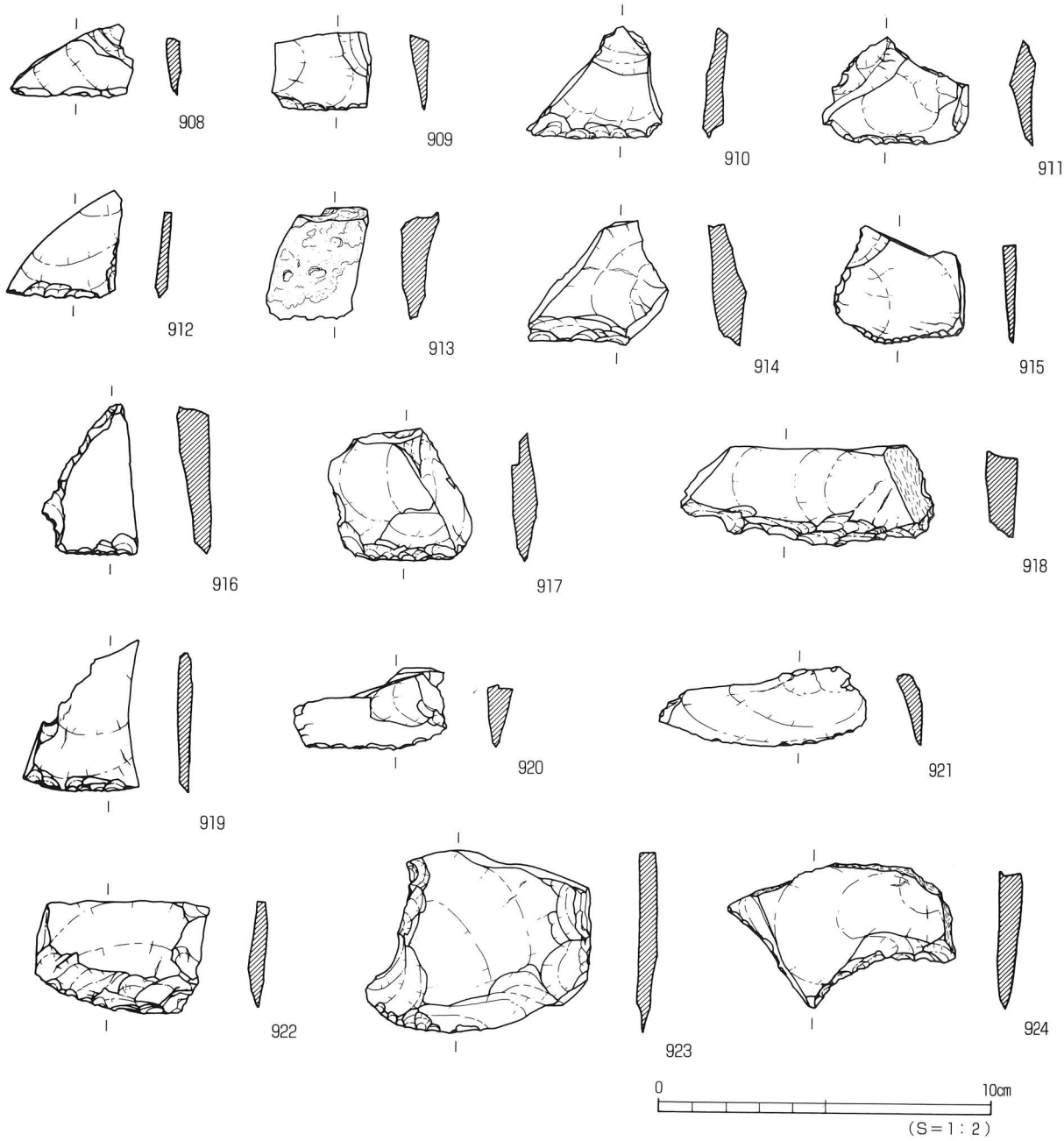
⑧ 第5～7層出土遺物（図138～143）

第5層から7層の間の出土であることはわかっているが、層位が特定できない石製品を主とした遺物が若干あるので、ここでとりあげておく。剥片素材の石製品にはサヌカイトの石鏃、石錐、スクレイパーがある。石鏃には凹基のものと平基のものとがあり、比較的入念に成形された898のようなものもあるが、897や900のような縁辺部だけの剥離によって成形されたものもある。特に正三角形に近い凹基の897は両面ともに縁



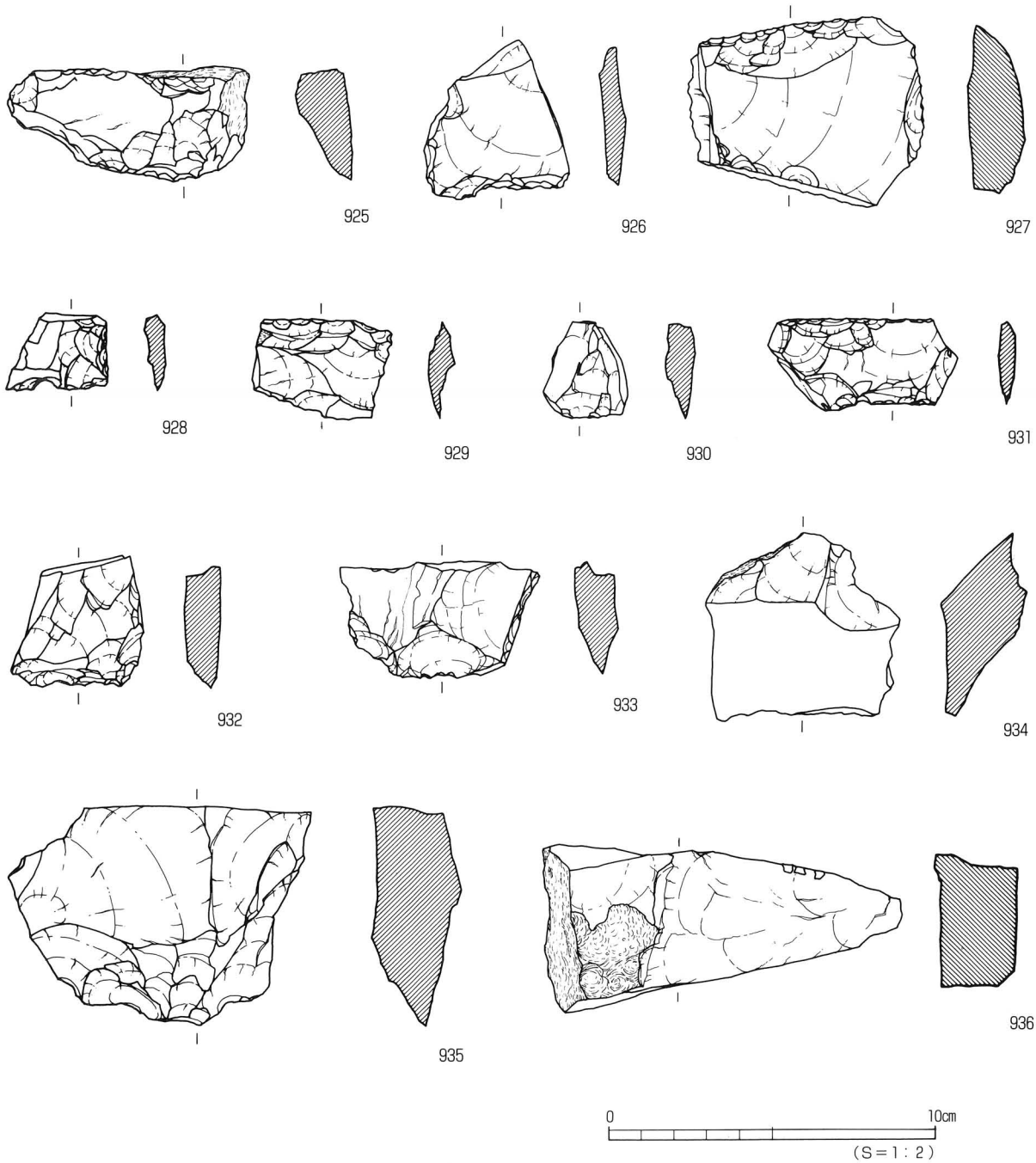
挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
896	打製石鏃	サヌカイト	一部欠損	1.65	(1.2)	0.25	0.4	
897	打製石鏃	サヌカイト	完形	2.3	2.3	0.2	1.2	
898	打製石鏃	サヌカイト	一部欠損	2.6	(2.0)	0.5	1.4	
899	打製石鏃	サヌカイト	一部欠損	2.2	(1.5)	0.2	0.9	
900	打製石鏃	サヌカイト	完形	3.3	2.0	0.5	3.2	
901	打製石鏃	サヌカイト	完形	1.9	1.5	0.3	0.8	
902	石鏃未製品	サヌカイト		2.2	1.6	0.3	1.3	
903	石鏃未製品	サヌカイト		2.7	2.6	0.4	3.1	
904	石核	サヌカイト	完形	3.8	1.8	0.4	2.8	
905	石核	サヌカイト	完形	4.4	0.9	0.7	4.0	
906	石核	黒曜石（姫島産）		7.5	3.8	2.3	61.6	
907	石核	黒曜石（姫島産）		3.4	4.7	1.4	21.2	

図138　A区第5～7層出土遺物実測図(1)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
908	スクレイパー	サヌカイト		2.2	3.7	0.4	4.0	
909	スクレイパー	サヌカイト		2.4	2.9	0.5	4.7	
910	スクレイパー	サヌカイト		3.3	4.0	0.5	10.1	
911	スクレイパー	サヌカイト		3.2	4.4	0.7	9.0	
912	スクレイパー	サヌカイト		3.3	3.2	0.3	4.11	
913	スクレイパー	サヌカイト		3.4	3.0	1.0	10.9	
914	スクレイパー	サヌカイト		3.8	4.1	1.0	14.9	
915	スクレイパー	サヌカイト		3.6	3.9	0.4	6.6	
916	スクレイパー	サヌカイト		4.5	2.8	0.9	11.0	
917	スクレイパー	サヌカイト		4.0	4.3	0.7	13.0	
918	スクレイパー	サヌカイト		3.0	7.6	1.0	34.2	
919	スクレイパー	サヌカイト		4.5	3.4	0.4	8.5	
920	スクレイパー	サヌカイト		2.4	4.4	0.8	7.6	
921	スクレイパー	サヌカイト		2.3	6.1	0.5	7.4	
922	スクレイパー	サヌカイト		3.3	5.1	0.5	15.7	
923	スクレイパー	サヌカイト		5.4	6.6	0.5	29.6	
924	スクレイパー	サヌカイト		4.3	7.0	0.7	20.7	

図139　A区第5～7層出土遺物実測図(2)

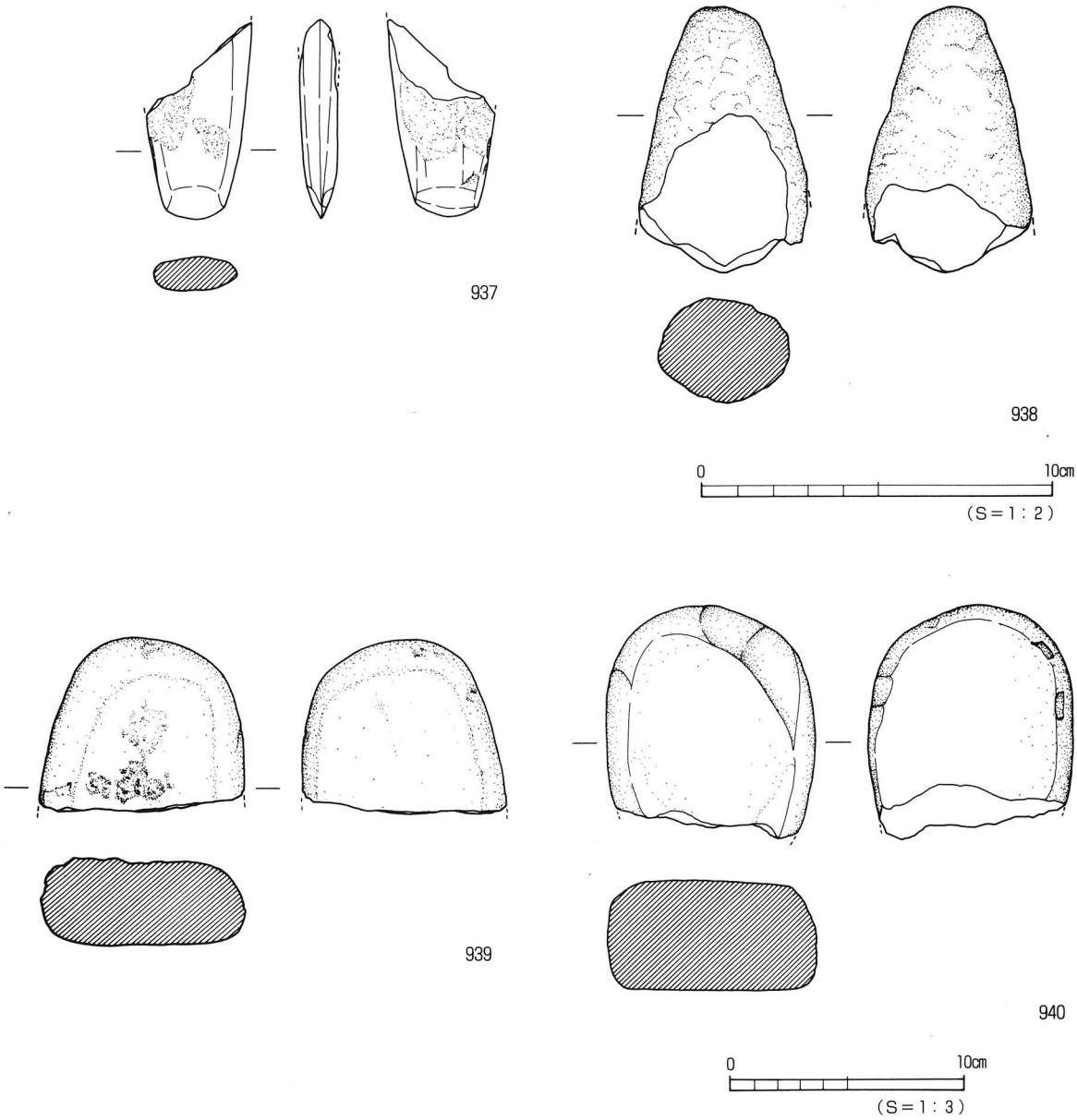


挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
925	スクレイパー	サヌカイト		3.4	7.2	1.5	35.1	
926	スクレイパー	サヌカイト		4.9	4.3	0.7	16.3	
927	スクレイパー	サヌカイト		7.0	5.8	1.6	84.6	
928	素材剥片	サヌカイト		2.4	3.1	0.6	5.1	
929	素材剥片	サヌカイト		4.1	3.5	0.8	11.9	
930	素材剥片	サヌカイト		3.0	2.5	0.8	7.4	
931	素材剥片	サヌカイト		2.9	5.9	0.5	16.4	
932	素材剥片	サヌカイト		4.0	4.0	1.1	24.9	
933	石核	サヌカイト		3.6	6.0	1.2	26.8	
934	石核	サヌカイト		5.6	5.9	2.6	76.5	
935	石核	サヌカイト		6.7	9.2	2.5	167.1	
936	石核	サヌカイト		10.9	5.3	2.8	172.7	

図140　A区第5～7層出土遺物実測図(3)

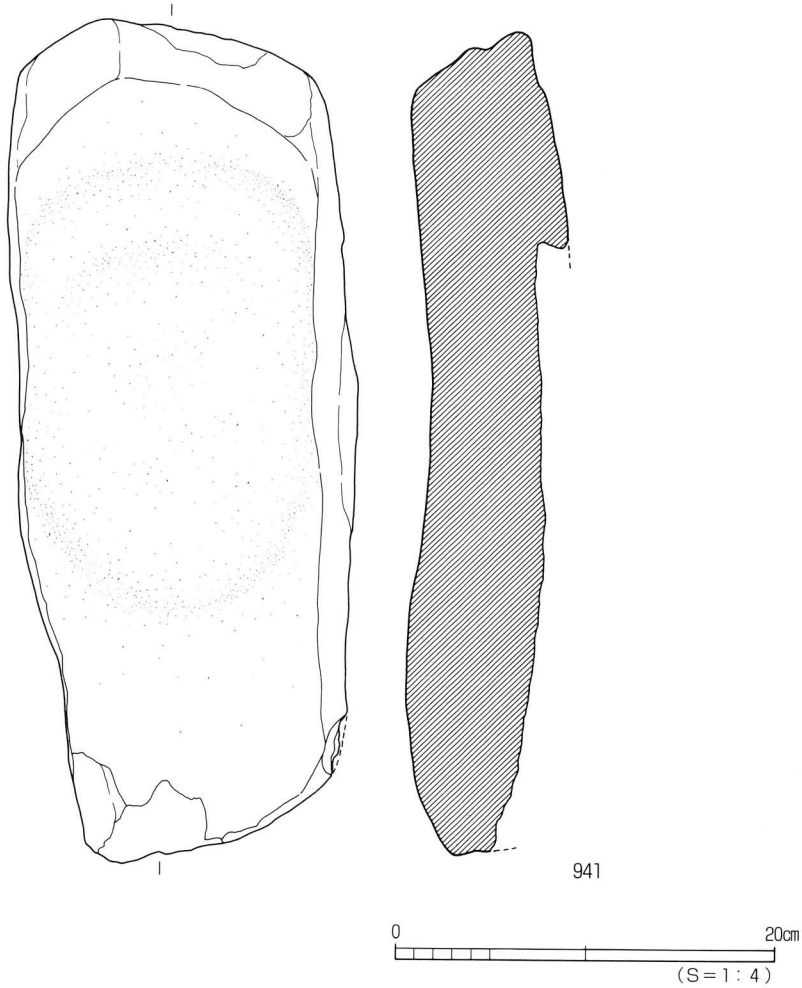
辺部の限られた範囲以外のほとんどの部分が一次剥離面のままである。902・903は石鏃未製品と考えられるもの、906・907は姫島産黒曜石の石核である。転石利用のものには砂岩の伐採斧や磨石、窪み石、安山岩の加工斧、緑色片岩の石皿などがある。

土製品では5層出土の土錘894と同形、同大の小型品942が1点と、晩期の浅鉢胴部片を再利用した紡錘車943がある。



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
937	磨製石斧	安山岩	欠損	(5.7)	(2.5)	(1.0)	21.0	
938	磨製石斧	砂岩	欠損	(7.6)	(4.6)	(2.9)	125.7	
939	窪み石	花崗岩	欠損	(7.4)	(8.7)	(3.7)	400.6	
940	磨石	砂岩	欠損	(10.1)	8.8	4.6	780.0	

図141　A区第5～7層出土遺物実測図(4)



挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
941	石皿	緑色片岩	欠損	44.7	18.3	(8.3)	12000.0	

図142　A区第5～7層出土遺物実測図(5)

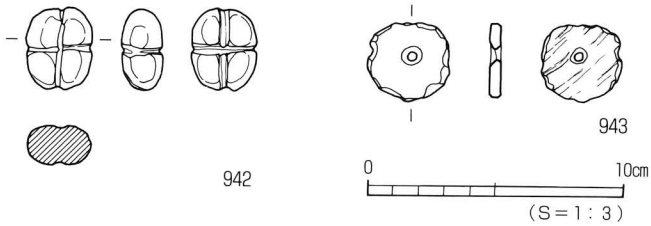
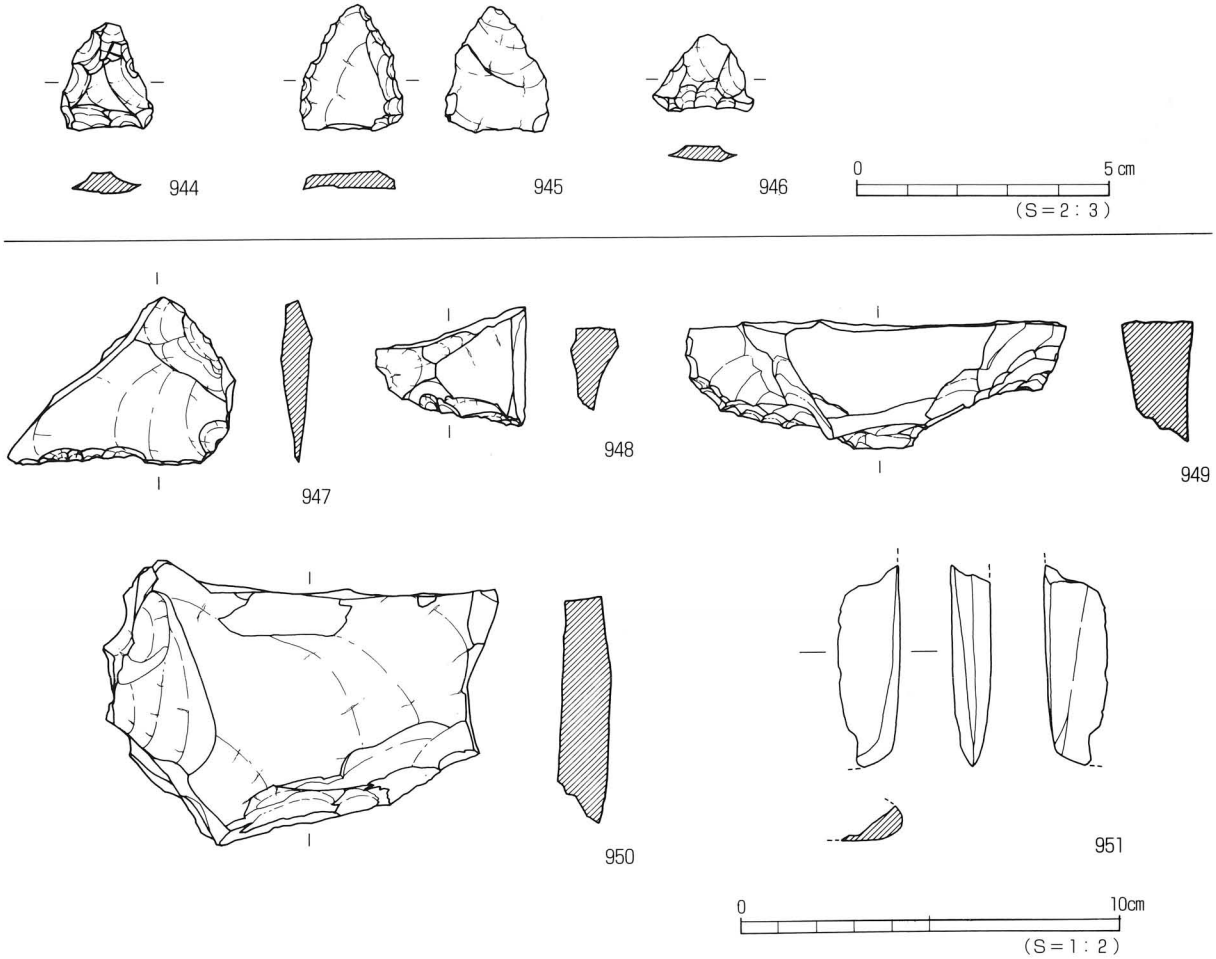


図143　A区第5～7層出土遺物実測図(6)

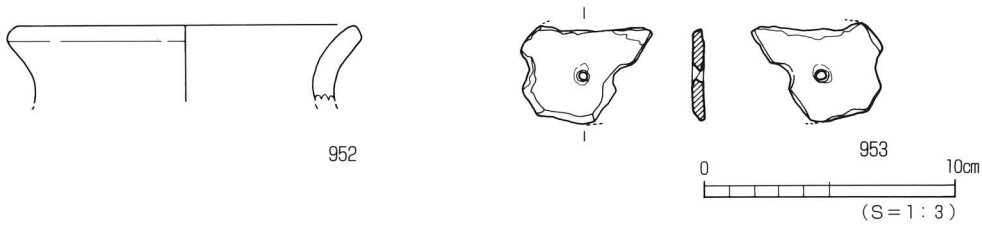
3）A区のその他の遺物（図144～146）

A区の遺構や湿地検出に至るまでの第1～4層の間で採集された遺物が若干あり、量の多寡はともかく縄文時代から中世までのものがある。図144は縄文時代のものと考えられる石器類、図145は弥生時代の壺と石庖丁である。壺952は小破片のため判断しづらいが、前期の口縁部か？緑色片岩の石庖丁953は穿孔部周辺の破片、かなりローリングを受けて摩滅が著しい。古墳時代以降の遺物を図146に掲載している。須恵器は蓋坏のみで、古いところではTK23から新しいところではTK217段階のものがある。その他古代～中世のものには、円盤高台や輪高台の土師器坏962・椀963、和泉型瓦器椀964、土師器鍋968～970、亀山焼甕966、備前焼擂り鉢971・972など13世紀代から15世紀代を中心としたものである。



挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
944	石鏃	サヌカイト	完形	2.1	1.8	0.5	1.7	
945	石鏃	サヌカイト	完形	2.5	2.0	0.3	2.4	
946	打製石鏃	サヌカイト	完形	1.5	2.0	0.3	1.0	
947	スクレイパー	サヌカイト		4.4	5.9	0.8	16.9	
948	スクレイパー	サヌカイト		3.1	3.9	1.2	14.2	
949	石核	サヌカイト		3.5	10.0	1.9	67.6	
950	石核	サヌカイト		7.5	10.2	1.3	122.3	
951	磨製石斧	緑色片岩	欠損	(5.3)	(1.6)	(0.9)	7.1	

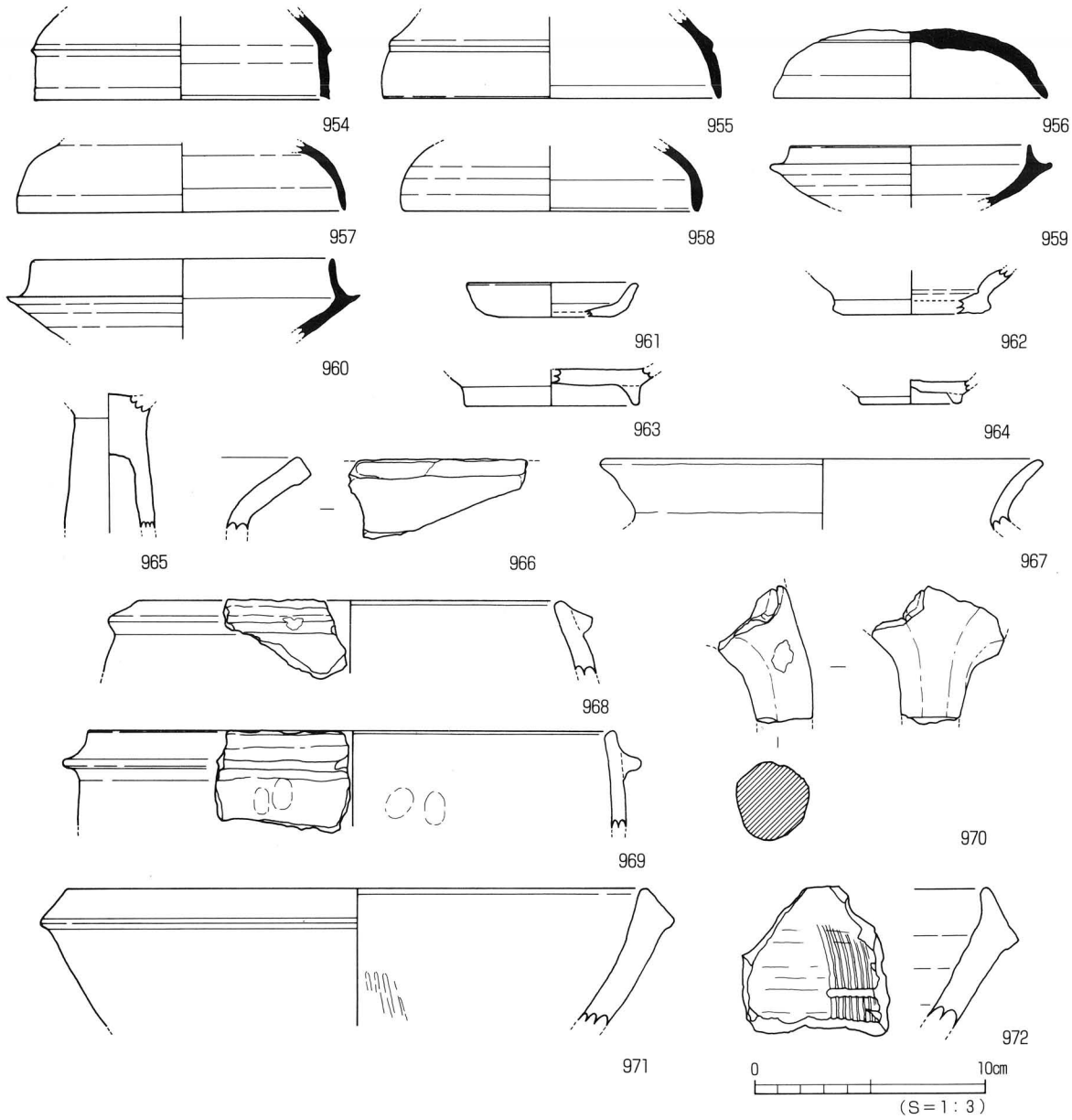
図144　A区表採遺物実測図(1)



挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
952	壺	マメツ。	マメツ。					淡橙色	淡橙色	

挿図番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
953	石庖丁	緑色片岩	欠損	(5.3)	(3.9)	(0.5)	13	

図145　A区表採遺物実測図(2)



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
954	坏蓋	ヨコナデ。	ヨコナデ。					青灰色	青灰色	
955	坏蓋	ヨコナデ。	ヨコナデ。					灰色	灰色	
956	坏蓋	天：回転ヘラケズリ。	ヨコナデ。					灰白色	灰白色	
957	坏蓋	ヨコナデ。	ヨコナデ。					灰白色	灰色	
958	坏蓋	ヨコナデ。	ヨコナデ。					灰色	灰色	
959	坏身	ヨコナデ。	ヨコナデ。					灰白色	灰色	
960	坏身	ヨコナデ。	ヨコナデ。					灰色	灰色	
961	小皿	マメツ。	マメツ。					淡橙色	淡橙色	
962	坏	マメツ。	マメツ。					淡黄色	淡黄色	
963	椀	マメツ。	マメツ。					灰白色	灰白色	
964	椀	マメツ。	マメツ。					淡黄灰色	淡黄色	和泉型瓦器。
965	高坏	マメツ。	マメツ。					乳白色	乳白色	
966	甕	マメツ。	マメツ。					黄白色	黄白色	
967	甕	マメツ。	マメツ。					淡橙色	淡橙色	亀山。
968	鍋	ナデ。	ナデ。					淡褐色	黒色	
969	鍋	ナデ。	ナデ。					灰褐色	褐色	
970	鍋	ナデ。	ナデ。					灰褐色	灰褐色	
971	摺鉢	ヨコナデ。	ヨコナデ。					灰褐色	灰褐色	備前。
972	摺鉢	ヨコナデ。	ヨコナデ。					淡橙色	淡橙色	備前。

図146　A区表採遺物実測図(3)

（2） B区の調査

B区はA区の南方80m付近に設定された調査区で、調査区北端ではA区の湿地から続いていると考えられる汀が北側を落ちに東西方向に検出されたが、湧水のため充分に層位的な調査が行われていない。この調査区で主に調査されたのは不整形の土器溜まりB区SX－1である。

図147　B区全測図

1）土器溜まりＳＸ－１出土遺物（図148～160）

Ｂ区南西部で検出された長さ11m、最大幅５ｍの不整形の平面形で、最も深い部分で0.3m程度の窪みである。埋積している土はＡ区の第５層と同質の暗茶褐色シルトで、人為的な遺構ではなくやはり湿地の一部と考えられる。

突帯文深鉢の器型や口端部の形態、刻み目等のバリエーションはＡ区第５層に準じるが、なかには刻み目の施しかたがイレギュラーなものが僅かに存在する。976の口唇部刻み目はしっかりした平坦面をなす口唇の内端、外端の双方を刻まれている。986では断面三角形のぼてっとした突帯が口端部に接するように貼り付けられ、突帯は三角形の頂点を刻まれるのではなく、その上辺をなす面に刺突が加えられる。また、口端部も刻まれず、端部をやや下った内面に刺突が施されている。これらのような口唇内外端刻みや口縁部内面刺突は、通常刻み目突帯を持たない深鉢に伴うもので、Ａ区６層以下や、ＳＫ－６などに例があるところからみれば若干古い要素といえる。

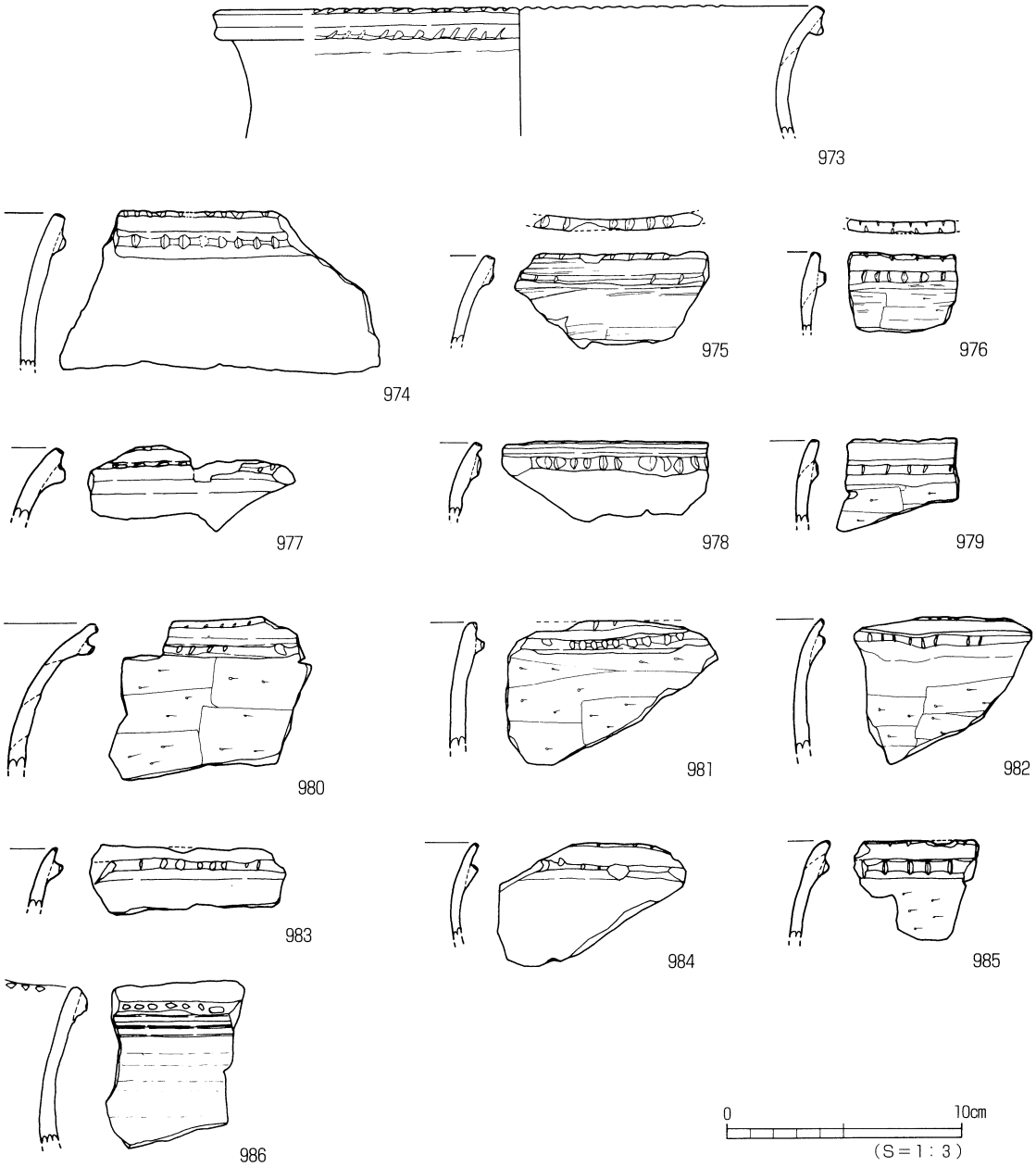
頸部施文には複数条の沈線によるＸ字状文、あるいは山形文がある。991のように沈線による頸部施文と頸胴界に半截竹管状工具による刺突を組み合わせたものがある。このような例は図示されたようにいくつかみられるが、図151に掲載されたような例があるのでこれらのすべてが刻み目突帯を伴っていたものかどうかは不詳である。無突帯深鉢のうち、1006・1007は口縁部内面施文の粗製深鉢、1008～1019は頸胴界刺突、頸部施文、口端部刻み目のいずれかを施されるもので、1009のようにそのすべてが揃っているものもある。

浅鉢には1025～1027のような胴部が扁球形に強く張り、頸部でくびれて短い口頸部が外上方に開くもので、口端部を内面に突出あるいは肥厚させるものと、鍵形口縁のものがある。前者を残りのよい1027でみてみると、口縁部の１個所にリボン状と鰭状突起を組み合わせた突起を付加し、肩部には段を巡らせている。鍵形口縁のものには、口縁部の屈曲がほとんどなく、内面突帯のようになっている1032～1034のようなものもある。1035は浅鉢もしくは深鉢の胴部に貼り付けられる蝶ネクタイ状の突起の剥離したものである。

この土器溜まりでは壺の出土が１点だけみられた。1036は復元口径30.4cmの大型品口縁部で、緩く折り曲げられた口端部は鈍い面をなしている。器面は荒れているが、外面の一部に磨かれたような痕跡がみられる。

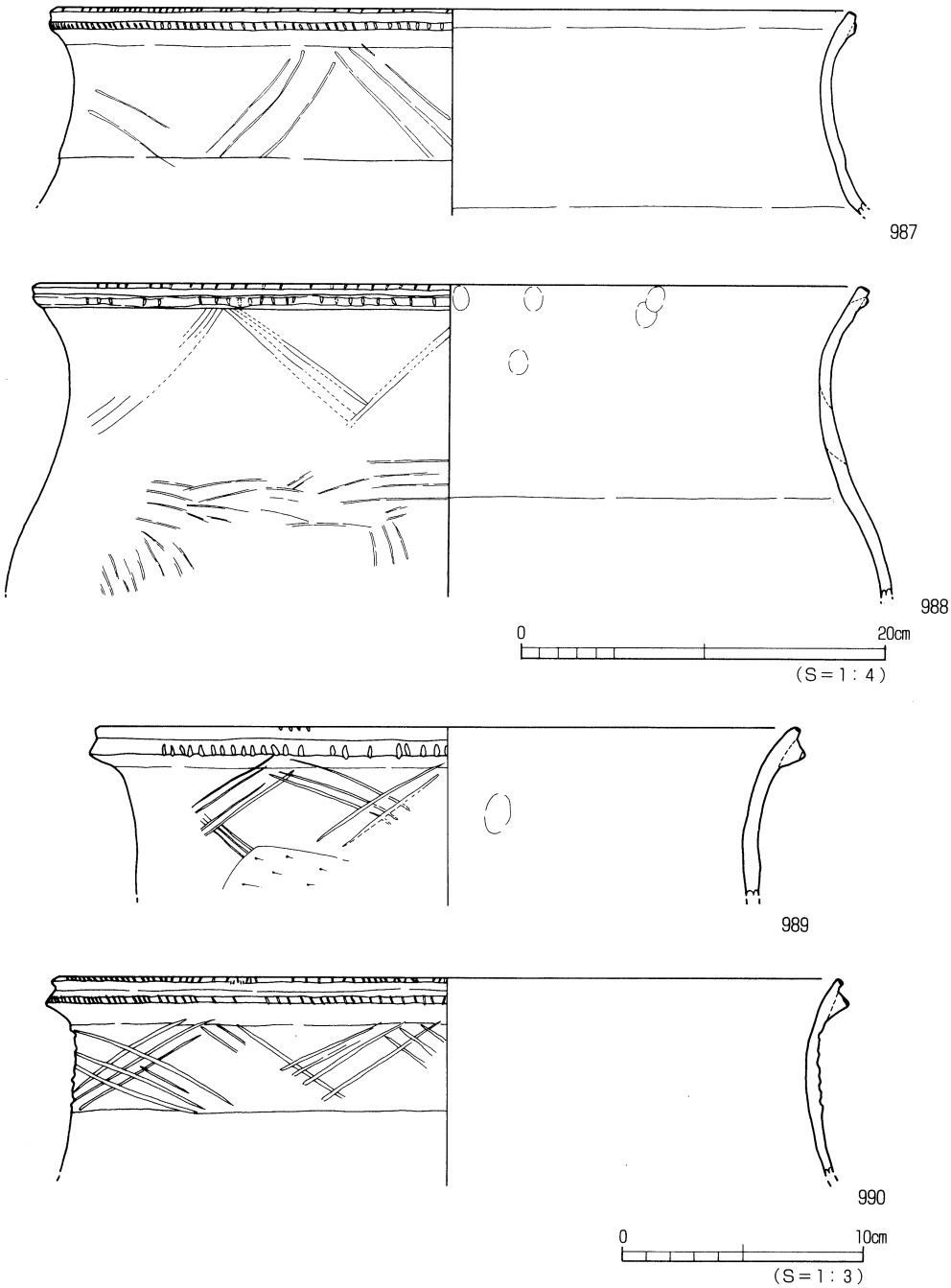
底部は深鉢が概ね分厚い窪み底、浅鉢が薄い窪み底あるいは平底になるが、丸底もしくは丸みをおびた尖り底になるものが３点あり、器壁が薄く内面の調整が丁寧なものを浅鉢と判断した。

石製品で注目されるものには石庖丁未製品と考えられる1052が１点ある。緑色片岩を素材とするもので、縦横９×4.7cm、厚さ0.5cmの隅丸長方形状の板状素材の一方の短辺を打ち欠き、抉りを入れた段階で片面が板状剥離したため、製作を放棄したものと思われる。黒色片岩の伐採斧1055は破損品であるが、身幅は薄いようである。緑色片岩の小破片1054には研磨による抉りが明瞭に観察でき、抉入柱状片刃石斧の可能性が高い。サヌカイトの剥片利用の製品には石鏃、スクレイパーがあり、その他素材剥片や石核がある。石鏃のなかには３点の未製品が含まれている。



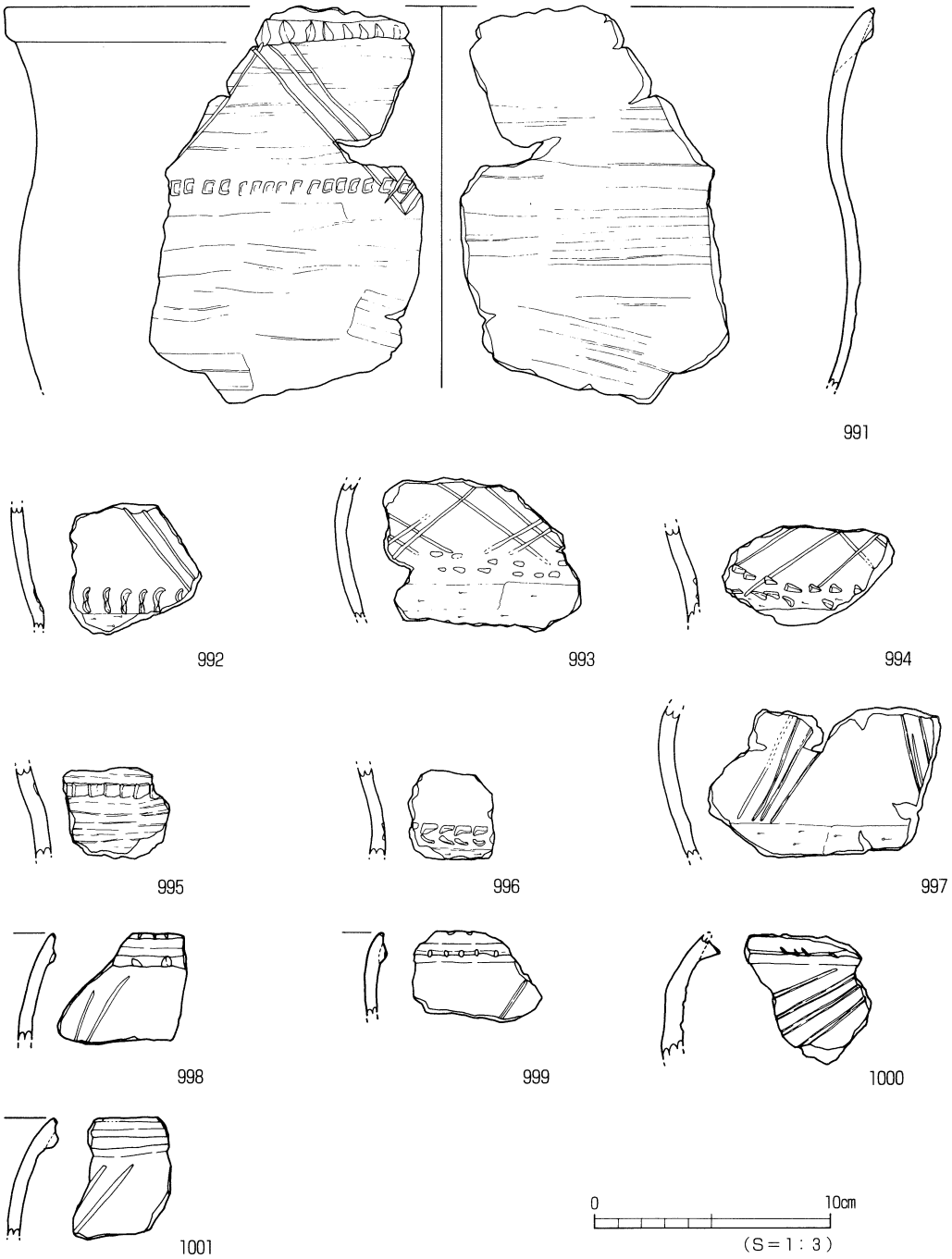
挿図番号	器種	調	整	口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
973	深鉢	頸：ナデ？	ナデ。	面	D字形	三角形	D字形	茶褐色	灰褐色	
974	深鉢	頸：ナデ。	ナデ。	面	マメツ	三角形	V字形	黒褐色	灰褐色	
975	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	D字形	半円形	D字形	黒褐色	淡灰褐色	
976	深鉢	頸：ケズリ。	ナデ。	面	D字形	コ字形	D字形	灰茶褐色	淡灰褐色	
977	深鉢	頸：ナデ。	ナデ。	面	U字形	コ字形	長方形	黒色	淡褐色	
978	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	マメツ	半円形	D字形	褐色	橙褐色	
979	深鉢	頸：ケズリ。	ナデ。	面	D字形	コ字形	小D字形	暗褐色	褐色	
980	深鉢	頸：ケズリ。	ナデ。	面	D字形	三角形	D字形	褐色	淡灰褐色	
981	深鉢	頸：ケズリ。	ナデ。	丸	マメツ	台形	D字形	暗褐色	灰褐色	
982	深鉢	頸：ケズリ。	ナデ。	丸	小D字形	三角形	D字形	淡黄褐色	灰褐色	
983	深鉢	ナデ。	マメツ。	丸	D字形	三角形	D字形	灰褐色	黄褐色	
984	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	小D字形	三角形	小D字形	黒褐色	褐色	
985	深鉢	頸：ケズリ。	マメツ。	丸	マメツ	三角形	D字形	淡灰褐色	橙褐色	
986	深鉢	頸：条痕→ナデ。	ナデ。	丸		三角形	刺突	乳白色	乳白色	口縁内面刺突。

図148　B区SX－1出土遺物実測図(1)



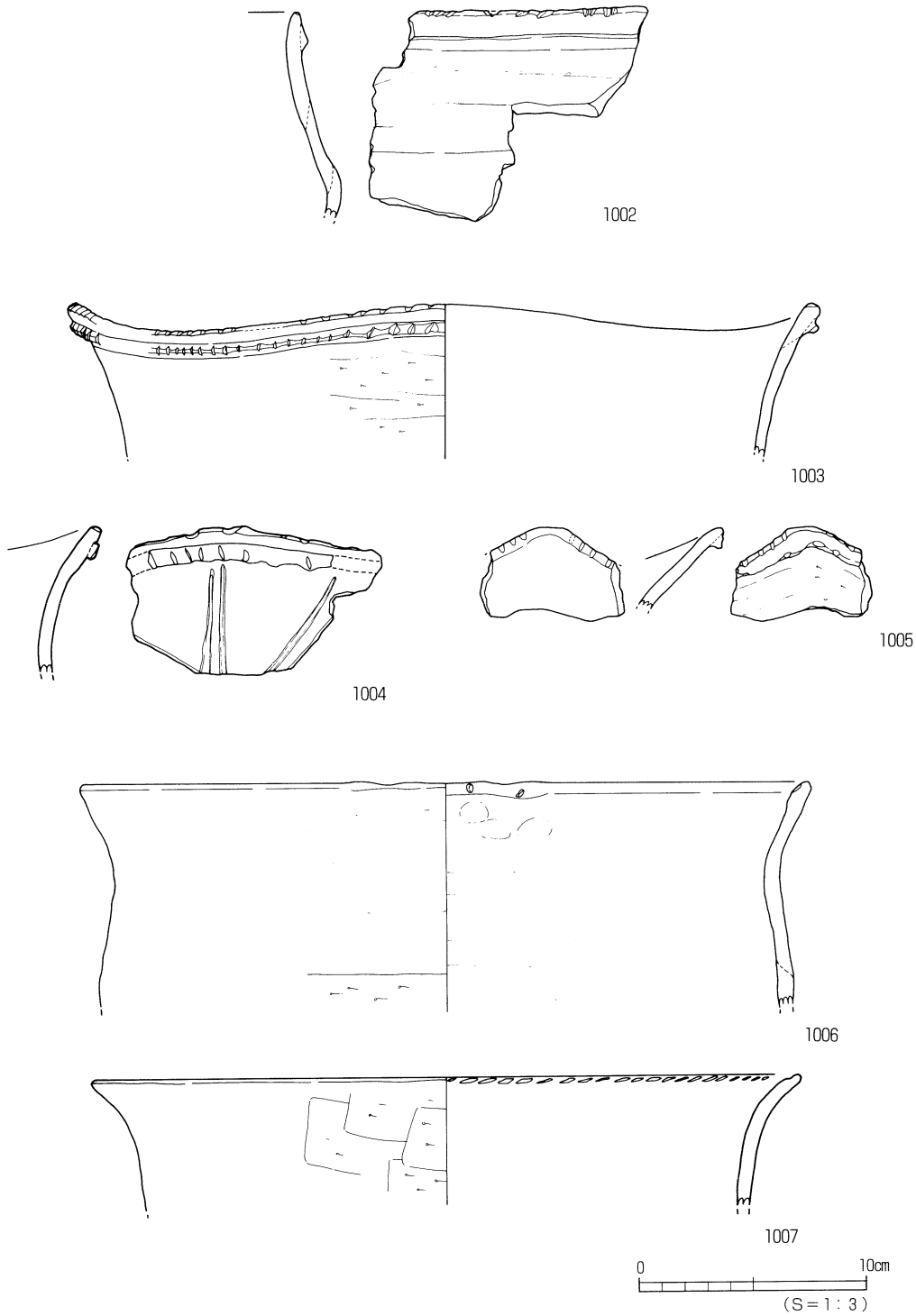
挿図番号	器種	調	整	口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
987	深鉢	頸：ケズリ→ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	面	小D字形	コ字形	小D字形	黒色	淡灰褐色	頸部施文。
988	深鉢	頸：マメツ？　胴：ケズリ。	ナデ。	面	小D字形	コ字形	D字形	黒色	灰白色	頸部施文。
989	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	丸	小D字形	三角形	小D字形	黒色	橙褐色	頸部施文。
990	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	面	小D字形	三角形	小D字形	黒褐色	淡灰褐色	頸部施文。

図149　B区ＳＸ－１出土遺物実測図(2)



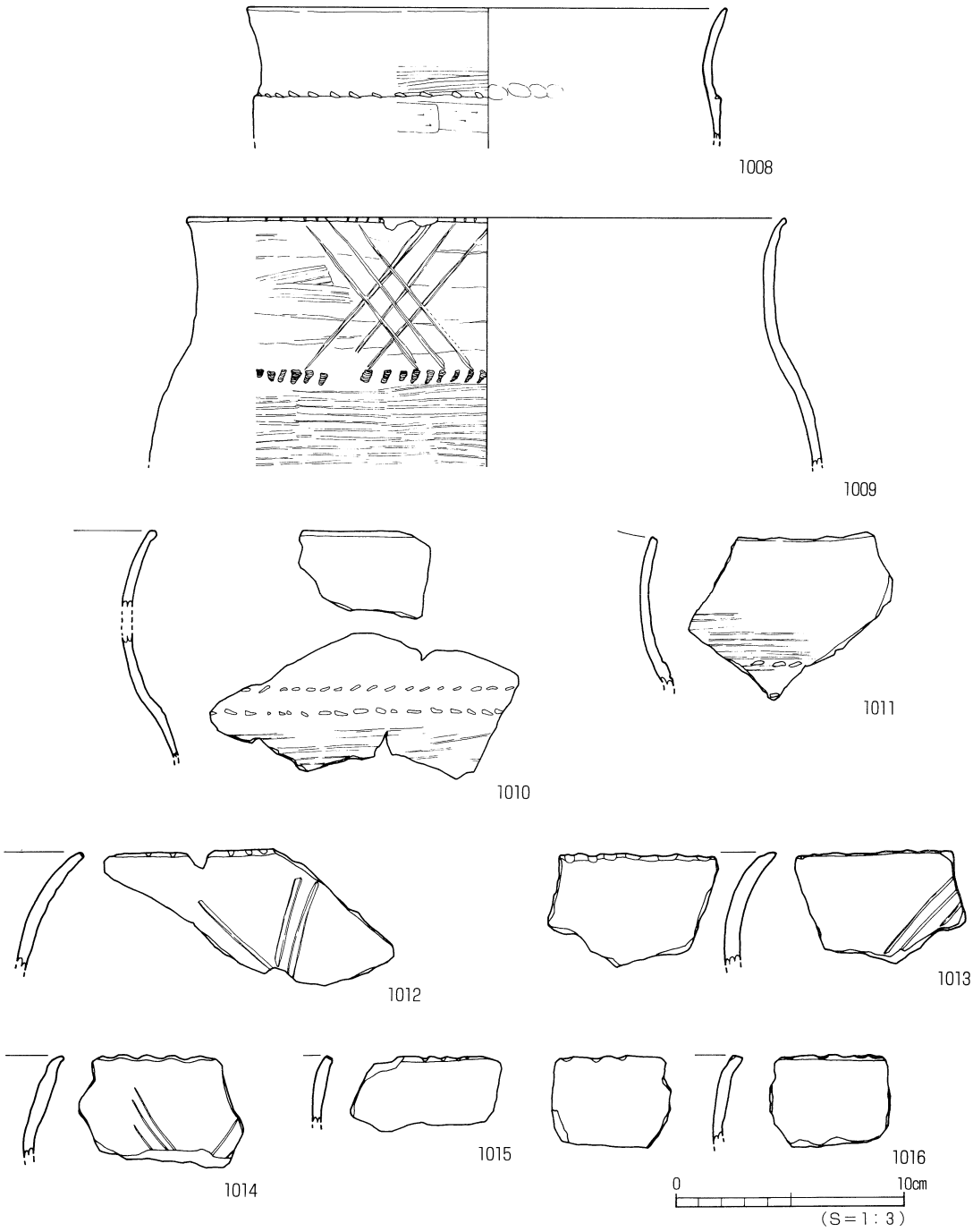
挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
991	深鉢	頸：ナデ。胴下半：ケズリ。	条痕→ナデ。	尖	V字形	三角形	D字形	黒灰褐色	茶褐色	頸部施文。
992	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	マメツ。					灰褐色	淡褐色	頸部施文。
993	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。					灰褐色	淡黄褐色	頸部施文。
994	深鉢	ナデ。	ナデ。					茶褐色	灰褐色	頸部施文。
995	深鉢	条痕。	マメツ。					灰褐色	褐色	頸胴界棒状工具押引き。
996	深鉢	ナデ。	ナデ。					灰褐色	暗褐色	頸部施文。
997	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。					褐色	淡灰褐色	頸部施文。
998	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	D字形	半円形	D字形	淡褐色	褐色	頸部施文。
999	深鉢	マメツ。	マメツ。	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	淡灰褐色	褐色	頸部施文。
1000	深鉢	ナデ。	マメツ。	欠損	欠損	三角形	D字形	橙褐色	灰褐色	頸部施文。
1001	深鉢	マメツ。	ナデ。	尖	マメツ	半円形	マメツ	黒色	灰色	頸部施文。

図150　B区ＳＸ－１出土遺物実測図(3)



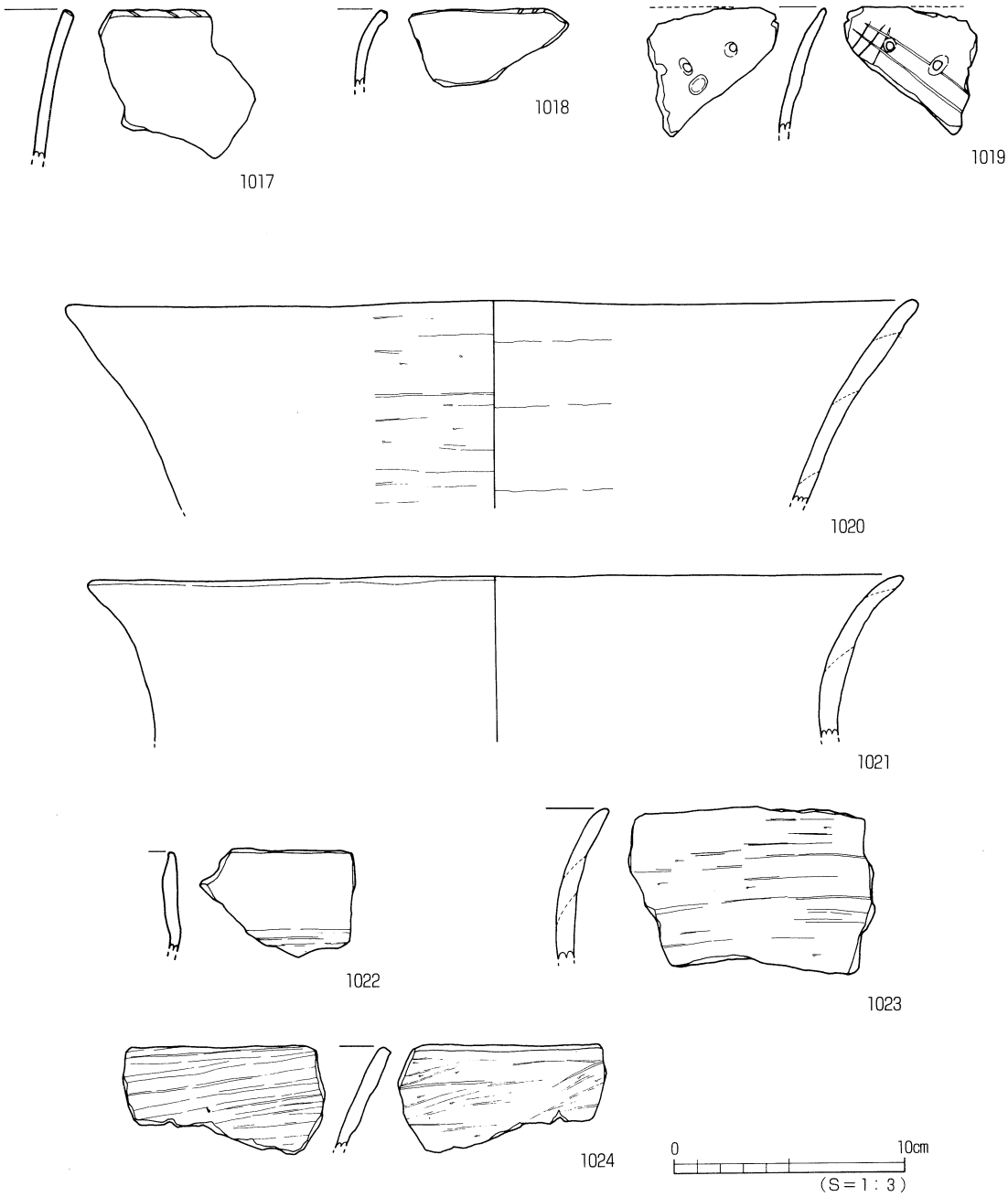
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
1002	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形	三角形		茶褐色	淡灰褐色	
1003	深鉢	頸：ケズリ。	ナデ。	面	D字形	三角形	D字形	淡灰褐色	橙褐色	
1004	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形	半円形	D字形	黒色	淡灰色	頸部施文。
1005	深鉢	工具によるナデ？	ミガキ。	面	小D字形	三角形	横長丸形	灰褐色	灰褐色	
1006	深鉢	口：ケズリ→ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	丸				灰褐色	灰褐色	口縁内面刺突。
1007	深鉢	ケズリ。	ナデ。	丸				淡灰褐色	褐色	口縁内面刺突。

図151　B区ＳＸ－１出土遺物実測図(4)



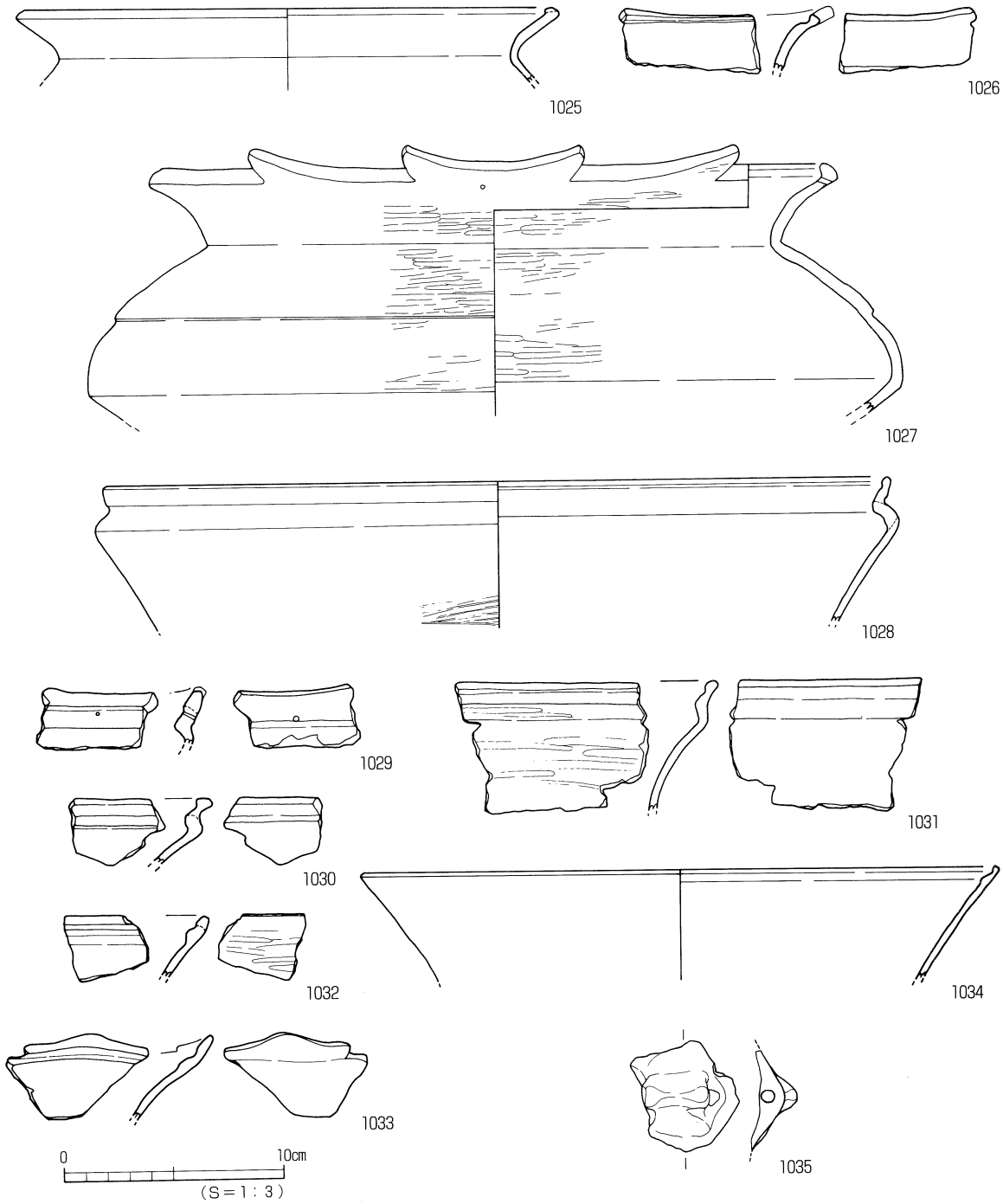
挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
1008	深鉢	頸：工具によるナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	丸				黒灰色	淡灰褐色	頸胴界刺突。
1009	深鉢	頸：工具によるナデ。胴：条痕。	ナデ。	丸	D字形			黒色	茶褐色	貝殻による施文。
1010	深鉢	頸：マメツ。胴：ケズリ。	ナデ。	面	マメツ			褐色	灰褐色	
1011	深鉢	頸：条痕→ナデ。	マメツ。	面	マメツ			灰褐色	茶褐色	
1012	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	U字形			黒色	灰褐色	頸部施文。
1013	深鉢	マメツ。	ナデ。	尖				茶褐色	淡灰褐色	口縁内面刺突。頸部施文。
1014	深鉢	マメツ。	ナデ。	丸	O字形			淡灰褐色	淡灰褐色	口縁内面刺突。
1015	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	D字形			淡灰褐色	褐色	
1016	深鉢	ミガキ。	ミガキ。	面	O字形			淡褐色	淡褐色	口縁内端刻み。

図152　B区ＳＸ－１出土遺物実測図(5)



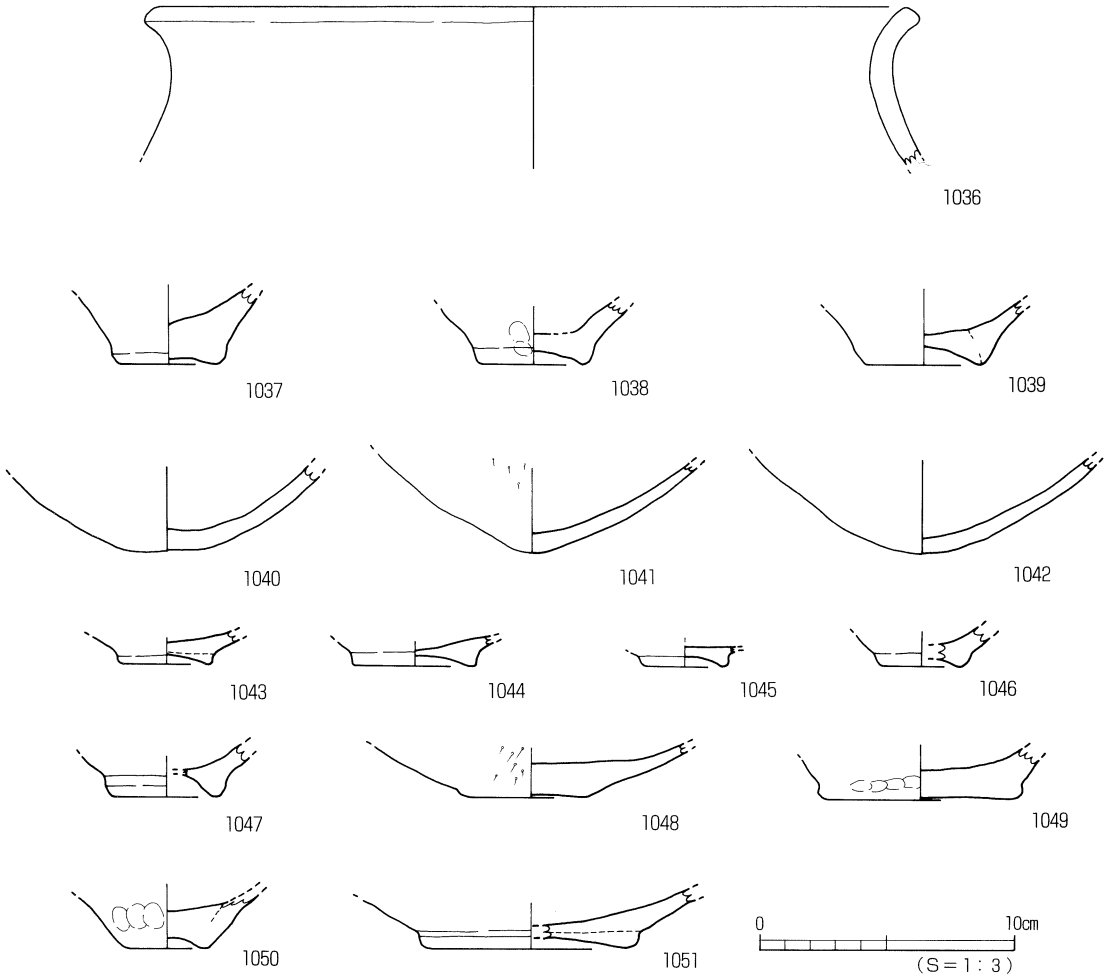
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
1017	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	マメツ			橙褐色	灰褐色	
1018	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	マメツ			黒灰色	灰色	
1019	深鉢	マメツ。	ナデ。	丸	マメツ			灰褐色	灰色	穿孔。頸部施文。
1020	深鉢	工具によるナデ。	ナデ。	丸				黒色	黒褐色	
1021	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸				淡灰褐色	茶褐色	
1022	深鉢	口頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	丸				淡灰褐色	茶褐色	
1023	深鉢	ケズリ。	マメツ。	丸				灰褐色	茶褐色	
1024	深鉢	ケズリ。	工具によるナデ。	面				黒色	灰褐色	

図153　B区ＳＸ－１出土遺物実測図(6)



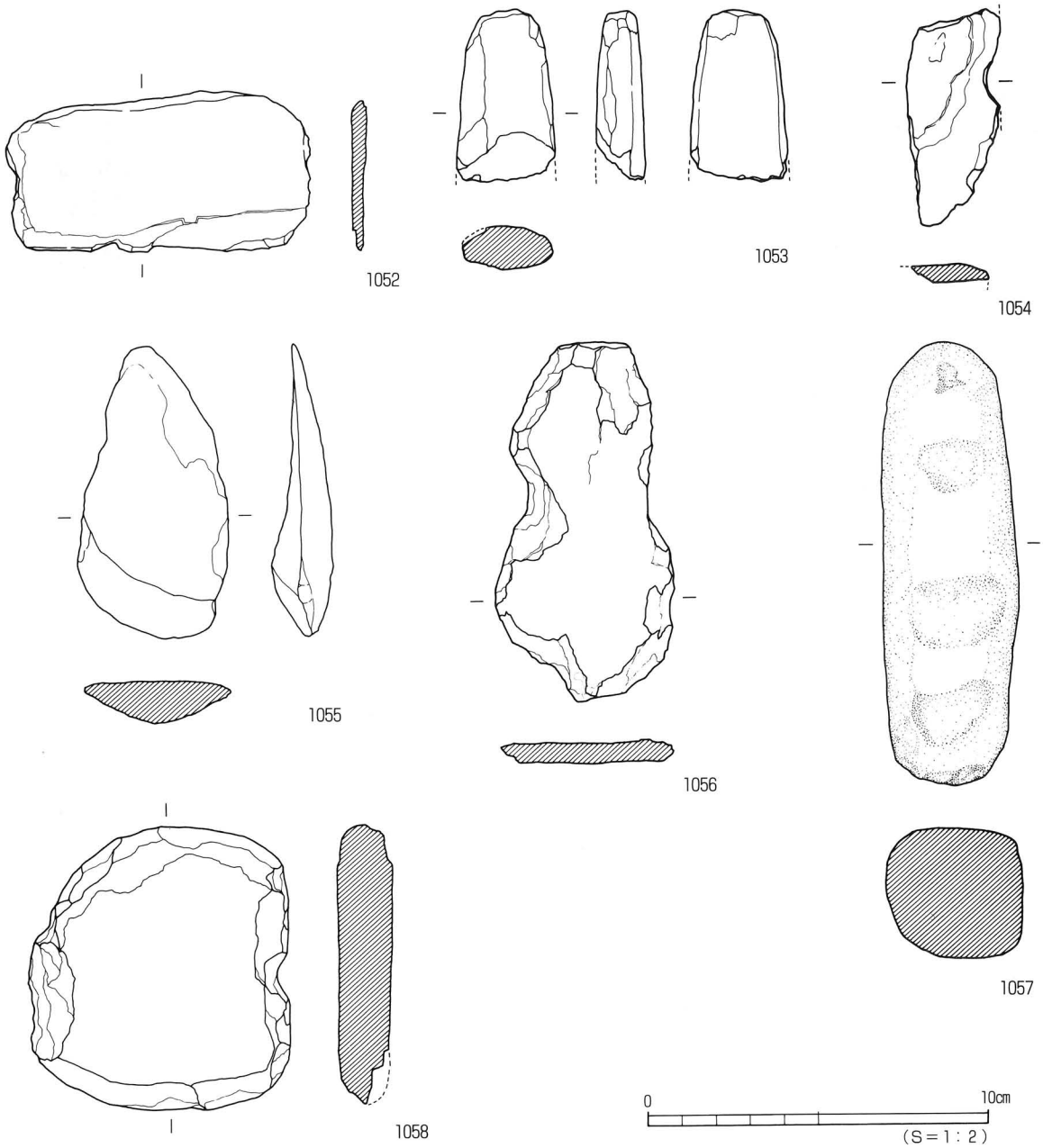
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
1025	浅鉢	マメツ。	マメツ。	面				灰白色	茶褐色	玉縁状内面肥厚。
1026	浅鉢	ミガキ。	マメツ。	面				淡灰褐色	茶褐色	口唇内面抉り。
1027	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	面				灰褐色	黒灰褐色	リボン状突起。穿孔。
1028	浅鉢	口：マメツ。胴：二枚貝条痕。	マメツ。	鍵形				黒褐色	灰褐色	
1029	浅鉢	マメツ。	不明。	鍵形				茶褐色	灰褐色	
1030	浅鉢	ミガキ。	マメツ。	鍵形				灰褐色	褐色	
1031	浅鉢	マメツ。	ミガキ。	鍵形				茶褐色	灰褐色	
1032	浅鉢	ミガキ。	マメツ。	丸				灰褐色	灰褐色	内面凹線２条。
1033	浅鉢	マメツ。	マメツ。	丸				淡灰褐色	橙褐色	ヒレ状突起。
1034	浅鉢	マメツ。	マメツ。	丸				淡灰褐色	淡灰褐色	内面肥厚。
1035	浅鉢	マメツ。	不明。					灰色	淡灰褐色	蝶ネクタイ状粘土板。

図154　Ｂ区ＳＸ－１出土遺物実測図(7)



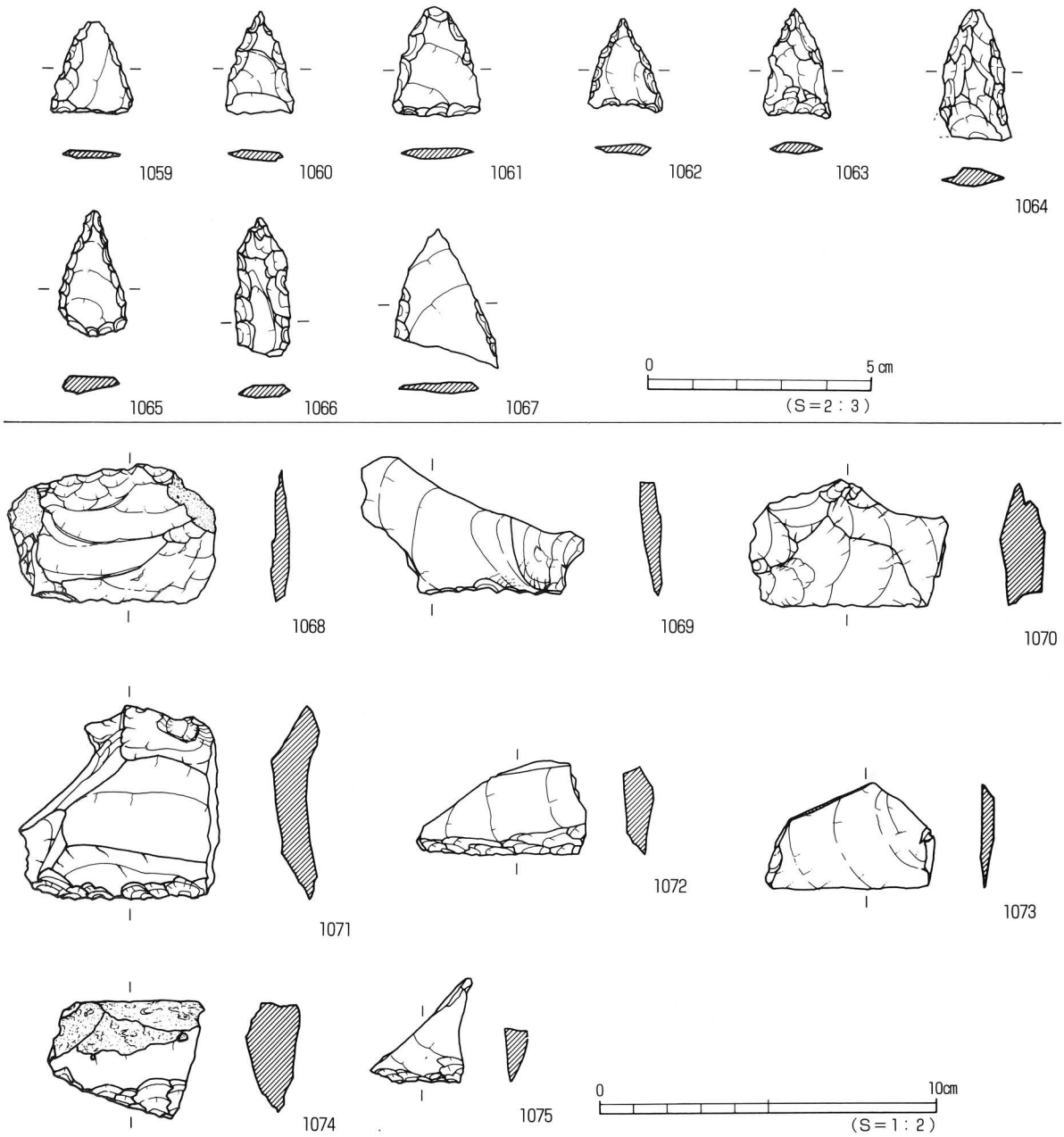
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
1036	壺	ミガキ？	マメツ。					乳白色	乳白色	
1037	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰褐色	淡橙灰色	
1038	深鉢	マメツ。	マメツ。					橙褐色	灰褐色	
1039	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰色	淡橙色	
1040	深鉢	ケズリ。	ナデ。					黒色	淡灰褐色	
1041	浅鉢	ケズリ。	ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
1042	浅鉢	マメツ。	ナデ。					淡灰色	淡灰褐色	
1043	浅鉢	ナデ。	マメツ。					茶褐色	褐色	
1044	浅鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
1045	浅鉢	ナデ。	マメツ。					黒灰色	橙褐色	
1046	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰褐色	淡橙褐色	
1047	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡灰色	淡橙灰色	
1048	浅鉢	ケズリ。	ナデ。					灰褐色	橙褐色	
1049	浅鉢	マメツ。	マメツ。					茶褐色	灰褐色	
1050	深鉢	マメツ。	マメツ。					灰褐色	橙褐色	
1051	浅鉢	マメツ。	ナデ。					灰褐色	橙褐色	

図155　B区ＳＸ－１出土遺物実測図(8)



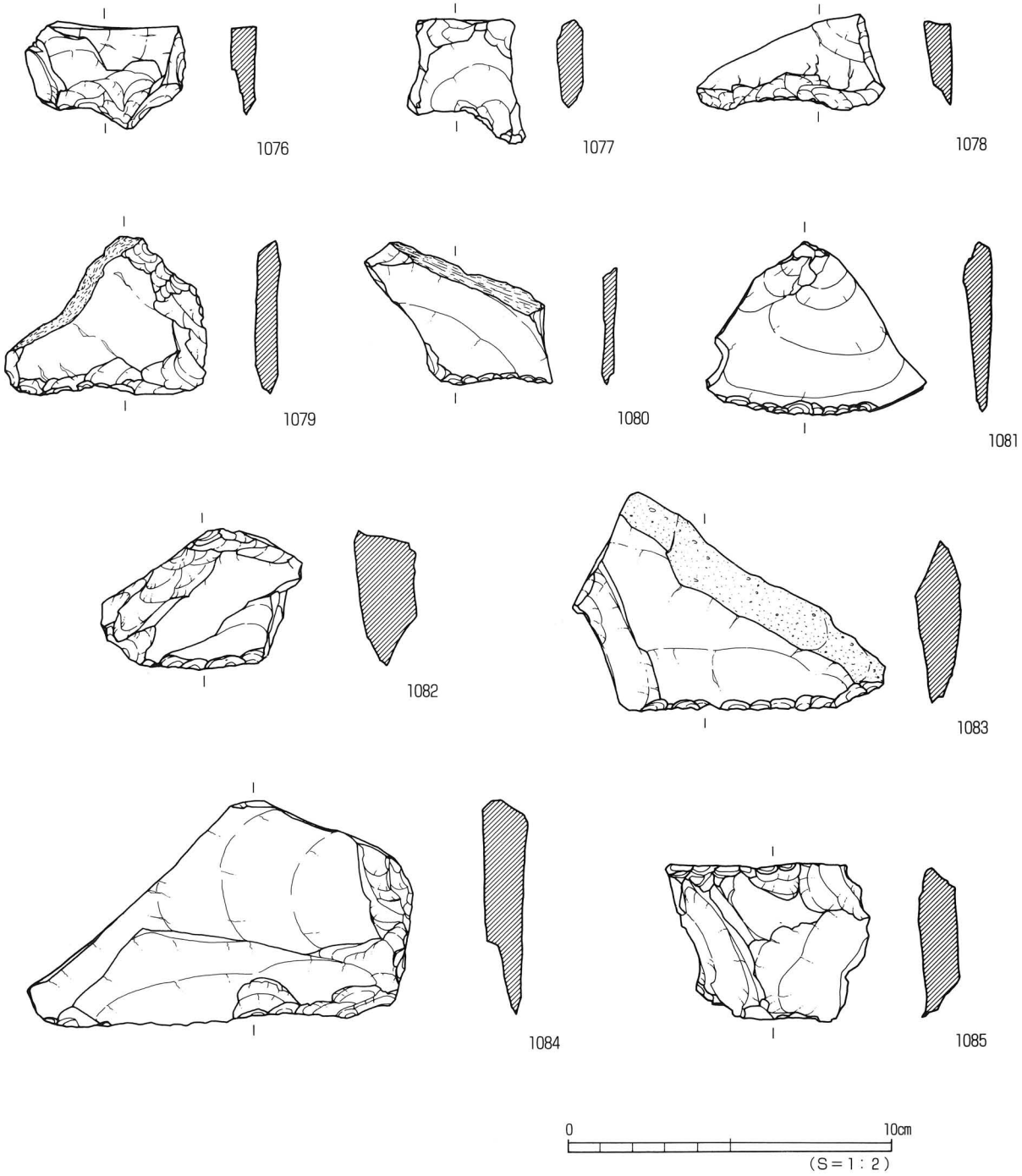
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
1052	石庖丁未製品	緑色片岩		8.9	4.7	0.4	34.4	
1053	磨製石斧	緑色片岩	欠損	(5.0)	(2.9)	(1.3)	27.4	
1054	磨製石斧？	緑色片岩	欠損	(6.5)	(2.7)	(0.5)	13.8	
1055	磨製石斧	緑色片岩	欠損	8.6	4.4	1.5	55.0	
1056	扁平打製石斧	緑色片岩	完形	10.5	5.2	0.6	57.2	
1057	敲石	緑色片岩	完形	13.0	4.1	4.0	375.0	
1058	石錘	緑色片岩	一部欠損	7.6	8.2	1.6	117.3	

図156　B区ＳＸ－１出土遺物実測図(9)



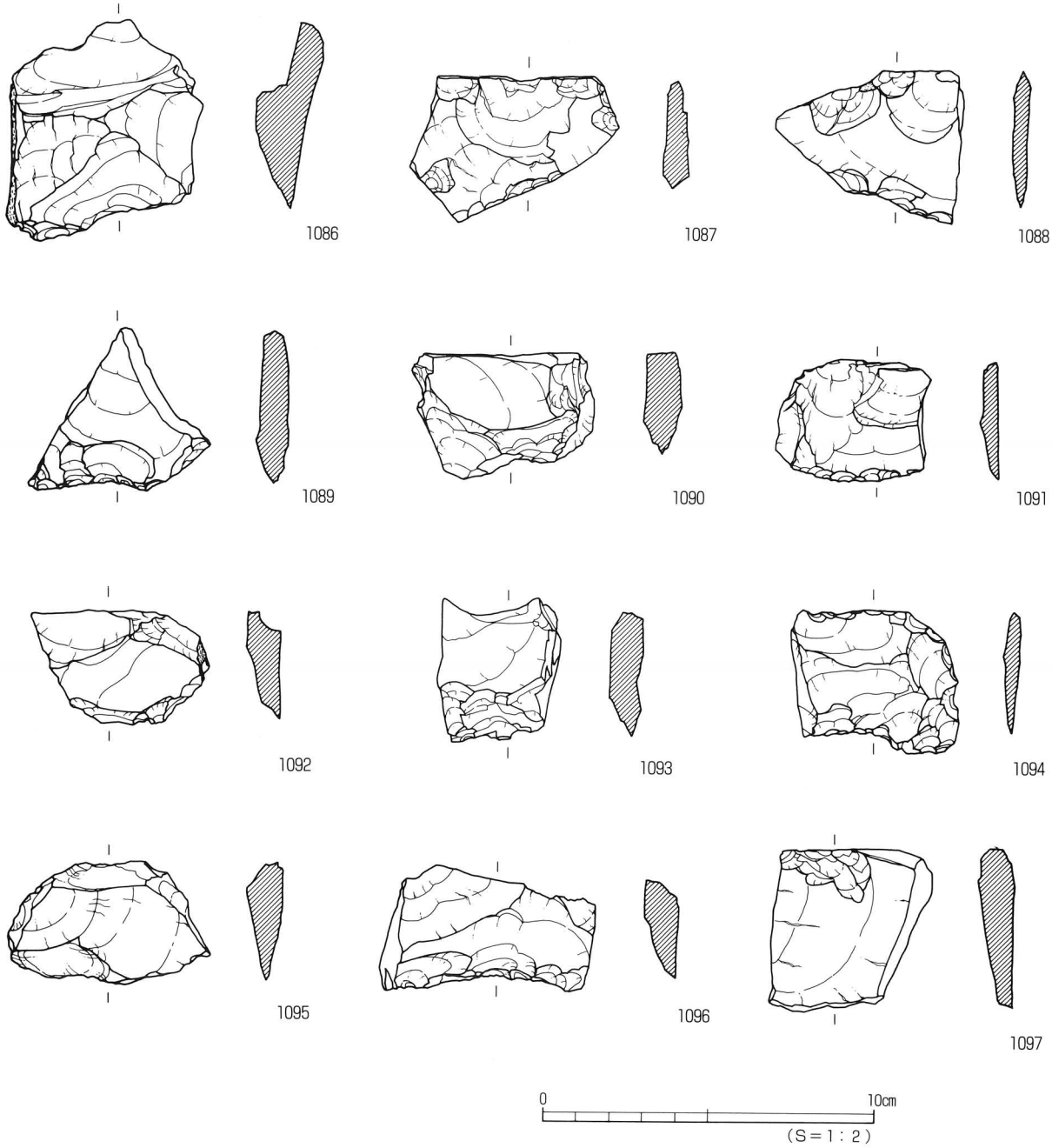
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
1059	打製石鏃	サヌカイト	完形	2.1	1.9	0.2	0.9	
1060	打製石鏃	サヌカイト	完形	2.3	1.5	0.2	0.8	
1061	打製石鏃	サヌカイト	完形	2.4	2.0	0.3	1.5	
1062	打製石鏃	サヌカイト	完形	3.1	1.2	0.5	0.9	
1063	打製石鏃	サヌカイト	完形	2.7	1.5	0.4	1.6	
1064	打製石鏃	サヌカイト	一部欠損	2.1	(1.9)	0.5	2.1	
1065	打製石鏃未製品	サヌカイト		2.4	1.5	0.5	1.6	
1066	打製石鏃未製品	サヌカイト		2.2	1.8	0.3	2.0	
1067	打製石鏃未製品	サヌカイト		3.1	1.8	0.5	1.6	
1068	スクレイパー	サヌカイト		5.5	6.1	0.6	21.7	
1069	スクレイパー	サヌカイト		4.0	6.6	0.6	14.0	
1070	スクレイパー	サヌカイト		3.3	5.9	1.35	35.3	
1071	スクレイパー	サヌカイト		5.7	5.9	1.4	42.3	
1072	スクレイパー	サヌカイト		2.8	5.0	0.9	14.8	
1073	スクレイパー	サヌカイト		3.2	5.0	0.4	8.6	
1074	スクレイパー	サヌカイト		3.6	4.7	1.6	26.8	
1075	スクレイパー	サヌカイト		3.1	3.0	0.7	5.2	

図157　B区ＳＸ－１出土遺物実測図(10)



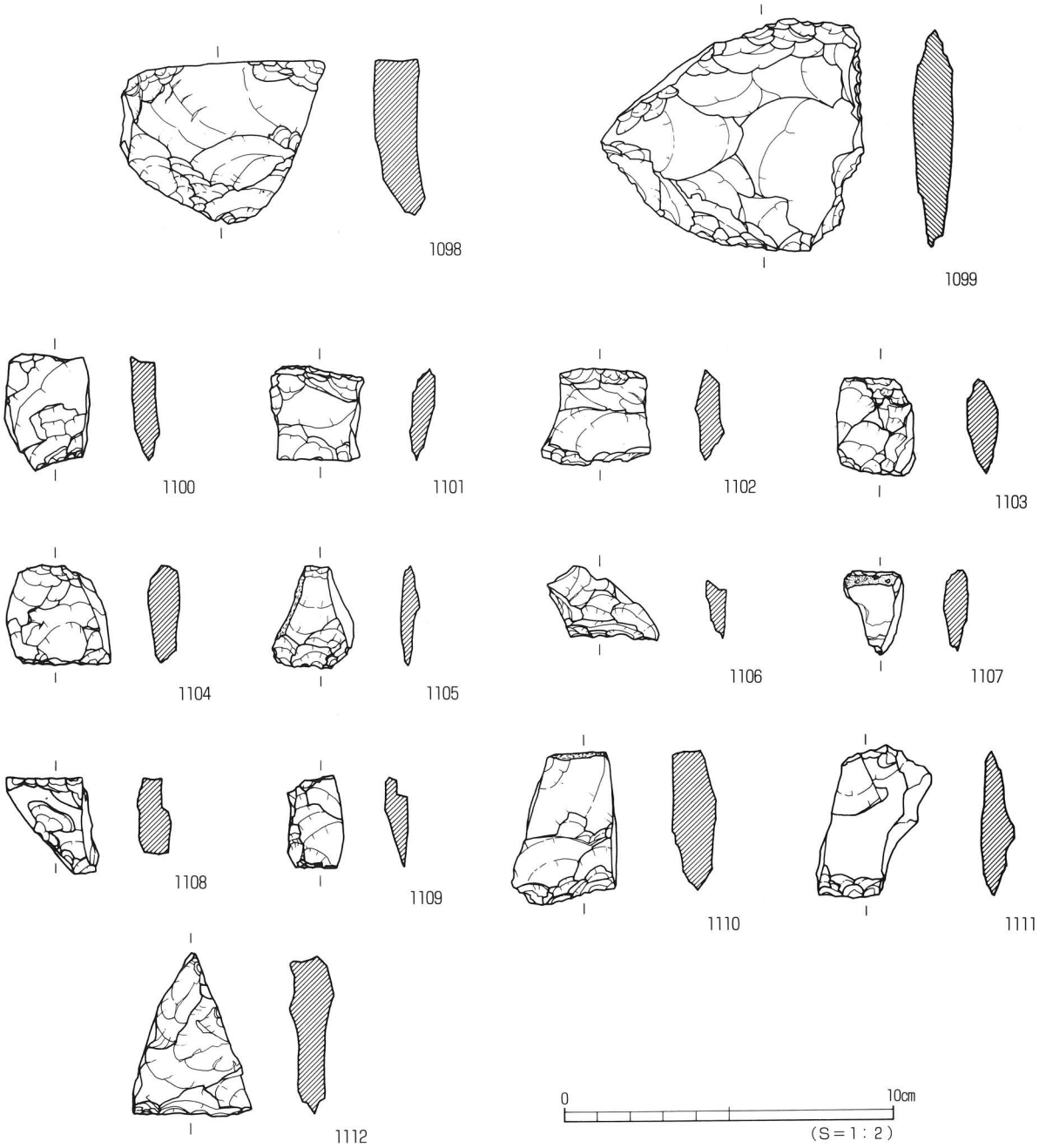
挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
1076	スクレイパー	サヌカイト		3.2	4.9	0.75	13.2	
1077	スクレイパー	サヌカイト		4.0	3.6	0.85	15.2	
1078	スクレイパー	サヌカイト		3.1	5.8	0.9	16.4	
1079	スクレイパー	サヌカイト		4.9	6.2	0.7	25.4	
1080	スクレイパー	サヌカイト		4.4	5.8	0.4	11.6	
1081	スクレイパー	サヌカイト		5.4	6.8	0.9	26.8	
1082	スクレイパー	サヌカイト		4.4	6.2	1.9	48.9	
1083	スクレイパー	サヌカイト		6.8	9.6	1.4	76.6	
1084	スクレイパー	サヌカイト		6.9	11.9	1.4	120.3	
1085	石核	サヌカイト		5.0	6.3	1.2	49.5	

図158　B区ＳＸ－１出土遺物実測図(11)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
1086	石核	サヌカイト		5.9	6.6	1.6	69.5	
1087	素材剥片	サヌカイト		4.5	6.2	0.8	29.3	
1088	素材剥片	サヌカイト		4.7	5.6	0.5	17.8	
1089	素材剥片	サヌカイト		4.9	5.5	1.0	25.7	
1090	素材剥片	サヌカイト		3.8	5.4	1.2	29.6	
1091	素材剥片	サヌカイト		3.7	4.6	0.6	12.2	
1092	素材剥片	サヌカイト		3.5	5.2	1.0	20.3	
1093	素材剥片	サヌカイト		4.4	3.6	1.0	24.3	
1094	素材剥片	サヌカイト		4.7	5.0	0.5	15.4	
1095	素材剥片	サヌカイト		3.8	6.0	1.1	22.3	
1096	素材剥片	サヌカイト		3.8	6.6	1.1	31.2	
1097	素材剥片	サヌカイト		4.8	4.9	1.1	34.8	

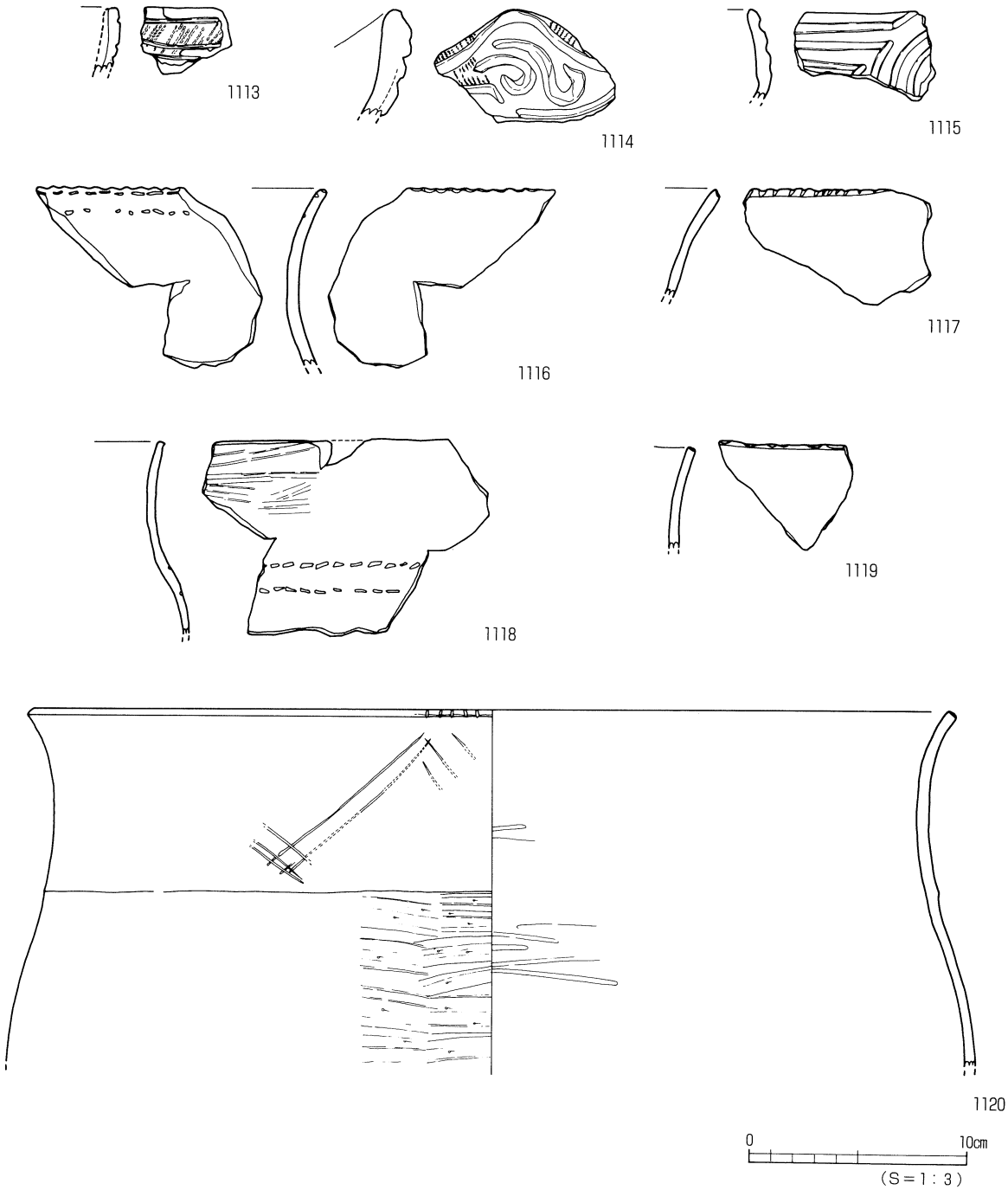
図159　B区ＳＸ－１出土遺物実測図(12)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
1098	素材剥片	サヌカイト		4.9	6.2	1.5	59.8	
1099	素材剥片	サヌカイト		8.0	7.0	1.2	88.6	
1100	素材剥片	サヌカイト		3.5	2.6	0.8	10.7	
1101	素材剥片	サヌカイト		2.9	2.8	0.8	9.0	
1102	素材剥片	サヌカイト		3.0	3.3	0.9	11.4	
1103	素材剥片	サヌカイト		3.0	2.4	1.0	9.4	
1104	素材剥片	サヌカイト		3.0	3.2	1.0	13.4	
1105	素材剥片	サヌカイト		3.1	2.5	0.6	4.0	
1106	素材剥片	サヌカイト		2.25	3.3	0.6	3.9	
1107	素材剥片	サヌカイト		2.1	1.8	0.7	3.3	
1108	素材剥片	サヌカイト		2.9	2.8	1.0	7.8	
1109	素材剥片	サヌカイト		2.8	1.7	0.7	4.3	
1110	素材剥片	サヌカイト		4.7	3.2	1.3	25.8	
1111	素材剥片	サヌカイト		4.6	3.5	1.0	15.4	
1112	素材剥片	サヌカイト		4.9	3.6	1.3	21.6	

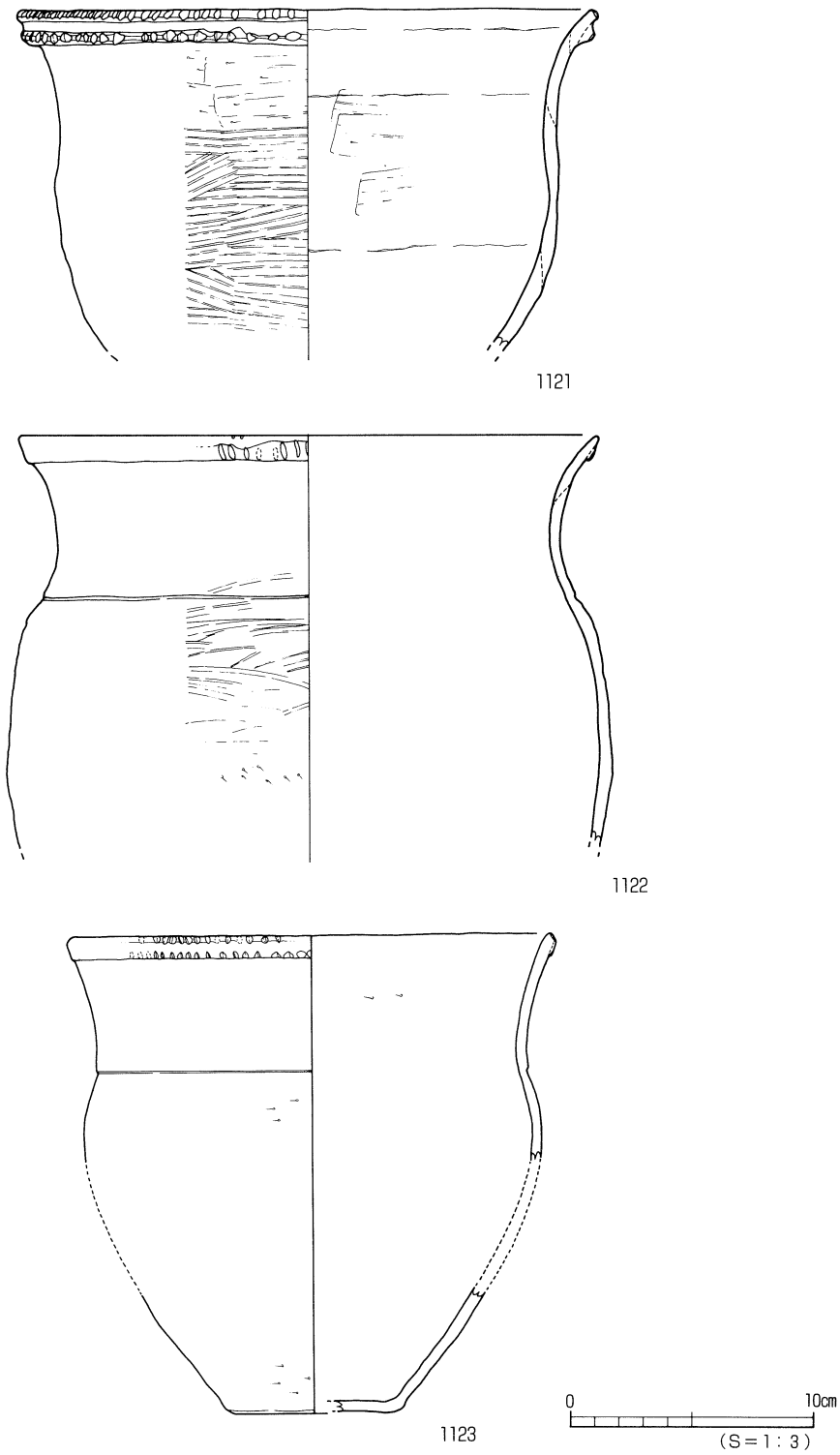
図160　B区ＳＸ－１出土遺物実測図(13)

2）湿地出土の遺物（図161～167）



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
1113	深鉢	撚糸文。	マメツ。					橙褐色	橙褐色	沈線施文。
1114	深鉢	縄文。	ナデ。					淡灰褐色	褐色	沈線施文。
1115	深鉢	ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	灰褐色	沈線施文。
1116	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	刺突			黒褐色	黒褐色	口縁内面端面刺突。
1117	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	米粒形			黒褐色	橙褐色	
1118	深鉢	マメツ。	ナデ。	面	オサエ			褐色	灰褐色	頸胴界刺突。
1119	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	オサエ			褐色	褐色	
1120	深鉢	口：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	面	V字形			黒色	褐色	頸部施文。

図161　B区湿地出土遺物実測図(1)



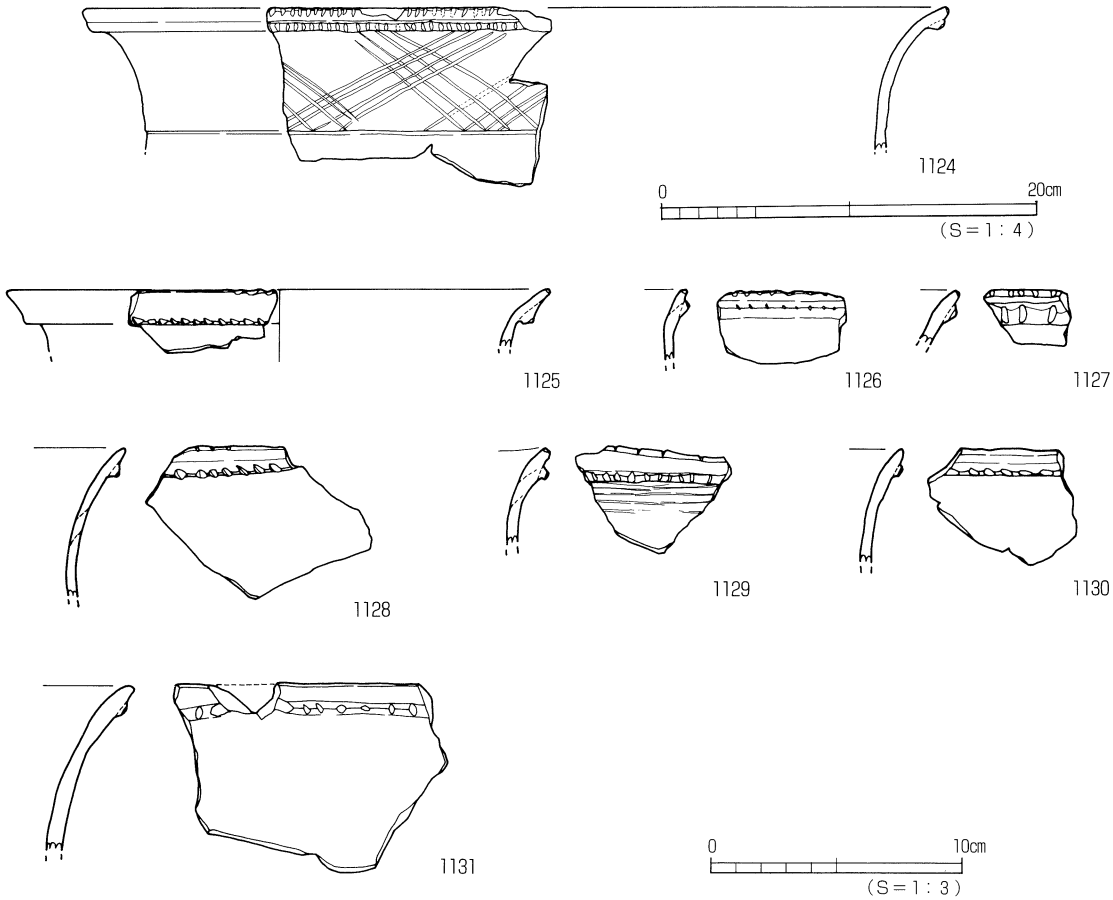
挿図番号	器種	調整		口縁		突帯		色調		その他
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
1121	深鉢	頸：ケズリ。胴：二枚貝条痕。	ナデ。	丸	D字形	三角形	D字形	灰褐色	灰褐色	
1122	深鉢	頸：ナデ。胴：二枚貝条痕。	ナデ。	丸	マメツ	半円形	D字形	褐色	灰褐色	胴部炭化物付着。
1123	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	マメツ。	丸	D字形	半円形	D字形	褐色	褐色	

図162　B区湿地出土遺物実測図(2)

前述のようにB区で検出された湿地の一部では湧水のためほとんど層位的な調査は行われず、遺物採集に終わっているので、ここでは年代順に遺物をあげておく。

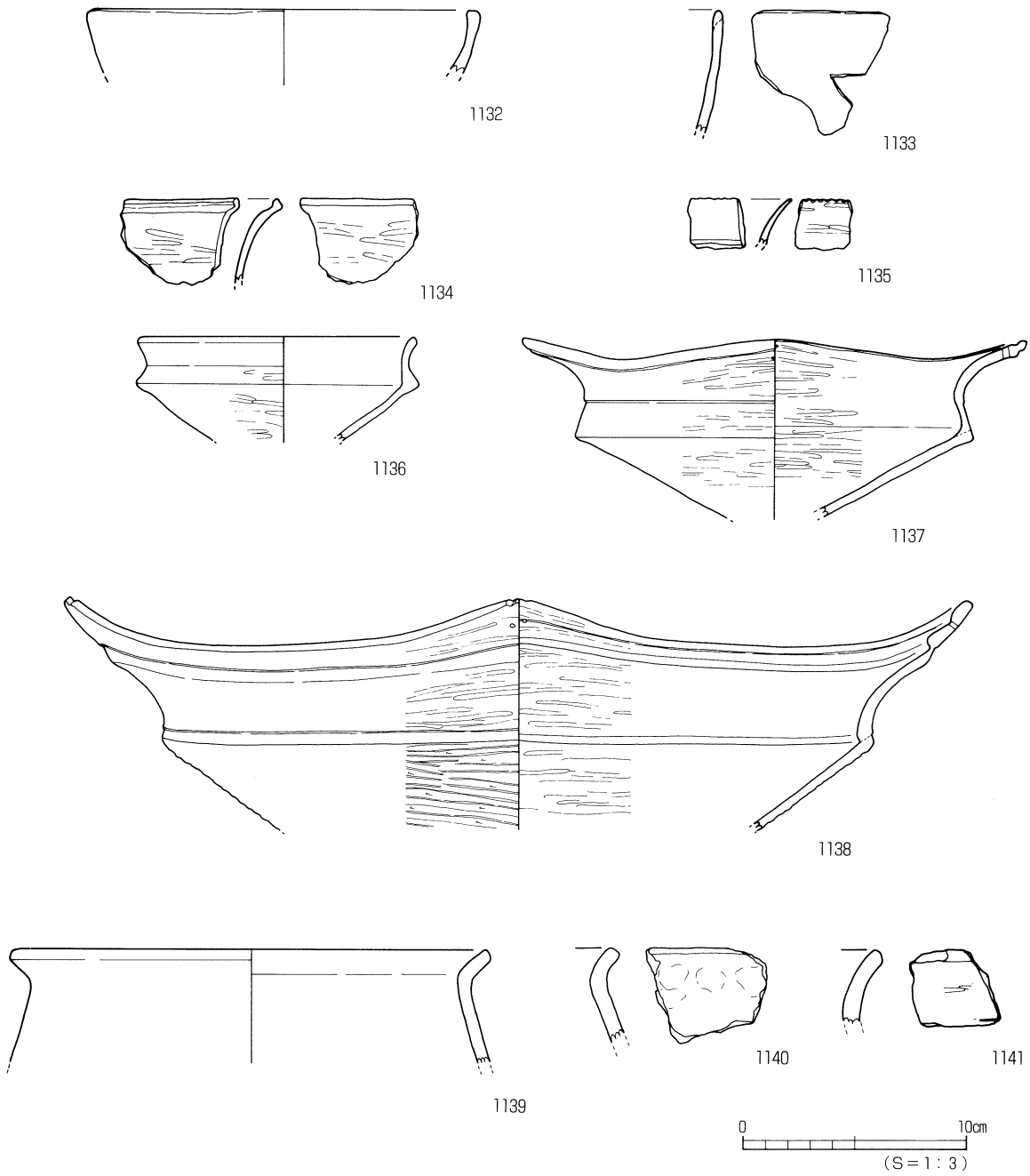
深鉢1113は撚糸地文に横位の沈線や二条平行の弧状沈線を施す口縁部の剥離片、中期後葉里木Ⅱ式に属するものと考えられる。1114・1115は後期縁帯文形深鉢の口縁部である。

1116～1120は晩期後半無突帯有文深鉢、口端部刻み目、口縁内面刺突、頸胴界刺突、頸部沈線施文などを持つ一群である。1116の口縁内面の刺突は2段にわたって行われており、このうち上段の刺突は深く鋭いのに対して下段は圧痕のように浅く不明瞭である。また、口端部は面をなしているが、この面にも刻みというよりは刺突といったほうが適切な施文が行われている。図162・163は突帯文深鉢で、ある程度器型が復元できるもの、図162の3点をみてみると、口径が胴部径を凌ぐ1121・1123とほぼ同等になる1122がある。1123では接合するわけではないが、同一個体の可能性が高い上半部と平底の底部とを組み合わせている。この鉢では口唇部に接して非常に薄い粘土帯を貼り付け、このほと



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
1124	深鉢	頸：ナデ。胴：ケズリ。	ナデ。	丸	小D字形	台形	小D字形	淡灰褐色	淡橙褐色	頸部施文。
1125	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形	三角形	D字形	暗褐色	暗褐色	
1126	深鉢	ナデ。	ナデ。	面	D字形	三角形	小D字形	暗褐色	灰褐色	
1127	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形	半円形	D字形	褐色	灰褐色	
1128	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	マメツ	三角形	D字形	灰褐色	淡褐色	
1129	深鉢	ケズリ。	ナデ。	面	小D字形	台形	D字形	暗褐色	暗褐色	頸部炭化物付着。
1130	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	マメツ	台形	D字形	黄褐色	黄褐色	
1131	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	マメツ	半円形	マメツ	暗褐色	茶褐色	

図163　B区湿地出土遺物実測図(3)

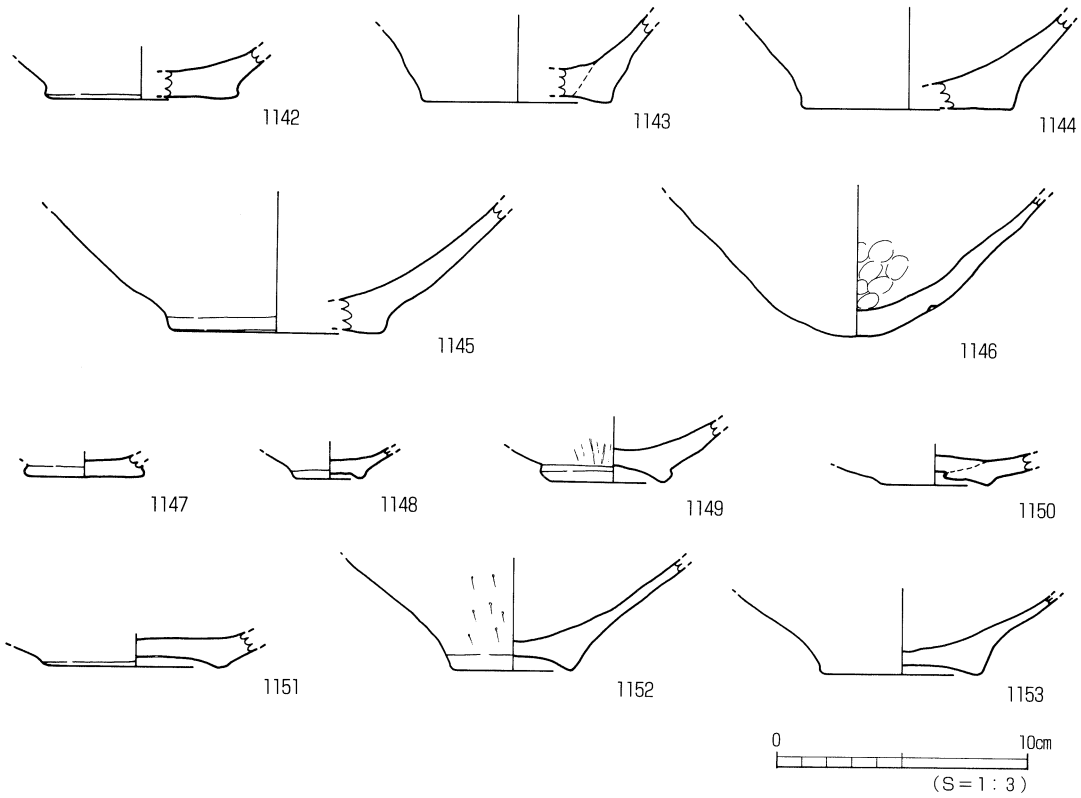


挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
1132	浅鉢	ナデ。	ナデ。	丸				灰褐色	灰褐色	
1133	浅鉢	マメツ。	マメツ。	丸				淡橙色	橙褐色	
1134	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	面				黒褐色	黒褐色	口縁内面抉り。
1135	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	面	O字形			黒褐色	黒褐色	
1136	浅鉢	ミガキ。	マメツ。	丸				黒褐色	褐色	
1137	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸				黒褐色	暗褐色	口縁穿孔。内外面抉り。
1138	浅鉢	口～頸：ミガキ。胴：ケズリ。	ミガキ。	面				黒褐色	黒褐色	口縁穿孔。
1139	壺	マメツ。	マメツ。	面				淡褐色	暗褐色	
1140	壺	マメツ。	マメツ。	面				淡黄橙色	暗褐色	
1141	壺	ミガキ。	ミガキ。	面				淡橙色	灰褐色	

図164　B区湿地出土遺物実測図(4)

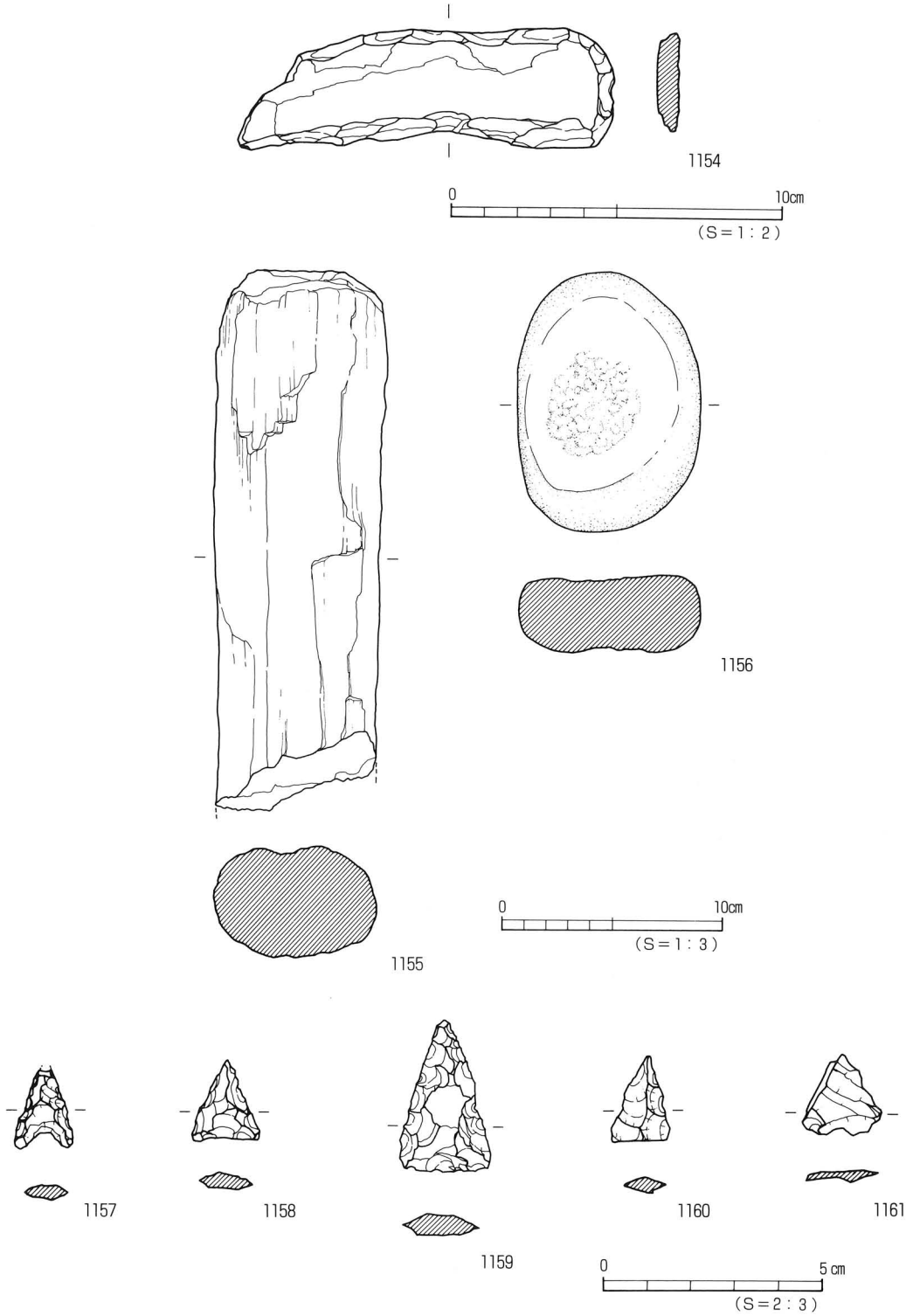
んど肥厚帯といったほうがよいような突帯と口端部の外面を浅く刻んでいる。また、頸部と胴部で調整を使い分けるのは3点ともに共通しているが、1122と1123の頸部と胴部の境には段が認められる。その他口縁部の破片で特徴的なものがある。1125は口唇部に接して垂れ下がった三角形状の幅広の粘土帯を貼り付け、その下端に刻みを加えている。口端部の刻みは通常の刻み目突帯深鉢のように全周する刻みではなく、ちょうど波状口縁の波頂部の刻みにしばしばみられるように部分的に施されるものである。

浅鉢には椀形になるものと胴部で強く屈曲して、口縁部が外上方に開くものがある。後者のうち、1137は口縁部内外面に沈線を持つ波状口縁で、口縁部の俯瞰形が方形に、胴部が円形になるものである。なお波頂部の小円孔は焼成前に穿たれたものである。同じく波状口縁の1138は、口縁部、胴部ともに隅丸方形になるもので、刻みを持つ波頂部に1137と同様焼成前の小円孔を施されている。なお、いずれも小破片であるが壺と考えられる口縁部片が3点認められる。



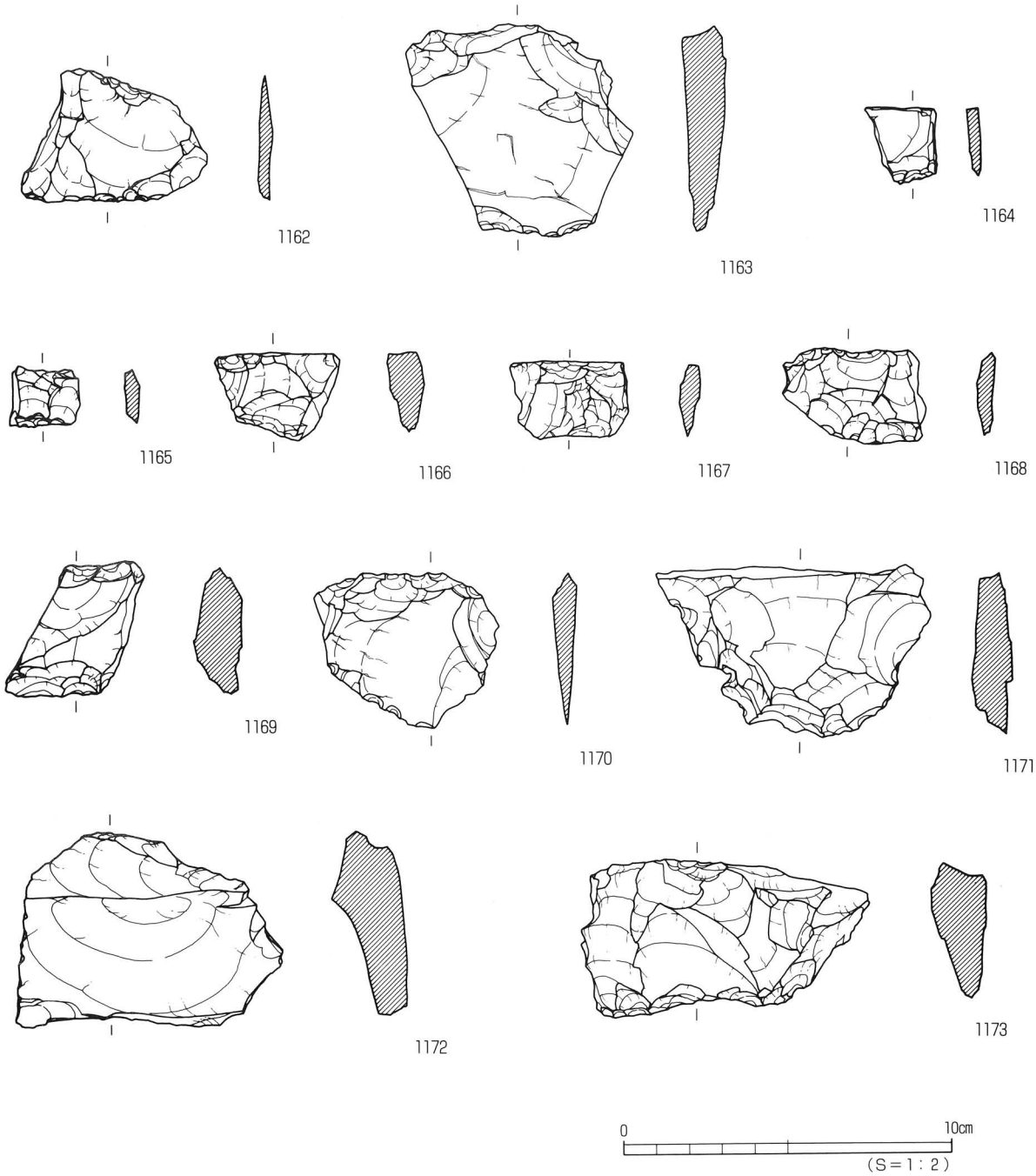
挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
1142	深鉢	ナデ。	ナデ。					淡橙褐色	淡黄褐色	
1143	深鉢	マメツ。	マメツ。					黄褐色	灰黄褐色	
1144	深鉢	ナデ。	ナデ。					黒褐色	褐色	雲母混入。
1145	深鉢	ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
1146	浅鉢	ケズリ→ナデ。	ミガキ。					灰褐色	淡灰褐色	
1147	浅鉢	ナデ。	ナデ。					褐色	淡灰褐色	
1148	浅鉢	マメツ。	マメツ。					淡黄褐色	茶褐色	
1149	浅鉢	胴：条痕→マメツ。	ナデ？					灰褐色	灰褐色	
1150	浅鉢	ナデ。	ナデ。					灰褐色	淡黄褐色	
1151	浅鉢	マメツ。	不明。					褐色	淡灰褐色	
1152	深鉢	マメツ。	不明。					褐色	褐色	
1153	浅鉢	ナデ。	ナデ。					淡黄褐色	淡黄褐色	壺の可能性あり。

図165　B区湿地出土遺物実測図(5)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
1154	石鎌	緑色片岩	欠損	(11.4)	(3.7)	(0.7)	45.9	
1155	石棒	石英片岩	欠損	(24.4)	7.6	(5.0)	1655.0	
1156	敲石	安山岩	完形	11.8	8.3	3.4	595.0	
1157	打製石鏃	サヌカイト	一部欠損	(1.7)	1.4	0.3	0.5	
1158	打製石鏃	サヌカイト	完形	1.8	1.5	0.4	0.9	
1159	打製石鏃	赤色チャート	完形	3.4	2.0	0.5	3.4	
1160	石鏃未製品	サヌカイト		2.0	1.3	0.4	0.7	
1161	石鏃未製品	サヌカイト		1.9	1.8	0.3	0.7	

図166　B区湿地出土遺物実測図(6)



挿図番号	器　　種	石　　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	そ の 他
1162	スクレイパー	サヌカイト		4.0	5.6	0.4	10.0	
1163	スクレイパー	サヌカイト		6.9	6.5	1.3	61.5	
1164	素材剥片	赤色チャート		2.2	2.4	0.4	3.8	
1165	素材剥片	サヌカイト		1.9	2.1	0.4	2.6	
1166	素材剥片	サヌカイト		2.7	3.8	1.1	12.0	
1167	素材剥片	サヌカイト		2.4	3.5	0.7	7.7	
1168	素材剥片	サヌカイト		3.0	4.4	0.6	10.8	
1169	素材剥片	サヌカイト		4.1	4.1	1.5	26.8	
1170	素材剥片	サヌカイト		4.7	5.6	0.63	18.3	
1171	石核	サヌカイト		5.2	8.3	1.3	59.6	
1172	石核	サヌカイト		5.9	8.1	2.3	97.2	
1173	石核	サヌカイト		4.8	8.7	1.7	78.6	

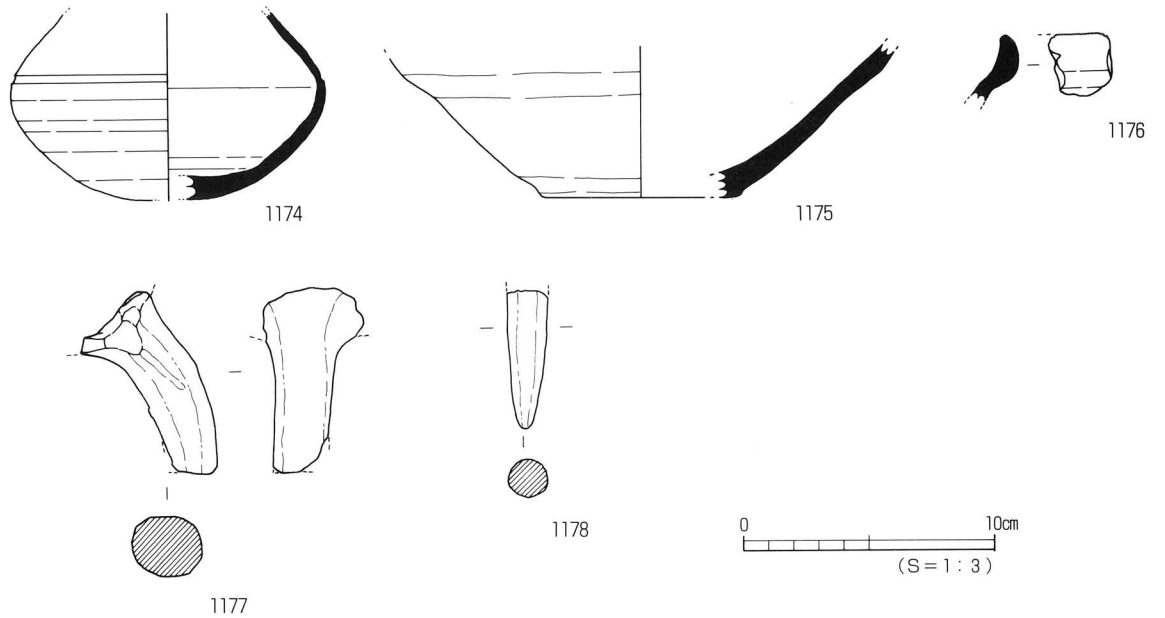
図167　B区湿地出土遺物実測図(7)

底部には、尖り気味の丸底になるもの1146があり、外面の調整は雑であるが、内面を磨かれたりしているのでおそらく浅鉢の底部であると思われる。また、若干の窪み底1153は内外面、外底面のいずれの部位も入念に調整されているので、壺の可能性がある。

石製品で注目されるものには石鎌1154が１点ある。緑色片岩を素材とするもので、片面の周縁に打ち欠きを施し形態を整えている段階のもので研磨には至ってない。製作途上で折損し、廃棄されたものと考えられる。剥片利用の石製品には石鏃、スクレイパーがある。石鏃1159が赤色チャートであるのを除けばすべてがサヌカイトを素材としている。

３）その他の表採遺物（図168）

第１～３層までの間での採集遺物が数点ある。1174は須恵器短頸壺の胴部、1175・1176は東播系須恵器こね鉢のそれぞれ、下半部、口縁部である。土師器では鍋の足片が採集された。



挿図番号	器種	調整 外面	調整 内面	口縁 端部形	口縁 刻み	突帯 断面形	突帯 刻み	色調 内面	色調 外面	その他
1174	壺	底：回転ヘラケズリ。	ヨコナデ。					明灰色	明灰色	
1175	こね鉢	ヨコナデ。	ヨコナデ。					灰色	灰色	
1176	こね鉢	ヨコナデ。	ヨコナデ。					灰白色	灰白色	
1177	土釜	ナデ。	ナデ。					黄褐色	黄褐色	
1178	土釜	ナデ。	ナデ。					黄褐色	黄褐色	

図168　Ｂ区表採遺物実測図

3．自然科学分析

（1）花粉化石による大渕遺跡の古環境復元

高知大学名誉教授　中村　　純

大渕遺跡は、松山市太山寺町（北緯33°53′、東経132°44′）にあり、松山平野が北に開口する堀江湾岸から内陸部へ約２kmの地点で、海抜高度3.5m、付近は水田や畑となった沖積地である。遺跡の西方約100mには、高度100m前後の丘陵がせまっている。丘陵はかなりの部分が耕地化され、他にアカマツ、コナラなどの二次林が点在する。この地域の極相林とみなされる照葉樹林の一部が太山寺境内にわずかに残っているにすぎない。

今回の調査は、同遺跡を構成する堆積層中の花粉化石をもとに、当時の自然環境を復元することを目的としている。調査の機会を与えられた松山市教育委員会の方々に厚く感謝する。

分析試料とその分析法

提供された試料（堆積物）は、遺跡Ａ区のトレンチ側壁より採取されたものである。これらの試料は、砂層を除いて約10cmの厚さのブロックとして採取され、アルミホイルに包み保存されていたものである。ただし、表層はトレンチの東約10mの地点の畦畔より別に採取したものである。このブロック試料については、その厚さに応じて２～３個に分割して別々の試料として取り扱った。ブロックとして採取できなかった砂層についてはそのままを一試料として扱い、これらの全試料に表層から下層は試料番号（１～25）を付した。これらの層序、その他の概要は表１にまとめて示した。表１に示すように、第１層から第５層の間は酸化鉄による褐色斑が多く、地下水位の変動のある、時に空気の流通もあった氾濫原の堆積物である。これに対して、第８層から最下層の間は、常時水面下の堆積であることを示している。また、出土した考古学的遺物からみて、縄文時代後期以降のものでることを示している。以上の25試料から花粉、シダ類、コケ類の胞子の分離を行った。これらのものは同時に分離できるので、本文では単に花粉の分離という言葉を用いることにする。

分離の方法は、

1．10～20ｇの試料を10％ＫＯＨ液で加熱の後、傾斜法で粗粒を除く。
2．この溶液を60メッシュの金属ふるいを通過させて、できるだけ夾雑物を除く。
3．これに比重1.65の$ZnCl_2$液を加え、比重選別法で花粉を浮上分離させる。
4．花粉とともに浮上した硅酸塩を溶解させるため、ＨＦ液処理を行う。
5．脱水の後、これに無水錯酸と濃硫酸の混合液を加え、アセトリシス処理をする。

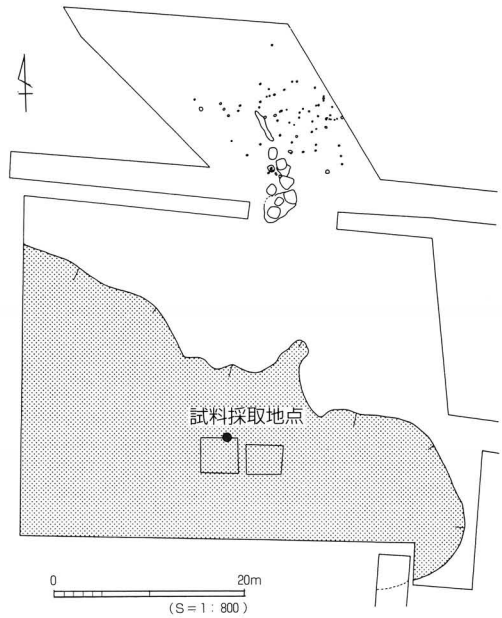


図169　試料採取地点図

6．水洗、アルカリで中和させ分離完了。

7．その一滴をとり検鏡し、種類を同定する。

種類の同定の結果は、次の方法で算出する。

1．木本花粉（ＡＰ）を500個以上読みとり、これを基本数としてすべての種類の出現比率（％）を求める。単に組成比率と呼ぶことにする。

2．読みとられた全花粉胞子数を基本数として照葉樹林を構成する木本花粉群、その他の木本花粉群、草本花粉群、シダ・コケ類の胞子群の４群のそれぞれの比率（％）を総合組成比率、または総合比率として算出した。

3．栽培稲花粉については、他のイネ科花粉から区別するために、位相差顕微鏡を用いて識別し、全イネ科花粉数を基本数としてその比率（％）を求めた①。これは現代の水田では検出される全イネ科花粉の約30％以上を栽培稲花粉が占めることから、当時の稲作の集約度を推定する手段として特に行ったものである。

表１　層位と試料番号

深さ(cm)	層名	試料番号	時代	土質
0	第１層	1		灰褐色シルト質耕土、酸化鉄褐斑あり
		2		〃
20	第２層	3		茶褐色シルト集積層
	第３層	4	中世～	灰褐色シルト質粘土、酸化鉄褐斑あり
40		5	古墳	〃
		6		〃
	第４層	7		灰色シルト質粘土、酸化鉄褐斑あり
		8		〃
		9		〃
	第５層	10	縄文	暗褐色粘土
60		11	晩期	〃
	第８層	12	後半	灰褐色微砂質粘土
85		13		灰褐色砂質シルト
	第９層	14	縄文後～晩期	灰褐色シルトを交えた粗砂、植物破片多し
100		15		黒褐色シルト質泥炭　〃
		16		〃　〃
		17		〃　〃
		18		黒褐色シルト質泥炭　〃
		19		〃　〃
130		20	縄文後期中葉	灰褐色シルト質粗砂　〃
		21		黒褐色シルト質泥炭　〃
		22		〃　〃
		23		〃　〃
		24		〃　〃
160	第10層	25		青灰色シルトを交えた粗砂

以上のような相対的な比率は、ある種類の％が他の種類の増減によって左右される恐れがあるから、真の植生の変化を示さないこともある。そこで、比較のために主な試料の単位体積中に含まれた花粉の絶対数（ＡＰＦ）を求めた。すなわち、

1．正確に１㎤の試料をとり、さきに述べた花粉分離法で花粉濃縮液をつくり、その重量（Ｗ）を量る。

2．既知重量のスライドグラスとカバーグラスに（１）の花粉濃縮液を一滴（Ｃ）のせ、プレパラートをつくり、その重量を量りＣの重量を知る。

3．このプレパラートに含まれた全花粉の個数を読みとりＮ個とする。

4．１㎤の試料中の花粉総数（ＡＰＦ）は、ＡＰＦ＝Ｎ×Ｗ／Ｃで示される。

ここで得られた値は、種類の同定が不可能な個体数も含まれている。これに対して、相対比率は同定できたもののみの値であるから、両者の直接の比較はできない。また、ＡＰＦは当時の植物から供給された花粉のなかで、堆積中に消失したものを差し引いた残りの量を示している。したがって、Ａ

ＰＦから当時の植物量の大小が比較できるのは、消失量が同じであること、つまり堆積中に花粉の消失にはたらいた営力が同じであるとみなされる試料間に限ること、さらに本方法は単位体積を基準とするから、粒度組成が同じ試料間に限ることも必要である。以上のように、検出花粉の量的表示法にはそれぞれ多少の欠陥があることを念頭において分析結果の考察をしたい。なお、上に述べた方法による結果は表２・３、および図170・171に示してある。

分析結果とその考察

分離同定された花粉は木本類61種類、そのうち照葉樹林を構成するもの32種類、草本類71種類、シダ類その他の胞子11種類の計143種類に達した。

以下、下層から上層へ順次分析結果の概要を述べると：

第10層（試料番号25）　試料は粗砂を多く含んだ青灰色シルトで、土砂の流入の激しい不安定な堆積環境のものである。花粉量も上層に比べて少なく、総合比率でみると木本類は20％以下である。これに対してシダ類胞子は57％と最も多く、草本類も23.8％に達する。シダ類胞子は花粉に比して強固で分解されにくく、堆積環境の不良なところでは残存する割合が多くなるから、この比率が当時の植生を正確には反映していない可能性もある。いずれにしても、草本類ではイネ科、ヨモギ類が多く、草地が付近にかなりあったらしい。木本類では、常緑カシ類（アカガシ亜属の他にコナラ亜属のウバメガシを含むため、とくにこの名称を使用した）が全木本花粉（ＡＰ）の半数を占め優勢であり、ムクノキ、ヤマモモ、ハイノキ、マキ類の他にテイカズラなども出現するから、照葉樹林が優勢な植生下にあったことを物語っている。また、マツ、モミ、ツガなどの針葉樹類も検出されるのは後述のように注目すべきである。

第９層（試料番号24～14）　層厚約80㎝、砂層を挟んで５枚の泥炭層よりなる試料である。ここで泥炭というのは植物の残骸などの粗い残滓を含んだ有機性沈殿物を意味する。第10層から本層に移ると、急速に木本花粉（ＡＰ）が増加し、草本花粉（ＮＡＰ）やシダ胞子（ＦＳ）の総合比率は減少し、中層部（試料番号20～16）では、90％以上はＡＰで占められる。とくに高率なのは常緑カシ類で、これに次いでエノキ－ムクノキ、シイ－マテバシイ、ムクロジ属が多い。また、比率は低いがユズリハ、モッコク、ヤマモモ、イスノキ、ホルトノキ、センダン、イイギリ、ツバキ、ミカン、カラスサンショウ、タイミンタチバナ、アオキなど暖帯林を構成するＡＰが出現する。また、カシ、ムクロジの花粉塊が多数みられるし、アオキも低率ながら常に出現する。この低木は照葉樹林やエノキ－ムクノキ林の下生本として出現し、花粉生産量、散布範囲ともに小さい種類である。また、エノキ、ムクノキは、しばしば沖積平野に成林する落葉夏緑林で、ヤドリギを着生していることが多いが、本層中からもこれの花粉が検出されている。したがって、これら照葉樹林やエノキ－ムクノキ林はともに堆積現場近くに存在していたとみなされる。また、トチノキが本層に限り連続して出現する。この高木は冷温帯下部から温暖帯上部の空気湿度の高い渓谷林の構成種であり、松山平野には現在は分布していない。また花粉の生産、散布ともに限られる種類であるが、遺跡内からこれの果実がかなり発見されている。したがって、この木は遺跡背後の丘陵山麓部や小谷筋に分布しており、その果実は流水または人力によって遺跡内に集積したのであろう。これに似た分析結果は滋賀里遺跡[2]から報告されているのみで、西日本低地部ではきわめて稀な例で、当時はかなり冷涼多湿な気候であったことが推測でき

る。また、同様な気候変化を示唆するいまひとつの花粉群がある。それは、モミ、ツガ、コウヤマキ、スギの4種類の針葉樹類で、第10層から第9層下部（試料番号25～22）にわたり一時的な増加を示している。これらの針葉樹類もトチノキと同様に冷温帯下部から温暖帯上部に分布する。とくにツガ、コウヤマキは急傾斜地などの流出の激しい所に多く自生する。反対に、スギ、モミはむしろ表土の深い所に多い。このように相反する土地的要求をもった樹種が同時に増加することは、雨量の増加にその原因を求めざるをえない。では、どの程度までこれらの樹木は降下したであろうか。トチノキは遺跡付近に存在したのであるから、これを基準にして推定すると、いまトチノキの現在の分布下限を暖帯林上部とみなすと、少なくとも500m以上は降下したことになる。気温減率を高度100mあたり0.6°とすると3°は低下した勘定になる。雨量に関してはさきの針葉樹類が松山平野まで下降したかどうか確証はない。したがって、合理的な推定はできないが、上述のようにトチノキの降下量が500mとすれば、現在の高度500mの地域の降雨量が当時の松山平野の降雨量に近い値を示しているかもしれない。その意味では、久万町（海抜高度490m）の年降雨量（約1900mm）は参考になる数値であろう。この冷涼多雨気候を示す試料からは、縄文後期中葉を示す出土品があることから、縄文後期の多雨期と呼ぶことにする。

また、草本類の総合比率をみると急速に減少しているが、出現する種類はかなり多彩である。水中植物のヒルムシロ、挺水性のハス、ガマ、浮葉性のガガブタなどが低比率ながら検出され、一時は数10cmの水深をもった沼が形成されていたことを物語っている。また、テイカカズラ、ナツズタ、サネカズラなど林内で着生生活をする「つる植物」、スズメウリ、ゴキヅル、ヘクソカズラ、スイカズラ、ノブドウ、エビズル、ジャケツイバラなど林縁に多い「つる植物」が出現する。また、ギシギシ、サナエタデ、キンポウゲ、アイナエ、ゴマクサなど半湿地性の草本類もみられるが、前層で多かったヨモギなどの乾燥地に多い種類は影をひそめている。おそらく、現地では沼とそれを取り巻く湿地が存在し、さらにこれらを包むように、既に述べた多彩なつる植物で縁取られた照葉樹林や落葉夏緑林が繁茂していたのであろう。また、さきの針葉樹類の一時的な増加期（縄文後期の多雨期）も一応終わりをつげた後の沼地の堆積層（試料番号21～14）をみると、泥炭層で示された静穏な堆積環境も砂の流入によって中断されている。おそらく降雨量の増加した時期が断続的に繰り返され、トチノキも依然として出現することから、多湿冷涼な気候であったらしい。かくして沼の水深も次第に浅くなり、浮葉性のガガブタも上層（試料番号15、14）になると出現しなくなる。その頃から総合比率で木本花粉は漸減、逆に草本花粉は増加しはじめる。なかでもエノキ、ムクノキ林が縮小しはじめるが、アオキが出現するから、この林は沼の近くに残っていたらしい。しかし、トチノキは試料番号14を最後に姿を消してしまう。

第8層（試料番号13、12）　2試料ともに粗砂を含まず、細砂～シルトサイズの粒度組成で、氾濫原的な堆積物であるが、前層に比べてやや安定した堆積環境であったらしい。しかし、木本花粉はますます減少し、草本花粉、シダ類胞子の増加が目立ってくる。また、ガマ、ミクリ、ミズワラビなど、浅水域から湿地に生育する種類が出現し、沼はますます埋積されてきたことを示している。また、ヨモギ、イネ科雑草がアカザをともなって増加しはじめ、乾燥地も拡がりはじめたことを示唆している。木本類ではアオキ、ムクロジがこの時代以降消失する。沼の周辺にまで広く進出していたカシ類を主とする森林や、エノキ、ムクノキ林も第8層を最後に周辺から姿を消していったことを物語っている。

第５層（試料番号11、10）　今回提供された試料を採取されたトレンチ面では、第８層の上に第５層が不整合に堆積しており、第７、第６層を欠いている。これら両層が何故に削除されたかについては、第５層の花粉の消長によってある程度は推測することができる。さきに第10層から第９層下部にわたって、モミ、ツガ、コウヤマキなどの一時的な増加期がみとめられ、これを縄文後期の多雨期とみなした。これと同様な現象が、第５層から第３層下部にかけてみられることである。ここで、降雨量の増加が始まる時期とその結果が花粉組成に反映するまでにはかなりの時間差があることはいうまでもない。とくに、樹木の場合はその時間差は大きい。例えば雨量の増加で表土が流出し、ツガに好適な土地ができる。これにツガの種子が飛来、発芽し、成木となり花粉を散布する。その結果が分析結果に反映する。このような過程に要した時間は少なくとも数10年、或いは100年以上を要するとみられる。したがって、ここで降雨量の増加は第５層より前から始まっており、そのために第６、第７両層は流失した可能性が高い。この多雨期を縄文晩期の多雨期と呼ぼう。また、総合比率が示すように木本類は第８層から目立って縮小する。おそらく第７～６層の時代に平地から背後の丘陵にまで後退したのかもしれない。このように縮小した森林は依然としてカシ類が優勢であるが、多少の組成のうえで変化がうかがえる。ヤマモモが上層に向かって増加することである。この傾向は西日本低地に多いシイ、カシ類を優占種とする照葉樹林で後氷期後半にしばしばみとめられることである。ヤマモモはこの森林の優占種ではなく、一従属種にすぎないが、優占種のある個体が伐採または枯死したりすると、長い目でみればその空間は優占種の子孫で埋め合わされるはずであるが、一時的にヤマモモが占有して繁茂する傾向がある。つまり、ヤマモモの増加は照葉樹林のカシやシイ類が伐採その他で損害を受けることが多くなったことを示唆しているのであろう。次に花粉の絶対量（ＡＰＦ）についてみてみると、第８層以下の試料に比べて１／20～１／10と少ない。これは当時の植物量が少なかったことよりも、森林が遺跡内から後退したこと、堆積物中に酸化鉄を多く含むことから明らかなように、花粉の酸化分解が旺盛となったことなどが原因であろう。いずれにしても、森林の後退した跡地や、水深の浅くなったかつての沼地は、イネ科、カヤツリグサ科、セリ科、ヨモギその他のキク科などの草本類によって占められていたらしい。また、浅いながらも沼の名残をとどめているところではミズワラビやガマが生育を続けていた。そのような植物景観を呈する試料番号10に至って稲花粉がはじめて出現する。全イネ科花粉の14％で、現代の水田土壌中の栽培稲花粉残留量の半分以下の値であるが、現地点で既に栽培されていた可能性はある。稲花粉の年間の水田残留率は非常に低く、熟田での残留量に達するには、新しく開田した場合は100年以上かかるとみなされているからである③。また、既に述べたように、本層は縄文晩期の多雨期中の堆積層であるから、栽培稲の出現も勿論のこと、この多雨期に対比される。縄文晩期の稲作のみとめられている北部九州の板付④、菜畑⑤両遺跡の分析結果と比較すると、板付では稲作開始直後に降雨量の増加にもとづく一時的な植生破壊期がみとめられ、菜畑では稲作開始直後に土砂流入により稲作は中断されている。これに対して、今回の遺跡では上述のように雨量の増加期中に稲は出現する。したがって、これら三遺跡で示された多雨期は同一時期のさきの縄文晩期の多雨期とみなすことができよう。なお、これら三遺跡での稲出現時期を比較すると、板付、菜畑では多雨期が花粉に反映される直前に、大渕では反映されているさ中に対比される。その意味からは、大渕では他よりもやや遅れて稲作は開始されたことになる。しかし、多雨期の正確な時期と、それが花粉に反映される時期との間には多少の時間差があり、しかもこの時間差の長短はいろいろな要因により影響を受けるから、稲作開始時期の決定には花粉以外の面からの考察も待

表２　大渕遺跡Ａ区出土花粉化石一覧(1)

試料番号		第１層		第2層	第３層			第４層			第５層		第8層		第9層											第10層
木本類照葉樹林要素		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
Podocarpus	マキ属	− %	− %	%	0.1 %	− %	0.3 %	0.2 %	− %	− %	0.6 %	0.7 %	− %	0.3 %	0.5 %	0.7 %	0.4 %	0.8 %	0.5 %	− %	0.3 %	0.2 %	− %	− %	0.6 %	1.0 %
Myrica	ヤマモモ属	1.0	2.1		11.6	8.8	4.6	6.5	8.4	8.2	2.8	11.3	4.8	1.2	0.5	0.4	0.2	−	0.2	−	0.1	0.6	1.5	1.1	0.6	3.3
Castanopsis-Pasania	シイーマテバシイ属	0.1	−		3.2	4.6	0.3	3.4	4.0	2.5	15.0	3.3	0.5	2.7	2.7	2.8	3.8	0.7	2.0	3.3	0.6	6.6	2.9	3.1	2.8	−
Cyclbalanopsis	アカガシ亜属	0.6	3.6		53.7	66.1	58.8	77.3	62.5	51.6	43.9	50.3	79.7	80.4	73.9	80.6	80.7	80.8	72.5	79.2	79.5	73.1	71.1	73.9	55.1	47.3
Celtis-Aphananthe	エノキームクノキ属	−	−		1.2	0.3	1.4	0.4	1.3	0.1	−	3.3	2.1	4.0	7.0	3.8	3.3	7.5	9.6	7.0	14.4	4.8	3.6	1.1	1.2	1.1
Pittoporum tobira	トベラ	−	−		−	0.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Distylium	イスノキ属	−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0.2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Citrus	ミカン属	0.1	0.7		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Zanthoxylium ailanthoides	カラスサンショウ	−	−		0.3	0.3	−	−	−	−	−	−	−	−	0.3	0.4	1.2	0.4	0.9	4.8	0.2	0.2	0.3	0.8	−	1.1
Melia azedarach var. subtripinnata	センダン	−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0.1	0.2	0.2	−	0.3	−	0.1	0.2	−	−	−	−
Daphniphylum	ユズリハ属	−	−		−	0.3	−	−	−	2.5	−	−	−	−	1.0	0.2	0.3	−	−	0.1	−	0.1	0.8	1.9	−	−
Mallotus	アカメガシワ属	1.3	1.4		0.2	0.1	−	−	−	−	−	−	−	1.0	0.3	0.4	1.0	1.2	1.3	1.1	0.6	0.2	0.5	1.1	−	−
Rhus javanica	ヌルデ	0.1	−		−	0.1	−	−	−	−	−	−	−	0.4	−	−	−	0.1	−	0.2	−	0.4	0.3	−	−	−
Sapindus mukorossi	ムクロジ	−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	0.5	1.2	2.4	3.4	1.7	0.7	1.7	1.1	−	0.2	0.8	2.3	0.6	−
Meliosma	アワブキ属	−	−		0.2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Elaecarpus	ホルトノキ属	−	−		−	−	−	−	−	0.6	1.7	5.3	−	1.0	−	−	0.1	−	0.1	−	−	−	−	0.4	−	−
Camellia	ツバキ属	−	−		−	−	−	−	−	−	0.6	−	−	−	−	−	0.1	0.3	0.2	−	0.1	−	−	0.4	−	−
Cleyera	サカキ属	−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0.3	−	−	−
Ternstroemia	モッコク属	−	−		−	−	−	0.2	−	−	−	0.7	0.5	−	0.1	−	−	−	−	0.1	−	−	1.0	−	0.6	−
Idesia polycarpa	イイギリ	−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0.1	−	−	−	−	−	−
Elaeagnus	グミ属	−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0.1	0.1	−	−	−	−	−	−	−	−
Acanthopanax	ウコギ属	−	−		−	0.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0.1	−	0.1	−	0.1	−	−	−	−	−	−
Aralia	タラノキ属	−	−		−	0.1	−	−	−	−	−	−	−	0.1	−	0.2	0.2	0.1	−	−	−	0.4	0.3	0.4	−	−
Dendropanax	カックレミノ属	−	−		−	−	−	−	−	−	0.6	0.7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Aucuba japonica	アオキ	−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	0.1	0.3	0.8	0.4	0.3	0.1	1.0	0.5	0.3	0.2	−	−	−	−
Myrsine	タイミンタチバナ属	−	−		−	−	−	−	−	3.1	−	−	−	−	−	−	−	0.8	−	−	−	0.8	0.5	−	−	−
Diospyros	カキノキ属	−	−		−	−	0.2	0.2	−	−	−	−	−	−	−	0.1	0.2	0.3	0.1	0.1	−	−	−	−	0.6	−
Symplocos	ハイノキ属	−	−		−	0.3	0.3	−	−	−	−	−	−	−	0.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1.1
Clerodendron	クサギ属	−	−		−	−	−	−	0.3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Viburnum awabuki	サンゴジュ	−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0.1	−	0.3	−	−	−
その他の木本類																										
Pinus	マツ属	89.6	81.9		15.2	10.2	17.5	1.3	6.0	1.3	−	3.3	3.2	1.0	3.2	2.1	0.6	1.9	1.6	0.5	0.8	2.9	3.6	0.8	7.9	16.5
Abies	モミ属	−	3.6		0.1	0.7	1.2	1.7	1.7	6.3	2.2	3.9	1.1	1.0	2.3	0.7	0.7	0.3	0.2	0.2	0.3	1.2	2.3	1.1	12.9	4.4
Tsuga	ツガ属	1.5	1.4		1.9	1.8	5.0	1.3	0.3	6.3	1.7	7.9	3.2	0.7	1.1	0.5	1.7	0.3	0.3	0.1	0.4	0.8	3.8	3.1	9.0	5.5
Sciadopitys	コウヤマキ属	0.1	−		−	0.1	−	0.4	−	1.9	6.1	1.3	−	0.1	0.3	0.2	0.1	0.1	0.2	−	0.1	0.2	0.3	0.8	0.6	−
Cephalotaxus	イヌガヤ属	−	−		0.4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Cryptomeria japonica	スギ	2.6	0.1		0.7	0.1	1.5	1.3	2.3	−	0.6	2.0	−	−	0.3	0.2	0.3	−	0.2	−	0.2	0.6	0.3	1.1	2.8	2.2
Salix	ヤナギ属	−	−		−	−	−	0.2	−	0.6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Juglans	クルミ属	−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0.1	0.3	−	−	−	0.2	−	−	−	−
Pterocarya	サワグルミ属	−	−		0.1	−	−	−	−	0.6	−	−	0.5	−	−	−	0.1	−	0.1	−	0.1	0.4	−	0.8	−	−
Platycarya	ニグルミ属	−	−		−	0.1	0.2	0.2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Alnus	ハンノキ属	1.7	2.8		2.0	1.0	1.2	0.2	6.0	5.0	1.1	1.3	−	0.1	0.1	−	0.1	−	0.2	0.3	0.1	−	0.3	0.4	−	4.4
Betula	カバノキ属	0.1	−		1.8	1.0	2.3	0.8	1.3	−	−	−	−	−	−	0.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1.1
Carpinus	シデ属	0.1	−		1.6	0.7	1.5	0.6	2.3	1.9	−	−	−	0.1	0.3	−	0.3	0.1	0.2	−	0.1	0.6	1.0	0.4	−	2.2
Fagus japonica	イヌブナ	−	−		0.4	−	0.9	0.4	−	−	1.1	−	−	0.1	−	−	−	−	0.1	−	0.2	0.2	0.3	−	−	−
Lepidobalanus	コナラ亜属	0.3	−		2.3	2.1	1.5	1.5	1.4	3.1	22.2	4.0	−	0.3	−	0.2	0.5	1.1	0.4	0.1	0.1	0.8	0.5	−	2.2	3.3
Ulmus-Zelkova	ニレーケヤキ属	0.3	0.1		1.0	0.1	1.9	1.1	1.3	1.9	−	0.7	−	−	0.5	0.1	1.1	0.6	0.4	0.1	0.1	0.4	3.3	2.7	2.8	5.5
Morus	クワ属	−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0.1	−	0.1	−	−	−	−	−
Deutzia	ウツギ属	−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0.3	−	−	0.5	−	−	−	−	−
Phellodendon	キハダ属	−	−		0.1	0.2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0.1	0.2	0.1	0.3	−	0.1	−	−	0.4	−	−
Ilcx	イヌツゲ属	−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	−	0.1	0.1	0.1	−	−	0.1	−	0.1	0.2	−	0.8	−	−
Aesculus	トチノキ属	−	−		−	−	−	0.2	−	−	−	−	−	−	1.3	1.8	0.1	0.3	0.6	0.3	0.3	0.6	0.3	0.4	−	−
Clethra	リヨウブ属	−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	−	0.4	−	−	−	−	−	−	0.1	0.2	−	−	−	−
Cornus	ミズキ属	−	−		0.1	−	−	−	−	−	−	−	0.5	−	−	−	−	−	−	0.1	−	−	−	0.4	−	−
Ericaceae	ツツジ属	0.1	0.1		0.2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Styrax	エゴノキ属	−	−		−	−	0.2	0.2	0.3	−	−	−	−	−	−	−	−	0.3	−	0.1	0.1	−	0.3	0.4	−	−
Fraxinus	トネリコ属	−	−		−	0.1	−	−	−	0.6	−	−	−	−	−	−	−	0.1	−	−	−	−	−	−	−	−
Ligustrum	イボタノキ属	−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	0.1	−	−	0.1	0.1	0.1	−	0.2	0.1	0.2	0.3	−	−	−
Viburnum	ガマズミ属	0.3	−		0.3	0.1	−	−	0.3	0.6	−	−	2.1	0.2	0.3	0.1	0.1	−	0.2	−	0.3	−	−	−	−	−
絶対花粉，胞子数（1㎤当り）	Ａ　Ｐ　Ｒ	13,185	−		−	−	−	2,387	−	2,594	4,273	1,341	−	−	−	112,522		−	35,288	−	−	43,293	−	−	−	−
総合花粉，胞子比率（%）	照葉樹類	1.3 %	1.7		26.1	40.7	36.8	46.7	30.0	14.2	13.8	13.0	30.3	77.2	82.2	90.3	84.6	86.8	92.9	92.3	87.3	48.0	46.7	42.4	13.0	10.5
	その他の木本類	40.5	19.2		7.8	9.2	19.0	6.1	9.1	6.2	7.5	4.3	3.6	4.4	9.1	5.9	5.5	5.3	0.9	2.1	3.0	1.6	9.0	6.4	8.1	8.7
	草本類	47.7	53.4		61.6	46.7	40.7	47.2	47.2	54.9	43.4	22.6	25.0	14.2	5.6	1.7	4.5	4.7	3.6	2.9	5.7	42.0	23.8	21.5	25.2	23.8
	シダ類	10.5	25.6		4.5	3.4	3.5	11.1	13.7	37.5	35.3	60.1	41.0	4.2	3.1	2.1	3.6	3.2	2.6	2.7	4.0	8.3	20.5	29.7	53.7	57.0

表３　大渕遺跡Ａ区出土花粉化石一覧(2)

試料番号		第１層		第2層	第３層			第４層			第５層		第8層		第９層											第10層
草本類水湿地植物		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
Potamogeton	ヒルムシロ属	－ %	－ %		－ %	－ %	－ %	－ %	－ %	－ %	－ %	－ %	－ %	－ %	－ %	－ %	0.2 %	－ %	－ %	－ %	－ %	－ %	－ %	－ %	－ %	－ %
Blyxa	スブタ属	0.5	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Nymphoidea indica	カガブタ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.2	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Nelumbo	ハス属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	－	－	0.6	－	－	－	－
Tyoha	ガマ属	－	－		0.2	－	－	1.3	1.7	8.8	30.5	7.3	5.3	0.3	0.5	－	－	0.1	－	－	0.2	0.6	0.5	0.8	1.2	1.1
Sparganium	ミクリ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	0.5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Aneilema	イボクサ属	－	－		0.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Monochoria	コナギ属	－	－		0.8	0.7	0.5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Rotala	キカシグサ属	0.3	－		－	0.9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Ludwigia	チョウジタデ属	－	－		－	－	－	0.2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Centrathera	ゴマクサ属	－	－		0.2	－	－	1.5	2.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	0.6	－	－	－	－	－
つる植物																										
Humulus	カナムグラ属	－	－		0.2	0.1	－	－	－	1.3	－	－	1.6	0.1	0.3	－	0.1	－	0.1	－	－	0.4	1.3	－	0.6	－
Kadsura	サネカズラ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	0.1	－	0.2	－	－	－	－
Caesalpinia japonica	ジヤケツイバラ	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	－	－	－	0.1	－	－	－	－	－
Pueraria	クズ属	－	－		－	－	－	－	－	0.6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Millettia	ナツフジ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	－	－	－	－	－
Celastrus	ツルウメモドキ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	－	－	0.1	－	－	－	－	－
Ampelopsis	ノブドウ属	0.1	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.2	0.6	－	0.5	0.1	0.2	－	0.4	－	－
Cayratia	ヤブガシラ属	0.1	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Parthenocisus	ツタ属	0.1	－		－	－	－	－	－	0.6	－	1.3	1.1	0.1	0.2	0.1	－	0.4	－	－	0.2	－	0.3	1.1	－	－
Vitis ficifolia var. lobata	エビヅル	－	－		0.2	0.3	－	－	0.3	0.6	－	0.7	0.5	0.6	0.3	0.3	0.1	－	0.2	0.3	－	－	0.3	0.4	－	－
Anodendron	サカキカズラ属	－	－		0.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tracheospermum	テイカカズラ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.2	0.1	0.1	0.3	－	0.1	－	－	－	0.4	－	1.1
Paederia	ヘクソカズラ属	－	－		0.2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Actinostemma	ゴキズル属	－	－		－	0.1	0.2	－	－	－	－	－	2.1	0.1	0.8	－	0.2	0.1	0.3	0.1	2.1	67.5	26.9	17.6	49.4	4.4
Melothria	スズメウリ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	－	0.1	－	0.1	－	－	－	－	－
Cucumis	マクワウリ属	－	－		－	0.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
寄生植物																										
Viscum	ヤドリギ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	1.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Cuscuta	ネナシカズラ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	－	－	－	0.3	－	－	－	－	－
その他の木本類																										
Gramineae	イネ科	61.4	95.6		41.6	12.4	57.1	31.3	48.5	159.1	139.3	22.5	15.0	4.9	1.0	0.2	0.4	0.6	－	－	0.6	2.7	5.6	8.4	19.7	51.6
Oryza	イネ	(57.4)	(26.6)		(27.5)	(32.5)	(42.5)	(24.4)	(13.0)	(19.5)	(14.7)	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1.8	6.5		4.1	2.6	2.2	4.8	3.7	8.1	5.5	7.3	3.7	0.1	0.5	－	0.1	0.1	－	－	0.1	2.7	3.6	4.0	5.6	3.4
Lilium	ユリ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	－	－	－	－	－	－	－	－
Hosta	ギボウシ属	－	－		－	－	0.2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Lycoris	ヒガンバナ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	－	－	－	－	－	－	－
Boehmeria	カラムシ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	－	－	－	－	－	－	－
Fagopyrum	ソバ属	－	－		0.9	0.7	－	－	0.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Polygonum	ミチヤナギ属	34.9	107.9		0.4	0.1	－	－	0.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1.1
Reynoutria	イタドリ属	0.2	－		0.8	1.0	－	0.2	－	0.6	－	－	－	－	－	－	0.2	－	0.2	－	0.1	－	－	－	－	－
Persicaria	サナエタデ属	2.4	0.2		0.1	2.1	0.2	0.6	1.0	1.9	3.9	3.3	0.5	0.4	0.2	0.1	0.2	－	－	－	0.2	－	－	－	5.1	1.1
Rumex	ギシギシ属	0.5	－		－	－	－	0.4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	0.1	0.2	0.4	－	0.3	0.3	－	－
Chenopdium	アカザ属	0.4	0.1		0.4	0.4	0.3	－	－	－	－	0.7	1.6	0.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.4	－	－
Achyranthes	イノコズチ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.3	0.2	－	0.2	0.1	－	0.1	－	0.2	0.5	0.4	－	1.1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2.9	4.3		0.4	0.1	－	0.2	－	0.6	－	－	0.5	－	－	－	－	－	－	－	－	0.2	－	－	－	－
Ranunculus	キンポウゲ属	0.1	0.1		1.6	1.8	0.6	1.5	2.7	2.5	1.1	0.7	1.1	3.1	0.8	－	0.3	0.1	0.7	0.6	－	0.4	0.3	1.9	3.4	2.2
Clematis	センニンソウ属	0.1	－		－	－	－	－	－	－	－	－	0.5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Anemone	イチリンソウ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Thalictrum	カラマツソウ属	－	－		－	－	－	－	－	0.3	0.6	0.7	0.5	－	－	－	0.1	－	－	－	－	0.2	－	0.4	－	－
Cardamine	タネツケバナ属	5.1	23.9		1.1	1.7	0.2	0.4	－	3.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Potentilla	キジムシロ属	－	－		－	0.8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	－	－	－	－	－	－	－	－
Duchesnea	ヘビイチゴ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	0.7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Rubus	キイチゴ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Vicia	ソラマメ属	0.1	0.1		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Lespedeza	ハギ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	－	－	－	－	－	－
Euphorbia	タカトウダイ属	0.1	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Acalypha	エノキグサ属	－	－		0.2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Triumfetta	ラセンソウ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.6	－
Hypericum	オトギリソウ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	1.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Halolagis	アリノトウグサ属	－	－		0.2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Umbelliferae	セリ科	－	0.1		3.6	5.0	1.2	10.7	20.1	30.8	15.0	18.5	12.8	1.5	0.2	0.1	0.2	0.4	0.1	－	0.2	0.4	－	4.0	14.6	3.3
Lysimachia	オカトラノオ属	－	－		－	－	－	－	－	2.5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Mitrasacme	アイナエ属	0.2	－		0.2	－	－	0.6	－	－	－	－	－	－	－	－	0.3	0.3	0.5	0.1	0.3	－	0.5	－	－	－
Galium	ヤエムグラ属	－	－		0.2	－	0.2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Patrinia	オミナエシ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.6	－
Valeriana	カノコソウ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Lonicera	スイカズラ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	0.1	－	－	－	0.2	－	－	－	1.1
Artemiaia	ヨモギ属	2.2	9.4		120.7	63.2	9.0	12.2	32.4	30.2	13.3	59.6	22.5	3.9	1.1	0.6	1.0	0.8	0.7	0.7	0.7	2.9	1.3	3.8	16.3	46.2
Chrysanthemum	キク属	－	－		－	－	－	－	－	1.9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Pertya	コウヤボウキ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Xanthium	オナモミ属	－	－		0.2	0.1	－	0.6	0.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Adenocaulon	ノブキ属	－	－		－	－	－	0.2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
other Compositae	その他のキク科	0.1	2.8		1.4	1.3	1.4	4.8	7.0	15.1	17.8	6.0	3.2	0.3	－	0.1	0.2	0.1	0.2	－	0.1	0.4	0.3	－	2.8	6.6
シダ類その他																										
Osmunda	ゼンマイ属	－	－		0.4	0.8	－	0.4	－	0.6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Gleichiniaceae	ウラジロ科	5.2	45.6		2.8	0.7	－	－	0.7	－	0.6	6.6	0.5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Pteris	イノモトソウ属	0.8	－		0.4	0.2	0.3	2.0	2.7	9.4	12.2	20.0	11.2	－	0.5	0.2	0.9	－	－	0.6	0.4	2.0	10.0	13.7	123.6	172.5
Pyrrosia	ヒトツバ属	－	0.1		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	0.1	0.6	－	－	－	0.4	1.0	2.7	－	－
Ceratopteris	ミズワラビ属	－	－		－	－	0.6	3.4	4.3	28.9	23.3	－	1.6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Lygodium	カニクサ属	0.4	－		－	－	－	0.2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Lycopodium	ヒカゲノカズラ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Selaginella	イワヒバ属	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	6.2	－	－	－	－
monolete type		3.1	13.7		4.9	3.5	4.6	6.9	10.4	42.1	56.1	251.7	77.0	4.0	2.6	1.4	2.6	2.2	2.0	1.8	3.5	7.2	1.3	36.8	126.4	116.5
trilete type		15.7	62.3		4.4	1.6	0.6	3.8	10.4	15.7	11.7	66.2	22.5	1.2	0.3	0.5	0.4	0.7	0.6	0.6	0.5	0.8	23.6	7.6	4.5	8.8
Anthocertaceae	ツノゴケ科	－	－		0.1	－	－	4.2	6.7	86.7	61.6	3.3	8.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

ちたい。

第４層（試料番号９、８、７）　第５層で繁茂してきた草本類は、本層の当初（試料番号９）は前にも増して繁茂し、イネ科は全木本花粉の1.6倍にもなる。中層（試料番号８）になると急減するが、依然としてヨモギ類とともに優位を保っている。稲花粉は着実に増加の傾向を示し、ミズワラビも急に減少する。ミズワラビと栽培稲は生育場所が互いに類似しているから、ミズワラビの生育場所が次第に水田化されてきたことが想像される。また、この頃（試料番号８）からソバが出はじめる。縄文時代の遺跡からソバが検出された例は、中部地方以北に限られ、ソバの分布は北方からと考えられてきた。ただ、例外として板付遺跡では2880±105y.B.P.（Gak.4553）と2810±100y.B.P.（Gak.4554）の間から検出されていた。今回、板付とほぼ同時代に四国からも検出されたことになる。さらに、山口県宇生賀盆地では6600±75y.B.P.（N-2916）以降、ソバが検出されるという[6]。これらも含めてソバの西日本における分布ルートについては再吟味が必要となっている。いずれにしても、第５層から第４層にかけて栽培稲やソバの出現は明らかに農耕がこの地で行われていたわけで、上に述べた草本花粉の減少は農耕地の拡大と関係ありそうである。また、木本類ではエノキームクノキ林はますますその影は薄くなるし、山地に後退した照葉樹林も常緑カシ、シイ類が比率の上では優位を保っているが、ヤマモモの比率も高く、シイ、カシ類も次第に優位を低下させつつあるとみるべきであろう。

第３層（試料番号６、５、４）　栽培稲花粉の比率は現代の水田なみとなり、水田雑草のコナギ、イボクサ、キカシグサなども検出され、稲作はいよいよ本格的に現地点で営まれてきたことを物語っている。また、ソバの他にマクワウリ類も出現するし、耕地雑草のタネツケバナ、ハコベ、ミチヤナギ、ギシギシ、アカザ類などもみられるし、以前からのヨモギ、オナモミ、イネ科雑草なども多く、農耕地、荒地が展開していたことを物語っている。また、優位を占めていた照葉樹林は衰退の一途をたどり、代わってマツが増加を始める。背後の山地では、森林の破壊が顕著になってきたことを示している。

第２層（試料番号３）　第１層の集積層とみなされるもので、花粉化石は含まれていない。

第１層（試料番号２、１）　山地では照葉樹林はほとんど姿を消し、マツ林が形成されたことを示している。マツの比率は圧倒的に多いが、花粉の生産量、散布範囲ともに他に比べて大きいこと、他の木本類が激減したことなどのためにマツの比率が過大に大きくなったものである。また、遺跡内は完全に耕地化されたわけであるが、試料では畦畔や路傍に多いミチヤナギが多く検出されている。

本遺跡の存続した年代については表１に示したように、考古学的出土品から縄文時代後期中葉から中世に至る間である。これを花粉化石による編年区分にあてはめると、ＲⅢａ時代以降のものとみなすことができる。約8500年前に始まった後氷期の最暖期（ＲⅡ時代）も6000～5000年前をピークとして4000年前には終わりを告げ、冷涼化の傾向を示すＲⅢ時代に入る。さらにＲⅢ時代は気候の低温多湿化を示すＲⅢａ時代（4000～1500年前）と、人間の植生破壊が顕著になるＲⅢｂ時代（1500年前から現在）に区分される。松山平野のＲⅡ時代を示す試料はないが、西日本各地の例からみて暖帯林が繁茂をきわめていたことは間違いなく、冷温帯林が存在した可能性はほとんどない。しかし今回の花粉分析の結果では、暖帯上部から冷温帯下部にわたるいわゆる中間帯の森林要素が増加していること、すなわちその分布域が下降拡大し、気候の低温、多湿化を示唆する時期が２回みとめられ、それぞれ縄文後期、晩期の多雨期とみなした。これらの時期は年代、気候変化の傾向などからみてＲⅢａ時代

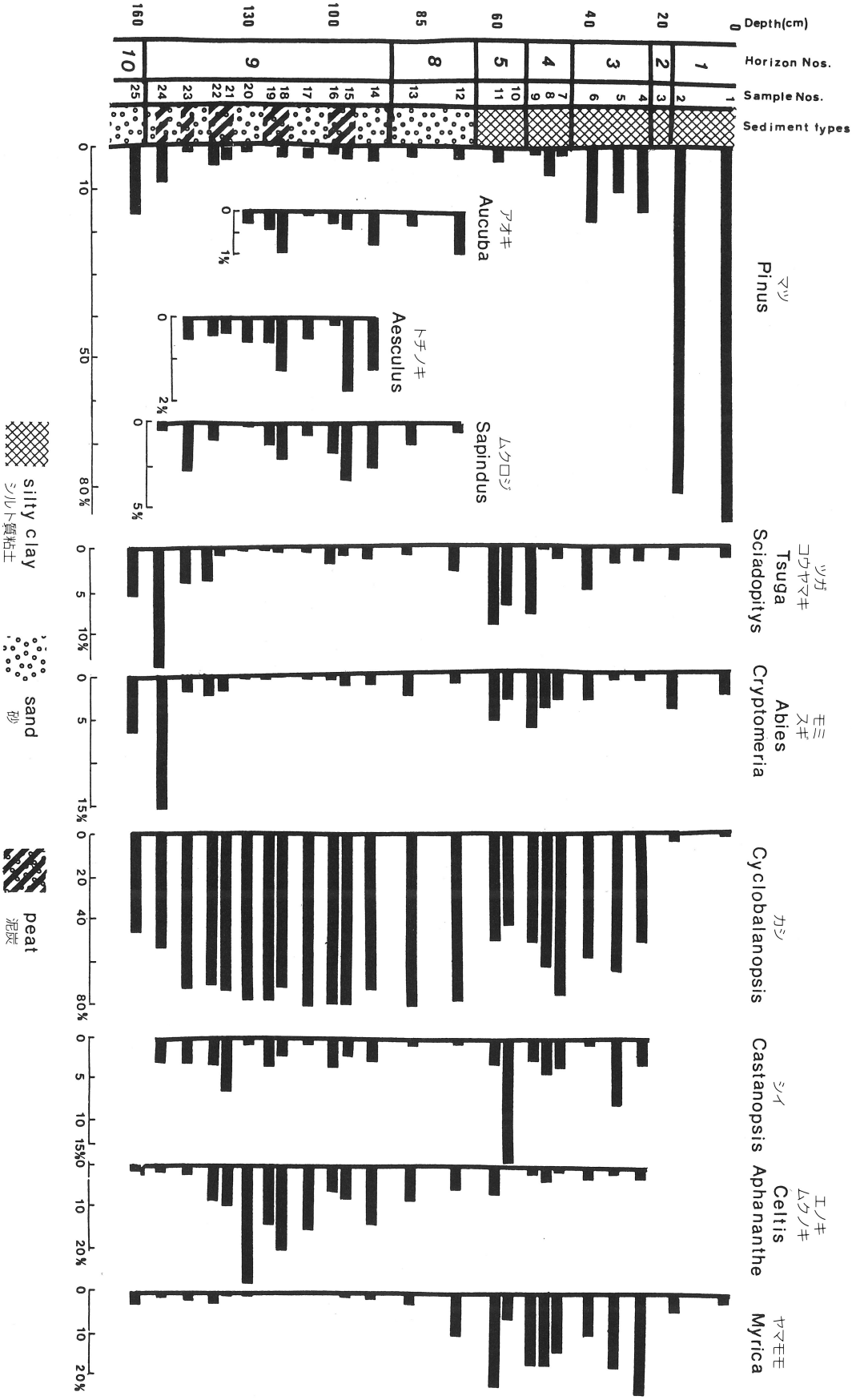

Depth(cm)
Horizon Nos.
Sample Nos.
Sediment types
マツ Pinus
ツガ コウヤマキ Tsuga Sciadopitys
モミ スギ Abies Cryptomeria
カシ Cyclobalanopsis
シイ Castanopsis
エノキ ムクノキ Celtis Aphananthe
ヤマモモ Myrica
アオキ Aucuba
トチノキ Aesculus
ムクロジ Sapindus
silty clay シルト質粘土
sand 砂
peat 泥炭

図170 花粉の消長(1)

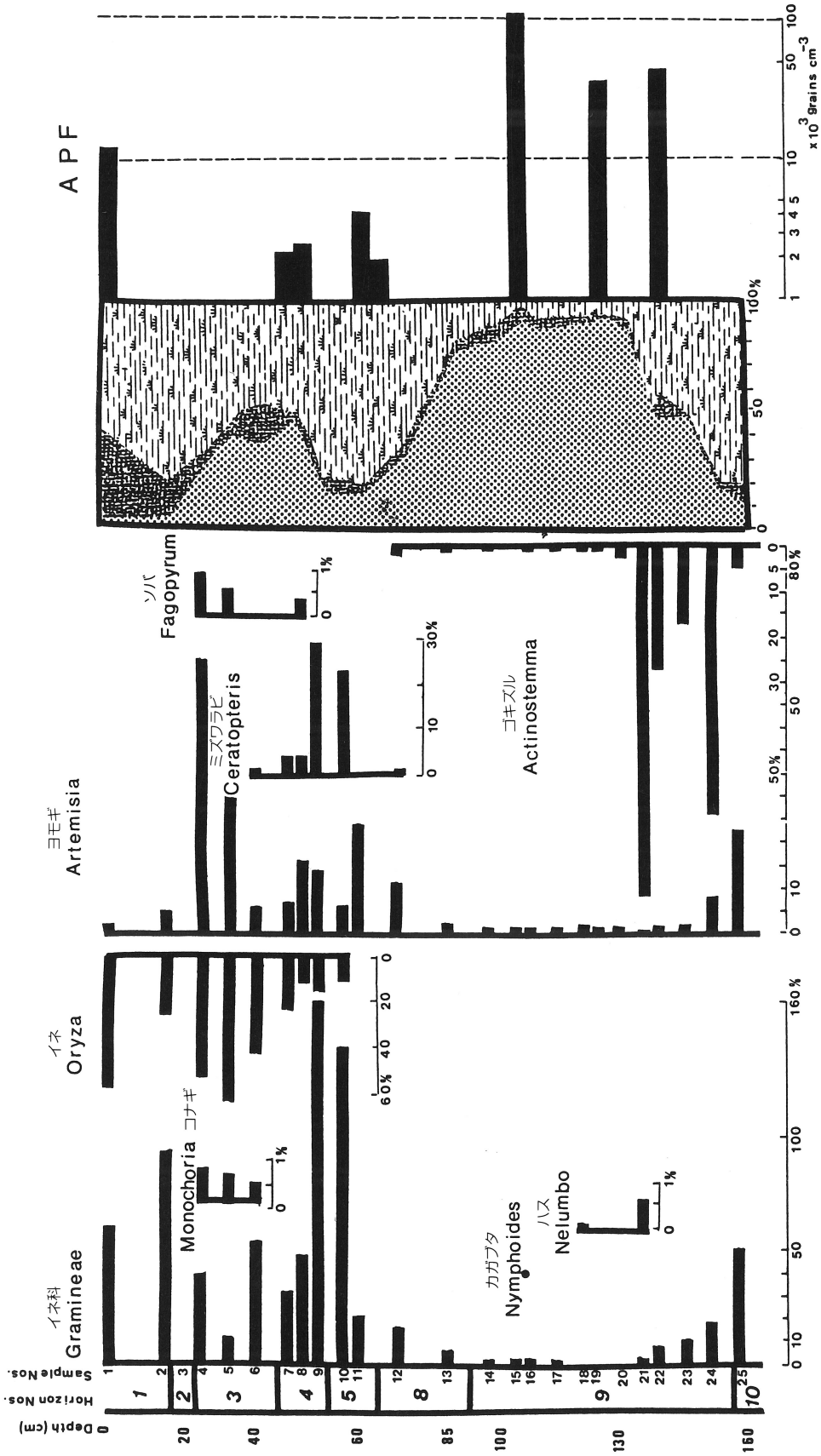

Depth (cm)
Horizon Nos.
Sample Nos.
イネ科
Gramineae
Monochoria コナギ
イネ
Oryza
カガブタ
Nymphoides
ハス
Nelumbo
ヨモギ
Artemisia
ミズワラビ
Ceratopteris
ゴキヅル
Actinostemma
ソバ
Fagopyrum
APF
x10^3 grains cm^-3
laurel forest AP
照葉樹花粉
other AP
その他の木本花粉
NAP・FS
草本花粉・シダ胞子

図171　花粉の消長 (2)

図172　大渕遺跡Ａ区出土花粉化石(1)

				試料番号
Fig. 1	Abies	モミ	× 500	16
Fig. 2	Tsuga	ツガ	〃	16
Fig. 3	Aesculus	トチノキ	×1000	15
Fig. 4	Platycarya	ノグルミ	〃	6
Fig. 5	Castanopsis	シイ	〃	15
Fig. 6	Zanthoxylum	カラスザンショウ	〃	19
Fig. 7	Cyclobalanopsis	常緑カシ	〃	15
Fig. 8	Aucuba	アオキ	〃	18
Fig. 9	〃	〃	〃	15
Fig.10	Dendropanax	カクレミノ	〃	15
Fig.11	Phellodendron	キハダ	〃	15
Fig.12	Melia	センダン	〃	16
Fig.13	Diospyros	カキ	〃	15
Fig.14	Idesia	イイギリ	〃	19
Fig.15	Citrus	タチバナ	〃	16
Fig.16	Morus	クワ	〃	5
Fig.17	Myrsine	タイミンタチバナ	〃	22
Fig.18	Myrica	ヤマモモ	〃	5
Fig.19	Clethra	リョウブ	〃	20
Fig.20	Sapindus	ムクロジ	〃	15
Fig.21	〃	〃	〃	15
Fig.22	Fagus	イヌブナ	〃	16
Fig.23	Aphananthe	ムクノキ	〃	20
Fig.24	Symplocos	ハイノキ	〃	6
Fig.25	Rhus	ヌルデ	〃	15

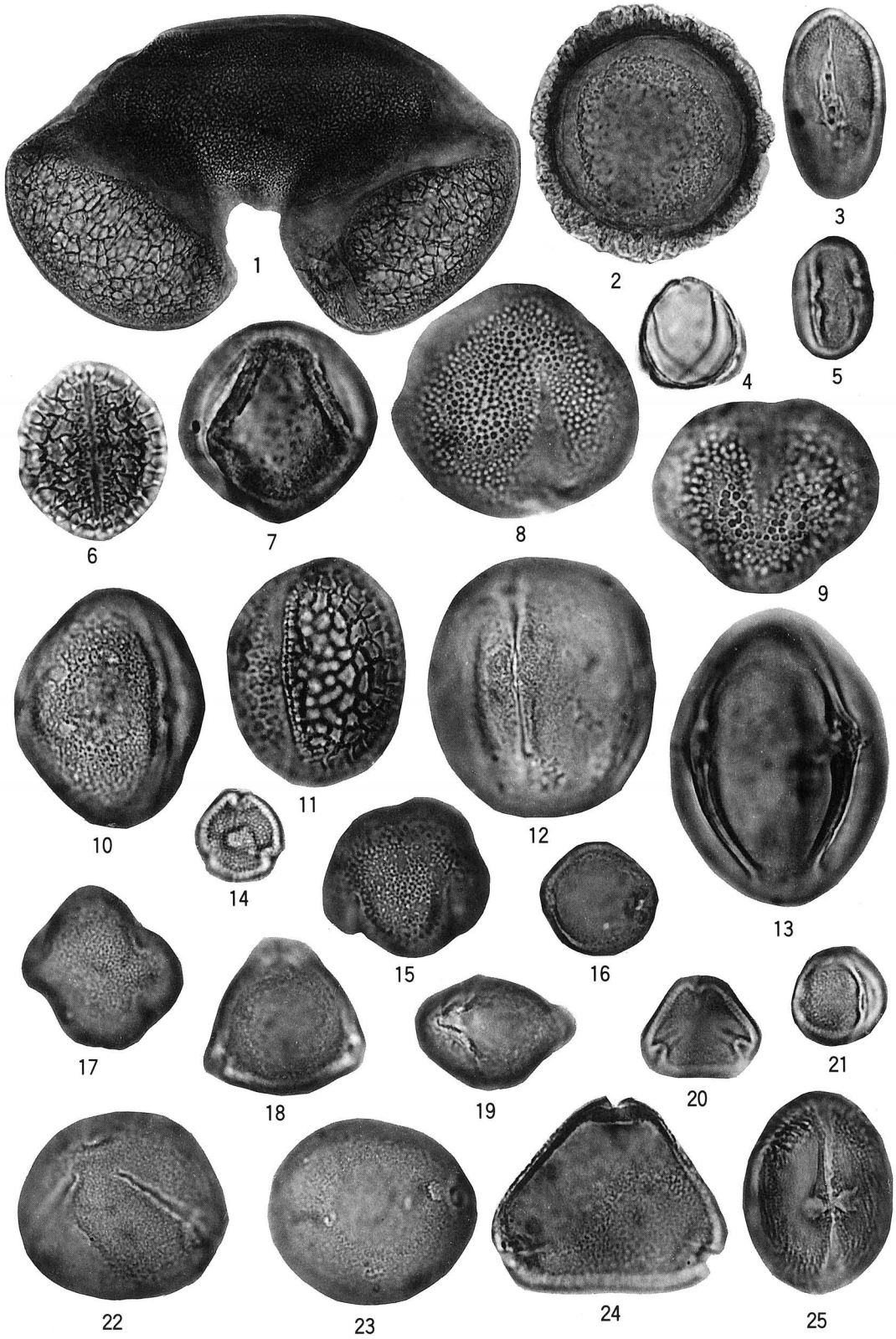
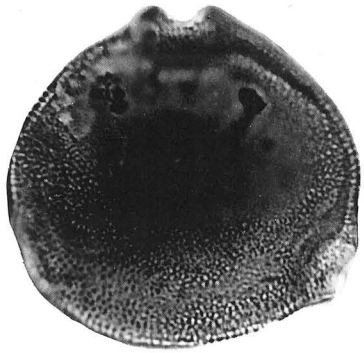

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25

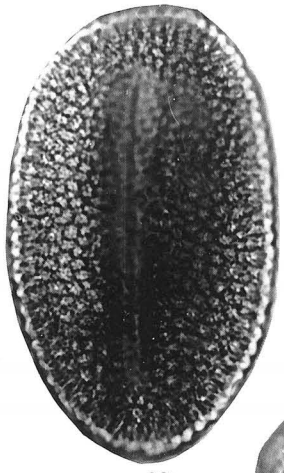
図173　大渕遺跡Ａ区出土花粉化石(2)

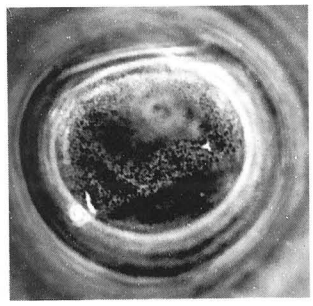
				試料番号
Fig.26	Nelumbo	ハス	×1000	21
Fig.27	Cucumis	マクワウリ	〃	5
Fig.28	Melothria	スズメウリ	〃	15
Fig.29	Fagopyrum	ソバ	〃	5
Fig.30	Oryza	イネ	〃	9
Fig.31	wild Gramineae	イネ科野生型	〃	6
Fig.32	Nymphoides	ガガブタ	〃	16
Fig.33	Ranunculus	キンポウゲ	〃	23
Fig.34	〃	〃	〃	24
Fig.35	Monochoria	コナギ	〃	4
Fig.36	Paederia	ヘクソカズラ	〃	17
Fig.37	Reynoutria	イタドリ	〃	16
Fig.38	Chrysanthemum	キク	〃	9
Fig.39	〃	〃	〃	9
Fig.40	Halolagis	アリノトウグサ	〃	4
Fig.41	Cuscuta	ネナシカズラ	〃	20
Fig.42	Chenopodium	アカザ	〃	5
Fig.43	Persicaria	サナエタデ	× 500	18

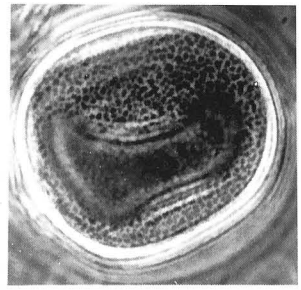
26

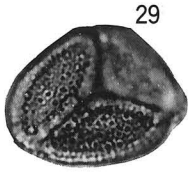

27

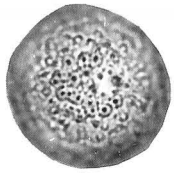
28


29

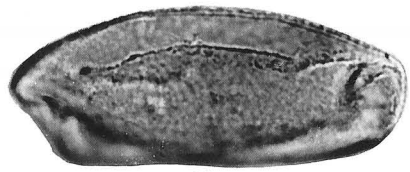

30

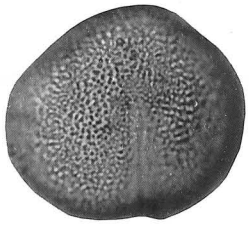

31

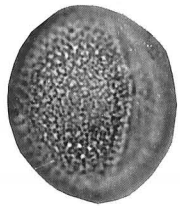

32

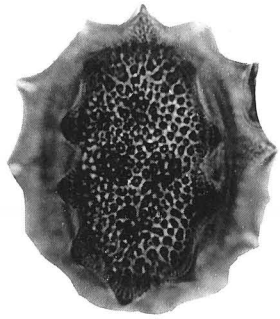

33

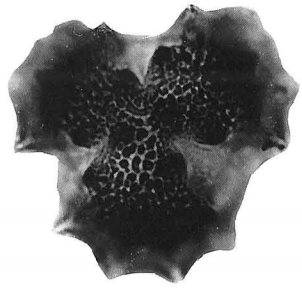
34

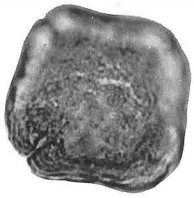

35

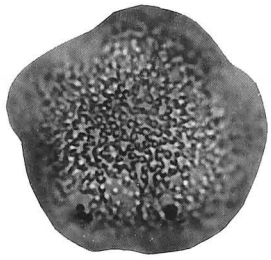

36

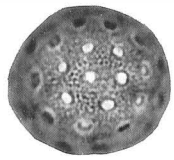

37


38


39


40


41


42

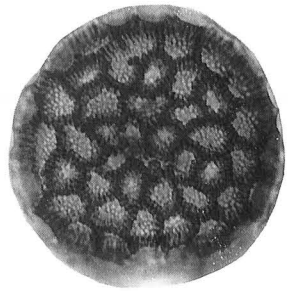
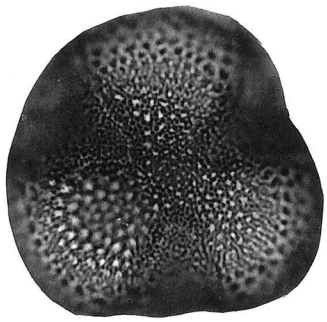
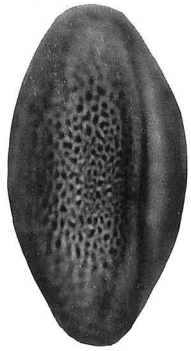

43

図174　大渕遺跡Ａ区出土花粉化石(3)

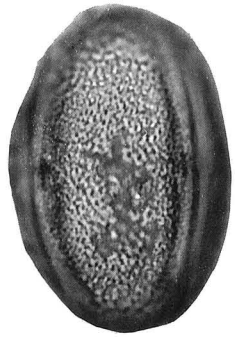
				試料番号
Fig.44	Caesalpinia	ジャケツイバラ	×1000	16
Fig.45	Parthenocissus	ツタ	〃	16
Fig.46	Ampelopsis	ノブドウ	〃	16
Fig.47	Actinostemma	ゴキヅル	〃	5
Fig.48	Anodendron	サカキカズラ	〃	16
Fig.49	Tracheospermum	テイカズラ	〃	19
Fig.50	Kadzura	サネカズラ	〃	16
Fig.51	Lonicera	スイカズラ	× 500	16
Fig.52	Pteris	イノモトソウ	×1000	16
Fig.53	Ceratopteris	ミズワラビ	〃	6
Fig.54	Cyclobalanopsis（pollinia）	カシ花粉塊	× 500	15
Fig.55	Sapindus（pollinia）	ムクロジ花粉塊	〃	15



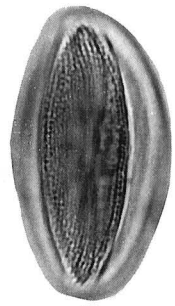
44



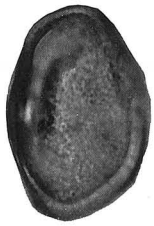
45



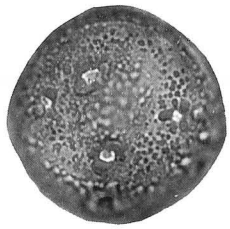
46



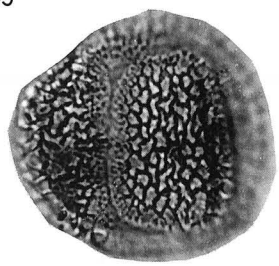
47



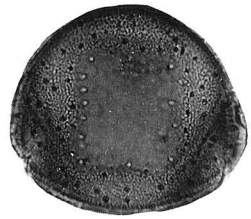
48



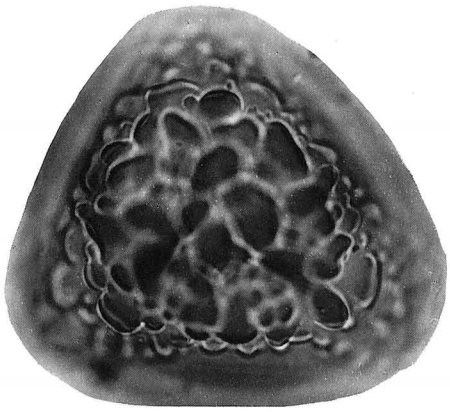
49



50

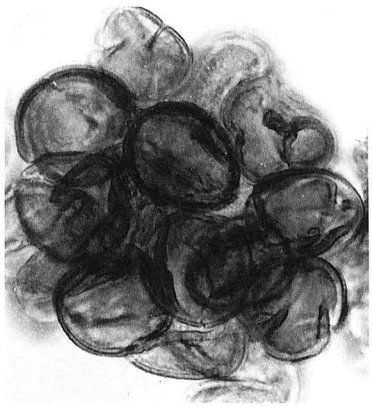


51

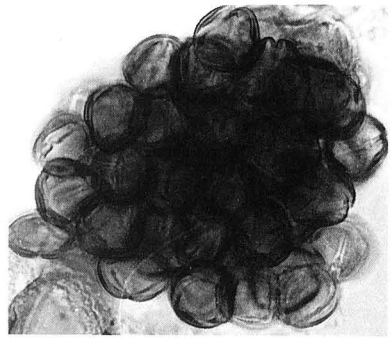


52

53



54



55

に明らかに対比でき、年代的に縄文後期の多雨期はＲⅢａの初期（約4000年前）に、他は中期（約3000年前）にあてはまる。また愛媛、高知両県境近くの中間帯に位置するカラ池湿原⑦では3350±120y.B.P.、高知市の水久保湿原⑧では3340±95y.B.P.前後の時期にツガの増加期がある。これらも縄文晩期、または後期の多雨期に相当する。また、このＲⅢａの初期は縄文海退期に対比されるから、第10層（試料番号25）に示された不安定な堆積環境は降雨量の増加に加えて海水面の低下にともなう侵蝕下刻のあらわれとも考えられよう。

また、最上部の第１、第２層は自然植生の全く破壊された状態を示しているからＲⅢｂ時代にあてはまる。

摘　要

大渕遺跡の古環境を復元するため、花粉分析学的調査をおこなった。その結果、

1．縄文後期（約4000年前）から縄文晩期前半（約3000年前）の間は、遺跡内には沼が形成されていた。

2．沼の周辺には、常緑カシ、シイなどの照葉樹林やエノキームクノキの夏緑林が繁茂し、トチノキも近くにみられた。

3．縄文晩期後半になると沼は浅くなり、森林は縮小して背後の丘陵地にまで後退し、代わって湿生、乾生の草地が拡大した。その頃から稲作が営まれ、続いてソバの畑作も行われるようになった。

4．気候的には全国的な冷涼多湿なＲⅢａ時代に対比され、縄文後期の多雨期と縄文晩期の多雨期が認められ、稲作は晩期の多雨期中に開始され、北九州地方と開始時期には大差はないと考えられた。

文　献

1．中村純（1977）「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学　10』 21～33

2．那須孝悌（1973）「滋賀里遺跡の花粉および植物遺体」『湖西線関係遺跡調査報告書』 237～240

3．中村純（1988）「イネの自然科学的調査法－花粉－」『弥生文化の研究　2』 123～131　雄山閣

4．中村純・畑中健一（1976）「板付遺跡の花粉分析学的研究」『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第35集 下巻』 29～51

5．中村純（1982）「菜畑遺跡の花粉分析」『唐津市文化財調査報告 第５集』 341～353

6．M.Tukada et al.（1986）「Oldest primitive agriculture and vegetational envioronments in Japan.」『Nature 322, 6080』 632～634

7．山中二男・山中三男（1977）「高知県カラ池湿原の植生および花粉分析的研究」『高知大学学術研究報告 26．自然科学３』 17～30

8．中村純（1980）「花粉分析による稲作史の研究」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究．総括報告書』 187～204

（2）大渕遺跡出土籾圧痕について

元 土佐高等学校　近藤 日出男

籾圧痕のある土器片を出土した地点は、丘陵と微高地の間に広がる海抜3.5mの低湿地で、近くに久万川が流れている所である。

当地には、既に南方1kmに縄文時代晩期後半の遺物・河川状遺構を検出した船ケ谷遺跡もある。

資料の採取地点は、別図A区（詳細は遺跡位置図にゆずる）で昭和62年8月21日より9月22日までに発掘されたものである。

第3層の古墳～中世包含層直下で黄色粘質土の安定層を確認したあと、地下50cmの5層で磨製石庖丁、刻目突帯文土器、7層から結歯式竪櫛2点があらわれ、下位の8層（地下80cm）で籾圧痕のある土器片数点があらわれた。なお、A区に隣接するB区の同時期の地層から、イネの茎葉片の一部もあらわれた。

調査結果

資料Aの土器片は、鉢底形の破片である。籾圧痕は土器底に対し、籾の背面が約60度の傾斜角度で押圧されならされたものである。圧痕口縁部には流砂泥が固着し、覆っているので口縁部の輪郭はやや不鮮明である。口縁部より少し入った内壁面には、炭化した籾物質の残留物が幅0.4～0.7mmの幅で固着し、残存している（図175の5）。内部奥には、同質炭化物が多数固着するが、この炭化物を埋めるかたちで0.5～0.6mm大の石英・長石、数個の灰長石が混ざり合ったかたちで埋没している。

資料Bの土器片は厚さ4mm、平皿に近い土器片の内側に籾の腹部が押圧されならされたあとの圧痕である。籾圧痕頭頂部に相当するところの側面に小孔が3つあり、1つは長芒のあとであり、他の2孔は毛茸とみられる。あきらかに長芒であることを示している（図176の2a）。内壁側の一部に、籾の穎皮の一部が炭化したとみられる黒色炭化物が粘土質の薄膜下に透けてみえる。

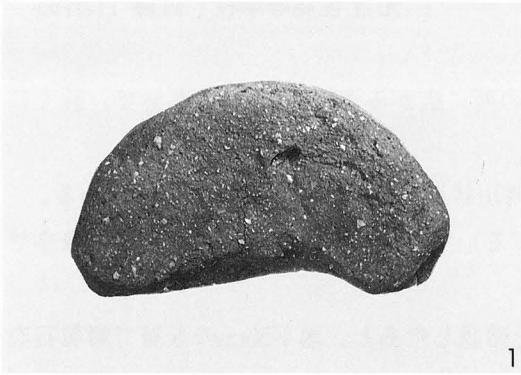
資料Cの土器片は1.0～0.5mm大の石英・長石・灰長石が底部の1/3を埋め、残り2/3は被われていない。底部の一部には植物質繊維状細片が少しからみついていた。

資料Dの土器片は厚さ5mm、丸鉢の表面側は黄褐色で、線紋があきらかに刻されている。内壁面は黒色である。圧痕の様子は、玄米粒が壁面に30度の傾斜角度で押圧されたまま焼成されたもので、焼成により米粒がはじけて四散したあとを示している。押圧痕の口縁部には炭化物は見あたらない。底側部深く米粒の背腹側線部の組織細胞が加熱により変質したまま固着している。固着物の形状が丸みをおびた五角形の形状であるので、明らかに澱粉複粒組織細胞の変質したものとみられる。モチ米の場合では、加熱により変質すると気泡状に変わるが、ウルチ米の場合では澱粉複粒組織細胞の五角形を比較的残すことがあるので、ウルチ米ではないかと思われる（図176の4b）。焼成温度が低かったため、このように小塊状物として残存したものである。各資料ともに焼成によるヒズミもあるので、生籾（米）時の粒形よりやや短縮しているとみられるが、参考のため粒形値を計測した（表）。

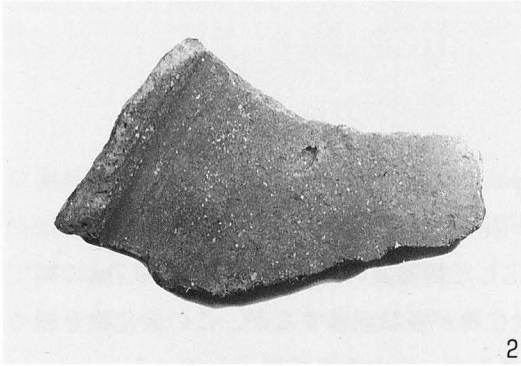
考　察

古代米の粒質を検討することは一般に困難である。ただし仏像胎内充填物として稲藁が用いられたのが人目に触れるとか、植物体が日干し煉瓦等の乾燥条件下で経過したものでは判明することが時に

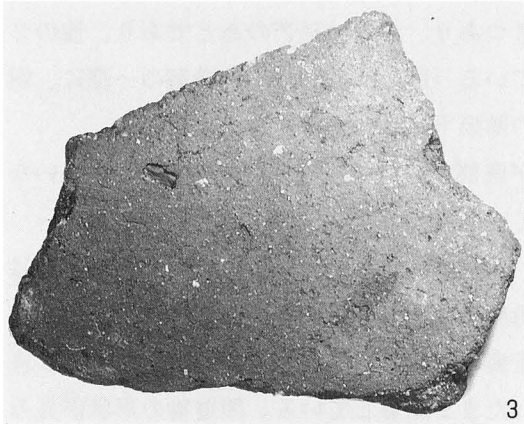
図175



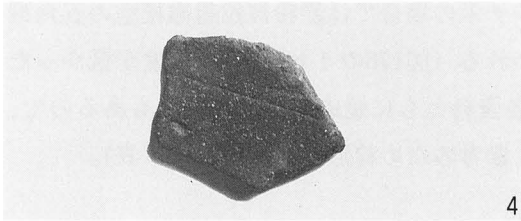
資料A



資料B

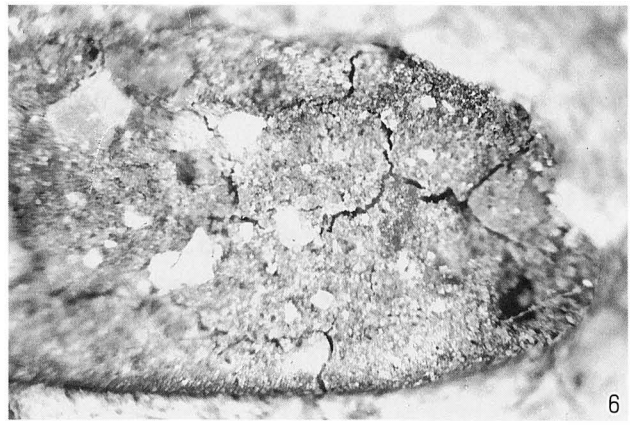


資料C

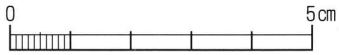


資料D

資料Aの口縁部。（単位１㎜，20×）



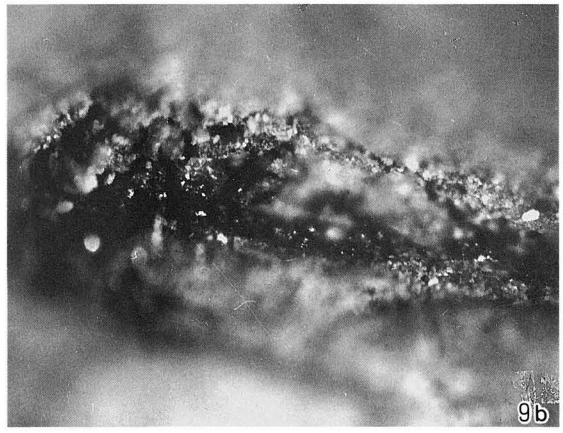
資料Bの押圧痕。



資料Ｃ．葉身と葉鞘の境目。(20×)

資料Ｄを30度傾斜せしめたもの。
左右を反対にして写す。(20×)

資料Ｄの押圧痕下方両端に五角形に近い炭化物残存す。
(20×)



9ａの炭化物の拡大。(20×)

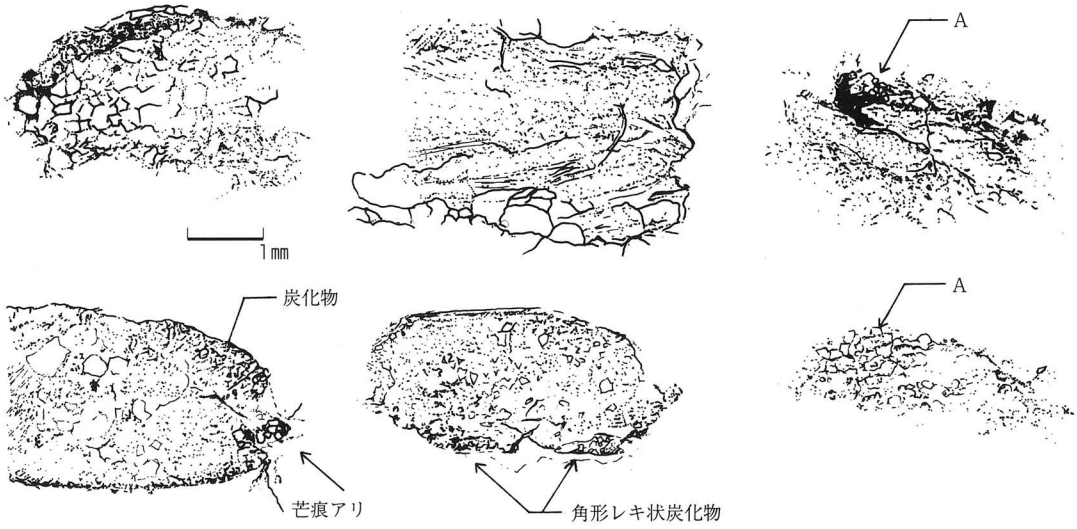


図176（A）

資料A．圧痕底部。(20×)　1a

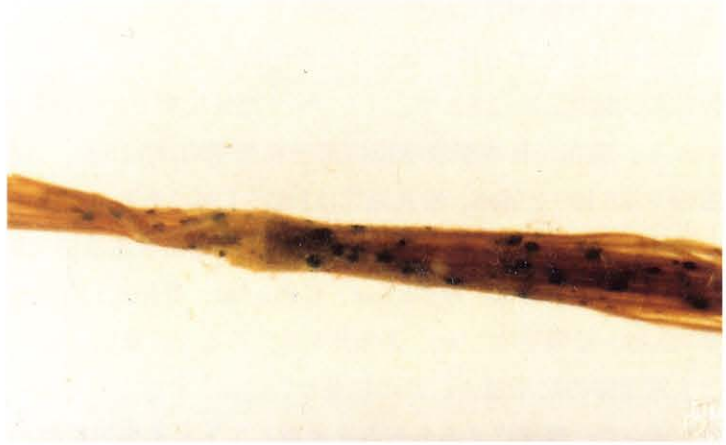
2a

資料B．右下方に芒痕が見出せる。(20×)

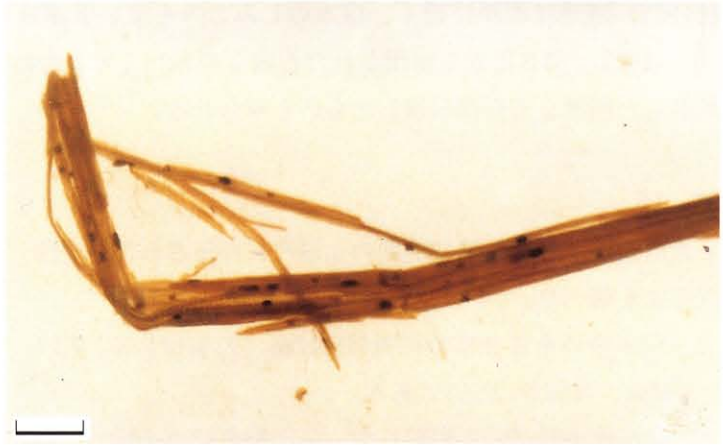
資料C．葉鞘と茎節圧痕。(20×)　3a

資料D．下方に炭化した組織がみられる。
(単位1㎜，20×)

図176（B）



5a



5b

B区より出土したイネ葉片
（全長54㎜，20×）

資　料	粒　長	粒　幅	粒　厚	粒長／粒幅	備　　考
A	5.42㎜	2.9㎜	－	1.86	A区8層・籾
B	5.42	2.5	－	2.17	A区8層・籾
C	－	－	－	－	A区9A層・イネ茎葉
D	3.54	1.85	－	1.91	A区5下層・米

資料D．土器片を30°傾斜させて圧痕側壁に残る炭化澱粉組織を見出したもの。（50×）

ある。焼成炭化された焼け籾の場合では、竪穴貯蔵穴、或いは貯蔵庫最下部の土面に接している個所の貯蔵籾等では酸素不足の蒸し焼き、焼成温度上昇不充分の時には、澱粉複粒組織細胞を残存することがある（近藤1977）。

粒形から区分する稲の類別は比較的容易であり、日本型短粒では粒長幅比2.1以下、ジャワ型中長粒は粒長幅比2.1～2.8まで、インデイカ型長粒米では粒長幅比2.8以上の区別がなされることがよく行われる。現在、日本型栽培稲の玄米粒長平均は5.15㎜、大多数のものは4.6～5.7㎜の範囲に納まり、粒幅では3.10～2.99㎜、粒長幅比は1.66～1.94である（永松・石川1967）。

縄文時代晩期遺跡の籾圧痕としては、唐津市宇木汲田遺跡のもので、粒長5.8㎜、幅3.3㎜、長幅比1.76、別の一例では、粒長6.8㎜、粒幅3.6㎜、長幅比1.89であり、福岡県板付遺跡の籾圧痕では、粒長平均5.93、粒幅平均3.4㎜、長幅比1.74である（佐藤1971）。

大渕遺跡の籾圧痕Ａ、Ｂの粒長は5.42㎜、粒幅2.9～2.5㎜である。玄米粒圧痕である資料Ｄでは粒長3.54㎜で、焼成によるちぢみを考慮しても日本型短粒の小型に属する。小粒であるのは、縄文時代晩期の気候は現在よりやや寒い時期で、亜高山帯針葉樹が下降しはじめ湿潤冷涼期になっていた（中村1967）現地は海岸に近く、塩水のしみこみやすい低湿地であり、塩分の侵入は稲の生育を妨げる（松木1973）。第５層から検出された石庖丁の存在を考え合わせると、明らかに稲の生育が不ぞろいで、成熟した稲穂をえらび収穫したものとみられる。

結　び

大渕遺跡から出た縄文晩期の土器片に押圧されていた籾（米）圧痕の粒形、及び米粒の炭化による残存物を調べた。

1．籾圧痕のある２粒の粒長は5.42㎜、粒幅は1.86と2.17、玄米とみられる１粒は粒長3.54㎜、粒幅1.85㎜、長幅比は1.91である。
2．籾圧痕の粒形から判断して、日本型短粒の小粒で、長芒種である。
3．籾（米）圧痕に米粒の構成組織が残存することは報告されていない。本遺跡ではその稀な例であろう。これは、土器焼成時の加熱温度がたまたま温度の低い250～300℃の、比較的低温で焼かれ、そのため土器も水もりしやすく、割れやすいものとなり、投棄されたものとみられる。

通常400℃以上になると、籾はすべて灰化して残ることはない。比較的低温で焼成されたため、籾（米）粒構成組織は変質し、炭化した。当然生籾時の澱粉複粒組織細胞の構成を知ることはできなかった。ただ、変質したものの、五角形の粒状物が圧痕周縁部に数多くみられたことから、モチではなくウルチ米であったとみられる。

文　献

1．近藤日出男（1977）「北部九州地区古代米の粒形・比重及内部構造について」『農業 No.1111』
2．近藤日出男（1977）「地域時代を異にした古代米の粒形と米質について」『農業 No.1112』
3．佐藤敏也（1971）『日本の古代米』
4．永松士己・石川文雄（1967）「本邦在来イネの玄米の形状と大きさの変異」『日作紀九支会報 No.29』
5．中村純（1967）『花粉分析』
6．松本豪（1973）「熊本県古閑原遺跡出土の植物炭化物」『考古学ジャーナル 82』

（3）プラント・オパール分析

古環境研究所

1）はじめに

当遺跡では、縄文時代晩期とされる遺物包含層から石庖丁が検出され、当時この周辺で稲作が行われていたのではないかと考えられていた。

この調査は、プラント・オパール分析を用いて稲作の可能性の検討を行ったものである。以下に、調査の結果を報告する。

2）試　料

昭和62年９月12日に現地調査を行った。サンプリング地点は、Ａ地点、Ｂ地点、およびＢ′地点（Ｂ地点の西約10m）の３地点である。

土層は１～８層に分層されていた。このうち、１層は現耕作土、２層は床土、３層は中世～古代とされる黄灰色粘質土、４層は暗緑灰色粘土、５層は縄文時代晩期とされる黒褐色粘質土、６層は暗茶褐色砂質土、７層は黄灰色シルト、８層は砂層である。５層からは縄文時代晩期の土器とともに石庖丁が検出され、水田跡の可能性が考えられていた。

試料は、土層壁面において各層ごとに５～10cm間隔で採取した。採取にあたっては、容量50ccの採土管およびポリ袋を用いた。

採取した試料数は計21試料であり、これらすべてについて分析を行った。

3）分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原・1976）」をもとに、次の手順で行った。

①試料土の絶乾（105℃・24時間）および仮比重測定

②試料土約１ｇを秤量し、ガラスビーズを添加（直径約40μm、約0.02ｇ）

※電子分析天秤により、１万分の１ｇの精度で秤量

③脱有機物処理（電気炉灰化法または過酸化水素法）

④超音波による分散（150ｗ・26ＫＨｚ・15分間）

⑤沈底法による微粒子（20μm以下）除去

⑥乾燥ののち封入剤（オイキット）中に分散し、プレパラート作成

⑦検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

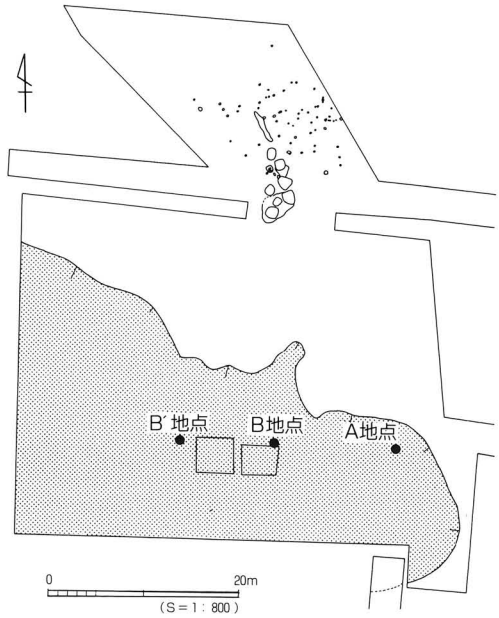


図177　試料採取地点図

試料１ｇ中のプラント・オパール個数（Sp）は、次式にしたがって求めた。

$Sp = \{(Gw \times a) / Sw\} \times (\beta / \alpha)$

ただし、Ｇｗは添加したガラスビーズの重量、ａはガラスビーズ１ｇ中の個数、Ｓｗは試料の絶乾重量、αとβは計数されたガラスビーズおよびプラント・オパールの個数を表している。

植物体生産量の推定値（Bw、単位：ｔ／10ａ・㎝）は次式にしたがって求めた。

$$Bw = Sp \times As \times K \times 10$$

ただし、Ａｓは試料の仮比重、Ｋは換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体各部乾重）を表している。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。機動細胞珪酸体１個あたりの地上部全重（単位：10^{-5}ｇ）は、それぞれ2.94、6.31、0.48である。また、イネの機動細胞珪酸体１個あたりの種実重は1.03である。

Ｂｗの値に層厚をかけて、その層で生産された植物体の総量（ｔ／10ａ）を求めた。

４）分析結果

調査の主目的が水田跡の調査であるため、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な５分類群について同定・定量を行い、分析結果の数値データを表に示した。また、表５に、各層の深度や層厚および仮比重の値などとともにイネの推定生産量を示した。

図178に、イネのプラント・オパールの出現状況を示した。また図179に、環境の指標となるおもな分類群（イネ、ヨシ属、タケ亜科）について、植物体生産量とその変遷を示した。

５）考　察

① 水田跡の可能性について

水田跡の確認や探査を行う場合、イネのプラント・オパールが試料１ｇあたりおよそ5,000個以上と多量に検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパールの密度のピークが認められれば、後代のものが上層から混入した危険性は考えにくくなり、その場で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、水田跡の可能性について検討を行った。

水田跡の可能性が考えられていた５層（縄文時代晩期の遺物包含層）では、すべての試料からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、Ａ地点では密度が5,000個／ｇと比較的高く、明らかなピークが認められた。また、Ｂ地点では、密度は2,400個／ｇとやや低いものの、明らかなピークが認められた。これらのことから、同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

５層より上層では、Ａ・Ｂ両地点とも１層（現耕作土）まで連続的にイネのプラント・オパールが検出された。このうち、１～２層は現在もしくは最近の水田耕作によるものと考えられる。３～４層では、密度が2,000個／ｇ前後と低い値であることから、これらの層で稲作が行われていた可能性は考えられるものの、他所からの混入の危険性なども否定できない。

５層より下層では、イネのプラント・オパールは検出されなかった。

② 稲籾の生産量の推定（表５参照）

５層で稲作が行われていたと仮定して、そこで生産された稲籾の総量（面積10ａあたり）を算出したところ、平均5.4ｔと推定された。当時の稲籾の年間収量を面積10ａあたり100kgと仮定すると、５層ではおよそ50年にわたって稲作が営まれていたものと推定される。

なお、これらの値は、収穫方法が穂刈りでおこなわれ、稲わらがすべて水田内に還元されたことを前提として求められている。ここで推定した稲籾の生産総量ならびに稲作期間は、あくまでも目安として考えられたい。

参考文献

杉山真二・藤原宏志（1986）「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－」『考古学と自然科学19』ｐ69～84

藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科栽培植物の珪酸体分析と定量分析法－」『考古学と自然科学９』ｐ15～29

藤原宏志（1979）「プラント・オパール分析法の基礎的研究（３）－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O.sativaL.）生産総量の推定－」『考古学と自然科学12』ｐ29～41

藤原宏志・杉山真二（1984）「プラント・オパール分析法の基礎的研究（５）－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学17』ｐ73～85

表４　試料１ｇあたりのプラント・オパール個数

Ａ地点

試料名	イネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
1	9,900	0	17,800	1,300	0
2	7,900	1,600	11,800	1,600	0
3－1	3,600	400	7,200	400	0
3－2	2,100	800	12,900	400	0
4	1,200	800	9,400	1,200	0
5－1	3,600	0	10,600	1,200	0
5－2	2,000	600	10,400	1,000	0
5－3	5,000	400	13,900	1,200	0
6	0	400	7,400	3,000	0
7	0	0	1,800	900	0

Ｂ地点

試料名	イネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
1－1	11,500	400	12,000	2,300	0
1－2	8,300	0	13,100	800	0
2	5,100	0	8,700	500	0
3－1	2,300	0	6,500	1,400	0
3－2	2,600	0	4,300	1,300	0
4－1	1,400	0	6,300	3,400	0
4－2	900	0	5,000	1,800	0
5－1	2,400	0	15,200	3,100	0
5－2	2,100	300	14,800	1,500	0
8	0	0	900	0	0

Ｂ′地点

試料名	イネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
5	4,100	900	22,200	2,300	0

表5　イネの生産量の推定

A地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	P.O.数 個/g	仮比重	P.O.数 個/cc	稲わら重 t/10a・cm	稲籾重 t/10a・cm	稲籾総量 t/10a
1	0	11	9,900	1.28	12,600	2.41	1.30	14.28
2	11	7	7,900	1.41	11,100	2.12	1.14	8.00
3−1	18	6	3,600	1.55	5,500	1.05	0.57	3.40
3−2	24	6	2,100	1.50	3,100	0.59	0.32	1.92
4	30	6	1,200	1.48	1,700	0.32	0.18	1.05
5−1	36	5	3,600	1.36	4,800	0.92	0.49	2.47
5−2	41	5	2,000	1.41	2,800	0.53	0.29	1.44
5−3	46	5	5,000	1.26	6,300	1.20	0.65	3.24
6	51	5	0	1.32	0	0.00	0.00	0.00
7	56	−	0	1.39	0	0.00	0.00	−

B地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	P.O.数 個/g	仮比重	P.O.数 個/cc	稲わら重 t/10a・cm	稲籾重 t/10a・cm	稲籾総量 t/10a
1−1	0	9	11,500	1.15	13.100	2,50	1.35	12.14
1−2	9	9	8,300	1.15	9.500	1,81	0.98	8.81
2	18	7	5,100	1.40	7,100	1,36	0.73	5.12
3−1	25	8	2,300	1.45	3,300	0.63	0.34	2.72
3−2	33	8	2,600	1.45	3,700	0.71	0.38	3.05
4−1	41	7	1,400	1.53	2,100	0.40	0.22	1.51
4−2	48	7	900	1.50	1,300	0.25	0.13	0.94
5−1	55	6	2,400	1.30	3,100	0.59	0.32	1.92
5−2	61	6	2,100	1.30	2,700	0.52	0.28	1.67
8	67	−	0	1.26	0	0.00	0.00	−

B′地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	P.O.数 個/g	仮比重	P.O.数 個/cc	稲わら重 t/10a・cm	稲籾重 t/10a・cm	稲籾総量 t/10a
5	60	10	4,100	1.30	5,300	1.01	0.55	5.46

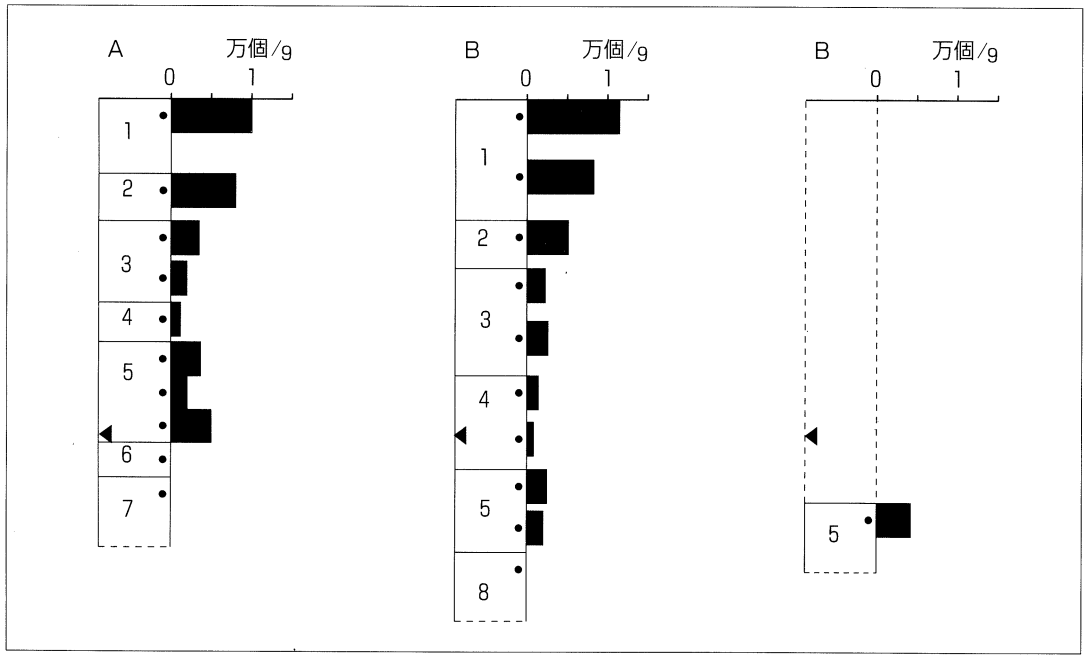
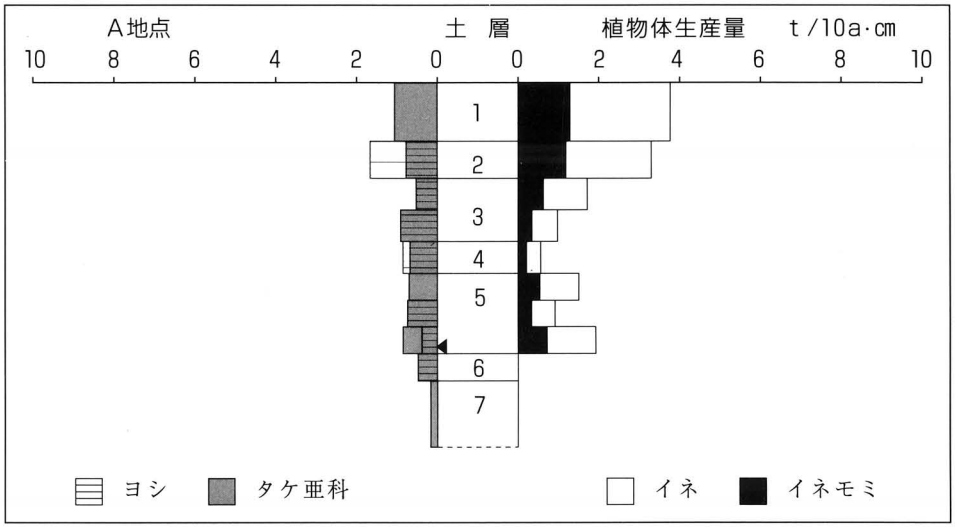
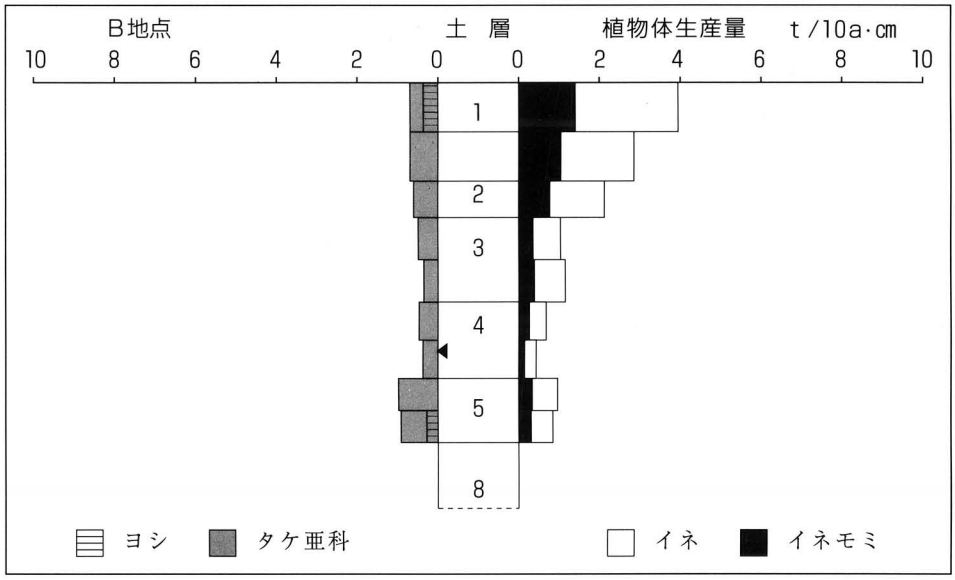


図178　イネのプラント・オパール密度

●印は試料を採取した箇所，◀印は50cmごとのスケール





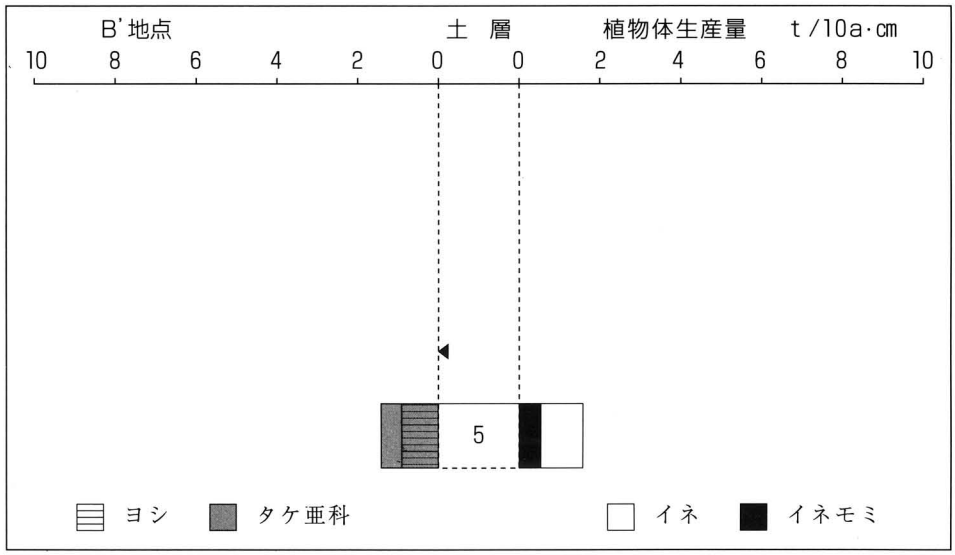


図179　おもな植物の推定生産量
◀印は50cmごとのスケール

（4）大渕遺跡出土遺物の赤色顔料と漆塗り竪櫛の塗装構造について

本田　光子　（別府大学）
岡田　文男　（京都造形芸術大学）
成瀬　正和　（宮内庁正倉院事務所）
志賀　智史　（別府大学文化財研究所）

愛媛県松山市大渕遺跡出土土器、石器に付着残存している赤色物の材質と付着状態を知るために顕微鏡による観察およびX線分析を行った。また、２点の漆塗り竪櫛について漆の塗装構造についても顕微鏡による調査をおこなったので併せて報告する。

出土遺物に赤色物が付着残存している場合、その赤色の由来として、第１は装飾を目的にした赤色塗彩、第２は赤色物の貯蔵容器、第３はいわゆる内面朱付着土器が考えられる。現在までの知見に寄れば、これらに用いられている赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第２鉄 Fe_2O_3 を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀 HgS を主成分とする朱の２種が用いられている。第１の装飾と、第２の貯蔵についてはベンガラと朱の両者が認められ、第３の場合は朱である。この他に古代の赤色顔料としては、四酸化三鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここではこれら三種類の赤色顔料を考えて調査をおこなった。なお、赤色塗彩遺物の塗装構造については、その制作された場所や時代・時期によりそれぞれ特徴を持つものもあり、薄片の顕微鏡観察が有効であるので、試料No18～37および漆塗り竪櫛についてはこれを行った。 試料の一覧と分析結果を表に示す。

（本田）

１．赤色塗彩土器と赤色物が付着する石器

顕微鏡観察

赤色顔料が比較的多量に付着している部分から小量を採取し、通常のプレパラートを作製するとともに、土器小片を採取しエポキシ樹脂に充填し最終的に薄片プレパラートも作製した。これらのプレパラートを反射光と透過光下で観察し、赤色顔料の種類や状態、塗装構造を調査した。

蛍光Ｘ線分析

No１～９までは、宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業㈱製 蛍光Ｘ線装置、堀場製作所㈱製（Ｘ線管球；クロム対陰極、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーションカウンター、条件：印加電圧-印加電流；40KV-20mA、ゴニオメーター走査範囲（２θ）；10～65°、走査速度；２θ ８°／分、記録紙速度；80㎜／分、フルスケール；2000cps、時定数；0.5秒－）、No18～41までは別府大学設置の堀場製作所㈱製の MESA-500（条件：15kV-440μＡ；50秒、50kV-20μＡ；50秒、大気）をそれぞれ用い測定をおこなった。赤色物が比較的残りの良い部分と赤色物がない部分から、なるべく平らな部分を選んで測定した。赤色の由来となる主成分元素としては、鉄あるいは、鉄と水銀が検出され、鉛は検出されなかった。他には珪素、アルミニウムなどが検出されたが、これらは土器や石器そのもののに由来するので、表中では省いた。

X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的としてNo１～９について実施したものである。宮内庁正倉院事務所設置の装置；理学電機㈱製 文化財測定用X線回折装置で、X線管；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、検出器；シンチレーションカウンター、印加電圧－電流；25KV－10mA、発散スリット；0.34°、受光スリット；0.34°、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；30～66° 走査速度；2θ 4°／分、記録紙速度；10㎜／分、フルスケール；400cps、時定数；２秒の条件で測定を行った。

観察結果

顕微鏡観察によりベンガラの特徴を認め、蛍光X線分析により鉄が検出され、水銀や鉛は検出されなかったものはベンガラ、顕微鏡観察により朱の特徴を認め、蛍光X線分析により水銀が検出され、鉛は検出されなかったものは朱と判断した。

赤色塗彩遺物

土器の外面に赤色塗彩の痕跡と思われる赤色物が付着しているが、その残存状態は、肉眼観察から顕著な塗膜があるもの（８，９，13，18）とないものとに大きく二つに分かれる。後者はさらに、A：赤色顔料が器表面に粉状に残るもの（７，25）と、B：器面と一体化し層状に残るもの（２～４、11，12、15～17、20～24、25～37）とに分かれる。

顕著な塗膜があるもののうちNo18については写真１，２に示したように、２～３回の朱漆の重ね塗りが観察される。

（A）については従来から赤色顔料を塗布するための固着剤（有機物）が劣化して赤色顔料（無機物）だけが残存したものと理解されている。今回、このタイプのNo25は朱だけが塗られているが、明瞭な層の痕跡を観察することができない。漆を使用していない可能性があるかもしれない(写真３)。

（B）はいわゆる「丹塗り」と呼ばれる装飾技法で、土器の焼成前に酸化鉄、含水酸化鉄を主成分にした顔料やスリップなどを塗り、焼成によって赤く発色させたものと観察される。土器胎土が黒色に焼成された状態で「丹塗り」が観察されるもの（20)、器表面の胎土が白色に焼成された状態で「丹塗り」が観察されるものに分かれる。後者には「丹塗り」下により緻密な層が認められるもの(23、24，31，34，35、37）とそうでないもの（21，22，25～30、32，33、36，38）が認められる。

赤色物が付着した石器

No38は敲石であり、端部に赤色を帯びた土が表面だけに微量付着しているが、これを赤色顔料の原料として捉えることは無理であろう。No39にはベンガラが付着しているが、これも表面だけに僅かに残っており、本来的にこの石器に伴う物とは考えがたい。No40、41は赤色顔料ではなく、後世の付着物かもしれない。(本田)

２．竪　櫛

２点の竪櫛は歯を結束し、その表面を漆で加飾したもので、試料は櫛の棟の部分だけが遺存したものである。

試料と調査方法

２点の竪櫛（356、357）について、棟の破片の端部から数ミリ角を採取し、それをさらに３分割し、それぞれをエポキシ樹脂に充填した。ついで、漆の塗装構造を観察するために塗膜の断面を研磨し、最終的に10数μmの薄片に仕上げ、反射光下と透過光下で塗装構造や混和材の種類を調査した。

観察結果

竪櫛（356）

塗装構造は下から塑形層（下地層含む）、透明漆層、赤漆層の順である。透明漆層と赤色漆層をあわせた厚さは約200μmである。反射光および透過光による各層の検鏡結果は 以下のとおりである。

反射光：塑形層は光を吸収して黒褐色に近い色を呈している。その上面に黄褐色で比較的均一な厚さからなる層、黒色で途切れがちな層、さらに均一な厚さの黄褐色層、さらにその上に黒色で薄い層の順に塗膜が観察される。最上面には赤色の漆層が１層観察される。透明漆層の厚さは全体で約160μm、赤色漆層の厚さは約40μmである。

透過光：塑形層の部分は黄褐色を呈しており、表面に近い部分ほど漆分が多い。層中に無色の鉱物が観察される。鉱物の大きさは60μm程度である。塑形層は２層からなるようで、下層には200μm近い大きさの鉱物粒子が認められるのにたいし、表面付近の粒子はそれよりもずいぶん小さい。塑形層の表面はあまり平滑でない。ついで、反射光で観察された２層の黄褐色層は不純物が混じり、透明度が低く、反射光で黒色に観察された漆層は透過光下で透明度が高い。

表面の赤色漆層は単層で、赤色顔料は10μm以下の朱の粒子が観察される。

竪櫛（357）

塗装構造は下から塑形層（下地層含む）、赤漆層の順である。各層の検鏡結果は以下のとおり。

反射光：塑形層は光を吸収して黒褐色に近い色を呈している。その上面に色の異なる赤色漆層が３層確認される。赤色漆層は下層がやや暗赤色であるのにたいし、中層、上層には顔料の粒子が目立つ。

透過光：塑形層部分は黄褐色を呈しており、層中に無色鉱物が観察される。表面に近い部分ほど褐色が濃い。無色鉱物の大きさは約100μm以下。塑形層の表面はあまり平滑で ない。ついで、反射光で観察された３層の赤色漆層があるが、そのうち、下から１層目にはパイプ状ベンガラがわずかに混じり、２層目、３層目には朱の粒子が認められる。朱の粒子の分布はやや疎らである。朱の粒子の長径は約15μm以下である。（岡田）

まとめ

大淵遺跡出土の赤色塗彩土器には、従来から「縄文」的漆工技法として理解されてきた「重ね塗り」の他に、多量の「丹塗り」が存在することがわかった。この「丹塗り」が黒色土器に施されたり、明るく焼き上げた土器に「丹塗り」ではなく「朱塗り」を施したりと、多様な展開をみせている。「丹塗り」もスリップ状の層の有無などでさらに細別される可能性もある。

竪櫛はベンガラと朱の両者を用いた「縄文」的な重ね塗りのものだが、No19の有機物塗彩層は朱の１回塗りである可能性が高い。該期の赤色塗彩遺物に認められる、赤色顔料とその塗彩技法は多様であり、今後の調査に期待される。

今回、土器の赤色顔料としては認められなかったパイプ状ベンガラの使用が竪櫛に認められており、該期の土器や漆器の製作（地）と赤色顔料の選択を考える上でも興味深い事例である。

調査の機会を戴きました松山市栗田茂敏氏と梅木謙一氏を初め関係者の方々に深謝いたします。

（本田）

大渕遺跡出土赤色塗彩遺物の調査資料一覧と分析結果

	出土地点	顕微鏡観察		蛍光X線分析		X線回析		赤彩技法（赤色顔料の種類）	器種・部位	報告書番号
		ベンガラ	朱	鉄	水銀	赤鉄鋼	辰砂			
1	N1E2 A区湿地5層	○	×	○	×	?	×		壺胴部	
2	N1E2 A区湿地5層	○	×	○	×	×	×	丹塗り（ベンガラ）	壺胴部	659
3	N1E2 A区湿地5層	○	×	○	×	×	×	丹塗り（ベンガラ）	壺胴部	663
4	S1E3 A区湿地5層	○	×	○	×	×	×	丹塗り（ベンガラ）	壺肩部	658
5	S1E3 A区湿地5層	×	×	○	?	×	×	朱漆？	壺頭部	
6	S1E4 A区湿地5層	×	×	○	×	×	×	汚れか	壺口頸部	655
7	N1E2 A区湿地5層	×	○	○	○	×	○	朱漆（朱）	浅鉢口縁部	650
8	N1E2 A区湿地5層	×	○	○	○	×	○	朱漆（朱）	浅鉢口縁部	646
9	N4E1 SX-1	×	○	○	○	×	○	朱漆（朱）	浅鉢口縁部	
10	S3E5 A区湿地5層	?	×					焼け	壺口頸部	653
11	N1E2 A区湿地5層	○	×					丹塗り（ベンガラ）	浅鉢口縁部	644
12	N1E2 A区湿地8層	○	×					丹塗り（ベンガラ）	浅鉢口縁部	293
13	S1W1 A区湿地9A層	?	?					朱漆（朱）	浅鉢口録部	202
14	N1E2 A区湿地5層	?	×					焼けの発色	壺底部	
15	T-11 A区湿地8層以下	○	×					丹塗り（ベンガラ）	浅鉢胴部？	
16	A区湿地	○	×					丹塗り（ベンガラ）		
17	A区湿地	○	×					丹塗り（ベンガラ）		
18	A区湿地	×	○	○	○			朱漆	浅鉢頸部	
19	A区湿地	×	○	○	○			朱（木製品？）		
20	A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）	浅鉢胴部？	
21	N1E1 A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）		
22	S1E4 A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）		
23	N1E1 A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）		
24	N1E2 A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）		
25	N2E1 A区湿地	×	○	○	○			朱塗り（朱）	浅鉢胴部	
26	N1E2 A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）	壺胴部	
27	S1E4 A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）	壺胴部	
28	S4E5 A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）	壺胴部	
29	A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）	壺胴部	
30	A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）	壺胴部	
31	A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）	壺胴部	
32	S1E4 A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）	壺胴部	
33	S1E4 A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）	壺胴部	
34	S1E4 A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）	壺胴部	
35	S1E4 A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）	壺胴部	
36	A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）	壺胴部	658？
37	A区湿地	○	×	○	×			丹塗り（ベンガラ）	壺胴部	663？
38	A区湿地	×	×	○	×			？		
39	A区湿地	○	×	○	×			ベンガラ	敲石	
40	A区湿地	×	×	○	×			？		
41	A区湿地	×	×	○	×			？		
42	A区湿地		○					漆・朱	竪櫛	356
43	A区湿地	○	○					漆・朱・ベンガラ	竪櫛	357

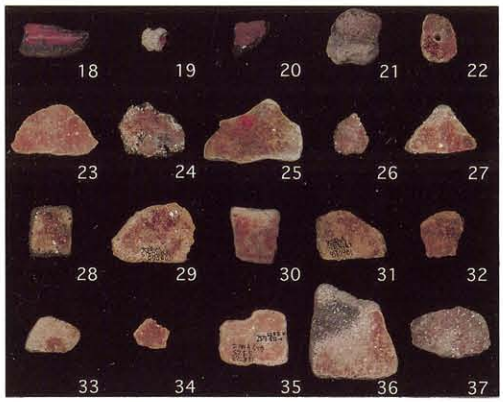


写真１　赤色塗彩土器外面（No.18～37）

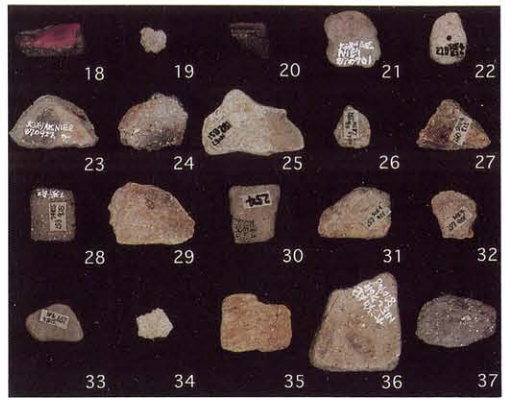


写真２　赤色塗彩土器内面（No.18～37）

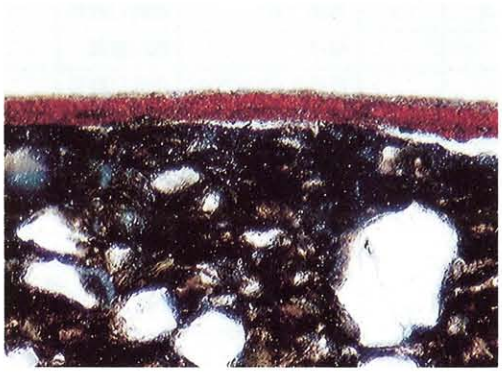


写真３　赤色塗彩土器　No.18

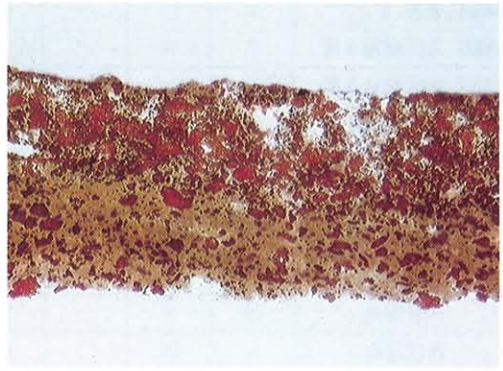


写真４　赤色塗彩土器　No.18

写真５　赤色塗彩土器　No.20

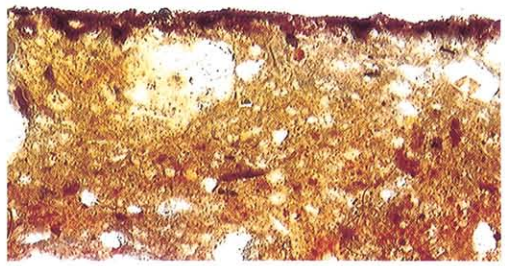


写真６　赤色塗彩土器　No.23

写真７　赤色塗彩土器　No.25

写真８　赤色塗彩土器　No.30

図180　赤色塗彩土器の塗装構造顕微鏡写真

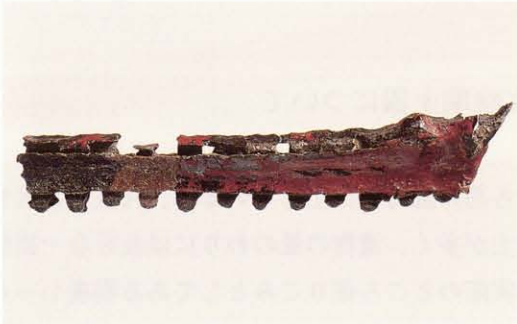


写真９　竪櫛（No.356）

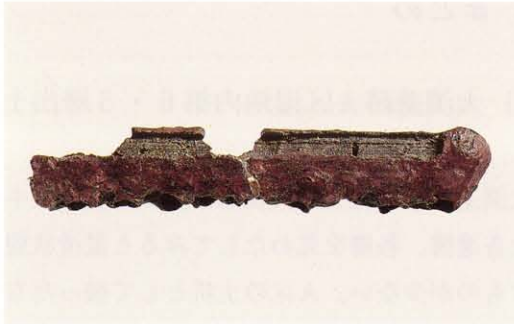


写真13　竪櫛（No.357）

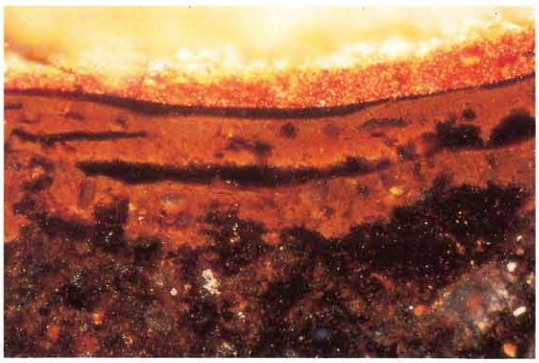


写真10　竪櫛（No.356）反射光×100

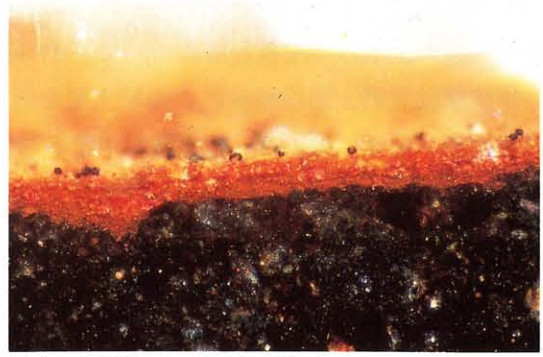


写真14　竪櫛（No.357）反射光×100

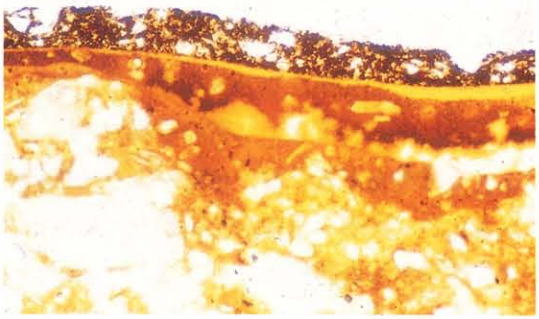


写真11　竪櫛（No.356）透過光×100

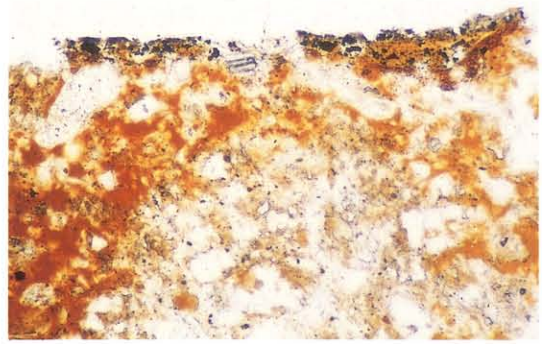


写真15　竪櫛（No.357）透過光×100

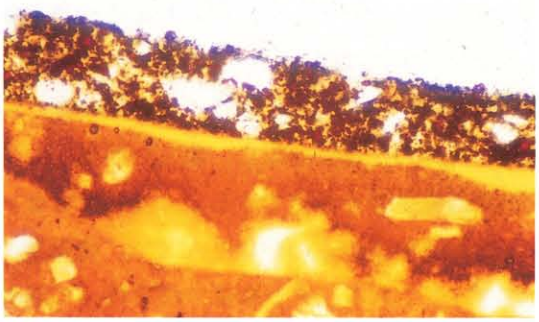


写真12　竪櫛（No.357）透過光×200

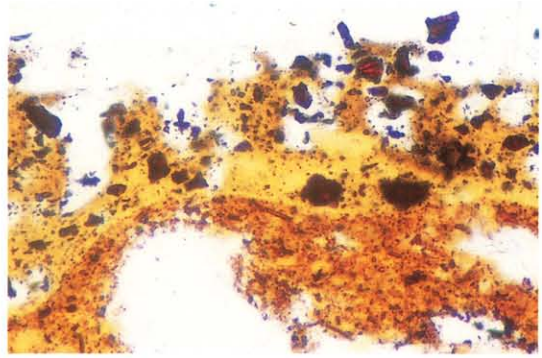


写真16　竪櫛（No.357）透過光×400

図181　漆塗り竪櫛の塗装構造顕微鏡写真

4．まとめ

（1）大渕遺跡A区湿地内第6・5層出土の縄文晩期土器について

大渕遺跡では縄文時代後期中葉から晩期後半までの各期の遺物を出土しているが、A区、B区を通じた各遺構、各層を見わたしてみると混淆状態での出土が多く、遺物の量のわりには良好な一括性を示すものが少ない。A区の土坑として扱ったものも、実際のところ掘りこみとしてある程度しっかりしたプラン、深さを備えるものはSK－1、あるいはSK－6とした2基の土坑のみであり、また、B区の土器溜まりとして扱ったSX－1の遺物も若干混ざっているようで、ここで問題にしようとしている突帯文期の土器について検討しようとすると資料的にはかなりの制約を受けざるを得ない。そこで、A区の湿地内の堆積各層について、その出土遺物をからめながら考えると、中粒砂層9層は下位の黒色腐蝕質粘土層堆積後、この粘土層を削り、とりこみながら堆積した層であると考えられる。この層の最下部9C層には、縄文後期中葉から末葉の遺物が含まれる。ちなみにこの腐蝕質粘土層のC^{14}年代は3160±85yB.Pという値が示されている①。基本的には腐蝕質粘土層には遺物は含まれないので、遺物は下層からとりこんだものではなく、砂層自身がいずれかから運んできたものということになる。9層もその上位9A層、さらに8・7層になると後期から突帯文まで含めた混淆状態が形成され、6・5層になって夾雑物の少ない、比較的短い時間幅の遺物が包含されている。つまり、9A層から6・5層の堆積までにはさほど時間を要さず、ただ堆積環境が順次安定した環境に変化していったことを示している。したがって、ここで扱うのはこの6・5層の比較的安定した堆積環境での遺物をメインとすることとする。層位の項でも述べたように、5層と6層の違いはその粒度の違いであって、暗褐色シルトの5層が下位に向かって漸移的に砂質を帯びてゆき、6層に至って砂であると認識できるといった違いであり、かなり分層の困難な層ではあるが、自然科学分析の項で詳述されるプラント・オパールの分析結果でも明らかなように、6・5層に含まれる量には明確な差があって、この分層の有意さを物語っている。しかしながら、このような層の見た目の違いを僅かな土層観察畦を頼りに、ある程度面として掘ったことに加えて湧水にも遮られ、両層の遺物がしっかりと層位どおりにとりあげられていない可能性は充分にあるが、ここでは恣意的な資料操作を行うことは避け、とりあえず現況で検討しておき、今後に資することとしたい。なお、ここで用いる分類名は次節で述べる船ケ谷遺跡出土遺物も含めた分類とする。

まず、器種構成について6層287点、5層1048点の遺物をカウントした。破片の大小や完形に近いものの別なく、個数を単純にカウントしてどの程度の精度のパーセンテージが得られるのかはなはだ不安ではあるが、どの器種についても壊れて破片になるまでの条件は同一という前提に立った上でのカウントである。6層では深鉢47.0％、浅鉢53.0％、壺は0％であり、5層では深鉢58.5％、浅鉢40.4％、壺が1.1％となり、傾向としては5・6層で深鉢、浅鉢の比率が逆転し、新しい器種として5層段階になって壺が加わることになるが、浅鉢の構成比率の減少分を補完できるような量ではない。

突帯文深鉢では緩く胴部が張って、口頸部が外反する所謂屈曲型のものがほとんどで、砲弾型のものは、図103に図示されたA区第5層の6点のほか5点計11点である。また胴部で稜を持って屈曲するものは同じく5層、図104の584と2条突帯の585の2点のみである。口縁部外面に突帯を持つ1条突帯のもの（C類）が6層では深鉢全体の75.6％、胴部にも突帯を伴う2条突帯のもの（E類）は

6・5層通じて1点しか確認できないが、胴部突帯をもつ破片を2条突帯と仮定してみても6層では135点中2点のみ、1.5%である。なお、口縁部突帯を持たないもの（A・B類）が22.9%ある。5層のC類は86.3%、胴部突帯を6層と同様2条突帯として扱ってE類が1.1%、A・B類深鉢が12.6%となり、深鉢では無突帯のものが減少し、1条突帯深鉢が増加している。1条突帯文深鉢C類はそのほとんどが口唇部、突帯に刻み目を持っており、6層では両部位ともに刻み目を持たないものは1点、また口唇部を刻み突帯を刻まないものが2点、逆に突帯を刻み口唇部を刻まないものが1点あるのみで、96.1%のものが両部位ともに刻まれている。5層では98.3%のものの両部位に刻みが施されている。

口端部の形状は平坦面を持つものが最も多く、6層で57.1%を占め、以下、丸みを持つもの26.0%、先尖りになるもの16.9%で、5層では順に40.7%、31.5%、27.8%となり、面を持つものが減少している。

突帯の位置を口唇部に近接するもの、口唇部から0.5～1cm下がったところにあるもの、それ以下の位置にあるものを順にカウントすると、6層では6.3%、81.2%、12.5%、5層では11.4%、82.7%、5.9%で、口唇部から離れた位置にあるものの比率が下がっている。

浅鉢のうち鍵形の口頸部を持つもの（E類）には外反する長めの頸部を持つ深鉢風のもの（E1類）とそうでないもの（E2類）とがあるが、口縁部の破片だけでは見分けがつかないものが多いので、これを一括して扱うと、6層ではこれが19.1%、胴部で屈曲して口頸部が外反しながら外に開くもの（B2類）が65.1%、逆「く」の字口縁（G類）には口縁部の長短等いくつかのバリエーションがあるが、これも一括して扱うと5.3%、椀・皿状のもの（H類）が10.5%である。なお、5層ではE類20.1%、B2類47.5%、G類27.9%、D類4.5%となり、E類の比率に変動はないが、G類が大幅に増加する。なお、B2類のなかには俯瞰形が隅丸方形を呈するものがあり、これらのうち一辺が20cm以下程度の小型方形浅鉢をF類として分離して扱うと、5層で17点4.0%という値になる。ちなみに6層では4点、2.6%である。

以上、大渕遺跡第6・5層の突帯文、およびこれに伴う土器についてその器種構成や、属性について大雑把にみてきたが、数字でみる限り傾向として第5層のほうが新しい様相を示していることがわかる。以下ではこれら大渕遺跡の突帯文期の遺物を他の遺跡との関係でみていくことにする。

（2）船ケ谷遺跡出土の縄文晩期土器（図182～192）

松山平野では、大渕遺跡の調査以降、いくつかの遺跡において晩期後半突帯文土器を出土する遺跡が調査され、その一部は既に報告、公表されている。ところで、大渕遺跡を含めたこれらの遺跡からの出土遺物を検討するうえで欠かせないのが、本調査地の南1kmに位置する船ケ谷遺跡出土の遺物群である。この遺跡は、愛媛県青果農業共同組合連合会松山工場の拡張工事に伴い、1975（昭和50）年に愛媛県教育委員会（以下、県教委）によって調査が行われ、1984（昭和59）年には「松山市・船ケ谷遺跡」として報告書の刊行もみている。しかしながら、調査によって出土した多量の遺物が必ずしもこの報告において網羅されているわけではなく、船ケ谷遺跡の実態については必ずしもよくわかっていないのが現状である[②]。そこで、今回県教委の全面的な協力を得て資料調査を実施することができたので、本書において特に土器について資料化しておきたい。ただし、調査では住居址や柱穴、河

川などの遺構等に伴う遺物が多くあるようであるが、図面資料の散逸等で細かいチェックをかけることはできなかった。したがって、船ケ谷遺跡で何がどのくらい出土しているのか程度の紹介にしかならないがご了解いただきたい。なお、紙数の制約上縮尺を1／6とせざるを得なかったこともあわせてお断りしておく。

大雑把にみると、深鉢には粗製で条痕や撫で、あるいは削りによる外面調整が施され、口唇部の刻みや口縁部内面の刺突以外は無文のもの（A類）がまずある。さらに頸部に沈線や刺突による施文を施され、口縁部突帯を持たないもの（B類）と口縁部外面に突帯を持つもの（C類）との大きくは3種があり、また、磨きなどを施された浅鉢風のもの（D類）、さらに後期の遺物が数点みられるという構成である。

A類はカウントされた晩期深鉢878点のうちの359点、40.9％、B類が456点、51.9％、C類が63点、7.2％という比率で、あきらかに大渕6・5層とは異なって、古いありかたを示している。そこで、これらの各類の土器を個別に検討して、大渕との違いをみてみることにする。

まず、A類のうちの1179～1181は、口唇部無文のもの（A1類）で、このようなものが51点、深鉢全体の5.8％存在している。このうち、外面調整に頸部まで条痕を残すものが（A1a類）8点、撫でや削りで仕上げるもの（A1b類）が43点ある。1182～1185は口縁部内面に刺突が施されるもの（A2類）で、55点、6.3％ある。外面調整の内訳は、条痕を多用するもの（A2a類）17点、38点が削りや撫でである（A2b類）。1186～1201は口唇部を刻まれるもの（A3類）、252点、28.7％である。これについても外面調整の内訳は、条痕（A3a類）21点、削り・撫で（A3b類）が231点である。大渕6・5層のうち特に6層にはA2・3類のうち、頸部に条痕調整を伴わないA2b類、A3b類が存在し、また5層にA1b類が1点だけ存在する。

B類には、胴部と頸部の境の刺突と口唇部の刻み目、もしくは口縁部内面刺突を組み合わせたもの（B1類／1202～1204）、これに縦方向に垂下する刺突が加わるもの（B2類／1205～1208、1212～1220）、さらにB2類に頸部沈線施文が加わったもの（B3類／1221・1222）、また頸部沈線施文と口唇部刻み目または口縁部内面刺突が組み合わされたもの（B4類／1237～1241）がある。この一群の胴部と頸部の境には刺突ではなく沈線が施されたり段が形成される場合がある。そして確定ではないが、1223～1225はB1類に頸部沈線施文が組み合わされている可能性がある（B5類）。これらのうち、胴部と頸部の境に刺突が確認できるもの、つまりB1・2・3・5類を合計した値であるが、この点数が162点、うち確実にB2類と認定できるもの22点、2.5％、B3類と確認できるものが3点である。また、頸部と胴部の境の刺突と頸部沈線の双方が確認できるものが18点、2.0％である。これらB類のうち大渕6・5層に存在するものはB1類と4もしくは5類で、B2・3類は存在しない。

C類にもいくつかバリエーションが存在する。まず、口唇部に接してぼってりとした突帯が貼り付けられ、ほとんど口端部の外面下方への肥厚帯のようになっているもので、突帯、口唇部ともに刻まれる（C1類／1259～1264）ものがある。突帯上の刻みは大きく1261では巻き貝殻頂を用いた刺突であったりする。また口唇部の刻みとはいうものの1259や1260では二枚貝の殻表の押し引きによる単位の大きな浅い圧痕である。1261では外方に傾いた面をなす口唇部の内端に小さなV字の刻みを加えている。1262や1263の突帯も口唇部に接して付けられており、厚みはないが幅広で、やはりボリュームがあり、刻みも大きい。大渕6・5層には存在しない深鉢である。こういった深鉢C1類のような特徴を持ったものには、例えば大渕遺跡A区SK－6出土の深鉢（図21／31）にみられるようなものの

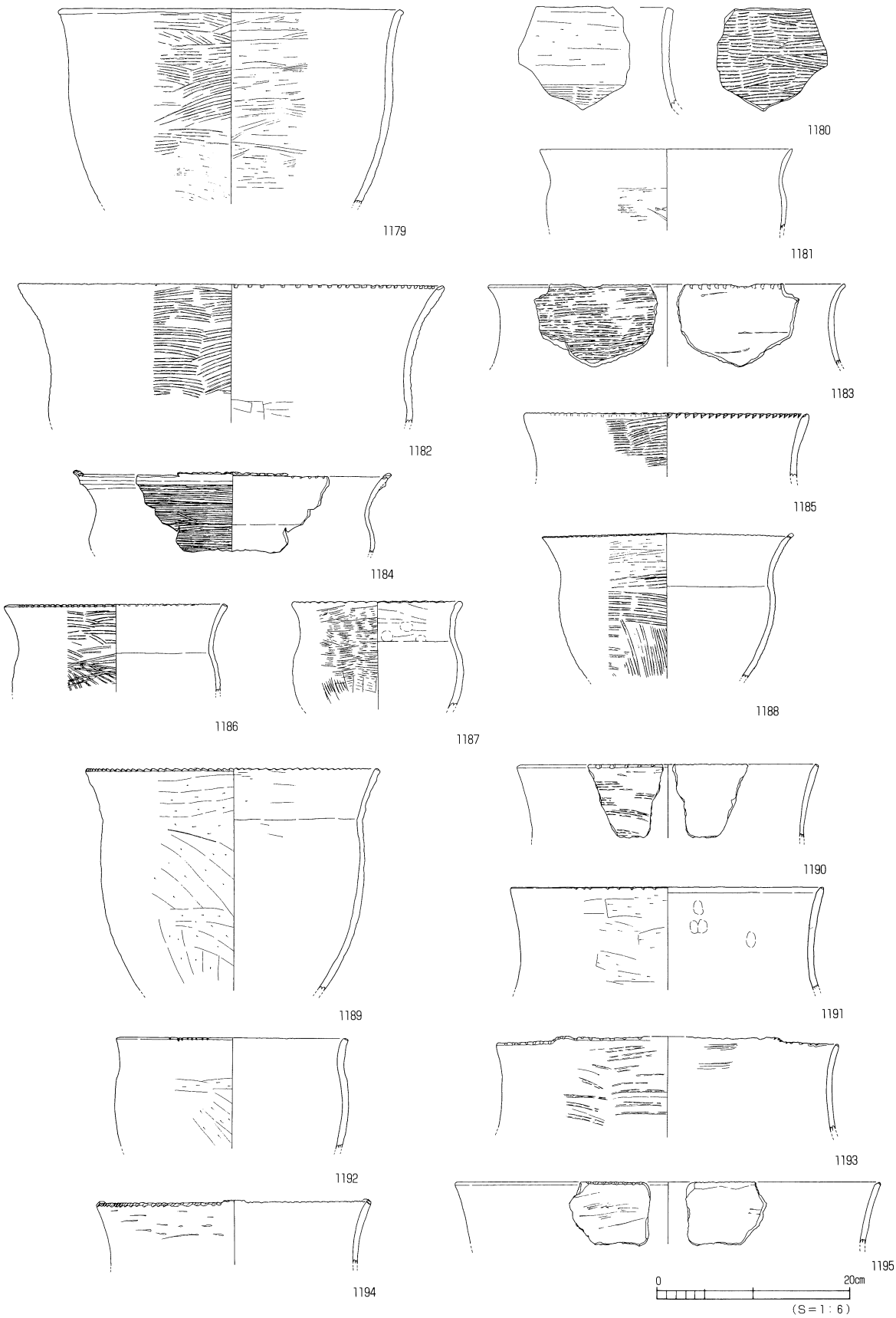


図182　船ケ谷遺跡出土遺物(1)

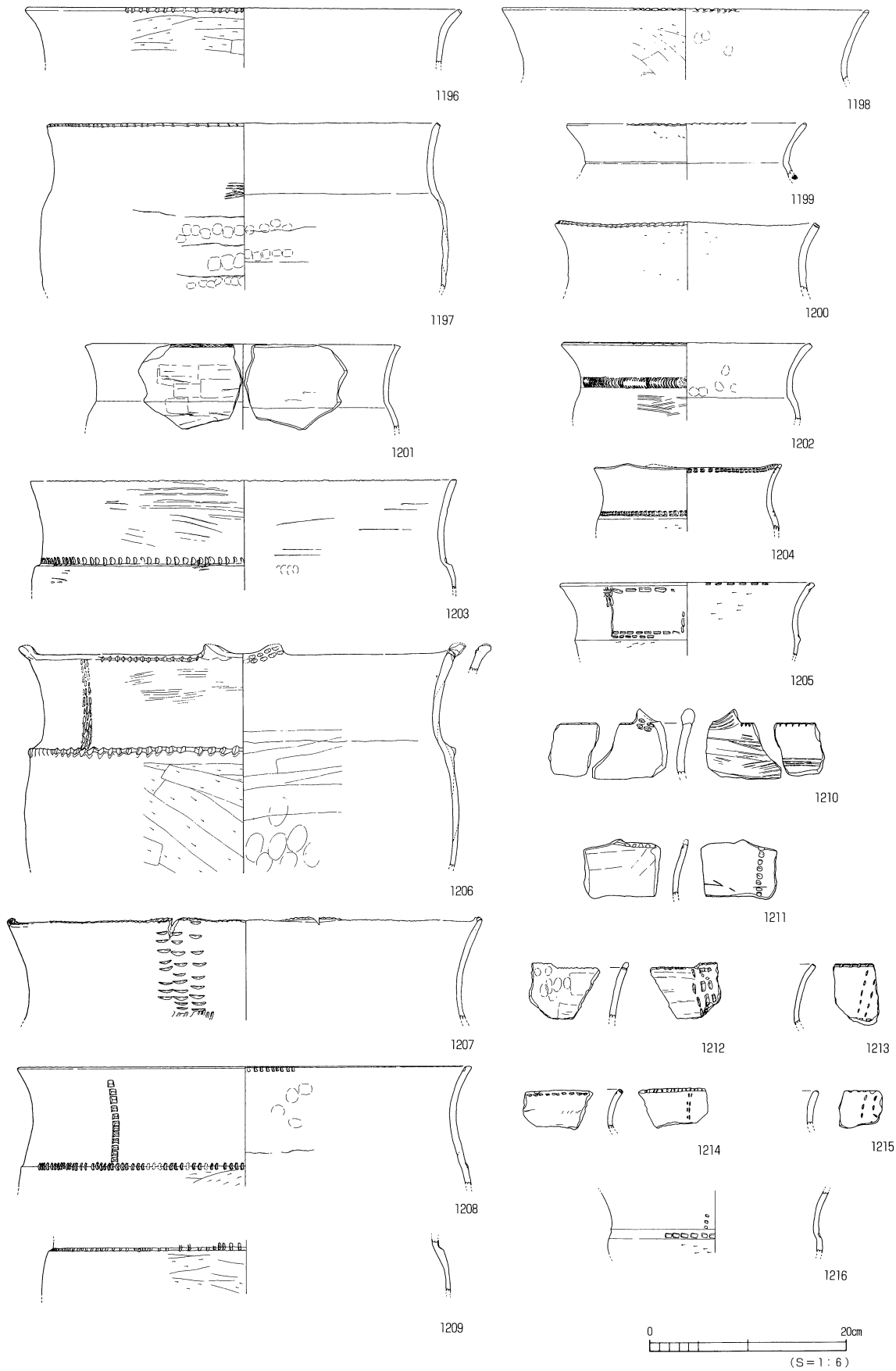


図183　船ケ谷遺跡出土遺物(2)

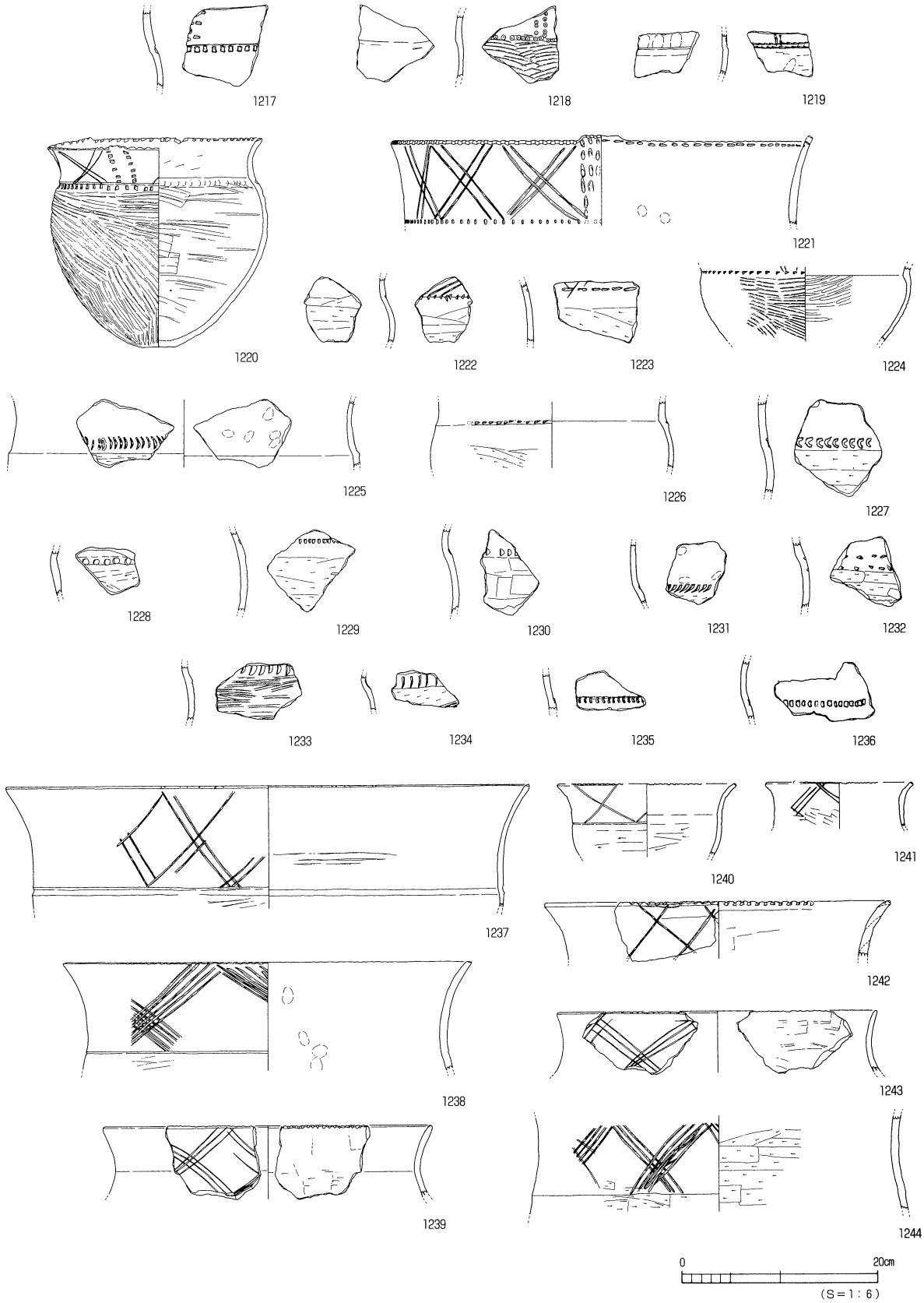


図184　船ケ谷遺跡出土遺物(3)

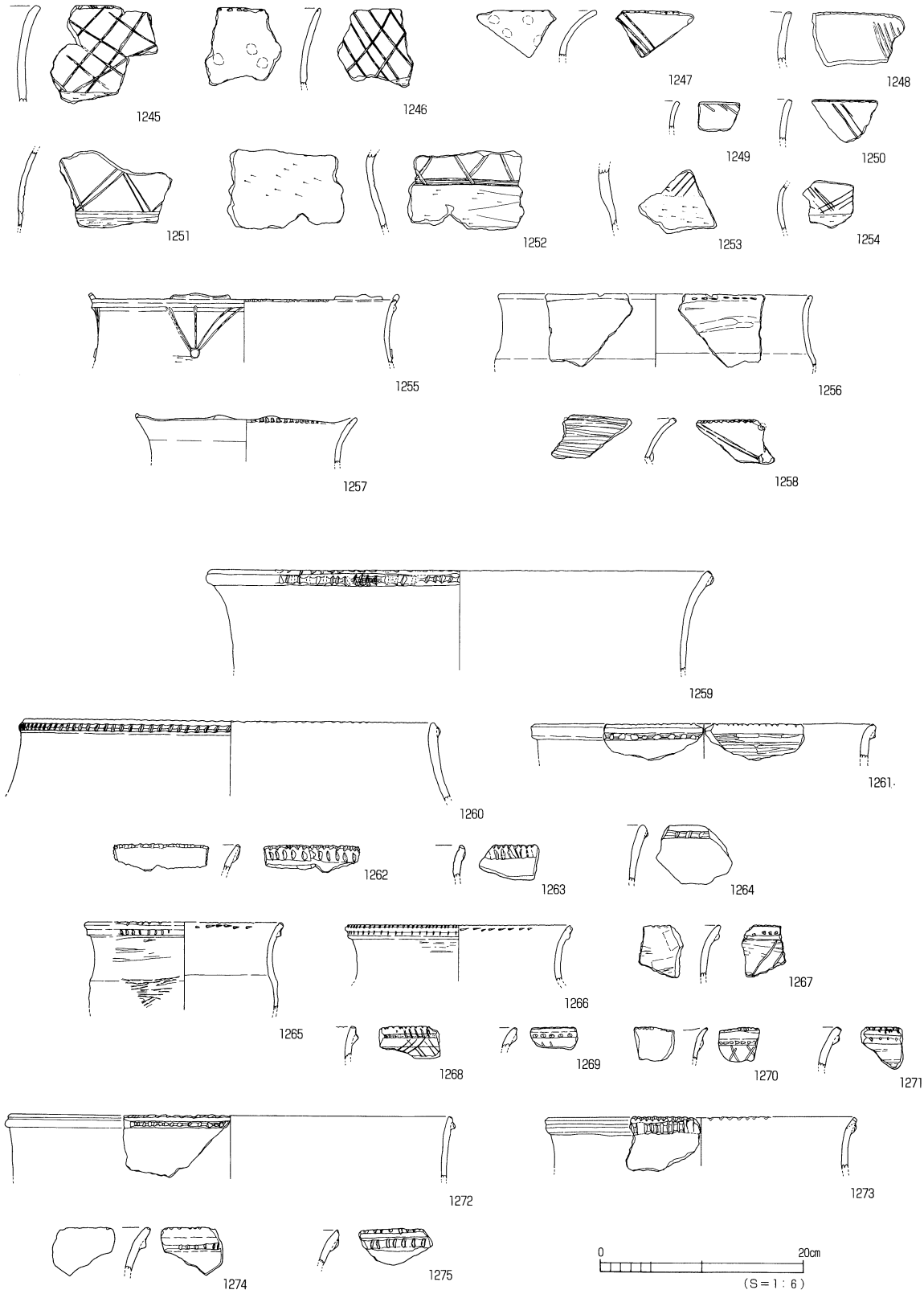


図185　船ケ谷遺跡出土遺物(4)

影響を考えておきたい。A区の遺構群のなかでは最も遺存のよい土坑ＳＫ－６から出土した31は、外下方に傾いた口端面の内外の角を刻むことに特徴がある。共伴する浅鉢も後述されるように古い特徴を持ったものである。大渕でのこのような例は９Ａ層でも一例確認することができる。Ｃ２類1265～1270は、断面三角形の突帯の頂部を刻まれるのではなく、三角形の上辺にあたる面に刺突が加えられるもので、このようなものが図示された６点存在する。1267・1268では口縁部内面刺突を伴う。また、破片１点しかないので分類はしないが1271は口唇部の刻みが口唇部平坦面の内外端に施されるもので、このような例およびＣ２類は大渕６・５層にはない。ちなみに大渕ではＢ区ＳＸ－１にそれぞれ１例ずつ例がある（図148／976・986）。このような、大渕からみれば異形ともいえる突帯文深鉢が30点、深鉢全体の3.4％、突帯文深鉢の47.6％ある。Ｃ３類1272～1280はしっかりとした口唇部平坦面を持っていたり、突帯の位置が口唇部から大きく離れた位置にあってみたり、突帯にボリュームがあったり、刻みが大きなものなどで、大渕６・５層にはあっても僅かなもので、大渕に存在しても全く違和感のないものはＣ４類とする1281～1284程度である。このＣ３・４類が28点、深鉢全体の3.2％、突帯文深鉢の44.4％を占めている。なお、突帯や口唇部を刻まないものも５点存在している。

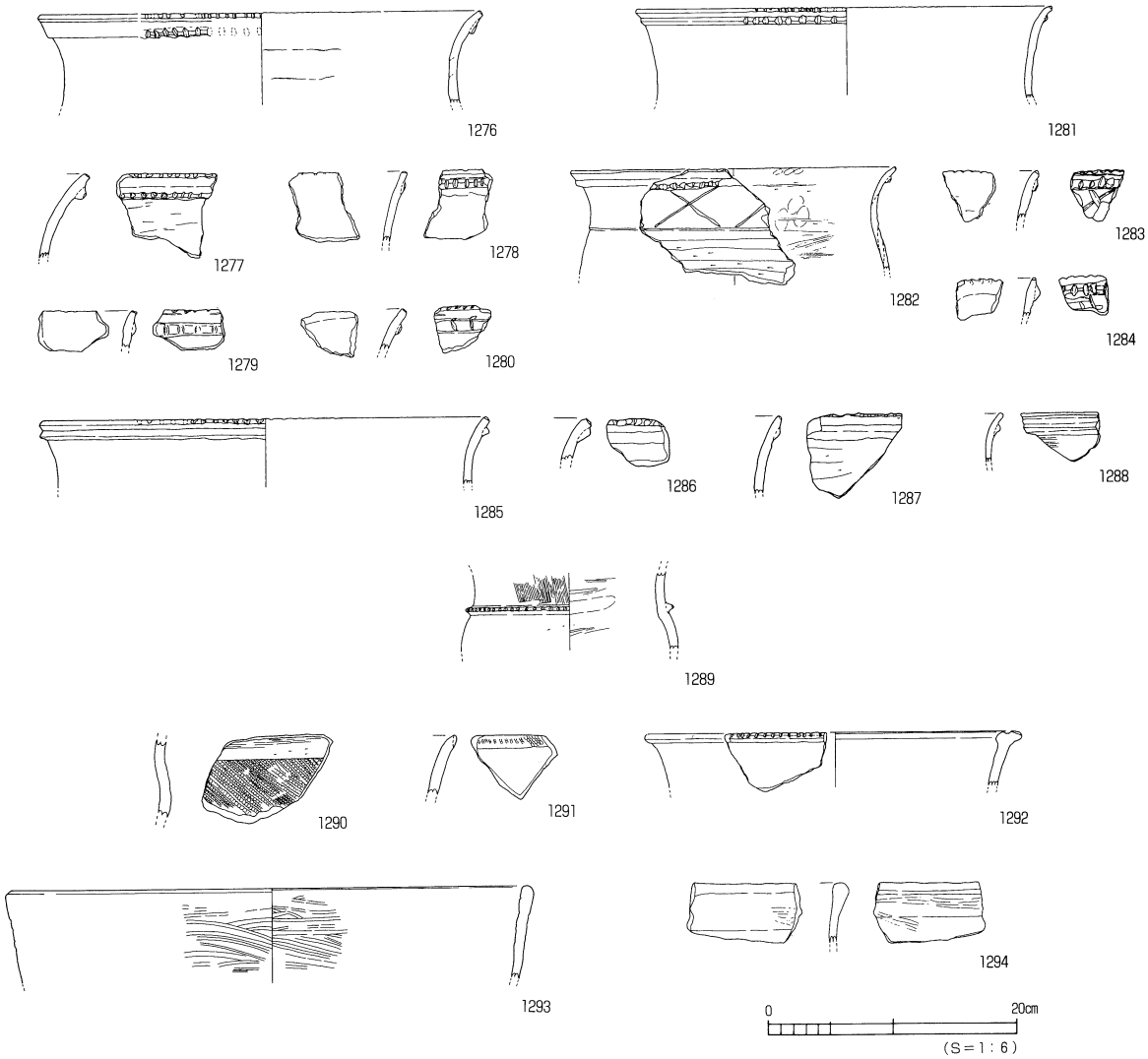


図186　船ケ谷遺跡出土遺物(5)

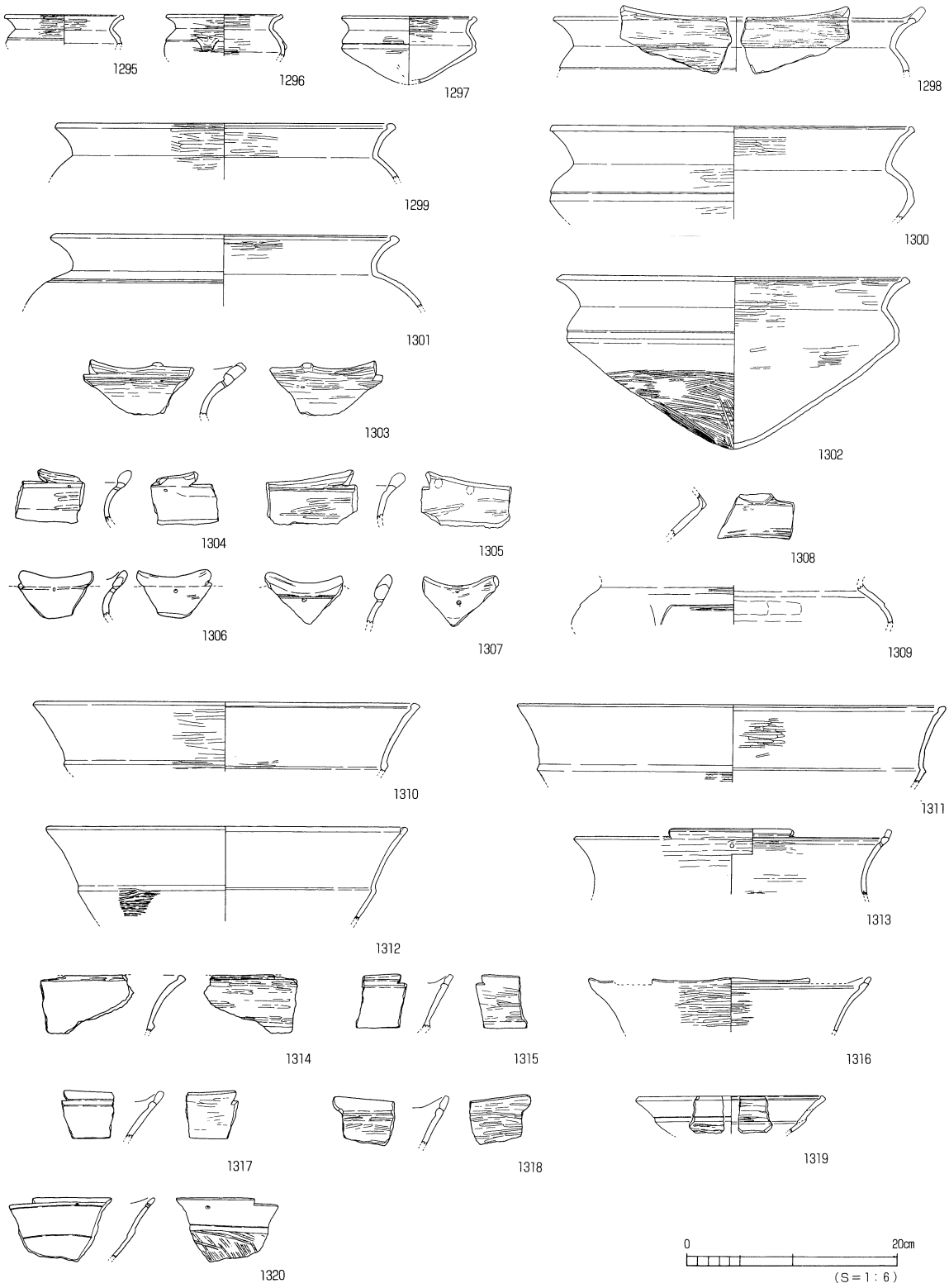


図187　船ケ谷遺跡出土遺物(6)

1255～1258はＤ類としている浅鉢風に調整されているもので、1255や1258では頸部と胴部の境に円形浮文が貼られ、この部分で収束する沈線施文が頸部に施されている。このようなものは大渕６・５層には存在しないが、1256のように磨かれて口縁部内面施文を施されるものが６層に存在する。

1289は外面の調整に刷毛目が用いられており、弥生土器と考えられるもの、1290～1294は後期の深鉢である。

浅鉢には多彩な器型があるので、主だったものだけを分類しておきたい。まず外開きの口縁端部の内面に粘土帯を貼り付けて玉縁状に肥厚させるという特徴を持つものがあり、器型的には数種のバリエーションがある。Ａ類1295～1309は、玉縁状の口唇部を持ち、比較的短い口頸部が強く外反して外上方に広がるもので、胴部が強く張り、この胴張り部やその上位に段が巡るものである。この段の部分に逆台形状の粘土板を貼り付けられることがある。底部は尖り気味の丸底で、外面底部から胴張り部のやや下位までは二枚貝条痕をそのまま残し、以上の部位および内面を磨いている。口縁部には鰭状あるいはリボン状の突起が伴うことがある。Ｂ類1310～1320は、胴部と頸部の境で稜を持って屈曲し、直線的あるいは緩やかに外反しながら外開きになる比較的長めの口頸部を持つもので、鰭状の突起を付されることがあるもの、口端部の肥厚が小さくなる1320のようなものも存在する。このＢ類には、近似した器型で口唇部の肥厚がなく、しばしば口端面を刻まれるものがあり（1321～1326）、したがってこれをＢ２類とし、前者をＢ１類としておく。Ｂ１類と同様の口頸部を持つが、胴部が稜を持って屈曲せず内湾するもの、1327～1333をＣ１類とする。このＣ１類にも口唇部の肥厚の度合いが小さく1332のようなものがある。この器型にも1340のように口唇部の肥厚がないものがあり、Ｂ類同様、これをＣ２類としておく。さらに同様の口縁部で底部から口縁部まで単純に直線的に広がる深皿状のものがあり、これをＤ類とする。内面と外面口縁部のやや下位までを磨かれ、この部分あたりでわずかに外反する。外面の以下の部分は二枚貝条痕である。ちなみに、この器型のものにも口唇部の肥厚を持たないものがあり、前者をＤ１類、後者をＤ２類としておく。

所謂、鍵形口縁を持つものをＥ類とし、このうち、外反する長めの頸部を持ち胴部が張るもの、1346～1358をＥ１類、深皿状の器型のもの、1359～1372をＥ２類とする。1402～1404は小型の方形浅鉢で、これをＦ類、船ケ谷では逆「く」の字といわれる器型の典型的な浅鉢は存在しないが、1409や1410のようなものがあるので、このようなものを含めて逆「く」の字口縁を持つ浅鉢をＧ類とし、椀、皿状のものをＨ類としておく。また、1392～1401のように口縁部内面に２条の凹線が巡るものがあり、1398～1401のように凹線間の凸部が細くなってしまうものもあり、一応Ｉ類としておくが場合によっては、Ａ～Ｄ類の口縁部の突起部分の破片がこれに混ざると見分けがつかないことがある。なお、Ｆ類の1402・1403の口縁部もこの形態をなしている。

さて、浅鉢でカウントされたものは、総数792点である。このうち、口唇部を玉縁状に肥厚させるものの総数は294点、37.1％、つまり器型の特定はできないがＡ、Ｂ１、Ｃ１類に属するものの総数である。Ｄ１類は口縁部に近い部位以下に二枚貝条痕が施されるので、これらとは別にある程度特定することができる。この294点のうちＡ類と特定できるもの20点、Ｂ１類18点、Ｃ1類22点である。Ｄ１類と確認できたものは117点であった。この種の口縁部を持つ浅鉢は、大渕では６層、５層にそれぞれ１点ずつ例があるが、基本的には存在しないといってよい。ちなみにこの種の浅鉢がある程度良好なかたちで確認できるのはＢ区ＳＸ－１である。Ｂ類のうち口唇部内面肥厚がないもの、Ｂ２類は６点、0.8％、大渕の特に第６層で普遍的にみられる浅鉢のひとつであり、船ケ谷にはないが、Ｃ２類

も６・５層にある程度存在している。Ｄ２類は船ケ谷では僅かに２点、大渕でもさほど数は多くないが６・５層で数点確認することができる。

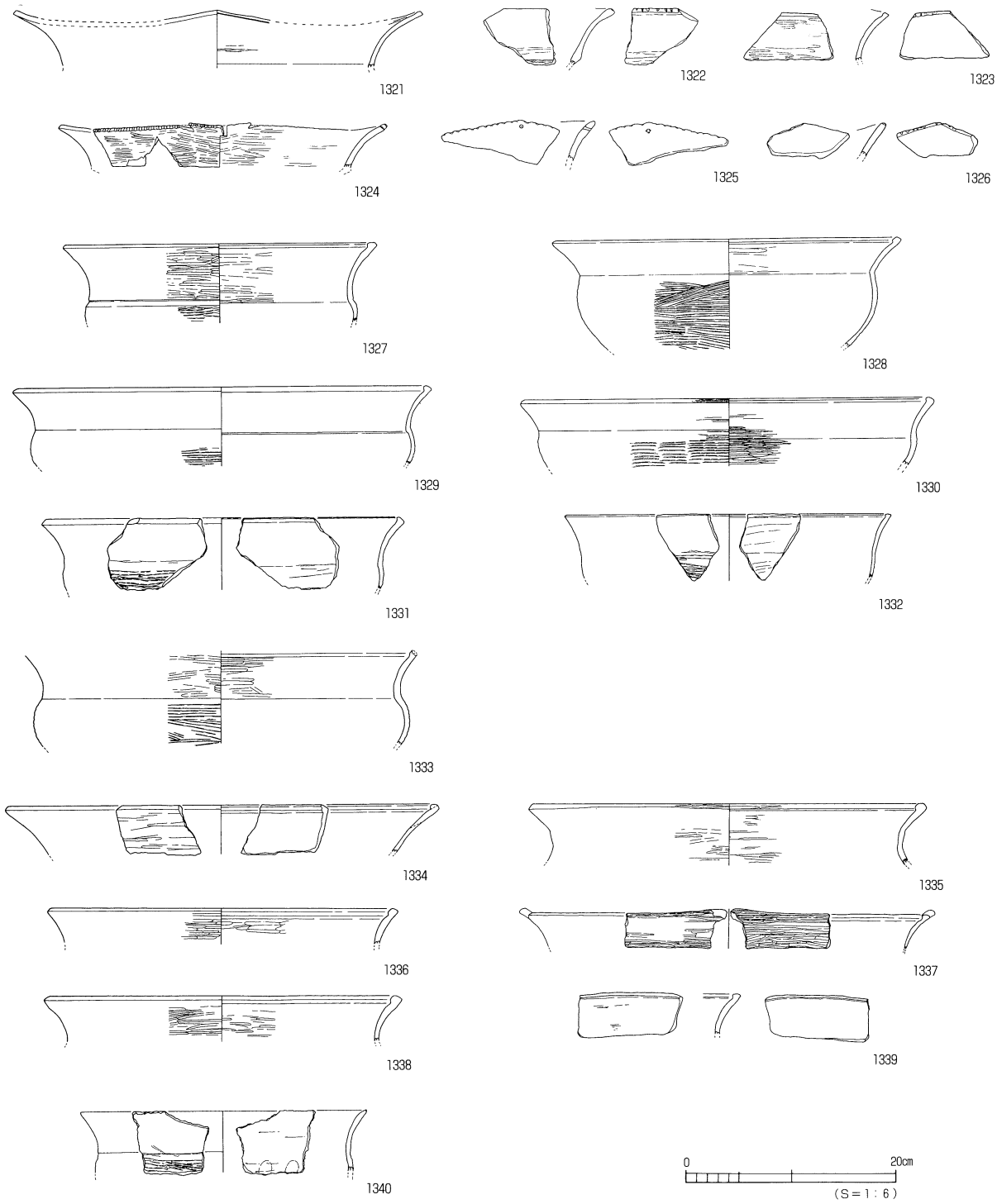


図188　船ケ谷遺跡出土遺物(7)

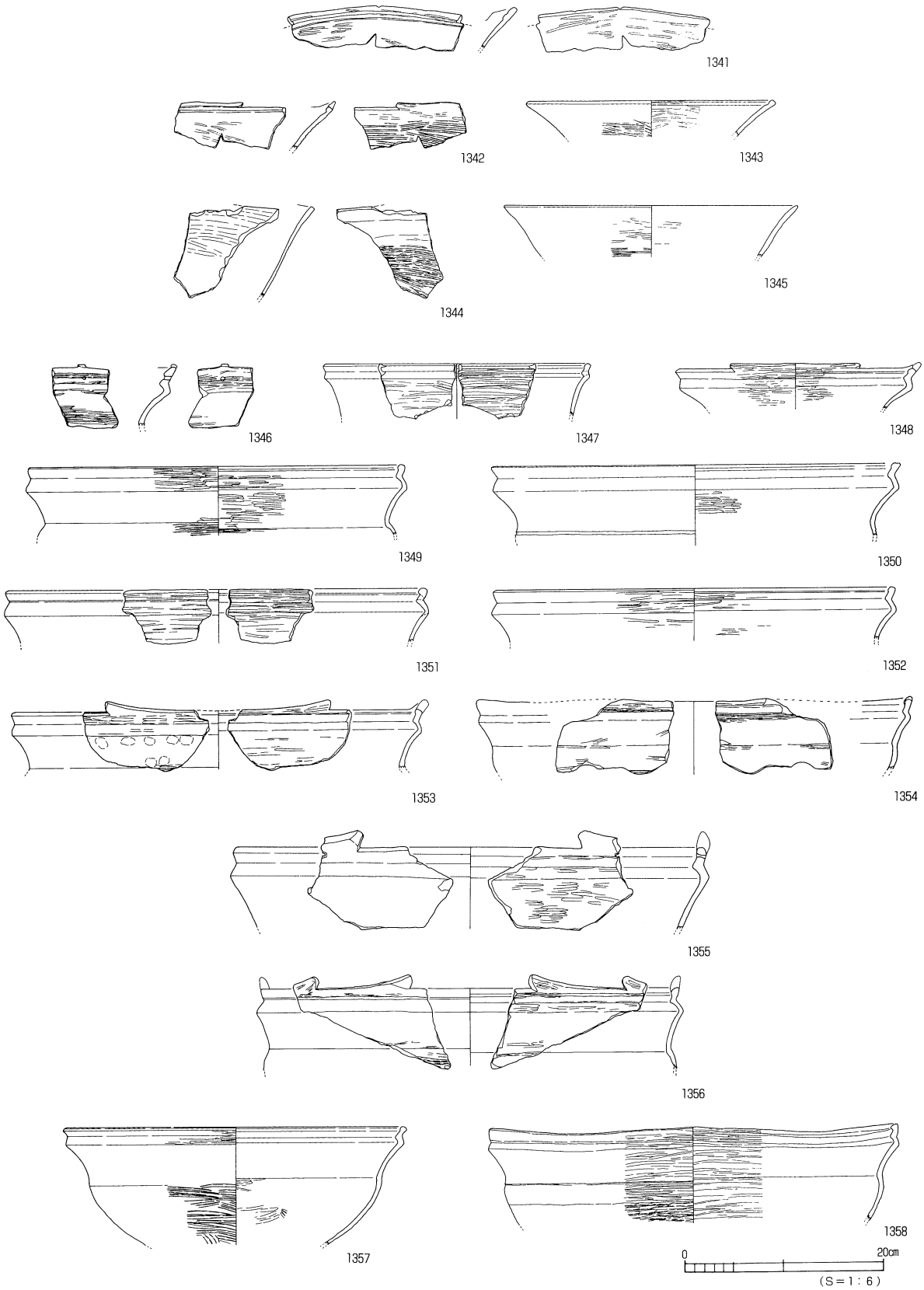


図189　船ケ谷遺跡出土遺物(8)

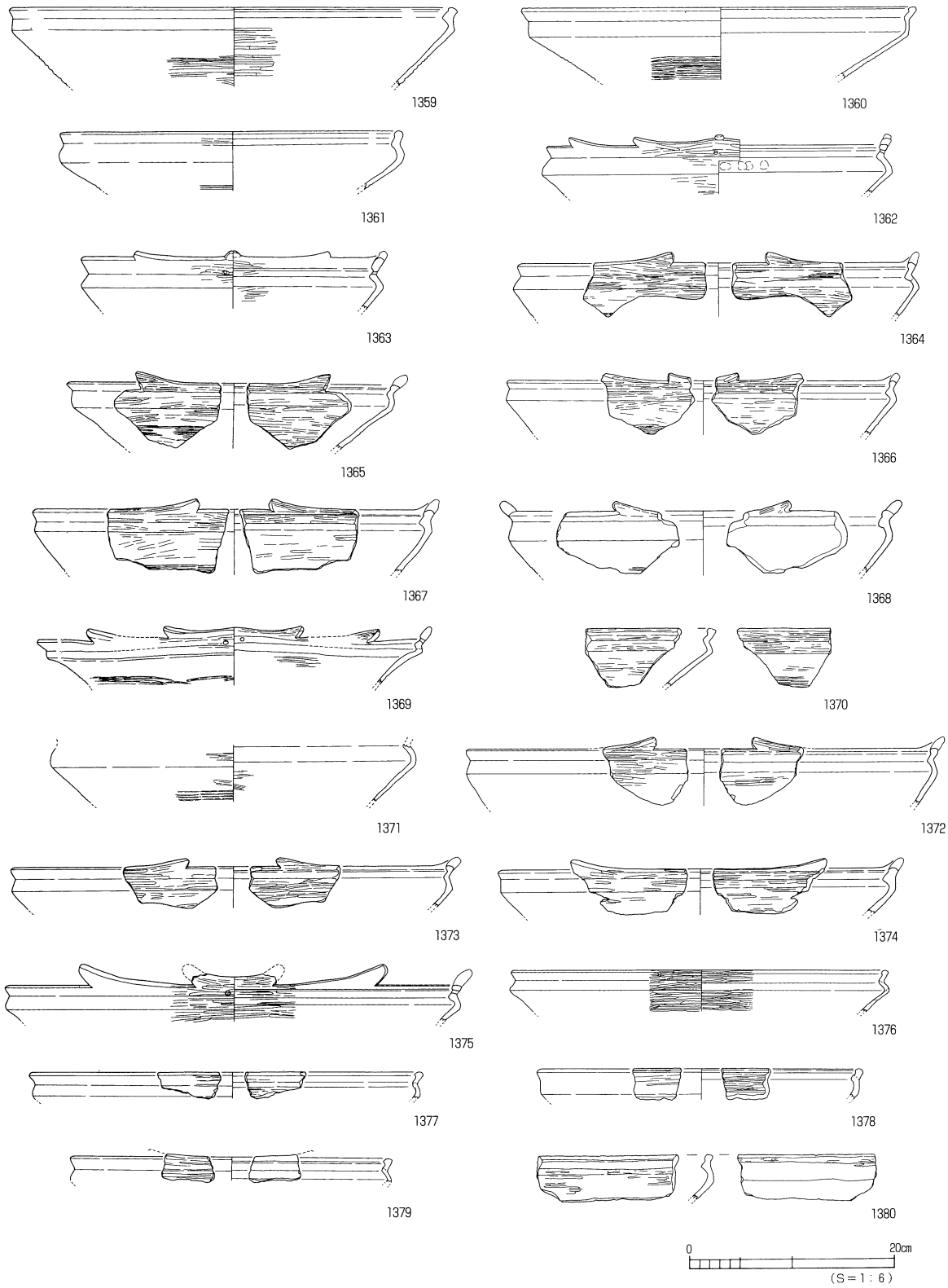


図190　船ケ谷遺跡出土遺物(9)

ま　と　め

浅鉢Ｅ類の総数は343点、43.3％で、Ｅ１類と特定できるもの29点、Ｅ２類と特定できるもの70点である。これらＥ類は大渕６・５層に一定量存在し、器種構成の一角を占めている。小型方形浅鉢Ｆ類は12点、1.5％で、大渕より低い比率となっている。Ｇ類は1409・1410のように特異な器型のものしか船ケ谷にはみられないが、これが５点ある。大渕では６層で5.3％と低かったＧ類が５層で27.9％

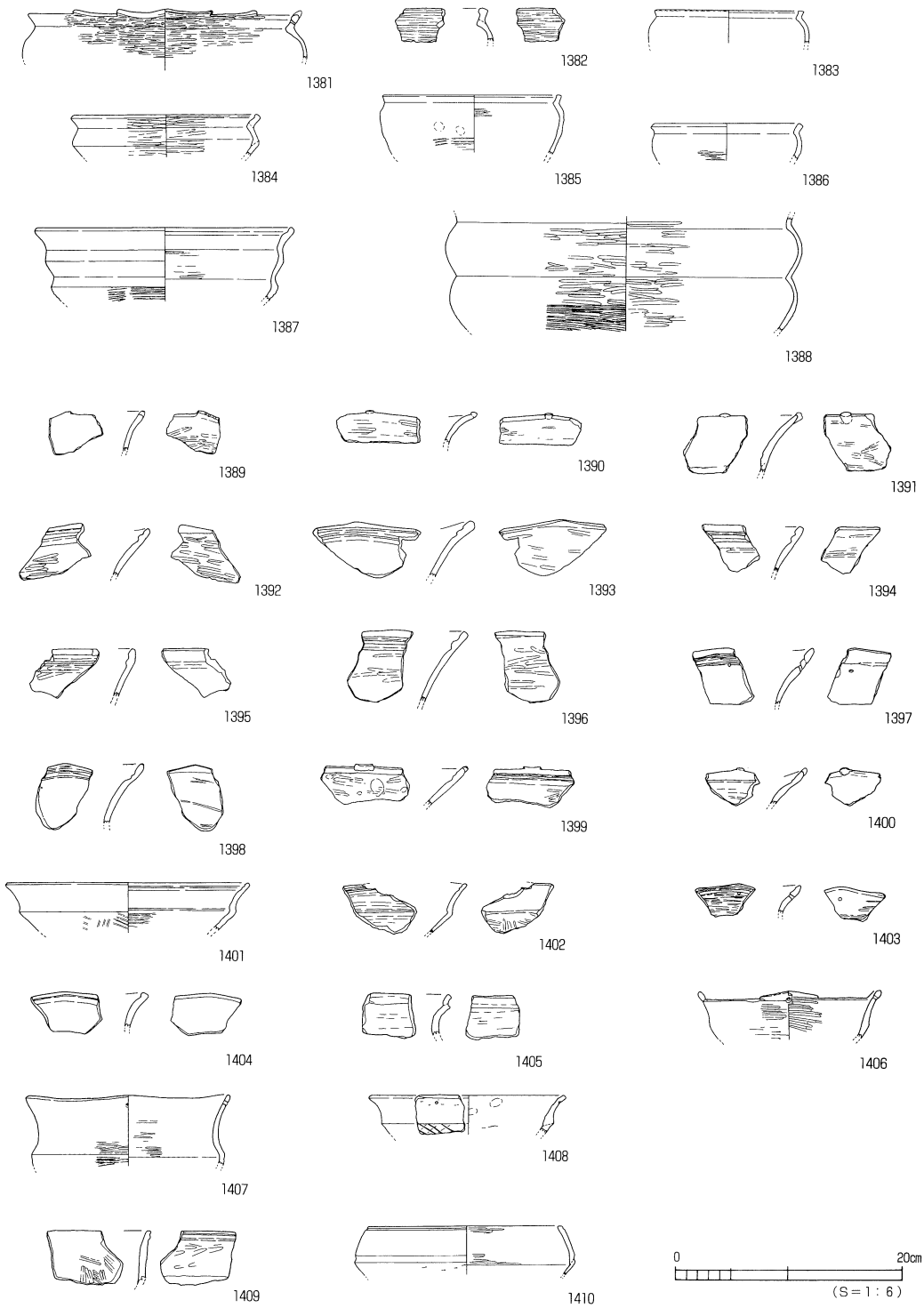


図191　船ケ谷遺跡出土遺物(10)

と浅鉢の主要な一角を占めている。さらに付け加えておくと、1410と同様の浅鉢が大渕第５層で２点が確認されている。

ここまで、船ケ谷にあって、大渕６・５層にないもの、あるいはその逆を簡単にみてきた。船ケ谷の突帯文深鉢の構成比率の低さ、あるいは浅鉢Ｇ類のほとんど欠落といってもよいような状況から、総体的に船ケ谷が大渕６・５層よりも古いことは自明である。そうすると、深鉢でいえば、Ａ類のう

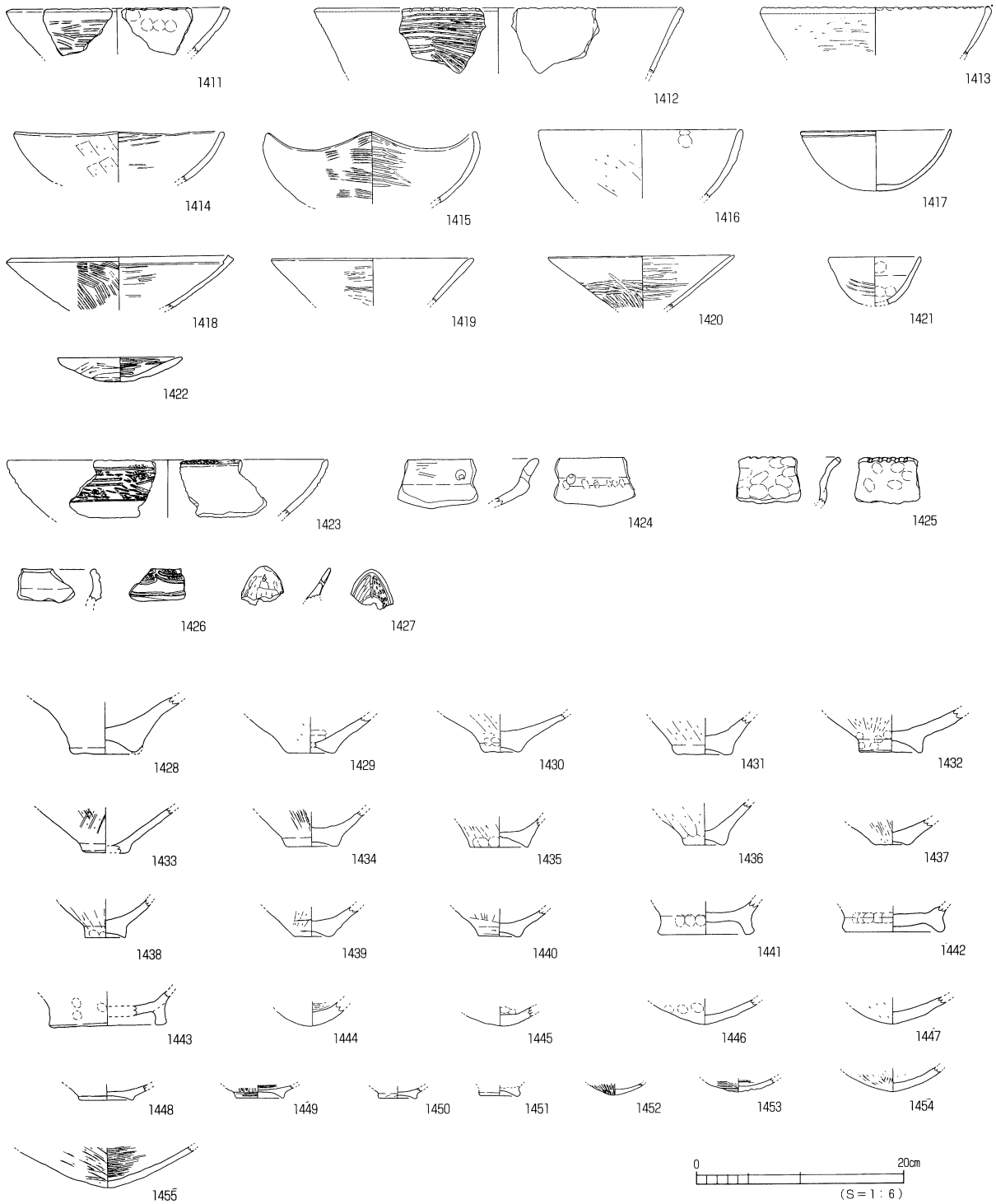


図192　船ケ谷遺跡出土遺物 (11)

ち外面の調整に条痕を多用するａ類、Ｂ２・３類、Ｃ１・２類、浅鉢ではＡ類、Ｂ１類、Ｃ１類、Ｄ１類、Ｉ類が大渕と船ケ谷との違いを明確に示す器種であり、大渕を確実に遡る一群ということになる。突帯文系のＣ１・２類を突帯文深鉢と呼んでよければ、Ｃ３類の一部までを含めてこれらは当地における出現期の突帯文と考えられる。ところで、近年の各地における晩期の土器編年の進展によって、晩期中～後半の様相が明らかになりつつある。これらの編年との摺り合わせを行ってみると、船ケ谷遺跡出土土器の大半は概ね九州でいう黒川式の新段階、瀬戸内の谷尻式、近畿の篠原式新段階に併行する遺物群ということができる。ただし、浅鉢Ａ類・Ｂ１類・Ｃ１類の一群やＥ類がどちらかの混入というようなありかたではなく、それぞれが一定量を占めるようなありかたを示しており、なおかつ浅鉢Ｅ類やＢ２類が大渕６・５層にやはり一定量存在しているのであるから、船ケ谷の遺物群はある程度の時間幅を持った資料であり、その新しい部分を受け持つのが浅鉢でいえばＢ２類、Ｅ類、Ｆ類や、口唇部内面肥厚の弱くなったＢ１類やＣ１類の一部と考えられる。ただし、近年の研究では浅鉢Ｅ類も新古の細分が可能とのことであるので、Ｅ類すべてが新しいとは考えないが、現況ではそこまでの細かい点までの追究ができていないので、大きく括っておく③。突帯文系以外の有文深鉢でも縦方向の垂下刺突を伴わず頸部沈線と口唇部刻み目を持つＢ４類や５類も大渕での出土例があることを考えれば、船ケ谷の有文深鉢の中では後出のものと考えられる。また、深鉢Ｂ類のうち、頸部と胴部の境の刺突と口唇部刻み目や、口縁内面刺突が組み合ったＢ１類も大渕Ａ区ＳＫ－１では浅鉢Ｅ類と共伴しており、やはり船ケ谷にあっては新しい深鉢のひとつと考えられる。したがって、突帯文深鉢のうちＣ４類は混入であるにしても、当地における出現期突帯文と考えられるＣ１・２類、あるいは３類の一部まで含まれるかもしれないが、これらが上述の船ケ谷にあってより後出の器型の一群と組み合っていた可能性が最も高いと考える。

（３）久米高畑遺跡36次調査出土の縄文晩期土器（図193）

近年松山平野東部の来住・久米地区における調査での出土遺物により、船ケ谷遺跡の遺物群の系譜関係の一部が理解しやすくなったのでここで紹介しておく。遺物は、1997年（平成９）年に松山市教育委員会および松山市埋蔵文化財センターが発掘調査を行った久米高畑遺跡36次調査で、ＳＢ004という晩期の竪穴住居から出土した一括遺物で、瀬戸内でいう舟津原段階の遺物である。1456は浅鉢Ａ類の祖型となるもの、1459はＢ１類浅鉢につながる浅鉢と考えられる。Ｅ類浅鉢は、Ａ類浅鉢の頸部が極端に短くなって成立したものという考えがおおかたであろうが、1460～1462のようなものを祖型に他の浅鉢同様、口唇部内面の玉縁状肥厚を得て成立するという方向はないだろうか。その場合、船ケ谷でいえば1369・1370･1376のように、屈曲部外面に比較的鋭角的な稜を持つものをＥ類深鉢のうちでも古いタイプとして抽出することが可能になろう。深鉢は胴部で屈曲する器型のもので、屈曲部に稜を持つものと持たないものがある。外面の調整は屈曲部以下を削り、1466と1468は頸部に条痕を施した後撫でており、またその他のものは削りの後丁寧に撫でている。口端部まで遺存している1466・1467をみるかぎり刻み目や刺突は施されず、全くの無文である。この遺物群をみるかぎり、この段階の粗製深鉢の外面調整にことさら条痕を多用するという傾向は窺えず、むしろ胴部と頸部の調整を使い分けて違いを際だたせようとしていることがわかる④。

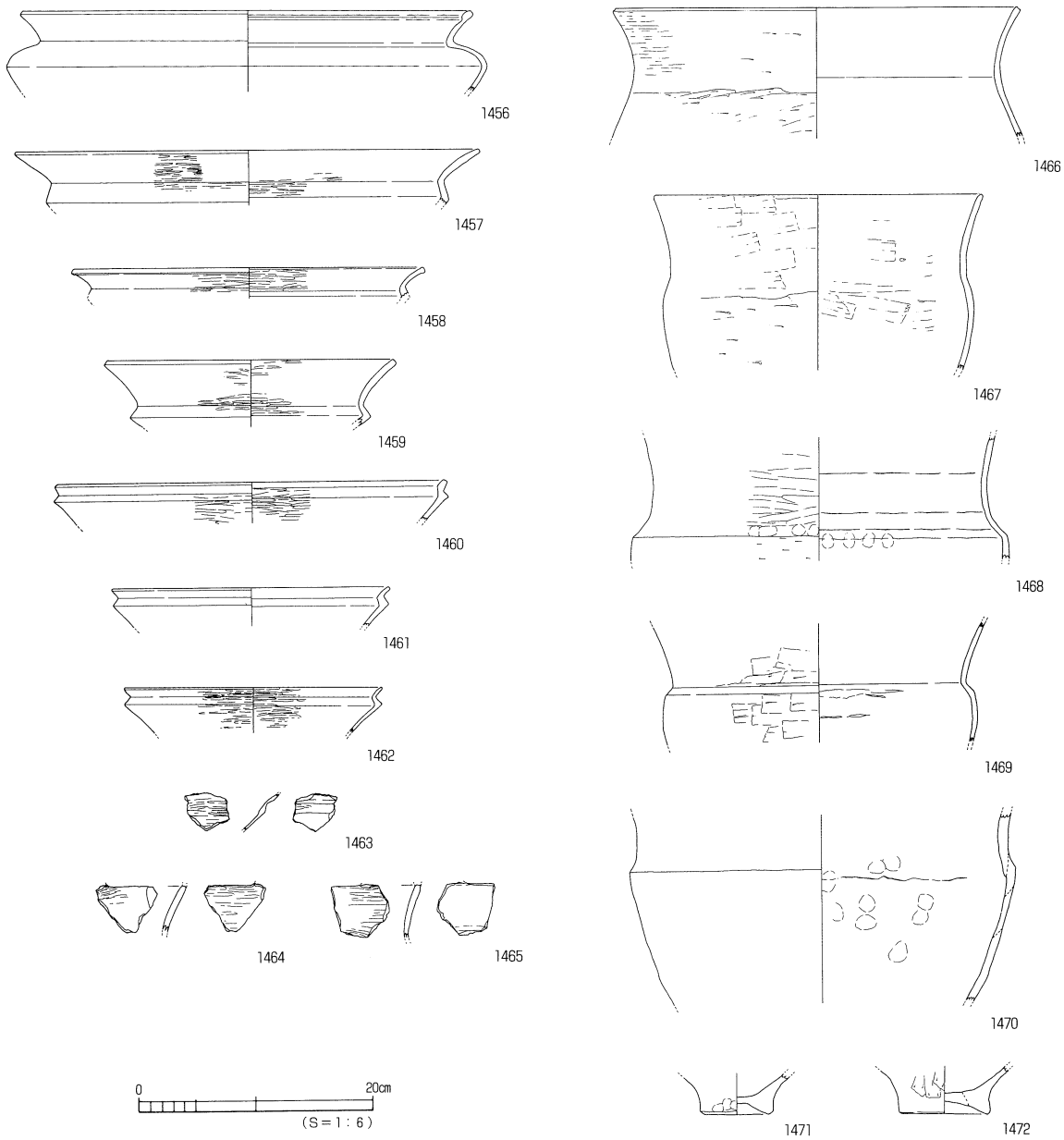


図193　久米高畑遺跡36次調査地ＳＢ004出土遺物

（４）大渕遺跡Ａ区湿地内第５層出土土器の編年的位置

以上、前段階の資料をまじえながら比較的夾雑物が少ないと考えられる、大渕Ａ区湿地内６・５層の土器について簡単にみてきた。この両層のうち、特に第５層の遺物は石庖丁や壺の出土、あるいは自然科学分析の節で詳述されるが、土層サンプルからの花粉、プラント・オパールなどの分析結果によって当平野における稲作の開始と密接な関わりを持った遺物群であることがわかっている。かつ、両層のなかでもより上位にある第５層は、若干の混入があるにしても直下の第６層からのものであり、単純という意味ではより良好な遺物であると考えられる。そこで、この大渕遺跡Ａ区湿地内第５層（以下、大渕５層）の土器についてもう一度整理しておき、他地域との併行関係を検討してみることにする。

さて、第５層での器種構成は深鉢58.5％、浅鉢40.4％、壺1.1％という比率であった。口縁部片をカウントするかぎり、壺は他の器種にくらべて口縁部径が小さいので、点数的には少なく出る傾向があり、また個体識別が比較的容易であるため重複してカウントされることが少ないというハンデがあるにしても、おそらく５％を超える値にはなるまいと思われ、壺という器種が存在するには存在するが器種構成の一角を占めるというところまでは至っていない段階の土器群である。

深鉢中に突帯文深鉢の占める割合は87.4％で、確実に２条突帯と認められるものは１点のみであった。Ｃ類としている１条突帯深鉢の器型は所謂屈曲型になるものがほとんどで、砲弾型が11点、ある程度器型の判断がつくもののうちの2.3％である。Ｃ類深鉢の98.3％に口唇刻み目と刻み目突帯の双方が伴い、40.7％のものの口端部が面を持つ。突帯位置は、口唇部から0.5～1cm下がったところにあるものが最も多く、82.7％のものがこれに該当し、これより上位にあるもの11.4％、以下にあるもの5.9％の割合である。浅鉢は鍵形口縁のＥ類20.1％、胴部で逆「く」の字に屈曲して外上方に開くＢ２類43.5％、同様に逆「く」の字に屈曲して内傾して立ち上がるＧ類27.9％、椀・皿形のＤ類4.5％となっている。小型方形浅鉢Ｆ類は、4.0％ある。

ここで、他地域との併行関係を検討する前に、この大渕第５層出土土器を軸に当平野出土の突帯文系遺物群との比較検討を行っておきたい。大渕５層を遡るものは、先述の船ケ谷遺跡のＣ１～３類であり、当地における出現期の突帯文である。これに近いありかたをしているのが大渕Ｂ区ＳＸ－１であるが、若干新古の混ざりがあるようで、新しい傾向を持った深鉢や特に壺や石庖丁未製品などを含んでおり、微妙な問題が含まれている。この遺構から大渕５層的なものを引き算し、船ケ谷の遺物群との摺り合わせを行うことによって、より突帯文出現期の様相が明確になる可能性がある。大渕６層も先ほどの５層との比較により、特に器種構成において傾向としてより古相を呈することがわかった。稲作の存否に関わる大きな画期ではあるが、個別の土器の特徴において顕著な差異を見いだすことは難しく、編年として段階を設定するのは保留しておきたい。大渕遺跡湿地第５層に後続すると考えられる突帯文系の遺物を以下にあげておく。

道後今市遺跡10次調査11号土坑出土遺物（図194）

調査は1993（平成５）年愛媛県教委によって行われ、1994（平成６）年に報告書が刊行されている。隅丸長方形の竪穴から22点の土器が出土している。内訳は深鉢５割、浅鉢４割、１割が壺である。深鉢は屈曲型で、口縁部が強めに外反し胴部が張らない器型で、口径が胴部径を凌ぐ。口頸部外面を撫で、胴部以下を削りで調整し、頸部と胴部の境に横沈線が巡る。突帯は口唇部から0.5～1cm下がった位置に付き、刻み目を施される。大渕５層に較べると細く、薄いものが多い。口唇部は面取りされるものもあるが、丸いもの、尖るものが多いようである。口唇部の刻み目は確認できる８点のうち７点に施されている。共伴する浅鉢は逆「く」の字に屈曲して外上方に開くＢ２類、椀状のＨ類、いずれも口唇部内面に沈線を持つのが特徴である。なお、壺の頸部および胴部の小片２点が伴っている。

南久米片廻り遺跡２次調査Ｄ３区出土遺物（図195）

1989（平成元）年に松山市教委によって実施された調査で、1996（平成８）年に報告書が刊行された。遺物は包含層資料であるが、出土位置にまとまりがみられ、Ｄ３区出土品としてある程度の一括性を評価されている遺物群である。突帯文深鉢６点、浅鉢６点、壺１点の出土がある。深鉢６点のう

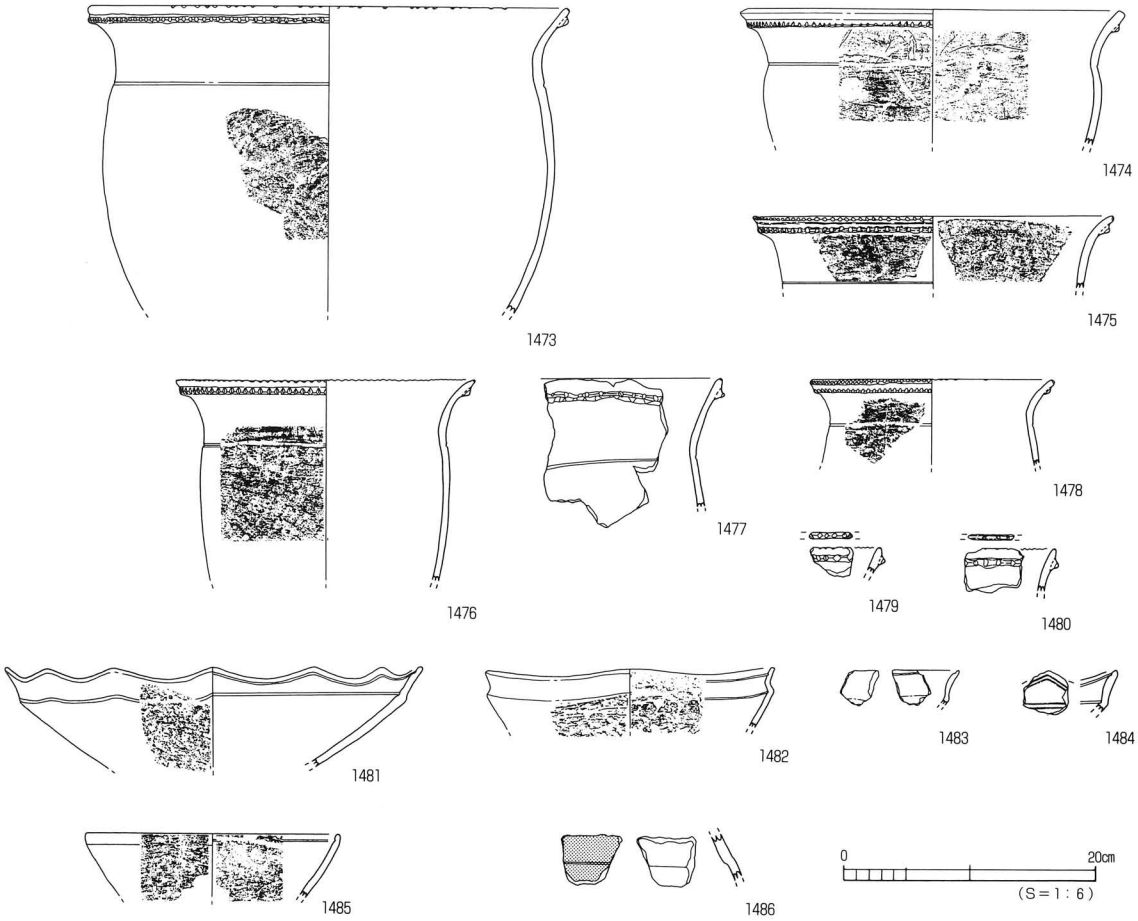


図194　道後今市遺跡10次調査11号土坑出土遺物
（「道後今市遺跡Ｘ」愛媛県埋蔵文化財調査センター　1994より）

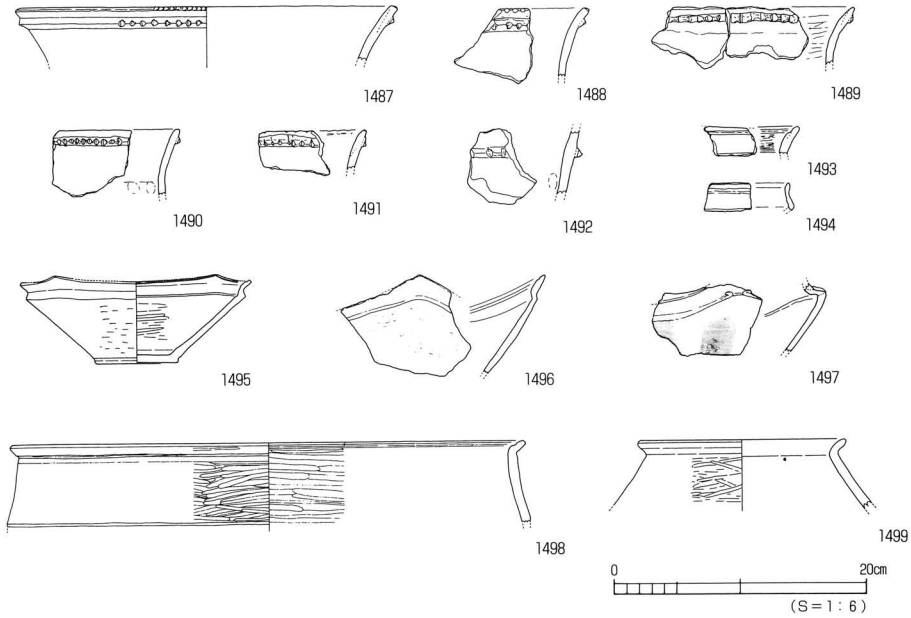


図195　南久米片廻り遺跡２次調査Ｄ３区出土遺物

ち１点は胴部突帯片で２条突帯深鉢と考えられる。深鉢は口頸部の破片しかないが、屈曲型の器型で、口唇部を0.5cm程度下がった位置に薄い突帯を持つ。突帯上の刻み目は道後今市のものより小さい。口唇部は面をなすものと丸みを持つものがあり、刻まれないものが２点ある。刻みをもつものの刻みも浅く、押し引きによる浅いＤ字形のものが２点ある。浅鉢にはＧ類の大型品、Ｂ２類の波状口縁小型品、Ｆ類方形浅鉢などがある。また、胴部片1497の屈曲部以下の外面には明確ではないが大渕５層出土の壺肩部に施された「なすび」文に似た黒斑が看取される。ちなみに、浅鉢胴部外面への「なすび」文施文例は、大阪府船橋遺跡、兵庫県口酒井遺跡などに例がある⑤。

南海放送遺跡包含層出土遺物（図196）

1988（昭和63）年、松山市教委によって調査が行われ、市教委刊行の『年報Ⅱ』に「道後城北ＲＮＢ遺跡」として概要が報告された遺跡で、この遺跡の８・９層から晩期の遺物が少量出土している。突帯文深鉢の口唇部は面取りされるものはなく、端部を刻まれるものと刻まれないものがある。突帯は口唇部をやや下がった位置に貼り付けられるが、ほとんど接するような位置にあるものもある。刻み目は南久米片廻りよりもさらに小さく、胴部突帯を持つ破片の出土もみられている。

共伴する浅鉢は、屈曲する胴部から長めの口頸部が直上よりもやや外目に外反しながら立ち上がる大型品で、よく磨かれている。屈曲部に１条の沈線が巡る。

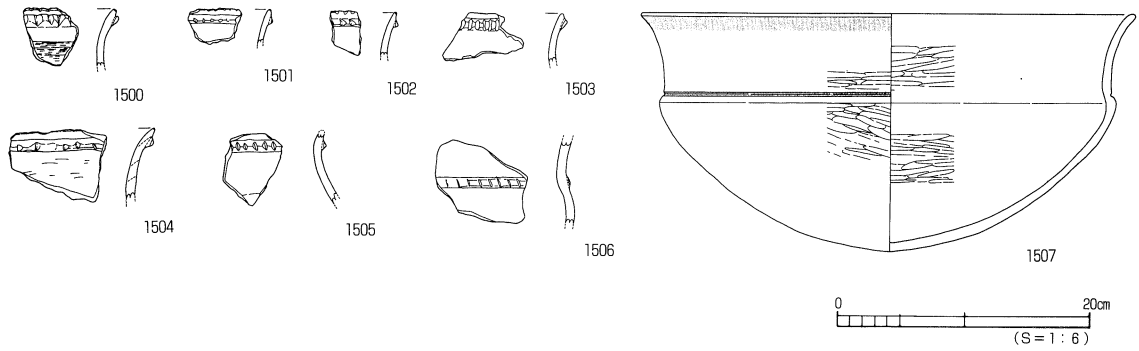


図196　南海放送遺跡包含層出土遺物

以上の突帯文系土器を出土する遺跡のほか、僅かな破片資料であるが遠賀川系土器と共伴する突帯文系の深鉢がある。1508・1509は松山市朝美町澤（さお）遺跡２次調査包含層出土、また、1510は松山市文京町文京遺跡４次調査ＳＢ－１出土の資料で、梅木謙一による弥生前期編年１～２段階の土器に共伴するものである（図197）。口唇部に接して、断面三角形の薄く垂れ下がった突帯を貼り付け、小さな刻み目を施したり、ほとんど高さのない細い突帯を口唇部に接して貼り付け、刻むもので、口唇部に面取りは行われず、また刻むこともない。ちなみに、当平野は弥生時代前期の間を通じて突帯文系の甕が存在する地域である。

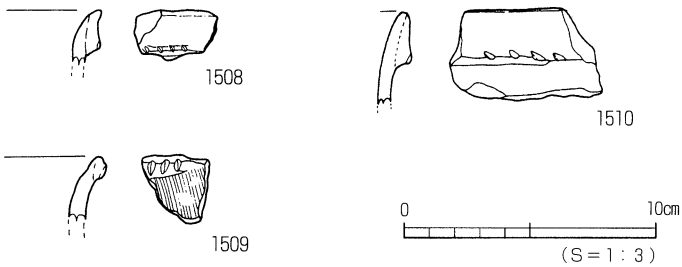


図197　朝美澤遺跡・文京遺跡４次調査ＳＢ－１出土遺物
（1508・1509／朝美澤，1510／文京４次）

このように突帯文深鉢の流れを追ってくると、やはり当平野でも新しくなるに

したがって、突帯は細く、小さくなり、刻み目も細かくなってくる。また、貼り付け位置も傾向として、口唇部に近くなり、端部は面取りされなくなり、口唇部刻み目を失うことが多くなるというこういった傾向は他地域と同様である。また、器型の全容を窺えるものが少ないので明確ではないが、大渕と道後今市の器型の違いとしてあらわれた、胴張りの有無も新古の指標となる可能性がある。

さて、文中でも瀬戸内の例として岡山県の編年を引用することが多かったが、瀬戸内でこの段階の研究編年が最も進んでいる地域であるので、主に岡山県の編年との対比を行っておく。先述のように船ケ谷の突帯文深鉢を混入ではなく、出現期の突帯文としてとらえた。船ケ谷の遺物の多くは岡山県でいう谷尻式の範疇に含まれるものではあるが、谷尻式の概念は突帯文を含まないところにある。そこで、大渕にあるもの、ないものとの差し引き勘定で少なくとも船ケ谷の土器には新古があることがわかったので、船ケ谷の古い部分を谷尻式併行の一群にあてておき、突帯文を含めた新しい段階を設定しておきたい。そうするとこの段階は岡山でいえば平井勝のいう晩期Ⅰ、平井泰男の晩期Ⅴa、阿津走出あるいは前池式の範疇におさまるものと考えられる。

大渕５層は突帯文の定着・拡大期、平井勝の晩期Ⅱ、平井泰男の晩期Ⅴｂ期に併行するものと大略では考えてよいかと思うが、鍵形口縁の浅鉢Ｅ類を一定量伴っているところが岡山と若干様相を異にする部分であり、大渕５層の土器群の編年的な位置づけを微妙にしている要因のひとつでもあるが、現況では一応このあたりに落ち着けておき、今後の更なる良好な資料を待って、新たな段階設定の可能性を探りたい。

当地は深鉢口唇部の刻み目が遅くまで残る地位であるので、属性部分でいくつかの相違はあるものの、平井泰男の晩期Ⅴｂ期に最もよく近似する様相をもつものはむしろ道後今市遺跡10次調査11号土坑、あるいはこれよりも若干降ると思われるが、南久米片廻り遺跡２次調査出土の遺物群であって、前者が南溝手河道１、後者が津島岡大遺跡あるいは、香川県林・坊城遺跡に併行する段階のものと考えられる。なお、南海放送遺跡８・９層出土の土器群はこれらよりもさらに降る、沢田式併行のものと考えているが、なにぶん小破片のみの資料であるので、この段階もやはり良好な一括遺物を必要としているのが現状である。

（５）大渕遺跡における稲作の受容について

調査が行われてから、本報告に至るまでの長年月の間に、大渕遺跡そのものあるいは瀬戸内の初期稲作をテーマとしたシンポジウムなどが数回にわたって開催され⑥、この遺跡における出土遺物の組成や個々の遺物の特徴から窺える伊予における稲作受容のありかたが検討され、ある意味語り尽くされた感があるが、ここであらためてまとめておこうと思う。

まず、大渕遺跡湿地第５層における遺物組成と自然科学分析の結果から大渕５層での稲作の存在はほぼ確定といってよい。そこで、この層からの稲作に関わりが深いものから出土遺物を個々に検討していくことにする。まず、土器では壺がこの層になってはじめて器種組成に加わったが、高坏は加わっていない。壺の組成比は1.1％、多く見積もっても５％を超えることはないということで、器種として定着するところまではいっていない。これらの壺のうちには、朝鮮半島南部に技法の故地を持つ彩文壺が少なくとも２点はある。カジ（なすび）文といわれる、黒斑を利用した八つ手の葉状の施文は器高40cm前後の中型品の肩部に施され、丹によって塗り分けられている。ところで、この種の施文

は半島では器高20cm前後の小壺の肩部に施されるもので、丹塗りも行われることはないようである。さらに用途としては、墓への副葬に用いられることが多く、これらの特徴的な壺はカジ文という技法で半島とつながっているだけで異なる点が多い。伝来品では勿論なくて、移住者によって製作されたものでもなく、どこかでワンクッション、あるいはそれ以上の経過を経た情報をたよりに製作されたものであろう。つまり、技法の伝播の過程で情報の変容が起こっている。この現象は、大渕を経過してさらに東へ伝播する時点でも認めることができ、この施文技法が東の口酒井遺跡や船橋遺跡にたどり着いた時、この種の施文は既に壺ではなく、浅鉢のしかも通常眼にふれることが少ない、胴～底部の外面にかけて施されていることでもわかる。また、同じ平野でも南久米片廻り遺跡２次調査出土の浅鉢にも同種の施文と考えられるものがあるので、距離だけではなく、時間の経過もこの変容の一因になっていることは想像に難くない。この情報がどこを経由してきたかを考えるとき、図104の584の深鉢がヒントになる。この土器は胴部で稜を持って内方へ屈曲する器型で、刻みを持たない口唇部をやや下がった位置に突帯を貼り付け、指オサエで突帯を刻んでいる。頸部外面は条痕、胴部は削りで調整する、九州系の深鉢である⑦。当然といえば当然のことながら、少なくとも情報の伝達ルートの一点には彼の地があったものと考えられる。これらのことから考えると、こういったカジ文を持った、よりオリジナルに近い壺が、故地に近い北部九州あたりで出土する可能性は高い。破片資料であった場合、単なる黒斑の付いた土器片としてしか認識されないことも充分考えられ、こういったことも勘案すると、もう既にどこかで出土している可能性は高い。

大渕５層では壺のほか磨製石庖丁の出土がある。形態は外湾刃半月形で、穿孔でも擦り切りでもなく、両側端に紐かけ用の抉りを持つことが特徴である。当地では弥生時代前期の石庖丁がよくわかっていないのが現状であるが、少なくとも弥生時代中期以降、側端抉りの石庖丁が一定量存在する地域であり、この地域の石庖丁のバリエーションのひとつとなっているのでこのタイプの石庖丁の祖型となるものである可能性が高い。初期稲作に伴う石庖丁とはいいながら、所謂大陸系磨製石器としてイメージされるものとはかけ離れたものであり、唯一磨いていることが大陸系といえばいえないこともない。この石庖丁にも先ほどの彩文壺と同様の情報の変容をみてとることができ、稲作がそれに伴う情報を変容させながらリレー式に伝わったことを示している。

さて、大渕５層で確認できる弥生的なものといえば上記の２例だけである。伐採斧は身幅の薄い縄文伝統の斧を用い、加工斧も大陸系の抉り入り柱状片刃ではなく縄文的な斧を使い、サヌカイトの剥片石器を多用する。また、石棒を使った縄文的な祭祀を行い、縄文的な硬玉製の玉をアクセサリーとし、縄文伝統の深鉢を煮炊きの器に用いる、縄文的な伝統社会に稲作が伝わったとき、受け入れる側の主体として受容したのは伝統的な道具で代用できない石庖丁や壺といった限られた道具や器であった。なおかつ、壺と稲作が密接な関係にあるとするならば、壺の組成比はきわめて低いわけであるから、社会としての稲作への傾斜度はこれまたきわめて低い、そんな段階だったのであろう。

註

①社団法人日本アイソトープ協会の測定による。なお、この分析については愛媛大学教育学部　平井幸弘先生に仲介の労をとっていただいた。記して感謝申し上げます。

②船ケ谷や大渕の遺物を対象に組まれた編年には以下の先学の研究がある。1989年宮本一夫は「鷹子・樽味遺跡」の調査報文中で、平井勝の示した北部九州、岡山、近畿の編年対比との擦りあわせを行い、黒川－船ケ谷－谷尻・

（原下層）－滋賀里Ⅲｂの併行関係を認め、船ケ谷に後続する資料として大渕５層をとりあげた。北部九州では長行～山ノ寺（夜臼Ⅰ）、東部瀬戸内では前池～（黒土ＢⅡ）、近畿滋賀里Ⅳ～口酒井段階と、若干幅を持たせ細分の可能性を示唆している。ここでいう括弧つきの黒土ＢⅡは、当時平井が示した、黒土ＢⅡなる遺物総体から前池、沢田を差し引いた残りの部分という概念を踏襲している。なお、編年表に用いられた浅鉢では、ここでいうＥ類を船ケ谷段階のものとし、Ｂ１類、Ｃ１類を大渕段階まで下げ、かつＧ類が大渕から欠落している。本文中でも述べたように、浅鉢Ｂ１類、Ｃ１類は船ケ谷にのみ存在し、大渕には存在しない器種であり、Ｅ類、Ｇ類は大渕に一定量存在している。1995年、坂口隆は「持田町３丁目遺跡」報文中で、持田町の晩期土器の位置づけにからめて船ケ谷の土器群の綿密な分析を行っている。結果、持田町を谷尻併行とし、船ケ谷はこれに先行するものであり、突帯文系の深鉢は混入遺物であるとした。さらに、ここでいう浅鉢Ｅ類系譜につながるものが持田町で欠落することから、船ケ谷との間に数型式の空白を予想し、船ケ谷を黒川式古段階、篠原式古段階併行に位置づけたが、筆者は持田町３丁目の土器は、船ケ谷を新古で二分した場合の古い段階に相当する遺物であると考えている。同1995年、犬飼徹夫は『愛媛考古学13』に「愛媛県での縄文晩期土器の覚書－縄文から弥生へ－」を発表、愛媛県の縄文晩期の代表的な資料を紹介し、北九州、中瀬戸内、近畿との併行関係を検討している。このなかで、大渕５層は長行、前池、滋賀里Ⅳ、泉拓良のいう突帯文１期に中心をおく遺物とし、土坑出土のものを船ケ谷同様の谷尻併行としている。そのほか、1991年、藤尾慎一郎が「水稲農耕と突帯文土器」中で船ケ谷・大渕を扱い、大渕土坑出土遺物を谷尻併行、船ケ谷を瀬戸内型一条甕と鍵形口縁浅鉢が基本的なセットをなし、これに多量の粗製深鉢と屈曲型刻目文土器がともなう船ケ谷式と設定し、突帯文Ⅰ期とする。また、大渕５層を沢田式併行のⅡ期としている。

③坂口隆によれば、新しいものほど二段に屈曲する口縁肩部の屈曲が弱く、内面の稜も弱くなるとのことである。

④したがって、船ケ谷の粗製深鉢の新古を判断する際に、外面調整の違いがどの程度有効なのかは疑問で、口唇部の無文→内面刺突→刻みといった要素をより重視するべきと考える。ただ、大渕５層には外面頸部まで条痕を残す粗製深鉢は存在しないことは事実である。また、５層に口唇部無文の粗製深鉢が１点存在することも事実であるが、この場合調整や施文といった属性のみではなく、張らない胴部に短い外開きの口頸部といった本来的な器型そのものによる分類が必要なのであろうが、今回はその余裕がなかった。

⑤この２遺跡の施文浅鉢は未報告資料であるが、下記の松山市埋蔵文化財センター特別展「瀬戸内の初期農耕」の展示のための借用に際して実見する機会を得た。口酒井遺跡のもの（伊丹市教育委員会蔵）は、口頸部の比較的短い波状口縁方形浅鉢の胴上半部から口縁部までの破片で、内外面ともに磨かれ赤色塗彩されている。施文は屈曲部以下の胴部外面になされ、「なすび」状の黒斑が３単位まで確認できる。船橋遺跡のもの（大阪府立弥生文化博物館蔵）はほぼ完形で、胴部で屈曲して直上に外反気味に立ち上がる長めの口頸部を持つ。口縁部外面には無刻目の突帯が一条巡る。この浅鉢の胴部以下の外面は削りであるが、屈曲部以下の胴部外面から、尖り気味の丸底をなす底部にかけて施文され、底部を中心に放射状に黒斑が配されている。器表面の剥落が激しいが、外面胴部は赤色塗彩されていたようである。

⑥主なものには、1989年の古代学協会四国支部第３回大会「四国における農耕の始まり」や1995年松山市埋蔵文化財センター主催の特別展記念シンポジウム「瀬戸内の初期農耕」などがある。

⑦この深鉢について、高橋徹は大分県下黒野式との共通点からこれに併行するものとみており、下條信行もこの深鉢の存在から稲作の瀬戸内への伝播は、北部九州から一気にというわけではなく、東九州経由でリレー式に伝わったと発言しており、筆者もまたこれに賛同している。一方、藤尾はこの土器を西部九州型甕として山ノ寺（夜臼Ⅰ）併行とみるが、当然のこととして器面調整には東部九州的な特徴をみせると、伝播のルート上に東部九州があることを示唆している。また、家根祥多はこの土器について突帯上の指オサエが夜臼Ⅰにはない特徴であるので山ノ寺終末のものとみている。なお、この高橋、家根の見解は1995年11月に松山市埋蔵文化財センターで開催された、「第４回土器持ち寄り会」席上での発言である。

文　献

泉　拓良「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報 第８集』奈良大学文学部文化財学科　1990

尹　武炳「無文土器」『世界陶磁全集 第17巻 韓国古代』1979

犬飼徹夫「愛媛県での縄文晩期土器の覚書－縄文から弥生へ－」『愛媛考古学 13』愛媛考古学協会　1995

梅木謙一「西瀬戸内地方の弥生時代前期土器－松山平野を中心として－」『牟田裕二君追悼論集』　1994

小笠原善治「久米高畑遺跡36次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報 Ｘ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　1998

坂口　隆「持田町３丁目遺跡出土晩期中葉資料の編年的位置について」『持田町３丁目遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター　1996　「刻目突帯文の成立」『先史考古学研究 第６号』阿佐ヶ谷先史学研究会　1996

坂本安光『松山市・船ケ谷遺跡』愛媛県教育委員会　1984

下條信行「瀬戸内－リレー式に伝わった稲作文化」『弥生文化の成立』大阪府立弥生文化博物館編　角川書店　1995

高橋　徹「東九州における突帯文土器とその周辺」『古文化談叢12』　1983

田崎博之「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』　1994

多田　仁ほか『道後今市遺跡Ｘ』愛媛県埋蔵文化財調査センター　1994

西尾幸則「道後城北ＲＮＢ遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会　1989

平井　勝「岡山県における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備第10集』　1988

「瀬戸内地域における突帯文土器の出現と展開」『古代吉備第18集』　1996

平井泰男『南溝手遺跡Ⅰ』岡山県教育委員会　1995

「中部瀬戸内地方における縄文時代後期末葉から晩期の土器編年試案」『突帯文と遠賀川』　2000

藤尾慎一郎「水稲農耕と突帯文土器」『日本における初期弥生文化の成立－横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ－』　1991

松村淳・梅木謙一「南久米片廻り遺跡」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　1996

宮崎哲治『林・坊城遺跡』香川県教育委員会　1993

宮本一夫「道後平野における弥生時代開始期の動向」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室　1989

家根祥多「近畿地方の土器」『縄文文化の研究４』雄山閣　1981

「篠原式の提唱」『縄文晩期前葉－中葉の広域編年』北海道大学文学部　1994

第３章

大渕遺跡２次調査